

Oracle® Hyperion Planning

Administrator's Guide

リリース 11.1.2.3

Planning Administrator's Guide, 11.1.2.3

Copyright © 2001, 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	17
第 1 章 Planning の使用方法	19
Planning について	19
新機能に関する重要な情報	20
Smart View	20
Planning Web クライアント	20
Performance Management Architect	20
EPM Workspace	21
ライフサイクル管理	21
Essbase	22
Financial Reporting	22
ビジネス・ルール	22
Web Analysis	23
予測プランニング	23
サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス	23
Planning の使用法シナリオ	23
配置	24
アプリケーションの設定	25
作成プラン	29
ビジネス・ルールの起動	30
予算レビュー・プロセスの開始	30
プランニング後のアクティビティ	32
第 2 章 Planning スタート・ガイド	33
概要	33
Essbase の開始	34
Essbase の操作の考慮事項	34
Planning フォームでの暗黙的な共有の理解	36
Essbase の複数のサーバーへの接続	36
リレーショナル・データベースの起動	36
SQL リレーショナル・データベースの最適化	37
アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定	37

JDBC ドライバの変更	39
JDBC 接続プールの構成	40
UNIX でのデータの同期の構成	40
オフライン圧縮の設定	40
Smart View メッセージの制御	41
新しい Planning メンバーを Smart View で表示	41
アプリケーション・ホーム・ページの設定	42
バックグラウンド処理の設定	42
ビジネス・ルールの起動ログ・プロパティの設定	44
データ検証プロパティの設定	45
セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定	46
配置された Planning アプリケーション内からの次元の管理	47
Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用	47
EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス	48
Planning ユーティリティの操作	49
Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制	50
Planning ユーティリティのテキスト・ファイルについて	51
UNIX での Planning ユーティリティの実行	51
EPM Oracle インスタンスについて	51
アプリケーション・サーバーの使用方法	51
インスタンスとクラスタの更新について	52
Planning および Essbase を閉じる	52
第 3 章 アクセス権の設定	53
アクセス権のレベル	53
アクセス権の割当てが可能な Planning の要素	54
アクセス権タイプ	55
次元のアクセス権の使用可能	56
メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て	56
アクセス権の追加	57
アクセス権の編集	58
アクセス権の削除	59
共有メンバーへの有効なアクセス権について	59
フォームとフォルダへのアクセス権の管理	61
フォームとフォルダへのアクセス権の割当て	61
フォームとフォルダへのアクセス権の割当て	62
フォームとフォルダへのアクセス権の変更	63
アクセス権のインポート	64
アクセス権をインポートする場合のパフォーマンス向上	67

アクセス権のエクスポート	67
アクセス権のレポート	70
レポート・オブジェクトの選択	71
レポート・オプションの選択	72
アクセス権レポートの操作	72
監査証跡の設定	72
セキュリティ・フィルタの管理	75
プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期	75
ユーザーとグループ ID の移行	76
ビジネス・ルール・セキュリティの移行	77
古いユーザー記録の削除	78
Financial Reporting でのアクセス権の設定	79
第 4 章 Planning データベースの管理	81
アプリケーションを開く	81
アプリケーションのロック解除	81
ブロードキャスト・メッセージの使用方法	82
使用統計の表示	83
アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ	84
為替レートの管理	86
為替レート・テーブルの作成	87
為替レート・テーブルの編集	87
為替レート・テーブルの削除	89
通貨換算の管理	89
通貨換算計算スクリプトの操作	90
パフォーマンスの最適化	90
次元の順序変更	91
サポート詳細キャッシュのメモリー割当て	91
データおよびインデックス・キャッシュ・サイズの構成	92
その他の最適化のヒント	92
アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ	92
第 5 章 データおよびメタデータのロード	95
概要	95
動的メンバーのロードについて	95
ロード・ツール	95
アウトライン・ロード・ユーティリティの操作	97
コマンド・プロパティ・ファイル	97
ロード・ファイルの生成	99
フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート	104

リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート	107
Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエクスポート	115
Planning アプリケーションからリレーショナル・データ・ソースへのメタデータのエクスポート	117
アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ	121
次元プロパティ	133
Planning アウトライン・ロードの操作	148
Planning アウトライン・ロードの実行	149
ファイルからのインポート	149
ファイルへのメタデータのエクスポート	151
ファイルへのデータのエクスポート	151
Data Integrator Adapter for Planning	152
DIM Adapter for Planning の使用方法	152
Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする	152
Administration Services からロード	153
ファイルの例	154
Performance Management Architect を使用してのロード	154
FDM を使用したロード	154
第 6 章 フォームの管理	155
フォームについて	155
フォームとプラン・タイプ	155
フォームおよびアクセス権	156
フォームと通貨	156
フォームとバージョン	156
フォームと属性	156
フォームと共有メンバー	156
フォームと計算	157
フォーム・コンポーネント	157
視点(POV)	157
ページ軸	157
行と列	158
特定のタイプのフォームの設計	158
複数通貨のフォームの設計	158
ドリルスルー情報に使用するフォームの設計	158
式の行と列を使用したフォームの設計	159
データ検証を使用したフォームの設計	159
ローリング予測のフォームの設計	159

フォームの操作	163
フォームとフォルダの選択および表示	163
フォームのプレビュー	164
フォーム定義の印刷	164
フォームの検索	165
フォームとアド・ホック・グリッドの移動	165
フォームの削除	166
フォームの名前の変更	166
フォームのインポートとエクスポート	166
ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定	167
単一のフォームの作成	168
行と列のレイアウトの設定	169
フォーム・グリッド・プロパティの設定	171
次元プロパティの設定	172
フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定	173
非対称の行と列の作成	176
式の行と列の追加	177
フォームへのデータ検証ルールの組み込み	178
単一のフォーム・ページと視点(POV)の定義	179
フォームの編集	180
複合フォームの作成	181
複合フォームのレイアウトの設定	181
複合フォームのセクション・プロパティの設定	184
複合フォームの視点およびページ次元の設定	186
マスター複合フォームの作成	186
複合フォームの埋込みチャート	188
グリッド診断の使用	190
ビジネス・ルールの使用方法	191
ビジネス・ルールの選択	191
ビジネス・ルールのプロパティの設定	192
実行時プロンプトについて	193
実行時プロンプトの理解	194
実行時プロンプトと承認セキュリティについて	198
保護された実行時プロンプトの設計	199
ユーティリティによるビジネス・ルールの起動	200
エラー・メッセージのカスタマイズ	202
ユーザー変数の操作	203
ユーザー変数の管理	203
ユーザー変数について	204

ユーザー変数の選択	204
ユーザー変数の削除	205
フォーム定義のインポート	205
フォームの準備	205
データ・ファイルの準備	205
フォーム定義のインポート	206
ImportFormDefinition の例	207
Planning オフライン時の考慮事項	208
オフライン Planning について	208
オフライン・フォームの考慮事項	208
オフライン・ユーザーの考慮事項	209
オフライン計算のためのビジネス・ルールの考慮事項	209
第7章 メンバー・セレクタの使用	211
メンバーの操作について	211
メンバーの選択	211
ワイルドカードを使用した検索	214
メンバーとしての属性値の選択について	215
フォームのメンバーの選択について	217
メンバーとしての代替変数の選択について	218
メンバーとしてのユーザー変数の選択について	219
第8章 データ検証の管理	221
データ検証ルールの作成および更新	221
セルのフォーマットと移動パスの設定	224
データ検証ルールの表示	225
データ検証ルールの評価および実行の順序	226
ルール・ビルダーによってサポートされている条件	227
IF 条件値	228
THEN 条件値	236
RANGE 条件値	236
データ検証の条件演算子	237
データ検証ルールのシナリオ	239
例 1	240
シナリオ 2	241
シナリオ 3	242
シナリオ 4	243
シナリオ 5	244

第9章 予算編成プロセスの管理	247
予算編成プロセスについて	247
プランニング・ユニット	247
レビュー・プロセス	247
プランニング・ユニット階層	248
データ検証ルール	249
タスク・リスト	249
承認通知用電子メールの設定	249
予算策定プロセスの定義	250
承認の役割	250
承認プロセス	250
承認操作およびデータ検証	251
レビュー・プロセスの開始とサポート	251
プランニング・ユニットの注釈の印刷	252
プランニング・ユニット階層の管理	253
プランニング・ユニット階層の作成	254
プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て	260
プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択	261
プランニング・ユニット階層の編集	261
プランニング・ユニット階層の削除	262
プランニング・ユニット階層の使用状況の表示	262
プランニング・ユニット階層の名前変更	263
プランニング・ユニット階層の同期	264
プランニング・ユニット階層のエクスポート	265
プランニング・ユニット階層のインポート	265
プランニング・ユニットの移動パス	266
プランニング・ユニットの移動パスの変更	266
プランニング・ユニットの移動パスのデータ検証ルールの設計の考慮事項	269
タスク・リストの管理	269
タスク・リスト・フォルダの作成	270
タスク・リストの名前変更	270
タスク・リスト・フォルダの名前変更	270
タスク・リスト・フォルダの移動	270
タスク・リスト・フォルダの削除	271
タスク・リストの作成	271
タスク・リストへの指示の追加	271
タスクの追加と定義	272
タスク・リストへのタスクの追加	272

タスク・リストの編集	274
PlanningWeb ページへのタスクのリンク	278
タスク・リストへのアクセス権の割当て	278
タスク・リストのインポートとエクスポート	280
データのコピー	281
セル詳細の消去	283
第 10 章 アプリケーションの操作	285
フォームとフォルダの管理	285
フォルダの作成	285
フォルダの移動	286
フォルダの削除	286
フォルダの名前変更	287
プリファレンスの設定情報	287
個人プリファレンスの設定	288
アプリケーション・デフォルトの設定	288
システム設定の指定	289
Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て	290
メンテナンス中のアプリケーションの使用制限	291
MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限	291
カスタム・ツールの指定	293
表示オプションの設定	293
印刷オプションの設定	293
レポートへのアプリケーションのマッピング	294
レポート・アプリケーションについて	294
レポート・アプリケーションの作成	294
レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング	295
アプリケーション・マッピングの定義	296
次元マッピングの定義	296
視点の設定	297
デフォルト・メンバーの検証ルール	298
レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ	299
ユーティリティを使用したデータのプッシュ	300
マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能	301
マッピング・アプリケーションと代替変数	302
レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加	302
レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集	303

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除	304
SQL を使用してアプリケーション情報を削除	304
勘定科目注釈の削除	304
シナリオに関するサポート詳細を削除	305
第 11 章 メニューの操作	307
メニューの作成と更新	307
メニュー・アイテムの操作	308
メニュー・アイテムの追加または変更	308
第 12 章 Planning アプリケーション管理の操作	311
Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの作成について	311
Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定	312
アプリケーションの管理	312
データ・ソースの管理	317
アップグレードの管理	321
別名テーブルの操作	324
別名テーブルについて	324
別名テーブルの作成	325
別名テーブルの編集または名前変更	325
別名テーブルの削除	325
別名テーブルの消去	325
別名テーブルのコピー	326
デフォルトの別名テーブルの指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定	326
次元の操作	327
次元の概要	327
次元階層の操作	328
メンバーの祖先の表示	331
アプリケーション内でメンバーが使用される場所を確認	332
カスタム次元について	332
エンティティについて	334
基本通貨	335
勘定科目について	335
勘定科目、エンティティ、プラン・タイプ	338
ユーザー定義のカスタム次元について	339
ユーザー定義カスタム次元の追加または編集	339
メンバーの操作	341
属性の操作	347

属性値の操作	349
カレンダーのカスタマイズ	351
通貨の設定	355
複数通貨を使用可能にする	355
為替レートの指定	361
シナリオの設定	362
バージョンの指定	366
バージョンとシナリオ・メンバーのソート	368
次元階層内でシナリオとバージョン・メンバーを移動	369
Planning アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加	369
集約ストレージについて	369
Planning の集約ストレージ・アウトラインの制約事項	370
ASO データベースを Planning アプリケーションに追加するプロセス	370
プラン・タイプの操作	371
動的時系列メンバーの設定	371
サポートされた Essbase 追加機能	373
期間次元の代替階層の考慮事項	373
Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作	374
ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュする	374
レベル 0 メンバーが動的計算に設定されたデータベースのリフレッシュ	375
Essbase パーティションの操作	376
ユーティリティを使用してメンバーをソート	376
ユーティリティを使用して共有子孫を削除	377
スマート・リスト、UDA およびメンバー式の使用方法	378
スマート・リストの操作	378
UDA の操作	382
メンバー式の操作	384
第 13 章 Planning Web クライアントのカスタマイズ	389
レポートのカスタマイズ	389
Planning ツール・ページのカスタマイズ	392
カスケード・スタイルシートのカスタマイズ	392
カスケード・スタイルシート・ファイルの場所	394
カスケード・スタイル・シートの変更	394
カスタマイズの例	394
フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ	395
フォームでのヘッダー・セルのスタイルのカスタマイズ	396
すべてのフォームへの太字の適用	396

1つのフォームへの太字の適用	396
スキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加	397
カスタマイズしたスキンの登録	397
ADF コンポーネントのカスタマイズについて	398
テキスト、色および画像のカスタマイズ	398
テキスト、色および画像のカスタマイズ	398
非ラテン言語でテキストをカスタマイズ	400
カスタマイズされたメッセージで制限されている文字	402
プロセス・ステータス用に色、状態、アクションをカスタマイズ	402
色のカスタマイズ	402
状態のカスタマイズ	403
アクションのカスタマイズ	404
分散パターンの作成	405
分散パターンの例	405
プランナのための指示の作成	406
第 14 章 トラブルシューティング	409
計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎる	410
メンバーが見つからない	410
要求が処理できない	410
ユーザーによる変更の競合	411
バージョンのコピー・エラー	411
通貨換算計算スクリプトでエラーが発生する	412
フォームのエラー・メッセージ	412
データベースが別の管理者によってロックされる	412
FDM のドリルスルーに関する問題点	413
500 Error メッセージ	414
暗黙的な共有の問題	414
日付値を入力する場合の無効な値	415
データベースの管理エラー	416
最大数のアプリケーションがすでに接続されているか、データベースがロックされている	417
WebLogic Server パラメータの最適化	417
Windows ネットワーク・パラメータの最適化	418
Planning での復元アプリケーションの登録	419
セッションのタイムアウト	420
パフォーマンスが低い	420
ダイアルアップ接続でフォームを開くとパフォーマンスが低下する	420
大きなフォームを開くとパフォーマンスが低下する	422
「アプリケーションを作成できません」エラー	422

アプリケーション・エラーがリフレッシュできない	423
ログオンできない	424
付録 A. JavaScript を使用したフォームのカスタマイズ	425
フォームのカスタマイズについて	425
JavaScript の変更	425
customCellEnterPre	426
customCellEnterPost	426
customCellValidatePre	427
customCellValidatePost	428
customOnLoad	429
drawCustomButtons	429
validateForm	430
カスタム JavaScript の配置	430
付録 B. 命名規則	433
アプリケーションとデータベースの命名規則	433
次元、メンバー、別名、フォームの命名規則	434
計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値での次元とメンバー名	435
ユーザー名の命名規則	436
付録 C. フォームの式関数	437
式および式の関数の使用	437
式の作成	437
式の編集	437
式の削除	438
式の関数	438
引数	439
Abs	444
Average	444
AverageA	445
Count	446
CountA	447
Difference	448
Eval	449
IfThen, If	449
Max	453
Min	453
Mod	454
PercentOfTotal	454

Pi	456
Product	456
Random	456
Rank	457
Round	459
Sqrt	459
Sum	460
Truncate / Trunc	461
Variance / Var	462
VariancePercent / VarPer	463
付録 D. Smart View を使用した Planning メタデータのインポートおよび編集	467
Smart View での Planning 次元のインポート	467
Smart View の次元のインポート	468
Smart View グリッドの使用	468
Smart View でのメンバーの編集	470
Smart View での Planning メンバーの追加	470
Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択	470
Smart View でのメンバーの追加	471
Smart View でのメンバーの追加のガイドライン	472
Smart View でのメンバーの移動	473
Smart View でのメンバーの移動のガイドライン	473
Smart View での共有メンバーの指定	473
Smart View でのキューブのリフレッシュと作成	474
用語集	475
索引	501

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

1

Planningの使用手法

この章の内容

Planning について	19
新機能に関する重要な情報.....	20
Smart View	20
Planning Web クライアント.....	20
Performance Management Architect	20
EPM Workspace	21
ライフサイクル管理	21
Essbase	22
Financial Reporting	22
ビジネス・ルール	22
Web Analysis	23
予測プランニング	23
サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス	23
Planning の使用法シナリオ	23

Planning について

Oracle Hyperion Planning は、共同のイベントベースの運営プランニング・プロセスを促進し、組織の幅広い財務および運営ニーズに対応する Web ベースの予算およびプランニング・ソリューションです。これにより、連続したビジネス向上を促進する、完全にクローズド・ループのプランニング・プロセスが使用可能となります。意思決定者およびマネージャは、一連のアクションをやりとりし、予算ホルダーと共同でプランニング・プロセスを最適化できます。プランナには迅速に適応できる柔軟性が提供され、確実にプランを適切で有用にできます。Planning により次の点を実現できます。

- 世界的規模の企業の複数の事業部にわたる協力、情報伝達および管理を促進します。
- 変動に応じて頻繁に行うプランニング・サイクルを管理し、絶え間ないプランニングを行うためのフレーム・ワークを提供します。
- Web または Oracle Hyperion Smart View for Office により使い勝手の良さと、配置のしやすさを実現します
- より短期間でアプリケーションを作成して導入でき、既存のアプリケーションの保守も容易になるので、総所有費用を削減できます。

- レポート作成、分析およびプランニングにより、意志決定プロセスが改善されます。
- 複雑なビジネス・ルールや割当てを組み込むことができ、モデリングを推進します。
- 他のシステムと統合してデータをロードできます。

新機能に関する重要な情報

Planning の新機能を使用する際の重要な詳細は、現在のリリースの Oracle Hyperion Planning New Features を参照してください。

Smart View

Smart View は Planning への Microsoft Office のインターフェースで、これによりユーザーは計画および予測アクティビティを実行できます。また、Smart View によりユーザーは切断モードでオフライン作業を行うことができます。これらにより、Planning データを Microsoft Outlook、Excel、Word および PowerPoint で分析することができます。Smart View のアド・ホック・グリッドにより、Planning ユーザーは Smart View または Planning で頻繁にアクセスし、お互いに共有する選択されたデータ・スライスのカスタマイズできます。Oracle Hyperion Planning User's Guide および Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のアド・ホック・グリッドの操作の章を参照してください。

Planning Web クライアント

Planning は Web ユーザーに完全な機能を提供します。Web インターフェースを使用し、クライアント・コンピュータにソフトウェアをインストールせずにアプリケーションを大規模で分散型の組織にロールアウトできます。すべてのソフトウェアはサーバーに存在します。以前 Planning デスクトップにあった多くの管理機能は、現在 Planning Web を通して使用できます。管理アプリケーションおよび次元の作成と管理など、他の管理機能については、Oracle Hyperion EPM Architect から利用できます。

Performance Management Architect

Performance Management Architect は Planning インストールと構成のコンポーネントです。これを使用し、Planning アプリケーションと次元、スマート・リスト、UDA、メンバー式および他の機能により作成、作業できます。さらにビジネス・ルールも作成できます。

Performance Management Architect を使用すると、Performance Management Architect アプリケーションを表示、作成および検証し、それらのアプリケーションを配置して Planning アプリケーションを作成できます。Performance Management Architect

から Planning へのアプリケーションの配置は、長期にわたる操作です。初回の配置にはそれ以降の再配置よりも時間がかかります。

Performance Management Architect アプリケーションには、Performance Management Architect の Oracle Hyperion Calculation Manager モジュールを使用して作成されたビジネス・ルールを含められます。Performance Management Architect で実行されるタスクの詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。Performance Management Architect のインストールと構成については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

EPM Workspace

Planning は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で使用できます。EPM Workspace プリファレンスなどの EPM Workspace 機能の詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace User's Guide または Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace Administrator's Guide を参照してください。EPM Workspace へのログオンの詳細は、[48 ページの「EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス」](#)を参照してください。

ライフサイクル管理

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System のライフサイクル管理には、Oracle Enterprise Performance Management System 製品のアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーティファクトを製品環境およびオペレーティング・システムの間で移行する一貫した方法があります。一般的には、Oracle Hyperion Shared Services Console のライフサイクル管理インターフェースは、ライフサイクル管理をサポートするすべての EPM System 製品に対して一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理インターフェースでアーティファクトのリスト表示、およびエクスポートとインポートのオプションの表示が異なります。ライフサイクル管理には、次の機能があります：

- アプリケーションおよびフォルダの表示
- アーティファクト検索
- アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行
- ファイル・システム間の移行
- 移行定義ファイルの保存およびロード
- 選択されたアーティファクトの表示
- 移行の監査
- 移行ステータスの表示
- ファイル・システム上で変更をすばやく行うための、個々のアーティファクトのインポートおよびエクスポート

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースに加え、ライフサイクル管理ユーティリティと呼ばれるコマンドライン・ユーティリティには、ソースから移行先にアーティファクトを移行させる代替方法を備えています。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windows タスク・スケジューラや Oracle Enterprise マネージャなど、サードパーティ製スケジューラ・システムともあわせて使用できます。

最後に、ユーザーがライフサイクル管理機能をカスタマイズして拡張できる、ライフサイクル管理アプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)があります。

ライフサイクル管理の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Lifecycle Management Guide を参照してください。

Essbase

Planning では、Oracle Essbase 解析および計算機能、セキュリティ・フィルタ、API、ビルト済金融情報、計算関数および複数データベース・アプリケーション・サポートが活用されます。Planning では、リレーショナル・データベースにアプリケーション定義が保管され、アプリケーションの Essbase データベースおよびセキュリティ特権が作成されます。

リレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーへのリンクにはデータ・ソースが使用されこれらは各 Planning アプリケーションに関連付けられます。Planning アプリケーション管理用のデータ・ソースの作成の詳細は、[317 ページ](#)の「[データ・ソースの管理](#)」を参照してください。Performance Management Architect で作成される Planning アプリケーションでのデータ・ソースについては、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

Financial Reporting

Oracle Hyperion Financial Reporting は、高度にフォーマットされたレポートを通してデータを重要なビジネス情報に変換する管理レポート・ツールです。Planning ユーザーは Financial Reporting を使用してレポート・タスクを管理し、プランのレビューおよび分析を行うことができます。ユーザーはテキスト、データのグリッド、チャート、グラフおよびイメージを盛り込んだレポートを作成できます。リアルタイムのアドホック差異レポートを使用し、オンラインでの表示または高性能な形式での印刷が可能な、高度な Financial Reporting を作成できます。

ビジネス・ルール

ビジネス・ルールは、事前定義済みの式、変数、計算スクリプト、マクロ、ルールセットおよびテンプレートを使用して、複雑な計算を実行します。[191 ページ](#)の「[ビジネス・ルールの使用方法](#)」を参照してください。

Web Analysis

Oracle Hyperion Web Analysis は、解析、表示方法およびレポート作成のソリューションを提供します。組織は広範囲に渡るユーザー・コミュニティに低コストで情報を提供できます。

予測プランニング

予測プランニングを使用して、ユーザーは Planning フォームを操作し、履歴データに基づいてパフォーマンスを予測することができます。予測プランニングは高度な時系列および自己回帰和分移動平均 (ARIMA) 統計テクニックを使用して、他の予測手法に基づいて Planning に入力された予測を確認および検証します。この機能を使用するには、管理者は『Oracle Hyperion Planning 予測プランニング・ユーザー・ガイド』に記載のとおり、フォームを設計する必要があります。その後、有効な Planning フォームが Smart View にロードされたら、ユーザーは「プランニング」メニューまたはリボンから予測プランニング機能にアクセスできます (インストール手順については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。)

サードパーティ製ソフトウェアのユーザー・ライセンス

Planning を使用するには、リレーショナル・データベースまたは Web アプリケーション・サーバーなどのライセンスを第三者のベンダーから購入する必要があります。

Planning の使用法シナリオ

Performance Management Architect アプリケーション管理を使用してアプリケーションを作成し、Planning アプリケーションを作成するために配置します。アプリケーションには、勘定科目、エンティティ、シナリオおよびその他の次元要素などの Planning のニーズに合わせて次元および次元属性が含まれています。作成できるアプリケーションの数に制限はありません。Performance Management Architect の詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

これらのトピックでは、Planning がどのように使用されるかについて説明されません。

- [24 ページの「配置」](#)
- [25 ページの「アプリケーションの設定」](#)
- [29 ページの「作成プラン」](#)
- [30 ページの「ビジネス・ルールの起動」](#)
- [30 ページの「予算レビュー・プロセスの開始」](#)

- 32 ページの「プランニング後のアクティビティ」

配置

IT 担当者が Planning をサーバー・コンピュータおよびクライアント・ワークステーションにインストールして構成します。IT 担当者は、リレーショナル・データベース、クライアント/サーバーおよび Web サーバー・ソフトウェア、またユーザー・ディレクトリ構成の管理経験が必要です。

表 1 サーバーのインストール

ユーザー	タスク
IT 担当者	オペレーティング・システム、リレーショナル・データベース、Web サーバー、アプリケーション・サーバーおよび Web ブラウザを含む Planning システム要件をインストールします。
IT 担当者	Essbase をインストール
IT 担当者	OLAP およびリレーショナル・データベースのデータ・ソース名(DSN)を設定
IT 担当者	Planning および Financial Reporting をインストールします
IT 担当者	リレーショナル・データベースと接続を作成
IT 担当者	Web サーバーを構成
IT 担当者	外部ユーザー・ディレクトリでユーザーを設定
IT 担当者	オプション: ユーザーのテスト・アプリケーションを作成
IT 担当者	インストールと構成をテスト

表 2 クライアントのインストール:ユーザーとタスク

ユーザー	タスク
IT 担当者	Planning リモート Windows クライアント、Smart View、Microsoft Excel および Financial Reporting のインストール
IT 担当者	Web ブラウザのインストール
IT 担当者	Web とネットワークの接続をテスト

アプリケーションの設定

サブトピック

- [メタデータの作成](#)
- [ユーザーおよびアクセス権の定義](#)
- [アプリケーションの作成およびリフレッシュ](#)
- [フォームの設計](#)
- [ワークシートの設計](#)
- [アプリケーションへのデータの移入](#)
- [ビジネス・ルールの作成](#)
- [ターゲットの設定](#)
- [タスク・リストの作成](#)
- [レポート](#)
- [Planning・サイクルの初期化](#)

アプリケーションの設定には、この項でリストされるタスクが含まれます。管理者は、Performance Management Architect アプリケーションの管理を使用してアプリケーションを設定し、Planning に配置することもできます。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

メタデータの作成

コンサルティング・パートナーおよび Planning 管理者によりアプリケーションがデザインされ、Performance Management Architect アプリケーション管理でアプリケーション・フレームワークが作成されます。アプリケーションの所有者は1つのアプリケーションにつき1人のみです。所有者は、他の管理者に所有権を与えることができます。アプリケーション・フレームワークには次が含まれます。

- アプリケーション名
- プラン・タイプ数および名前
- カレンダー構造
- アプリケーションが複数通貨かどうか
- デフォルトの通貨

アプリケーション・フレームワークが作成されたあと、次元とメンバーがアプリケーションに追加され、Performance Management Architect のプラン・タイプに割り当てられます。アプリケーションには必須次元が8つまで存在します。

- 通貨(複数通貨アプリケーション)
- HSP_Rates (複数通貨アプリケーション)
- 勘定科目
- エンティティ
- シナリオ
- バージョン
- 期間

- 年

表3 メタデータの作成

ユーザー	タスク
管理者	アプリケーションの設計と作成
管理者	メタデータの定義(通貨、シナリオ、バージョン、カレンダー)
管理者	為替レートを入力
管理者	属性および属性値の定義
管理者	カスタム次元のロード

ユーザーおよびアクセス権の定義

IT 担当者はユーザーおよびグループを定義し、ユーザーが Planning アプリケーションにアクセスする前にユーザー・ディレクトリを構成します。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。Planning で、ユーザーまたはグループを保護されたオブジェクトに割り当てます。

表4 ユーザーおよびアクセス権を設定する

ユーザー	タスク
IT 担当者	サポートされたユーザー・ディレクトリで Planning ユーザーを設定します
管理者	Planning アプリケーションのユーザー・ディレクトリでユーザーを同期化します
管理者	ユーザーおよびグループにアクセス権を割り当てます
管理者	Planning で、次元、メンバー、フォーム、フォルダ、およびタスク・リストにアクセス権を割り当てます(第3章「アクセス権の設定」を参照してください)

アプリケーションの作成およびリフレッシュ

Planning アプリケーションの Essbase アウトラインおよびセキュリティ構造は、管理者によって作成され、定期的にはリフレッシュします。アウトラインおよびセキュリティ構造は、Planning アプリケーションのリレーショナル・データベースに保管されるメタデータに基づいて作成されます。Planning により次が作成されます。

- Essbase アプリケーション
- 複数の Essbase データベース(各プラン・タイプにつき1つ)
- Essbase アクセス権フィルタ
- Essbase アウトライン(すべてのメタデータ):
 - メンバー
 - 共有メンバー
 - ユーザー定義属性および属性値

- 為替レート

表 5 データベースの作成

ユーザー	タスク
管理者	Planning アプリケーションを、アプリケーションのリレーショナル・データベースに保管されるメタデータに基づいて作成、リフレッシュします。

フォームの設計

表 6 フォームの設計

ユーザー	タスク
管理者と対話型ユーザー	Planning でフォームを作成、維持します
管理者と対話型ユーザー	フォーム管理のために Planning でフォルダを作成、管理します
管理者	フォームおよびフォルダにアクセス権を割り当てます

ワークシートの設計

Planning ユーザーは Smart View をインストールし、Excel のフォームを処理して Excel ワークシート・モデルを活用し、カスタムの式、フォーマット・レポートおよび Planning との接続を切った作業を作成できます。

アプリケーションへのデータの移入

管理者および対話型ユーザーは Performance Management Architect アプリケーション管理を使用し、Planning アプリケーションにデータを事前に移入します。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

表 7 アプリケーションへのデータの移入

ユーザー	タスク
管理者	「データのコピー」を使用し、リレーショナル・データおよびサポート詳細を含めて、1つの次元交差からのプランを別の次元交差にコピー
管理者と対話型ユーザー	一括ロードの実行
任意のユーザー	ビジネス・ルールを反映し、グローバルに保存された仮定に値を入力
任意のユーザー	Planning アプリケーションにフォームまたは Smart View を通してデータを入力
任意のユーザー	ビジネス・ルールまたは「バージョンのコピー」を使用してデータを計算、作成

ビジネス・ルールの作成

表 8 ビジネス・ルールの作成

ユーザー	タスク
管理者	ユーザーのアクセス権をビジネス・ルールに割り当てます
管理者と対話型ユーザー	ビジネス・ルールを作成します。Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide で Calculation Manager の役割および権限について参照してください。
管理者によって起動アクセス権を割り当てられた、管理者、対話型ユーザーおよびプランナ	Planning アプリケーションのビジネス・ルールを起動します

ビジネス・ルールの管理の詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

191 ページの「ビジネス・ルールの使用方法」も参照してください。

ターゲットの設定

管理者は Planning アプリケーションのターゲット・タイプ・バージョンを設定します。ターゲット・データへのユーザー・アクセスはアクセス権により決定されます。一般的に、ターゲット・データは事業単位などメタデータの上に保管されます。管理者は、ターゲット・データが下位の#MISSING 値で置き換えられないよう Essbase データベースを構成します。

ターゲット・データは一般的にデータ入力と分析の指針として使用されます。たとえば次のようにターゲット・データを作成します:

- データを手動で入力
- ビジネス・ルールによるモデリング
- ビジネス・ルールを使用し、ターゲットを下位メンバーに押し下げます

表 9 ターゲットの設定

ユーザー・タイプ	タスク
管理者	標準のターゲット・タイプ・バージョンを追加
管理者	ユーザー・アクセス権を(通常は読取り専用)をターゲット・バージョンに割り当てます
管理者	ターゲット・データが下位の#MISSING 値で置き換えられないよう Essbase データベースを構成します
任意のユーザー	ターゲット・データの作成
管理者	Financial Reporting データベースを設定します
任意のユーザー	ガイダンスまたは入力のためにフォームでターゲットを表示

タスク・リストの作成

表 10 タスク・リスト

ユーザー・タイプ	タスク
管理者	ユーザーの予算策定プロセスを構成するタスク・リストを作成します
管理者	タスク・リストおよびタスクにアクセス権を割り当てます

レポート

Financial Reporting を使用し、Windows または Web 使用可能クライアント用のレポートを作成します。Financial Reporting は Essbase データベースを使用し、Essbase アクセス権フィルタ(Planning が作成)に関連付けます。

表 11 レポート

ユーザー・タイプ	タスク
管理者と対話型ユーザー	Financial Reporting を使用し、レポートを作成、起動します
任意のユーザー	レポートの印刷
任意のユーザー	プランニング・サイクルを通してレポートを見る

Planning・サイクルの初期化

表 12 プランニング・サイクルの初期化

ユーザー・タイプ	タスク
管理者	反復レビュー、解析および承認のためプランニング・ユニットを選択します
任意のユーザー	プランニング・ユニットの所有者になった後で、電子メールを受信するかどうかを指定します

作成プラン

管理者はプランニング・プロセスを通してユーザーをガイドするタスク・リストを定義します。Planning ユーザーはアプリケーションにログインし、フォームを開くことでプランニング・サイクルを開始できます。ユーザーはフォームの手順を読み取り、プランを準備する時に履歴やターゲット・データをレビューします。追加のユーザー・タスクの詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

ユーザーはフォームでデータを保存し、フォームの現在保管されているデータ値を保存する前にリフレッシュできます。ユーザーは直前に保存されたバージョンにデータを復元し、「バージョンのコピー」を使用して使用して個人バージョンを保存できます。ユーザーの保存時:

- データは Essbase データベースに保存されます。
- フォームが作成されるときに保存時に実行するよう「フォームの計算」ビジネス・ルールが選択されている場合、フォームの小計が計算、保管されます。

(デフォルトでは、このビジネス・ルールは保存時に実行するよう選択されません。)

- ビジネス・ルールを起動し、データを計算します。

ビジネス・ルールの起動

ビジネス・ルールはアクセス権に応じてユーザーが使用できます。管理者は起動アクセス権をビジネス・ルールに Planning 内から割り当てられます(第3章「[アクセス権の設定](#)」を参照)。ビジネス・ルールのアクセス権の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。

起動権限を持つユーザーは、Planning または Smart View からビジネス・ルールを起動できます。

予算レビュー・プロセスの開始

管理者は「初回パス」状態にプランニング・ユニットを配置することでレビュー・プロセスを初期化します。ユーザーがデータを入力し、計算、保存したあと、レビューのために通常データを上位へ移動します。ユーザーがプランニング・ユニットを上位へ移動するときには、仮定を記録する注釈を入力し、次の所有者や確認者を選択します。プランニング・ユニットのプロモートでは:

- 選択されたユーザーに所有権を割り当てます
- 非所有者のプランニング・ユニットのアクセス権を読取り専用オーバーライドします
- プランニング・ユニットのステータスを「初回パス」から「レビュー中」に変更します
- 上位(または下位)のプランニング更新ステータスを必要に応じて「レビュー中」に更新
- プロセス履歴に監査エントリを記録
- アプリケーションの所有者と新しいプランニング・ユニットの所有者にオプションで電子メールの通知を送信

確認者は変更や注釈を加えることができます。読取り専用ユーザーのみがプランニング・ユニットの注釈と勘定科目注釈を入力できます。ユーザーは元のデータの個人的なコピーを保管し、変更されたデータを追跡できます。プランニング・ユニットが上位に移動されると、確認者が新しい所有者となり、一般的に次を行います:

- 電子メール通知を受信し、「プロセス定義」ページにダイレクトされます
- エンティティ、プロセス状態または現在の所有者別にステータス・ページをソートします
- 注釈とプランニング・ユニット履歴をレビューします
- フォームを開き、データのレビュー、解析、変更および計算を行います
- 注釈を作成します(勘定科目注釈を含む)

- プランニング・ユニットが承認されるまで反復してプランニング・ユニットを上位へ移動または拒否します

プランニング・ユニットが承認された後に、アプリケーション所有者はプランニング・ユニットの所有者になります。管理者はプランニング・ユニットを拒否できません。レビュー・サイクルを終了するには、アプリケーションの所有者または管理者はシナリオまたはバージョンをすべてのユーザーに対して読取り専用に変更します。

表 13 予算レビュー・プロセスの開始

ユーザー	タスク
管理者	プランニング・サイクルのためにプランニング・ユニットを開始します
アクセス権のあるユーザー	データを入力します
アクセス権のあるユーザー	データを計算します
アクセス権のあるユーザー	オプションで送信のコピーを作成します
アクセス権のあるユーザー	レビューのためにデータを上位へ移動します
アクセス権のあるユーザー	レビュー・プロセスをサポートする注釈を入力します。プランニング・ユニットの所有者が決まるまで、複数のユーザーがそれを更新できます。プランニング・ユニットが上位の次の確認者に移動されるときに、非所有者のアクセス権は読取り専用に変更されます。
アクセス権のあるユーザー	プランニング・ユニットのレビューの準備ができたことを確認者に通知します
アクセス権のあるユーザー	上位へ移動されたプランニング・ユニットのデータをレビューします
アクセス権のあるユーザー	フォームを通して上位へ移動されたデータの読取りおよび変更を行います
アクセス権のあるユーザー	ビジネス・ルールを実行します
アクセス権のあるユーザー	Financial Reporting、Oracle の Hyperion Web Analysis、Smart View またはサードパーティのレポート・ツールを使用して、上位へ移動されたデータを読み取ります
アクセス権のあるユーザー	データ値の変更、注釈の入力、プランニング・ユニットのサインオフ、プランニング・ユニットの上位への移動、拒否および承認を行います
管理者	プランニング・プロセス・ステータスを確認します
管理者	補足的注釈を読み取ります
管理者	監査証跡を表示します
管理者	プランニング・サイクルを完了します
管理者	Essbase のシナリオおよびバージョンへのユーザーのアクセス権を読取り専用に変更します

ユーザー	タスク
管理者と対話型ユーザー	Financial Reporting を使用してレポートを発行します

プランニング後のアクティビティ

表 14 プランニング後のアクティビティ

ユーザー	タスク
管理者と対話型ユーザー	シナリオ別のプランニング・データを他のアプリケーション、総勘定元帳または ERP にアップロードします
アクセス権のあるユーザー	完成したプランのバージョンを新しいバージョンにコピーするか、データのある次元交差から別の次元交差にコピーします
管理者と対話型ユーザー	実績とプランを比較するレポートを作成するために、最新の実績データの一括ロードを実行します
アクセス権のあるユーザー	フォーム、Financial Reporting、Smart View、Oracle Hyperion Performance Scorecard またはサードパーティのレポート作成ツールを利用し、実績の更新について読み、パフォーマンスとプランの比較結果を分析します

2

Planning スタート・ガイド

この章の内容

概要	33
Essbase の開始	34
Essbase の操作の考慮事項	34
Planning フォームでの暗黙的な共有の理解	36
Essbase の複数のサーバーへの接続	36
リレーショナル・データベースの起動	36
SQL リレーショナル・データベースの最適化	37
アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定	37
EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス	48
Planning ユーティリティの操作	49
アプリケーション・サーバーの使用法	51
インスタンスとクラスタの更新について	52
Planning および Essbase を閉じる	52

概要

Planning アプリケーションは、プランニングのニーズを満たすために使用される、関連した次元のセットと次元メンバーです。各アプリケーションにはそれ自体の勘定科目、エンティティ、シナリオおよび他のデータ要素があります。

Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを操作できます。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide でこれらの Performance Management Architect アプリケーション管理タスクを参照してください:

- Performance Management Architect の作成、配置により Planning アプリケーションを作成します。
- 組織の予算構造を反映したエンティティを作成します。
- プランニング・データを収集するための勘定科目と次元を作成します。
- シナリオとバージョンを作成します。
- 組織で必要となるカスタムの要約期間でカレンダーを変更します。
- 複数通貨アプリケーションでは、基本通貨、通貨コード、通貨記号、トライアンギュレーション通貨、レポートの通貨、および為替レート・タイプを指定します。
- Calculation Manager でビジネス・ルールを作成します。

次のものを含む Planning アプリケーション管理タスクについては、このガイドを参照してください。

- Planning アプリケーションを作成、削除および登録します。
- フォーム、タスク・リストおよびメニューを作成します。
- 次元メンバー、タスク・リスト、フォームおよびフォーム・フォルダのアクセス権を割当てます。第3章「アクセス権の設定」と、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide およびその Planning に関する情報を参照してください。
- 通貨換算レートと為替レートのテーブルを管理します。
- レビューと承認のプロセス、要件、参加者の識別や予算プロセスの管理を行います。

Planning および Performance Management Architect のインストールおよび構成の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

Essbase の開始

Planning アプリケーションのデータは、Essbase サーバーにあります。Essbase は、Planning アプリケーションを開く前に実行する必要があります。Essbase を起動した後に最小化し、バックグラウンドでまたはサービスとして実行できます。

Essbase の操作の考慮事項

「データベースの管理」ページ上の作成およびリフレッシュは Essbase データベースのデータに影響します。「作成」をクリックするとデータは消去され、Planning のプラン・タイプが再構築されます。「リフレッシュ」をクリックするとデータが置き換えられることがあります。重要な情報は、84 ページの「アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ」を参照してください。

Performance Management Architect を使用していない場合、Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを操作します。Planning アプリケーション管理で作成したアプリケーションを Performance Management Architect へアップグレードすると、Planning アプリケーション管理に戻ってそのアプリケーションを操作することはできません。Essbase アウトラインの変更を Oracle Essbase Administration Services で直接行うことはできません。

Planning アプリケーションをリフレッシュすると、Essbase データベースで次の点が変わります。

- Planning リレーショナル・データベースにメンバーが存在しない場合、メンバーとメンバーのプロパティ、属性、ユーザー定義の属性(UDA)は、「リフレッシュ」すると Essbase に保持されません。
- Planning で Essbase に存在するすべてのメンバーのプロパティが取得されてから、Planning で定義可能なメンバーのプロパティが設定され上書きされます。

この動作は、以前のリリースと異なります。以前のリリースでは、リフレッシュのプロセスは付加的であり、Planning にメンバー、属性、UDA が存在していなくても、Essbase のアウトラインに直接変更されました。

HSP_UDF の UDA では、Planning 以外で定義されたメンバー式は保持されます。この UDA を Planning 内からメンバーへ割り当てることができます。Planning のリフレッシュによるメンバーの割当て解除によって、Essbase アウトラインのメンバーからの UDA は割当て解除にされません。HSP_UDF の UDA を持つメンバーが、直接 Essbase に追加される場合、データベースのリフレッシュにより、Essbase のこのメンバー上の式がすべて保持され、レベル・ゼロと動的計算のメンバーに計算式のプレースホルダ(;)が生成されません。カスタム UDA や HSP_NOLINK UDA などのその他の UDA は(Planning アプリケーション管理に対し)Performance Management Architect または Planning で定義された場合にのみ保持されます。UDA を作成および更新するには、[382 ページの「UDA の操作」](#)を参照してください。

メンバー式のサポートは(Planning アプリケーション管理に対し)Performance Management Architect および Planning でのみ使用できるので、HSP_UDF UDA の必要性はあまりありません。各作業は(Planning アプリケーション管理に対し)Performance Management Architect または Planning で UDA を定義するために行われる必要があります。

@XREF 機能により、別のデータベースからのデータ値が調べられ、現在のデータベースからの値が計算されます。HSP_NOLINK の UDA をメンバーに加えて、@XREF 機能が、そのメンバーに指定されたソース・プラン・タイプではないすべてのプラン・タイプに作成されるのを防ぐことができます。UDA および関数の詳細については、[Oracle Essbase Database Administrator's Guide](#) を参照してください。

Essbase アウトラインを最も使用される Essbase のメンバー・プロパティのために変更する必要はありません。Performance Management Architect および Planning では、「期間」次元の動的時系列、「期間」次元の代替階層、「シナリオ」次元と「バージョン」次元の階層、属性次元の階層および別名をサポートしています。

スーパーバイザかアプリケーション管理者として Essbase にログオンした場合、次のガイドラインに従って操作してください。

- Essbase の密・疎次元設定や次元の順序を変更しないでください。
- テキスト、ブール式、数値、日付など、どの属性次元タイプでも使用できます。
- リンクされたレポート・オブジェクト(LRO)は使用しないでください。
- タイム・バランスのデフォルト設定を変更しないでください。デフォルトは「残高」で「末尾」、「フロー」で「なし」です。
- 差異レポートの設定を変更しないでください。「保存された仮定」以外のすべての勘定科目タイプにプリセットされています。「保存された仮定」の勘定科目タイプでは、「支出」および「支出外」が有効に設定されています。
- リフレッシュする前にデータベースをバックアップしてください。[92 ページの「アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ」](#)を参照してください。

Planning フォームでの暗黙的な共有の理解

Essbase 暗黙的な共有を使用すると、一部のメンバーは、明示的に共有として設定しなくても共有されます。これらのメンバーが暗黙的な共有メンバーです。暗黙的な共有関係が作成されると、各暗黙的なメンバーは他のメンバーの値であるとみなされます。Essbase は次の状況でメンバーの共有関係を想定(または暗示)します:

- 親が 1 つの子のみを持っています
- 親が親に連結される 1 つの子のみを持っています
- 親のデータ・タイプは「ラベルのみ」です(この場合、親は子に使用される集約設定にかかわらず最初の子の値を継承します)

暗黙的な共有関係を持つメンバーを含む Planning フォームでは、親に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、子はそれと同じ値を想定します。同様に、子に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、親は通常同じ値を想定します。

たとえば、計算スクリプトまたはロード・ルールが暗黙的な共有メンバーを移入する場合、その他の暗黙的な共有メンバーは計算スクリプトまたはロード・ルールにより移入されたメンバーの値を想定します。計算されたまたはインポートされた最後の値が優先されます。計算スクリプトの変数として親または子のどちらを参照しても結果は同じです。

必要な場合、Planning フォームで暗黙的な共有を回避できます。[414 ページの「暗黙的な共有の問題」](#)を参照してください。

Essbase の複数のサーバーへの接続

次のように、ポート番号を指定すれば、Planning のアプリケーションから同時に、Essbase の複数のインスタンスに接続できます。

- Planning のアプリケーションを Planning アプリケーション・ウィザードか Performance Management Architect で作成するとき(データ・ソース名ごとに繰り返す)。
- HSPSYS_DATASOURCE データベース・テーブルの ESS_SERVER プロパティの値として。

同じコンピュータ上での Essbase の複数のインスタンスのインストールの手順の詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

リレーショナル・データベースの起動

Planning アプリケーションを開く前にリレーショナル・データベースを起動する必要があります。リレーショナル・データベースが起動した後、最小化してバックグラウンドで実行させるか、サービスとして稼働します。

SQL リレーショナル・データベースの最適化

「タイムアウト」レジストリのキー設定によって、タイムアウト値を構成できます。Planning から発行される一部の SQL クエリーには、使用しているデータベースのレコードのサイズによって、デフォルト設定で 30 秒の ADO タイムアウトより長く実行される場合もあり得ます。これによって、アプリケーション・データベースのリフレッシュが失敗する原因となる場合があります。タイムアウト値を増やして(例: 180 秒)、リフレッシュの失敗を減らすことができます。

▶ タイムアウト値を最適化するには、次の操作を行います。

- 1 「レジストリ・エディタ」を開きます。
- 2 次の場所にナビゲートします。

HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/HyperionSolutions/Planning

「タイムアウト」レジストリ・キーが右側のペインに存在する場合、タイムアウト値は対応する値に設定されます。キーが無い場合、値はデフォルトに設定されます。タイプは DWORD としてください。

アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定

アプリケーションやシステム・プロパティを追加または変更して、外部認証の構成ファイルへのパスとして、該当するアスペクトをカスタマイズできます。

表 15 構成可能なプロパティの例

PROPERTY_NAME Column	説明
RDB_DRIVER RDB_SERVER_URL	39 ページの「JDBC ドライバの変更」を参照。
JDBC_MIN_CONNECTIONS JDCB_MAX_CONNECTIONS	40 ページの「JDBC 接続プールの構成」を参照。
OFFLINE_COMPRESSION_THRESHOLD	40 ページの「オフライン圧縮の設定」を参照。
SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE	91 ページの「サポート詳細キャッシュのメモリ割当て」を参照してください。
SUBST_VAR_CACHE_LIFETIME	218 ページの「メンバーとしての代替変数の選択について」を参照してください。
DIRECT_DATA_LOAD DATA_LOAD_FILE_PATH	104 ページの「データのロード」を参照。
OLAP_PATH_SEPARATOR	40 ページの「UNIX でのデータの同期の構成」を参照してください。
OLAP_MAX_CONNECTIONS	90 ページの「パフォーマンスの最適化」を参照してください。
ENABLE_FOR_OFFLINE	173 ページの「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」を参照してください。

PROPERTY_NAME Column	説明
SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING	41 ページの「Smart View メッセージの制御」を参照してください。
SMART_VIEW_MD_NEW_MEMBER_SUFFIX	470 ページの「Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択」を参照してください
HOME_PAGE	42 ページの「アプリケーション・ホーム・ページの設定」を参照してください。
RULE_MAX_WAIT、RULE_MONITOR_DELAY、CLR_CELL_MAX_WAIT、CLR_CELL_MONITOR_DELAY、COPY_DATA_MAX_WAIT、COPY_DATA_MONITOR_DELAY、PUSH_DATA_MONITOR_DELAY、PUSH_DATA_MAX_WAIT JOB_STATUS_MAX_AGE	42 ページの「バックグラウンド処理の設定」を参照。
BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT	44 ページの「ビジネス・ルールの起動ログ・プロパティの設定」を参照してください。
CAPTURE_RTP_ON_JOB_CONSOLE	193 ページの「実行時プロンプトについて」を参照。
MAX_VALIDATION_RECORDS VALIDATION_CACHE_SIZE	45 ページの「データ検証プロパティの設定」を参照してください。
MAX_CELL_TEXT、MAX_CELL_NOTE	46 ページの「セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定」を参照してください。
EDIT_DIM_ENABLED	47 ページの「配置された Planning アプリケーション内からの次元の管理」を参照してください。
ORACLE_ADF_UI	47 ページの「Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用」を参照してください。
DATA_GRID_CACHE_SIZE	167 ページの「ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定」を参照してください。

注： 場合によっては、「プロパティ」ページに追加のプロパティが表示されることがあります。次のプロパティは Planning で必要なため、表示可能であっても変更しないでください: SYSTEM_DB_RELEASE および SYSTEM_DB_VERSION。

▶ Planning アプリケーションまたはシステム・プロパティを設定するには:

1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。

2 選択:

- 「アプリケーション・プロパティ」: 現在のアプリケーションのプロパティを設定します。

- 「システム・プロパティ」:すべての Planning アプリケーションのプロパティを設定します。

3 先:

- プロパティを変更するには、「プロパティ値」の値を変更します。
- プロパティを追加するには、「追加」をクリックします。プロパティの名前(スペースを入れない)と値を空白行に入力します。

タブにプロパティが既に入力されていると、名前の色が赤くなり、重複していることが示されます。アプリケーションとシステムタブ間では、プロパティを重複させることができます。

4 「保存」をクリックして、変更を確認します。

5 アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

プロパティは、デフォルトで HSPSYS_PROPERTIES のシステム・データベース・テーブルに保存されます。これは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータの Planning で「データベースの構成」タスクの選択時に作成するリレーショナル・データベースにあります。

JDBC ドライバの変更

デフォルトでは、Planning 内蔵の Oracle JDBC ドライバが使用されます。JDBC ドライバを変更するには、次の値で JDBC プロパティを更新します。

表 16 JDBC プロパティ値

JDBC ドライバ	RDB_SERVER_URL	RDB_DRIVER
Oracle Thin	jdbc:oracle:thin:@%SERVER_NAME%:1521:%DB_NAME%	oracle.jdbc.driver.OracleDriver
DB2 native	jdbc:db2:%DB_NAME%	COM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver
DB2 サーバー用の DB2 native	jdbc:db2://myhost.mydomain.com:6789/%DB_NAME%	COM.ibm.db2.jdbc.net.DB2Driver

データベースのドライバ名および URL は、HSPSYS_DATASOURCE データベース・テーブルに保管されています。

▶ JDBC ドライバの変更後、必要なサードパーティ製のファイルを Planning のサーバーにアクセス可能にするには:

1 .jar ファイル(Oracle の場合)または.zip ファイル(DB2 の場合)がある場所を検索します。

- Oracle の場合、classes12.jar は OraHome/jdbc/lib ディレクトリにあります。
- DB2 の場合、db2java.jar または db2java.zip は /Program Files/sqlllib/java ディレクトリにあります。

2 前の手順にある.jar または.zip ファイルを Web アプリケーション・サーバーの宛先ディレクトリにコピーします。例:

1. .ear ファイルを展開します。
2. .jar または.zip ファイルを HPDomain/applications ディレクトリにコピーします。
3. このファイルを startHPServer.cmd の CLASSPATH に追加します。

3 Web アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

JDBC 接続プールの構成

JDBC 接続プールの最小数と最大数を設定できます。この構成は、リレーショナル・データベースにアクセスする Planning ユーザー数に大きく依存します。たとえば、JDBC 接続プールの最小接続数を 1 に、最大接続数を 5 に指定できます。そうすることで、ユーザーが Planning にログオンする際、接続が 1 つ作成されます。次の 4 人のユーザーが Planning にログオンすると、さらに接続が作成され、合計 5 つの接続となります。ログオンする他のユーザーは、5 つの接続を共有します。

JDBC 接続設定は、デフォルトで最小が 2、最大が 10 に設定されています。Planning アプリケーションは、最大数 JDBC_MAX_CONNECTIONS を 2 より小さくすると、正常に機能しません。

JDBC 接続プールのパラメータを再構成するには、次のように、最小と最大のプロパティ値を変更します。

- JDBC_MIN_CONNECTIONS
- JDBC_MAX_CONNECTIONS

パフォーマンスを最適化するために、次の設定をお勧めします:

- JDBC_MIN_CONNECTIONS=10
- JDBC_MAX_CONNECTIONS=45

UNIX でのデータの同期の構成

Performance Management Architect で Planning アプリケーションを操作する場合、Essbase が UNIX コンピュータにインストールされていると、データの同期の統合の実行が失敗します。この問題を解決するには、Planning で、「管理」、「プロパティの管理」の順に選択します。「アプリケーション・プロパティ」をクリックして値 OLAP_PATH_SEPARATOR=/を追加します(Windows 環境の場合、デフォルト値は\。「保存」をクリックし、Planning サーバーを再起動します。

オフライン圧縮の設定

オフラインに切換えられたアプリケーションに OFFLINE_COMPRESSION_THRESHOLD プロパティを追加し、圧縮を開始するとき、バイトによるしきい値を設定することによって、圧縮の設定ができます。オフライン・クライアントの要求が、オフライン圧縮のしきい値の数より大きいとき、圧縮は使用可能です。

▶ オフライン圧縮を設定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 2 「システム・プロパティ」を選択して、すべての Planning アプリケーションのプロパティに設定します。
- 3 「オフラインの圧縮しきい値」の設定を更新します。
 - プロパティを追加するには、「追加」をクリックします。空白行に OFFLINE_COMPRESSION_THRESHOLD(スペースを入れない)を入力します。「プロパティ値」に、オフライン・アプリケーションを圧縮するときのしきい値に使用するバイト数を入力します。
 - プロパティを変更するには、「プロパティ値」の値を変更します。圧縮を無効にするには、0を入力します。
 - プロパティを削除するには、削除するプロパティの名前を選択して「[Delete]」キーを押します。
- 4 「保存」をクリックして、変更を確認します。
- 5 アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

Smart View メッセージの制御

Smart View および Planning の異なるリリースを使用する場合、ユーザーが Smart View を起動するとメッセージが表示されます。このメッセージを表示しないようにするには、SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING のシステム・プロパティを追加します。

▶ Smart View メッセージを制御するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 2 「システム・プロパティ」を選択して、すべての Planning アプリケーションのプロパティに設定します。
- 3 「追加」をクリックして、空白行に次のプロパティを入力します。
SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING
- 4 「プロパティ値」に次の値を入力します。
 - 「はい」:メッセージを表示します。
 - 「いいえ」:メッセージを表示しません。
- 5 「保存」をクリックして、変更を確認します。

新しい Planning メンバーを Smart View で表示

Smart View で Planning メタデータをインポートし、編集できます。(467 ページの「Smart View での Planning 次元のインポート」を参照してください。)Smart View グリッドで作成された新規メンバーは、デフォルトではグリッドにアスタリスク(*)のマークが付きます。アプリケーション・プロパティを編集して異なる符号を使用できます。

- ▶ Smart View グリッドでアスタリスク(*)以外の記号が付いた新規 Planning メンバーを表示するには:
- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
 - 2 「システム・プロパティ」を選択して、すべての Planning アプリケーションのプロパティに設定します。
 - 3 SMART_VIEW_MD_NEW_MEMBER_SUFFIX をクリックします。
 - 4 「プロパティ値」に次の値を入力します。
 - 5 「保存」をクリックして、変更を確認します。

アプリケーション・ホーム・ページの設定

ユーザーが Planning アプリケーションにログインしたときに表示されるページを指定できるため、ユーザーはフォーム、タスク・リスト、または「承認の管理」ページに直接移動できます。これを行うには、HOME_PAGE アプリケーション・プロパティを設定します。

- ▶ アプリケーション・ホーム・ページを設定するには:
- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
 - 2 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
 - 3 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。
 - Forms
 - TaskList
 - Approvals
 - 4 「保存」をクリックして、変更を確認します。

バックグラウンド処理の設定

構成したしきい値の後にバックグラウンド処理に切り替えるジョブ(ビジネス・ルール、「セル詳細の消去」、「データのコピー」および「データのプッシュ」)を設定できます。指定した期間の後にジョブをバックグラウンドで実行します。また、Planning にジョブ・ステータスを確認させる頻度を設定し、ジョブ・コンソールに表示させることもできます(Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照)。

- ▶ バックグラウンド処理およびステータス確認の頻度を設定するには:
- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
 - 2 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
 - 3 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。

表 17 ジョブ・プロパティ名および値

PROPERTY_ NAME Column	プロパティ値	説明
RULE_MAX_ WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドでビジネス・ルールを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、この機能は適用されず、バックグラウンドでビジネス・ルールは実行されません。 注： フォームがロードまたは保存されたときに自動的に実行されるよう設定されたビジネス・ルールはバックグラウンドで実行されません。
RULE_ MONITOR_ DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	ビジネス・ルールのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
CLR_CELL_ MAX_WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドで「セル詳細の消去」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「セル詳細の消去」ジョブはバックグラウンドで実行されません。
CLR_CELL_ MONITOR_ DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「セル詳細の消去」操作のステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
COPY_DATA_ MAX_WAIT	デフォルトで最小値は 180000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドで「データのコピー」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「データのコピー」ジョブはバックグラウンドで実行されません。
COPY_DATA_ MONITOR_ DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「データのコピー」ジョブのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
PUSH_DATA_ MONITOR_ DELAY	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	「データのプッシュ」ジョブのステータスを確認するときのミリ秒の間隔。
PUSH_DATA_ MAX_WAIT	デフォルトである最小値は 180,000 ミリ秒(3 分)です。これより低い値に設定されると、値は無視され、プロパティにはデフォルト値が設定されます。	バックグラウンドで「データのプッシュ」ジョブを実行する前のミリ秒の待機間隔。このプロパティが設定されていないと、「データのプッシュ」ジョブはバックグラウンドで実行されません。

PROPERTY_ NAME Column	プロパティ値	説明
JOB_STATUS_ MAX_AGE	値をミリ秒単位で指定します。デフォルト値は4日間です(ミリ秒で設定します)。最小値はありません。	Planningによってデータベース・テーブル HSP_JOB_STATUS から削除されるまでの完了ジョブ・レコードの最大残存期間。Planningではジョブ・レコードを30分ごとに確認します。 たとえば、プロパティ値を60,000(1分)に設定していて、ジョブが3:00に完了し、Planningでジョブ・レコードが3:01に確認された場合、完了ジョブ・レコードはPlanningによって削除されます。 完了ジョブ・レコードが除去されると、パフォーマンスが改善されます。

4 「保存」をクリックして、変更を確認します。

ビジネス・ルールの起動ログ・プロパティの設定

アプリケーション・プロパティを設定して、Calculation Manager のビジネス・ルールを起動したときにロギングを有効にできます。

注： ログに書き込まれるメッセージのレベルは、ODL logging.xml ファイルで指定されているロギング・レベルによって決まります。ODL メッセージ・タイプとロギング・レベルの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

ロギングを有効に設定できるアプリケーション・プロパティがあります：

- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED:** Calculation Manager のビジネス・ルールが実行されたときにロギングを有効にし、次の2つのプロパティが true に設定されているかどうかを確認します。このプロパティのデフォルト設定は TRUE です。
- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES:** true に設定すると、ランタイム・プロンプト値がログに記録されます。このプロパティのデフォルト設定は FALSE です。
- **BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT:** true に設定されている場合、Essbase に送信される計算スクリプトがログに記録されます。このプロパティのデフォルト設定は FALSE です。

▶ Calculation Manager ビジネス・ルールの起動ロギング・プロパティを設定するには：

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 2 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。

3 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に値(True または False)を入力します:

- BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED
- BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUES
- BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIPT

4 「保存」をクリックして、変更を確認します。

これらのプロパティでロギングが有効に設定されている場合は、次のファイルがログ・ファイル・ディレクトリに書き込まれます:

- Planning_CalcLaunch.log ファイルには、ビジネス・ルール起動の開始時刻および終了時刻、ユーザー、実行時プロンプト値、および計算スクリプトについての情報が記録されます。
- Planning_CalcExecution.log ファイルには、ビジネス・ルールの実行中に発生するその他の例外を記録されます。
- Planning_CalcDeploy.log ファイルには、デプロイ中に発生するエラーが記録されます。

データ検証プロパティの設定

このアプリケーションで、アプリケーションのデータ検証ルール・プロパティを設定できます。MAX_VALIDATION_RECORDS では、フォームに表示される「データ検証メッセージ」ペインに表示する検証失敗エントリの最大数を指定できます。エラー数がこの制限を超えると、優先度が下位のルールのエントリが削除されます。「移動しない」に設定されたルールなど、優先度が上位のエラーは、残されず。VALIDATION_CACHE_SIZE では、パフォーマンス向上のためにキャッシュするデータ検証ルールの最大数を指定できます。データ検証ルールの作成については、[第 8 章「データ検証の管理」](#)を参照してください。

▶ データ検証のプロパティを設定するには:

1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。

2 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。

3 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行にプロパティを入力し、「プロパティ値」に次の値を入力します。

- MAX_VALIDATION_RECORDS: 「データ検証メッセージ」ペインに表示するレコードの最大数。デフォルト設定は 100 です。
- VALIDATION_CACHE_SIZE: キャッシュできるデータ検証ルールの最大数。デフォルト設定は 10,000 です。

4 「保存」をクリックして、変更を確認します。

セル内のテキスト値およびコメントの最大長の設定

Oracle Hyperion Planning User's Guide に説明しているように、ユーザーはセル・テキスト値およびコメントをフォーム・セルに追加できます。デフォルトでは、各セルのテキストに使用できるシングルバイトの最大文字数は 255 で、コメントに使用できる最大文字数は 1,500 です。データベースでは、デフォルトで列データ・タイプが `varchar(255)` および `varchar(2,000)` に設定されます。

セル・テキストまたはコメントに追加の文字を表示する必要がある場合、これらの Planning アプリケーション・プロパティをアプリケーションで必要な最大長に設定できます

- `MAX_CELL_TEXT_SIZE`: データ・タイプがテキストに設定されたセル内に入力された値
- `MAX_CELL_NOTE_SIZE`: セルに追加されたコメント

この設定を 2,000 より大きい値に更新する場合は、データベースに対応する変更を加える必要があります。セル・テキストの最大文字数を大きくする場合、変更後のサイズをサポートするようにデータベースの列サイズまたはタイプを変更する必要があります(大きいセル・テキスト・サイズに合わせて列タイプを CLOB、NCLOB、TEXT または NTEXT に変更すると、パフォーマンスに影響を及ぼす場合があります。このような変更は、大きいセル・テキスト・エントリが必要なアプリケーションでのみ実行してください)。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。

▶ セル内のテキスト値およびコメントの最大長を設定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 2 「アプリケーション・プロパティ」を選択し、Planning アプリケーションのプロパティと値を設定します。
- 3 「追加」をクリックしてプロパティを追加し、空白行に次のいずれかのプロパティを入力します:
 - `MAX_CELL_TEXT_SIZE`
 - `MAX_CELL_NOTE_SIZE`
- 4 「プロパティ値」に各セルのテキスト値またはコメントとして入力できるシングルバイトの最大文字数を示す値を入力します。
- 5 **オプション**: 両方のプロパティを更新する場合は、それぞれのプロパティに対して **手順 3** および **手順 4** を繰り返します。
- 6 「保存」をクリックして、変更を確認します。
- 7 Planning サーバーを停止して、再起動します。
- 8 データベースをバックアップしてから、このプロパティで指定した変更したサイズをサポートするようにデータベースの列サイズまたはタイプを更新します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。

配置された Planning アプリケーション内からの次元の管理

デフォルトでは、管理者は Performance Management Architect の次元とメンバーを管理します。ただし、EDIT_DIM_ENABLED プロパティを追加および有効化すると、管理者は Performance Management Architect 内からではなく、配置された Planning アプリケーションからのみ次元を管理できます。

EDIT_DIM_ENABLED プロパティを使用するには、37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」の手順を使用してそれを追加し、その値を true に設定します。

注意 このプロパティを追加および設定する場合、次元およびメンバーを変更してから、アプリケーションを Performance Management Architect から再配置します。すべての変更は Performance Management Architect から配置されたコンテンツにより上書きされます。

Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用

現在のリリースにアップグレードした後で、以前の Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能を使用する場合、そのリリースのインタフェースおよび機能を使用するように ORACLE_ADF_UI アプリケーション・プロパティを追加できます。Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能に戻すには、アプリケーション・プロパティ ORACLE_ADF_UI (37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」で説明しています)を追加し、その値を false に設定します。現在のリリースのインタフェースと機能に戻すには、プロパティの設定を true に変更するか、そのプロパティを削除します。

注： 現在のリリースの新機能は、ORACLE_ADF_UI が true に設定されていないと使用できません。ORACLE_ADF_UI を false に設定すると、Planning リリース 11.1.2.1 の機能が有効になります。

Planning リリース 11.1.2.1 のドキュメントにここでアクセスできます：

http://docs.oracle.com/cd/E17236_01/index.htm

注意 このプロパティを使用する予定がある場合は、Planning アプリケーションで変更を行う前に設定することをお勧めします。現在のリリースで新しい機能を操作してから以前のインタフェースに戻すと、変更が失われる場合があります。このプロパティを繰り返して変更することはお勧めしません。

EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス

EPM Workspace 環境で Planning を操作します。デフォルトの EPM Workspace URL は、`http://Webサーバー:ポート/workspace/`で、Webサーバーは Web サーバー・コンピュータ・ホスト名、ポートは Web サーバー・ポート番号です。たとえば、EPM System Configurator で構成した Oracle HTTP サーバー・インスタンスを使用する場合は 19000 になります。URL をすべての Planning ユーザーに通信して EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセスを可能にします。

EPM Workspace のインストールと構成については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

▶ EPM Workspace へログオンし、Planning へアクセスするには:

- 1 Web サーバーが開始され、Web アプリケーション・サーバーがサービス・パネルで実行中であることを確認します。
- 2 ブラウザで、EPM Workspace 「ログオン」 ページへの URL を入力します。
- 3 ユーザー名を入力します。
- 4 パスワードを入力します。
- 5 「ログオン」 をクリックします。
- 6 EPM Workspace で、「ナビゲート」、「アプリケーション」、「Planning」の順に選択します。Planning アプリケーションを選択します。プロンプト表示された場合は、ログオン情報を入力します。Planning では、パスワードの非 ASCII 文字はサポートされません。

複数の Planning アプリケーションへ同時にログオンし、EPM Workspace のタブでアプリケーション間を移動できます。アプリケーション名はウィンドウの下にタブとして表示され、タブをクリックすることでアプリケーション間を移動できます。また、EPM Workspace のタブで同じアプリケーションを 2 つ表示することもできます。2 つ以上のブラウザのインスタンスを開いて EPM Workspace にログオンする場合、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace User's Guide の説明に従い、EPM Workspace URL を追加する必要があります。

Performance Management Architect アプリケーションの管理タスクに関する情報は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

Planning はさまざまなネットワーク回線容量のユーザーをサポートします。56K ダイアルアップ接続は、Planning サーバーの HTTP 圧縮を使用することで強化できます。

注: この手順に従って、Planning には EPM Workspace の URL からのみアクセスしてください。

Planning ユーティリティの操作

サブトピック

- [Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制](#)
- [Planning ユーティリティのテキスト・ファイルについて](#)
- [UNIX での Planning ユーティリティの実行](#)
- [EPM Oracle インスタンスについて](#)

管理者は Planning とともに次のユーティリティを使用できます。

注： これらのユーティリティは Planning サーバー上のファイルを必要とするので、ユーティリティをクライアントからではなく Planning サーバーから実行する必要があります。

表 18 Planning ユーティリティ

ユーティリティ	説明	参照
BroadcastMessage	ブロードキャスト・メッセージを使用して、現在アプリケーションにログオンしているすべての Planning ユーザーにテキスト・メッセージを送信します。	82 ページの「ブロードキャスト・メッセージの使用方法」
CalcMgrCmdLineLauncher	Calculation Manager で作成されたビジネス・ルールとルールセットを起動します。	200 ページの「ユーティリティによるビジネス・ルールの起動」
CubeRefresh	アプリケーションの各プラン・タイプに対し Essbase にデータを保管するのに使用されるアプリケーション・データベースを作成およびリフレッシュします。	374 ページの「Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作」
DeleteSharedDescendant	指定したメンバーの子孫である共有次元メンバーを削除します。	374 ページの「Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作」
ExportSecurity	ファイルへの Planning アクセス権限をエクスポートして、アプリケーション間でのアクセス権限のエクスポートおよびインポートを可能にします。	67 ページの「アクセス権のエクスポート」
FormDefUtil	Planning アプリケーション間でエクスポートまたはインポートにより、あるいは XML ファイルからフォーム定義を移動します。	166 ページの「フォームのインポートとエクスポート」
HBRMigrateSecurity	ビジネス・ルールの起動のアクセス権限を、Oracle Hyperion Business Rules から Planning の Calculation Manager ビジネス・ルールへ移行します。	77 ページの「ビジネス・ルール・セキュリティの移行」
HspUnlockApp	HSP_LOCK テーブルのすべてのレコードを消去します。	81 ページの「アプリケーションのロック解除」
ImportFormDefinition	フォーム定義をテキスト・ファイルから Planning フォームヘインポートします。	205 ページの「フォーム定義のインポート」

ユーティリティ	説明	参照
ImportSecurity	ユーザーまたはグループのアクセス権限をテキスト・ファイルから Planning データ・フォームへロードします。	64 ページの「アクセス権のインポート」
MaintenanceMode	メンテナンス中に Planning アプリケーションへのアクセス権を付与および取り消します。	291 ページの「MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限」
アウトライン・ロード	Planning アプリケーションのメタデータおよびデータをロードします。	97 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティの操作」
PasswordEncryption	パスワードに関するメッセージを表示する Planning ユーティリティの実行時にパスワード・プロンプトを非表示にします。	50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」
ProvisionUsers	Shared Services Console の Planning ユーザー、グループおよび役割が Planning アプリケーションおよび Essbase と同期されず。	75 ページの「プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期」
PushData	レポート・アプリケーションへのデータのプッシュをスケジュールします。	300 ページの「ユーティリティを使用したデータのプッシュ」
SortMember	エンティティ、勘定科目、シナリオ、バージョン、ユーザー定義のカスタム次元で次元メンバーをソートします。	374 ページの「Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作」
TaskListDefUtil	Planning アプリケーション間でタスク・リスト定義をエクスポートまたはインポートにより、あるいは XML ファイルからタスク・リスト定義を移動します。	280 ページの「タスク・リストのインポートとエクスポート」

Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制

パスワードを催促する Planning ユーティリティを実行する際、管理者はバッチ・モードでユーティリティを実行する場合などで、オプションを利用してパスワード・プロンプトを非表示にできます。パスワード・プロンプトの抑制を使用可能にするには、PasswordEncryption ユーティリティを使用してパスワードを暗号化された形式で保管するファイルを作成します。ファイルを設定したら、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてパスワード・プロンプトをスキップし、暗号化されたファイルからパスワードを使う [-f:passwordFile] オプションで Planning ユーティリティを実行できます。各パスワード・ファイルには 1 つのパスワードが含まれ、ユーティリティを実行する際に指定する場所へ保管されます。

PasswordEncryption ユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用します。デフォルトでは、planning1 ディレクトリにインストールされます(完全パスについては51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください)。

▶ Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制するには:

- 1 planning1 ディレクトリから次のコマンドを入力します(ただし、passwordFile は、パスワード・ファイルの完全なファイル・パスおよびファイル名です):

- **Windows:** PasswordEncryption.cmd passwordFile
- **UNIX:** PasswordEncryption.sh passwordFile

2 催促された場合は、パスワードを入力します。

マスクされたパスワードは暗号化され passwordFile で指定した場所へ保管されます。他の Planning ユーティリティのパスワード・プロンプトでは、コマンド・ラインの最初のパラメータとして [-f:passwordFile] を使用して、プロンプトをスキップし、passwordFile で指定したパスワード・ファイルから暗号化されたパスワードを使用します。

Planning ユーティリティのテキスト・ファイルについて

これらの Planning ユーティリティでは、FormDefUtil、SampleApp_Data および TaskListDefUtil の UTF-8 フォーマットで保存する必要があるテキスト・ファイルを使用します。その他のユーティリティではテキスト・ファイルを使用せず、特定のエンコードも必要ありません。

たとえば、FormDefUtil ユーティリティのテキスト・ファイルをメモ帳で更新すると、ファイルはデフォルトで正しいエンコード・フォーマットで保存されます。エンコード・オプションを変更したり、ANSI や Unicode などの別のエンコード・フォーマットを使用してテキスト・ファイルを作成したりすると、ユーティリティは正しく動作しません。テキスト・ファイルを保存する際に、UTF-8 エンコードが選択されていることを確認してください。

UNIX での Planning ユーティリティの実行

UNIX で Planning ユーティリティを実行するには、適切な権限が必要です。たとえば、ユーティリティを実行するディレクトリにおける実行権限、およびログ・ディレクトリへの読取りおよび書込み権限が必要です。

EPM Oracle インスタンスについて

EPM Oracle インスタンスは Oracle Enterprise Performance Management System 製品の構成時に定義されます。このガイドでの EPM Oracle インスタンスの場所は EPM_ORACLE_INSTANCE です。EPM Oracle インスタンスのデフォルト場所は MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1 です。デフォルトでは、Planning ユーティリティは EPM_ORACLE_INSTANCE/Planning/planning1 ディレクトリにインストールされ、Planning の .log ファイルは EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning ディレクトリに書き込まれます。

アプリケーション・サーバーの使用方法

アプリケーション・サーバーを通して Planning アプリケーションにアクセスできます。アプリケーション・サーバーをワークステーションで登録する必要があります。

インスタンスとクラスタの更新について

アプリケーションの作成時に、インスタンス(クラスタとも呼ばれる)に関連付けられているデータ・ソースを選択します。必要に応じて、EPM System コンフィグレータを使用してクラスタを更新できます。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の Planning クラスタ管理に関する項を参照してください。

Planning および Essbase を閉じる

- ▶ Essbase サーバーを閉じるには:
 - 1 Essbase ウィンドウを最大化します。
 - 2 「Quit」と入力します。

- ▶ Planning Web ページからログオフするには、「ファイル」、「ログオフ」の順に選択します。ログオン・ページに戻ります。

- ▶ Web で Planning を閉じるには、「ファイル」、「終了」の順に選択します。

この章の内容

アクセス権のレベル	53
アクセス権の割当てが可能な Planning の要素	54
アクセス権タイプ	55
次元のアクセス権の使用可能	56
メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て	56
フォームとフォルダへのアクセス権の管理	61
アクセス権のインポート	64
アクセス権をインポートする場合のパフォーマンス向上	67
アクセス権のエクスポート	67
アクセス権のレポート	70
セキュリティ・フィルタの管理	75
プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期	75
ユーザーとグループ ID の移行	76
ビジネス・ルール・セキュリティの移行	77
古いユーザー記録の削除	78
Financial Reporting でのアクセス権の設定	79

アクセス権のレベル

Planning アプリケーション要素にアクセス権を設定すると、権限のないユーザーによるデータの表示または変更を防止します。アクセス権はこれらのレベルで設定できます。

- 外部ユーザー・ディレクトリによるプロビジョニングされたユーザーおよびグループの認証。Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide とその Planning に関する情報を参照してください。
- アプリケーション・グループ、アプリケーション、次元、ユーザー、およびグループを管理するアクセス権を設定する Oracle Hyperion Shared Services の役割。たとえば、特定のタスクを実行するには、ユーザーにはこれらの Shared Services 役割が必要となります。
 - プロジェクト・マネージャ: Shared Services でアプリケーション・グループを作成および管理します。
 - プロビジョニング・マネージャ: アプリケーションでユーザーおよびグループを設定します。

- 次元編集者: Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理に必要です。Performance Management Architect では、Planning のアプリケーション管理オプションのアクセスを許可します。Planning アプリケーション管理では、Planning の Planning アプリケーション管理オプションへのアクセスを許可します(Planning アプリケーション作成者の役割と組み合わせて)。
- Planning アプリケーション作成者: Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理に必要です。Performance Management Architect では、ユーザーに Planning アプリケーションおよび Performance Management Architect 一般アプリケーションの作成を許可します。Planning アプリケーション管理では、Planning の Planning アプリケーション管理オプションへのアクセスを許可します(次元編集者の役割と組み合わせて)。これらの役割の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。
- ユーザー定義の次元を含む、次元。次元プロパティの「セキュリティの適用」を選択することにより、メンバーに対してアクセス権を割り当てます。「セキュリティの適用」の設定を省略またはクリアすると、すべてのユーザーが次元のメンバーにアクセスできるようになります。デフォルトでは、勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、年、期間、通貨の各次元のアクセス権が使用可能です。
- アプリケーションごとに異なるユーザーおよびグループ。「アクセス権の割当て」を使用して、Planning アプリケーション要素にアクセス権を割り当てます。

アクセス権の更新後、アプリケーションをリフレッシュして Essbase セキュリティ・フィルタを更新します。

アクセス権の割当てが可能な Planning の要素

アクセス権を次に割り当てることができます。

- シナリオ・メンバー
- バージョン・メンバー
- 勘定科目メンバー
- エンティティ・メンバー
- ユーザー定義カスタム次元のメンバー
- ビジネス・ルールへの起動権限
- フォーム
- フォーム・フォルダおよびビジネス・ルール・フォルダ
- タスク・リスト

ユーザーのユーザー・タイプを変更すると、Essbase データベースがリフレッシュされるまで、ユーザーは Smart View と Essbase アプリケーションで読取り/書込みのフルアクセスを保有することになります。データベースがリフレッシュされると、適切なアクセス権がユーザーに適用されます。

アクセス権タイプ

次元メンバー、フォームまたはタスク・リストに対する、特定のユーザーまたはグループのアクセス権には次が含まれます:

- 「読取り」: 表示を許可します
- 「書込み」: 表示および変更を許可します
- 「なし」: アクセスを禁止します。デフォルトのアクセス権は「なし」です。

どの Calculation Manager ビジネス・ルールを誰が起動するかを次のように設定できます。

- 「起動」: 起動の権限を許可します

注: 表示ユーザー・タイプには、次元メンバーへの書込み許可がないため、メンバー、次元、メンバー範囲または次元間実行時プロンプト・タイプを含む実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを起動できません。その他の実行時プロンプト(たとえば日付タイプ)のあるビジネス・ルールを起動することは可能です。

- 「起動しない」: 起動を許可しない権限。ユーザーがあるグループに属する理由からビジネス・ルールの起動アクセス権を継承しているが、他のグループに属する理由から起動を許可しないアクセス権も割り当てられている場合は、より制限的である「起動を許可しない」権限が優先します。

個別ユーザーおよび各グループにアクセス権を指定できます。ユーザーをグループに割り当てる場合、ユーザーはグループへのアクセス権が必要になります。個人のアクセス権とユーザーが属するグループのアクセス権に矛盾がある場合は、ユーザーに割り当てられたアクセス権が優先します。

アクセス権の継承

ユーザーまたはグループのアクセス権は継承によって決定されることがあります。メンバーの子または子孫がそのアクセス権を継承する原因となる属性を指定できます。メンバーに割り当てられたアクセス権は、継承されたアクセス権に優先します。アクセス権設定で、メンバーを含めるかまたは除外できます。

表 19 アクセス権の継承オプション

継承オプション	アクセス権の割当て
「メンバー」	現在選択されているメンバーのみ。
「子」	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー。
「iChildren」	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー。
「子孫」	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子孫メンバー。
「iDescendant」	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子孫メンバー。

アクセス権の評価法

アクセス権を評価する場合、Planning は次の順序で優先権を与えます。

1. 役割レベルのセキュリティ。管理者ユーザーにはすべてのアプリケーション要素に対するアクセス権が与えられます(「一括割当て」機能を使用するアクセス権の割当てが必要となる、一括割当てを除く)。
2. 具体的にユーザーに割り当てられたアクセス権である、対話型ユーザーおよびプランナ・ユーザー・タイプ。
3. グループに属することで割り当てられたアクセス権。
4. 親レベルの割当て(たとえば、親メンバーまたはフォルダへのアクセス)。

次元のアクセス権の使用可能

「次元プロパティ」タブを使用し、ユーザー定義カスタム次元メンバーへのアクセス権を設定します。

▶ 次元のアクセス権を使用可能にするには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、変更する次元を選択します。
- 3 「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
- 4 「次元プロパティ」で、「セキュリティの適用」を選択し、メンバーのアクセス権の設定を可能にします。

注: このオプションを選択しないと、次元にはセキュリティが設定されず、ユーザーはそのメンバーに制限なしにアクセスできます。56 ページの「次元のアクセス権の使用可能」を参照してください。

- 5 「保存」をクリックします。

「リフレッシュ」をクリックし、前に保存した値に戻します。

メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て

ユーザー定義のカスタム次元メンバーにアクセス権を割り当てる前に、次元の「プロパティ」タブで「セキュリティの適用」チェック・ボックスを選択する必要があります。56 ページの「次元のアクセス権の使用可能」を参照してください。

▶ メンバーまたはビジネス・ルールにアクセス権を割り当てるには:

- 1 メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:
 - **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「次元」を選択し、続いて次元およびメンバーを選択します。
 - **ビジネス・ルールの場合:** 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。
- 2 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

- 3 **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。

注: ユーザーまたはグループの変更された ID、あるいはそのユーザー・ディレクトリ内の位置を Shared Services Console から Planning に移行する際に、「移行 ID」ボタンは使用しないでください。かわりに、UpdateUsers コマンドライン・ユーティリティを実行してください。

- 4 **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
- 5 **アクセス権の追加、変更または除去を行います。**

57 ページの「アクセス権の追加」、58 ページの「アクセス権の編集」および 59 ページの「アクセス権の削除」を参照してください。

アクセス権の追加

選択したメンバーまたはビジネス・ルールにアクセスできるユーザーまたはグループを指定できます。

▶ メンバーまたはビジネス・ルールにアクセス権を割り当てるには:

- 1 **メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:**

- **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。続いて次元およびメンバーを選択します。
- **Calculation Manager のビジネス・ルールの場合:** 「管理」メニューから「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。

- 2 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

- **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

- 3 「アクセス権の追加」をクリックします。

- 4 選択したメンバーまたはビジネス・ルールにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。

- 「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
- 複数ページのユーザーまたはグループが存在する場合、「ページ」でページ番号を入力し、「実行」をクリックします。
- 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。

- 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。

5 メンバーのオプション: 関係を選択します。

たとえば、「子」を選択して、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。

6 次のいずれかのオプションを選択します:

- 「起動」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。
- 「起動しない」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。

7 選択されたユーザーまたはグループは、アクセス権のタイプを選択し、「追加」をクリックします。

8 「閉じる」をクリックします。

アクセス権の編集

「次元」タブの「セキュリティ」列の「表示」をクリックすると、メンバーの「アクセス権の割当て」ページにアクセスできます。

▶ メンバーまたは Calculation Manager のビジネス・ルールのアクセス権を変更するには:

1 メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:

- **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「次元」を選択し、続いて次元およびメンバーを選択します。
- **Calculation Manager のビジネス・ルールの場合:** 「管理」メニューから「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。

2 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

- **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

3 「アクセス権の編集」をクリックします。

4 選択したメンバーまたはビジネス・ルールには、表示されたユーザーまたはグループのアクセス権のタイプを選択します。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

ビジネス・ルールのみ:

- 「起動」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。

- 「起動しない」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。

5 メンバーのオプション: 関係を選択します。

たとえば「子」を選択し、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。

6 「設定」をクリックします。

7 「閉じる」をクリックします。

アクセス権の削除

▶ メンバーまたは Calculation Manager のビジネス・ルールのアクセス権を除去するには:

1 メンバーまたはビジネス・ルールを選択します:

- **メンバーの場合:** 「管理」、「管理」、「次元」を選択し、続いて次元およびメンバーを選択します。
- **Calculation Manager のビジネス・ルールの場合:** 「管理」メニューから「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。ビジネス・ルールを含むフォルダを選択し、ビジネス・ルールを選択します。

2 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

- **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

3 選択したメンバーまたはビジネス・ルールのアクセス権を除去するユーザーおよびグループを選択します。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

4 「アクセス権の削除」をクリックします。

5 「OK」をクリックします。

6 「閉じる」をクリックします。

共有メンバーへの有効なアクセス権について

共有メンバーに対して直接アクセス権を割り当てることはできません。共有メンバーは、その基本メンバー、親または祖先からアクセス権を継承します。

Planning により、メンバーのアクセス権継承関係に基づき、最初にユーザー、次にグループ、という順でアクセス権が各レベルで確認されます。複数のアクセス

権が存在する場合、最も制限の少ないアクセス権が適用されます(たとえば、書込みアクセスは読取りアクセスより優先されます)。

この例は、「データベースのリフレッシュ」または「データベースの作成」ページで「セキュリティ・フィルタ」および「共有メンバー」オプションが選択されて、データベースがリフレッシュまたは作成された場合に、基本メンバーおよびその共有メンバーへの有効なアクセス権を決定する方法について示します(84 ページの「アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ」を参照してください)。

サンプルのエンティティ・メンバー

親エンティティ	子エンティティ
米国	
	CA (ベース)
	NY
West	
	CA (共有)
	NV
営業地域 1	
	CA (共有)

表 20 共有メンバーへの継承されたアクセス権の例

ケース	アクセス権	基本および共有メンバー CA への有効なアクセス権	説明
ケース 1	CA(ベース) = なし iDescendants (West) = 読取り	読取り	「読取り」は「なし」よりも制限が少ないため、CA は West の親から「読取り」アクセス権を継承します。
ケース 2	iDescendants (米国) = なし iDescendants (West) = 読取り iDescendants (営業地域 1) = 書込み	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は営業地域 1 の親から「書込み」アクセス権を継承します。
ケース 3	iDescendants (米国) = 書込み iDescendants (West) = なし iDescendants (営業地域 1) = 読取り	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は米国の親から「書込み」アクセス権を継承します。

フォームとフォルダへのアクセス権の管理

フォームとフォルダへのアクセス権の割当て

管理者はフォーム、フォーム・フォルダおよび Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダにアクセス権を割り当てることができます。(ビジネス・ルールおよびメンバーに対するアクセス権の割当てについては、55 ページの「アクセス権タイプ」および 56 ページの「メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て」を参照してください。)

原則:

- **フォーム:**
 - プランナおよび対話型ユーザーは、アクセス権のあるフォームのみ表示またはデータ入力することが可能です(また、アクセス権のあるメンバーに対してのみ作業を行うことが可能です)。
 - 管理者と対話型ユーザーはフォームをデザインできます。
 - 対話型ユーザーは自分が作成した、または管理者がアクセス権を割り当てたフォームにアクセスできます。
 - 管理者はすべての次元メンバーおよびすべてのフォームへの書込みアクセス権を持ちます。
- **ビジネス・ルール:** プランナは、起動アクセス権を割り当てられているビジネス・ルールのみを表示および起動できます。
- **フォーム・フォルダおよびビジネス・ルール・フォルダ:**
 - フォーム・フォルダへのアクセス権を割り当てられているプランナは、特定のアクセス権が割り当てられていない限り、フォルダのフォームにアクセスできます。同様に、特定のアクセス権が割り当てられていない限り、プランナにはアクセス権を割り当てられているフォルダにある Calculation Manager のビジネス・ルールへの起動アクセス権があります。
 - フォルダに対してアクセス権を割り当てる場合、そのフォルダ内にあるすべてのフォルダはそのアクセス権を継承します。
 - フォーム・フォルダに特定のアクセス権を割り当てる場合(たとえば、「なし」または「書込み」)、そのアクセス権はその親フォルダのアクセス権に優先します。たとえば、あるユーザーに「なし」アクセス権が割り当てられている Folder2 を含む Folder1 に対する「書込み」アクセスが割り当てられている場合、ユーザーは Folder1 を開くことができますが、Folder2 を見ることはできません。
 - Calculation Manager のフォルダに対して特定のアクセス(たとえば起動)を割り当てる場合、そのアクセス権はその親フォルダのアクセス権に優先します。たとえば、あるユーザーに「起動しない」アクセス権が割り当てられた RulesFolder2 を含む RulesFolder1 の「起動」アクセス権が割り当てられている場合、ユーザーは RulesFolder1 を開くことはできますが、RulesFolder2 を見ることはできません。
 - ユーザーが、「書込み」アクセス権を割り当てられている Form1 というフォームを含む Folder1 というフォーム・フォルダに対し、「なし」アクセ

ス権が割り当てられている場合、ユーザーは Folder1 と Form1 の両方を見ることができます。

- ユーザーが、「起動」アクセスを割り当てられている Rule1 というビジネス・ルールを含む RulesFolder1 という Calculation Manager フォルダに対し、「起動しない」アクセス権を割り当てられている場合、ユーザーは RulesFolder1 および Rule1 の両方を見ることができます。

手順については、[62 ページの「フォームとフォルダへのアクセス権の割当て」](#)を参照してください。

フォームとフォルダへのアクセス権の割当て

▶ アクセス権をフォーム、フォーム・フォルダおよび Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダに割り当てるには:

1 フォームまたはフォルダを選択します。

- フォームまたはフォルダについては、[163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」](#)を参照してください。
- ビジネス・ルール・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。
- ビジネス・ルールの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むビジネス・ルール・フォルダを開き、ルールを選択します。

一度に1つのフォーム、ビジネス・ルールまたはフォルダのみにアクセス権を割り当てることができます。

2 「アクション」を選択して、「アクセス権の割当て」を選択します。

- オプション: ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

3 「アクセス権の追加」をクリックして、フォームまたはフォルダにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。

- 「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
- ユーザーとグループのページが複数におよぶ場合、ページ番号を「ページ」に入力して、「実行」をクリックします。
- 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。
- 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。

- 4 「アクセス権タイプ」には、フォームまたはフォルダに対してユーザーまたはグループに割り当てられているアクセス権の種類を選択します。

ビジネス・ルールまたはそのフォルダのみ:

- 「起動」をクリックし、選択したユーザーとグループによる選択したビジネス・ルールの起動を許可します。
- 「起動しない」をクリックし、選択したユーザーとグループが選択したビジネス・ルールを起動するのを防ぎます。

- 5 「追加」をクリックします。

- 6 「閉じる」をクリックします。

フォームとフォルダへのアクセス権の変更

▶ フォームとフォルダを使用および変更できるユーザーを変更するには:

- 1 フォームまたはフォルダを選択します。

- フォームまたはフォルダについては、163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。

- 2 「アクセス権の割当て」をクリックします。

- オプション: ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

- 3 アクセス権を変更するユーザーまたはグループを選択し、「アクセス権の編集」をクリックします。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

- 4 「アクセス権タイプ」には、フォームまたはフォルダに対してユーザーまたはグループに割り当てられているアクセス権の種類を選択します。

- 5 「設定」をクリックします。

- 6 「閉じる」をクリックします。

▶ フォームまたはフォルダからアクセス権を除去するには:

- 1 フォームまたはフォルダを選択します。

- フォームまたはフォルダについては、163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。

- Calculation Manager のビジネス・ルールの場合は、「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」の順に選択します。ビジネス・ルールを含むビジネス・ルール・フォルダを開き、ルールを選択します。

2 「アクセス権の割当て」をクリックします。

- オプション: ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

3 アクセス権を除去するユーザーまたはグループを選択し、「アクセス権の削除」をクリックします。

「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。

4 「OK」をクリックします。

アクセス権のインポート

ImportSecurity ユーティリティを使い、ユーザーまたはグループのアクセス権をテキスト・ファイルから Planning にロードできます。(ユーザーまたはグループを追加するには、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。)アクセス権をインポートすることにより、インポートされたメンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、Calculation Manager のビジネス・ルールおよび Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダの既存アクセスの割当てが上書きされます。その他の既存アクセス権は影響を受けません。SL_CLEARALL パラメータは、既存のアクセス権をすべて消去します。これは、他のパラメータと併用して既存のアクセス権を入れ替えることが可能です。67 ページの「アクセス権のエクスポート」も参照してください。

ImportSecurity ユーティリティでは、アクセスを割り当てる前に、Planning アプリケーションにおいてユーザーをプロビジョニングしておく必要があります。例:

- TotPlan アプリケーションにおいてユーザー mrauch がプロビジョニングされている場合、このユーティリティで次のレコードを使用して mrauch にアクセス権が割り当てられます:

```
mrauch, member1, READWRITE, MEMBER
```

- ユーザー ehennings がアプリケーションにおいてまだプロビジョニングされていない場合、次のレコードはロードに失敗します:

```
ehennings, member1, READWRITE, MEMBER
```

ExportSecurity ユーティリティを使用し、SecFile.txt ファイルを自動的に作成して、このファイルからアクセス権をインポートできます。次のガイドラインを使用して、SecFile.txt ファイルを手動で作成することも可能です:

- テキスト・ファイル SecFile.txt の名前を付け、planning1 ディレクトリに保存する必要があります(完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください)。
- すべてのユーザー、グループおよびアーティファクトは、アプリケーションで定義されている必要があります。
- アクセス権をユーザー定義のカスタム次元にインポートする前に、アクセス権が設定されるよう「セキュリティの適用」を選択する必要があります(56 ページの「次元のアクセス権の使用可能」を参照してください)。
- SecFile.txt ファイルの各行に、アクセス権を指定します。

各行に、次のいずれかの区切り文字で区切られたこれらのアイテムが含まれていなければなりません。カンマ(,)、タブ、セミコロン(;)、パイプ(|)、コロンの(:)、スペース()。デフォルトはカンマです。

アイテム	説明
ユーザー名またはグループ名	<p>Shared Services Console で定義されたユーザーまたはグループ名。</p> <p>アクセス権情報をユーザーと同名のグループにインポートするには、この情報を次のグループに関連する SecFile.txt ファイルの行に追加します: sl_group</p> <p>例:</p> <pre>admin,member1,READ,MEMBER admin,member1,READ,MEMBER,SL_GROUP</pre>
アーティファクト名	<p>インポートされたアクセス権のアーティファクト名(たとえばメンバー、フォーム、タスク・リスト、フォルダまたは Calculation Manager ビジネス・ルール)。例: Account1。</p> <p>アーティファクト名に区切り文字として使用している文字が含まれる場合は、名前を二重引用符で囲みます。たとえば、区切り文字としてスペースを使用している場合、「South America」を次のように二重引用符で囲みます:"South America"。</p>
アクセス権	<p>読取り、読取り書込みまたはなし。ユーザー/メンバーの組合せに重複行がある場合は、読取り書込みアクセス権のある行が優先となります。たとえば次の行の場合:</p> <pre>User1,Member1,READ,@ICHLIDREN User1,Member1,READWRITE,@ICHLIDREN</pre> <p>User1 の Member1 へのアクセス権は読取り書込みとして適用されます。</p> <p>Calculation Manager のビジネス・ルールおよびフォルダのみ: 起動アクセス権を「なし」または「起動」として指定します。</p>
Essbase アクセス・フラグ	<p>@CHILDREN、@ICHLIDREN、@DESCENDANTS、@IDESCENDANTS および MEMBER。</p> <p>これらの関数のセキュリティ実装は、Essbase と同様です。</p> <p>注: タスク・リストの場合、MEMBER のみが使用できます。フォルダの場合、@IDESCENDANTS のみが使用できます。</p>

アイテム	説明
アーティファクト・タイプ	<p>メンバー以外のアーティファクトでは、どのアーティファクトにセキュリティをインポートするかをアーティファクト・タイプ識別子によって区別します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● SL_FORM - フォーム ● SL_COMPOSITE - 複合フォーム ● SL_TASKLIST - タスク・リスト ● SL_CALCRRULE - Calculation Manager ビジネス・ルール ● SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ ● SL_CALCFCOLDER - Calculation Manager のビジネス・ルールが含まれるフォルダ <p>注: ExportSecurity ユーティリティによって、必要となるアーティファクト・タイプ識別子が自動的に SecFile.txt ファイルに追加されます。SecFile.txt ファイルを手動で作成した場合は、アーティファクト・タイプ識別子を追加してください。</p> <p>注: ExportSecurity ユーティリティでは、管理者のタスク・リストへのアクセス権のエクスポートはサポートされないため、このようなレコードはインポート前に SecFile.txt ファイルを手動で追加する必要があります。</p>

ファイルのサンプル行:

```
User1,Account1,READ,@CHILDREN
```

```
Group2,DataForm08,READWRITE,MEMBER,SL_FORM
```

```
User3,TaskList09,READWRITE,MEMBER,SL_TASKLIST
```

```
NorthAmericaGroup,Sales,READWRITE,@IDESCENDANTS,SL_FORMFOLDER
```

▶ アクセス権を Planning にインポートするには:

- 1 planning1 ディレクトリに移動して、ImportSecurity ユーティリティを見つけます(完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください)。
- 2 コマンド・プロンプトで、このコマンド(大文字と小文字が区別されます)、1つのスペース、およびパラメータを入力し、それぞれをカンマで区切ります。パラメータは二重引用符で囲みます:

```
ImportSecurity [-f:passwordFile] "appname,username,[delimiter],  
[RUN_SILENT],[SL_CLEARALL]"
```

ここで:

パラメータ	説明
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。 50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」 を参照してください。
appname	アクセス権をインポートする Planning アプリケーションの名前。
username	Planning 管理者ユーザー名。
delimiter	オプション: SL_TAB、SL_COMMA、SL_PIPE、SL_SPACE、SL_COLON、SL_SEMI-COLON。区切り文字が指定されない場合のデフォルトはカンマです。

パラメータ	説明
RUN_SILENT	オプション: ユーティリティを静かに(デフォルト)または進行状況メッセージ付きで実行します。メッセージ付きには0を、メッセージなしには1を指定します。
[SL_CLEARALL]	オプション: 新規のアクセス権をインポートする場合は既存のアクセス権を消去します。大文字でなければなりません。

例:

```
ImportSecurity "app1,admin,SL_TAB,1"
```

すべてのアクセス権を消去するには、次を入力します:

```
ImportSecurity "app1,admin,,,SL_CLEARALL"
```

- 3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。
- 4 ユーティリティの実行後、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning ディレクトリのログ・ファイル importsecurity.log を確認し、結果を検証します完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

アクセス権をインポートする場合のパフォーマンス向上

- ▶ 複数のユーザーのアクセスをインポートする場合は、フル・ネームを使用せずにパフォーマンスを向上させます。
- 1 Planning Web で、「管理」、「アプリケーション」、「設定」を選択します。
 - 2 「拡張設定」を選択し、「実行」、「システム設定」の順にクリックします。
 - 3 「ユーザーのフル・ネームの表示」の選択を解除します。

アクセス権のエクスポート

ExportSecurity ユーティリティを使用し、Planning アクセス権を SecFile.txt ファイルにエクスポートすることで、アプリケーションを越えたアクセス権のエクスポートおよびインポートが可能になります([64 ページの「アクセス権のインポート」](#)を参照)。特定のユーザーまたはグループ(必須パラメータのみを使用する場合はすべてのユーザーとグループ)は、ExportSecurity ユーティリティを使用して次のアーティファクトにアクセス権をエクスポートできます: メンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、ビジネス・ルール、ビジネス・ルール・フォルダ。ExportSecurity は、エクスポートされたアーティファクト・セキュリティがフォーム、複合フォーム、フォーム・フォルダ、タスク・リスト、ビジネス・ルールまたはビジネス・ルール・フォルダのいずれかを識別するアーティファクトのタイプ・フラグを追加します。

注意:

- 必須(オプションではない)パラメータのみを指定する場合、すべてのユーザーとグループのすべてのアーティファクトに対するアクセス権がすべてエクス

ポートされます。メンバー・パラメータを指定することにより、エクスポートに制限を設けることができます(1つのメンバー・ベースのパラメータのみ)。

- オプションのパラメータは、任意の順序で指定できます。
- /S_USER または /S_GROUP のみを使用できますが、両方を使用することはできません。
- /S=searchCriteria パラメータを使い、同名のユーザーおよびグループを指定します。
- ユーティリティを実行すると、エクスポートされたアクセス権が含まれる SecFile.txt という名前のファイルが作成されます。

▶ Planning からアクセス権をテキスト・ファイルにエクスポートするには:

- 1 planning1 ディレクトリに移動します(完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#)を参照してください)。
- 2 コマンド・プロンプトに、次のコマンド(大文字と小文字の区別がある)、1つのスペースおよびパラメータを入力します。各パラメータをカンマで区切ります。

```
ExportSecurity [-f:passwordFile] /A=appname,/U=username, [/S=searchCriteria|/S_USER=user|/S_GROUP=group], [/S_MEMBER=memberName|/S_MEMBER_ID=memberName |/S_MEMBER_D=memberName|/S_MEMBER_IC=memberName|/S_MEMBER_C=memberName], [/DELIM=delim], [/DEBUG=true|false],[/TO_FILE=fileName], [/HELP=Y]
```

ここで:

パラメータ	説明	必須?
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの 「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」 を参照してください。	いいえ
/A= appname	アクセス権をエクスポートする Planning アプリケーションの名前。	はい
/U= username	アプリケーションにログインするための管理者 ID。	はい
/S= searchCriteria	ユーザー名またはグループ名。 /S_USER または /S_GROUP では、このオプションは使用できません。	いいえ
/S_USER= user	指定されたユーザー名。 複数ユーザーの指定またはこのオプションを /S_GROUP または /S=searchCriteria と併用はできません。	いいえ
/S_GROUP= group	指定されたグループ。一致するユーザー名ではなく、一致するグループのみがエクスポートされます。 複数グループの指定またはこのオプションを /S_USER または /S=searchCriteria と併用はできません。	いいえ
/S_MEMBER= MemberName	指定されたメンバー。 1 メンバー・ベースのパラメータのみを指定できます。	いいえ

パラメータ	説明	必須?
/S_MEMBER_ID= MemberName	指定されたメンバーとその子孫。	いいえ
/S_MEMBER_D= MemberName	指定されたメンバーの子孫。	いいえ
/S_MEMBER_IC= MemberName	指定されたメンバーとその子。	いいえ
/S_MEMBER_C= MemberName	指定されたメンバーの子。	いいえ
/DELIM= delim	SL_TAB、SL_COMMA、SL_PIPE、SL_SPACE、SL_COLON、SL_SEMI-COLON。 区切り文字が指定されない場合のデフォルトはカンマです。	いいえ
/DEBUG=	true を指定してユーティリティで実行された手順を表示します。デフォルトは false です。	いいえ
/TO_FILE=	SecFile.txt ファイルのパスを指定します。デフォルトでは、ファイルは planning1 ディレクトリに存在します(完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」 を参照してください)。他のパスを指定する場合は二重円記号(バックスラッシュ)を使用します。例: C:\Oracle\SecFile.txt。	いいえ
/HELP=Y	ExportSecurity の構文およびオプションを表示する唯一のパラメータとして指定します。	いいえ

たとえば、Sales という名前のユーザーおよびグループのアクセス権をエクスポートする場合は、次を入力します。

```
ExportSecurity /A=appl,/U=admin,/S=Sales
```

Account100 という名前のメンバーおよびその子孫について、特定のパス(この例では Planning\planning1)にある Account100.txt という名前のファイルに、コロンの区切り記号付きでエクスポートするには:

```
ExportSecurity /A=planappl,/U=admin,/TO_FILE=D:\
\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1\Account100,/
S_MEMBER_ID=Account100,/DELIM=SL_COLON
```

3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

注意:

- メンバー、ユーザーまたはグループ名に区切り記号として使用される文字が含まれる場合、名前は二重引用符で囲まれます。たとえば、スペースが区切り記号として使用されている場合、South America という名前は二重引用符で囲まれます: "South America"。
- カンマはパラメータの区切りに使用されるため、パラメータにカンマが含まれる場合(たとえば Kravets, Diana)、円記号(バックスラッシュ)が前に置かれます。また、円記号(バックスラッシュ)を使用してコマンド・プロンプトの円記号(バックスラッシュ)からエスケープします。この例では、円記号(バックスラッシュ)を 2 つ使用します: /A=Kravets\\,Diana

- ExportSecurity ユーティリティでは、管理者のタスク・リストへのアクセス権のエクスポートはサポートされないため、このようなレコードはインポート前に SecFile.txt ファイルに手動で追加する必要があります。

エクスポート・ファイルを理解する:

アイテム	説明
ユーザーまたはグループ	Shared Services Console で定義されたユーザーまたはグループ名。
memName	アプリケーションのメンバー。
アクセス権	「読取り」、「読取り書込み」または「なし」。ユーザー/メンバーの組合せに重複行がある場合は、「読取り書込み」アクセス権のある行が優先となります。 Calculation Manager のビジネス・ルールおよびフォルダのみ: アクセス権を「なし」または「起動」として指定します。
Essbase アクセス・フラグ	@CHILDREN、@ICHILDREN、@DESCENDANTS、@IDESCENDANTS および MEMBER。 これらの関数のセキュリティ実装は、Essbase と同様です。
アーティファクト・タイプ	各行の後に、ユーティリティによってアーティファクト・タイプが追加されます: <ul style="list-style-type: none"> ● SL_FORM - フォーム ● SL_COMPOSITE - 複合フォーム ● SL_TASKLIST - タスク・リスト ● SL_CALCRULE - ビジネス・ルール ● SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ ● SL_CALCOLDER - ビジネス・ルールを含むフォルダ 注: SecFile.txt ファイルを手動で作成した場合、アーティファクト・タイプ識別子を追加する必要があります。

たとえば、エクスポートされたファイルには次の行が含まれることがあります。

```
User1,DataForm2,READ,MEMBER,SL_COMPOSITE
User2,Folder3,READWRITE,MEMBER,SL_FORMFOLDER
User3,DataForm4,READWRITE,MEMBER,SL_FORM
" North America",Account101,READWRITE,MEMBER,SL_CALCOLDER
```





アクセス権のレポート

サブトピック

- [レポート・オブジェクトの選択](#)
- [レポート・オプションの選択](#)
- [アクセス権レポートの操作](#)
- [監査証跡の設定](#)

現在のアクセス権を表示し、レポートを印刷できます。

▶ Planning におけるユーザーおよびグループの現在のアクセス権をレポートするには:

- 1 「Shared Services Console」で、「アプリケーション・グループ」の下の「Planning」アプリケーションを選択します。「管理」、「アクセス権レポート」を選択します。
- 2 「ユーザーまたはグループの選択」で、次のオプションを選択します。
 - 「使用可能なユーザー」
 - 「使用可能なグループ」
 - 「使用可能なユーザーとグループ」
- 3 左側の「使用可能」パネルから、ユーザーまたはグループを選択および移動して「選択済」パネルにレポートします。
 - 選択項目を移動するには、をクリックします。
 - 選択項目を除去するには、をクリックします。
 - すべてのユーザーまたはグループを移動するには、をクリックします。
 - すべてのユーザーとグループを除去するには、をクリックします。

参照するのではなく、ユーザーまたはグループ名を入力する場合は、フル・ネームを入力する必要があります。カンマの付いた名前の場合は、名前を引用符で囲みます。





- 4 「次へ」をクリックします。

レポート・オブジェクトの選択

次のオブジェクトのレポートが可能です: 勘定科目、シナリオ、バージョン、エンティティ、ユーザー定義のカスタム次元およびフォーム。

▶ レポート・オブジェクトを選択するには:

- 1 アクセス権レポートを開始します。

70 ページの「アクセス権のレポート」を参照してください。
- 2 「オブジェクトの選択」で、レポートする Planning オブジェクトを選択します。
 - 選択項目を「選択済オブジェクト」に移動するには、をクリックします。
 - 選択項目を除去するには、をクリックします。
 - すべてのオブジェクトを移動するには、をクリックします。
 - すべてのオブジェクトを除去するには、をクリックします。
- 3 「次へ」をクリックします。

レポート・オプションの選択

▶ アクセス・レポートのオプションを指定するには:

- 1 アクセス権レポートを開始します。
70 ページの「アクセス権のレポート」を参照してください。
- 2 「タイプが一致するアクセスの表示」の「レポート・オプション」で、表示するアクセスを選択します: 「読取り」、「書込み」または「なし」。
- 3 「結果のグループ分け単位」で、どのようにレポートを表示するかを「ユーザー」または「オブジェクト」から選択します。
- 4 「レポート・タイプ」セクションで、「割り当てられたアクセス」または「有効なアクセス」を選択します。

表 21 アクセス・レポート・タイプ

レポート・タイプ	説明	オプション
「割り当てられたアクセス権」	管理者により割り当てられるアクセス権の要約	アクセス権がメンバー選択リレーションまたはグループ・メンバーシップのどちらにより割り当てられるかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">● 「関係が一致するアクセスの表示」: 「メンバー」、「子」、「子(含む)」、「子孫」、または「子孫(含む)」。● 「グループからの継承を表示」: グループのユーザーから継承済のアクセス権を表示します。
「有効なアクセス権」 注: 有効なアクセス権レポートはグループに対しては生成できません。	Planning の評価に伴いアクセス権の割当てを要約します(たとえば、子またはグループ・メンバーシップなどのメンバー選択関係)。アクセス権に不一致が見られる場合に有効です。	「有効なアクセス元の表示」を選択することにより、有効なアクセス元を説明します。たとえば、Entity1 の「書込み」アクセス権を割り当てられているユーザー名「JSomebody」が、Entity1 の「読取り」アクセス権を割り当てられている「Sales」グループに属しているとします。個人に割り当てられたアクセスは、グループ・メンバーシップにより継承されるアクセス権に優先するため、この設定では「JSomebody」が Entity1 の「書込み」アクセス権を割り当てられていると表示されます。

- 5 「終了」をクリックします。

Adobe Acrobat が起動して、レポートがオンラインで表示されます。

アクセス権レポートの操作

アクセス権のレポートは Adobe Acrobat に表示されます。Adobe Acrobat のツールバーを使ってレポートを操作できます。

監査証跡の設定

管理者は、変更を追跡するためにアプリケーションの局面を選択できます。たとえば、ユーザーがメンバーのプロパティを変更したり、通貨を追加した場合など、メタデータの変更を追跡できます。また、フォーム、ビジネス・ルール、承認、ユーザー、アクセス権などの変更を追跡することもできます。ImportSecurity ユーティリティでインポートされたアクセス権の割当ては、監査レポートに反映

されません。監査を表示するには、管理者は RDBMS レポート・ライターを使用してレポートを作成および実行します。

表 22 監査できるアクション

監査オプション	追跡された変更
「次元管理」	<ul style="list-style-type: none"> ● 次元階層: メンバーまたは次元の追加、移動、削除、プロパティの変更、メンバーまたは次元の名前変更 ● パフォーマンス設定: 次元の密または疎の再設定、次元の順序の変更 ● 通貨: 通貨の追加または削除、三角換算法またはレポートの通貨の設定 ● Planning に影響を与えるユーティリティにより更新(ImportFormDefinition ユーティリティでフォーム・デザインをインポートするなど)
「別名テーブルの管理」	別名テーブルへの変更: 登録、コピー、名前変更、削除および消去
「データ」	<ul style="list-style-type: none"> ● セル値 ● サポート詳細 ● 勘定科目注釈 ● セル・レベル・ドキュメント
「ビジネス・ルールの起動」	計算スクリプトおよびビジネス・ルールによる更新(実行時プロンプトを含む)
「フォーム定義」	フォーム: 作成、修正、行の追加。(監査レコードには、デザインの変更は記録されません)
「フォーム・フォルダの管理」	フォルダ: 作成済、移動済、削除済
「承認」	承認: プランニング・ユニット所有者、ステータスおよびステータス(開始または除外済)
「バージョンのコピー」	サポート詳細および注釈を含んだコピー済バージョン。監査レコードには、コピー済バージョンの詳細(データ、サポート詳細および注釈など)は記録されません。
「セキュリティ」	次元のメンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、ビジネス・ルールおよびタスク・リストに対するアクセス権
「ユーザーの管理」	追加、変更または削除済のユーザー
「グループの管理」	追加、変更または削除済のグループ、追加または除去済のユーザー
「オフライン」	オフラインまたはサーバーに同期済のフォーム
「タスク・リスト」	タスク・リスト: 作成、コピー、保存、移動および削除済
「データのコピー」	静的次元、ソース次元および宛先次元におけるユーザーの選択
「セル詳細の消去」	サポート詳細の消去、セル・テキスト、および勘定科目注釈におけるユーザーの選択

➤ Planning 記録により変更されるアプリケーションの аспекトを指定するには:

- 1 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
- 2 「監査」を選択します。

3 アクション Planning 追跡を選択します。

パフォーマンスが低下することのないよう、注意して監査するアプリケーション要素を選択してください。

4 「選択の保存」をクリックします。

選択された監査オプションに基づき、アプリケーションの変更が HSP_AUDIT_RECORDS テーブルに記録され、リレーショナル・データベースに保管されます。

5 Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

6 RDBMS レポート・ライターを使用して HSP_AUDIT_RECORDS テーブルに結果を表示します。

ユーザーが監査オプションをリセットした場合、その変更は記録されます。

追跡されたアクションの例

記録済項目ごとに Planning によって次の追跡が行われます。

追跡された変更	例
変更のタイプ	メタデータ、データ、フォーム、アクセス権、プランニング・ユニット
影響を受けたオブジェクト(監査レポートの列 ID_1 および ID_2 は、変更されたオブジェクトの定義に役立ちます)。	フォーム: Expenses 04 グループ: Marketing
ユーザー	VHennings
記録時間	12/22/2011 8:17
アクション	追加
プロパティ	通貨
古い値	デフォルト
新しい値	USD

監査レポートの表示と消去

監査結果は HSP_AUDIT_RECORDS テーブルに記録され、リレーショナル・データベースに保管されます。監査レポートを消去するには、HSP_AUDIT_RECORDS テーブルで SQL の DELETE コマンドを使用します。特定の日数前のエンTRIESを消去するには、「time_posted」フィールドで比較します。たとえば、テーブルからすべてのエンTRIESを消去するには:

```
DELETE FROM HSP_AUDIT_RECORDS
```

監査レコードを記録された時間でソートして表示するには:

```
SELECT * FROM HSP_AUDIT_RECORDS ORDER BY TIME_POSTED
```

セキュリティ・フィルタの管理

Planning のアクセス権はリレーショナル・データベースに保管されます。たとえば Financial Reporting や第三者のツールなど、Planning 以外の製品を使用する場合には、Essbase で直接 Planning データにアクセスするには、セキュリティ・フィルタを生成することによって Planning アクセス権を Essbase にプッシュする必要があります。

選択済ユーザーの Essbase のセキュリティ・フィルタを更新するには、「管理」、「管理」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します。すべてのユーザーのセキュリティ・フィルタを同時に更新するには、「管理」、「アプリケーション」、「データベースの作成」、「データベースのリフレッシュ」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します(84 ページの「アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ」を参照)。まず、セキュリティ・フィルタのサイズが Essbase の制限である 64KB/行を超過しないことを検証します。

読取りまたは書込みセキュリティ・フィルタが Essbase で生成されるには、ユーザーは、保護された各 Planning 次元(ユーザー定義の次元を含む)の少なくとも 1 つのメンバーに対し、読取りまたは書込みのアクセス権を保有していなければなりません。これらの次元にアクセス権が割り当てられていない場合、Essbase におけるユーザーのセキュリティ・フィルタは「なし」に設定されます。

▶ 個別のセキュリティ・フィルタを作成または更新するには:

- 1 Planning から、「管理」、「管理」、「セキュリティ・フィルタ」の順に選択します。
- 2 セキュリティ・フィルタを更新するユーザーを選択します。
- 3 「作成」をクリックします。

Essbase により、アクセス権情報が保存される暗号化ファイル(essbase.sec)が作成されます。

注: プランナおよび対話型ユーザー・タイプに Essbase の Planning データへ直接書き込むアクセス権を持たせたい場合は、Shared Services で Essbase の書込みアクセス権の役割を割り当てます。

プロビジョニング・ユーザー・ユーティリティとの同期

ProvisionUsers ユーティリティ(コマンド・ライン・インタフェースを通して管理者により実行される)により、Shared Services Console の Planning ユーザー、グループおよび役割が Planning アプリケーションおよび Essbase と同期されます。

▶ このユーティリティを使用するには:

- 1 次の構文を使用し、planning1 ディレクトリから ProvisionUsers.cmd ファイルを起動します:

```
ProvisionUsers [-f:passwordFile] /ADMIN:adminName /A:appName [/U:user1[;user2;user3]] [/R:n]
```

planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください。

表 23 ProvisionUsers 構文

パラメータ	説明	必須?
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」を参照してください。	いいえ
/ADMIN: adminName	Planning アプリケーションにログオンする管理者名。	はい
/A: appName	同期させる Planning アプリケーション(ユーティリティが実行しているサーバー上に存在する必要があります)。	はい
[/U: user1[;user2;user3]]	同期させるユーザーを指定します。たとえば、Planner1 というユーザーと Planner2 というユーザーを同期させる場合、/U: Planner1;Planner2 を使用します。この引数を省略すると、すべてのユーザーが同期されます。	いいえ
[/R :n]	同期を実行する間隔を分単位で指定します。たとえば、30 分ごとに同期を行う場合は、/R:30 を使用します。この引数を省略すると、同期は一度のみしか行われません。	いいえ
/?	自身を指定し、ProvisionUsers の構文およびオプションを印刷します。	いいえ

2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例 1

入力:

```
ProvisionUsers /ADMIN:admin /A:App1
```

App1 アプリケーションのすべてのユーザーを同期します。

例 2

入力:

```
ProvisionUsers /ADMIN:admin /A:App2 /U:Planner1 /R:60
```

App2 アプリケーションで、Planner1 というユーザーを 60 分ごとに同期させます。

ユーザーとグループ ID の移行

ユーザーまたはグループの ID またはユーザー・ディレクトリ階層の位置を変更する場合、この情報は必ず Planning で更新または移行する必要があります。

▶ 変更されたユーザーおよびグループの ID を Shared Services Console から Planning に移行するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- 「管理」、「管理」、「次元」を選択し、続いて次元メンバーを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」の順に選択し、フォームを選択します。
 - **Calculation Manager を使用している場合:** 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択し、ビジネス・ルール・フォルダまたはビジネス・ルールを選択します。
 - 「管理」、「管理」、「タスク・リスト」を選択し、タスク・リストを選択します。
- 2 「アクセス権の割当て」をクリックします。
 - 3 「移行 ID」をクリックします。

ビジネス・ルール・セキュリティの移行

アップグレードされたアプリケーションで Business Rules を使用していた場合、管理者はビジネス・ルールの起動アクセス権およびそのプロジェクトを、Business Rules から Planning の Calculation Manager ビジネス・ルールに HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティを使用して移行できます。

HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティで次の操作を実行します。

- 特定の Planning アプリケーションのビジネス・ルールに割り当てられている起動アクセス権を上書きします。
- Shared Services Console で特定の Planning アプリケーションに提供されるユーザーおよびグループのアクセス権を移行します。

▶ ビジネス・ルールおよびそのフォルダのアクセス権を移行するには:

- 1 HBRMigrateSecurity.cmd の実行前に次を実行します。
 - Planning アプリケーション管理を使用している場合、Calculation Manager がアプリケーションの選択された計算モジュールであることを確認します (289 ページの「システム設定の指定」を参照)。アプリケーションを Performance Management Architect にアップグレードした場合、Calculation Manager が計算モジュールとして自動的に選択されます。
 - ビジネス・ルールを Oracle Hyperion Business Rules から Calculation Manager に移行します。Oracle Hyperion Calculation Manager Designer's Guide を参照してください。
 - ビジネス・ルールを Planning に配置します。
- 2 コマンド・ラインで、planning1 ディレクトリから次のコマンドとそのパラメータを入力し、それぞれをスペースによって区切ります:

```
HBRMigrateSecurity.cmd [-f:passwordFile] /A:appname /U:admin /
F:output file
```

planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください。

表 24 HBRMigrateSecurity パラメータ

パラメータ	目的	必須?
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」を参照してください。	いいえ
/A: appname	ビジネス・ルールの起動アクセス権を移行する Planning アプリケーションを指定します。	はい
/U: admin	管理者のユーザー名を指定します	はい
/F: output file	XML 出力ファイルの名前を指定します。planning1 ディレクトリにない場合は完全パス名を含めず(planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照)。このファイルにはトランザクションのログが含まれ、トラブルシューティングに役立ちます。	はい
/?	HBRMigrateSecurity.cmd の構文とオプションを印刷します	いいえ

3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
HBRMigrateSecurity.cmd /A:appname /U:admin /F:C:\temp
\HBRExportedSecurity.xml
```

移行したビジネス・ルールに関する Calculation Manager の「セキュリティ」設定の詳細は、198 ページの「実行時プロンプトと承認セキュリティについて」を参照してください。

古いユーザー記録の削除

Shared Services でユーザーまたはグループの非プロビジョニングまたは削除を行う場合、ユーザーとグループ・テーブルを Planning リレーショナル・データベースで更新し、古い記録を削除することによって、ディスク・スペースを節約できます。

▶ 非プロビジョニング・ユーザーおよびグループを Planning データベース・テーブルから除去するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- 「管理」、「管理」、「次元」を選択し、続いて次元メンバーを選択します。
- 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」の順に選択し、フォーム・フォルダまたはフォームを選択します。
- **Calculation Manager を使用している場合:** 「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択し、ビジネス・ルール・フォルダまたはビジネス・ルールを選択します。

- 「管理」、「管理」、「タスク・リスト」を選択し、タスク・リストを選択します。
- 2 「アクセス権の割当て」をクリックします。
- 3 「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

Financial Reporting でのアクセス権の設定

Financial Reporting では、これらのアクセス権がサポートされます。

- ユーザーの認証
 - ログオン・アクセス権
 - Financial Reporting およびデータ・ソースへのアクセス
- アプリケーション権限
 - Financial Reporting のタスクへのアクセス
 - レポートをデザインまたは表示する権限
- データ権限
 - メンバーや値などのデータ・ソースへのアクセス
 - レポートなどの Financial Reporting オブジェクトへのアクセス

4

Planningデータベースの管理

この章の内容

アプリケーションを開く	81
アプリケーションのロック解除	81
ブロードキャスト・メッセージの使用	82
使用統計の表示	83
アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ	84
為替レートの管理	86
通貨換算の管理	89
通貨換算計算スクリプトの操作	90
パフォーマンスの最適化	90
アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ	92

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの場合、データベースは Planning で作成され維持されます。Performance Management Architect アプリケーションの場合、アプリケーションは Performance Management Architect で作成され、Planning に配置にされます。Performance Management Architect で実行するタスクの詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

アプリケーションを開く

アプリケーションを開いてデータの作業や、レポートの実行を行うことができます。複数のアプリケーションを同じサーバーに配置し、また同時に開くことができます。これは、サーバーの構成、コンピュータのプロセッサ・スピード、また使用可能なメモリーに依存し、パフォーマンスを低下させる場合があります。サーバーの構成を確認するには、オラクル社のコンサルタントまでお問い合わせください。

アプリケーションのロック解除

ユーザーがアプリケーションまたは Planning を正常に終了しない場合などに、Planning アプリケーションがロックされることがあります。アプリケーションのロック解除ユーティリティにより HSP_LOCK テーブルのすべての記録が消去されます。ユーティリティは、Planning アプリケーション・サーバーから実行してください。

ユーティリティを実行する前に、Planning アプリケーションに接続しているユーザーがいないことを確認してください。タスク・マネージャを Planning サーバーで起動し、hsxser~1 (hsxserver) または hspds というプロセスが存在しないことを確認します。

▶ Planning アプリケーションをロック解除するには:

- 1 コマンド・ラインを使用して、planning1 ディレクトリに移動し、IHspUnlockApp.cmd ユーティリティを見つけます。

planning1 の完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

- 2 HspUnlockApp.cmd[-f:passwordFile] SERVER_NAME USER_NAME PASSWORD APPLICATION_NAME と入力します。application name はロック解除するアプリケーションを指します。

オプション: 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されている場合、[-f:passwordFile] をコマンド行の最初のパラメータとして使用し、passwordFile で指定されている完全なファイルのパスおよび名前からパスワードを読み取ります。 [50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」](#) を参照してください。

- 3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。
- 4 コンソール・アプリケーション・ログのイベント・ビューアを使ってアプリケーションのイベント・ログを確認し、成功または失敗したイベントがレポートされているかどうかを確認します。ログの詳細は、[Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide](#) を参照してください。

ブロードキャスト・メッセージの使用法

ブロードキャスト・メッセージを使用して、現在アプリケーションにログオンしているすべての Planning ユーザーにテキスト・メッセージを送信します。たとえば、システムの利用状況や、定期メンテナンスに関するメッセージなどを送信できます。また、アプリケーションのアップグレードや移行を行う前に、ユーザーにログアウトを促す場合などにもブロードキャスト・メッセージを使用できます。

Web クライアントまたはコマンド・ライン・ユーティリティを使ってブロードキャスト・メッセージを送信できます。Web を使ってメッセージを送信した場合、メッセージは現在のアプリケーションのユーザーに送信されます。コマンド・ラインを使って送信すると、ログオンしていないアプリケーションを指定できます。標準のオペレーティング・システム・メカニズムを利用して、メッセージをスケジュールすることも可能です。

アプリケーションにログオンしたユーザーの場合、ブロードキャスト・メッセージの送信に Web またはコマンド・ラインのどちらが使用されても、ブロードキャスト・メッセージはページがリフレッシュされた場合または別のページに移動した場合にブラウザに表示されます。現在 Planning アプリケーションにログオンしているユーザーのみが、ブロードキャスト・メッセージを見ることができます。他製品またはサードパーティのレポート・ツールを使用してアプリケーションにログオンしているユーザーは、ブロードキャスト・メッセージを見ることができません。

- ▶ Planning Web を使用してブロードキャスト・メッセージを送信するには:
 - 1 「管理」、「アプリケーション」、「ブロードキャスト・メッセージ」の順に選択します。
 - 2 「メッセージの作成」で、ブロードキャストするメッセージを入力します。
 - 3 「送信」をクリックします。

- ▶ コマンド・ラインを使用してブロードキャスト・メッセージを送信するには:
 - 1 コマンド・プロンプトを使用して、planning1 ディレクトリに移動し、BroadcastMessage.cmd ユーティリティを見つけます。

planning1 の完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

- 2 コマンド・ラインで次の構文を使用し、ユーティリティを起動します:

```
broadcastmessage.cmd([SERVER_NAME], APPLICATION_NAME, USER_NAME, MESSAGE)
```

オプション: 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されている場合、[-f:passwordFile] をコマンド行の最初のパラメータとして使用し、passwordFile で指定されている完全なファイルのパスおよび名前からパスワードを読み取ります。 [50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」](#) を参照してください。

SERVER_NAME: ローカルホスト名。

APPLICATION_NAME: メッセージを送信するユーザーのアプリケーション名。

USER_NAME: ブロードキャスト・メッセージを送信する権限のある管理者。

MESSAGE: アプリケーションのユーザーに送信する 127 文字までのテキスト・メッセージ。

- 3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。
- 4 ステータス、エラーまたはメッセージをブロードキャストする情報をコンソールに表示できます。

例:

```
Broadcastmessage.cmd ABCserver、testapp、VHennings001、定期メンテナンスのため、アプリケーションからログオフしてください。
```

使用統計の表示

どの Planning ユーザーが現在のアプリケーションにログオンしているか、またアプリケーションにアクセスしてからどのくらい時間が経過したかを確認できます。Financial Reporting、Smart View などの他のアプリケーションまたはサードパーティのレポート・ツールを通してログオンしたユーザーは表示されません。

RAM が適切に割り当てられているかどうかを確認するため、使用中のサポート詳細検出キャッシュの割合を表示できます。数値が非常に低いかまたは高い場合、RAM の割当てを少なくするかまたは高くするよう調整します。デフォルト値の 20

は「Planning」プロパティに保管されます(91 ページの「サポート詳細キャッシュのメモリー割当て」を参照)。

▶ 使用統計を表示するには:

- 1 Planning Web から、アプリケーションにログオンします。
- 2 「管理」、「アプリケーション」、「統計」の順に選択します。

各サーバーの使用統計が表示されます。

アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ

「データベースの管理」ページで、アプリケーションの各プラン・タイプにおける Essbase のデータ保管に使用されるアプリケーション・データベースを作成またはリフレッシュできます。データベースは次元、階層メンバー、属性およびアプリケーションで指定される他のデータに基づいて構成されます。Essbase により暗号化されたデータ・ファイル(essbase.sec)が作成され、アクセス権情報が保管されます。

アプリケーションを作成する場合、「作成」を選択してアプリケーション・データが保管される Essbase 多次元データベースを更新します。アウトラインを作成する際、パフォーマンスを向上させ、ユーザーが変更をすばやく利用できるように、データベースの変更およびアクセス権を個別に転送できます。アウトラインの完了後、データベース情報をリフレッシュする場合にアクセス権を含むことを推奨します。

アプリケーションの構造を変更したら、アプリケーション・データベースを必ずリフレッシュしてください。アプリケーションの Essbase データベースをリフレッシュするまで、アプリケーションの変更がユーザーによるデータの入力および承認タスクに影響を与えることはありません。たとえば、エンティティ・メンバーのプロパティ修正、シナリオの追加またはアクセス権の変更が行われた場合、これらの変更はアプリケーション・データベースがリフレッシュされるまで Planning リレーショナル・データベースに保管されます。

リフレッシュの実行中:

- Essbase セキュリティ・フィルタが更新されます。
- 通貨換算計算スクリプトが更新されます。
- メンバーまたは関連するプロパティがリレーショナル・データベースから Essbase データベースに反映されます。
- Essbase データベースでカスタム属性が追加、変更、削除されます。
- Essbase アウトラインで為替レート値の再移入が行われます。
- 一部の勘定科目のメンバーの式が動的に生成または更新されます。
- 別名テーブルへの追加や変更とその次元やメンバーへの関連付けが更新されます。
- Essbase データベースが再構築されます。
- Essbase データベースに UDA が追加されます。

注意 作成またはリフレッシュ前にアプリケーションをバックアップするようにお勧めします。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。これらの手順に従うと、データベースのデータに影響を与えます。「作成」をクリックすると、データが削除され、Planning プラン・タイプが再構築されます。「リフレッシュ」をクリックすると、データの入れ替えが行われます。重要な情報は、34 ページの「[Essbase の操作の考慮事項](#)」を参照してください。

管理者が「データベースの作成」または「データベースのリフレッシュ」を使用すると、アプリケーションの所有者を含む他のユーザーがすべてのタスクを利用できなくなります。Essbase をリフレッシュする前に、すべてのユーザーが Planning アプリケーションからログオフする必要があります。Oracle では、Essbase をリフレッシュする前に管理者がすべてのユーザーに対し、作業を中止して保存し、アプリケーションを閉じるようブロードキャスト・メッセージを送信することをお勧めしています。Planning では、リフレッシュ中にユーザーのログオフは行われません。291 ページの「[メンテナンス中のアプリケーションの使用制限](#)」を参照してください。

アプリケーションのリフレッシュに要する時間は、アプリケーションのエンティティおよびユーザー数などの要因に依存します。ユーザーの数が多かたり、セキュリティ・フィルタが存在すると、リフレッシュ時間は長くなります。オフピーク時にアクセス権情報の転送を行えば、システム稼働率の最適化を図ることが可能です。

▶ アプリケーション・データベースを作成またはリフレッシュするには:

- 1 [アプリケーションをバックアップ](#)します。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。
- 2 「管理」 Administration、「アプリケーション」の順に選択します。
- 3 「データベースの作成」または「データベースのリフレッシュ」を選択します。
- 4 次のオプションを選択します:
 - 「データベース」: アプリケーションの Essbase データベースを作成またはリフレッシュします。
 - 「カスタム定義関数の更新」: アプリケーション・データベースの作成またはリフレッシュ時に、アプリケーションの Planning カスタム定義関数を更新します。カスタム定義関数の操作については、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。
 - 「セキュリティ・フィルタ」: Essbase でサードパーティ・アプリケーションによる使用のため、セキュリティ・フィルタを作成します。暗号化されたデータ・ファイル(essbase.sec)にアクセス権を保管します。アプリケーションのすべてのユーザーに対するセキュリティ・フィルタを作成する場合、「セキュリティ・フィルタ」を選択し、「制限の検証」は選択しません。選択されたユーザーのみにセキュリティ・フィルタを作成するには、75 ページの「[セキュリティ・フィルタの管理](#)」を参照してください。

ヒント: すべてのユーザーに対しセキュリティ・フィルタを生成する前に、「アプリケーションを使用可能にする」オプションを「管理者」に設定して、アプリケーションへのユーザーのアクセス権限を制限します。セキュリティ・フィルタの生成後、設定を「すべてのユーザー」に戻します。291 ページの「メンテナンス中のアプリケーションの使用制限」を参照してください。

- 「共有メンバー」: メンバー(基本および共有)のすべてのインスタンスに設定されたアクセス権限を評価して、すべてに最も制限の少ないアクセス権限を適用します。たとえば、共有メンバーの親がそのすべての子へ書き込み権限を割り当て、別の親の下の別の共有メンバーがそのすべての子に読取り権限を割り当てている場合、基本メンバーとそのすべての共有メンバーには書き込み権限が与えられます(例については 59 ページの「共有メンバーへの有効なアクセス権について」を参照してください)。

注: アプリケーションが共有メンバー・セキュリティに依存しない場合は、パフォーマンスを向上させるためにこのオプションは選択しないことを検討してください。

このオプションを選択しない場合、各基本および共有メンバーのインスタンスはメンバー固有のセキュリティを使用します。つまり、各メンバーがそれぞれのフォームで別に選択された場合、同じセル値に、あるフォームでは読取り権限を、別のフォームでは書き込み権限を持たせることができます。

- 「制限の検証」: Essbase のセキュリティ・フィルタ制限である 64KB/行を超過しているセキュリティ・フィルタを識別します。このオプションにより、Essbase セキュリティ・フィルタを作成する前にフィルタ・サイズが検証され、サイズ制限が超過しないよう検証されます。

- 5 Essbase データベースのデータを作成またはリフレッシュするには、「作成」または「リフレッシュ」をクリックします。
- 6 確認メッセージをレビューします。続行するには、「作成」または「リフレッシュ」をクリックします。更新が完了したら、「終了」をクリックします。
- 7 オプション: 作成またはリフレッシュの処理に多少時間がかかる場合、「バックグラウンドで実行」をクリックしてステータスを表示せずにプロセスをバックグラウンドで実行できます。バックグラウンドでの「作成」または「リフレッシュ」の結果を見るには、Planning ログを表示します。ログの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

為替レートの管理

為替レート・テーブルを使って、予算担当者は異なる通貨のプランを作成できます。たとえば、円を日本エンティティの基本通貨として、また US ドルを米国エンティティの基本通貨として指定できます。日本エンティティの値でフォームを表示し、通貨を US ドルに設定して表示すると、円の為替レートが使用され日本の値から US ドルへ換算されます。表示通貨が円に設定されている場合、US ドルの為替レートによって米国エンティティから円に変換されます。

為替レートを使用するには、アプリケーションの作成時に複数通貨が選択されていなければなりません。(Performance Management Architect を使って基本通貨、通貨コードおよびシンボル、トライアンギュレーション通貨、レポート通貨および為替レート・タイプを指定します。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。)87 ページの「為替レート・テーブルの作成」および87 ページの「為替レート・テーブルの編集」のプロシージャで為替レートを設定できます。

複数通貨アプリケーションには HSP_Rates 次元による為替レートが保管され、通貨レートを保管するこれらのメンバーおよびその他が含まれます。

- HSP_InputValue: データ値を保管します
- HSP_InputCurrency: データ値の通貨タイプを保管します

レポートを作成またはデータをロードする場合は、HSP_InputValue メンバーを参照する必要があります。データのロード時は、現地通貨に対してデータをロードします。HSP_InputCurrency メンバーを参照する必要はありません。HSP_Rates 次元はデフォルトにより「密」に設定されます。これは、Performance Management Architect で変更できます。Planning では、Performance Management Architect で設定されるトライアンギュレーション通貨を通して、三角変換法によって通貨換算がサポートされます。

為替レート・テーブルの作成

それぞれが異なるビジネス・シナリオを表す、複数通貨レート・テーブルを作成できます。各シナリオは、1つの為替レート・テーブルのみに関連付けることができます。

▶ 為替レート・テーブルを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「為替レート」の順に選択します。
- 2 「作成」をクリックします。
- 3 為替レート・テーブルの情報を指定します。
 - 「名前」
 - 「説明」
- 4 「保存」をクリックし、87 ページの「為替レート・テーブルの編集」で指定されているようにテーブルの設定を定義します。

為替レート・テーブルの編集

宛先通貨としてデフォルト通貨およびトライアンギュレーション通貨を使用できます。ソース通貨からデフォルトまたはトライアンギュレーション通貨に為替レートを入力できます。為替レート・ページで定義されたデフォルト通貨からすべての通貨間の変換値を入力します。為替レート・テーブルは、すべてのアプリケーション期間に渡るため、すべてのシナリオに為替レートを適用可能です。為替レート・テーブルを作成または変更する際、アプリケーションをリフレッシュしてプラン・タイプに保管してください。

通貨のトライアンギュレーション通貨を変更する場合、トライアンギュレーション通貨プロパティの為替レートを再入力し、為替レートを転送および保管するためにアプリケーションをリフレッシュしなければなりません。アプリケーションのデフォルト通貨にトライアンギュレーション通貨を選択することはできません。

ある通貨から別の通貨に換算する為替レートを入力する場合は、計算方法として「乗算」または「除算」を選択します。

▶ 為替レート・テーブルを編集するには:

- 1 「管理」、「管理」、「為替レート」を選択し、編集するテーブルを選択して「編集」をクリックします。
- 2 「レート・テーブル」タブで、オプションを選択します。
 - 「表示オプション」
 - 「平均」
 - 「末尾」
 - 「BegBalance」
 - 「履歴」
 - 「メソッド」
- 3 「次へ」をクリックします。
- 4 「為替レート」タブでオプションを設定します。

表 25 為替レート・テーブル・オプション

オプション	説明
「通貨へ」	変換レートを入力する通貨(デフォルト通貨またはトライアンギュレーション通貨)。
「年を表示」	表示される期間(デフォルトは現在のアプリケーション年です)。
「レート・テーブル名」	為替レート・テーブル名(表示のみ)。
「メソッド」	ソースおよび宛先通貨の間で、どのように値が計算されるかを決定する数学演算子(乗算または除算)。
「履歴」	すべての期間にわたって為替レート・タイプが「履歴」に設定されている勘定科目の為替レート。勘定科目のデータ型は通貨に設定されていなければなりません。履歴は、通常貸借対照表勘定タイプに使用されます。アプリケーションのカレンダー前の時点のレートまたはイベント発生時のレートなど、履歴為替レートは計算済のレートを反映することがあります。
「BegBalance」	貸借対照表勘定の値。アプリケーションには1つの期首残高、最初の期間が存在します。期首残高のレートは、アプリケーションで各年に移入されます。アプリケーションの最初の年が含まれないシナリオには、期首残高が含まれます。
「Avg」	期間にわたって為替レート・タイプが「Avg」または「平均」に設定されている勘定科目の為替レート。Avgは、通常「収益」および「支出」勘定科目タイプまたはタイム・バランスが「フロー」に設定された「保存された仮定」勘定科目タイプに使用されます。勘定科目のデータ型は通貨でなければなりません。

オプション	説明
「終了」	期間にわたって為替レート・タイプが「末尾」に設定されている勘定科目の為替レート。末尾は通常、「資産」および「負債」勘定科目タイプまたはタイム・バランスが「残高」に設定された「保存された仮定」勘定科目タイプで使用されます。勘定科目のデータ型は通貨でなければなりません。

ヒント： 値の入力後、現在の年またはテーブルのすべての年の値をすべて入力します。たとえば、Jan11 のセルで Avg の値を入力し、「年の入力」を選択した場合、値は 2011 年のすべての月に分散されます。「テーブルの入力」を選択すると、値は為替レート・テーブルに含まれるすべての年のすべての月に分散されます。値を入力するには、Avg または End の値を入力し、セルをマウスの右ボタンでクリックして、「年の入力」または「テーブルの入力」を選択します。

5 「保存」をクリックします。

為替レート・テーブルの削除

▶ 為替レート・テーブルを削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「通貨換算」を選択します。
- 2 削除する為替レート・テーブルを選択します。
- 3 「削除」をクリックします。
- 4 確認を求めるメッセージで、「OK」をクリックします。

通貨換算の管理

▶ 通貨換算を管理するには:

- 1 「管理」、「管理」、「通貨換算」を選択します。
- 2 「作成」をクリックします。
- 3 「ファイルの作成」タブで、通貨換算スクリプト・ファイルの情報を指定し、「次へ」をクリックします。
 - 「名前」
 - 「説明」
- 4 「詳細」タブで、通貨換算スクリプトの詳細の情報を選択します。
 - 「通貨」
 - 「シナリオ」
 - 「バージョン・タイプ」: 「ボトムアップ」または「ターゲット」
 - 「バージョン」



をクリックしてフィールドのメンバーを選択します。

通貨換算計算スクリプトの操作

通貨換算の作成時に Planning アプリケーションで複数通貨が使用可能になっている場合、選択されたシナリオ、バージョンおよび通貨に基づいて通貨換算計算スクリプトが作成されます。2番目の計算スクリプトは Planning によって作成されます。勘定科目レート・タイプに基づいて適切な為替レートが勘定科目にコピーされます。通貨換算では、勘定科目タイプが常に優先されます。データ型評価順序は考慮されません。計算コピー・スクリプトは、ボトムアップ・バージョンでは HspCrtB.csc、ターゲット・バージョンでは HspCrtT.csc という名前になります。計算スクリプトのコピーを実行すると、通貨換算計算スクリプトが CELL モードよりも効率的な BLOCK モードで実行されます。

選択済のシナリオ、バージョンおよび通貨は Essbase データベースのアウトラインへのデータ保管が可能である必要があります。「動的計算」、「動的計算および保管」および「ラベルのみ」はデータを保管しない仮想メンバーです。ターゲット・バージョンに仮想メンバーが存在する場合、これらのメンバーの計算結果は Essbase によって破棄されるため、通貨換算計算スクリプトを実行する利点はありません。

通貨を正しく換算するには、通貨換算の初回起動時に管理者は通貨レート計算コピー・スクリプトおよび通貨換算計算スクリプトを実行する必要があります。HSPCrtB.csc または HspCrtT.csc 計算コピー・スクリプトの実行後、データベース・アウトラインを変更したら再度これらを起動する必要があります(たとえば、為替レート、勘定科目レート・タイプ、バージョン、シナリオ、勘定科目またはユーザー定義の次元メンバーの追加または変更など)。

計算スクリプトの通貨計算コピー・スクリプトを作成するには、通貨換算計算スクリプトを再度作成する必要があります。

パフォーマンスの最適化

サブトピック

- [次元の順序変更](#)
- [サポート詳細キャッシュのメモリー割当て](#)
- [データおよびインデックス・キャッシュ・サイズの構成](#)
- [その他の最適化のヒント](#)

次の方法でパフォーマンスを最適化します:

- 戦略的に次元を密または疎に割り当て、最も高い密度から最も低い密度へと順序付けします(327 ページの「疎な次元と密な次元について」、91 ページの「次元の順序変更」および340 ページの「次元の密度と順序の設定」を参照してください)。
- 2分以内で実行するようなビジネス・ルールを設計します。長時間実行するビジネス・ルールはバックグラウンドで実行するようにスケジュールします(42 ページの「バックグラウンド処理の設定」を参照してください)。
- 「欠落ブロックの抑制」オプションを設定します(171 ページの「フォーム・グリッド・プロパティの設定」を参照してください)。

- 100 ユーザーの場合、Planning プロパティ OLAP_MAX_CONNECTIONS を 20 に設定します。必要に応じて、注意深くテストした後、500 ユーザーに対して設定を 100 に増加します(37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」を参照してください)。
- DBC 接続プールの設定を最適化します(40 ページの「JDBC 接続プールの構成」を参照してください)。
- SQL クエリーのタイムアウト値を増加します(37 ページの「SQL リレーショナル・データベースの最適化」を参照してください)。
- WebLogic Server を使用する場合、このパフォーマンス設定を確認します(417 ページの「WebLogic Server パラメータの最適化」を参照してください)。
- Java Virtual Machine (JVM)パラメーターを調整します(414 ページの「500 Error メッセージ」を参照してください)。
- Windows ネットワーク・パラメーターを最適化します(418 ページの「Windows ネットワーク・パラメータの最適化」を参照してください)。

次元の順序変更

次元の順序は、Essbase データベースの構造とパフォーマンスにとって重要です。次元の順序を変更する時にパフォーマンスを最適化します:

- 期間と勘定科目を密にし、密次元は密の度合いが高い順に順序付けします。通常、最も密な次元が期間となり、その後勘定科目が続きます。密次元は疎次元より計算が高速です。
- 疎次元を集約および非集約次元に分離します。集約次元を非集約次元の前に配置します。疎次元を最大から最小の密へと並べ替えます。エンティティなどの集約次元は、子を親に集約して新しいデータを作成します。シナリオなどの非集約次元は、子を作成してデータを作成しません。

計算次元の順序を変更するには、Performance Management Architect も使用できます。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

サポート詳細キャッシュのメモリー割当て

ユーザーがプランニング・ユニットのステータスを変更した場合にパフォーマンスを向上させるために、サポート詳細キャッシュのメモリー容量を指定できます。サポート詳細キャッシュのデフォルトのメモリー割当てを変更するには、SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE プロパティをデフォルトの 20 から変更します。

ヒント: サポート詳細検出キャッシュが 75%以上に到達した場合、そのサイズを 60%に減らすことをお勧めします。

サポート詳細キャッシュの使用を表示するには、83 ページの「使用統計の表示」を参照します。この値を変更するには、37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」を参照してください。

データおよびインデックス・キャッシュ・サイズの構成

システムにメモリが十分にある場合、アプリケーションを作成する前に、パフォーマンスを向上させるために、essbase.cfg ファイルを構成し、インデックス・キャッシュを 256MB 以上に増やし、データ・キャッシュを 2GB 以上に増やすことができます。このような設定の変更は既存のアプリケーションに影響を与えません。Administration Services を使用するか、または手動で MaxL ステートメントを使用して、各アプリケーションのインデックスおよびデータ・キャッシュを増やすことができます。MaxL の使用の例は次のとおりです：

```
alter databaseName planType set data_cache_size 20000MB
```

```
alter databaseName planType set index_cache_size 256MB
```

注： 推奨する設定用に十分なメモリがシステムにあることを確認します。そうでない場合、設定を低くします。詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

その他の最適化のヒント

- 密次元の上位メンバーを「動的計算」に設定します。
- 不必要なデータや履歴データを消去します。たとえば履歴データを別のプラン・タイプに移動して現在のプラン・タイプのデータベース・サイズを縮小します。
- 定期的に Essbase データベースの最適化を行います。
- 大きなフォームをより少ない行および列を含む複数のより小さいフォームに分割します。関連フォームはフォルダに編成します。
- 勘定科目注釈の使用はパフォーマンスに影響を与えるので、控えめに使用します。
- 最初に Planning を起動してフォームを開く時には、キャッシュがロードされるので、後続のセッションよりも時間がかかります。ユーザーが Planning の使用を開始する前に、製品を起動して最もよく使用されるフォームを開き、ユーザーによるロード時間を短縮します。

アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ

アプリケーションおよびアプリケーション・データベースは日常的にバックアップしてください。また、次の作業を行う前にもバックアップを行います。

- アプリケーションをリフレッシュする
- アプリケーションを他のサーバーに移動する
- アプリケーションをアップグレードする
- プランニングにおける重要な節目

アプリケーションおよびその関連アプリケーション・データベースのバックは次で構成されます。

- Essbase でのアプリケーションのバックアップ
- Planning および Financial Reporting のリレーショナル・データベースのバックアップ
- Planning の必須コンポーネントのバックアップ

手順の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

5

データおよびメタデータのロード

この章の内容

概要	95
アウトライン・ロード・ユーティリティの操作	97
Planning アウトライン・ロードの操作	148
Data Integrator Adapter for Planning	152
DIM Adapter for Planning の使用方法	152
Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする	152
Performance Management Architect を使用してのロード	154
FDM を使用したロード	154

概要

サブトピック

- 動的メンバーのロードについて
- ロード・ツール

動的メンバーのロードについて

アウトライン・ロード・ユーティリティまたは Lifecycle Management を使用して、動的な子を使用できる親メンバーの下にロードした子メンバーは、Essbase に動的メンバーのプレースホルダが存在する場合、動的な子メンバーとして追加されます。プレースホルダがいっぱいになると、残りの子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。「注意:」動的な子を使用できる親メンバーと、その子メンバーを同じインポートで同時にインポートすると、子メンバーは通常のメンバーとしてロードされます。これは、Essbase にプレースホルダを作成するためにデータベースのリフレッシュが必要なためです。動的メンバーの詳細は、341 ページの「動的メンバーについて」を参照してください。

ロード・ツール

メタデータとデータのロードには、次の表に示したツールを使用できます。

表 26 メタデータ・ロード・ツール

メタデータ・ロード・ツール	Planning アプリケーション管理	パフォーマンス管理アーキテクト	コメント
アウトライン・ロード・ユーティリティ	X		97 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティの操作」を参照してください。
Planning アウトライン・ロード	X		148 ページの「Planning アウトライン・ロードの操作」を参照してください。
Planning の Oracle Data Integrator(ODI)アダプタ	X		Hyperion Data Integration Management Adapter for Planning ユーザー・ガイドを参照してください。
Planning の Data Integration Management(DIM)アダプタ	X		『Oracle Data Integrator Adapter for Planning オンライン・ヘルプ』を参照してください。
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition	X	X	サポートされている FDMEE ソース・システムからロードします。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition Administrator's Guide を参照してください。
Performance Management Architect フラット・ファイル		X	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。
Performance Management Architect インタフェース・テーブル		X	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

表 27 データ・ロード・ツール

データ・ロード・ツール	Planning アプリケーション管理	パフォーマンス管理アーキテクト	コメント
アウトライン・ロード・ユーティリティ	X		数値、日付およびテキスト・データ値をロードします。97 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティの操作」を参照してください。
Planning アウトライン・ロード	X		148 ページの「Planning アウトライン・ロードの操作」を参照してください。
Performance Management Architect データの同期		X	Planning でデータをロードします。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。
Essbase フラット・ファイル・ロード	X	X	Planning で数値のデータをロードします。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。
FDMEE	X	X	サポートされている FDMEE ソース・システムからロードします。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition Administrator's Guide を参照してください。
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Adapter for Planning (FDM)	X	X	Planning で数値のデータをロードします。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Administrator's Guide を参照してください。

アウトライン・ロード・ユーティリティの操作

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義の次元、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータを、フラット・ファイルまたはリレーショナル・データ・ソースからインポートできます。アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してメタデータとデータをフラット・ファイルに、またはメタデータをリレーショナル・データ・ソースにエクスポートできます。

注： コマンドラインを使用せずにデータまたはメタデータをインポートまたはエクスポートするには、[148 ページの「Planning アウトライン・ロードの操作」](#)を参照してください。Planning アウトライン・ロードは、フラット・ファイルとの間でのインポートとエクスポートのみをサポートします。

これらの標準手順を使用し、アウトライン・ロード・ユーティリティの情報をロードします。

1. データをロードする場合、`DIRECT_DATA_LOAD` および `DATA_LOAD_FILE_PATH` システム・プロパティを設定します。
2. **オプション:** コマンドライン引数を含むコマンド・プロパティ・ファイル (`.properties`)を作成します。
3. ロードする各次元またはデータのセットのロード・ファイルを作成します。
4. ロード・ファイルをテストし、続いてユーティリティを実行します。

手順の詳細は、次のトピックを参照してください。

- [97 ページの「コマンド・プロパティ・ファイル」](#)
- [99 ページの「ロード・ファイルの生成」](#)
- [104 ページの「フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート」](#)
- [107 ページの「リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート」](#)
- [115 ページの「Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエクスポート」](#)
- [121 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」](#)
- [133 ページの「次元プロパティ」](#)

コマンド・プロパティ・ファイル

コマンド・プロパティ・ファイル(`.properties`)にコマンドライン引数を保存してコマンドラインを最適化し、アウトライン・ロード・ユーティリティを実行するときにコマンドラインで`/cp:`パラメータを使用してそのファイルを参照できます。たとえば、コマンド・プロパティ・ファイルを使用して、複数のアプリケーション

ンで同じコマンドを実行できます。コマンドラインで必要なのは、インポートごとの/Aパラメータの変更のみです。

コマンド・プロパティ・ファイルの使用を検討する理由は次のとおりです:

- コマンドラインが短くなり、管理が容易
- 読みやすさ
- 使用しやすさ
- 共通アプリケーション用のスイッチをバンドル可能

Java .properties ファイルには、キー/値ペアのエントリが含まれています。キーと値のペアは、コロン(:)または等号(=)で、次のように区切ります:

- Key=value または/I:c:/tmp/anInputCSVTextFile.txt
- Key=value または/cp= c:/tmp/anInputCSVTextFile.txt

プロパティ・ファイルのエントリは、ユーティリティのコマンド・スイッチとして使用されます。プロパティ・ファイルとコマンドラインの両方に引数が指定されている場合は、コマンドライン引数が優先されます。コマンドラインとプロパティ・ファイルのスイッチは実行時にマージされ、解析の結果がログに表示されます。

たとえば、次のコマンドラインがあるとします:

```
/A:tr2 /U:admin /M /K /8 /DF:mm-dd-yyyy /I:c:/tmp/loadAccounts.csv /D:Account /CP:c:/tmp/myProps.properties
```

この場合、myProps.properties ファイルが次の引数を含むとします:

```
/DF:yyyy-mm-dd
```

```
/D:Entity
```

```
/T
```

解析の結果を示す次のようなログ・メッセージを出力します:

- プロパティ・ファイル引数: **/DF:yyyy-mm-dd /D:Entity /T**
- コマンドライン引数: /A:tr2 /U:admin /M /K /8 **/DF:mm-dd-yyyy** /I:c:/tmp/loadAccounts.csv **/D:Account** /CP:c:/tmp/myProps.properties
- 発行される(マージ後の)コマンドライン: /A:tr2 /U:admin /M /K **/T** /8 ***/DF:mm-dd-yyyy** /I:c:/tmp/loadAccounts.csv ***/D:Account** /CP:c:/tmp/myProps.properties

注： アスタリスクは、コマンド・スイッチがプロパティ・ファイルとコマンドラインの両方で見つかり、コマンド・プロパティ・ファイルのバージョンよりコマンドラインのバージョンが優先されたことを示します。

ロード・ファイルの生成

サブトピック

- [データ・ロード・ファイルの生成](#)
- [メタデータ・ロード・ファイルの生成](#)
- [ロード・ファイルのコメント](#)
- [ロード・ファイルの考慮事項](#)

データ・ロード・ファイルの生成

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してデータをロードするとき、.csv ロード・ファイルでドライバ・メンバーを指定し、/TR オプションを指定してユーティリティを実行できます。

注： Planning の「データ・ロード管理」ページで指定されているドライバ・メンバーをロードすることもできます。

次の列を含む、カンマ区切りのデータ・ロード・ファイルを作成します：

- **ドライバ・メンバー:** データのロード先のメンバー。1回のロードに1つのドライバ次元を指定できます。ドライバ次元には複数のメンバーを定義できます。値は数値を表す文字列として渡されます。また、スマート・リストがメンバーにバインドされている場合は、スマート・リスト値として渡されます。
- **視点(POV):** データをロードする交差の定義に必要なその他すべての次元(/TRを使用する場合は、ドライバ・メンバー以外のすべてのメンバーを含みます)。データ・ロードは、視点(POV)の次元パラメータに基づき、自動的にクロス・プロダクト・レコード作成を実行します。ロード・ファイルにより、関連する各セル交差のデータ・レコードが作成およびロードされます。値は文字列として渡されます。POV では、メンバー関数を含むメンバーのカンマ区切りリストを受け入れます。たとえば、ロード中に子(Q1)が Jan、Feb、Mar に展開されます。対応するレコードはすべてのメンバーの組合せのクロス・プロダクトおよびデータ値に基づいて生成されます。
- **データ・ロードのキューブ名:** データがロードされるプラン・タイプの名前。値は文字列として渡されます。値には、Plan1 など、アプリケーションで指定されるすべてのプラン・タイプが含まれます。

例 1: この例では、勘定科目がアプリケーションの「データ・ロード管理」ページのデータ・ロード次元として選択されています。期間がドライバ次元として選択され、Jan はドライバ・メンバーとして選択されています。

Account,Jan,Point-of-View,Data Load Cube Name

```
acct1,12," Local,ent1,Current,Ver1,FY08" ,Plan1
```

例 2: この例では、エンティティがアプリケーションの「データ・ロード管理」ページのデータ・ロード次元として選択されています。勘定科目がドライバ次元として選択され、また勘定科目メンバー aUnspec、aSmart、aDate および aText Account がドライバ・メンバーとして選択されています。この.csv ロード・ファイルは、e1 の交差、視点およびアカウント・ドライバ・メンバー、aUnspec、aSmart、aDate および aText にデータをロードします。

```
Entity,Operation,Data Load Cube Name,aUnspec,aSmart,aDate,aText,Point-of-View
```

```
e1, ,Plan1,77,smart1,12-22-2008,textValue,"USD,Jan,Current, BUVersion_1, FY07"
```

これらの値をドライバ・メンバーに推定します。

- aUnspec: データ型未指定(数値)、値77
- aSmart: データ型スマート・リスト、値スマート・リスト入力'smart1'
- aDate: データ型日付、値12-22-2008
- aText: データ型テキスト、値'textValue'

DIRECT_DATA_LOAD が False に設定されている場合、例によってこのデータ・ロード・ファイルが作成されます。

```
Currency Version Scenario Year Entity Period Account HSP_Rates
```

```
77 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aUnspec HSP_InputValue
```

```
1 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aText HSP_InputValue
```

```
20081222 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan Date HSP_InputValue
```

```
1 USD BUVersion_1 Current FY07 e1 Jan aSmart HSP_InputValue
```

例 3: ドライバを.csv ロード・ファイル内で直接指定します。

```
Value,Driver Member,Point-of-View,Data Load Cube Name
```

```
14,a1,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
sl1_value2,a2,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
OutlineLoad /A:acpt1 /U:admin /M /I:c:\outline1data.csv /TR /L:c:/OutlineLogs/  
outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

.CSV ロード・ファイルにコメントを追加するには、[102 ページの「ロード・ファイルのコメント」](#)を参照してください。

メタデータ・ロード・ファイルの生成

メタデータをロードするときに、ロード・ファイルは次元を一覧表示する「勘定科目」などのヘッダー・レコード、および後続のメタデータ・レコードで使用されるメンバー・プロパティを含む必要があります。たとえば、「勘定科目」では、どの勘定科目をロードするか、デフォルトの別名、実行する操作などを指定できます。ヘッダー・レコードでは大文字と小文字を区別します。どのような順序でも表示できます。

.CSV ロード・ファイルの次の行には、ヘッダー・レコードにより指定された順序でリストされたメタデータ・レコードが含まれています。各メタデータ・レコードにはヘッダー・レコードのエントリに対応するプロパティ値のカンマで区切られたリストが含まれています。各 Planning メンバーで使用できるプロパティの詳細は、[133 ページの「次元プロパティ」](#)を参照してください。

例: このロード・ファイルは必要なヘッダー・レコードと 3 つのデータ・レコードを持つエンティティの次元をロードします。ヘッダー・レコードはロードするメンバー(Entity)、メンバーのロード先となる親メンバー(Parent)およびメンバーに割り当てる Data Storage プロパティを指定します。

```
Entity, Parent, Data Storage
```

```
e1, Entity,
```

```
e2, ,
```

```
e1, e2, Shared
```

このロード・ファイルを使用すると、他のメンバーが存在しないと仮定すればこのアウトラインになります:

```
Entity
```

```
e1
```

e2

e1 (Shared)

最初のデータ・レコード(e1, Entity)は Entity メンバー e1 をルート・メンバー Entity にある子としてロードします。指定されない値はデフォルトと見なします。たとえば、データ・ストレージが指定されていない場合、デフォルト値の「共有しない」と見なします。次のデータ・レコード(e2,)は、親が指定されていないため、次元ルート・メンバーにある Entity メンバー e2 をロードし、データ・ストレージを「共有しない」に設定します。最後のデータ・レコードは(e1, e2, Shared)はメンバー e2 にある e1 の共有メンバーをロードし、データ・ストレージを「共有」に設定します。

デフォルトの通貨記号と一緒に通貨次元をロード中に、記号を指定せずに通貨を追加すると、同じ名前の事前定義済の通貨の記号に設定されます(または名前が事前定義済の通貨に一致しない場合には、追加されている通貨の通貨コードに設定されます)。

.csv ロード・ファイルにコメントを追加するには、[102 ページの「ロード・ファイルのコメント」](#)を参照してください。

ロード・ファイルのコメント

アウトライン・ロード・ユーティリティの入力.csv ファイルでは、コメントを使用できます。

- 1行のコメントの場合は、# comment のように、行の最初の文字としてハッシュ(#)文字を使用します。
- 空白行は無視されます。
- コメント・ブロックは、ブロック開始の記号#!?で始め、別の行をブロック終了の記号!--!で終わらせます。途中の行をコメント処理する必要はありません。

例:

```
#!-start of comment block
```

```
Comment within block
```

```
Another comment within block
```

```
!--! End of comment block
```

注： コメント・ブロックはネストできません。また#!-- HEADERBLOCK は、Planning 内部のコメント・ブロック・ヘッダーとして予約されています。

ロード・ファイルの考慮事項

ロード・ファイルで作業するとき次の点を考慮します。

- アプリケーションの各次元について、次元プロパティに対応するフィールドを持つロード・ファイルを作成します。各ロード・ファイルは1つの次元のみに対しメンバーを含むことができます。各次元について複数のメンバーを定義できます。
- 入力が必要なフィールドはロードされている各次元について異なります。133ページの「次元プロパティ」を参照してください。
- メンバー名はロード・ファイルのフィールドとして含める必要があります。メンバー・プロパティ値が指定されていない場合、プロパティに対するアプリケーションのデフォルト値が使用されます。
- 新規メンバーを追加するとき、未指定の値にはデフォルト値が仮定されるか、必要に応じて親メンバーのプロパティ値から継承されます。メンバーが存在して値が指定されていない場合は、そのままにしておいてください。
- Planning アプリケーションにすでに存在しているメンバーをロードするとき（たとえばプロパティを変更するため）、アプリケーションにすでにメンバーが存在し、親はロード・ファイルに指定されていない場合、メンバーは既存の親の下に残されます。新しい親が指定されている場合、メンバーは新しい親の下に移動されます。
- その他の次元をロードする場合と同様に、インポート・ファイルが変更の差分ではなく階層の完全な置換えを指定する場合の他の次元ロードと、プランニング・ユニット階層のロード動作が異なります。プランニング・ユニット階層のロードでは最初にプランニング・ユニット階層のすべてのメンバーが削除され、入力ファイルに指定された各メンバーが新規メンバーとして追加されます。プランニング・ユニット階層のロードでは、既存のメンバーが入力ファイルで指定されていなければそのメンバーおよびその子が階層から削除されるので注意してください。
- null 値を指定するには、予約値を使用できます。たとえば、<none>を使用して属性の割当てを削除します。
- ヘッダー・レコード・フィールドが表示される順序は任意です。
- ロード・ファイルごとにロードできる次元は1つのみです。
- ロード・ファイルの列ヘッダーでは大文字と小文字を区別します。
- レコードは1つずつロードされます。レコードのロードに失敗した場合、その関連付けられた例外が例外ファイルに書き込まれ、ロード・プロセスは次のレコードで再開します。
- 年のロード中にエラーがログ作成され、その年がアプリケーションにロードされた場合、そのプロパティはロード・ファイルで指定されたものと同じにならない可能性があります。ファイル・レコードを修正し、年をリロードしてそのプロパティを正しく設定します。

- 親メンバーが存在するか、子メンバーの前にロードされる必要があります。ほとんどの場合、ロード・ファイルは明示的にまたは/Hを使用して、親から子の順序でソートする必要があります。
- カンマや引用符を含むデータ値は、引用符で囲む必要があります。次の例は、カンマと引用符が解釈される方法を示しています。

表 28 カンマや引用符を含むデータ値の例

値	解釈
"quote""quote"	quote"quote
""quotedstring""	"quotedstring"
""",quoted,"",string,""	",quoted,"",string,""
""",quoted,"""",string,"""	",quoted,"",string,""

フラット・ファイルを使用したデータおよびメタデータのインポート

サブトピック

- [データのロード](#)
- [メタデータのロード](#)

データのロード

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したデータのロード時にドライバ・メンバーを指定する方法は2つあります。Planning の「データ・ロード管理」ページで指定されているドライバ・メンバーをロードする方法と、.csv ロード・ファイルでドライバ・メンバーを指定して/TR オプションを指定してユーティリティを実行する方法です。

/TR オプションを指定してデータをロードする場合、.csv ファイルではドライバ・メンバーとその他のすべてのメンバーを、フォーム内での場所にかかわらず、「視点(POV)」列にリストする必要があります。たとえば、「1月」または「子孫(年計)」がフォーム内の列である場合、「視点(POV)」列で指定されている必要があります。/TR を使用する場合、.csv ファイルの各行に1つの値をロードできません。複数の行を含めることもできますが、1行に指定できるのは1つのデータ値のみです。99 ページの「ロード・ファイルの生成」を参照してください。

注意 これらの手順を実行するとデータベース内のデータに影響する場合があります。Planning DIRECT_DATA_LOAD システム・プロパティを使用すると、データを直接 Essbase にロードできます。現在のリリースでは、このプロパティがデフォルトで TRUE に設定されているため、データは直接 Essbase にロードされます。データが直接 Essbase にロードされないようにするには、DIRECT_DATA_LOAD を FALSE に設定します。

▶ アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してデータをロードするには:

1 情報をロードする前にアプリケーションとアプリケーション・データベースをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

2 Planning システム・プロパティを設定します。

1. Planning アプリケーションにログインします。
2. 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」を選択して、「システム・プロパティ」タブをクリックします。
3. DIRECT_DATA_LOAD および DATA_LOAD_FILE_PATH プロパティを設定します。

- DIRECT_DATA_LOAD が TRUE に設定されているか、このプロパティの値を指定していない場合は、情報はロード・ファイル・レコードの処理中に Essbase に直接ロードされます。この方法が正しく機能するには、Planning と Essbase で維持しているアウトラインが同期している必要があります。 .CSV ロード・ファイルでは、Essbase へのリフレッシュが行われていないかぎり、Planning アウトラインの変更が指定されないようにします。
- DIRECT_DATA_LOAD が FALSE に設定されている場合、作成済のアウトライン・ロード・ユーティリティを使用して .CSV ロード・ファイルが処理され、データ・ファイル(.txt)およびルール・ファイル(.rul)が生成されます。これにより、Planning および Essbase アウトラインはデータが同時にロードされないため、同期化する必要はなくなります。変更を適切な時期にリフレッシュしてメタデータの変更を Essbase に伝え、データを Essbase に直接ロードします(たとえば、Oracle Essbase Administration Services を使用します)。

ほとんどのケースでは DIRECT_DATA_LOAD は False に設定し、DATA_LOAD_PATH は作成するデータおよびルール・ファイルで使用される場所と名前に設定します。たとえば、C:/myDirectory/App1.txt のように設定します。これらのプロパティが「プロパティの管理」ページの「システム・プロパティ」タブで設定されていることを確認してください。

4. Planning アプリケーション・サーバーを再起動します。

3 Planning で指定されているドライバ・メンバーにロードする場合は、ドライバ・メンバーをこの手順の説明に従って設定します。それ以外の場合は、次の手順にスキップします。

1. データがロードされる Planning アプリケーションにログオンします。
2. 「管理」、「データ・ロードの設定」を選択します。
3. 「データ・ロード次元」リストから次元を選択します(「勘定科目」など)。これは、データをロードする次元です。たとえば、Planning フォームで行として表示されることがあります。
4. 「ドライバ次元」リストから次元を選択します(「期間」など)。

5. メンバー選択アイコンをクリックして、「ドライバ次元」のメンバーを選択します(「1月」、「2月」、「3月」など)。たとえば、これらのメンバーは Planning フォームに列として表示されることがあります。
4. カンマ区切りのロード・ファイルを生成します。99 ページの「データ・ロード・ファイルの生成」を参照してください。
5. ロード・ファイルをテストし、ユーティリティを実行します。

1. planning1 ディレクトリにインストールされているユーティリティを見つけます。

planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください。

2. ロード・ファイルがエラーなしで解析されたことを確認するには、/N パラメータを使用してユーティリティを実行し、アウトライン・ログ・ファイルを確認し、エラー・メッセージが生成されていないことを確認します。/N でユーティリティを実行しても、データまたはメタデータはロードされませんが、.csv ロード・ファイルの解析が正しく行われることを確認してください。たとえば、このコマンド・ラインを使用し、Planning アプリケーション・テストのロード・ファイルを確認できます。

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline1data3.csv /D:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

3. その後、/N を付けず、1つのスペース、次に適切なパラメータで、大文字小文字が区別されるコマンドを使用して、コマンド・プロンプトからユーティリティを実行します。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /A:test /U:admin /M /I:c:\outline1data3.csv /D:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

Planning 内でドライバ・メンバーを指定せずにデータをロードする場合、/TR を含むユーティリティを実行できます。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline1data3.csv /TR /D:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

アウトライン・ロード・ユーティリティで使用可能なパラメータの詳細は、133 ページの「次元プロパティ」を参照してください。

メタデータのロード

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションのメタデータは、「勘定科目」、「期間」、「年」、「シナリオ」、「バージョン」、「通貨」、「エンティティ」ユーザー定義次元、属性、UDA および「スマート・リスト」に対してロードできます。さらに変数を為替レートについてロードすることもできます。ただし為替レートの値は Planning リレーショナル・テーブルにロードされ、Essbase には直接ロードされないため、メタデータのロードの手順が該当します。

ユーティリティは一度に1つのレコードをロードします。レコードのロードに失敗した場合、メッセージが例外ファイルに書き込まれ、ロードのプロセスが次のレコードで再開します。新規メンバーが追加されると、未指定のプロパティがデフォルト値をとるか、必要に応じて親メンバーのプロパティを継承します。メンバーが存在し、プロパティ値が指定されていない場合、プロパティはそのままとなります。

▶ メタデータをロードするには:

1 ロード・ファイルを生成します。101 ページの「[メタデータ・ロード・ファイルの生成](#)」を参照してください。

2 ロード・ファイルをテストし、ユーティリティを実行します。

1. planning1 ディレクトリにインストールされているアウトライン・ロード・ユーティリティを見つけます。

planning1 ディレクトリの完全パスについては 51 ページの「[EPM Oracle インスタンスについて](#)」を参照してください。

2. ロード・ファイルがエラーなしに解析していることを確認するには、/N を使用してユーティリティを実行し、ログ・ファイルを確認し、エラー・メッセージが生成されていないことを確認します。例:

```
C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning\planning1>OutlineLoad /
A:test /U:admin /M /N /I:c:\outline1_ent.csv /D:Entity /L:c:/
outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

3. これで、コマンド・プロンプトで大文字と小文字を区別するコマンド、スペース、適切なパラメータを使用し、ユーティリティを実行できます。

アウトライン・ロード・ユーティリティで使用できるパラメータの詳細は、133 ページの「[次元プロパティ](#)」を参照してください。

リレーショナル・データ・ソースからのデータおよびメタデータのインポート

サブトピック

- [メタデータのインポート](#)
- [データのインポート](#)

メタデータとデータを、リレーショナル・データベース・ソースからインポートすることもできます。リレーショナル・データベースに含まれるメタデータおよびデータのインポートを実行するには、フラット・ファイルの入力フォーマットに相当する結果セットを戻す外部データベースに対するクエリーを指定します。クエリーとデータベース接続の情報を指定する必要があります。

この機能を使用するユーザーは、リレーショナル・データベース、SQL クエリー言語、および JDBC 接続プロパティをよく理解していることをお勧めします。

Planning アプリケーションの場合、これらのプロパティの例は、システム・データベースの HSPSYS_DATASOURCE テーブルにあり、これはデフォルトでは、EPM System コンフィグレータで「Planning」の「データベースの構成」を選択するとき作成するリレーショナル・データベースにあります。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースからインポートするときには、次のコマンドライン・パラメータを使用できません:

- /IR[:RDBConnectionPropertiesFileName]
- /IRA
- /RIQ:inputQueryOrKey
- /RIC:catalog
- /RID:driver
- /RIR:url
- /RIU:userName
- /RIP:password

注: /IR パラメータと /RIQ パラメータは、どちらか一方しか選択できません。

これらのパラメータの詳細は、[121 ページ](#)の「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」を参照してください。

注意 インポート操作を実行する前に、必ず **Planning** リレーショナル・ストアと **Essbase** データをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

メタデータのインポート

入力として `myprop_relational.properties` ファイル(詳細は後述)を使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行するコマンドラインの例を示します:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_relational.properties
```

このファイルは、JDBC 接続パラメータで示されている `PS2ORAU` アプリケーションから `Test_300` という名前のアプリケーションに、勘定科目メンバーをインポートします。プロパティ・ファイルには、複数のリレーショナル・クエリーを含めることができます。アウトライン・ロード・ユーティリティによって実行されるクエリーは、/RIQ パラメータで決まります。

/RIQ の詳細は、[121 ページ](#)の「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」を参照してください。

例: `myprop_relational.properties` ファイル

```
/S:localhost
```

```

/A:Test_300
/U:admin
/RIQ: ACCOUNT_QUERY

/D:Account
#
ACCOUNT_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Account, (select object_name from hsp_object
where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from HSP_ACCOUNT A, HSP_MEMBER M, HSP_OBJECT
O LEFT OUTER JOIN HSP_STRINGS S ON O.DESCRPTION = S.STRING_SEQ WHERE
O.OBJECT_ID=M.MEMBER_ID AND M.MEMBER_ID = A.ACCOUNT_ID AND M.MEMBER_ID <> M.DIM_ID
ORDER BY O.POSITION
#
ENTITY_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Entity, (select object_name from hsp_object
where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from HSP_ENTITY E, HSP_MEMBER M, HSP_OBJECT
O LEFT OUTER JOIN HSP_STRINGS S ON O.DESCRPTION = S.STRING_SEQ WHERE
O.OBJECT_ID=M.MEMBER_ID AND M.MEMBER_ID = E.ENTITY_ID AND M.MEMBER_ID <> M.DIM_ID
ORDER BY O.POSITION

## jdbc connection
/RIC:PS2ORAU
/RIR:jdbc:oracle:thin:@[scl34390]:1521:orcl
/RID:oracle.jdbc.OracleDriver
/RIU:PS2ORAU
/RIP:password

#end myprop_relational.properties file

```

次の例では、ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの両方の属性次元に 30 文字を超える「Size012345678901234567890123456789」という名前があり、これは Oracle の列ヘッダー制限を超えています。次の例のクエリーは、ターゲット・アプリケーションにインポートされるソースから結果セットを作成するために使用します。OLU がこの列を属性次元名として使用できるためには、長い次元名を O.OBJECT_NAME 列の別名にする必要があります。

例: リレーショナル・データ・ソースから Planning アプリケーションにインポートするプロパティ・ファイル

```

/A:TARGET
/U:admin
/IR

/DA:Size012345678901234567890123456789:Entity

/C2A:(OBJECT_NAME,Size012345678901234567890123456789)

ATTRIB_DIM_VAL_QUERY_ORACLE1=SELECT O.OBJECT_NAME, (select object_name from
PS3ORA.hsp_object where object_id = O.PARENT_ID) as Parent from PS3ORA.HSP_OBJECT O
WHERE O.OBJECT_ID IN (select AM.ATTR_MEM_ID from PS3ORA.hsp_attribute_member AM,
PS3ORA.HSP_OBJECT O where AM.ATTR_ID =(select OBJECT_ID from PS3ORA.hsp_object where
OBJECT_NAME='Size012345678901234567890123456789')) ORDER BY O.POSITION

```

例: リレーショナル・データ・ソースから Planning アプリケーションに別名とともにインポートするプロパティ・ファイル

```
/A:expe
/U:admin
/IRA
/D:Entity
/C2A:(Member as
Entity,anotherReallyLongAliasForAColumnNameItsForEntityThisTimeDifferentFromExport),
(Parent, anotherAliasForParent)

/RIQ:select
anotherReallyLongAliasForAColumnNameItsForEntityThisTimeDifferentFromExport, Parent
from test
```

前の例について、次のように仮定します:

- 「Test」テーブルには Member と Parent の 2 つの列があり、1 つのエントリがあります:

Member	Parent
-----	-----
Ex	Entity

- エンティティ次元には、ルート(Entity)の下に 1 つのメンバー e1 があります。

前のクエリーの実行後、エンティティ次元で Ex というメンバーが追加または更新されます。

インポート時には、列の別名は単純な文字列の置換として扱われ、そのためにこの場合は as 句が機能します。Member 列に Entity という名前が付けられている場合は、'Member as'を削除します。

例: /C2A パラメータを使用して別名を別名テーブルにインポート

```
/A:TARGET
/U:admin
/IR
/D:Entity

/RIQ:ENT_ALIAS_ASSIGNMENT_QUERY

/C2A:(AliasTableName, Alias: LongAliasTableName012345678901234567890123)

ENT_ALIAS_ASSIGNMENT_QUERY=SELECT O.OBJECT_NAME as Entity, (select object_name from
hsp_object where OBJECT_ID=O.PARENT_ID) as Parent, (select OBJECT_NAME from
HSP_OBJECT where OBJECT_ID = AL.ALIAS_ID) as AliasTableName from hsp_object O,
HSP_ALIAS AL where (AL.ALIAS_TBL_ID = (select OBJECT_ID from HSP_OBJECT where
OBJECT_NAME = ' LongAliasTableName012345678901234567890123') AND
O.OBJECT_ID=AL.MEMBER_ID)
```

注： 前述の例では、ターゲットの Planning アプリケーションとソースの両方に
テーブルの長い別名が含まれます。

例: /C2A パラメータを使用して列名をプロパティ名にマップ

```
/RIQ:select
c1,c2,c3,c4,c5,c6,c7,c8,c9,c10,c11,c12,c13,c14,c15,c16,c17,c18,c19,c20,c21,c22,c23,c2
4,c25,c26,c27 from table28

/c2a:(c1, Account), \
(c2, Parent), \
(c3, Alias: Default), \
(c4, Valid For Consolidations), \
(c5, Data Storage), \
(c6, Two Pass Calculation), \
(c7, Description), \
(c8, Formula), \
(c9, UDA), \
(c10, Smart List), \
(c11, Data Type), \
(c12, Hierarchy Type), \
(c13, Enable for Dynamic Children), \
(c14, Number of Possible Dynamic Children), \
(c15, Access Granted to Member Creator), \
(c16, Account Type), \
(c17, Time Balance), \
(c18, Skip Value), \
(c19, Exchange Rate Type), \
(c20, Variance Reporting), \
(c21, Source Plan Type), \
(c22, Plan Type (Plan1)), \
(c23, Aggregation (Plan1)), \
(c24, Plan Type (Plan2)), \
(c25, Aggregation (Plan2)), \
(c26, Plan Type (Plan3)), \
(c27, Aggregation (Plan3))
```

データのインポート

サブトピック

- [/ICB パラメータを使用した Essbase ブロックの消去](#)
- [/SDM パラメータを使用したアウトライン・ロード・ユーティリティのドライバの設定](#)

データのインポート操作を実行するときは、次の点が重要です:

- ドライバ・メンバーのデータ型は、インポートされる値と同じである必要があります。そうでない場合、データ・エラーが発生します。日付フィールド

には/DF スイッチでフォーマットを指定する必要があり、ドライバ・メンバーのデータ型は日付型である必要があります。同様に、アプリケーションと指定されたスマート・リストにスマート・リスト値が存在する場合、スマート・リスト・メンバーはスマートリスト・タイプである必要があります。テキスト値は、テキスト型のドライバ・メンバーにバインドする必要があります。

- ドライバ・メンバー値を正しく評価するには、ドライバ・メンバー・タイプに加えて、次元の評価順を設定する必要があります。
- アウトライン・ロード・ユーティリティのデータをインポートするとき、#missing 値はインポートされません。正しい Essbase セルに#missing 値が必ず含まれるように、すべてのデータ・インポートで/ICB コマンドを使用してロードするブロックを消去(ブロックのセルをすべて#missing に設定する)します。[113 ページの「/ICB パラメータを使用した Essbase ブロックの消去」](#)を参照してください。

▶ リレーショナル・データベースからデータをインポートするには:

- 1 **Planning** リレーショナル・ストアと Essbase データをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。
- 2 アプリケーションでリレーショナル・テーブルを作成します。

次の図は、データベース Test_300A にある Data_Table1 という名前のリレーショナル・テーブルの例です:

SCL34390.Test...ba.Data_Table1										
Entity	Data Load Cub...	Point-of-View	aCur	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText	aUnspec	
1	Plan1	"FY12, Ron, Current, BU Version_1, Local, Jan"	70	80	.75	b	6-15-2013	text3	10	
*	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL

- 3 **Planning** アプリケーション・フォームを作成します。

次の図は、Test_300 という名前の Planning フォームの例です:

- 4 .properties ファイルを作成します。

注: 有効な列見出し名は SELECT 文の列名から取得され、これは as 句で上書きできます。

次に、myprop_relational.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

```

/A:TEST_300
/U:admin
/IR
/RIQ:DATA_QUERY2
/D:Entity

```

```
DATA_IMPORT_QUERY3 = SELECT Entity , "DATA LOAD CUBE NAME" as 'Data Load Cube
```



```
Name', "AUNSPEC" as "aUnspec", "ACUR" as "Salary_aCur", "ANONCUR" as
"aNonCur", "APER" as "aPer", "ASL" as "aSL", "ADATE" as "aDate", "ATEXT" as
"aText", "POINT-OF-VIEW" as "Point-of-View" from Data_Table1
```

```
/RIC:Test_300A
/RIR:jdbc:weblogic:sqlserver://[sc134390]:1433;DatabaseName=Test_300A
/RID:weblogic.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver
/RIU:sa
/RIP:password
```

- 5 前の手順で作成した.properties ファイルに対してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行します。

たとえば次のコマンドラインを実行すると、Test_300 という Planning アプリケーションで、データベース Test_300A にあるリレーショナル・テーブル Data_Table1 から Planning フォームにデータがインポートされます:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_relational.properties
```

生成される Planning アプリケーション・フォームは、次のようになります:

	Salary_aCur	aUnspec	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText
e1	70	10	80	75%	b_Label	6/15/13	text3

- 6 Essbase ログ・ファイルを確認し、インポート操作の結果を検証します。

/ICB パラメータを使用した Essbase ブロックの消去

アウトライン・ロード・ユーティリティのデータをインポートするとき、#missing 値はインポートされません。正しい Essbase セルに #missing 値が必ず含まれるように、すべてのデータ・インポートで /ICB コマンドを使用してロードするブロックを消去(ブロックのセルをすべて #missing に設定する)します。

たとえば、次の図の ACUR の値は、空白または #missing です:

AUNSPEC	ACUR	ANONCUR	APER	ASL	ADATE	ATEXT	ENTITY	POINT-OF-VIEW	DATA LOAD CUBE NAME
30		50	0%	07-15-2012	text1	e1	'FY12,Current, B... Plan1'		

生成される Planning フォームの aCur の値は、空白または #missing です:

aUnspec	aCur	aNonCur	aPer	aSL	aDate	aText
e1	30	50	0%	b_Label	7/15/12	text1

次に、/ICB パラメータを含む my_prop.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

```
コマンドライン: OutlineLoad /CP:c:/my_prop.properties
```

プロパティ・ファイル:

```
/A:DB2APP
/U:admin

/ICB:e1,"aUnspec,aCur,aNonCur,aPer,aSL,aDate,aText","FY12,Current, BU Version_1,
Local,Jan",Plan1

#Use /IRA switch if relational table from which data is imported is in the same
relational database as the Planning app (e.g. DB2APP)
/IRA
/RIQ:DATA_IMPORT_QUERY3

/D:Entity
#/C
#/M
DATA_IMPORT_QUERY3 = SELECT "ENTITY" as "Entity" ,"DATA LOAD CUBE NAME" as "Data Load
Cube Name","AUNSPEC" as "aUnspec","ACUR" as "aCur","ANONCUR" as "aNonCur","APER" as
"aPer","ASL" as "aSL","ADATE" as "aDate","ATEXT" as "aText","POINT-OF-VIEW" as "Point-
of-View" from DataTable1
```

/SDM パラメータを使用したアウトライン・ロード・ユーティリティのドライバの設定

データをインポートする前に、/SDM パラメータを使用し、アウトライン・ロード・ユーティリティを通じてロード次元とドライバ・メンバーを設定できます。Planning アプリケーションで、「管理」/「データ・ロードの設定」ユーザー・インタフェースを使用するかわりにこれを使用できます。

次に、/SDM パラメータを含む my_prop.properties という名前のプロパティ・ファイルの例を示します:

コマンドライン: OutlineLoad /CP:c:/my_prop.properties

プロパティ・ファイル:

```
/A:Test_300
/U:admin

/ICB:"aUnspec,aPer","Jan,Feb,Mar","FY12,Current, BU Version_1, Local,e1,Ron",Plan1

#Use /IRA switch if relational table from which data is imported is in the same
relational database as the Planning app (e.g. Test_300)
/IRA

/SDM:Account,"Jan,Feb,Mar",Plan1
/RIQ:DATA_IMPORT_QUERY5

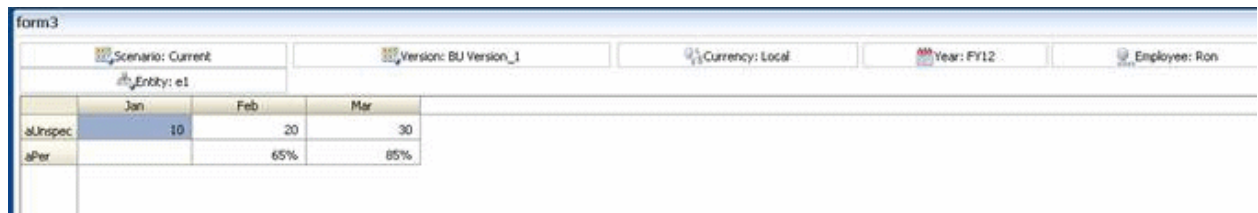
/D:Account

DATA_IMPORT_QUERY5 = SELECT Account ,"Data Load Cube Name", Jan,Feb,Mar,"Point-of-
View" from Data_Table2
```

次の例は、リレーショナル・テーブルです:

	Account	Data Load Cub...	Point-of-View	Jan	Feb	Mar
	aUnspec	Plan1	"FY12, Ron,Curr...	10	20	30
	aPer	Plan1	"FY12, Ron,Curr...		0.65	0.85
※	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL	NULL

生成される Planning アプリケーション・フォームは、次のようになります:



	Jan	Feb	Mar
aUnspec	10	20	30
aPer		65%	85%

Planning アプリケーションからフラット・ファイルへのデータおよびメタデータのエクスポート

サブトピック

- アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したデータのエクスポート
- アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したデータのエクスポート

myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、Test_300 Planning アプリケーションの /EDD パラメータで指定されている交差に含まれるデータが、/ED パラメータで指定されている c:\ドライブの output_file.1-1.csv というフラット・ファイルにエクスポートされます。

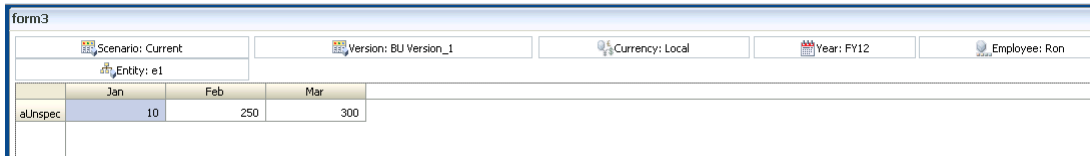
myprop_dataexport.properties ファイル:

```
/S:localhost
/A:Test_300
/U:admin

/ED:c:/output_file
/EDD:aUnspec, "Jan, Feb, Mar", "FY12, Current, Local, e1, BU Version_1, Ron", Plan1
```

/ED および /EDD パラメータの詳細は、121 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」を参照してください。

Test_300 アプリケーションに次のフォームが含まれる場合、
myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、output_file.1-1.csv から output_file.n-n.csv までのフォームのファイルにデータがエクスポートされます。n は生成されるファイルの数です。



	Jan	Feb	Mar
aUnspec	10	250	300

入力として myprop_dataexport.properties ファイルを使用してアウトライン・ロード・ユーティリティを実行するコマンドラインの例を次に示します:

```
OutlineLoad /CP:c:/myprop_dataexport.properties
```

output_file.1-1.csv ファイル:

```
Account, Jan, Feb, Mar, Point-of-View, Data Load Cube Name  
aUnspec,10, 250, 300, "FY12, Current, BU Version_1, Local, e1, Ron", Plan1
```

メンバー関数は、/EDD パラメータとともに使用できます。

ロード次元が従業員、ドライバ次元が勘定科目の場合、次の文を使用してデータをエクスポートできます:

```
/EDD:Ilvl0Descendants(John), Ilvl0Descendants(Accounts), "FY12, Current, Local, e1, BU  
Version_1,Jan", Plan1
```

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用したメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、次元のメタデータを、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義の次元、属性、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層の.csv ファイルにエクスポートできます。このユーティリティで使用するパラメータの詳細は、[121 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」](#)を参照してください。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してメタデータをエクスポートするには、次元名を指定し、エクスポートする先のファイル名を指定します。たとえば、次のコマンドを使用して、エンティティ次元のメタデータを ent_export.csv というファイルにエクスポートします:

```
OutlineLoad /A:Acpt1 /U:admin /-M /E:c:/ent_export.csv /D:Entity /L:c:/  
outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 名前にスペースを含むユーザー定義の次元をエクスポート

名前にスペースを含むユーザー定義の次元をエクスポートする場合は名前を引用符(" ")で囲みます。たとえば、次のコマンドを使用して、ユーザー定義のライン・アイテム次元のメタデータをエクスポートします:

```
OutlineLoad /A:pln1dv /U:admin /-M /E:c:/LineItemUserDim_export.csv /D:"Line Item" /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 属性次元のエクスポート

属性次元をエクスポートする場合、次の例に示すように、/D スイッチを属性次元の名前とともに使用し、属性次元タイプは指定しません:

```
OutlineLoad /A:pln1dv /U:admin /E:c:/AttribTextColor_export.csv /D:Color /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

例: 「説明」テキスト・フィールドに改行文字を含むエクスポート。

改行文字は「説明」および「式」のテキスト・フィールドでサポートされます。次の例に示すように、改行文字を含むフィールドは引用符で囲む必要があります:

```
Currency, Description, Data Storage
USD,      "Description Line 1
          Description Line 2
          Description Line 3" , Store
EUR,      "description for EUR" , Store
```

メタデータのエクスポートの考慮事項:

- UDA は独立した次元としてエクスポートできません。式と同様に、割り当てられたメンバーとともにエクスポートされます。
- DTS 期間タイプは認識されますが、アウトライン・ロード・ユーティリティではサポートされません。DTS 情報をエクスポートしようとする、ユーティリティによりログ・ファイルにエラーが表示されます。
- エクスポートされたメンバの別名がデフォルトではない別名テーブルにあり、そのメンバーを別のアプリケーションにインポートする場合、インポート前に別名テーブルをアプリケーションに手動で作成する必要があります。

Planning アプリケーションからリレーショナル・データ・ソースへのメタデータのエクスポート

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用して、メタデータをリレーショナル・データ・ソースにエクスポートできます。

注： アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースにデータをエクスポートすることはできません。

この機能を使用するユーザーは、リレーショナル・データベース、SQL クエリ言語、および JDBC 接続プロパティをよく理解していることをお勧めします。

Planning アプリケーションの場合、これらのプロパティの例は、システム・データベースの HSPSYS_DATASOURCE テーブルにあり、これはデフォルトでは、EPM System コンフィグレータで「Planning」の「データベースの構成」を選択するとき作成するリレーショナル・データベースにあります。

アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してリレーショナル・データ・ソースにエクスポートするときには、次のコマンドライン・パラメータを使用できません:

- /ER[:RDBConnectionPropertiesFileName]
- /ERA
- /REQ:exportQueryOrKey
- /REC:catalog
- /RED:driver
- /RER:url
- /REU:userName
- /REP:password

注： /ER パラメータと /REQ パラメータは、どちらか一方しか選択できません。

これらのパラメータの詳細は、121 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ」を参照してください。

エクスポート・クエリは、INSERT INTO<tableName>[(column1, column2, ...)] VALUES (property1, property2, ...) という形式になります

次に注意してください:

- <tableName>は、エクスポートした値が挿入されるテーブルの名前です
- (column1, column2, ...)は、オプションで指定する列の名前で、値(プロパティ)はテーブルに挿入されます
- (property1, property2, ...)は厳密には値ではなく、メンバー・プロパティ名(列ヘッダー)です

注： ヘッダー・レコードとは異なり、メンバー名は次元名ではなく 'Member' で指定されます。

例:

Planning のエンティティ次元に、「e1's description」という説明を持つ「e1」と、「e11's description」という説明を持つ「e11」との2つのメンバーがあると仮定しま

す。E1 はエンティティの下にあり、e11 は e1 の下にあります。したがって、プランニング次元は次のようになります:

エンティティ

- e1
 - e11

宛先テーブル my_table に、column1、column2、column3 の 3 つの列があると仮定します

Insert into my_table values (Member, Parent, Description) を実行すると、my_table に次の行が追加されます:

```
E1  e1's description  Entity
```

```
E11 e2's description  e1
```

これは、次と同じです:

```
Insert into my_table (column1, column2, column3) values (Member, Parent, Description)
```

注: テーブルには、指定したプロパティの数以上の列がある必要があります。

クエリーに指定できる特殊な演算子として、<columns>と<properties>の 2 つがあります。<columns>は、テーブルのすべての列名に拡張されます。<properties>は、エクスポートされる次元のすべてのプロパティに拡張され、これは/M スイッチで示されます。

```
Insert into my_table values (<properties>)
```

これはすべてのエンティティ・プロパティを my_table にロードします。

これは、次と同じです:

```
Insert into my_table (column1, column2, ... column23) values (<properties>)
```

my_table の列の数がプロパティの数と等しい場合、次のクエリーは同じ結果になります:

```
Insert into my_table (<columns>) values (<properties>)
```

テーブル列の名前を使用してメンバー・プロパティを抽出することもできます。たとえば sample_table には、Member、Parent、Description の列があります。次のクエリーは、最初の例と同じ結果になります:

```
Insert into sample_table values (<columns>)
```

```
Insert into sample_table (<columns>) values (<columns>)
```

例: リレーショナル・データ・ソースにメタデータをエクスポートするプロパティ・ファイル

```
    /A:App1
/U:admin

/ERA

/D:Entity

/REQ:ENTITY_EXPORT_QUERY1

ENTITY_EXPORT_QUERY1=INSERT INTO DataTable_Entity1 VALUES (Member, Parent,
Description, Color)

#ENTITY_EXPORT_QUERY1=Insert into PS3ORA.DataTable_Entity1 (Member, Parent,
Description, Color) values (Member, Parent, Description, Color)
```

例: アウトラインからリレーショナル・データ・ソースに別名とともにエクスポートするプロパティ・ファイル

```
    /A:expe
/U:admin
/ERA
/D:Entity
/REQ:ENTITY_EXPORT_QUERY1
/C2A:(Member,
reallyLongAliasNameForMemberColumnWhichWillReceiveEntityNameFromProperty)

ENTITY_EXPORT_QUERY1=Insert into test
(reallyLongAliasNameForMemberColumnWhichWillReceiveEntityNameFromProperty, Parent)
values (Member, Parent)
```

前の例について、次のように仮定します:

- 「Test」テーブルには Member と Parent の 2 つの列があり、テーブルは空です。
- エンティティ次元には、ルート(Entity)の下に 1 つのメンバー e1 があります。

前のクエリーを実行すると、「テスト」テーブルには 1 つのエントリが追加されます:

Member	Parent
E1	Entity

アウトライン・ロード・ユーティリティのコマンド・ライン・パラメータ

次のコマンド・ラインをアウトライン・ロード・ユーティリティで使用できます。ユーティリティを実行した後で、例外ファイルとログ・ファイルをレビューし、結果を確認できます。ログ・ファイルでエラーがレポートされていない場合、インポートされたメタデータおよびデータにアプリケーションでアクセスできます。アプリケーション・サーバーを再起動する必要はありません。

```
HspOutlineLoad [-f:passwordFile] [/S:server] /A:application /
U:userName [/CP:commandPropertieFileName] [/M] [ [/I:inputFileName|/
IR[:RDBConnectionPropertiesFileName]|/IRA|/E:outputFileName|/
ED:outputFileNameStem] [/EDD:dataExportSpecification] [/
ICB:blockSpecification] [/SDM:driverMemberSpecification] /
D[U]:loadDimensionName|/DA:attributeDimensionName:baseDimensionName|
TR] [/N] [[/R] [/DPU]] [/C] [/F] [/K] [/8] [/DF:datePattern] [/
RIQ:inputQueryOrKey] [/RIC:catalog /RID:driver /RIR:url /
RIU:userName [/RIP:password]] [/X:exceptionFileName] [L:logFileName]
[/?]
```

パラメータ	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。
<code>/S: server</code>	アプリケーションが存在するサーバー。指定しない場合、ローカルホストが使用されます。
<code>/A: application</code>	インポート先の Planning アプリケーションの名前。
<code>/U: userName</code>	アプリケーションにログオンするときに使用するユーザー名。
<code>/CP: commandPropertieFileName</code>	コマンドライン引数を含むファイルを指定します。このファイルとコマンドライン引数の組合せで、実行するオプションが構成されます。コマンド・プロパティ・ファイルとコマンドラインの両方に引数が指定されている場合は、コマンドライン引数が優先されます。 97 ページの「 コマンド・プロパティ・ファイル 」を参照してください。
<code>/M</code>	ロード可能な次元の完全に修飾されたヘッダー・レコードをアプリケーションで生成します。この情報を表示しない場合には、 <code>/-M</code> を使用します(デフォルト)。
<code>/I: inputFileName</code>	.CSV フォーマットでヘッダー・レコードとデータ・レコードを含むデータ・ロード入力ファイルを指定します。データ・ロード次元(<code>/D</code> オプションまたは <code>/TR</code> オプション)も指定する必要があります。 <code>/ICB</code> スイッチを指定すると、Essbase データを消去できます。

パラメータ	説明
/IR[:RDBCConnectionPropertiesFileName]	入力レコードをリレーショナル・データベース・ソースから取得することを指定します。オプションのプロパティ・ファイルを指定すると、必要なリレーショナル接続スイッチのプロパティ(/RIQ、/RIC、/RID、/RIR、/RIU、/RIP)の一部または全部がプロパティ・ファイルに含まれることとなります。データ・ロード次元(/D オプション)も指定する必要があります。/ICB スイッチを指定すると、Essbase データを消去できます。
/IRA	/IR スイッチと同じですが、必要な RDB JDBC 接続プロパティ(/RIQ、/RIC、/RID、/RIR、/RIU、/RIP スイッチ値)が、現在接続されているアプリケーションの RDB データ・ソースから取得される点は異なります。データ・ロード次元(/D オプション)も指定する必要があります。/ICB スイッチを指定すると、Essbase データを消去できます。
/ICB: blockSpecification	インポート操作(/I、/IR、/IRA)を実行する前に、Essbase ブロックを消去します。 (\ <code>"<loadDimensionMembers,...></code> 、\ <code>"<driverMembers,...></code> 、\ <code>"<point-of-view members,...></code> 、\ <code><dataLoadCubeName>"</code> というフォームの文字列。)
/ALS	別名テーブルが存在しない場合はインポート時に作成します(デフォルト)。参照される別名テーブルが存在しない場合にエラーを生成するには、/ALS を使用します。
/E: outputFileName	/D スイッチで指定された次元を、指定した出力ファイルにエクスポートします(プランニング・ユニット階層をエクスポートする場合、このファイルのフォーマットはプランニング・ユニット階層のエクスポート用に定義されたフォーマットです)。
/ED: outputFileNameStem	Planning ドライバ・メンバーでフォーマットされたデータ・ファイルにデータをエクスポートします。/EDD スイッチも設定する必要があります。ファイルは、\ <code><fileNameStem>.1-n.csv</code> から \ <code><fileNameStem>.n-n.csv</code> までのフォームで生成されます。n は生成されるファイルの番号です。
/EDH	出力の .CSV ファイルで、Planning の内部 HEADERBLOCK フォーマットの次元ヘッダーをエクスポートします。インポート前に基本次元と属性次元を動的に作成するには、インポート時にこれを使用します。
/ER[:RDBCConnectionPropertiesFileName]	エクスポート・レコードをリレーショナル・データベース・テーブルに書き込むことを指定します。/EDD スイッチを設定すると、データもエクスポートされます。オプションのプロパティ・ファイルを指定すると、必要なリレーショナル接続スイッチのプロパティ(/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU、and /REP)の一部または全部がプロパティ・ファイルに含まれることとなります。/D スイッチを使用して、データ・ロード次元も指定する必要があります。

パラメータ	説明
/ERA	/ER スイッチと同じですが、必要な RDB JDBC 接続プロパティ(/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU、/REP スイッチ値)が、現在接続されているアプリケーションの RDB データ・ソースから取得される点は異なります。/EDD スイッチを設定すると、データがエクスポートされます。/D スイッチを使用して、データ・ロード次元も指定する必要があります。
/EDD: dataExportSpecification	Planning ドライバ・メンバーでフォーマットされたデータ・ファイルをエクスポートするフォーマットを指定します。<loadDimensionMembers,...>、<driverMembers,...>、<point-of-view members,...>、<dataLoadCubeName>というフォームの文字列。
/SDM: driverMemberSpecification	インポート操作のときにのみ(/I、/IR、/IRA)、アプリケーション(/A)の基本ロード次元でドライバ・メンバーを設定します。(\ "<baseLoadDimension>、\ "<driverMembers,...>\ "、<PlanTypeName>" というフォームの文字列)
/D: loadDimensionName	メンバー・フィールドがロード・ファイルのヘッダー・レコードに対応している、ロードされる次元。さらにロード・ファイル(/I)か、/E スイッチでエクスポートするプランニング・ユニット階層を指定する必要があります。 /DU、/DA[T]、/DAN、/DAB および/DAD を使用してユーザー定義次元および属性をロードするには、次の行を参照してください。
/DU: userDefinedLoadDimensionName	ロードされるユーザー定義次元。この名前の次元が存在しない場合には作成されます。
/DA[T]: attributeLoadDimensionName:baseDimensionName	ロードされるテキスト属性次元。基本次元に関連付けられた、この名前を持つ属性次元が存在しない場合には作成されます。
/DAN: attributeLoadDimensionName:baseDimensionName	ロードされる数値属性次元。基本次元に関連付けられた、この名前を持つ属性次元が存在しない場合には作成されます。
/DAB: attributeLoadDimensionName:baseDimensionName	ロードされるブール属性次元。基本次元に関連付けられた、この名前を持つ属性次元が存在しない場合に作成されます。
/DAD: attributeLoadDimensionName:baseDimensionName	ロードされる日付属性次元。基本次元に関連付けられた、この名前を持つ属性次元が存在しない場合に作成されます。
/DX:HSP_Rates	HSP_Rates 次元をロードし、為替レート・テーブルが存在しない場合は作成します。
/DS:HSP_SMARTLISTS	スマート・リスト次元およびスマート・リスト次元エントリをロードします。

パラメータ	説明
/TR	ドライバ・メンバーが、.CSV ファイルの「ドライバ・メンバー」列に指定されている場合、データをロードします。ドライバ・メンバー以外のすべてのメンバーを、「視点(POV)」列に指定する必要があります。/TR を使用すると、.CSV ファイルの各行に 1 つの値をロードできます。
/T	新規メンバーを追加するときに未指定のプラン・タイプ設定を継承します(デフォルト)。メンバーのプラン・タイプ設定の明示的な設定を強制するには、/-T を使用します。
/N	データまたはメタデータをロードせずにロード・ファイルを解析することにより「リハーサル」を実行します。データまたはメタデータのロード中にロード・ファイルを解析するには(デフォルト)、/-N を使用します(または/N パラメータを指定しません)。
/O	UDA を例外として(デフォルト)、ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を維持します。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視するには、/-O を使用します。
/H	UDA を例外として(デフォルト)、親-子の順序で入力コードに順序をつけます。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視するには、/-H を使用します。このオプションはより高速で、メモリー使用量が小さくなります。
/R	ロードを実行する前にロード次元のすべてのメンバーを削除します。ロード次元のすべてのメンバーを維持するには(デフォルト)、/-R を使用します(または/R パラメータを指定しない)。さらに/U も参照してください。 注： /R には注意してください。このオプションは、属性バインディングおよび承認状態を除去します。
/DPU	/R パラメータですべてのプランニング・ユニットを削除するか、プランニング・ユニットのメンバーの削除が試行された場合にエラーを表示します。削除操作でプランニング・ユニットのメンバーが削除されないようにするには、/-DPU を使用します。
/C	メタデータ・ロードの後でキューブ・リフレッシュを実行します。キューブ・リフレッシュを実行しない場合には、/-C を使用します(デフォルト)。さらに/F も参照してください。
/F	/C オプションでリフレッシュするときにセキュリティ・フィルタを作成します。セキュリティ・フィルタをリフレッシュしない場合に(デフォルト)、/-F を使用します。(このオプションはユーザーをアプリケーションにプロビジョニングしません。現在存在しているユーザーにセキュリティ・フィルタを作成するのみです。ユーザーは他の方法でアプリケーションにプロビジョニングする可能性があります。)このオプションを有効にするには、/C も指定する必要があります。

パラメータ	説明
/K	ロードする前にロード次元をロックすること(デフォルト)を推奨します。次元をロックしたくない場合には、/-Kを使用します(/Nを使用しないかぎり推奨しません)。
/8	入力、出力、ログ、例外の各ファイルで UTF-8 エンコーディングを指定し、出力ファイルに UTF-8 BOM マーカーを追加します(デフォルト)。UTF-8 エンコーディングを設定しない場合は /-8 を使用します。
/DF:datePattern	<p>日付データ変換に関するデフォルト日付パターンを、指定されたパターンにオーバーライドします。パターンは、次のいずれかにする必要があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● MM-DD-YYYY ● DD-MM-YYYY ● YYYY-MM-DD <p>デフォルトの日付パターン設定を使用するには、 /-DF を使用します。</p>
/RIQ:inputQueryOrKey	インポート操作の入力を生成するために実行される SQL クエリーを値にとるコマンド引数プロパティ・ファイル(/CP スイッチ)における SQL クエリーまたはキー。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用するには、 /RIC、 /RID、 /RIR、 /RIU、 /RIP の各スイッチも設定する必要があります。
/RIC:catalog	入力 RDB 接続の RDB JDBC カタログ名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用するには、 /RIQ、 /RID、 /RIR、 /RIU、 /RIP の各スイッチも設定する必要があります。 /IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。
/RID:driver	入力 RDB 接続の RDB JDBC ドライバ名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用するには、 /RIQ、 /RIC、 /RIR、 /RIU、 /RIP の各スイッチも設定する必要があります。 /IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。
/RIR:url	入力 RDB 接続の RDB JDBC の URL。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用するには、 /RIQ、 /RIC、 /RID、 /RIU、 /RIP の各スイッチも設定する必要があります。 /IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。
/RIU:userName	入力 RDB 接続の RDB JDBC ユーザー名。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があります。使用するには、 /RIQ、 /RIC、 /RID、 /RIR、 /RIP の各スイッチも設定する必要があります。 /IRA スイッチを使用する場合、このスイッチを指定する必要はありません。

パラメータ	説明
/RIP:password	<p>入力 RDB 接続の RDB JDBC パスワード。これを使用するには /IR スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/RIQ、/RIC、/RID、/RIR、/RIU の各スイッチも設定する必要があります。/IRA スイッチを使用する場合、/RIP スイッチを指定する必要はありません。</p> <p>.properties ファイルで最初に指定するときは、暗号化されていない形でパスワードを入力します。アウトライン・ロード・ユーティリティを実行すると、プロパティ・ファイルは /RIP パスワードの暗号化された値で書き換えられます。プロパティ・ファイルでこの値を指定しなかった場合は、パスワードを入力するコマンドライン・プロンプトが表示されます。</p>
/REQ:exportQueryOrKey	<p>エクスポートされるフォームの値を指定する SQL クエリーを値にとるコマンド引数プロパティ・ファイル(/CP スイッチ)における SQL クエリーまたはキー。'INSERT INTO<tableName> (column1, column2, ...) VALUES (property1, property2, ...)' ここで、properties はフラット・ファイルの列ヘッダー・レコードで見つかる Planning メンバー・プロパティです。これを使用するには /ER または /ERA スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REC、/RED、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/REC:catalog	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC カタログ名。これを使用するには /ER スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REQ、/RED、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/RED:driver	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC ドライバ名。これを使用するには /ER スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REQ、/REC、/RER、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/RER:url	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC の URL。これを使用するには /ER スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/REU、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
/REU:userName	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC ユーザー名。これを使用するには /ER スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/RER、/REP の各スイッチも設定する必要があります。</p>
REP:password	<p>エクスポート RDB 接続の RDB JDBC パスワード。これを使用するには /ER スイッチを設定する必要があり、使用する場合には、/REQ、/REC、/RED、/RER、/REU の各スイッチも設定する必要があります。</p> <p>コマンド・プロパティ・ファイルでこの値を指定しなかった場合は、パスワードを入力するコマンドライン・プロンプトが表示されます。</p>

パラメータ	説明
/C2A:(column1, alias1), (column2, alias2), .. .	/RIQ および/REQ コマンドの列の別名を作成します。 RDBMS で列や列別名の文字の長さ制限を回避するには、このパラメータを使用します。 注： 列に別名が指定されている場合は、このコマンドの割当てより優先されます。
/X: exceptionFileName	ロード中に発生する例外を含むファイルを指定します。(ファイル名が指定されていない場合、情報は stderr と呼ばれるファイルに書き込まれます。)
/L: logFileName	ステータスおよび情報メッセージを含んでいるファイルを指定します。(ファイル名が指定されない場合、情報は stdout と呼ばれるファイルに書き込まれます。)
/?	使用法のテキストを表示します。

例: 数値属性次元および値をロードし、エンティティ次元に関連付けます。(属性次元が存在しない場合には作成されますが、属性値は基本番号に割り当てられません。)

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_attribvals_text.csv /
DAN:NumericAttrib:Entity /L:c:/outlineLoad.log /X:c:/outlineLoad.exc
```

```
NumericAttrib,Parent
```

```
One,NumericAttrib
```

```
1,One
```

```
2,NumericAttrib
```

例: 為替レートをロードし、EUR を通貨次元のメンバーとして追加し、Planning アプリケーションの既存の年に一致するように.csv ファイルで年を変更します。為替レート・テーブルが存在しない場合は、Planning アプリケーションに作成されます。

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_rates.csv /DX:HSP_Rates /L:c:/
OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
Table, To Currency, From Currency, Method, Historical, Beg Balance, Year, Period,
Average, Ending
```

```
FX1 , USD, EUR, multiply, 1, 2, FY08, Jan, 3, 4
```

FX1 , USD, EUR, , , , FY09, Feb, 5, 6

例: 「週次配分」を「445 を使用」に設定します。

Account, Parent, Use 445

a11,a1,1

例: UDA で使用可能なプロパティをすべて含む.csv ファイルをロードします。UDA はロードされ、次元に関連付けられますが、次元のどのメンバーにも割り当てられません。

```
OutlineLoad /A:Test /U:admin /M /I:c:/outline1_uda.csv /D:UDA /L:c:/OutlineLogs/  
outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

Dimension,UDA

Account,New2

例: 通貨記号を指定しない通貨について.csv ファイルをロードします。この場合、Planning アプリケーションのこの通貨の記号は ISO 記号、EUR に設定されます。スケールのデフォルトは 1 です。

Currency, Parent, Symbol, Scale

EUR,,,

例: 記号を新しい通貨の名前に設定する通貨について.csv ファイルをロードします。記号は通貨 NewCurr1 について Planning アプリケーションで NewCurr1 に設定されます。通貨名は 8 文字に制限されます。

Currency, Parent, Symbol, Scale

NewCurr1,,,

例: 暗号化されたパスワードを持つ-f パラメータを使用します

暗号化されたパスワード・ファイルを生成した場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとして-fを使用し、パスワードを入力せずにアウトライン・ロード・ユーティリティを実行できます。たとえば、PasswordEncryption ユーティリティ

を使用して encrypt.txt と呼ばれるパスワード・ファイルを作成した場合、このコマンド・ラインを使用できたはずでず。

```
OutlineLoad -f:c:\encrypt.txt /A:acct /U:admin /M /I:c:/outline1_accounts.csv /
D:Account /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

例: /O パラメータおよび.csv ロード・ファイルの順序

次の.csv ロード・ファイルで、エンティティ・メンバー e1 および e2 がすでにエンティティ次元に存在する場合、e3 がロード・ファイルの最初にある場合でもそれを最後の兄弟として追加できます。/O を使用した場合、e3 は最初の兄弟としてロードされます。/O はデフォルトであるため、最後の兄弟として e3 をロードさせるには /-O を指定する必要があります。

```
Entity,Parent,Data Storage,TextAttrib
```

```
e3,Entity,Store,
```

```
e2,Entity,Store,
```

```
e1,Entity,Store,
```

例: /H パラメータおよび親/子の順序

メンバー e1 はすでに存在しており、A および B はロードされている新規メンバーであると仮定します。メンバー B が存在しないため、/H がなければエラーが表示されます。/H があればメンバーは内的にソートされ、B は最初に e1 の子としてロードされます。そのあと A は B の子として正常にロードされます。

```
Entity,Parent,Data Storage
```

```
A,B,Store
```

```
B,e1,Store
```

例: /R パラメータ

一部のメンバーがすでに次元に存在している場合、入力ロード・ファイルのメンバーのみがロード後に次元に存在する必要があります。削除の操作後のロード中にエラーが発生する場合、次元のすべてのメンバーは削除され、次元が空になる可能性があります。属性次元は削除されません。プランニング・ユニットが開始している場合、プランニング・ユニット内のエンティティ・メンバーは削除できないため、エンティティ・メンバーは削除されません。

Entity,Parent,Data Storage,TextAttrib

e1,Entity,Store,

e11,e1,Store,orange

e2,Entity,Store,

e21,e2,Store,

e11,e2,shared,yellow

例: /T パラメータ

新規メンバーを追加するときに親からのロード・ファイルで明示的に指定されていないプラン・タイプを継承するには、/T で勘定科目次元をロードします。メンバー a1 がすでにアプリケーションに存在しており、3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。ロードが完了すると、Plan1 および Plan3 のみがロード・ファイルで指定されていても、メンバー a11 が 3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。

Account, Parent, Source Plan Type, Plan Type (Plan1), Plan Type (Plan2), Plan Type (Plan3)

a11,a1,Plan1,1,,1

例: /-T パラメータ

新規メンバーのプラン・タイプの明示的な設定を強制するには、/-T で勘定科目次元をロードします。メンバー a1 がすでにアプリケーションに存在しており、3 つすべてのプラン・タイプについて有効になります。ロードの後に、メンバー a11 が有効になるのはロード・ファイルで指定された Plan1 および Plan3 プラン・タイプのみとなり、Plan2 では有効になりません。

例: /TR パラメータ

OutlineLoad /A:acct1 /U:admin /M /I:c:\outline1data.csv /TR /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exe

Value,Driver Member,Point-of-View,Data Load Cube Name

```
14,a1,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

```
sl1_value2,a2,"Jan,Local,e1,Current,Version1,FY08",Plan1
```

例: /DS:HSP_SMARTLISTS パラメータを使用して、スマート・リスト次元およびスマート・リスト次元エントリをロードします。

```
OutlineLoad /A:acct /U:admin /M /I:c:/smartlist_create1.csv /DS:HSP_SMARTLISTS /L:c:/OutlineLogs/outlineLoad.log /X:c:/OutlineLogs/outlineLoad.exc
```

```
SmartList Name, Operation, Label, Display Order, Missing Label, Use Form Missing Label, Entry ID, Entry Name, Entry Label
```

```
SL1,addsmartlist,SL1Label,,,,,,,,
```

```
SL1,addEntry,,,,,,,,entry1,entrylabel1
```

```
SL1,addEntry,,,,,,,,entry2,entrylabel2
```

例: LINEITEM フラグを使用した増分データ・ロードの実行

データ・ロード・ファイルに LINEITEM フラグを組み込むことにより、一意のドライバ次元識別子に基づいてデータ・ロード次元の子に対して増分データ・ロードを実行できます。これは一意の識別子を指定した行がフォームにすでに存在する場合に、データが上書きされることを指定します。行が存在しない場合、データ・ロード次元の親メンバーの下に十分な子メンバーが存在する限り、データは入力されます。

たとえば、従業員データをロードする場合、事前定義された給与等級に対する予算ライン・アイテムの詳細をロードできます。次の例は LINEITEM フラグを含むデータ・ロード・ファイルで使用できるコマンドを示します。

```
OutlineLoad /A:pln1dv /U:admin /M /I:c:\dataload_file.csv /D:" Budget Item"
```

次のサンプル・データ・ロード・ファイルは、Grade Changes の子の Budget Item 次元のデータをロードします。

```
"Budget Item","Data Load Cube Name","Point-of-View","Grade Step","Option Value","Start Date","End Date"
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes">","HCP","POVMembers","Step1","31721","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes">,"HCP","POVMembers","Step2","32673","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes">,"HCP","POVMembers","Step3","33654","7/1/09",""
```

```
"<LINEITEM("Grade Changes">,"HCP","POVMembers","Step4","33654","7/1/09",""
```

この場合、<LINEITEM("Grade Changes")>は、「データ・ロードの設定」ページで選択した一意の識別子(「等級ステップ」、「オプション値」、「開始日」および「終了日」)に基づいて、Grade Changes メンバーの子である Budget Item から、使用可能な最初のメンバーを検索します。

データ・ロード時に、Grade Changes の子メンバーに Step1 および 7/1/09 のデータがすでに存在する場合、対応するメンバーを使用して残りのデータ値が更新されます。存在しない場合は、次に使用可能な空のデータ行が Step1 および 7/1/09 に割り当てられます。

最初のデータ行が処理されると、メンバー Grade1 が割り当てられます。同様に、次の2つのメンバーである Grade2 と Grade3 が2番目と3番目のデータ行に割り当てられます。4番目のデータ行の処理時には、Step1 および 7/1/09 はすでにメンバー Grade1 に割り当てられています。これにより、この行を使用して残りのフィールドの値を更新できます。

例: /D パラメータを使用して、プランニング・ユニット階層をインポートします。

```
OutlineLoad /A:acpt /U:admin /I:c:\puh1.csv /D:PUH1
```

/D を使用してプランニング・ユニット階層をインポートする場合、プランニング・ユニット階層の名前(次元ではありません)を指定する必要があります。プランニング・ユニット階層が Planning アプリケーションに存在していないと、そこに新しいメンバーをロードすることはできません。

例: /E パラメータを使用して、プランニング・ユニット階層をエクスポートします。

```
OutlineLoad /S:planqe4 /A:acpt_580 /U:admin /M /E:puh_test2.csv /D:test2
```

Primary Member, Primary Enabled, Secondary Dimension, Secondary Parent, Relative Generation, Auto Include, Secondary Member, Include, Owner, Reviewers, Notifiees

```
e1, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, admin, planner
```

```
e11, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, <none>, <none>
```

e2, true, <none>, <none>, <none>, false, , true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1, false, , true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1, false, a11, true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1, false, a12, true, admin, <none>, "admin,admin"

e21, true, Account, a1, 1, false, a13, true, planner, "planner2,admin", admin

e21, true, Account, a1, 1, false, a14, true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1, false, a15, true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1, false, a16, true, <none>, <none>, <none>

e21, true, Account, a1, 1-2, false, a111, true, <none>, <none>, <none>

注： 最初の4つのレコードのセカンダリ・メンバーは指定していません。

次元プロパティ

共通したメンバー・プロパティおよび勘定科目、エンティティ、期間、ユーザー定義次元、年、シナリオ、バージョン、通貨、属性次元、UDA、為替レート、スマート・リストおよびプランニング・ユニット階層に関しては、次の項を参照してください。

共通したメンバー・プロパティ

複数の次元で共通するメンバー・プロパティをこの項で説明します。特定の次元に特有のプロパティについては、次の項を参照してください。

- **親:** 次元階層を作成するためにロードされるメンバーの親。メンバーをロードし、アプリケーションの親メンバーとは異なる親メンバーを指定するとき、指定した新しい親の値でメンバーが更新されます。たとえば、メンバー1が Planning アプリケーションでメンバー A の親の値を持ち、メンバー1をメンバー B の親の値でロードする場合、システムはメンバー B をメンバー1の親にしてアプリケーションを更新します。メンバー1およびその子孫はメンバー

A からメンバー B に移動されます。親を指定しない場合、ロード中に無視されます。指定された親がロードされているメンバーの子孫である場合またはアプリケーションに存在しない場合、レコードは拒否されます。

- **別名: デフォルト:** 「デフォルト別名」 テーブルでメンバーに対して定義された別名。値を指定しない場合、その別名はアプリケーションで変更されません。<none>を値として指定する場合、アプリケーションにある別名は削除されます。
- **集計に有効:** Planning では使用しません。
- 「階層タイプ」 : ASO プラン・タイプにバインドされている次元は、自動的に複数階層のサポートが有効になります。階層を「保管済」(デフォルト)、「動的」、「なし」のいずれかに指定します。
- **データ・ストレージ:** ロードされているメンバーのストレージ属性。この値は文字列として渡されます。デフォルト: 共有しない。有効な値:
 - 保管
 - 動的計算
 - 動的計算および保管
 - 共有
 - 共有しない
 - ラベルのみ
- **2パス計算:** この属性がロードされているメンバーに関連付けられているかを示すブール値。0 は False で他の数字は True となります。デフォルト: False。勘定科目メンバーについて、2パス計算プロパティはデータ・ストレージ設定に関係なく設定できます。勘定科目以外の次元のメンバーについては、2パス計算プロパティが有効になるのはデータ・ストレージ値が「動的計算」または「動的計算および保管」である場合のみです。それ以外の場合にはレコードが拒否されます。
- **説明:** ロードされているメンバーの説明。値を入力しない場合、新規メンバーが説明なしにロードされ、既存のメンバーの説明は変更されません。<none>を値として使用する場合、そのメンバーの既存の説明は削除されます。
- **式:** メンバーのメンバー式を指定します。デフォルトでは、次元またはメンバーに関連付けられたメンバー式はありません。共有またはラベルのみのメンバーについてはメンバー式をロードできません。
- **UDA:** メンバーとバインドするには、ユーザー定義属性の値を指定します。未定義の UDA が次元に追加されます。UDA を追加できるのは、Planning ですすでに作成されたこれらの次元のみです。
- **スマート・リスト:** アプリケーションで定義されたユーザー定義スマート・リストの名前をとります。この値は文字列として渡されます。スマート・リストのデフォルトは<none>です。メンバーに関連付けることができるのは1つのスマート・リストのみです。
- **データ型:** データ・ストレージ値。有効な値:
 - **通貨:** デフォルト通貨でメンバー値を保管、表示します。
 - **通貨以外:** メンバー値を数値として保管、表示します。

- **パーセンテージ:** 値を数値として保管し、メンバー値をパーセンテージとして表示します。
- **スマート・リスト:** 値を数値として保管し、メンバー値を文字列として表示します。
- **日付:** メンバー値を mm/dd/yyyy または dd/mm/yyyy のフォーマットで保管、表示します。
- **テキスト:** メンバーの値をテキストとして保管、表示します。
- **未指定:** メンバー値をメンバー値として保管、表示します。
- **操作:** これらの値をとります:
 - **更新:** ロードされているメンバーを追加、更新または移動します。
 - **レベル 0 の削除:** 子がない場合に、ロードされているメンバーを削除します。
 - **子孫(含む)の削除:** ロードされているメンバーおよび含まれている子孫すべてを削除します。
 - **子孫の削除:** ロードされているメンバーの子孫を削除しますが、メンバー自体は削除しません。
メンバーを削除するときに注意を使用します。これによりメンバー、そのデータおよび関連したプランニング・ユニットが削除されます。
- **承認を使用可能:** 承認を使用可能にします。デフォルトでは True です。
- **プラン・タイプ**(たとえば、Plan1、Plan2、Plan3): ロードされているメンバーが指定されたプランで使用されているかどうかを示すブール値です。有効な値: 0 は False で、他の数字は True になります。デフォルト: True。その名前は、アプリケーションのプラン・タイプの名前に応じて決まります。
- **集約**(Plan1、Plan2、Plan3): 指定されたプランに関連してロードされている、メンバーの集約オプション。これを使用できるのは、このプラン・タイプでアプリケーションが有効な場合のみです。この値は文字列として渡されます。
有効な値:
 - +(加算)
 - -(減算)
 - *(乗算)
 - /(除算)
 - %(パーセント)
 - ~(集計中に無視)
 - なし(階層に関係なく集約しない)
- **UDA:** ロードされている UDA の値。UDA を関連付けることができるのはアプリケーションに存在する次元のみです。UDA が存在する場合、そのプロパティは変更されます。

勘定科目次元プロパティ

勘定科目ロード・ファイルには次のプロパティが含まれます。

勘定科目、親、別名：デフォルト、別名：T1、集約に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、勘定科目タイプ、タイム・バランス、445を使用、544を使用、554を使用、スキップ値、為替レート・タイプ、差異レポート、ソース・プラン・タイプ、プラン・タイプ(Plan1)、集約(Plan1)、プラン・タイプ(Plan2)、集約(Plan2)、プラン・タイプ(Plan3)、集約(Plan3)、AttribDim1、AttribDim2

これらプロパティの詳細は、次のテーブルと [133 ページの「共通したメンバー・プロパティ」](#) を参照してください。

注意:

- タイム・バランスは勘定科目データが時間の経過にしたがってどのようにフローするかを指定します。「保存された仮定」の勘定科目タイプをもつメンバーのみのタイプを取り込むかまたはレコードが拒否される必要があります。
- タイム・バランスが「フロー」の場合、有効なスキップ値がロードされ、すべての勘定科目タイプについて「スキップ値」が無効になります。
- タイム・バランスが「最初」、「残高」または「平均」の場合に、「スキップ値」を設定できます。これらのオプションは、現在の値が計算される時: なし、#MISSING、ゼロまたは#MISSING およびゼロの場合にどの値をスキップするかを設定します。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。基本期間はユーティリティを使用して追加できません。年、基本期間および為替レートは削除できません。
- YearTotal および BegBalance 期間はユーティリティを使用して変更できません。
- 「為替レート・タイプ」は「データ型」のために指定された値に応じて決まります。有効な値: 「平均」、「終了」および「データ型が通貨の場合に履歴」またはデータ型が通貨以外の場合は「なし」。
- 「差異レポート」は、「保存された仮定」の勘定科目タイプの場合またはレコードが拒否された場合に勘定科目メンバーをロードします。「支出」は仮定の勘定科目を支出として指定します。差異を決定するため、実際の量が見積もられた量から減算されます。「支出外」は、支出でない勘定科目を指定します。差異を決定するため、見積もられた量が実際の量から減算されます。勘定科目タイプの値: 収益: 「支出外」、支出: 「支出」、資産: 「支出外」、負債: 「支出外」、自己資本: 「支出外」。
- メンバーの親を更新または保存するときに、システムはロードされているメンバーに関連付けられた「ソース・プラン・タイプ」が新しい親に対して有効であるかどうかを確認します。メンバーのソース・プラン・タイプが親のメンバーに対して有効でも、メンバー自身に対して有効でない場合、メンバーは保存されますが、そのソース・プラン・タイプは最初の有効なプラン・タイプに対して設定されます。「ソース・プラン・タイプ」が指定されていても親に対して有効でない場合、レコードは拒否されます。

表 29 勘定科目次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
勘定科目	メンバー名	テキスト。メンバー命名規則に準拠	なし	はい

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
親	メンバー名	テキスト。メンバー命名規則に準拠。	なし。既存のメンバーの名前または空の場合に、メンバーは次元ルートにある子として配置されます	いいえ (ほとんどの「期間」メンバーで指定する必要あり)
Alias:Alias_Table_Name	別名	テキスト。Planning メンバー命名規則および列ヘッダーで指定された別名テーブルで定義された別名に準拠します。<なし>は、指定されたテーブルからのメンバーに対する別名のバインディングを除去します。	なし	いいえ 次元で定義された各別名テーブルの列ヘッダーが1つ表示されます。デフォルトは各次元について事前定義された別名テーブルです。
集計に有効	未使用	N/A	N/A	いいえ
データ・ストレージ	データ・ストレージ	テキスト: 保管、動的計算および保管、動的計算、共有しない、共有、ラベルのみ	親から継承。親がルート・メンバーの場合、デフォルトは「共有しない」です	いいえ
2パス計算	2パス計算	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
説明	説明	テキスト。Planning の最大文字数制限に準拠します。<none>は説明を除去します	なし	いいえ
式	式	テキスト。有効な式構文の Essbase 制限に準拠します。<none>は式を除去します	なし	いいえ
UDA	UDA	単一の UDA テキスト値または引用符で囲まれ、カンマで区切られた UDA テキスト値のリスト。存在しない UDA は次元に追加され、既存の UDA バインディングは再指定していない場合、結果の保存内容から除去されます。何も指定していない場合にはバインディングをそのまま残します。<なし>は既存の UDA のバインディングをすべて除去します。	なし	いいえ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
スマート・リスト	スマート・リスト	テキスト。アプリケーション用にすでに定義されたスマート・リストの名前に制限されます。データ型がスマート・リストに設定されている場合にのみ指定する必要があります。<none>は既存のスマート・リスト・インデントを除去します	なし	いいえ
データ型	データ型	テキスト: 未指定、通貨、通貨以外、パーセンテージ、スマート・リスト、日付、テキスト	親から継承。通貨メンバーがルート次元の下に追加される場合	いいえ
操作		テキスト: 更新、レベル0の削除、子孫(含む)の削除、子孫の削除	更新	いいえ
勘定科目タイプ	勘定科目タイプ	テキスト: 支出、収益、資産、負債、自己資本、保存された仮定	親から継承。メンバーがルート次元の下に追加される場合は、収益。	いいえ
タイム・バランス	タイム・バランス	テキスト: フロー、最初、残高、平均、avg_actual1、avg_365、入力	親から継承(勘定科目タイプに対するデフォルトのタイム・バランス値: 支出: フロー収益: フロー、資産: 残高、負債: 残高、自己資本: 残高)	いいえ
445 を使用、544 を使用、554 を使用(システム設定に応じて、1つの列ヘッダーのみが表示されます。週次配分がアプリケーションに定義されていない場合、列ヘッダーは表示されません。)	週次配分(アプリケーションの「週次配分」が「均等」に設定されている場合、配分オプションは表示されません。)	True、False または整数: ゼロ以外は真、ゼロは偽	なし	いいえ
スキップ値		テキスト: なし、欠落、ゼロ、欠落およびゼロ、なしである必要あり、勘定科目タイプが支出または収益の場合	親から継承	いいえ
為替レート・タイプ	為替レート・タイプ	テキスト: なし、平均、終了、履歴(なしは、データ型が通貨に設定されている場合には指定すべきではありません。それ以外の場合には指定する必要があります。)	親から継承。メンバーがルート次元の下に追加される場合は、平均。	いいえ
差異レポート	差異レポート	テキスト: 支出外、支出。(勘定科目タイプが支出の場合は支出である必要があり、その他すべての勘定科目タイプの場合には支出外である必要があります。)	親から継承。メンバーがルート次元の下に追加される場合は、支出外。	いいえ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
ソース・プラン・タイプ	ソース・プラン・タイプ	テキスト: プラン・タイプアプリケーションで定義された名前(たとえば、Plan1 または Plan2)	Plan1 またはアプリケーションで定義された最初のプラン・タイプの名前	いいえ
プラン・タイプ (Plan1)	プラン・タイプ	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan1)	集約	テキスト: +、-、*、/、%、~、なし	親から継承。親がルート・メンバーである場合、デフォルトは+。年についてのデフォルトは-(無視)	いいえ
プラン・タイプ (Plan2)	プラン・タイプ	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan2)	集約	テキスト: +、-*、/、%、~、なし	親から継承。親がルート・メンバーの場合、デフォルトは+。年についてはデフォルトは~(無視)	いいえ
プラン・タイプ (Plan3)	プラン・タイプ	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	親から継承	いいえ
集約(Plan3)	集約	テキスト: +、-*/%、~、なし	親から継承します。親がルート・メンバーの場合、デフォルトは+です。年の場合、デフォルトは~(無視)です。	いいえ
属性次元名(このプロパティは疎の「勘定科目」、「エンティティ」またはユーザー定義次元で使用できます)	属性	属性次元で定義された属性の名前: 再度指定されないかぎり、既存の属性バインディングはその後の保存内容で除去されます。指定されたものはバインディングをそのまま残しません。<なし>はメンバーについてすべての既存の属性バインディングを除去します。1つの列ヘッダーは次元で定義される各属性次元について表示します。	なし	いいえ

エンティティ次元プロパティ

エンティティ、親、別名: デフォルト、別名: T1、集計に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、基本通貨、プラン・タイプ (Plan1)、集約 (Plan1)、プラン・タイプ、(Plan2)、集約 (Plan2)、プラン・タイプ (Plan3)、集約 (Plan3)、AttribDim1、AttribDim2

注意:

- エンティティ: エンティティ情報をロード中です。

- **基本通貨:** 複数通貨アプリケーションでのみ表示されます。アプリケーションの定義に従って、ロードされているエンティティの通貨のコードを取得します。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 30 エンティティ次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト
エンティティ	メンバー名	テキスト。Planning メンバー命名規則に準拠。	なし
2パス計算	2パス計算	True、False または整数: 非ゼロが真、ゼロが偽(データ型が動的計算または動的計算および保管の場合にのみ 1 に設定する必要があります)	親から継承
基本通貨	基本通貨	テキスト。アプリケーションによりすでに定義済の通貨名に制限されます	親から継承。メンバーが共有されている場合、デフォルトは基本メンバーの通貨です。メンバーがルート次元に追加される場合、基本通貨はアプリケーションが作成されたときに定義済のデフォルト通貨です。

期間次元プロパティ

期間、親、別名: デフォルト、別名: T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、タイプ、開始期間、終了期間、集約 (Plan1)、集約 (Plan2)、集約 (Plan3)

注意:

- 期間については、親はほとんどの更新操作を指定する必要があります。
- タイプ(「基本」または「ロールアップ」など)は既存のメンバー用に変更できません。ロールアップおよび代替メンバーを追加、更新することはできます。また BegBalance および基本期間も更新できます(たとえば、別名に追加するなど)。YearTotal 期間の追加または変更はできません。DTS 期間タイプは認識されますが、アウトライン・ロード・ユーティリティではサポートされません。DTS 情報をロードしようとする場合、ユーティリティはログ・ファイルにエラーを表示します。
- ロールアップ期間タイプについて開始期間と終了期間が有効です。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。
- 期間および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[135 ページの「勘定科目次元プロパティ」](#)を参照してください。

表 31 期間次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
期間	メンバー名	テキスト。期間メンバー名についての Planning 制限に準拠。		
タイプ	Planning では表示されません	テキスト: ベース、ロールアップ、年、代替、DTS。ユーティリティでロードできるのはロールアップおよび代替期間のみです。BegBalance および基本期間は変更できます(たとえば、別名に追加するなど)。YearTotal および DTS 期間のロードおよび変更はできません。	なし	はい
開始期間	テキスト(要約期間にのみ適用可能)	テキスト。アプリケーション用にすでに定義済の期間に制限。	なし	はい
終了期間	テキスト(要約期間にのみ適用可能)	テキスト。アプリケーション用にすでに定義済の期間に制限。	なし	はい

ユーザー定義次元プロパティ

ユーザー定義次元名、親、別名: デフォルト、別名: T1、集計に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。「ユーザー定義」および「勘定科目」メンバーに共通するプロパティについては、[135 ページの「勘定科目次元プロパティ」](#)を参照してください。

表 32 ユーザー定義次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
ユーザー定義次元名	メンバー名	テキスト。Planning メンバー命名規則に準拠。次元に追加されているユーザー定義メンバーの名前です。	なし	はい
親	メンバー名またはルート次元名	テキスト。Planning メンバー命名規則に準拠。	ルート次元メンバー	はい

年次元プロパティ

年、親、別名: デフォルト、別名: T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作

注意:

- 年のメンバー名は FYnn の形式にする必要があります。
- 既存の最後の年が入力された年よりも前の場合、その間の年も作成されます。たとえば定義された最後の年が FY08 で FY11 を入力した場合、ユーティリティは FY09、FY10 および FY11 を作成します。

表 33 年次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
年	年メンバー	FYnn	なし	はい

シナリオ次元プロパティ

シナリオ、親、別名：デフォルト、別名：T1、集計に有効、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、開始年、開始期間、終了年、終了期間、為替テーブル、BegBalを含める、承認を使用可能、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

注意:

- 開始年または終了年として年を選択できません。BegBalance も開始期間または終了期間として選択できません。
- 指定されない場合、開始年、終了年、開始期間、終了期間はデフォルト値に設定されます(アプリケーションの最初と最後の年、アプリケーションの最初と最後の基本期間)。
- プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 34 シナリオ次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
シナリオ	シナリオ名	テキスト	なし	はい
開始年		アプリケーションで定義された最初の FY 年(位置により決定)	アプリケーションにおける最初の年	いいえ
開始期間		最初の基本期間(位置により決定)	アプリケーションにおける最初の基本期間	いいえ
終了年		アプリケーションで定義された最後の FY 年(位置により決定)	アプリケーションにおける終了年	いいえ
終了期間		最後の基本期間(位置により決定)	アプリケーションにおける最後の基本期間	いいえ
為替テーブル		アプリケーションで定義された為替レート・テーブルの名前。	なし	いいえ
BegBal を含む		True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	False	いいえ
承認を使用可能		True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	False	いいえ

バージョン次元プロパティ

バージョン、親、別名: デフォルト、別名: T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、バージョン・タイプ、承認を使用可能、集約(Plan1)、集約(Plan2)、集約(Plan3)

プラン・タイプ名および番号はアプリケーションで定義された内容に応じて決まります。

表 35 バージョン次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
バージョン	バージョン名	テキスト	なし	はい
バージョン・タイプ	バージョン・タイプ	ボトムアップまたはターゲット	ボトムアップ	いいえ
承認を使用可能	承認対象に使用可能	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	False	いいえ

通貨次元プロパティ

通貨、親、別名: デフォルト、別名: T1、データ・ストレージ、2パス計算、説明、式、UDA、スマート・リスト、データ型、操作、記号、スケール、トライアングュレーション通貨、レポートの通貨、3桁ごとの区切り文字、小数点、負のスタイル、負数の色

通貨記号が指定されていない場合、ロードされている通貨が Planning で定義されている場合にデフォルトで ISO 記号に設定されます。

表 36 通貨次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
通貨	通貨名	テキスト	なし	はい
記号	記号	テキスト。Planning 通貨記号命名規則に準拠	ロードされている通貨が Planning で定義されている場合、ISO 記号。ロードされている通貨が Planning で定義されていない場合、通貨名と同じ	いいえ
スケール	スケール	0 から 9 の整数値。0 は 1 に対応、1 は 10 に対応、2 は 100 に対応、など	スケールなし	いいえ
トライアングュレーション通貨	トライアングュレーション通貨	アプリケーションで定義された通貨	なし	いいえ
レポートの通貨	レポートの通貨	True、False または整数: 非ゼロは真、ゼロは偽	False	いいえ
3桁ごとの区切り文字	3桁ごとの区切り文字	デフォルト、なし、カンマ、ドット、スペース	なし	いいえ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
小数点	小数点	デフォルト、ドット、カンマ	ドット	いいえ
負のスタイル	負数の符号	デフォルト、接頭辞、接尾辞、カッコ	接頭辞	いいえ
負数の色	負数の色	デフォルト、黒、赤	黒	いいえ

属性次元プロパティ

属性、親、別名：デフォルト、操作

注意:

- 属性および勘定科目メンバーに共通したプロパティは、[135 ページの「勘定科目次元プロパティ」](#)を参照してください。
- **カスタム属性:** テキスト、数値、ブール、日付属性について属性次元に属性値をロードできます。プロパティを変更して値を指定しない場合、カスタム属性はアプリケーションで変更されません。カスタム属性を除去するには、<none>を値として指定します。値は文字列として渡されます。
 - **更新:** ロードされているメンバーを追加、更新または移動します。
 - **レベル 0 の削除:** 子がない場合にロードされているメンバーを削除します。
 - **子孫(含む)の削除:** ロードされているメンバーおよび含まれている子孫すべてを削除します。
 - **子孫の削除:** ロードされているメンバーの子孫を削除しますが、メンバー自体は削除しません。

メンバーを削除するときに注意を使用します。これによりメンバー、そのデータおよび関連したプランニング・ユニットが削除されます。

表 37 属性次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
属性	属性値名	テキスト。Planning メンバー命名規則に準拠	なし	はい

UDA 次元プロパティ

次元、UDA、操作

UDA および勘定科目メンバーに共通するプロパティは、[135 ページの「勘定科目次元プロパティ」](#)を参照してください。

表 38 UDA 次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
次元	UDA が定義されている基本次元の名前	テキスト、UDA が定義される次元の名前; UDA は属性次元については定義できません	なし	はい
UDA	定義されている UDA	テキスト。Planning メンバー命名規則に準拠	なし	はい

為替レート次元プロパティ

テーブル、説明、通貨へ、通貨から、メソッド、履歴、開始残高、年、期間、平均、終了

表 39 為替レート次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
テーブル	fxTblId	為替レート・テーブルの名前	なし	はい
説明	説明	為替レート・テーブルの説明	なし	いいえ
通貨へ	toCur	換算が適用されるアプリケーションで定義されている通貨	なし	はい
通貨から	fromCur	換算が計算されるアプリケーションで定義されている通貨	なし	はい
操作	N/A	更新(削除の操作はサポートされていません: レベル0の削除、子孫(含む)の削除、子孫の削除)	更新	いいえ
メソッド	メソッド	乗算、除算	乗算	いいえ
履歴	historicalRate	数値	0	いいえ
開始残高	begBalanceRate	数値	0	いいえ
年	yearId	FY08 など、アプリケーションで定義される年	なし	平均または終了が指定されている場合、はい
期間	tpId	1月など、アプリケーションで定義されている基本期間	なし	平均または終了が指定されている場合、はい
平均	avgVal	数値	なし	いいえ
終了	endVal	数値	なし	いいえ

プランニング・ユニット階層の次元プロパティ

プライマリ・メンバー、プライマリを使用可能、セカンダリ次元、セカンダリ親、「相対的な世代」、「自動組込み」、セカンダリ・メンバー、「含む」、「所有者」、「確認者」、通知されるユーザー

表 40 プランニング・ユニット階層の次元プロパティ

.CSV ロード・ ファイルの列 ヘッ ダー	Planning プロパティ	値	デ フォ ルト	必須
プライ マリ・ メン バー	プライマリ次元(エンティティ)のメンバー名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「名前」列に対応します。	テキスト	なし	はい
プライ マリを 使用可 能	承認のプライマリ・メンバーを使用可能にします。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「使用可能」列に対応します。	True、False または整数: 非 ゼロは真、ゼロ は偽	なし	いいえ
セカン ダリ次 元	プライマリ・メンバーに関連付けるサブ階層次元を指定する次元名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「次元」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ
セカン ダリ親	「相対的な世代」プロパティを使用してセカンダリ・メンバーを指定した場合に参照される次元メンバー名。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「親メンバー」列に対応します。	テキスト	なし	いいえ
相対的 な世代	「自動組込み」および「含む」プロパティに応じて承認の対象とするセカンダリ親の子孫を指定する数値範囲。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「相対的な世代」列に対応します。	世代の範囲を指 定する整数。 たとえば、1-3 により世代{1,2, 3}、1,3-5 によ り世代{1,3,4,5}、 0-4,7 により世 代{0,1,2,3,4,7} が指定されま す。レベル 0 はセカンダリ親 の世代と等価で す。レベル 1 はセカンダリ親 の直属の子の世 代と等価です。 その他同様で す。	なし	いいえ
自動組 込み	「セカンダリ親」および「相対的な世代」プロパティを使用して指定した子孫メンバーを承認対象として使用できるようにします。この設定は、「含む」プロパティを使用してメンバー単位で上書きできます。 このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「自動組込み」チェック・ボックスに対応します。	True、False または整数: 非 ゼロは真、ゼロ は偽	なし	いいえ

.CSV ロード・ ファイルの列 ヘッ ダー	Planning プロパティ	値	デ フォ ルト	必須
含む	<p>指定したサブ階層メンバーを承認対象として使用できるようにします。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの最も右の列にあるアイコンをクリックしたときに表示される選択したメンバー・ポップアップ・ウィンドウのチェック・ボックスに対応します。</p>	True、False または整数: 非 ゼロは真、ゼロ は偽	True	いいえ
セカン ダリ・ メン バー	<p>承認対象として使用できるようになったセカンダリ次元メンバー名。「含む」、「所有者」、「確認者」および「通知されるユーザー」プロパティはこのプロパティに依存します。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「名前」列(セカンダリ親が指定されている場所)、および「プライマリおよびサブ階層の選択」タブの「選択したメンバー」列に対応します。</p>	テキスト	なし	所有者、確認者、通知されるユーザーの各列ヘッダーが定義されている場合は、はい
所有者	<p>指定したメンバーの所有者のユーザー名。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「所有者」列に対応します。</p>	テキスト	なし	いいえ
確認者	<p>指定したメンバーの確認者のカンマ区切りのリスト。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブの「確認者」列に対応します。</p> <p>注: 確認者は、プランニング・ユニットをレビューする順序で指定します。リスト内の最初の確認者が、プランニング・ユニットを処理する最初のユーザーです。最初のユーザーがプランニング・ユニットを移動すると、リスト内の2番目のユーザーがプランニング・ユニットの所有者になり、それ以降も、作成した確認者のリストによって順序が決まります。</p>	テキスト	なし	いいえ
通知さ れる ユー ザー	<p>指定したメンバーの、通知されるユーザーのカンマ区切りのリスト。</p> <p>このプロパティは、「プランニング・ユニット階層」ページの「所有者の割当て」タブのユーザーに通知列に対応します。</p>	テキスト	なし	いいえ

スマート・リストの次元プロパティ

スマート・リスト名、操作、ラベル、表示順、Missingラベル、フォームの設定の使用、
エン트리ID、エントリ名、エントリ・ラベル

表 41 スマート・リストの次元プロパティ

.CSV ロード・ファイルの列ヘッダー	Planning プロパティ	値	デフォルト	必須
スマート・リスト名	スマート・リストの名前	テキスト。スマート・リスト/列挙の名前	なし	はい
操作	操作	テキスト。addsmartlist - 新規スマート・リストを作成します; addEntry - スマート・リストにエントリを追加します	なし	はい
ラベル	スマート・リストのラベル・フィールド	テキスト。スマート・リストのフィールド	空白	いいえ
表示順	表示順	スマート・リストの表示順の整数またはテキスト値: 0 または ID - エントリ ID の順序; 1 または名前 - エントリ名別の順序; 2 またはラベル - エントリ・ラベル別の順序	ID	いいえ
Missing ラベル	#Missing ドロップ・ダウン・ラベル	テキスト。Missing ドロップ・ダウン・ラベル	LABEL_NONE	いいえ
フォームの設定の使用	#Missing フォーム	TRUE - フォームの設定; FALSE - ドロップ・ダウンの設定	フォームの設定	いいえ
エントリ ID	スマート・リストのエントリ ID	スマート・リストのエントリの ID	デフォルトのエントリ ID	いいえ
エントリ名	エントリ名	N/A	なし	はい
エントリ・ラベル	エントリ・ラベル	N/A	なし	はい

Planning アウトライン・ロードの操作

サブトピック

- [Planning アウトライン・ロードの実行](#)
- [ファイルからのインポート](#)
- [ファイルへのメタデータのエクスポート](#)
- [ファイルへのデータのエクスポート](#)

コマンドラインを使用せずにインポートとエクスポートの操作を実行するには、Planning アウトライン・ロードを使用します。管理者は、勘定科目、期間、年、シナリオ、バージョン、通貨、エンティティ、ユーザー定義次元、属性、UDA、為替レート、スマート・リスト、およびプランニング・ユニット階層のメタデータおよびデータを、フラット・ファイルからインポートできます。Planning アウトライン・ロードを使用して、メタデータおよびデータをフラット・ファイルにエクスポートすることもできます。

注： Planning アウトライン・ロードで、メタデータまたはデータのリレーショナル・インポートまたはエクスポートはサポートされません。リレーショナル・データ・ソースからメタデータまたはデータをインポートまたはエクスポートする場合には、アウトライン・ロード・ユーティリティを使用します。97 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティの操作」を参照してください。

Planning アウトライン・ロードの実行

▶ Planning アウトライン・ロードを使用してデータまたはメタデータをインポートまたはエクスポートするには:

- 1 情報をロードする前にアプリケーションとアプリケーション・データベースをバックアップします。Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。
- 2 **オプション:** インポートの場合、コマンド・プロパティ・ファイル (.properties)を作成します。97 ページの「コマンド・プロパティ・ファイル」を参照してください。
- 3 インポートの場合、ロードする各次元またはデータ・セットのロード・ファイルを生成します。99 ページの「ロード・ファイルの生成」を参照してください。
- 4 Planning アプリケーションにログインします。
- 5 「管理」、「アウトラインのロード」の順に選択し、次の中からタスクを選択します:
 - フラット・ファイルからデータまたはメタデータをインポートする場合は、「ファイルからのインポート」を選択します。
オプションの詳細は、149 ページの「ファイルからのインポート」を参照してください。
 - メタデータをフラット・ファイルにエクスポートする場合は、「ファイルへのメタデータのエクスポート」を選択します。
オプションの詳細は、151 ページの「ファイルへのメタデータのエクスポート」を参照してください。
 - データをフラット・ファイルにエクスポートする場合は、「ファイルへのデータのエクスポート」を選択します。
オプションの詳細は、151 ページの「ファイルへのデータのエクスポート」を参照してください。
- 6 「実行」をクリックします。

ファイルからのインポート

属性、ユーザー定義次元、スマート・リストまたは為替レートをインポートするには、「次元」ドロップダウンで「新しい次元」を選択し、「次元タイプ」フィールドでタイプを選択します。

「FlatFile からのインポート」で、次の中からオプションを選択します:

表 42 「ファイルからのインポート」のオプション

オプション	説明
「次元」	ロードされる次元。これに属するメンバー・フィールドがメタデータ・ファイルのヘッダー・レコードに対応します。必要に応じて、インポート時に新しい次元を作成できます。
「コマンド・プロパティ・ファイル」	ここで選択するインポート・オプションとともに実行オプションを構成する引数を含むファイルを指定します。コマンド・プロパティ・ファイルと、ここで指定するオプションの両方に引数が指定される場合は、Planning アウトライン・ロードのオプションが優先されます。 97 ページの「コマンド・プロパティ・ファイル」 を参照してください。
「メタデータ・ファイル」	.csv フォーマットでヘッダー・レコードとデータ・レコードを含むデータ・ロード入力ファイルを指定します。データ・ロード次元も指定する必要があります。 106 ページの「メタデータのロード」 を参照してください。
「セキュリティ・フィルタの作成」	キューブ・リフレッシュを実行する際にセキュリティ・フィルタを作成します。セキュリティ・フィルタをリフレッシュしない場合は、このオプションの選択を解除します(このオプションはユーザーをアプリケーションにプロビジョニングしません。現在存在しているユーザーにセキュリティ・フィルタを作成するのみです)。ユーザーは他の方法でアプリケーションにプロビジョニングする可能性があります。)
「キューブのリフレッシュ」	メタデータのロード後にキューブ・リフレッシュを実行します。
「すべてのプランニング・ユニットの削除」	プランニング・ユニットをすべて削除するか、プランニング・ユニットのメンバーが削除される場合にエラーを表示します。開始されたプランニング・ユニットの削除と、.csv ロード・ファイルで指定された次元のすべてのメンバーの削除を有効にする場合は、このオプションと「すべてのロード次元メンバーの削除」オプションをあわせて選択します。
「すべてのロード次元メンバーの削除」	ロードを実行する前にロード次元のすべてのメンバーを削除します。「すべてのプランニング・ユニットの削除」も参照してください。ロード次元のすべてのメンバーを保持する場合は、このオプションの選択を解除します。 注： 注意して使用してください。このオプションで、属性バインディングと承認状態が削除されます。
「プラン・タイプが指定されていない場合に継承」	新規メンバーを追加するときに未指定のプラン・タイプ設定を親から継承します。メンバーに対してプラン・タイプ設定の明示的な設定を強制するには、このオプションの選択を解除します。
「ロード前にロード次元をロック」	ロードする前にロード次元をロックします。次元をロックしない場合は、このオプションの選択を解除します(ドライ・ランを実行する場合を除いて推奨されません)。
「順序を維持」	UDA を例外として、ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を維持します。ロード中にロード・ファイルのメンバーの順序を無視する場合は、このオプションの選択を解除します。
「順序入力レコード」	UDA を例外として親-子の順序で入力レコードに順序を付けます。ロード・ファイルと同じ順序で入力レコードをロードする場合は、このオプションの選択を解除します。このオプションの選択を解除すると、高速になりメモリー使用量も少なくなります。
「ドライ・ラン」	データまたはメタデータをロードせずにロード・ファイルを解析することにより「ドライ・ラン」を実行します。データおよびメタデータのロード中にロード・ファイルを解析する場合は、このオプションの選択を解除します。

オプション	説明
「日付フォーマット」	インポートの日付フォーマットを次の中から選択します: <ul style="list-style-type: none"> ● 「MM-DD-YYYY」 ● 「DD-MM-YYYY」 ● 「YYYY-MM-DD」
「ドライバ・メンバーの指定」	インポート操作時のみ、アプリケーションの基本ロード次元にドライバ・メンバーを設定します。 注： このフィールドに値を入力せず、「管理」/「データ・ロードの設定」ウィンドウでロード次元とドライバ次元が設定されている場合は、これらの設定がデータのインポートに使用されます。このフィールドに追加した値が、「データ・ロードの設定」ウィンドウの値より優先されます。
「Essbase データの消去」	インポートを実行する前に、Essbase ブロックを消去します。

ファイルへのメタデータのエクスポート

「ファイルへのメタデータのエクスポート」で、次の中からオプションを選択します:

表 43 ファイルへのメタデータのエクスポートのオプション

オプション	説明
「次元」	エクスポートする次元

「実行」をクリックすると、ファイルを開くか、ローカル・マシンに保存するようにブラウザで要求されます。

ファイルへのデータのエクスポート

エクスポートされるデータを含む Planning フォームを記述します。Planning フォームの設計中に入力されたプラン・タイプ、行、列、POV 情報を入力する必要があります。

「ファイルへのデータのエクスポート」で、次の中からオプションを選択します:

表 44 ファイルへのデータのエクスポートのオプション

オプション	説明
「プラン・タイプ」	Planning フォームの設計中に入力されたプラン・タイプ
「行メンバー」	Planning フォームの設計中に入力された行情報
「列メンバー」	Planning フォームの設計中に入力された列情報
「POV メンバー」	ページ次元およびメンバー情報

Data Integrator Adapter for Planning

Oracle Data Integrator Adapter for Planning を使用し、Oracle Data Integrator(ODI)による Planning から任意データベースへの接続や統合ができます。このアダプタは Oracle Data Integrator Knowledge Modules(KM)によって、メタデータとデータを Planning アプリケーションにロードします。ODI 使用の詳細は、Oracle Data Integrator Adapter for Planning ユーザー・ガイドを参照してください。

DIM Adapter for Planning の使用方法

Oracle Hyperion Data Integration Management Adapter for Planning をインストールして構成した後、アダプタをインストールして構成すると、他の Oracle 製品のデータを取得して書き込めます。アダプタを構成した後は、ソースからデータを抽出したり、データをターゲットに書き込んだりする前に、Workflow Manager でアプリケーション接続を構成する必要があります。Hyperion Data Integration Management Adapter for Planning オンライン・ヘルプを参照してください。Oracle Hyperion Data Integration Management Adapter for Planning は Planning アプリケーション管理を使用する Planning アプリケーションでのみ使用できます。

Essbase データのデータ・ロードを使用可能にする

パラメータを指定し、データを直接 Essbase データベースに直接ロードできるようにします。必要に応じて、ドライバ次元の一意の識別子に基づいて親次元メンバーの子メンバーに詳細をロードする場合、拡張設定を使用できます。

たとえば、開始日、職階、給与基準および支払タイプとともに勘定科目データを従業員次元メンバーにロードできます。人事データには新規従業員と既存の従業員のプレースホルダが含まれているため、次のような拡張設定も設定できます:




- データ・ロード次元の親: 「新規従業員」、既存の従業員
- 新規従業員の一意の識別子: 「開始日」、「職階」
- 既存の従業員の一意の識別子: 「給与基準」、「支払タイプ」



データ・ロード時に、新規従業員と既存の従業員の子メンバーにデータ更新がないかどうかの評価されます。一意の識別子である開始日、職階、給与基準および支払タイプにより、既存のデータ・ロード次元値が更新されるか、新規値が追加されるかが決定されます。つまり、一意の識別子のデータ値が同じ場合はデータが更新され、データ値が異なる場合は次に使用可能な子メンバーが使用されます。

▶ データをロードするためのパラメータを指定するには:

- 1 「管理」、「データ・ロードの設定」を選択します。
- 2 「データ・ロード次元」で、アプリケーション用にデータがロードされる次元(従業員など)を選択します。

次元はロードされる情報に対応します。

- 3 「ドライバ次元」で、をクリックし、データのロード先の次元を選択します。
たとえば、データを従業員にロードする場合、ドライバ次元には勘定科目を使用できます。
- 4 ドライバ次元のメンバーを選択します。
たとえば、ドライバ次元が勘定科目である場合、ドライバ次元メンバーには開始日、等級、職階、給与基準および支払タイプを組み込むことができます。
- 5 オプション: 拡張設定を使用するには:
 1. 「データ・ロード次元の親」の上にあるをクリックし、行を追加します。
 2. 新規フィールドの右側で、をクリックし、親メンバーを選択します。
メンバーの選択の詳細は、[第7章「メンバー・セレクトタの使用」](#)を参照してください。
 3. 親メンバーの右側にある「ドライバ次元の一意の識別子」の下で、1つ以上のメンバーを一意の識別子として選択します。(このフィールドで選択したメンバーは、ページの上部にある選択済ドライバ次元メンバーのリストに追加されます。)

各親メンバーには、少なくとも1つの一意の識別子メンバーを含める必要があります。これらの識別子メンバーにより、既存のデータ・ロード次元値が更新されるか、新規値が追加されるかが決定されます。
 4. 必要に応じて、[手順 5.1](#) から [手順 5.3](#) を繰り返し、続けて行を追加します。
 5. 行を複製または削除するには、行の左側にあるチェック・ボックスを選択し、または をクリックします。一度に複製できるのは1つの選択行のみです。
- 6 「保存」をクリックします。
ロードの詳細な手順は、[Planning アダプタ・ドキュメンテーション](#)を参照してください。この資料は [95 ページ](#)の「概要」で説明されています。

Administration Services からロード

- ▶ Administration Services からロードするには:
- 1 Administration Services Console を開きます。
 - 2 サーバーに接続しユーザー名およびパスワードを入力するための手順については、[Essbase ドキュメンテーション](#)を参照してください。
 - 3 Administration Services Console を最小化します。
 - 4 Windows NT Explorer の(「スタート」を開き、「プログラム」から「Windows NT Explorer」)を開きます。
 - 5 ロードするデータ・ファイルを含むディレクトリを閲覧します。
 - 6 ロードするテキスト・ファイルを選択し、画面の下部にある Windows タスクバーの「Administration Services Console」にドラッグします。

- 7 Administration Services Console ウィンドウにファイルをドラッグしながらマウスを維持し、その後離します。
- 8 データ・ファイルをロードするアプリケーションを選択するための手順については、Essbase ドキュメンテーションを参照してください。
- 9 データ・ファイルをロードするデータベースを選択します。
データをロードする Planning アプリケーションでプラン・タイプに対応するデータベースを選択します。

ファイルの例

この例では、実績シナリオと最終バージョンにおける欧州エンティティと Gross Sales 勘定科目の 2008 年第 1 四半期に対するデータ値をロードします。

欧州 総売上 実績 最終 1月 2008 150

欧州 総売上 実績 最終 2月 2008 110

欧州 総売上 実績 最終 3月 2008 200

次元がすべての行に同じ値を使用する場合は、次の例のようにページ次元としてヘッダーに値を設定します。

実績 最終

欧州 総売上 1月 2008 150

アジア 純益 2月 2008 150

欧州 純益 2月 2008 110

アジア 総売上 1月 2008 200

Performance Management Architect を使用してのロード

フラット・ファイル、インタフェース・テーブルおよびデータの同期化など、Performance Management Architect 機能を使用し、データおよびメタデータをロードできます。詳細は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください

FDM を使用したロード

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management を使用してデータをロードできます。詳細は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Administrator's Guide を参照してください。

6

フォームの管理

この章の内容

フォームについて	155
フォーム・コンポーネント.....	157
特定のタイプのフォームの設計	158
フォームの操作	163
単一のフォームの作成.....	168
複合フォームの作成	181
グリッド診断の使用	190
ビジネス・ルールの使用法	191
ユーザー変数の操作	203
フォーム定義のインポート.....	205
Planning オフライン時の考慮事項.....	208

フォームについて

サブトピック

- [フォームとプラン・タイプ](#)
- [フォームおよびアクセス権](#)
- [フォームと通貨](#)
- [フォームとバージョン](#)
- [フォームと属性](#)
- [フォームと共有メンバー](#)
- [フォームと計算](#)

フォームはデータ入力用のグリッドです。これにより多くのフォームを作成し、ユーザーのニーズを満たすことができます。

フォームとプラン・タイプ

フォームを作成する際、プラン・タイプにフォームを関連付けます。これによりフォームの有効なメンバーが決まります。たとえば、フォームを「収益」プラン・タイプに割り当てた場合、「収益」プラン・タイプで有効な勘定科目のみを追加できます。入力されたデータは選択されたプラン・タイプのデータベースに保存されます。割り当てた後は、フォームのプラン・タイプを変更することはできません。

ソース・プラン・タイプがフォームのプラン・タイプに一致する場合、フォームの勘定科目を編集できます。勘定科目のソース・プラン・タイプ以外のプラン・タイプについてフォームに勘定科目を追加する場合、勘定科目はそのフォームでは読取り専用となります。

フォームおよびアクセス権

フォームへのアクセスを割り当てることで、どのユーザーが設計(たとえば、そのレイアウトと手順)および入力データを変更できるかを制御します。ユーザーは読取りまたは書込みアクセス権を有しているメンバーのみ選択できます。ユーザーがフォームを編集できるのは、安全な各次元のメンバーに少なくとも1つアクセスできる場合のみです。たとえば、ユーザーが欧州エンティティへの読取り専用のアクセス権を有している場合、欧州を含んでいるフォームの行と列は読取り専用として表示されます。ユーザーは書込みアクセス権を有しているメンバーのデータのみ変更できます。

フォームと通貨

単一通貨のアプリケーションでは、すべてのエンティティではアプリケーションの作成時に選択された通貨が使用されます。複数通貨のアプリケーションでは、フォームで選択された「通貨」メンバーによって、値が表示される通貨が決定されます。通貨メンバー「ローカル」が行または列に選択されると、その行または列について通貨換算は生じず、ユーザーはそのネイティブの通貨でエンティティのデータを入力できます。ローカル以外の通貨メンバーが選択されている場合、データ値はその行または列で選択された通貨に換算され、フォームは読取り専用の表示となります。データは「通貨」または「ローカル」を選択したメンバーとして持つ行または列に入力できます。[158 ページの「複数通貨のフォームの設計」](#)を参照してください。

フォームとバージョン

ボトムアップ・バージョンでは、レベル0メンバーを持つ行および列でデータ入力が可能です。親メンバーに設定された行または列は読取り専用となります。ボトムアップ・バージョンでデータ・エントリを許可するには、さらに視点をレベル0メンバーに設定する必要があります。ターゲット・バージョンにより親および子のメンバーでデータ・エントリを許可できます。

フォームと属性

共有された属性を選択し、メンバーを選択できます。たとえば、南の属性を選択し、南の属性を持つメンバーを含めることができます。値を入力し、属性を使用する行と列に保存できます。

フォームと共有メンバー

共有されたメンバーを個別には選択できません。そのかわりに、関係機能を使用してメンバーを選択します。たとえば、代替の機能ロールアップを選択し、その

ロールアップの下にすべてのメンバーを入力できます。共有されたメンバーを表示する行と列に値を入力し、データベースの基本メンバーに保存できます。共有されたメンバーはフォームで同じ内容を基本メンバーとして表示します。

フォームと計算

計算を最適化するには、個別に子を選択するかわりに、関係(「子孫」または「子」)を使用して行メンバーを選択します。個別に選択された子の親について合計を計算するには、階層レベルの数に応じて、複数のパスが必要です。

フォーム・コンポーネント

サブトピック

- [視点\(POV\)](#)
- [ページ軸](#)
- [行と列](#)

視点(POV)

ページ、行および列のコンテキストを決定するため、視点についてメンバーを選択します。たとえば、「シナリオ」次元が視点で「予算」に設定されている場合、ページ、行、列で入力されたすべてのデータは「予算」シナリオに入ります。各視点次元について、1つのメンバーに視点を設定され、ユーザーはこれを変更できません。

フォームを簡単にするには、視点で関係のあるメンバーのみを指定するか、ユーザー変数を含めます。[179 ページの「単一のフォーム・ページと視点\(POV\)の定義」](#)と[203 ページの「ユーザー変数の管理」](#)を参照してください。

ページ軸

ページ軸を使用し、ユーザーがより小さな論理的なビューでデータを操作できるように、様々な次元にわたるメンバーの組合せを指定します。ページ軸の各アイテムは1つまたは複数の次元から選択されたメンバーを持つことができます。ユーザーはアクセスできるメンバーのみを見ます。

複数のページのドロップダウン・リストを指定し、関係機能または属性を使用してメンバーを選択できます。ページ軸から選択して、メンバー・セット間で切り替えます。

メンバー名または別名をページ軸で表示します。データ入力ページで検索ドロップダウン・リストを使用可能にするページ次元でメンバーの数を指定できます。次元に多くのメンバーが含まれている場合に役に立ちます。[179 ページの「単一のフォーム・ページと視点\(POV\)の定義」](#)を参照してください。

行と列

行と列は、ユーザーがデータを入力するグリッドを定義します。たとえば、ユニット・セールスを行軸に割り当て、1月を列軸に割り当てることができます。ユーザーがフォームにアクセスすると、ユニット・セールス行が1月列と交差しているセルにデータを入力できます。

デフォルトでは、フォームに1セットの行と列があります。行と列を追加し、メンバーの非対照的な組合せを作成できます。[176 ページの「非対称の行と列の作成」](#)を参照してください。

特定のタイプのフォームの設計

サブトピック

- [複数通貨のフォームの設計](#)
- [ドリルスルー情報に使用するフォームの設計](#)
- [式の行と列を使用したフォームの設計](#)
- [データ検証を使用したフォームの設計](#)
- [ローリング予測のフォームの設計](#)

複数通貨のフォームの設計

エンティティの基本通貨以外の通貨でユーザーが作業するのを許可するには、次のタスクを実行します。

- 同じフォームで換算された通貨を比較するには、少なくとも2種類の通貨からメンバーを選択します。
- そのフォームのすべてのメンバーについて通貨を換算するには、「通貨」次元をページ軸に割り当て、レポート通貨をメンバーとして選択します。これでユーザーはページ軸から通貨メンバーを選択し、「通貨の計算」ビジネス・ルールを起動し、その通貨について値を表示できます。

ドリルスルー情報に使用するフォームの設計

FDM または FDMEE などのソースからデータがロードされるメンバーがフォームに含まれている場合、ユーザーはドリルスルーしてセル・データ・ソースの詳細を表示できます。ドリルスルー用のフォームを使用可能にするには、フォームの設計時に次のタスクを実行します:

- FDM または FDMEE において設定タスクを完了し、データまたはメタデータを Planning にロードします。詳細は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Administrator's Guide または Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition Administrator's Guide を参照してください。FDM に対して Planning のプロパティを設定または構成する必要はありません。
- たとえば、[第3章「アクセス権の設定」](#)の説明に従って、フォームとメンバーに適切なアクセス権を付与します。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition から取得されたすべての次元に対して、ドリル

スルーが可能です。ユーザーが書き込み権限を持つセル内でドリルスルーが使用可能になっている場合は、ユーザーがセルを更新する際にドリルスルー・アイコンが継続して表示されます。ただし、ユーザーがドリルスルーするとき、更新内容はソース・データと連結されません。

- 複数通貨アプリケーションの場合、ソース・システム内のエンティティのすべての通貨をロードできます。為替レートは、Planning 内の為替レート・テーブルにロードされ、Planning で通貨換算が行われます。

ドリルスルー情報のあるセルを含んでいるフォームをユーザーが印刷するとき、これらのセルにドリルスルー・アイコンが表示されます。

式の行と列を使用したフォームの設計

式の行と列には、グリッド・メンバーに対して算術計算を実行する式が含まれます。たとえば、特定の列内の値にランクを付けたり、2つの行間の差異を計算できます。式は、グリッド参照、算術演算子および算術関数で構成されます。既存の式をフォームに定義する、または割り当てる場合は、「レイアウト」タブで適切な行または列を選択して「セグメント・プロパティ」を選択し、式構築のオプションを表示します。

177 ページの「式の行と列の追加」を参照してください。式の作成および算術関数の使用の詳細は、付録 C「フォームの式関数」を参照してください。

データ検証を使用したフォームの設計

ビジネス・ポリシーやビジネス・プラクティスの実装に役立つよう事前定義されたデータ検証ルールが含まれるフォームを設計できます。フォームでは、入力したデータが検証ルールに違反したときに生成されるセルの色やデータ検証メッセージを指定できます。データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。

178 ページの「フォームへのデータ検証ルールの組込み」および第 8 章「データ検証の管理」を参照してください。

ローリング予測のフォームの設計

サブトピック

- [ローリング予測について](#)
- [ローリング予測の作成](#)
- [ローリング予測変数の変更](#)

ローリング予測について

従来の予測では、予測サイクルは常に会計年度の終わりに関連し、予測期間の月は会計年度の月が進むにつれて減っていきます。

ローリング予測は、会計年度の終了期間と関係なく継続するという点で、従来の予測とは異なります。ローリング予測の期間は、ローリング予測用に事前定義されたウィンドウに基づいて進みます。この期間は通常月次または四半期ごとに定義されます。月次ローリング予測は通常 12 ヶ月、18 ヶ月、または 24 ヶ月サイク

ルです。12ヶ月サイクルでは、12ヶ月の期間が常に月ごとに移動し、毎月の予測は実際の会計年度の終わりとは関係なく、次の12ヶ月に対するものになります。

たとえば、ある会社の会計カレンダーが7月から6月だとします。年度の最初の月(FY11の7月)、会社のプランナは11年7月から12年6月までの期間の予測シナリオを入力します。次の月(11年8月)に、プランナは12年7月が次の会計年度(FY12の7月からFY13の6月)に属するにもかかわらず、次の12ヶ月(11年8月から12年7月)に対する数字を予測シナリオに再度入力します。

次にローリング予測の例を示します。

図1 12か月ごとのローリング予測

Year and Period in Columns With No Additional Segment

	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY13	FY13	FY13	Total
	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	12 month rolling	
Actual	50	50	50														
Plan/Budget	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	300	300	300		
12 month Rolling Aug	50	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	125				
12 month Rolling Sep	50	50	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	125	125			
12 month Rolling Oct	50	50	50	75	75	75	75	75	75	75	75	75	125	125	125		

図2 四半期ごとのローリング予測

	FY12	FY12	FY12	FY13	FY13	FY13	FY13
	Q2	Q3	Q4	Q1	Q2	Q3	Q4
FY12 Q2 Review	F	F	F	F			
FY12 Q3 Review	A	F	F	F	F		
FY 12 Q4 Review	A	A	F	F	F	F	
FY13 Q1 Review	A	A	A	F	F	F	F

図3 四半期ごとの追跡ローリング予測(累計あり四半期ごとのローリング)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	12 qtrs rolling
Project 1	25	35	45	55	65	75	85	95	105	115	125	135	960
Project 2	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160	1260
Project 3	75	85	95	105	115	125	135	145	155	165	175	185	1560
Project 4	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	1860
Project 5	125	135	145	155	165	175	185	195	205	215	225	235	2160

図4 実績およびプラン年度の追加セグメントがあるローリング予測

Year and Period in Columns

	12 month Rolling Aug															Actual	Plan		
	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY12	FY13	FY13	FY13	FY12	FY13
	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	YearTotal	YearTotal		
Account 1	50	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	125				600	3600	

ローリング予測の作成

注： ローリング予測を作成および操作できるのは管理者のみです。これには、フォームの設計時にローリング予測オプションを表示する機能、ローリング予測をユーザー・インタフェースから移動する機能、代替変数を削除または変更する機能が含まれます。

▶ ローリング予測のフォームを設計するには:

1 新しいフォームを作成します。

168 ページの「単一のフォームの作成」を参照してください。


2 「レイアウト」タブで、列軸の「年」および「期間」次元を削除します。

3 列セグメント・ヘッダーを右クリックして、「ローリング予測設定」を選択します。

「ローリング予測設定」メニュー・オプションは、「年」および「期間」が同じグリッド軸(行または列)である場合にのみ使用できます。


4 「ローリング予測設定」ダイアログ・ボックスで、次の情報を入力します。

- **接頭辞:** これによりローリング予測代替変数が別の代替変数と区別されます。たとえば、4QRF は予測が第4 四半期のローリング予測であることを指定します。
- **既存の代替変数の再利用** - 以前に使用した接頭辞を指定する場合は、このチェック・ボックスを選択します。
- **開始年:** ローリング予測が開始する年。たとえば FY11 です。

開始年を入力するか、 をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。

入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「既存の代替変数の再利用」チェック・ボックスを選択してあると、既存の代替変数の開始年が「開始年」に自動的に入力されます。

- **開始期間:** ローリング予測が開始する年の期間。たとえば Q1 です。

開始期間を入力するか、 をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。

入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「既存の代替変数の再利用」チェック・ボックスを選択してあると、既存の代替変数の開始期間が「開始期間」に自動的に入力されます。

- **期間数:** 個別のセグメントとして生成される年/期間の組み合わせの数。

5 「生成」をクリックします。

定義済の代替変数は Planning および Essbase で作成され、追加列セグメントはローリング予測用の代替変数の組み合わせを含むフォームで作成されます。

注意:

- 代替変数は「開始年」または「開始期間」で選択した期間に基づきます。218ページの「メンバーとしての代替変数の選択について」を参照してください。
- フォームを設計するとき、「年」と「レベル0」の期間(たとえば、FY12/Jan)が選択されている行または列から「ローリング予測設定」ダイアログ・ボックスを開いた場合は、「開始年」と「開始期間」が自動的に入力されます。関数、変数、またはレベル0でないメンバーを使用して列のメンバーを選択した場合、値は自動的に入力されません。
- ローリング予測変数を別のフォームで再利用するには、新しいフォームの列ヘッダーを右クリックして「メンバー・セレクト」を起動します。

ローリング予測変数の変更

管理者はローリング変数の代替変数をフォームで直接の改訂できます。

▶ フォームでローリング予測変数を変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 2 ローリング予測のフォームを開きます。
- 3 フォームの任意の列を右クリックして、「ローリング予測変数の設定」を選択します。
- 4 「ローリング予測変数の設定」ダイアログ・ボックスで、「年」および「期間」次元の値を入力または編集します。

「値のシフト基準」の横の選択を変更することで、値を上下にシフトできます。「値のシフト基準」の隣にある選択肢を変更すると、年次元と期間次元の値は自動的に移入され、シフト後の年と期間の値が表示されます。

- 5 「適用」をクリックします。

新しい値は、これらの代替変数が使用されるすべてのフォームに流れ、そのフォームに変更が反映されます。

フォームの操作


サブトピック

- [フォームとフォルダの選択および表示](#)
- [フォームのプレビュー](#)
- [フォーム定義の印刷](#)
- [フォームの検索](#)
- [フォームとアド・ホック・グリッドの移動](#)
- [フォームの削除](#)
- [フォームの名前の変更](#)
- [フォームのインポートとエクスポート](#)
- [ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定](#)

フォームとフォルダの選択および表示

これらの手順を使用して、フォーム・フォルダと、フォルダに含まれるフォームを選択して開きます。編集を容易にするために、管理者がアド・ホックではないフォームを開き、直接エンド・ユーザー・インタフェースから編集できます。




- ▶ エンド・ユーザーのインタフェース内からアド・ホック以外のフォームを選択して開くには:


- 1 データ・フォームを開きます。
- 2 ページの上部で、「フォーム・デザイナー」アイコンをクリックします。
新しいタブでフォームが開きます。

- ▶ 管理者のインタフェース内からフォームまたはフォーム・フォルダを選択して開くには:

- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 2 次の手順のいずれかを実行します:
 -
 - フォーム・フォルダを開くには、「フォーム・フォルダ」の下からフォーム・フォルダを選択します。
 - フォームを開くには、適切なフォーム・フォルダが開かれているときに「フォーム」の下に表示されるリストからフォームを選択します。

フォーム・フォルダを選択した後、「フォーム・フォルダ」の上のボタンを使用して、フォルダの作成、名前変更およびアクセス割当てを行います。フォームを表示した後、「フォーム」の上のボタンを使用して、フォームの作成、編集、移動、削除およびアクセス割当てを行います。チェック・ボックスの横にあるアイコンはフォームのタイプを示します:

-  単一のフォーム
-  複合フォーム
-  マスター複合フォーム

-  アド・ホック・グリッド

アド・ホック・グリッドについての詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide のアド・ホック・グリッドの操作の章を参照してください。

フォームのプレビュー

フォームの設計中に、POV、列、行およびページ軸に割り当てられている次元をプレビューできます。プレビューでは、メンバー属性、別名および、フォームに関連付けられたデータが表示されますが、新規データは入力できません。

プレビューにより、通常のフォームの設計検証チェックが完了し、フォームに含まれるデータ検証ルールが正しく評価されたかどうかチェックされます。フォームを保存するには、データ検証ルールが正しく完了している必要があります。また、データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。変更をフォームに保存しない場合、フォームが最後に保存された後に行われた検証ルールの変更はすべて失われます。





▶ フォームの設計をプレビューするには:

- 1 フォームを開き「プレビュー」をクリックします。
- 2 設計検証チェック中にレポートされた問題を解決します。これには、データ検証ルールに関する問題も含まれます。
- 3 フォームを保存し、更新が保存されたことを確認します。更新には、データ検証ルールの変更も含まれます。

フォーム定義の印刷

管理者は、次元メンバー、ビジネス・ルール、アクセス権および他のフォームのコンポーネントについての情報が記載されているフォーム定義レポートを印刷できます。さらに、[389 ページの「レポートのカスタマイズ」](#)で説明されているように、フォーム定義についてもレポートを作成できます。

▶ フォーム定義レポートを作成および印刷するには:

- 1 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
- 2 「フォーム」を選択します。
- 3 印刷するフォーム定義を選択します:
 - フォームを選択するには、フォームを「選択したフォーム」に移動します。これには選択してから  または  をクリックします。
 - フォームを除去するには、「選択したフォーム」からフォームを選択し、 または  をクリックします。
- 4 「オプション」: 「メンバー選択リストを含める」を選択し、レポートに列と行を含みます。
- 5 「オプション」: 「ビジネス・ルールを含める」を選択し、関連付けられたビジネス・ルールを含みます。

6 「レポート作成」をクリックします。

Adobe Acrobat が次のような集計されたレポートを生成します:

- プラン・タイプ
- 説明
- 列次元、メンバーおよび追加の列の定義
- 行次元、メンバーおよび追加の行の定義
- 「ページと視点(POV)」次元
- フォームのアクセス権
- 関連付けられたビジネス・ルール

7 レポートを印刷するには、Adobe Acrobat のツールバーで をクリックします。



注: マルチバイト文字がレポートに表示されるようにするには、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide のマルチバイト文字に関する項を参照してください。正しい言語のグリフがレポートに反映されるよう表示するには、フォントを java.home ディレクトリで使用可能にすることも必要です。Planning ディレクトリは、EPM_ORACLE_HOME\common\JRE\Sun\1.6.0\lib\fonts という場所を示します。

フォームの検索

▶ フォームを検索するには:

- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 2 「検索」で、フォーム名の一部または全体を入力します。

大文字と小文字の区別を無視し、次の一致が検索されます。

- 3  をクリックして前方(下方)に検索するかまたは  をクリックして後方(上方)に検索します。

フォームとアド・ホック・グリッドの移動

▶ フォームを移動するには:

- 1 フォームを選択します。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。

複数のフォームが同じフォルダにある場合、それらを同時に移動できます。

- 2 「移動」をクリックします。
- 3 宛先フォルダを選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

フォームの削除

▶ フォームを削除するには:

- 1 フォームを選択します。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2 「削除」をクリックします。
- 3 「OK」をクリックします。

フォームの名前の変更

▶ フォームの名前を変更するには:

- 1 フォームを選択します。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2 「名前変更」を選択します。
- 3 新しい名前を入力して、「OK」をクリックします。

フォームのインポートとエクスポート

管理者は `FormDefUtil.cmd`(Windows)または `FormDefUtil.sh`(UNIX)を使用し、Planning アプリケーション間でフォーム定義を移動できます。XML ファイルへまたは XML ファイルから、フォームをインポート、エクスポートできます。これは開発からプロダクション環境へ移動する際に便利です。

このユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用し、`planning1` ディレクトリにインストールされます。`planning1` の完全パスについては 51 ページの「[EPM Oracle インスタンスについて](#)」を参照してください。

注： 前のリリースを使用してエクスポートされた複合フォームの XML ファイルは、現在のリリースにインポートできません。該当の Planning アプリケーションが現在のリリースに移行された後で、XML ファイルを再抽出する必要があります。ただし、前のリリースを使用してエクスポートされた非複合フォームの XML ファイルは、現在のリリースにインポートできます。

▶ `FormDefUtil` ユーティリティを起動するには:

- 1 `planning1` ディレクトリから、次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
formdefutil [-f:passwordFile]import|exportfilename|formname|-all  
server name user name application
```

パラメータ	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。50ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。	いいえ
<code>import export</code>	フォーム定義をインポートまたはエクスポートします。	はい
<code>filename formname -all</code>	<code>import</code> で使用する際には、フォーム定義を含む XML ファイルを指定します。 <code>export</code> で使用する際には、XML にエクスポートするフォームを指定します。 <code>-all</code> を <code>import</code> または <code>export</code> に付けて使用し、現在のアプリケーションのすべての XML ファイルまたはフォーム定義をインポートまたはエクスポートします。	はい。 <code>-all</code> はオプションです。
<code>server name</code>	Planning アプリケーションが存在するサーバー名。	はい
<code>user name</code>	管理者の名前。	はい
<code>application</code>	<code>export</code> で使用する場合、エクスポートするフォーム定義を含んでいる Planning アプリケーションの名前。 <code>import</code> で使用する場合、フォーム定義をインポートする Planning アプリケーションの名前。	はい

2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

フォームの定義をエクスポートすると、ユーティリティによって現在のディレクトリに XML ファイルが作成され、ログ・ファイルにエラーが記録されます(ログ・ファイルの場所については、51ページの「[EPM Oracle インスタンスについて](#)」を参照してください)。このユーティリティを任意のディレクトリにコピーし、そこから起動することで、別のディレクトリにファイルを保存することができます。

例:

- 1つのファイルをインポートするには:

```
FormDefUtil.cmd import c:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning
\planning1\form1.xml localhost admin APP1
```
- 1つのファイルをエクスポートするには:

```
FormDefUtil.cmd export Form1 localhost admin APP1
```
- すべてのフォーム定義をエクスポートするには:

```
FormDefUtil.cmd export -all localhost admin APP1
```
- すべてのフォーム定義をインポートするには:

```
FormDefUtil.cmd import -all localhost admin APP1
```

ユーザーが同時に使用できるフォーム数の指定

ユーザーが一度に複数のフォームを処理できるようにするには、アプリケーションのユーザーごとにキャッシュされるデータ・グリッド数を指定する `DATA_GRID_CACHE_SIZE` プロパティを更新します。このプロパティはデフォルト

で1に設定されており、各ユーザーが一度に開いてアクティブにできるフォームは1つになっています。

注意 このプロパティの値を大きくすると、アプリケーション・サーバーの使用メモリーも増加することに注意してください。たとえば、ユーザーが100人のアプリケーションの場合、アプリケーション・サーバーはデフォルトで最大100のデータ・グリッドをキャッシュできます。このプロパティが3に設定されている場合、最大300のデータ・グリッドをキャッシュできます。大量のフォームがあるアプリケーションでは、メモリー使用率への影響が大きくなります。

▶ 各ユーザーが同時に処理できるフォーム数を指定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 2 すべての Planning アプリケーションのプロパティを設定するには、「システム・プロパティ」を選択します。
- 3 設定を更新します:
 - プロパティを追加するには、「追加」をクリックします。空の行に(スペースは使用せずに)DATA_GRID_CACHE_SIZEを入力します。「プロパティ値」で、ユーザーが一度に開いてアクティブにできるフォーム数を表す数値を入力します。
 - プロパティを変更するには、「プロパティ値」の値を変更します。
 - プロパティを削除するには、削除するプロパティの名前を選択して「[Delete]」キーをクリックします。
- 4 「保存」をクリックして、変更を確認します。
- 5 Planning サーバーを再起動します。

単一のフォームの作成

単一のフォームを作成するには、次を定義します:

- フォームのプロパティ。171 ページの「フォーム・グリッド・プロパティの設定」、172 ページの「次元プロパティの設定」および169 ページの「行と列のレイアウトの設定」を参照してください。
- 行と列のレイアウト。169 ページの「行と列のレイアウトの設定」を参照してください。
- ページおよび POV。157 ページの「ページ軸」および 157 ページの「視点 (POV)」を参照してください。
- メンバー選択。第7章「メンバー・セレクタの使用」を参照してください。
- 表示オプション。173 ページの「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」を参照してください。
- ビジネス・ルールの選択およびプロパティ。191 ページの「ビジネス・ルールの使用方法」を参照してください。

- アクセス権。第3章「アクセス権の設定」を参照してください。
- 式の行と列。159ページの「式の行と列を使用したフォームの設計」を参照してください。
- データ検証ルール。159ページの「データ検証を使用したフォームの設計」を参照してください。

複数の単一フォームが同時に表示されるフォームである複合フォームを作成することもできます。181ページの「複合フォームの作成」を参照してください。

▶ 単一のフォームを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 2 フォームを保管するフォルダを選択します(163ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください)。
- 3 フォームのリストの上にある「作成」をクリックします。
- 4 「単一のフォーム」を選択します。
- 5 名前を80文字まで、オプションの説明を255文字まで入力します。
- 6 フォームに関連付ける「プラン・タイプ」を選択します。155ページの「フォームとプラン・タイプ」を参照してください。
- 7 オプション: フォームの操作方法を指定します。
- 8 「次へ」をクリックし、フォームの行と列をレイアウトします。169ページの「行と列のレイアウトの設定」を参照してください。

行と列のレイアウトの設定

フォームを作成する場合、「レイアウト」タブには最初、1つの行と1つの列が含まれ、すべての次元はPOV内にあります。フォームを作成または編集する場合、必要に応じて、行および列をフォームに追加できます。

「レイアウト」タブを使用するには:

- フォームの一般的な表示プロパティの設定(171ページの「フォーム・グリッド・プロパティの設定」を参照)
- フォームの行と列の追加
- 列と行への次元の割当て
- ユーザーが処理する次元メンバーの選択(第7章「メンバー・セレクタの使用」を参照)
- 行、列、次元、および式の行と列に対する表示プロパティの選択(172ページの「次元プロパティの設定」および177ページの「式の行と列の追加」を参照)

行と列のレイアウトを設定する場合:


- 行と列の軸に少なくとも1つの次元を割り当てます。

- 複数の軸で同じ次元は選択できません。(POV でユーザー変数を設定すると、複数の軸で次元を選択できるようになります。)
- 軸の次元を別の軸に移動するには、軸の次元を選択し、ターゲット軸にドラッグします。

▶ フォーム・レイアウトを設定または更新するには:

1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。

2 「オプション」:  をクリックして次元を選択し、それを「行」または「列」、あるいは行または列内にドラッグします。

注: 当初、すべての次元はフォーム視点(POV)内にあります。次元は視点(POV)から行、列またはページにドラッグできます。また、グリッド内の任意の領域(行、列、POV またはページ)から他の任意の領域にドラッグすることもできます。

3 「オプション」: 別の次元を選択し、「行」または「列」、あるいは行または列にドラッグします。

4 「オプション」: 行または列内で右クリックし、「行の追加」または「列の追加」を選択し、行および列をフォームに追加します。

5 「オプション」: フォーム内の行または列の順序を変更するには、行または列内で右クリックし、行については「行を上に移動」または「行を下に移動」、列については「列を左に移動」または「列を右に移動」を選択します。

6 各次元のメンバーを選択します。

第7章「メンバー・セレクタの使用」を参照してください。

7 「オプション」: 行または列内で右クリックし、「次元を上に移動」または「次元を下に移動」を選択し、行または列内の次元の順序を変更します。

8 次の表の情報を使用して、行ヘッダー(1 または 2 など)を選択して行プロパティを設定したり、列ヘッダー(A または B など)を選択して列プロパティを設定します。

フォームの行および列プロパティにより、フォーム内で行および列を表示する方法を定義します。これらのプロパティは、フォーム・グリッドに定義されている行および列の表示仕様に追加されます。171 ページの「フォーム・グリッド・プロパティの設定」を参照してください。

表 45 フォームの行および列のプロパティ

オプション	説明
「すべての行に適用」	設定をすべての行に適用します。2 つ以上の行がある場合に使用できます。行ごとに異なるプロパティを設定する場合は、このオプションの選択を解除します。
「すべての列に適用」	設定をすべての列に適用します。2 つ以上の列がある場合に使用できます。列ごとに異なるプロパティを設定する場合は、このオプションの選択を解除します。
「非表示」	フォーム上の列を非表示にします

オプション	説明
「読取り専用」	古い読取り専用のデータと新しい編集可能なデータの比較ができるように、読取り専用の行または列を作成します
「区切り記号の表示」	セグメントが目視で区別できるように太い枠線を作成します
「階層の抑制」	インデントを抑制します。
「欠落の抑制」	データがない行または列を非表示にします。選択を解除すると、データが欠落しているセルには「#MISSING」が付いた行または列が表示されます。
「デフォルトの列の幅」	<ul style="list-style-type: none"> ● 小: 小数点以下 7 桁を表示 ● 中: 小数点以下 10 桁を表示 ● 大: 小数点以下 13 桁を表示 ● 適合するようサイズ調整: すべての列ヘッダーを表示された空間に合わせます ● カスタム: 小数点以下 13 桁から 999 桁を表示するカスタム・サイズを選択します ● デフォルトの使用: 列幅をグリッド・レベルで定義します
「行の高さ」	<ul style="list-style-type: none"> ● 適合するようサイズ調整: すべての行ヘッダーを表示された空間に合わせます ● カスタム: 行の高さのカスタム・サイズをピクセルで選択します ● デフォルトの使用: 行の高さをグリッド・レベルで定義します
「このフォームへのアクセス権を持つユーザーについてのみ検証」	現在ログインしているユーザーがフォームへのアクセス権を持たない場合は、プランニング・ユニットの検証時に、フォームに関連する検証を実行しません。
「既存のブロックがあるページについてのみ検証」	有効化されている場合、Planning により潜在的ブロックが含まれるページの組合せが自動的に検出され、そのページの組合せに対してのみ検証が実行されます。これにはいくつかの例外があります。ページの組合せに動的計算、動的計算および保管、ラベルのみ、または子メンバーが 1 つ含まれる保管が含まれる場合、そのページは常にロードされます。
「ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページについてのみ検証」	有効化されている場合、管理者ではなく現在ログインしているユーザーとして検証が行われ、フォーム・メンバーにはユーザーのセキュリティが適用されます。

9 オプション: 式の行または列を追加します。177 ページの「式の行と列の追加」を参照してください。

10 オプション: データ検証ルールを追加または更新します。178 ページの「フォームへのデータ検証ルールの組込み」を参照してください。

フォーム・グリッド・プロパティの設定

フォーム・グリッド・プロパティにより、一般的なフォームの行および列の表示を設定します。

▶ フォーム・グリッド・プロパティを設定するには:

1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。

- 2 「グリッドのプロパティ」で、次の表の情報を使用して一般的な行および列プロパティを設定します:

表 46 フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
「欠落ブロックの抑制」	(行のみ)90%以上など多数の行を抑制するときに、「欠落データの抑制」設定のパフォーマンスを向上します。抑制された行がわずかまたは存在しない場合、「欠落ブロックの抑制」設定によりパフォーマンスが低下する可能性があります。この設定を使用する前後でフォームをテストし、パフォーマンスが向上するかどうかを判定します。さらにアプリケーションに大幅な変更を行うときはいつでもフォームをテストします。 この設定を選択すると、属性はフォームに表示されず、抑制された特定のブロックは動的計算メンバーを無視する場合があります。また、行メンバーはインデントして表示されません。
「欠落データの抑制」	データがない行または列を非表示にします。選択を解除すると、データが欠落しているセルには「#MISSING」が付いた行または列が表示されます。
「デフォルトの列の幅」	<ul style="list-style-type: none">● 小: 小数点以下 7 桁を表示● 中: 小数点以下 10 桁を表示● 大: 小数点以下 13 桁を表示● 適合するようサイズ調整: すべての列ヘッダーを表示された空間に合わせます● カスタム: 小数点以下 13 桁から 999 桁を表示するカスタム・サイズを選択します

次元プロパティの設定

フォームの次元表示プロパティを設定および編集できます。このプロパティには、フォームにメンバー名または別名を表示するかどうか、行または列を非表示にするかどうか、およびユーザーにメンバー式の表示を許可するかどうかが含まれます。これらのプロパティは、行、列、ページおよび視点(POV)次元に適用されます。

▶ 次元プロパティを設定するには:

- 1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。


- 2 行または列で  をクリックし、行または列の次元プロパティを設定します。
- 3 プロパティを選択します:

表 47 次元プロパティ

プロパティ	説明
「すべての行次元に適用」	すべての行次元にプロパティを適用します。
「すべての列次元に適用」	すべての列次元にプロパティを適用します。
「すべてのページ次元に適用」	すべてのページ次元にプロパティを適用します。
「すべての POV 次元に適用」	すべての POV 次元にプロパティを適用します。

プロパティ	説明
「メンバー名」	メンバー名を表示します。
「別名」	メンバーの別名を表示します。
「メンバー式」	メンバー式を表示します。
「次元の非表示」	次元を非表示にします。
「集計演算子を表示」	集計演算子を表示します。
「展開開始」	展開された次元メンバーのリストを最初に表示します。

- 4 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定

「その他オプション」で、フォームの表示、機能および印刷についてオプションを設定します。また、このページのプロパティを使用して、様々な勘定科目タイプについて最小値と最大値を適用し、データ精度を制御できます。たとえば、長い数の小数部の桁を切り捨てることができます。

勘定科目レベルの注釈を使用可能にもできます。ユーザーは、勘定科目、エンティティ、シナリオおよびバージョン番号への書込み権限がある場合に、フォームの勘定科目に注釈を追加できます。勘定科目レベルの注釈は、シナリオ、バージョンおよびエンティティ次元の様々な組合せに応じて異なる場合があります。次に注意してください:

- 「勘定科目」次元は、行軸に割り当てる必要があります。
- 「勘定科目」、「エンティティ」、「バージョン」、「シナリオ」の次元は、列軸に割り当てることはできません。
- 「エンティティ」次元は行、ページまたは POV 軸に割り当てることができます。
- 「バージョン」と「シナリオ」次元はページまたは POV 軸に割り当てる必要があります。

▶ フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションを設定するには:

- 1 フォームを開き「その他オプション」をクリックします。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2 「精度」で、「通貨の値」、「通貨以外の値」および「パーセンテージ値」について、セルに表示される小数部の桁数を設定するオプションを選択します。

短い小数部を持つ数にゼロを追加するには、「最小値」に値を指定します。長い数の小数部を切り捨てるには、「最大値」に値を指定します。例:

表 48 データ精度の例

値	最小精度	最大精度	表示される値
100	0	任意	100
100	3	3以上の任意の数値か、なし	100.000
100.12345	5以下の任意の数値	なし	100.12345
100.12345	7	なし	100.1234500
100.12345	3以下の任意の数値	3	100.123
100.12345	0	0	100
100.12345	2	4	100.1234
100	2	4	100.00

注： デフォルトで、ここで選択した精度設定は、通貨メンバーの精度設定を上書きします(358 ページの「通貨の作成」を参照)。通貨メンバーの精度設定をフォームより優先したい場合は、「通貨メンバーの精度設定の使用」を選択します。

注： 精度設定は値の表示にのみ影響し、より正確である保管された値には影響しません。たとえば、「最小精度」を2に設定し、Planning で Q1 からの値 100 が 1、2、3 月に分散された場合、選択されていない月セルには 33.33 と表示されます。選択されたセルには、より正確な値(たとえば 33.33333333333333)が表示されます。保管された値の小数点以下の桁数は有限なため、1、2、3 月の値が Q1 に集約されると、33.33333333333333 に 3 がかけられて、Q1 をクリックすると、Q1 の値に 99.9999999999998 が表示されます。

3 ユーザーがフォームをオフラインで処理できる場合、「Smart View オプション」で「オフラインの使用可能」を選択します。

この設定はアプリケーションをオフライン(デフォルト設定)で使用可能にするときに適用します。「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」を順に選択し、「アプリケーション・プロパティ」タブを選択して ENABLE_FOR_OFFLINE を False に変更します。37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」を参照してください。

注： Smart View オプションは、複合フォームでは使用できません。

4 「表示プロパティ」で、フォームのオプションを選択します:

- 「フォームを読み取り専用にする」:複合フォームについては、このオプションを設定できません。
- 「フォームの非表示」:たとえば、複合フォームの一部であるフォームまたはメニューやタスク・リストからアクセスできるフォームを非表示にします。

- 「欠落値を空白で表示」: データが存在しないフォーム・セルを空のままにします。このオプションを選択しない場合、空のセルでは「#MISSING」のテキストが表示されます。
- 「1つのエンティティに複数通貨を許可」: アプリケーションが複数の通貨をサポートする場合、基本通貨に関係なく、エンティティが複数の通貨をサポートするのを許可します。ユーザーはフォームで表示するセル値の通貨を選択できます。
- 「一括割当ての使用可能」: ユーザーがこのオプションを使用するには、「一括割当て」役割が必要です。
一括割当ての使用の詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。
- 「グリッド分散の使用可能」
グリッド分散の使用の詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。
- 「セル・レベルのドキュメントの使用可能」: (デフォルト)アクセス権に応じて、ユーザーがフォームのセルでドキュメントを追加、編集、表示できるようにします。フォームでドキュメントをユーザーが使用するのを防ぐには、このオプションの選択を解除します。セル・ドキュメントを使用するには、Oracle Hyperion Planning User's Guide、第3章「アクセス権の設定」を参照してください。
- 「データの無いフォームのメッセージ」: 使用可能な行のないクエリーのためにフォーム行で表示するテキストを入力します。デフォルトのテキスト「このフォームに有効なデータの行がありません。」を表示するよう、空白を残します。

5 「印刷オプション」で、フォーム情報を印刷する際のプリファレンスを設定します:





表 49 印刷オプション



オプション	説明
「サポート詳細を含める」	PDF ファイルにサポート詳細を追加行として含めます。表示フォーマットを指定します: 「標準」 「順序」: 関連付けられたメンバーの後で、「サポート詳細」ページと同じ順序でサポート詳細を印刷します。 「逆順」: 関連付けられたメンバーの前で、サポート詳細を逆の順序で印刷します。子に関するサポート詳細は親の上に表示され、兄弟の順序が保たれます
「コメントの表示」	セルに関連付けられたテキスト・メモを表示します。
「データのフォーマット」	フォームから表示済のデータに数のフォーマット設定を適用します
「属性メンバーの表示」	フォームで属性メンバーを選択した場合、PDF ファイルで表示します
「精度の適用」	フォームの精度設定(必要な小数以下の桁数)を PDF ファイルで表示されたデータに適用します

オプション	説明
「通貨コードの表示」	<p>フォームが複数の通貨をサポートしている場合、フォームおよび PDF ファイルに通貨コードが表示されます。通貨コードが表示されるかどうかは、通貨コードがフォームの任意のメンバーに存在するかどうかによって決まります。</p> <p>通貨コードがフォームに含まれる任意のメンバーに存在する場合、このチェック・ボックスの選択に関係なく、フォームに通貨コードが表示されます。通貨コードがフォームのメンバーに存在しない場合、通貨コードは表示されません。</p>
「勘定科目注釈の表示」	勘定科目注釈がフォームで使用可能になっている場合、PDF ファイルで勘定科目注釈を表示する選択をします。

389 ページの「レポートのカスタマイズ」で説明されているように、フォームでレポートを作成することもできます。

6 「コンテキスト・メニュー」で、「使用可能なメニュー」からメニューを選択して「選択したメニュー」に移動し、メニューをフォームに関連付けます:

-  選択した内容を移動
-  すべて移動
-  選択した内容を削除
-  すべて削除

7 複数のメニューを選択する場合、 または  をクリックし、これらのメニューが表示される順序を設定します。

複数のメニューは、間に区切りが配置され順番に表示されます。

8 「動的ユーザー変数の使用可能」を選択し、フォーム内の動的ユーザー変数を使用可能にします(Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照)。

9 「保存」をクリックします。

非対称の行と列の作成

非対称の行と列には、同じ次元で選択されたが異なっているメンバー・セットが含まれます。例:


行/列 A: シナリオ = Actual、期間 = Q1


行/列 B: シナリオ = Budget、期間 = Q2, Q3, Q4

▶ 非対称の行と列を作成するには:

1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。

2  をクリックし、変更する次元を選択します。

3 次元名の右側にある  をクリックし、この次元に選択したメンバーを変更します。第 7 章「メンバー・セレクタの使用」を参照してください。


- 4 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

式の行と列の追加

式の行には、フォームの行に適用される式が含まれます。式の列には、フォームの列に適用される式が含まれます。たとえば、1月の売上(列 A)と2月の売上(列 B)のパーセンテージ差異を計算する式の列(列 D)を作成できます。式の行または列に定義された式は、行または列のすべての次元に適用されます。式を定義するには、式の行または列を選択し、この式を式バーに入力します(437 ページの「式の作成」を参照)。

注： 空白行を作成するには、他の2つの行間に式の行を追加します。空白行は、フォーム内で合計と小計を視覚的に区別する際に役に立ちます。

▶ 式の行と列を追加するには:





- 1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2 「レイアウト」タブで、「行」または「列」を右クリックします。
- 3 「式の行の追加」または「式の列の追加」を選択します。
- 4 行または列で表示される新しい「式ラベル」をクリックし、式の名前を入力します。
- 5 行または列の番号をクリックし、右側の「セグメント・プロパティ」ペインに表示される次のいずれかを指定します:
 - 「非表示」を選択すると、行または列を非表示になります
 - 「区切り記号の表示」を選択すると、行または列の区切り記号が表示されます
 - 「フォームの式を表示」を選択すると、行または列ヘッダーで  をクリックしたときに、フォームに式が表示されます。
- 6 右側のペインにある「式のデータ型」の次元ごとに、式の結果のデータ型を選択します。

データ型は、次のとおりです:

- 通貨
- 通貨以外
- パーセンテージ
- スマートリスト

「スマートリスト」を選択する場合、データ型の横にあるドロップダウン・リストから「スマート・リスト」を選択します。

- 日付
- テキスト

- 7 「式」の名前を入力して、行または列に使用する式を定義し、 をクリックします。[437 ページの「式の編集」](#)を参照してください。
- 8 「オプション」:式バーで、「選択」をクリックし、使用可能な算術関数の1つを式に組み込みます。[付録C「フォームの式関数」](#)を参照してください。
- 9  をクリックし、式を検証します。
式が有効である場合、式バーの右側にある旗が緑色になります。式が無効である場合、旗は赤色になります。
- 10 「オプション」:式にエラーがある場合、 をクリックすると、エラーについて説明するツールチップを表示できます。エラーを修正し、 をクリックして修正を確認します。
式が有効である場合、式バーの右側にある旗が緑色になります。
- 11 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

フォームへのデータ検証規則の組み込み

「レイアウト」タブで、検証規則をグリッド、列、行またはセルに対して追加および更新できます。規則を処理することで、セルの色の変更、データ入力時の検証メッセージの表示、プランニング・ユニットの移動パスの変更ができます。検証規則はフォームとともに保存されます。

データ検証規則を追加する前に、規則が実行する関数について検討し、規則の範囲をプランすることが重要です。検証規則のプランニングおよび実装に関する詳細とベスト・プラクティスは、[第8章「データ検証の管理」](#)を参照してください。

▶ フォームにデータ検証規則を組み込むには:

- 1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。

[163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」](#)を参照してください。

- 2 「レイアウト」タブで、データ検証規則を組み込む場所(グリッド、列、行またはセル)内で右クリックします。

たとえば、グリッドにデータ検証を作成するには、グリッドの左上隅を右クリックします。

- 3 次のいずれかのオプションを選択します:

- 「検証規則の追加/編集」:「データ検証規則・ビルダー」ダイアログ・ボックスの条件ビルダー領域で既存の規則を追加または編集します。
- 「検証規則のコピー」:新しい場所に貼り付けるために選択した規則をコピーします。
- 「検証規則の貼付け」:前にコピーした規則を新しい場所に貼り付けます。

表示されるメニュー・オプションはコンテキスト依存であり、規則がすでに追加されているかどうか、および前にメニュー・オプションを選択し

ているかどうかによって異なります。たとえば、ルールが含まれるセルを右クリックして「検証ルールのコピー」を選択した場合、別のセルを右クリックすると、「検証ルールの貼付け」メニュー・オプションが表示されます。





- 4 [221 ページ](#)の「データ検証ルールの作成および更新」に示すように、ルールを作成および検証します。
- 5 フォームで、フォームの構築を続行するため「次へ」をクリックしてから、フォームを検証および保存します。

単一のフォーム・ページと視点(POV)の定義

ページ軸と視点(POV)について次元とメンバーを選択できます。POV 次元およびメンバーは、フォーム・プラン・タイプに対して有効で、かつページ、列または行軸に割り当てられていない必要があります。視点(POV)は、データの交差を定義する固有の次元メンバーを設定します。

フォームのユーザー変数を設定すると、変数名が「視点(POV)」に表示されます。[203 ページ](#)の「ユーザー変数の管理」を参照してください。

▶ ページ軸および視点(POV)を定義するには:

- 1 フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[163 ページ](#)の「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2  をクリックし、次元を「ページ」にドラッグしてフォーム・ページ軸に追加します。
- 3 ページ軸次元ごとに  をクリックし、メンバーを選択します。[第7章「メンバー・セレクタの使用」](#)を参照してください。
検索オプションを使用可能にするページ次元でメンバー数を指定できます。「ファイル」>「プリファレンス」を選択します。「表示オプション」で「ページ数を超えた場合に検索を許可」に値を入力します。
- 4 手順 2 および 3 を繰り返し、複数の次元をページ軸に割り当てます。
複数の次元をページ軸に割り当てると、プランナはデータ入力中に次元を選択できます。ユーザーは「表示オプション」を選択し、Planning がページの設定を最近使用した選択内容に設定するかどうかを指定できます。
- 5 「プロパティ」で、ページ次元のオプションを選択または選択を解除します。[172 ページ](#)の「次元プロパティの設定」を参照してください。
- 6 「オプション」:  をクリックし、次元を「視点(POV)」にドラッグして「POV」フォームに追加します。「視点(POV)」に移動する次元ごとにこのアクションを繰り返します。
- 7 「視点(POV)」で、各次元の  をクリックしてメンバーを選択するか、オンザフライ方式でまだ存在していないメンバーを作成します。[第7章「メンバー・セレクタの使用」](#)を参照してください。

- 8 「プロパティ」で、POV次元のオプションを選択または選択を解除します。172 ページの「次元プロパティの設定」を参照してください。
- 9 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

フォームの編集


単一のフォームと複合フォームの両方のレイアウト、メンバーおよびプロパティを編集できます。たとえば、式の行または列を単一のフォームに追加することや、フォームを複合フォームに追加することが可能です。

▶ 単一のフォームを編集するには:

- 1 フォームを選択して、「編集」をクリックします(163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください)。
- 2 選択:
 1. 「プロパティ:」フォームの名前、説明および指示を編集します。168 ページの「単一のフォームの作成」を参照してください。
 2. 「レイアウト:」フォームのレイアウトを編集します。169 ページの「行と列のレイアウトの設定」を参照してください。
 3. 「その他オプション:」フォームの表示を編集します。173 ページの「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」を参照してください。
 4. 「ビジネス・ルール:」フォームに関連付けるビジネス・ルールを変更したり、ビジネス・ルールのプロパティを変更します。191 ページの「ビジネス・ルールの使用方法」を参照してください。
- 3 「終了」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

▶ 複合フォームを編集するには:

- 1 次のいずれかのアクションを行います:

- フォームを選択して「用途の表示」アイコン、「編集」の順にクリックします。
- フォームを選択して、「編集」をクリックします(163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください)。

注: 複合フォームの編集時に、「組み込まれている1つ以上のフォームが変更されています。共通次元の変更を保存する場合は、複合フォームを保存してください」というメッセージが表示された場合は、複合フォームの変更を保存する前に、組み込まれている単一のフォームの共通次元の変更内容を確認してください。

- 2 選択:

1. 「プロパティ:」複合フォームの名前、説明または指示を編集します。181 ページの「複合フォームの作成」を参照してください。

2. 「レイアウト:」フォームのレイアウトとプロパティを編集します。181ページの「[複合フォームのレイアウトの設定](#)」を参照してください。
 3. 「ビジネス・ルール:」フォームに関連付けるビジネス・ルールを変更したり、ビジネス・ルールのプロパティを変更します。191ページの「[ビジネス・ルールの使用方法](#)」を参照してください。
- 3 「終了」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

複合フォームの作成

複合フォームには、様々なプラン・タイプに関連付けられている場合でも、複数のフォームが同時に表示されます。ユーザーはデータを入力し、合計収益など、上位交差に集約された結果をみることができます。

▶ 複合フォームを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- 2 フォームを保管するフォルダを選択します。163ページの「[フォームとフォルダの選択および表示](#)」を参照してください。
- 3 フォームのリストの上にある「複合フォームの作成」をクリックします。
- 4 「プロパティ」タブに、フォームの名前を80文字まで、オプションの説明を255文字まで入力します。
- 5 「オプション」: 「フォームの非表示」を選択してフォームを非表示にします。
- 6 「オプション」: フォームへの指示を入力します。
- 7 複合フォームのレイアウトを設定します。181ページの「[複合フォームのレイアウトの設定](#)」を参照してください。
- 8 複合フォーム・セクションのプロパティを設定します。184ページの「[複合フォームのセクション・プロパティの設定](#)」を参照してください。
- 9 複合フォームのPOVおよびページ表示オプションを設定します。186ページの「[複合フォームの視点およびページ次元の設定](#)」を参照してください。
- 10 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。


複合フォームのレイアウトの設定

Planningには、アプリケーションに最適なあらゆる複合フォームのレイアウトを作成できるツールが用意されています。複合フォームの各領域はセクションと呼ばれます。最初に、複合フォームのレイアウトを、横に並ぶ2つのセクションと縦に並ぶ2つのセクションのどちらかに分割するかを指定します。また、カスタム・レイアウト・オプションもあります。


▶ 複合フォームのレイアウトを設定するには:


- 1 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
163ページの「[フォームとフォルダの選択および表示](#)」を参照してください。

2 「レイアウトの選択」でオプションを選択します:

-  「カスタム・レイアウト」: 複合フォームのレイアウトを独自に作成します。

注: 「カスタム・レイアウト」オプションは、デフォルトで選択されています。

-  「2行レイアウト」: 複合データ・フォームを水平線によって分けられた、縦に並ぶ2つのセクションに分割します。

-  「2列レイアウト」: 複合フォームを垂直線によって分けられた、横に並ぶ2つのセクションに分割します。

選択したレイアウトが表示されます。

3 必要に応じて、単一のフォームを追加、再調整または削除します。

[183 ページの「単一のフォームの複合フォーム・レイアウトへの追加」](#)、[183 ページの「レイアウト内のフォームの再調整」](#) および [184 ページの「単一のフォームの複合フォームからの削除」](#) を参照してください。

4 「オプション」: セクションの右上の をクリックして、次に示すそのセクションの追加のレイアウト・オプションを選択します:

- 「水平方向の分割」: セクションを、縦に並ぶ複数のセクションに分割します。
- 「垂直方向の分割」: セクションを、横に並ぶ複数のセクションに分割します。



注: 単一のフォームが含まれる複合フォーム・セクションを分割すると、単一のフォームは元のセクション内に残ります。たとえば、セクションを垂直方向に分割すると、元のセクションは横に並ぶ2つのセクションに分割されます。分割されたセクション内の単一のフォームは左側のセクションに含まれ、右側のセクションは空になります。

- 「削除」: 複合フォームからセクションを削除します。
複合フォームからセクションを削除すると、このセクションに含まれる単一のフォームは、複合フォームの他のセクションに含まれていないかぎり、複合フォームから削除されます。
- 「フォームの追加」: 「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスを表示し、そこでレイアウトに追加する追加のフォームを選択できます。
- 「タブとしてグループ化」: セクション内のフォームをタブとして表示します。
- 「タブのグループ解除」: 「タブとしてグループ化」の選択を解除します。

5 「保存」をクリックして、複合フォーム・レイアウトを保存します。

ヒント: 複合フォーム内から単一のフォームを編集できます。「レイアウト」タブの左側で単一のフォームを右クリックし、「フォーム・デザイナー」を選択します。180 ページの「フォームの編集」の説明に従ってフォームを編集します。156 ページの「フォームおよびアクセス権」の説明に従って、アクセス権が適用されます。

単一のフォームの複合フォーム・レイアウトへの追加

- ▶ 単一のフォームを複合フォームのセクションへ追加するには、次のいずれかを行います:
 - フォームを<フォーム・フォルダ>ペインの「フォーム」から必要なセクションにドラッグします。
 - 必要なセクションをクリックして、 を選択し、「フォームの追加」を選択します。「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスで、フォームを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「セクション・プロパティ」を展開し、 をクリックします。「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスで、フォームを選択し、「OK」をクリックします。

単一のフォームを複合フォームに追加する場合、次のことに注意してください:

- 複合フォームに組み込むことができるのは、単一のフォームおよびアドホック・フォームです。
- 実行時に、複合フォームに対して選択した単一のフォームは、各複合フォーム・セクション内で左から右へ、さらに上から下へ表示されます。
- 「グループ」をタブとして選択する場合、フォームは選択した順番に表示されます。
- 単一のフォームを複合フォームのセクション間にドラッグすることができます。

レイアウト内のフォームの再調整

複合フォーム・レイアウト内の単一のフォームを再調整するには、「セクション・プロパティ」を展開し、フォームを選択します。矢印キーをクリックできます。次を行えます:


- フォームを一番上に移動
- フォームを上へ移動
- フォームを下へ移動
- フォームを一番下へ移動

複合フォーム内から単一のフォームを編集

複合フォームを編集する際に、「レイアウト」タブから単一のフォームを編集できます。このオプションは、アド・ホック・フォームには使用できません。156 ページの「フォームおよびアクセス権」の説明に従って、アクセス権が適用されます。

- ▶ 複合フォームから単一のフォームを編集するには:
 - 1 複合フォーム内で、「レイアウト」タブをクリックします。
 - 2 「レイアウト」タブの左側で単一のフォームを右クリックし、「フォーム・デザイナー」を選択します。
 - 3 180 ページの「フォームの編集」の説明に従って、単一のフォームを編集します。

単一のフォームの複合フォームからの削除


- ▶ 単一のフォームを複合フォームから削除するには、次のいずれかを行います:
 - フォームを右クリックして、「削除」を選択します。
 - 「セクション・プロパティ」でフォームを選択し、をクリックします。
 - 「フォーム・セクタ」ダイアログ・ボックスでフォームの選択を解除し、「OK」をクリックします。

複合フォームのセクション・プロパティの設定

複合フォームの各セクションは、作成時に設定されたプロパティに関連付けられます。これらのプロパティは、複合フォームの作成後に編集できます。

- ▶ 複合フォームのプロパティを設定するには:
 - 1 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
 - 2 Expand 「セクション・プロパティ」を展開します。
 - 3 複合フォームのセクションをクリックし、必要に応じてプロパティを設定します。

表 50 複合フォームのセクション・プロパティ

オプション	説明
「フォーム」	<p>セクションに単一のフォームを表示します。選択した各フォームには、次のオプションを使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● タブとしてフォームを表示 ● フォームの追加 ● フォームの削除 ● フォーム・ラベルの編集 ● 一番上へ移動 ● 上へ移動 ● 下へ移動 ● 一番下へ移動
「名前」	<p>プレビュー・モード時および実行時にセクションの上部に表示されるセクション名です。</p> <p> を選択して、セクション名のテキストのスタイルおよび色を選択します。</p>
「高さ」	<p>セクションの高さです。選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「自動:」 Planning によって高さが設定されます。 ● 「%」 (パーセンテージ記号): セクションの高さが複合フォームの高さに対するパーセンテージに設定されます。
「幅」	<p>セクションの幅です。選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「自動:」 Planning によって幅が設定されます。 ● 「%」 (パーセンテージ記号): セクションの幅が複合フォームの幅に対するパーセンテージに設定されます。
「1行当たりのフォーム数」	<p>選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「自動:」 Planning によって数値が設定されます。 ● 1 から 20 の数値を選択します。 <p>デフォルトは、1行当たり1つのフォームです。「1列当たりのフォーム数」が「自動」以外の値に設定されている場合、「1行当たりのフォーム数」は「自動」に設定されません。</p> <p>注: フォームをタブとしてグループ化している場合、このオプションは使用できません。</p>
「1列当たりのフォーム数」	<p>選択:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「自動:」 Planning によって数値が設定されます。 ● 1 から 20 の数値を選択します。 <p>デフォルトは、1列当たり1つのフォームです。「1行当たりのフォーム数」が「自動」以外の値に設定されている場合、「1列当たりのフォーム数」は「自動」に設定されません。</p> <p>注: フォームをタブとしてグループ化している場合、このオプションは使用できません。</p>

オプション	説明
「すべての共通次元のスコープをグローバルに設定」	複合フォームのすべてのセクションのすべての共通次元をグローバルに設定し、「グローバル次元」プロパティのPOVとページにグローバル次元のリストを表示します。

複合フォームの視点およびページ次元の設定

複合フォームの視点(POV)およびページ次元により、各 POV およびページ次元名を表示する、複合フォーム内の場所を指定します。複合フォーム内のセクションを選択すると、該当するパネルが表示されます:

- 「グローバル・レイアウト次元」: 複合フォームの見出しに表示される POV およびページ次元がリストされます。

「グローバル」として指定できるのは、複合フォームのすべてのセクション内の単一のフォームすべてに共通し、同じメンバーが含まれる次元のみです。

- 「共通の次元」: 選択した複合フォーム・セクションに含まれる単一のフォームすべてに共通する POV およびページ次元がリストされます。

共通次元を表示する、複合フォーム内の場所を指定できます。共通次元の表示オプションは、次のとおりです:

- 「ローカル」: 次元名を単一のフォームの見出しに表示します。
- 「セクション」: セクション名をセクション見出しに表示します。
セクション見出しに表示できるのは、セクション内の単一のフォームすべてに共通し、同じメンバーが含まれる次元のみです。
- 「グローバル」: 次元名を複合フォーム見出しに表示します。

マスター複合フォームの作成

1つのマスター・フォームと複数の単一のフォームを含む複合フォームを設計できます。その場合、マスター・フォームのメンバーの選択は単一のフォームのメンバーに自動的にフィルタされ、単一のフォームには、マスター・フォームでハイライトされたメンバーに関連する詳細のみが表示されます。

たとえば、ユーザーがフォームで新しいコンピュータのライン・アイテムを調査していて、このライン・アイテムからキャッシュ・フローの影響を知りたいとします。このシナリオでは、次のフォームを含む複合フォームを設計できます:

- "New Computers"というマスター・フォームには、次の次元およびメンバーが含まれます:
 - エンティティ: MA
 - シナリオ: Plan
 - バージョン: Working
 - 通貨: Local
 - 年: No Year

- 期間: Beginning Balance
- 資産クラス: Computers
- ライン・アイテム: Base SP1
- 単一のフォームの名前は"Cash Flow Impact"です。

マスター複合フォームで、ユーザーは Computers/Base SP1 行をハイライトします。

図 5 マスター複合フォーム: "New Computers"

MA		Plan	Working	Local	BegBalance	No Year	Refresh
C16		fx					
	A	B	C	D	E	F	G
1			Asset Description	Asset Units	Asset Rate	Basic Cost	Salvage
2	Furniture and Fixtures	Base SP1	Office Furniture	0	1,000	1,000	0
3		Base SP2	Office Desktops	0	100	100	5
4	Computers	Base SP1	Laptops	0	50	250	0
5	Tangible Assets	Total Specified				1,250	

単一のフォーム"Cash Flow Impact"はフィルタされて、マスター複合フォーム"New Computers"でハイライトされているメンバー、Computers、Base SP1、Plan、Working および MA に関連するデータのみが表示されます。

図 6 単一のフォーム: "Cash Flow Impact"

MA		Computers	Plan	Working	Base SP1									
F16		fx												
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1		-YearTotal	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
2	Cash Outflow from Capital Additions	250	250											
3	-Net Cash Flows	-250	-250											

▶ フォームをマスター複合フォームとして指定するには:

- 1 複合フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。
- 2 フォームを右クリックして「マスター複合フォームとしてタグ付け」を選択します。



はフォームがマスター複合フォームであることを示します。

注： マスター複合フォームは複合フォーム全体に適用されます。そのため、1つの複合フォームに対し、そのセクション全体で1つのマスター・フォームしかあり得ません。

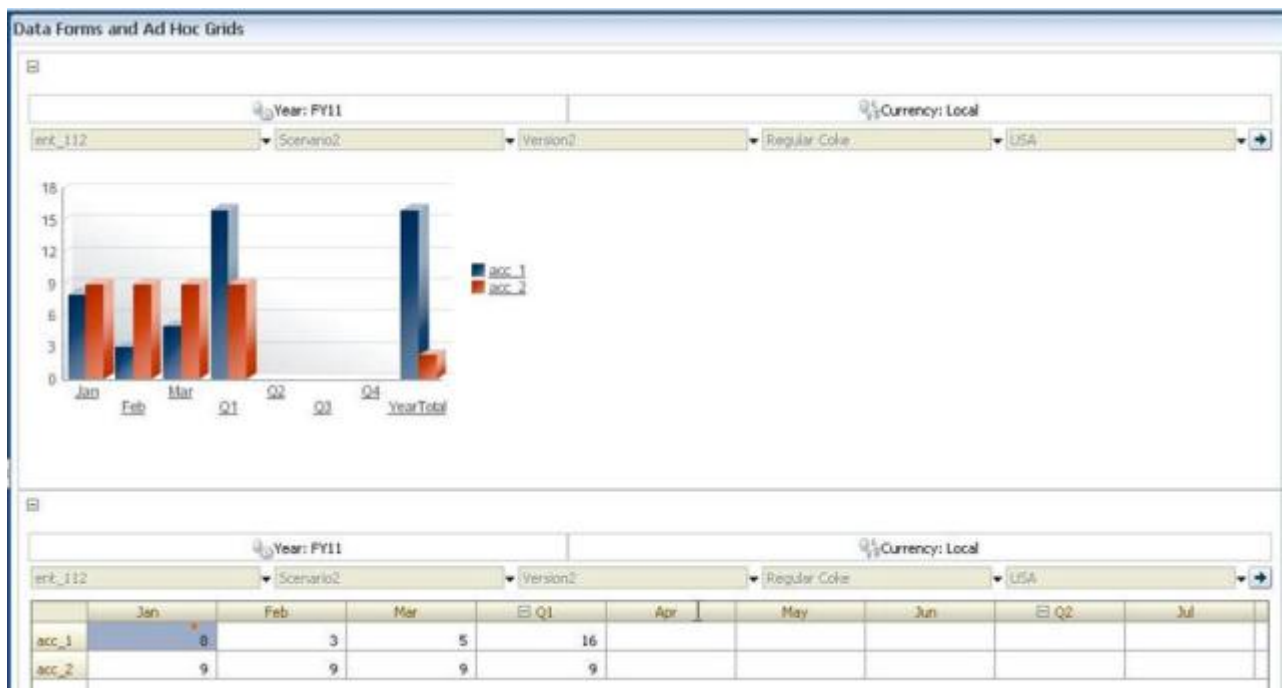
- ▶ マスター複合フォームのデータに関連する単一のフォーム内のデータをフィルタするには、マスター複合フォームを右クリックし、「コンテキストの適用」を選択します。

複合フォームの埋込みチャート

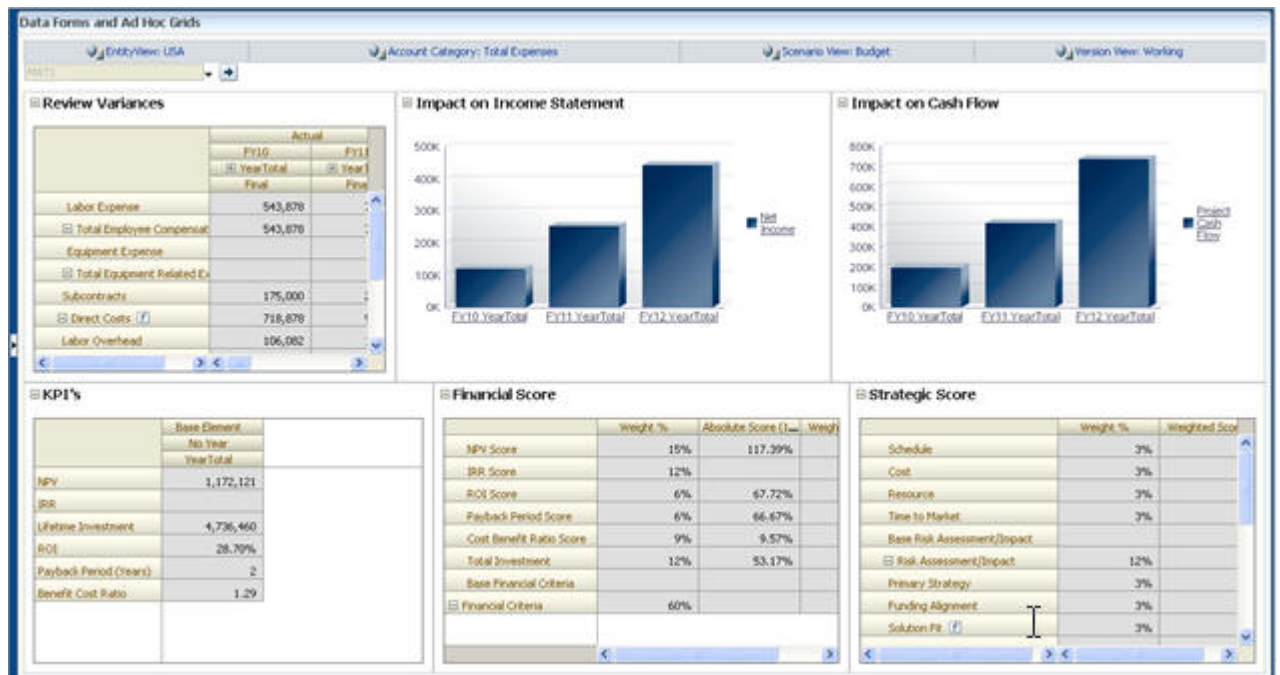
管理者はデータをセクション内にチャートで表示するように複合フォームを設計できます。プランナが下線付きのリンクまたはチャート領域をクリックすると、次のレベルにドリル・ダウンすることもできます。

設計案:

- 上部セクションをチャートとして表示し、下部セクションをグリッドとして表示することで、プランナが下部のグリッドに入力したデータ(保存された場合)の影響を、上部にチャートとして表示することができます。



- 同じアドホック・グリッドを2つ含み、1つはグリッドとして表示し、もう1つはチャートとして表示します。次にユーザーはアドホック操作(「ズーム・イン」、「ピボット」、「選択項目のみ保持」など)をグリッドで実行し、チャートでその変化を表示できます。
- ダッシュボードを作成します。例:



▶ 複合フォームにチャートを埋め込むには:

1 複合フォームを作成または編集し、「レイアウト」をクリックします。

163 ページの「フォームとフォルダの選択および表示」を参照してください。

2 複合フォームのセクションをクリックし、フォームを右クリックします。

3 「チャートとして表示」を選択します。

「チャートとして表示」と「グリッドとして表示」との間で切り替えることができます。

4 「チャートのプロパティ」で、チャート・タイプを選択します。

- 「棒」: 各棒の長さ按比例して値を独立変数(時間など)にわたって表します。
- 「水平棒」: 通常の棒グラフに似ていますが、横向きになっていることで、従属変数が横軸に表示されます。
- 「折れ線」: 時間とともにデータ・ポイント(様々な製品ラインの売上げなど)が線につながって表示されます。
- 「面」: 折れ線グラフと似ていますが、軸と軸との間の面と線が色で強調されます。
- 「円」: 円グラフの各区分は、データ・クラスを全体と関連させて比例して表します。
- 「散布」: 各点は、2つの変数に対するデータの分散を表します。

チャート・タイプの選択時のヒントは画面上のテキストを読んでください。

5 「OK」をクリックします。

6 **オプション:** チャートが表す値(凡例と呼ばれる)をチャートのどこに表示するのかを設定するには、「オプション」をクリックしてから「凡例」をクリックし、次のいずれかを選択してから「OK」をクリックします。

- 「右」: 凡例をチャートの右に表示します(デフォルト)。
- 「最下位」: 凡例をチャートの下に表示します。
- 「左」: 凡例をチャートの左に表示します。
- 「最上位」: 凡例をチャートの上に表示します。

7 オプション: チャートのラベル(メンバー名や別名など)を表示する場所を設定するには、「オプション」で、「ラベル」をクリックし、次のいずれかを選択してから「OK」をクリックします。

- 「外側最大」: ラベルは棒グラフの上に表示されます。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルが表示されます。「外側最大」がデフォルトです。
- 「中央」: ラベルは棒グラフの中央に表示されます。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルが表示されます。
- 「内側最大」: ラベルは棒上の上端近くに表示されます。棒グラフ以外では、正の数の場合はデータ・ポイントの下に、負の数の場合はデータ・ポイントの上にラベルが表示されます。
- 「内側最小」: ラベルは棒上の内側の下端近くに表示されます。棒グラフ以外では、正の値の場合はデータ・ポイントの上に、負の値の場合はデータ・ポイントの下にラベルが表示されます。
- 「最大エッジ」: ラベルは棒グラフの上に表示されます。棒グラフ以外では、データ・ポイントにラベルが表示されます。

グリッド診断の使用

グリッド診断を使用すると、フォームとアド・ホック・グリッドを開くときに要する時間を確認できます。グラフ形式と表形式のどちらでロード時間を表示するか、およびどのフォームとグリッドで診断を実行するかを選択できます。パフォーマンスの低いフォームを識別し、フォームでの設計時の問題に対処できるようになります。

▶ グリッド診断を使用するには:

- 1 **Planning** アプリケーションにログインします。
- 2 「ツール」、「診断」、「グリッド」の順に選択します。
- 3 診断を実行するフォームを選択して、「診断の実行」をクリックします。

フォームとアド・ホック・グリッドのロード時間について、5秒を超えるもの、1秒から5秒の間、および1秒未満の割合を示す円グラフが、「診断の要約」に表示されます。

- 4 円グラフの一部をクリックすると、特定のロード時間の詳細が「診断の要約」の「表示」領域に表示されます

たとえば、円グラフでロード時間(5秒超)をクリックすると、ロード時間が5秒より長くかかったフォームの詳細が「表示」領域に表示されます。

- 5 表示するロード時間の詳細を選択したら、その情報を「表形式」と「チャート」のどちらの表示形式で公開するかを選択します。

ロード時間をチャートとして表示する形式を選択した場合は、「面」、「水平棒」、「棒」、「折れ線」のいずれかを選択します。

ビジネス・ルールの使用方法

適切なアクセス権があるユーザーは、ビジネス・ルールを Planning から起動できます。ルールの起動時に、ユーザーにを求めるプロンプトが表示される場合もあります。

最適なパフォーマンスのために、フォームで実行するビジネス・ルールは3分以内に実行するよう設計されています。実行時間がそれよりも長いビジネス・ルールでは、バッチ処理のスケジュールを作成するか、ピーク以外の時間にビジネス・ルールを実行できます。

詳細について:

- ビジネス・ルールの作成および更新については、Oracle Hyperion Calculation Manager Designer's Guide を参照してください。
- 実行時プロンプトの使用については、[193 ページの「実行時プロンプトについて」](#)を参照してください。

ビジネス・ルールの選択

「ビジネス・ルール」タブで、複数のビジネス・ルールをプラン・タイプ別にフォームに関連付けることができます。ユーザーはフォームから関連付けられたビジネス・ルールを起動し、値を計算して割り当てることができます。フォームを開くまたは保存するときに、フォームに関連付けられた各ビジネス・ルールが自動的に起動するかどうかを設定できます。

▶ フォームのビジネス・ルールを選択するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- 現在のフォームを更新するには、「ビジネス・ルール」をクリックします。
- 編集するフォームを開くには、「編集」、「ビジネス・ルール」の順に選択します。

2 「プラン・タイプ」ドロップダウン・メニューから、プラン・タイプを選択します。

3 「ビジネス・ルール」リストから、フォームに関連付けるビジネス・ルールを選択し、「選択したビジネス・ルール」に移動します。[第7章「メンバー・セレクトの使用」](#)を参照してください。

デフォルトでは、「フォームの計算」および「通貨の計算」のビジネス・ルールが選択されます。「フォームの計算」はフォームが小計を計算するために自動的に作成されます。「通貨の計算」は、複数の通貨を行、列またはページに含むフォームが、使用できる通貨間で値の換算ができるよう作成されます。カスタマイズされた計算スクリプトを使用して通貨換算すると、「通貨の計

算」の選択を解除できます。「フォームの計算」を選択解除することで、プランナがフォーム上でデータを計算するのを防げます。

- 4 選択したビジネス・ルールの順序(ルールが表示および起動される順序)を変更するには、「選択したビジネス・ルール」でビジネス・ルールを選択し、上矢印または下矢印をクリックしてリスト内で上下に移動します。選択したビジネス・ルールの順序(ルールが表示および起動される順序)を変更するには、{1}「選択したビジネス・ルール」{2}でビジネス・ルールを選択し、上矢印または下矢印をクリックしてリスト内で上下に移動します。リストの先頭にあるルールが最初に表示および起動されます。リストの末尾にあるルールは最後に表示および起動されます。
ビジネス・ルールを起動する順序は重要であり、データに影響する場合があります。たとえば、小計を出す前にまず通貨を換算することが重要です。
- 5 ビジネス・ルールのプロパティを設定するには、「プロパティ」をクリックします。[192 ページの「ビジネス・ルールのプロパティの設定」](#)を参照してください。
- 6 「保存」をクリックして処理を保存し、フォームの作成または編集を続行します。または、「終了」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

注： 複合フォームに対してビジネス・ルールを選択する場合、含まれるフォームのどのビジネス・ルールを複合フォームで実行するかを選択できます。複合フォーム自体に対して選択しないかぎり、含まれるフォームのビジネス・ルールは実行されません。たとえば、"Total Expense Impact"という名前の含まれるフォームに関連付けられたすべてのビジネス・ルールを実行するには、"Total Expense Impact のビジネス・ルール"を選択します。

ビジネス・ルールのプロパティの設定

ユーザーがフォームを開くまたは保存するときに、フォームに関連付けられたビジネス・ルールが自動的に起動するかを指定できます。ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプトのデフォルトのメンバーがページ軸と POV 軸で選択されたメンバーに一致するかどうかを設定できます。

▶ ビジネス・ルールのプロパティを設定するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- 現在のフォームを更新するには、「ビジネス・ルール」をクリックします。
- 編集するフォームを開くには、「編集」、「ビジネス・ルール」の順に選択します。

2 「ビジネス・ルール」タブで「プロパティ」をクリックします。

3 ビジネス・ルールの横にある「ロード時に実行」を選択し、フォームを開くときに自動的に起動するようにします。

実行時プロンプトがあるビジネス・ルールはロード時に起動できません。

4 ビジネス・ルールの横にある「保存時に実行」を選択し、フォームを保存するときに自動的に起動するようにします。

「保存時に実行」と設定されたビジネスに実行時プロンプトが含まれる場合、フォームが保存される前に、実行時プロンプト値を入力するよう求められます。

- 5 「オプション」: ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプト・ウィンドウのデフォルトのメンバー選択を、開いているフォームのページ軸と POV 軸の現在のメンバーに一致させるには、「フォームのメンバーを使用」を選択します。

このオプションが他の設定や条件のもとでどのように作用するかを知るには、[194 ページの「実行時プロンプトの理解」](#)を参照してください。

- 6 「オプション」: 実行時プロンプトの値をユーザーに非表示にするには、「プロンプトの非表示」を選択します。これにより自動的に「フォームのメンバーを使用」が選択されます。

フォームを保存した後、次回このページに戻ると、「フォームのメンバーを使用」が選択したとおりに表示されます。

次の場合に実行時プロンプトを非表示にできます:

- すべての実行時プロンプト・メンバーの値が入力されている場合(該当する次元メンバーがフォームの「ページ/POV」から読み取られます)
- 実行時プロンプトでは次元は繰り返されません

- 7 「OK」をクリックします。

実行時プロンプトについて

起動時にビジネス・ルールは、メンバー、テキスト、日付または数字としての変数についてユーザーにプロンプト表示します。プロンプトは特定である必要があり、どのようなタイプのデータが予期されるかをユーザーに示します。例:

- 月を選択します。
- 四半期ごとの予想顧客数を入力します。
- 翌月に予測される収益変化のパーセンテージは何ですか?

フォームと実行時プロンプトで使用されるメンバーをダイナミックな子に対して有効にしている場合は、実行時プロンプトで入力したメンバーが存在しない場合に追加のメンバーを作成できます。[341 ページの「動的メンバーについて」](#)を参照してください。

実行時プロンプトを使用してビジネス・ルールを起動するときに、Planning は入力された値を検証しますが、ビジネス・ルールは検証しません。実行時プロンプトでデフォルトのメンバー選択を設定するには、[192 ページの「ビジネス・ルールのプロパティの設定」](#)を参照してください。他の設定と条件がどのように実行時プロンプトに影響するかを理解するには、[194 ページの「実行時プロンプトの理解」](#)を参照してください。

デフォルトでは、アプリケーション内の処理された実行時プロンプトはデータベースに保存され、ジョブ・コンソールから表示できます(「ツール」の後に「ジョブ・コンソール」を選択します)。多くのユーザーが実行時プロンプトを使用してビジネス・ルールを実行している場合、これらの値の追跡にはかなりのシステム・リソースが必要となります。パフォーマンスを改善するには、この機能をオフにし、Planning が実行時プロンプトの値をキャプチャしないようにします。これを実行するには、CAPTURE_RTP_ON_JOB_CONSOLE プロパティをプロパティ・テーブルに追加し、プロパティ値を「FALSE」にします(もう一度オンにするには、値を

「TRUE」に変更します)。37 ページの「アプリケーションおよびシステム・プロパティの設定」を参照してください。

実行時プロンプトの理解

実行時プロンプトの表示および値は次のような点に影響されます。

- 設計時に、ルールまたはルールセットのレベルで「オーバーライド値として使用」プロパティが設定されているかどうか
- フォームのページ/POV に有効なメンバーがいるかどうかおよび「ビジネス・ルール・プロパティ」タブで「フォームのメンバーを使用」と「プロンプトの非表示」オプションが選択されているかどうか(192 ページの「ビジネス・ルールのプロパティの設定」を参照してください)
- 「実行時プロンプト」オプションをフォームの設計中に設定するかどうか、実行時プロンプトの設計時に設定するかどうか(Oracle Hyperion Calculation Manager Designer's Guide を参照)
- 「前回の値を使用」プロパティをビジネス・ルールの設計時に設定するかどうか

フォームと実行時プロンプトで使用されるメンバーをダイナミックな子に対して有効にしている場合は、実行時プロンプトで入力したメンバーが存在しない場合に追加のメンバーを定義できます。

原則:

1. 「オーバーライド値として使用」プロパティが設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定されている場合には、ページ/POV のメンバーの値や前回保存された値より、ルールまたはルールセットのレベルで上書きされる値が優先されます。これは、ルールの起動方法(フォームからか、「ツール」の「Business Rules」メニューからか)とは無関係に、また設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかにも関係なく発生します。「値の上書き」は Planning ユーザー変数として設定できます。その場合、ルールは変数の現在値を使用して起動されます。
2. フォームから起動するときに、「フォームのメンバーを使用」オプションを選択すると、設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかに関係なく、前回保存された値よりページ/POV のメンバーの値が優先されます。非表示の実行時プロンプトをユーザーに表示せずにビジネス・ルールが実行され、実行時プロンプトの値がページ/POV メンバーからとられます。

複合フォームに関連付けられたビジネス・ルールが保存時にまたは左側のペインから起動される場合またはビジネス・ルールが「ツール」から、そしてそのあと「ビジネス・ルール」メニューから起動するときには、これは該当しません。これらの場合、「フォームのメンバーを使用」設定が無視され、非表示の実行時プロンプトに設計時の値が与えられ、前回保存された値が優先されます。

3. 「前回の値を使用」オプションを設計時に実行時プロンプトで選択する場合および次の条件のどれかが該当する場合:
 - 「フォームでメンバーを使用」は選択されません

- 実行時プロンプトは、「ツール」、次に「ビジネス・ルール」メニューから起動されます
- 値をコンテキストから事前に入力できません

実行時プロンプト値の優先度は次によって決定されます:

1. 前回保存された値が優先されます。
2. ルールセットが起動する場合、設計時にルールセットのレベルで上書きされた値が使用されます。
3. ビジネス・ルールが起動する場合、設計時にルール・レベルで上書きされた値が使用されます。ルール・レベルで上書きされない場合、設計時の実行時プロンプト値が使用されます。

設計時に非表示の実行時プロンプトは前回保存された値を絶対に使用しません。これらの場合、「前回の値を使用」設定は無視されます。

4. 「フォームのメンバーを使用」および「プロンプトの非表示」オプションは「メンバー」および「次元間」実行時プロンプト・タイプのみ適用されます(次元間実行時プロンプト・タイプを使用できるのは、Calculation Manager で作成されたビジネス・ルールのみです)。

「オーバーライド値として使用」プロパティが設定されているとき、設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定された値は、「プロンプトの非表示」の動作に影響します。

5. 次元間実行時プロンプトの場合: 実行時プロンプトのすべてのプロンプトを「値の上書き」またはページ/POV から事前に入力可能でないかぎり、実行時プロンプトは非表示になりません。実行時プロンプトは、「値の上書き」またはページ/POV から事前に入力された一部の値および原則 1、2 および 3 に応じて入力された他の値とともに表示されます。

このテーブルは、次の設定と条件における実行時プロンプトの結果を説明しています。

表 51 メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ/POVのメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	「実行時プロンプトの非表示」プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	はい	「はい」または「いいえ」 設定は無視されます	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわり、実行時プロンプトの値は「値の上書き」またはページ/POVメンバーからとられます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	いいえ	はい	すべての実行時プロンプトが「値の上書き」またはページ/POV コンテキストから事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が1つでも「値の上書き」またはページ/POV コンテキストから事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則 1 および 3 に従います。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは「値の上書き」またはページ/POV から事前に入力された値とともに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	はい	「はい」または「いいえ」 設定は無視されます	ビジネス・ルールは、原則 3 に従って事前に入力された値とともに実行時プロンプトをユーザーに表示します。 たとえば、実行時プロンプトの次元は行または列にあるためフォームのコンテキストを渡すことはできません。このため「プロンプトの非表示」設定は無視され、実行時プロンプトが表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	はい	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。

「値の上書き」とページ/POVのメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	「実行時プロンプトの非表示」プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	すべての実行時プロンプトが「値の上書き」から事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が1つでも「値の上書き」から事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則1および3に従います。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理3に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理1および3に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理3に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/POVで実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理3に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。

非表示の実行時プロンプト値が明瞭でない場合、次に注意してください。

- フォームのコンテキストを渡すことができない場合(たとえば、次元は行または列にあるため)、非表示の実行時プロンプトが表示されます。

- 実行時プロンプトが非表示の次元間タイプで、「値の上書き」またはコンテキストから一部のプロンプトを渡すことができない場合、実行時プロンプトは、「値の上書き」またはコンテキスト値および設計時の値から値が事前入力された状態で表示されます。たとえば、「次元間」に「期間」、「エンティティ」および「シナリオ」の実行時プロンプトがあり、「エンティティ」が行で定義されていてシナリオに「値の上書き」が設定されている場合、実行時プロンプトには上書きシナリオ、エンティティの設計時値、ページ期間が順に表示されます。
- 「値の上書き」が存在するか、実行時プロンプト値でコンテキストを渡すことが可能でもそれが制限範囲外の場合、実行時プロンプトは事前に入力されたコンテキスト値で表示されます。
- 「メンバー」のタイプと「次元」のタイプの組合せの実行時プロンプトが1つ以上ある場合、実行時プロンプトは「値の上書き」、または事前に入力されたコンテキスト値とともに表示されます。たとえば、「エンティティ」次元のメンバー・タイプの実行時プロンプトと、「エンティティ」次元の1つのプロンプトをとまなう「次元間」タイプの実行時プロンプトがある場合、両方の実行時プロンプトが表示されます。このルールは Calculation Manager のルールセットには適用されません。
- 「ツール」から、そしてそのあと「ビジネス・ルール」メニューから起動するときは、実行時プロンプトは非表示となり、設計時の値(ルールまたはルールセットのレベルで上書きされた)を使用してビジネス・ルールを起動します。与えられた設計時の値が制限範囲外の場合、実行時プロンプトが事前に入力された設計時の値とともに表示されます。
- 設計中に非表示となる実行時変数は前回保存された値を決して使用しません。「前回の値を使用」プロパティは無視され、その値はデータベースに保存されません。

実行時プロンプトと承認セキュリティについて

管理者はメンバーの承認セキュリティを保持する実行時プロンプトを設計できます。そうすることで、承認ルールに従い、プランナがアクセス権のないプランニング・ユニットのデータを変更することを防ぎます。たとえば、管理者はプランナに関連プランニング・ユニットの移行処理後にデータを変更させたくない場合があります。Calculation Manager で、管理者は次の実行時「セキュリティ」をメンバーに対して設定できます。

- 「承認」:これらの条件がどちらも TRUE の場合、Planning により、ユーザーがメンバー・データを変更できます。
 - ユーザーにメンバーへの書込みアクセス権がある(Planning で割当て済)。
 - メンバーがプランニング・ユニットに属している場合、ユーザーがプランニング・ユニットを所有している。

両方の条件が満たされない場合、ユーザーはメンバーのデータを変更できません。
- 「書込み」:メンバーへの書込みアクセス権があり(Planning で割当て済)、ビジネス・ルールを起動するユーザーはそのデータを変更できます。メンバーの承認ステータスは無視されます。

- 「読取り」:メンバーへの読取りアクセス権があり(Planning で割当て済)、ビジネス・ルールを起動するユーザーはそのデータを変更できます。承認ステータスは無視されます。
- 「デフォルトの使用」:メンバーのアクセス権が「なし」に設定されていない場合(つまり、読取りまたは書込みのいずれか)、セキュリティは実行時プロンプトにのみ適用されます。ビジネス・ルールが以前のリリースから移行される時、この設定であると仮定されます。

199 ページの「保護された実行時プロンプトの設計」を参照してください。

保護された実行時プロンプトの設計

Planning は、実行時プロンプトの設計順序により、「シナリオ」、「バージョン」、「エンティティ」およびセカンダリ次元交差での実行時セキュリティをサポートします。「承認」セキュリティを適用するビジネス・ルールの場合、Calculation Manager デザイナは、「エンティティ」実行時プロンプトの前に、「書込み」または「承認」セキュリティを持つ「シナリオ」および「バージョン」の実行時プロンプトを配置する必要があります。

「バージョン」および「シナリオ」メンバーの実行時プロンプトは、Calculation Manager の「セキュリティ」が「承認」または「書込み」のいずれかに設定されているときに、書込みアクセス権によりフィルタされます。「セキュリティ」が「承認」に設定されたエンティティの実行時プロンプトは、「エンティティ」実行時プロンプトの前に表示される最後の「シナリオ」/「バージョン」によりフィルタされます。「シナリオ」または「バージョン」実行時プロンプトがどちらも存在しない場合、エンティティは書込みアクセス権でフィルタされます。

「セキュリティ」が「承認」に設定されたその他の次元の実行時プロンプトは、その実行時プロンプトの前に表示される最後の「シナリオ」/「バージョン」/「エンティティ」によりフィルタされます。

そのため、「承認」セキュリティを使用する実行時プロンプトは次の順番で定義されます。

Scenario1: Version2: To_Entity1、Scenario2: Version1、To_Entity2、To_Product

実行時プロンプトは次のようにフィルタされます。

- To_Entity1 は次の組合わせでフィルタされます: Scenario1: Version2
- To_Entity2 は次の組合わせでフィルタされます: Scenario2: Version1
- To_Product は次の組合わせでフィルタされます: Scenario2、Version1、To_Entity2、To_Product

例:

```
Fix (FY11, Jan, {EntitySalesByCountry}, {MyScenario2}, {MyVersion2})
```

```
Fix ({MyProduct}, {MyCountry})
```

```
{ToAccount} = {FromAccount} * 2;
```

```
ENDFIX
```

```
Endfix
```

注： ビジネス・ルール・デザイナーが実行時プロンプトのリストからプランニング・ユニット次元を省略する場合(たとえば、実行時プロンプトに「シナリオ」または「エンティティ」が含まれない)、「承認」セキュリティは適用されず、階層は書込みアクセスによりフィルタされます。

198 ページの「実行時プロンプトと承認セキュリティについて」を参照してください。

ユーティリティによるビジネス・ルールの起動

CalcMgrCmdLineLauncher.cmd ユーティリティを使用し、管理者は Calculation Manager によってコマンド・プロンプトからビジネス・ルールまたはルールセットを起動できます。

注意:

- /Validate オプションを使用し、ビジネス・ルールまたはルールセットを起動する前にコマンド構文を確認します。
- このユーティリティでは、アプリケーション間のルールセットは起動できません。
- 起動されたビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、CalcMgrCmdLineLauncher.cmd を実行する前に、実行時プロンプトの値を含んでいるファイルを作成します。実行時プロンプトの値が入っている ASCII ファイルを手動で作成するか、「実行時プロンプト」ページの「実行時プロンプト値ファイルの作成」オプションを選択して自動的に値を生成できます。
- 起動されたルールセットに実行時プロンプトがある場合、デフォルトの起動値が使用され、実行時プロンプト値ファイルを指定しません。

▶ ビジネス・ルールまたはルールセットを CalcMgrCmdLineLauncher.cmd で起動するには:

- 1 実行時プロンプトがあり、ビジネス・ルール(ルールセットでなく)を起動するとき、次のどちらかにより実行時プロンプト値が入っているファイルを生成します:
 - 「実行時プロンプト」ページで生成した実行時プロンプト値ファイルの名前を指定します(Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照)。
 - 分離したラインで、ダブル・コロンの(::<)で区切られた各実行時プロンプト名とその値を含んでいる実行時プロンプト ASCII ファイルを作成します。
例:

CopyDataFrom::Jan

CopyDataTo::Apr

このファイルは CopyDataFrom という名前の実行時プロンプトの値が Jan であり、CopyDataTo という名前の実行時プロンプトの値が Apr であることを指定します。

planning1 ディレクトリにファイルを保存します(planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照)。または、ユーティリティを実行するときに、実行時プロンプト・ファイルへの完全パスを指定します。

- 2 コマンド・プロンプトで、planning1 ディレクトリから、このコマンド、次にスペース 1 つ、そしてパラメータを、それぞれスペースで区切って入力します:

```
CalcMgrCmdLineLauncher.cmd [-f:passwordFile] /A:appname /  
U:username /D:database [/R:business rule name | /S:business ruleset  
name] /F:runtime prompts file [/validate]
```

表 52 CalcMgrCmdLineLauncher パラメータ

パラメータ	目的	必須?
[-f:passwordFile]	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、passwordFile で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」を参照してください。	いいえ
/A: appname	Planning を指定 ビジネス・ルールを起動するアプリケーション	はい
/U: username	管理者のユーザー名を指定します	はい
/D: database	計算を起動するプラン・タイプの名前を指定します	はい
[/R:business rule name /S:business ruleset name]	起動するビジネス・ルールまたはルールセットの名前を指定します	はい。ビジネス・ルールまたはルールセットを指定しますが、両方は指定しません。
/F: runtime prompts file	ビジネス・ルールの実行時プロンプトの名前と値を含むファイルの名前を指定します	はい(実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを起動する場合)。ルールセットを起動する場合、デフォルトの起動値が使用されます。ルールセットを起動するときに実行時プロンプト・ファイルを指定すると、その実行時プロンプト・ファイルは無視されます。

パラメータ	目的	必須?
<code>[/validate]</code>	コマンド構文のみを確認し、ビジネス・ルールまたはルールセットを起動しません。あらゆるエラーがコンソールに表示され、Calculation Manager{のログ・ファイルに書き込まれます。CalcMgrLog4j.properties ファイルが Classpath にある場合、ログ・ファイルは EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning ディレクトリに生成されます。ルールセットの各ルールは検証されます。	いいえ
<code>/?</code>	CalcMgrCmdLineLauncher.cmd の構文とオプションを印刷	いいえ

たとえば、Values.txt という名前のファイルで実行時プロンプト値を使用して Depreciate という名前のルールを起動するには、次を入力します。

```
CalcMgrCmdLineLauncher.cmd /A:planapp /U:admin /D:plan1 /
R:Depreciate /F:Values.xml
```

3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

エラー・メッセージのカスタマイズ

管理者は Essbase @RETURN 関数を使用して、ビジネス・ルールの計算の終了時に表示されるメッセージをカスタマイズできます。たとえば、「この計算が正常に実行されるには最大値を指定する必要があります。」と表示するようにビジネス・ルールをカスタマイズします。

ビジネス・ルールの構文:

```
@RETURN ("ErrorMessage", ERROR)
```

ここで:

- "ErrorMessage" は、エラー・メッセージ文字列、または文字列を戻す式です。
- ERROR は「ErrorMessage」文字列に指定したメッセージがユーザー、ジョブ・コンソール、およびアプリケーション・ログにエラー・タイプのメッセージとして表示されることを示します。

注意:

- @RETURN が呼び出されると、ビジネス・ルールの実行は停止します。
- IF... ELSEIF 計算コマンド・ブロックを使用し、論理エラー条件を指定して @RETURN 関数を使用し、カスタマイズしたエラー・メッセージおよびエラー・レベルとともに計算を終了できます。
- 次の構文を使用して、ローカライズされたリソース・ファイル HspCustomMsgs に定義されたエラー・メッセージ・ラベルを表示することもできます:

- パラメータを指定しない場合:

```
@RETURN (@HspMessage ("MESSAGE_LABEL_NAME"), ERROR)
```

- パラメータを指定する場合:

```
@RETURN (@HspMessage (@NAME ("MESSAGE_LABEL_NAME", "PARAM_NAME1",  
"PARAM_VALUE1", "PARAM_NAME2", "PARAM_VALUE") 0, ERROR)
```

HspCustomMsgs ファイルのカスタマイズ方法については、[398 ページの「テキスト、色および画像のカスタマイズ」](#)を参照してください。

- この関数はメンバーの式では使用できません。

@RETURN 関数については、Oracle Essbase テクニカル・リファレンスを参照してください。

ユーザー変数の操作

サブトピック

- [ユーザー変数の管理](#)
- [ユーザー変数について](#)
- [ユーザー変数の選択](#)
- [ユーザー変数の削除](#)

ユーザー変数の管理

ユーザー変数を設定し、フォームで表示されるメンバー数を制限することで、ユーザーが一定のメンバーに注目できるようになります。たとえば、エンティティ次元で Division という名前のユーザー変数を作成すると、ユーザーは自分の区分のメンバーを選択できます。各次元についてユーザー変数の数を作成し、フォームのすべての軸でユーザー変数を選択できます。[179 ページの「単一のフォーム・ページと視点\(POV\)の定義」](#)を参照してください。

一般的な手順:

1. 必要に応じて、次元アウトラインに適切な親レベルのメンバーを作成します。
2. ユーザーがフィルタ処理できる次元について、それぞれユーザー変数を定義します。

[204 ページの「ユーザー変数の選択」](#)を参照してください。

3. フォームをデザインするときに、ユーザー変数をフォームに関連付けします。
[219 ページの「メンバーとしてのユーザー変数の選択について」](#)を参照してください。

4. フォームに関連付けられたユーザー変数についてメンバーを選択するよう、ユーザーに指示します。

ユーザー変数を持つフォームをユーザーが開く前に、プリファレンスで「ユーザー変数オプション」のメンバーを選択する必要があります。初期値を選択したあとで、フォームまたはプリファレンスでそれを変更できます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

ユーザー変数について

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、プランナは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。ユーザー変数でフォームを作成するとき、プランナはフォームを開く前に変数の値をプリファレンスで先に選択する必要があります。その後、変数が動的ユーザー変数である場合のみ、プランナはフォームで変数を変更できます。そうではない場合、プリファレンスの変数の設定を続行する必要があります。たとえば、Division という名のユーザー変数を作成する場合、プランナはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。

フォーム用に変数を初回に選択するときに、プランナはプリファレンスでこれを実行します。そのあとはプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。

▶ フォームのユーザー変数を選択するには:

- 1 フォームを作成します。
- 2 フォームでメンバーを選択する際、「メンバー選択」で、メンバーを選択するのと同じ方法で矢印を使用して、「メンバー選択」との間でユーザー変数を移動します。ユーザー変数が現在の次元に対して表示されます。たとえば、エンティティ次元のユーザー変数は次のように表示される可能性があります:

Division = [ユーザー変数]

選択すると、ユーザー変数には先頭にアンパサンドが付きます。例:

子孫(含む)(&Division)

- 3 「OK」をクリックします。

ユーザー変数の選択

▶ ユーザー変数を選択するには:

- 1 「管理」、「管理」、「ユーザー変数」の順に選択します。
- 2 「追加」をクリックします。
- 3 「ユーザー変数の追加」ページの「次元名」で、ユーザー変数を作成する次元を選択します。
- 4 「ユーザー変数名」で、ユーザー変数の名前を入力します。
- 5 **オプション:** 「コンテキストの使用」を選択して、ユーザー変数が POV で使用できるようにします。この設定では、ユーザー変数の値はフォームのコンテキストにより動的に変更されます。
- 6 「OK」をクリックします。

これで、フォームにユーザー変数に関連付けることができます。219 ページの「メンバーとしてのユーザー変数の選択について」を参照してください。その後、プランナはユーザー変数のメンバーを選択できます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

ユーザー変数の削除

▶ ユーザー変数を削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「ユーザー変数」の順に選択します。
- 2 削除するデータ変数を選択します。
- 3 「削除」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

フォーム定義のインポート

ImportFormDefinition ユーティリティを使用して、データではなく、フォーム定義をテキストベースのファイルから Planning フォームにインポートします。行、列またはその両方をインポートできます。Planning がインポートするのは、データを含んでいる行または列のみです。ユーティリティは Windows システムで実行する必要があります。

フォーム定義をインポートするには:

1. フォームのインポートを準備します。
[205 ページの「フォームの準備」](#)を参照してください。
2. データ・ファイルを準備します。
[205 ページの「データ・ファイルの準備」](#)を参照してください。
3. ユーティリティを実行します。
[206 ページの「フォーム定義のインポート」](#) および [207 ページの「ImportFormDefinition の例」](#)を参照してください。

フォームの準備

フォーム定義のために行と列をインポートする前に、必要に応じて行、列、ページおよび POV で次元を設定し、フォームを作成します。一般的に、フォームを定義するとき列のレイアウトを定義し、ImportFormDefinition を使用して行のみをインポートします。結果のフォームはフォーム定義のような外見になります。

データ・ファイルからインポートされる行は、フォームとインポート・オプションで指定されたメンバーに基づいています。これでどのデータをインポートするかを決定します。[207 ページの「ImportFormDefinition の例」](#)を参照してください。

データ・ファイルの準備

ImportFormDefinition は Essbase の「列エクスポート・フォーマット」のテキストベースのファイルからデータをインポートします。ファイル・ディレクトリを直接生成するか、Essbase にデータをロードする方法がある場合にはデータをロードしてファイルを生成できます。

Essbase を使用して Essbase の「列エクスポート・フォーマット」ファイルを作成するには、Administration Services Console を使用し、「データベース」、「エクスポート」、「サーバー・ファイル名の指定」、さらに「列フォーマットでエクスポート」を選択します。さらに「列フォーマットでエクスポート」を選択します。(レベル 0 データも選択するようお勧めします。)なお、Essbase からエクスポートした後でファイルを変更する必要はありません。

ファイルを自分で生成する場合、次に従ってください。

- ファイルの最初の行はデータ・ファイルの列を示します。それはある次元からのメンバーのリストである必要があります。
- 最初の行の後にある各行には、データが後に続く列を表す次元以外の、各次元からのメンバーが含まれている必要があります。
- メンバー名は二重引用符で括る必要があります。
- 区切り文字はスペースにする必要があります。
- データは二重引用符で囲まないでください。
- 空白のデータ・セルは#MISSING を含む必要があります。

データ・ファイルのフォーマットではなく、フォームのレイアウトが、結果のフォームが表示される仕方を決定します。したがって、同じデータ・ファイルを使用して異なるフォームをロードできます。

フォーム定義のインポート

ImportFormDefinition ユーティリティは planning1 ディレクトリにあります。planning1 の完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

▶ ImportFormDefinition を起動するには:

1 planning1 ディレクトリから次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
ImportFormDefinition [-f:passwordFile] /A:appname /U:username /
F:formname /D:filename [/AR] [/AC] [/SR] [/SC] [/KC] [/KR]
```

表 53 ImportFormDefinition ユーティリティのパラメータ

設定	目的	必須?
[-f:passwordFile]	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、passwordFile で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」 を参照してください。	いいえ
/A	アプリケーション名。	はい
/U	管理者ユーザー名。	はい
/F	フォームの名前。	はい

設定	目的	必須?
/D	Essbase の「列エクスポート・フォーマット」データ・ファイルの名前および場所。場所は完全パスとファイル名またはオペレーティング・システムがファイルの検索に必要なとするフォーマットにできます。	はい
/AR	データ・ファイルから行を追加します(デフォルトで)。/-AR を指定すると無効になります。たとえば、Planning で行を定義し、列定義のみをインポートできます。	いいえ
/AC	データ・ファイルから列を追加します(デフォルトで)。/-AC を指定すると無効になります。	いいえ
/KC	フォームの列のメンバー選択を保ちます(デフォルトで)。/-KC を指定し、列を消去します。フォームでは少なくとも 1 つの列定義が必要です。列を消去して追加しない場合、フォームは保存されず、エラーが表示されます。	いいえ
/KR	フォームで行のメンバー選択を保ちます(デフォルトで)。/-KR を指定し、行のメンバー選択を消去します。フォームでは少なくとも 1 つの行定義が必要です。行を消去して追加しない場合、フォームは保存されず、エラーが表示されます。	いいえ
/SR	フォームで行をソートします(デフォルトで)。/-SR を指定して使用不可能にします。	いいえ
/SC	フォームで列をソートします(デフォルトで)。/-SC を指定して使用不可能にします。	いいえ

2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
ImportFormDefinition /A:MyPlan /U:Admin /F: "My Budget" /
D:exportfilename /AR /-AC
```

ファイルのデータ量によっては、フォームの作成に時間がかかる場合があります。

ImportFormDefinition で Planning フォームへ定義をインポートし、データ・ファイルにデータがあるすべてのセルがフォームに表示されるようにします。

「#MISSING」が入っているデータ・ファイルのセルについては、行または列がフォームに追加されません。

注意:

- 行または列のインポートを無効にすると、ImportFormDefinition はフォームで定義された行または列別に、インポートされたデータをフィルタ処理しません。
- ImportFormDefinition を 1 回以上実行すると、新しい結果を既存のフォーム定義とマージし、さらにソートも指定する場合は、新規および既存の行または列を次元順別にソートします。

ImportFormDefinition の例

フォームの各軸で適切にメンバーを定義し、インポート・オプションを正しく定義します。これはどのデータがインポートされるかに影響します。

指定された列にデータを含む行のみをインポートするには:

1. **Planning** で、フォーム列を指定します(たとえば、**YearTotal** を含めた子孫)。
2. 行にメンバーをインポートする次元について、次元ルートをフォーム・デザインに追加します。

たとえば、行で勘定科目をロードするには、フォームの行に「勘定科目」次元ルートを配置します。

3. **ImportFormDefinition** を実行するとき、次のオプションを使用します。
AR /-AC

各次元からのメンバーが、セルを構成する各次元からのメンバーをフォームの列、行、ページおよび POV のメンバーと一致する場合、勘定科目がデータ・ファイルからロードされます。追加された行はページのメンバーによりフィルタ処理されます。たとえば、ページにメンバーを配置する場合、それらのメンバーのデータを含む勘定科目のみがフォームに追加されます。行は POV のメンバーによってフィルタ処理されます。データ・ファイルに 2008 年の給与勘定科目のデータが含まれており、POV には 2009 年のデータしかない場合、給与勘定科目はデータ・ファイルにあっても行には追加されません。

Planning オフライン時の考慮事項

サブトピック

- [オフライン Planning について](#)
- [オフライン・フォームの考慮事項](#)
- [オフライン・ユーザーの考慮事項](#)
- [オフライン計算のためのビジネス・ルールの考慮事項](#)

オフライン Planning について

オフライン Planning では、サーバーと切断されているときも、ユーザーがフォームをオフラインで取得し、作業できるようにします。次の重要な考慮事項に注意してください。

- オフライン Planning のインストールと構成については、**Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide** を参照してください。
- 「ツール」メニューから使用可能な Smart View のインストール・メニュー・アイテムの使用方法については、**Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace User's Guide** を参照してください。

オフライン・フォームの考慮事項

- オフラインで使用するフォームは、自己完結している必要があります。

オフラインで計算された値が正しいことを保証するため、オフラインで取得されたフォームに関連したすべての必要な依存関係をオフラインで使用できる

必要があります。正確な結果をオフラインで出すためにフォームが依存している、すべてのメンバー、フォーム、メンバー式、ビジネス・ルールおよび動的計算もオフラインで取得する必要があります。

- サーバーからダウンロードされたのではないデータは、オフラインでは使用できません。
- ビジネス・ルールがオフラインで実行するのに必要な依存データは、オフラインで取得する必要があります。

オフライン・ユーザーの考慮事項

オフラインのフォームで作業するユーザーの考慮事項:

- オフライン・ユーザーは「サーバーと同期」を選択できますが、変更されたセル値をサーバーに保存するには、オフライン・ユーザーはセルの書込み権限が必要です。
- ユーザーがフォームとメンバーにオフラインで作業中にフォームのメンバーがサーバーで削除される場合、オフライン・ユーザーによるそのメンバーの変更は、「サーバーと同期」が選択されていると、サーバーに保存されません。
- 1人以上のユーザーが同じデータを変更する場合、同期して戻された直前の値が保存されます。データ損失や計算ミスを防ぐため、サーバーでプランニング・ユニットと承認を使用し、データ・アクセスを制御します。
- オフライン・ユーザーは、オンライン・ユーザーと同様に、複数の通貨でデータを入力できます。ただし、通貨換算はオフライン作業時にはサポートされません。ユーザーが通貨をオフラインで変更すると、値は再計算されず、新しい通貨として表示されません。
- フォームをオフラインで使用するときは、フォーム・プロパティの「オフラインの使用可能」を設定したままにします。これにより、ユーザーはオフラインで変更されたデータをサーバーに戻すことができます。
- プランニング・ユニットを使用し、2人のユーザーがフォームに同時に作業するのを防ぎます。同じフォームで作業しているオンライン・ユーザーが、「欠落データの抑制」が設定された行または列で値を消去する場合、オフライン・ユーザーはオフラインで取得されたメンバーへのアクセス権を失う場合があります。
- Smart View は非表示のフォームを現在サポートしていません。非表示のフォームに関連付けられたフォームをユーザーがオフラインで取得するとき、これらのフォームはダウンロードされません。
- Smart View は複合フォームを現在サポートしていません。ユーザーがフォームをオフラインで使用するを選択するとき、複合フォームはリストに表示されません。

オフライン計算のためのビジネス・ルールの考慮事項

ビジネス・ルールのオフライン実行時の考慮事項:

- ビジネス・ルール計算が使用できるのは、オフラインでとられたデータとオブジェクトのみです。ルールには、サーバーに保管されたデータまたはオブジェクトへのアクセス権がありません。
- 実行時プロンプトは「ロード時に実行」プロパティ・セットを持つビジネス・ルールにはサポートされていません。
- 実行時プロンプトのためにユーザー入力を必要とする、「保存時に実行」に設定されたビジネス・ルールは、サーバーに同期して戻るときにはサポートされません。
- 「ロード時に実行」と「保存時に実行」のオプションが使用できるのはオフラインで使用できるビジネス・ルールと従属データのみです。

7

メンバー・セレクタの使用

この章の内容

メンバーの操作について.....	211
メンバーの選択	211
ワイルドカードを使用した検索	214
メンバーとしての属性値の選択について.....	215
フォームのメンバーの選択について.....	217
メンバーとしての代替変数の選択について	218
メンバーとしてのユーザー変数の選択について.....	219

メンバーの操作について

フォームやビジネス・ルールの実行時プロンプトなどの機能で使用するメンバーその他の情報を選択するには、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用します。変数と属性が定義されている場合は、変数と属性も選択できます。メンバー名、別名または両方でメンバーを表示および選択します。「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに定義する表示オプションは、管理者によってアプリケーション・デフォルトとして定義されたオプションより、またアプリケーション・プリファレンスで指定されたオプションよりも優先されます。




メンバーの選択

「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用して、Planning 機能のメンバーおよび他の情報を選択します。たとえば、フォーム管理、ビジネス・ルール実行時プロンプト、および「セル詳細の消去」のメンバーを選択できます。変数と属性が定義されている場合は、変数と属性も選択できます。メンバーの選択には、現在のアプリケーションに対する次元編集者のメンバーの設定およびユーザーによって設定されたメンバー選択オプションに応じて、メンバー名または別名、あるいはその両方を使用できます。








▶ メンバーを選択するには:

- 1 メンバー・リストからメンバーを選択します。
- 2 オプション: 検索条件を選択または入力します。
 1. 「検索」ボックスで、「メンバー名」、「メンバーの別名」、「説明」または「UDA」の中から1つ以上のオプションを選択します。

また、メンバー名、別名、説明、UDA のすべてまたは一部を入力することもできます。検索の対象には共有メンバーも含まれます。完全一致を検索するには、「完全一致」を選択し、検索文字列を入力します。検索では大文字と小文字は区別されません。検索できるのは、1つの単語、複数の単語またはワイルドカード文字です。214 ページの「ワイルドカードを使用した検索」を参照してください。

2.  をクリックします。
3. オプション: 次または前のアイテムに移動するには、 または  をクリックします。

3 オプション: 現在のセッションの「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの左ペインで情報を表示する方法およびメンバーをフィルタする方法を設定するには、メンバー・リストの上にある次のアイコンの1つをクリックします。関数や世代などの複数のフィルタを選択できます。

-  : すべてのメンバーの縮小
-  : すべてのメンバーの展開
-  : プロパティの表示。「メンバー名」、「別名」、「メンバー名:別名」または「別名:メンバー名」を選択します。または、「追加表示プロパティ」を選択し、「説明」または「カウント」を選択します。選択したオプションは、左ペインまたは右ペインの列に表示されます。列を削除するには、選択を解除します。
-  : 「関数別に選択項目のみ保持」。「メンバー」、「子孫」、「子孫(含む)」、「祖先」、「祖先(含む)」、「兄弟」、「兄弟(含む)」、「親」、「親(含む)」、「子」、「子(含む)」、または「レベル 0 子孫」を選択します。
-  : 「属性別に選択項目のみ保持」。属性が定義されている場合、「属性」、「演算子」および「値」のオプションを選択し、「OK」をクリックします。複数の属性を選択できます。
-  : 「レベル別または世代別に選択項目のみ保持」。「レベル」または「世代」を選択して、表示するレベルまたは世代を選択し、「OK」をクリックします。
-  : 表示をリフレッシュしてフィルタを解除します。



4 メンバー・リストで、選択を行います。

アクセス権があるメンバーのみが表示されます。

注意:

- **実行時プロンプトの場合のみ:** 表示される階層は、ビジネス・ルールの起動対象となるアプリケーションおよびプラン・タイプに対するものです。実行時プロンプトの場合、実行時プロンプトの制限を満たすメンバーが表示されます。
- **次元間またはメンバー範囲実行時プロンプトを持つビジネス・ルールまたは検証ルールの場合のみ:** 「次元の選択」リストから、この実行時プロンプトについてビジネス・ルール・デザイナーが設定する次元を選択します。

- **共有メンバーの場合のみ:** 共有メンバーは `shared_member.parent_member(shared)` のフォーマットで表示されます。共有メンバーをダイアログ・ボックスの右側で選択したときには、共有メンバー名のみが表示されます。

5 **オプション:**  または  をクリックし、階層を縮小または展開します。

6 「選択したメンバー」リストとの間でメンバーを移動します:







-  をクリックし、選択したメンバーを追加します。
-  をクリックし、選択したメンバーを除去します。
-  をクリックし、すべてのメンバーを除去します。
- すべてのメンバーを追加するには、 をクリックします。
- 階層関係に基づいてメンバーの範囲を選択するには、ダイアログ・ボックスの中央にある  をクリックします。

表 54 メンバーの関係

関係	含まれるメンバー
メンバー	選択したメンバー
子孫	選択したメンバーのすべての子孫(選択したメンバーは除く)
子孫(含む)	選択したメンバーとその子孫
祖先	選択したメンバーの上方にあるすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
祖先(含む)	選択したメンバーとその祖先
兄弟	選択したメンバーと同じ階層レベルからのすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
兄弟(含む)	選択したメンバーとその兄弟
親	選択したメンバーの上方にあるレベルのメンバー
親(含む)	選択したメンバーとその親
子	選択したメンバーの真下にあるレベルのすべてのメンバー
子(含む)	選択したメンバーとその子
レベル 0 の子孫	子を持たない選択したメンバーのすべての子孫

オプション: 右側のペインで選択したメンバーに関数を挿入するには、ダイアログ・ボックスの右側にある「関数セレクト」アイコン  をクリックします。

7 変数または属性が定義されている場合、「変数」タブをクリックし、ユーザー変数、代替変数および属性のメンバーを選択します。各カテゴリのメンバーは子として表示されます。フォームに表示されるのは、ユーザーが読取りアクセス権を持つメンバーのみです。

- 「ユーザー変数」: 218 ページの「メンバーとしての代替変数の選択について」および 203 ページの「ユーザー変数の管理」の説明に従って、メンバーを選択します。
- 「代替変数」: 218 ページの「メンバーとしての代替変数の選択について」の説明に従って、メンバーを選択します。選択内容は、289 ページの「システム設定の指定」で説明されている、「代替変数の表示を使用可能にする」のプリファレンス設定に応じて異なります。
- 「属性」: 次の表で説明されている値に基づいて属性を選択します。215 ページの「メンバーとしての属性値の選択について」に示すように、レベル 0 以外の属性を選択すると、すべてのレベル 0 子孫が選択され、それぞれに演算子が適用されます。


オプション: カスタム属性に適用される関数を選択するには、 をクリックします。次元別にフィルタするには、「次元」ドロップダウン・リストからオプションを選択します。

表 55 属性値の選択

演算子	含まれる属性値
等しい	選択された属性に等しい
等しくない	選択された属性に等しくない
より大きい	選択された属性よりも大きい
以上	選択された属性に等しいか大きい
より小さい	選択された属性より小さい
以下	選択された属性に等しいかより小さい

- 8 メンバー選択オプションがメンバー・セレクタ・ダイアログ・ボックスを呼び出すコンテキストに適していることを確認します。
- 9 「OK」をクリックします。

ワイルドカードを使用した検索

次のワイルドカード文字を使用して、メンバーを検索できます。

表 56 ワイルドカード文字

ワイルドカード	説明
?	任意の 1 文字を表します

ワイルドカード	説明
*	<p>ゼロ文字以上の文字を表します。たとえば、「sale*」と入力すると、「Sales」と「Sale」が一致します。これは*を使用することで、「sale」という語の後にゼロ文字以上の文字を含む語と一致するためです。</p> <p>デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。たとえば、検索条件として「cash」と入力すると、「*cash*」が検索され、「Restricted Cash」、「Cash Equivalents」、「Cash」、「Noncash Expenses」などが戻されます。これは、一致した各アイテム内に「cash」が含まれるためです。</p>
#	任意の1つの数字(0-9)を表します
[list]	<p>指定した文字リスト内の任意の単一文字を検索します。ワイルドカードとして使用する特定の文字をリストできます。たとえば、[plan]と入力すると、カッコ内のすべての文字を1つのワイルドカード文字として使用します。「-」文字を使用すると、[A-Z]や[!0-9]などの範囲を指定できます。「-」文字をリストの一部として使用するには、この文字をリストの先頭に入力します。たとえば、[-@&]の場合、カッコ内の文字をワイルドカード文字として使用します。</p>
[!list]	<p>指定した文字リスト内にはないすべての単一文字を検索します。また、[!A-Z]や[!0-9]のように、「-」で範囲を示すこともできます。</p>

メンバーとしての属性値の選択について

属性メンバーが定義されている場合、「メンバー選択」ページで属性値を選択できます。属性メンバーについては、すべての非レベル0属性を選択すると、すべてのレベル0子孫が選択され、演算子が相互に適用されます。数値、日付、ブール(false = 0でtrue = 1)などのタイプの属性については、評価は最小値と最大値に基づいています。テキスト属性については、評価は階層の上部から下部への位置に基づいています。最上部の位置は最小値となり、最下部の位置は最大値となります。

例: 数値属性

この例では、数値に基づいて、選択された演算子は各レベル0子孫に適用されます。たとえば、「メンバー選択」ページで「等しくない」と「小」を選択すると、1に等しくなく、2に等しくないすべての値が含まれるため、選択には3、4、5および6が入ります。「より大きい」と「小」を選択すると、1より大きいまたは2よりも大きなすべての値が含まれます。このため選択には2、3、4、5および6が入ります。

Size

Small

1

2

Medium

3

4

Large

5

6

表 57 例: 数値属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Large	5、6	「等しい」演算子は、5と6を含む Large のすべてのレベル0子孫に適用されます。
より小さい	Medium	1、2、3	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには $3 < OR < 4$ の値が含まれ、結果として1、2および3になります。
より大きい	Medium	4、5、6	「より大きい」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3より大きい、または4より大きい値が含まれ、結果として4、5および6になります。
以上	Medium	3、4、5、6	「以上」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3以上、または4以上の値が含まれ、結果として3、4、5および6になります。
以下	Medium	1、2、3、4	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3以下、または4以下の値が含まれ、結果として1、2、3および4になります。
等しくない	Medium	1、2、5、6	「等しくない」演算子は「中」のすべてのレベル0子孫に適用されます。これには3に等しくなく、かつ4に等しくない値が含まれます。結果として1、2、5および6になります。

例: テキスト属性

テキスト属性の場合、選択された演算子は階層の位置、上部(最小値)から下部(最大値)までに基づいて、各レベル0子孫に適用されます。

この例では、封筒は最上部にあり、最小値となります。パケットは次に高い値になります。これにボックス、カートン、バレル、クレートが続きます。クレートは最下部にあり、最大値となります。

このテキスト属性の場合には、「より小さい」と Small を選択すると、Envelope よりも小さい値または Packet よりも小さい値が含まれます。Envelope は Packet よりも小さいため、結果として Envelope のみを含む選択となります。同じように、Greater と Large を選択すると、Barrel より大きい値または Crate よりも大きい値が含まれ、結果として Crate のみを含む選択となります。

Containers

Small

Envelope

Packet

Medium

Box

Carton
Large
Barrel
Crate

表 58 例: テキスト属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Medium	Box、Carton	「等しい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには Box および Carton が含まれます。
等しくない	Medium	Envelope、Packet、Barrel、Crate	「等しくない」演算子は「中」のすべてのレベル 0 子孫に適用されません。これには、ボックスに等しくなく、かつカートンに等しくない値が含まれます。この結果として封筒、パケット、バレル、クレートとなります。
より小さい	Medium	Box、Packet、Envelope	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されません。これには、カートンよりも下位またはボックスより下位のすべてが含まれます。この結果としてボックス、パケット、封筒となります。
以下	Medium	Envelope、Packet、Box、Carton	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、カートンと同じ位置またはカートンより下位のすべてが含まれます。この結果として封筒、パケット、ボックス、カートンとなります。

フォームのメンバーの選択について

フォームのメンバーを選択するとき:

- 特定のユーザーからメンバーをフィルタ処理するには、そのアクセス権をメンバーに制限し、その後プランをリフレッシュします。[56 ページの「メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て」](#)を参照してください。
- 「選択したメンバー」リストでのメンバーの順序によりフォームの順序が決まります。順序を変更するには、メンバーを選択し、選択したメンバー・リストの上にある上矢印または下矢印を選択します。

注: メンバーを個別に選択し、その親を最初に選択する場合、親はフォームのメンバー階層の一番上に表示されます。(階層レベルの数に応じて、個別に選択されたメンバーの親についての合計の計算では複数のパスがとられ、計算が遅くなる可能性があります)。「子孫(含む)」などの関係によって選択されたメンバーの親は、階層の一番下に表示されます。

- 「フォームの管理」ダイアログ・ボックスの「レイアウト」タブで、メンバー選択アイコンをクリックするか、行または列を右クリックして「メンバー選択」を選択することにより、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開くことができます。
- 同じ次元について様々なメンバー・セットを選択するには、[176 ページの「非対称の行と列の作成」](#)を参照してください。

- 1つの行または列内に複数の次元があるフォームの場合、次元に対してメンバー選択オプションを設定できます。それには、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに表示される「次元」ドロップダウン・リストから、その次元を選択します。
- メンバー選択アイコンをクリックすると、「選択内容を別々の行に配置」または「選択内容を別々の列に配置」のオプションが表示されます。これを使用すると、選択内容がフォーム上の既存の最後の行または列の後の行または列に追加されます。たとえば、列 A に Acct1、Acct2 および Acct3 のメンバーが含まれるフォームの場合、「選択内容を別々の列に配置」を選択した状態でこれらのメンバーを選択すると、列 A、B、C としてそれぞれ Acct1、Acct2 および Acct3 が選択されます。このオプションを使用せずにメンバーを選択すると、列 A としてすべてのメンバーが選択されます。

この機能は、単一のメンバーに対してのみ使用でき、「子(含む)」などの関数を使用して選択されたメンバーには使用できません。たとえば、列 A に対して「Q」/「子(含む)」を選択している場合に、「選択内容を別々の列に配置」を選択しても、フォームのレイアウトは変更されません。

- 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを閉じた後は、「カウント」を除くすべての設定が保持され、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのメンバーはユーザー定義設定に基づいて表示されます。「レイアウト」タブに表示されるメンバーは、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに定義されている表示設定を継承しません。かわりに、メンバー名を使用して表示されます。
- 次元について様々なメンバー・セットを定義するには、[176 ページの「非対称の行と列の作成」](#)を参照してください。
- 表示、機能および印刷オプションを設定するには、[173 ページの「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」](#)を参照してください。
- フォームまたはフォームの定義を含むレポートを設定するには、[389 ページの「レポートのカスタマイズ」](#)を参照してください。

メンバーとしての代替変数の選択について

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。各変数には、Essbase サーバーで集中的に変更できる割り当てられた変数があります。代替変数はローリング予測で展開、レポートする場合に特に役立ちます。代替変数をフォームのメンバーとして選択すると、その値は動的に生成される情報に基づきます。たとえば、フォームやレポート・スクリプトで月の値を毎月更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 CurMnth に設定できます。

注意:

- フォームで値を開くまたは計算するときに、Essbase は代替変数をそれらに割り当てられた値で置き換えます。デフォルトでは、各代替変数は Essbase サーバーから 5 分(300 秒)ごとに取得され、キャッシュされます。
SUBST_VAR_CACHE_LIFETIME プロパティを追加し、その値を秒単位で設定し、取得間隔を変更できます。

- Administration Services Console または ESSCMD を使用し、値を作成して代替変数に割り当てます。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときに、Planning で使用できます。
 - 代替変数はフォームのコンテキストに適合する必要があります。「期間」次元のメンバーとしての Qtr2 の値により、CurrQtr という名前の代替変数を選択できます。CurrYr という名前の代替変数を「年」次元で選択しても、その値が Feb であれば有効になりません。Essbase サーバー、アプリケーションまたはデータベース・レベルで代替変数を設定できます。同じ代替変数が複数のレベルで存在します。Planning は、1)データベース、2)アプリケーション、3)サーバーという順序で検索するときに最初の代替変数を使用します。
 - 代替変数がビジネス・ルールの実行時プロンプト用に使用可能であり、その値がビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー・セットに一致する場合、それらの代替変数のいずれかをメンバーとして選択できます。
 - Planning は代替変数を使用するときに(たとえば、フォームを開く場合)、その代替変数の有効性を確認します。フォームを設計するときには確認しないため、フォームを保存して開くことで、代替変数をテストする必要があります。
 - 代替変数が計算されるときに生じるエラーの詳細は、複数のログを確認できます。Essbase に含まれていない代替変数を使用する場合には、Essbase サーバー・ログを参照してください。フォームで有効でない代替変数の詳細は、Planning ログを参照してください。ログの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。
- ▶ 代替変数をフォームで指定するには:
- 1 フォームを作成します(168 ページの「単一のフォームの作成」を参照)。
 - 2 「メンバー選択」で、右矢印、左印、二重矢印を使用して「選択したメンバー」で代替変数を移動し、メンバーを選択したのと同じ方法で代替変数を選択します。
選択すると、代替変数にはアンパサンド(&)が先頭に付きます。例:
`&CurrentScenario`
 - 3 「OK」をクリックします。

メンバーとしてのユーザー変数の選択について

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、プランナは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。203 ページの「ユーザー変数の管理」を参照してください。

ユーザー変数でフォームを作成するとき、プランナはフォームを開く前に変数の値を選択する必要があります。たとえば、Division という名のユーザー変数を作成する場合、プランナはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。フォーム用に変数を初回に選択するときに、プランナはプリファレンスでこれを実行します。そのあとはプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。

▶ フォームのユーザー変数を選択するには:

- 1 フォームを作成します(168 ページの「単一のフォームの作成」を参照)。
- 2 「メンバー選択」では、矢印を使用して代替変数を「選択したメンバー」へまたは「選択したメンバー」から移動させ、メンバーを選択したのと同じ方法でユーザー変数を選択します。

ユーザー変数が現在の次元に対して表示されます。たとえば、エンティティ次元のユーザー変数は次のように表示される可能性があります。

Division = [ユーザー変数]

選択すると、ユーザー変数には先頭にアンパサンドが付きます。例:

子孫(含む) (&Division)

- 3 「OK」をクリックします。

この章の内容

データ検証ルールの作成および更新.....	221
セルのフォーマットと移動パスの設定.....	224
データ検証ルールの表示.....	225
データ検証ルールの評価および実行の順序.....	226
ルール・ビルダーによってサポートされている条件.....	227
データ検証の条件演算子.....	237
データ検証ルールのシナリオ.....	239

データ検証ルールの作成および更新

ビジネス・ポリシーおよびビジネス・プラクティスを実装するために、フォームで条件が満たされたときにチェックするデータ検証ルールを構築できます。入力したデータが検証ルールに違反したときに、検証メッセージを生成できます。また、送信されるプランニング・ユニット・データに対して、検証ルールを使用して制限を構築したり、特定の条件を満たすデータを確認する確認者、所有者または通知者を指定することもできます。

たとえば、データ検証を使用して、会社のガイドラインから外れる資本支出が含まれる予算をプランナが送信するのを阻止することにより、部門の資本経費を会社のポリシーに準拠させることができます。データ検証ルールを使用して処理できるシナリオの例は、[239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」](#)を参照してください。

データ検証ルールの定義には、次のメイン・タスクがあります：

- 条件が満たされたときに検証メッセージとともに表示したり別の色で表示するデータのセルまたは場所を指定します。
- ルールの評価に関与させるセルを指定し、適切にルールを定義します。
- このトピックに説明されているとおり、指定した場所でデータ検証ルールを作成します。

▶ 検証ルールを作成および更新するには：


- 1 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。フォームを作成または編集し、「フォームの管理」ページで「レイアウト」タブをクリックします。
- 2 「レイアウト」タブで、検証ルールを設定または更新するグリッド、行見出し、列見出しまたはセルを右クリックします。

「レイアウト」タブ内のセルの上にカーソルを置くと、セルに検証ルールが含まれる場合、検証メッセージが表示されます。たとえば、セルに列の検証ルールが1つ以上含まれる場合、「列レベルの検証ルールが存在します」というメッセージが表示されます。

- 3 「検証ルールの追加/編集」を選択し、ルールを作成または更新します。
- 4 ルールを追加するには、「ルールの追加」をクリックし、ルールの名前と説明を入力します。

必要に応じて、「場所」からオプションを選択し、ルールを新しい場所に移動します。既存のルールと似たルールを作成するには、「複製」をクリックしてルールを更新します。ルールを表示するには、「ルールの表示」をクリックします。225 ページの「データ検証ルールの表示」を参照してください。



5 ルールを更新します。

1. 「条件」で、 をクリックし、条件文を開始するオプションを選択します: 「IF」、「ELSE IF」、「ELSE」、「THEN」、「CHECK RANGE」または「範囲」。

ルールの最初の部分には、IF 条件が含まれる必要があります。また、ルールには、特定の形式の THEN 条件も含まれる必要があります。227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」を参照してください。



2. 「ソース・タイプ」から、ルールによる評価のオプションを選択します。

「ソース・タイプ」リストには、条件に適したオプションが表示されます。たとえば、IF 条件に対しては、「現在のセル値」、「セルの値」、「列値」、「行値」、「メンバー名」、「メンバー」、「次元間メンバー」、「勘定科目タイプ」、「バージョン・タイプ」、「Var レポート・タイプ」、「UDA」または「属性」などが含まれます。各条件のタイプについては、227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」を参照してください。

3. 選択した「ソース・タイプ」に「ソース値」の値が必要な場合は、それを入力します。値を入力するには、 をクリックしてオプションを選択するか、 をクリックしてフリー・フォーム値を入力します。








4. 評価に適した演算子を「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「等しい」、「等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」、「次に含まれる」、「次に含まれない」から選択します。

たとえば、237 ページの「データ検証の条件演算子」を参照してください。

5. ルールに適した「ターゲット・タイプ」を選択します。
6. 条件ビルダーの右側にある「アクション」領域でアイコンをクリックして条件を更新します:
 -  現在の行の横に条件を追加します。
 -  現在の行の条件を削除します。


7. 更新する1つ以上の条件または条件ブロックを選択します。

条件ブロックを更新するには、条件ビルダーの上部にある「条件」領域のアイコンをクリックします:

-  検証ルール内に IF などの条件を追加します。条件は展開または縮小できます。227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」を参照してください。
-  選択した条件ブロックを削除します。
-  選択した条件を削除し、コピーしたものを新しい場所に貼り付けます。
-  選択した条件をコピーします。
-  選択した条件を新しい場所に貼り付けます。
-  条件内の選択対象をグループ化し、グループ用のカッコを追加します。設定したグループに加えて、条件がグループ化されるとこのグループ・ブロック内の IF ステートメントがグループ化され、「カスタム・グループ」オプションが有効になります。
-  選択した条件のグループを解除します。選択した条件からは、グループ用のカッコが削除されます。グループ化解除が選択されるたびに、条件から1つのグループが削除されます。

独自の条件グループを設定することもできます。それには、「カスタム・グループ」を選択して、ルール定義領域でグループを設定します。

選択した条件は影付きで表示されます。選択した条件の選択を解除するには、「条件」列の左側を再クリックします。

- 6 右端の列にある「セルの処理」アイコン  をクリックし、処理命令を追加します。

224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」を参照してください。

- 7 ルールをフォームで使用可能にする準備ができた後で、「検証ルールの使用可能」を選択します。

ヒント： ルールは、構築する際、使用可能にしなくても保存できます。この場合、エラーを解決してルールが検証および使用する準備ができた後、ルールを使用可能にして保存し、フォームで使用可能にできます。また、「検証ルールの使用可能」の選択を解除することにより、ルールを一時的に無効にすることもできます。

- 8 ルールの更新の終了後、ルールを検証します。







1. 「検証」をクリックします。

検証ステータスが、ダイアログ・ボックスの上部に表示されます。ルールに対してエラーが検出された場合、変更を保存する前にこれらのエラーを修正する必要があります。ルールを検証しなかったり、検証中に検出されたエラーを修正せずにダイアログ・ボックスを閉じると、更新は保存されません。

2. 検証中に検出されたエラーを修正した後、ルール定義領域の上にある「検証ルールの使用可能」が選択されていることを確認し、アプリケーションでルールを有効にします。

3. ルールを検証した後、「OK」をクリックします。

9 オプション: 「フォームの管理」 ページで、ルールを表示して更新します。

- 「フォームの管理」 ページの右側にある「検証ルール」 ペインで、、、 をクリックしてルールを追加、編集または削除します。
- 現在レベル以上のルールを表示するには、「フォームの管理」 ページ内でクリックし、「検証ルール」 ドロップダウン・リストから検証ルールを選択します。
- 同じ場所に複数のルールが定義されている場合に、ルールの優先度が同じであるときは、ルールが処理される順序を変更できます。ルールをリストで上下あるいは一番上または下に移動するには、ルールを選択して 、 または  をクリックします。226 ページの「データ検証ルールの評価および実行の順序」を参照してください。
- プランニング・ユニットの検証時に、現在ログインしているユーザーがフォームへのアクセス権を持たない場合に、フォームに関連する検証が実行されないようにするには、「このフォームへのアクセス権を持つユーザーについてのみ検証」を選択します。

10 「フォームの管理」 ページで、フォームをプレビューして検証し、すべての検証エラーを解決してから、変更を保存します。

データ検証ルールが使用可能なフォームの場合、フォームがロードまたは保存されたときにルールが検証されます。フォームが保存されると、データ検証ルールが保存されます。168 ページの「単一のフォームの作成」を参照してください。

ユーザーは、フォームを開くと、「データ検証メッセージ」 ペインを使用して検証メッセージを表示および解決できます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

セルのフォーマットと移動パスの設定

ルールを設定した後、「セルの処理」 ダイアログ・ボックスを使用して、フォームにおけるセルの表示方法を設定し、データ検証に基づいて移動パスを更新します。



▶ セルをフォーマットし、移動パスを設定するには:

1 「データ検証ルール・ビルダー」 ダイアログ・ボックスで、右端の列にある「セルの処理」 アイコン をクリックします。

ルールに対してアイコンが表示されない場合は、ルールが有効であり、ルールでセルの処理命令が許可されていることを確認してください。セルの処理命令はたとえば ELSE、RANGE および THEN 条件に含まれています。このアイコンは、ルールに必要なすべての列が選択されるまで表示されません。221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」を参照してください。

2 「セルの処理」 ダイアログ・ボックスで、このルールに定義されている条件が満たされた場合のフォームにおけるセルの表示方法を設定します。

ルールが使用可能であっても、セルの背景色、検証メッセージまたは移動パスのうち少なくとも1つのオプションを指定しないかぎり、ルールによる検証は行われません。

- セルの背景色を追加または更新するには、 をクリックします。セルの背景色を削除するには、 をクリックします。
- セルの検証メッセージを表示するには、「検証メッセージ」フィールドにメッセージを入力します。ユーザーには、このテキストがフォームのツールチップとして表示されます。また、検証ルールによってデータ・セルにフラグが設定されており、「データ検証メッセージ」ペインにメッセージを表示」チェック・ボックスが選択されている場合、このテキストは「データ検証メッセージ」ペインにリンクとしても表示されます。データ検証エラーの表示および解決の詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。
- セルに指定されたデータ検証ルールに基づいてプランニング・ユニット移動パスを更新するには、「承認」オプションを選択します。

データ・セルが技術的に有効な状態にあるときに、セルの背景色の更新や検証メッセージの指定のみを行う場合、このオプションを「なし」のままにし、移動パスを変更しないことを指定できます。また、「移動パスの更新」または「移動しない」(条件が満たされた場合でもプランニング・ユニットが移動されないようにする)を選択することもできます。[266 ページ](#)の「[プランニング・ユニットの移動パスの変更](#)」を参照してください。

3 「OK」 をクリックします。

ルールの更新は、ルールの「処理」列に表示されます。セルの色を指定した場合、その色が表示されます。検証メッセージをプレビューするには、「処理」列の上にカーソルを置きます。

データ検証ルールの表示

処理命令を使用してデータ検証ルールを設定した後、「ルールの表示」ダイアログ・ボックスを使用して、選択したグリッド、行、列またはセルに適用されるすべてのルールを表示できます。

▶ データ検証ルールを表示するには:

- 1 「データ検証ルール・ビルダー」ダイアログ・ボックスで、「ルールの表示」をクリックし、フォーム内のこの場所におけるこのレベル(セル、行、列またはグリッド)のルールをすべて表示します。
- 2 ルール名を選択し、ルールをダブルクリックするか「OK」をクリックして、詳細を表示します。

データ検証ルールに関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページ](#)の「[データ検証ルールの作成および更新](#)」
- [224 ページ](#)の「[セルのフォーマットと移動パスの設定](#)」
- [226 ページ](#)の「[データ検証ルールの評価および実行の順序](#)」

- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)
- [239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」](#)

データ検証ルールの評価および実行の順序

フォーム内のデータ更新ルールについては、ルール評価の優先度は、条件の優先度、ルールのある場所、およびルール・リスト内のルールの位置(同じ場所に複数のルールが存在する場合)によって決まります。最初に、セル・レベルのルールが処理されます。次に、列レベルのルールが処理され、続いて、行レベルのルールが処理されます。最後に、グリッド・レベルのルールが処理されます。これらのルールは、各レベルのルール・リスト内の位置に基づいて評価されます。

場所と位置により、ルールの処理順序が決まります。ただし、データ・セルに適用されるルールは、処理命令の優先度によって決まります。このため、セル・レベルのルールに優先度 4 の処理命令が含まれ、グリッド・レベルのルールに優先度 5 の処理命令が含まれる場合、データ・セルにはグリッド・レベルのルールが適用されます。すべてのルールの処理命令の優先度が同じである場合は、最初に処理されたルールが優先されます。優先度は、検証メッセージ、色、「移動しない」移動パス・オプション、またはこれらの設定の組合せがセルの処理命令に指定されているかどうかによって決まります。

表 59 フォームのルール優先度

デフォルトの条件優先度	検証メッセージ	色	移動しない
1(最低)	X		
1		X	
1	X	X	
2			X
3	X		X
4		X	X
5(最高)	X	X	X

データ検証ルールに関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証ルールの表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)
- [239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」](#)

ルール・ビルダーによってサポートされている条件

サブトピック

- [IF 条件値](#)
- [THEN 条件値](#)
- [RANGE 条件値](#)

データ検証ルール・ビルダーによってサポートされている条件は、IF、ELSE、ELSE IF、THEN、CHECK RANGE および RANGE です。

これらの条件によってサポートされている値の詳細と例は、次の項を参照してください:

- [IF、ELSE、ELSE IF: 228 ページの「IF 条件値」。](#)
- [THEN: 236 ページの「THEN 条件値」。](#)
- [CHECK RANGE、RANGE: 236 ページの「RANGE 条件値」。](#)

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」](#)
- [226 ページの「データ検証ルールの評価および実行の順序」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証ルールの表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)
- [239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」](#)

IF 条件値

サブトピック

- [現在のセル値](#)
- [セルの値](#)
- [列値](#)
- [行値](#)
- [次元間メンバー](#)
- [メンバー名](#)
- [メンバー](#)
- [勘定科目タイプ](#)
- [バージョン・タイプ](#)
- [差異レポート・タイプ](#)
- [UDA](#)
- [属性](#)

IF 条件についてデータ検証ルール・ビルダーによってサポートされている値は、次のとおりです:

- [229 ページの「現在のセル値」](#)
- [229 ページの「セルの値」](#)
- [230 ページの「列値」](#)
- [231 ページの「行値」](#)
- [232 ページの「次元間メンバー」](#)
- [233 ページの「メンバー名」](#)
- [233 ページの「メンバー」](#)
- [234 ページの「勘定科目タイプ」](#)
- [234 ページの「バージョン・タイプ」](#)
- [234 ページの「差異レポート・タイプ」](#)
- [235 ページの「UDA」](#)
- [235 ページの「属性」](#)

他の条件の詳細は、[227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)を参照してください。

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」](#)
- [226 ページの「データ検証ルールの評価および実行の順序」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証ルールの表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)

- 239 ページの「データ検証ルールシナリオ」

現在のセル値

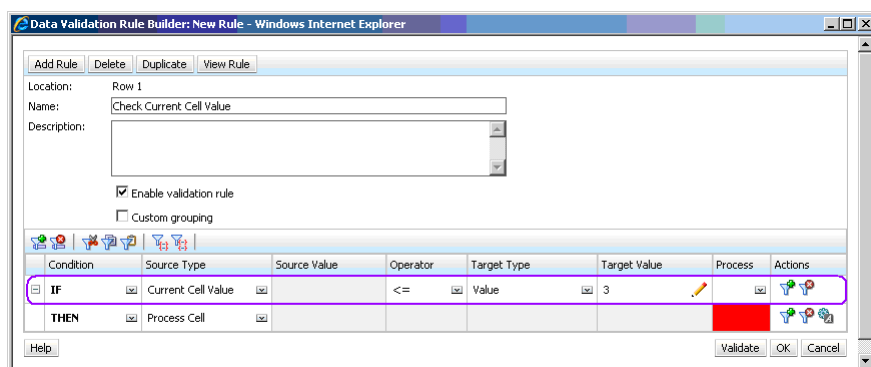
アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの値がこの条件を満たす場合のみです。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値または次元間メンバーがあります。

条件定義:



条件評価:

前の図に示す条件の場合、条件が評価されると、メンバー Row_Member1 を持つ行 1 のセルは赤になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

セルの値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定したセルの値が条件を満たす場合のみです。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値または次元間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Cell Value	A,1	=	Value	33		
----	------------	-----	---	-------	----	--	--

条件評価:

設計時セルは、次の図に示すように、データ入力時に1つ以上のデータ・セルまで拡張できます。セルの値は、拡張されたすべてのデータ・セルの値の合計です。たとえば、セル A1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+2+5+6+9+10=33)です。また、セル A2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(13+14+17+18=62)です。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

列値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定した列の値が条件を満たす場合のみです。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値または次元間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Column Value	A	<	Value	3		
----	--------------	---	---	-------	---	--	--

条件評価:

設計時列は、次の図に示すように、データ入力時に1つ以上のデータ・セルまで拡張できます。列の値は、現在の行の場所にあるこの列内の拡張されたすべてのデータ・セルの値の合計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、これに応じて現在の行も変更されます。

たとえば、メンバー Row_Member1 を持つ行 1 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+2=3)になります。メンバー Row_Member3 を持つ行 1 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(9+10=19)になります。同様に、メンバー Row_Member5 を持つ行 2 の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 A の値は、緑色の線で囲まれたセルの値の合計(17+18=35)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

行値



アクション:

アクションが実行されるのは、指定した行の値が条件を満たす場合のみです。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値または次元間メンバーがあります。

条件定義:

<input type="checkbox"/> IF	<input checked="" type="checkbox"/> Row Value	<input checked="" type="checkbox"/> 1	<input checked="" type="checkbox"/> !=	<input checked="" type="checkbox"/> Value	<input checked="" type="checkbox"/> 10		<input checked="" type="checkbox"/>		
-----------------------------	---	---------------------------------------	--	---	--	---	-------------------------------------	---	---

条件評価:

設計時行は、次の図に示すように、データ入力時に 1 つ以上のデータ・セルまで拡張できます。行の値は、現在の列の場所にあるこの行内の拡張されたすべてのデータ・セルの値の合計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、それに応じて現在の列も変更されます。

たとえば、メンバー Column_Member1 を持つ列 A の任意のセルに対してルールが評価される場合、行 1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+5+9=15)になります。同様に、メンバー Column_Member2 を持つ列 A の任意のセルに対してルールが評価される場合、行 2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(14+18=32)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

次元間メンバー

アクション:

アクションが実行されるのは、次元間メンバーによって参照されるデータ・セルの値が条件を満たす場合のみです。現在のデータ・セルのメンバーを使用して、メンバーが次元間に指定されていない次元のセルを完全修飾します。このメンバー名は、フリー・フォームで入力されます。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次が始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値または次元間メンバーがあります。ターゲット値には、各次元の1つのメンバーのみを含めることができますが、次元のメンバーのみを行または列として含める必要があります。

条件定義:

IF	Current Cell Value	>	Cross-Dim Member	Row_Member 5
----	--------------------	---	------------------	--------------

条件評価:

前のルールがグリッド・レベルで適用されると、このルールはフォームの各セルで呼び出され、紫色の線で囲まれたセルの値とこのセルの値が比較されます。このため、Row_Member5のセル->Column_Member2は赤色になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

メンバー名

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定した次元メンバーがある場合のみです。フォームが作成されたプラン・タイプに、選択した次元のメンバー名が含まれる必要があります。

演算子:

演算子には、「次と等しい」、次と等しくない、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」を使用できます。メンバー名であるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

条件定義:

IF	Member Name	Account	Equals	Value	Total Cost		
----	-------------	---------	--------	-------	------------	--	--

メンバー


アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定した次元メンバー(または、指定した関数の評価結果として生成されるメンバーの1つ)がある場合のみです。

演算子:

使用可能な演算子は「次に含まれる」および次に含まれないです。メンバーであるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

属性を含める

ルールには属性値を含めることができます。「ソース・タイプ」が「属性」の場合、使用可能な演算子は「次である」で、属性値を「ターゲット値」フィールドに直接入力できます。「ソース・タイプ」が「メンバー」の場合、「ターゲット値」フィールドで「次に含まれる」、または次に含まれない演算子を選択し、をクリックして「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの「変数」タブをクリックして、属性を選択できます。メンバー選択関数セレクタを使用して、「等しくない」や「以上」などの属性の関数を選択できます。

データ検証ルールに属性値を使用する場合、属性の評価方法に注意してください。1つのルールが1つまたは複数の次元からの1つまたは複数の属性を参照する場合、同じ属性次元からの属性値はORとして評価され、異なる属性次元からの属性はANDとして評価されます。たとえば、ルールに属性 IN Red、Blue、True、Bigが含まれる場合、いずれか(Red OR Blue) AND True AND Bigのすべてのメンバーが選択されます。詳細は [215 ページの「メンバーとしての属性値の選択について」](#) を参照してください。

メンバーのソース・タイプの条件定義

IF	Member	Account	In	Value	IDescendants("Total Cost")		
----	--------	---------	----	-------	----------------------------	--	--

属性のソース・タイプの条件定義

IF	Attribute	Entity	Is	Value	red		
----	-----------	--------	----	-------	-----	--	--

勘定科目タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定した勘定科目タイプの勘定科目がある場合のみです。現在サポートされているすべての勘定科目タイプ(支出、収益、資産、負債、資本、保存された仮定)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Account Type		Is		Expense		
----	--------------	--	----	--	---------	--	--

バージョン・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したバージョン・タイプのバージョンがある場合のみです。現在サポートされているバージョン・タイプ(標準ボトムアップ、標準トップダウン)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Version Type		Is		Standard Botto...		
----	--------------	--	----	--	-------------------	--	--

差異レポート・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定した差異レポート・タイプの勘定科目がある場合のみです。使用可能な差異レポート・タイプ(支出、支出外)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Var Reporting Type	Is	Non-Expense	
----	--------------------	----	-------------	--

UDA

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定した次元のメンバーに関連付けられたこの UDA がある場合のみです。UDA 参照は、選択した次元に基づいて選択されます。条件は、選択した値と等しいこの次元の UDA に基づいています。UDA 値は、ドロップダウン・リストから選択する必要があります。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	UDA	Scenario	Is	Value	ACTUAL	
----	-----	----------	----	-------	--------	--

属性

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差で、この属性が、指定した次元のメンバーに関連付けられている場合のみです。属性参照は、選択した次元に基づいて選択されます。条件は、選択したターゲット値と等しいこの次元の属性に基づいています。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Attribute	Entity	Is	Value	East	
----	-----------	--------	----	-------	------	--

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」](#)
- [226 ページの「データ検証ルールの評価および実行の順序」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証ルールの表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)
- [239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」](#)

- 225 ページの「データ検証規則の表示」
- 227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」
- 237 ページの「データ検証の条件演算子」
- 239 ページの「データ検証規則のシナリオ」

CHECK RANGE

アクション:

特定の範囲内に収まる必要がある値を定義します。

値:

この値には、「現在のセル値」、または特定の「行」、「列」または「セル」の値を使用できます。

RANGE

アクション:

CHECK RANGE 条件に定義されている値に有効な範囲を定義します。この範囲には、最小値以上かつ最大値未満のすべての値が含まれます。CHECK RANGE 条件に指定した値がこの範囲内である場合、この条件によって定義される処理命令は、ルールが呼び出されるデータ・セルに適用されます。複数の値範囲を定義し、範囲ごとに異なる処理命令を指定できます。

値:

範囲の最小値と最大値は、「セルの値」、「現在のセル値」、「行値」、「列値」、次元間値を使用するか、フリー・フォーム値を入力することにより、定義できます。たとえば、次のルールにより、現在のセル値が 5 以上 10 未満であることを確認できます。この条件が満たされない場合、セルは赤になります。

条件定義:

Condition	Source Type	Source Value	Operator	Target Type	Target Value	Process	Actions
CHECK RANGE	Current Cell Value						
RANGE	Value	5		Value	10		

他の条件の詳細は、227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」を参照してください。

データ検証の条件演算子

データ検証ルール・ビルダーの条件演算子には、次のタイプの比較を組み込むことができます:

- 次の演算子を使用した数値比較: 「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」

- 次の演算子を使用した文字列値比較: 「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」、「次に含まれる」、「次に含まれない」

ルールにより、テキストやスマート・リストなどの様々なデータ型を持つセルを比較できます。セルのデータ型が保持されるのは、常に1つのセルからの値が参照される場合です。「現在のセル値」と「次元間メンバー」を使用してセル値を参照する場合はこれに該当します。比較対象の値が複数のセルからの値(行値、列値およびセル値など)である場合、データ型はデフォルトで **double** 型に設定されます。

次のデータ型の値を比較する場合、それぞれ考慮事項に注意してください:

- **double** 型の場合、**double** 値に対して文字列表現(123.45 など)が使用されます。**double** 型が小数部を持たない整数(123.00 など)である場合、整数値(この場合、123)が使用されます。
- スマート・リストの場合、ルールには、Essbase に格納されているスマート・リスト名と数値が使用されます。これらのルールでは、スマート・リスト・ラベルは使用されません。これは、スマート・リスト・ラベルはユーザー・ロケールに応じてユーザーごとに異なる可能性があるためです。
- テキストの場合、ルールで比較対象として使用するのはテキスト値のみです。
- その他すべてのデータ型(通貨、通貨以外、パーセンテージおよび日付)は、**double** 型として処理されます。
- 日付の場合、ルールで比較対象として使用するのは、Essbase に格納されている数値です。たとえば、ユーザーが MM/DD/YYYY というフォーマットを前提として 12/11/1999 と入力した場合、この値は 19991211 として Essbase に格納され、この数値が比較対象として使用されます。

表 60 「次で始まる」、「次で終わる」および「次を含む」の結果の例

演算子	比較値	比較先の値
次で始まる	2.0	2
	1234.0	12.0
	101.0	10
	2.0	2.0
	2.5	"2."
	"YearTotal"	"Year"
次で終わる	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	"YearTotal"	"al"

演算子	比較値	比較先の値
	"YearTotal"	"Total"
次を含む	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	2.5	2.5
	23.567	3.5
	23.567	67
	23.567	"23."
	23.567	".56"
	"YearTotal"	"al"

データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証規則の作成および更新」](#)
- [226 ページの「データ検証規則の評価および実行の順序」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証規則の表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [239 ページの「データ検証規則のシナリオ」](#)

データ検証規則のシナリオ

サブトピック

- [例 1](#)
- [シナリオ 2](#)
- [シナリオ 3](#)
- [シナリオ 4](#)
- [シナリオ 5](#)

これらのシナリオは、データ検証がビジネス・ポリシーの実装にどのように役立つかについての例となります。

- [240 ページの「例 1」](#)
- [241 ページの「シナリオ 2」](#)
- [242 ページの「シナリオ 3」](#)
- [243 ページの「シナリオ 4」](#)

- [244 ページの「シナリオ 5」](#)

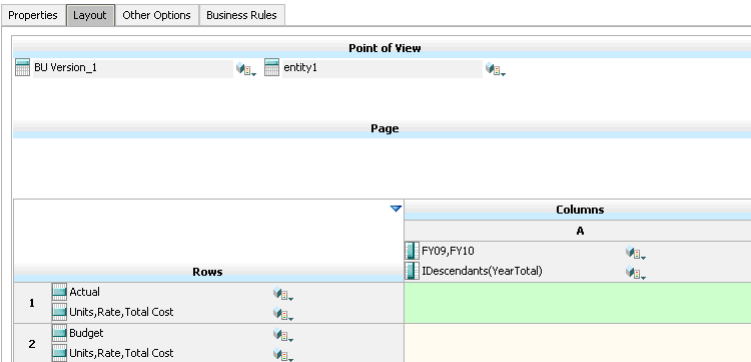
データ検証に関する追加情報は、次を参照してください:

- [221 ページの「データ検証規則の作成および更新」](#)
- [226 ページの「データ検証規則の評価および実行の順序」](#)
- [224 ページの「セルのフォーマットと移動パスの設定」](#)
- [225 ページの「データ検証規則の表示」](#)
- [227 ページの「ルール・ビルダーによってサポートされている条件」](#)
- [237 ページの「データ検証の条件演算子」](#)

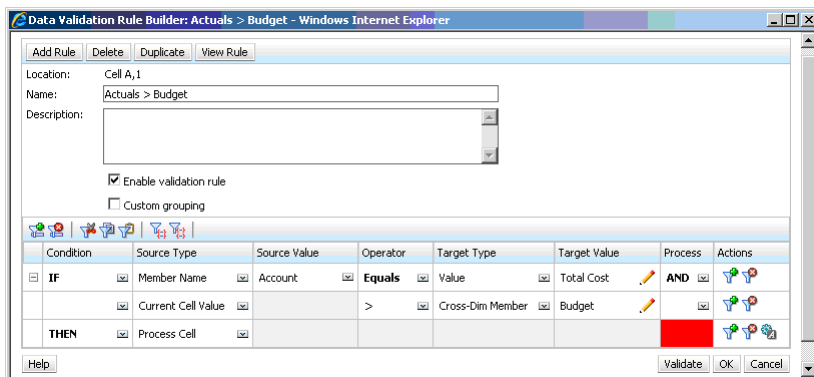
例 1

John は、Acme, Inc という会社で働くコンサルタントで、フォームを設計したり、会社のポリシーを実施するデータ検証規則を実装しています。彼は、実際の合計費用が予算額を超えたときに実績額を赤色で示す検証規則を実装するよう求められました。このテストは、アプリケーションで年度および期間ごとに繰り返す必要があります。John は、次の図のようにフォームを設計し、次元間メンバーを使用してセル・レベルにデータ検証規則を追加しました。

設計時のフォームのレイアウト:



設計時のデータ検証規則:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

		FY09									FY10			
		Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	Jan	Feb	Mar	Q1	
Actual	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	14	7	26	
	Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	4	4	4	12	
	Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	378	20	56	28	312	
Budget	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	13	7	25	
	Rate	4	6	3	13	15	15	9	52	5	4	4	13	
	Total Cost	12	24	18	169	180	360	189	3640	25	52	28	325	

ヒント:

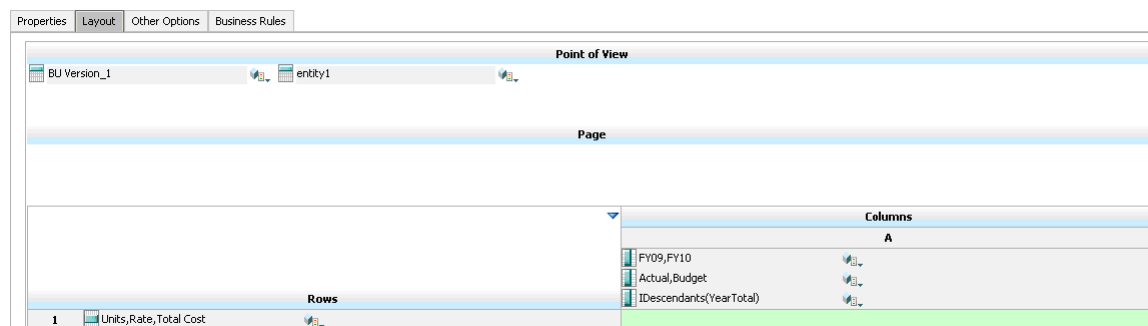
- John は、合計費用を分割して独立したセグメントとし、このセグメントにデータ検証ルールを適用することにより、パフォーマンスをわずかに向上させることができます。ただし、この場合、新規のアカウントとシナリオがフォームに追加されるためにメンテナンス作業が増えます。
- 「実績」の年合計期間のみを赤色で示すというように要件が変更された場合、John には2つのオプションがあります。最善のオプションは、年合計が「期間」メンバーであるかどうかをチェックする IF エントリを追加する方法です。もう1つのオプションは、年合計メンバーを分割して独立した列とし、パフォーマンスを向上させる方法です。ただし、この場合、分散ロジックが破綻し、「年」の列ヘッダーが繰り返されるため、新規年度が追加されるにつれてフォームのメンテナンスがより困難になります。

別のシナリオは、239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」を参照してください。

シナリオ 2

シナリオ 1 で John によって設計されたフォームをレビューした後、Acme は、「予算」を行ではなく列として配置することにしました。この要件を実装するには、John は、軸内でメンバーを移動してフォームのレイアウトを変更できます。ただし、データ検証ルールを更新する必要はありません。John は、次の図のようにフォームを更新しました。

設計時のフォームのレイアウト:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

	FY09										FY10			
	Actual									Budget	Actual			
	Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	YearTotal	Jan	Feb	Mar	Q1	
Units	3	4	6	13	12	24	21	70	70	5	14	7	26	
Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	52	4	4	4	12	
Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	3780	3640	20	96	28	312	

別のシナリオは、239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」を参照してください。

シナリオ 3

これらのフォームを正常にロール・アウトした後、John は、次のポリシーを実装するよう求められました。それは、今年度の予算額が前年度の実績額を大幅に超えないことを確認するためです。差が 5%を超える場合、差が赤色で示されます。

John は、メンバー式を持つメンバーを使用して、今年度の予算額と前年度の実績額の差異を計算することにしました。次のメンバー式を追加しました:

```
@varper(@Prior("Actual", 1, @Relative("Year", 0)), budget)/100;
```

John は、次の図に示すようにフォームを設計し、セル・レベルでデータ検証ルールを追加しました。John は、「メンバー名」を使用して検証を合計費用にのみ適用しました。

設計時のフォームのレイアウト:

Columns	A	B	C
FY09	Actual	Budget	"Variance Percent (Actual, Budget)"
	YearTotal	IDescendants(YearTotal)	YearTotal

Rows: 1 Units, Rate, Total Cost

設計時のデータ検証ルール:

Condition	Source Type	Source Value	Operator	Target Type	Target Value	Process	Actions
IF	Member Name	Account	Equals	Value	Total Cost	AND	
	Current Cell Value		>	Value	0.05		
THEN	Process Cell						

データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

Version: BU Version_1							
	FY09	FY10				FY10	
	Actual	Budget				Variance Perce	
	YearTotal	⊕ Q1	⊕ Q2	⊕ Q3	⊕ Q4	⊖ YearTotal	YearTotal
Units	70.0	60.0	20.0	20.0	15.0	115.0	39.13%
Rate	54.0	24.0	4.0	4.0	5.0	37.0	-45.95%
⊖ Total Cost	3780.0	1440.0	80.0	80.0	75.0	4255.0	11.16%

ヒント:

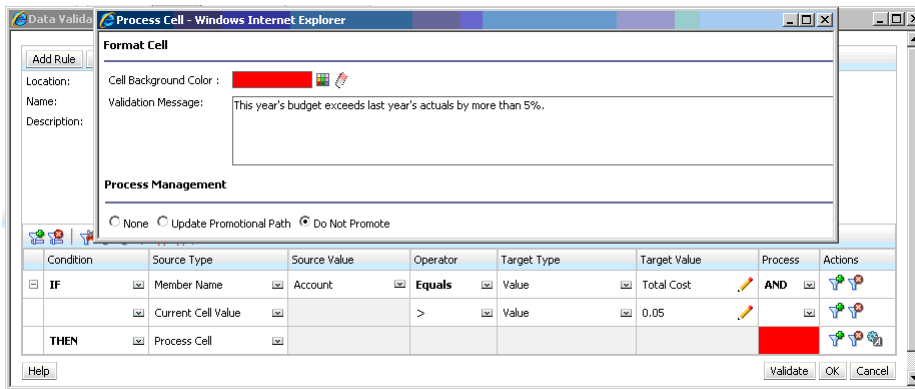
- John がアウトラインの変更を許可されていない場合、またはメンバー式のパフォーマンスに問題が発生した場合、式の列を使用できます。159 ページの「式の行と列を使用したフォームの設計」を参照してください。
- John は、次の理由により、このルールを「差異の割合(%)」列に定義します。
 - パフォーマンスが向上します。ルールは、「差異の割合(%)」列のセルにおいてのみ評価されます。これに対し、ルールが年合計に割り当てられている場合は、今年度の予算についてすべての期間でルールを評価することが必要になってしまいます。
 - ユーザーがデータ検証メッセージに対応しやすくなります。John は、差異が大きという内容のメッセージを、年合計に追加するのではなく、「差異の割合(%)」列に追加できます。これにより、ユーザーは、差異を確認するために「差異の割合(%)」を探さなくて済みます。
- 年合計と「差異の割合(%)」の両方を赤色で示すことが要件の一部であった場合、John は両方を赤色で示すことができます。

別のシナリオは、239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」を参照してください。

シナリオ 4

セルを赤色で示すのみでなく、今年度の「予算」が前年度の「実績」金額より大幅に多い(5%を超える)ときに、ユーザーがプランニング・ユニットを上位へ移動できないようにすることも必要です。この要件を実装するために John に必要な作業は、次の図に示すように、データ検証ルールの処理命令を編集し、「移動しない」を選択することです。

設計時のデータ検証ルール:



別のシナリオは、239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」を参照してください。

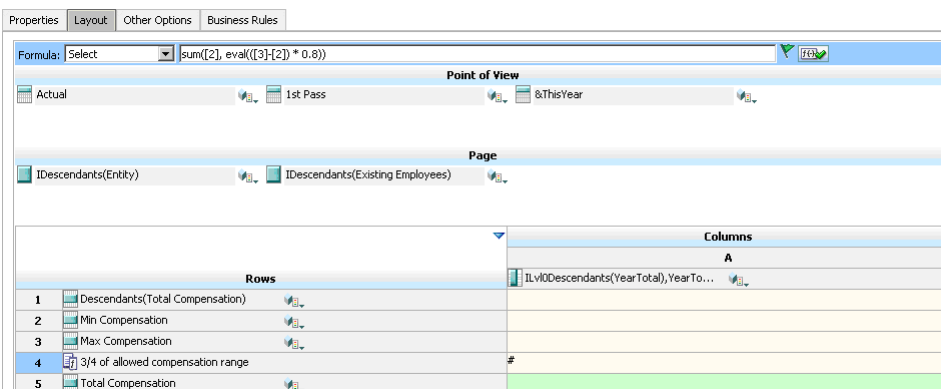
シナリオ 5

最後に、John は、特定部門の従業員の合計報酬が許容範囲内に収まっているかどうかを検証するデータ検証ルールを設計するよう求められました。このルールにより、「運用」部門の「既存の従業員」を評価します。このルールでは、「合計報酬」が許可された「最小」より大きく、従業員の等級に応じた報酬範囲の4分の3以下である場合、アクションは必要ないと認定します。

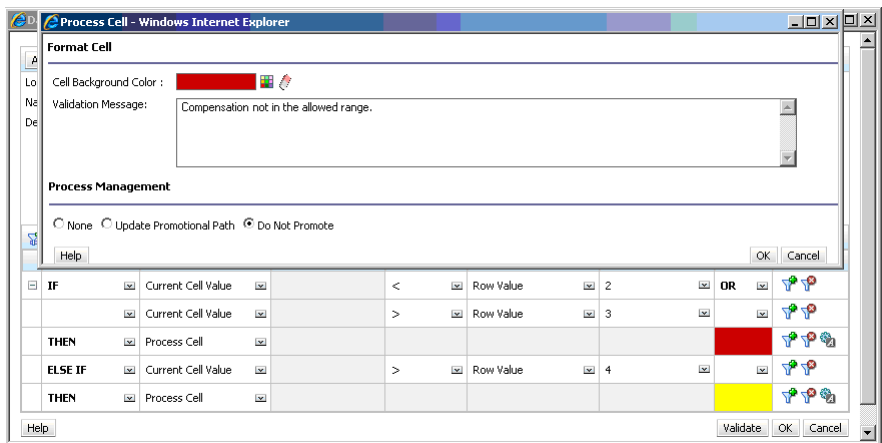
「合計報酬」が報酬範囲の4分の3を超える場合、検証メッセージが表示され、プランニング・ユニットは人事部長の承認を受ける必要があります。この値が「最小」より小さい場合や、「最大」より大きい場合は、エラーが生成され、ユーザーはそのプランニング・ユニットを上位に移動できなくなります。

John は、「フォームの管理」ダイアログ・ボックスから「従業員支出要約」フォームを開きました。このフォームでは、ページに従業員と部門、行に勘定科目(「合計報酬」など)、および列として期間があります。検証を構築しやすくするために、John は、次の図に示すように、報酬範囲の4分の3を計算するための計算行を追加し、フォームに最小報酬および最大報酬メンバーを追加しました。従業員の等級に応じた最小報酬および最大報酬は、メンバー式を使用して計算されます。

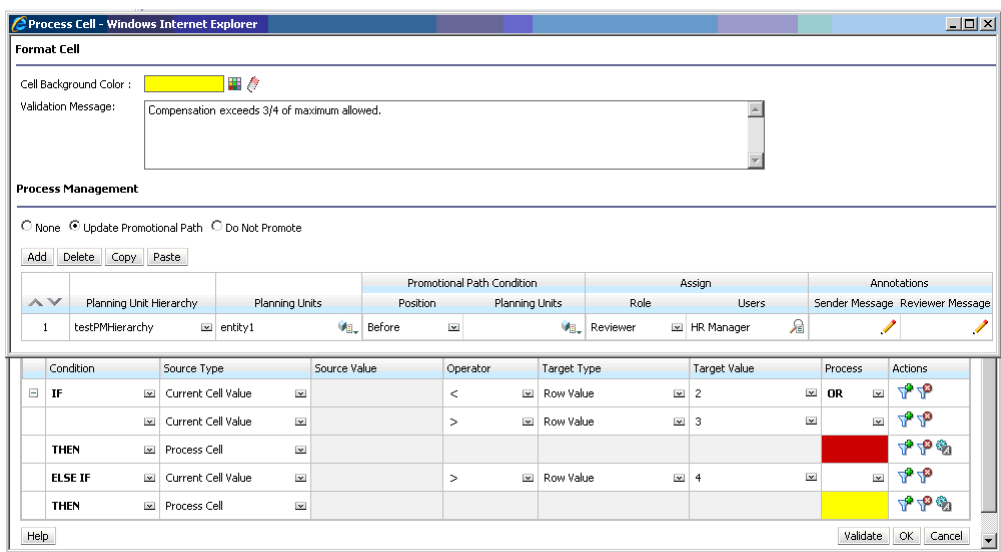
設計時のフォームのレイアウト:



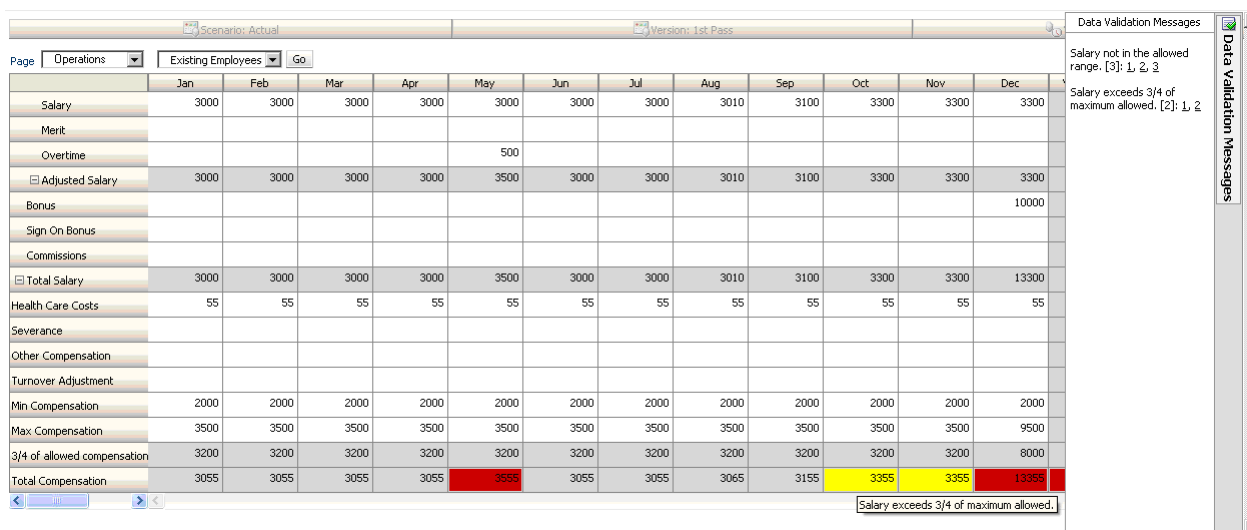
プランニング・ユニットの移動を阻止するデータ検証ルール:



人事部長を確認者として追加するデータ検証ルール:



データ検証が適用され、検証メッセージが表示された、データ入力時のフォーム:



別のシナリオは、239 ページの「データ検証ルールのシナリオ」を参照してください。

この章の内容

予算編成プロセスについて.....	247
予算策定プロセスの定義.....	250
レビュー・プロセスの開始とサポート.....	251
プランニング・ユニットの注釈の印刷.....	252
プランニング・ユニット階層の管理.....	253
プランニング・ユニットの移動パス.....	266
タスク・リストの管理.....	269
データのコピー.....	281
セル詳細の消去.....	283

予算編成プロセスについて

プランニング・ユニットを使用して、予算の追跡およびステータスの確認、問題やプランニング・ユニット所有権の処理ができます。予算サイクル期間は短縮されます。

- 承認経路は組織の構成から独立しています
- 例外と問題の領域はハイライト表示されます
- 監査情報には注釈とプロセス・ステータスが含まれます
- レビューには注釈とコメントが含まれます

プランニング・ユニット

プランニング・ユニットはシナリオ、バージョンおよびエンティティまたはエンティティの一部の組合せです。シナリオとバージョンはレビュー・サイクルの基礎です。プランニング・ユニットはシナリオとバージョンにプランニング・データを送信します。たとえば、プランニング・ユニットはバージョン(「ベスト・ケース」)、エンティティ(「New York」)およびシナリオ(「実績」)から構成されます。また、プランニング・ユニットにエンティティ内の2番目の次元も含めて、プランニング・ユニットの粒度を高めることができます。

レビュー・プロセス

予算プロセスが完了するまで、プランニング・ユニットは確認者間を移動します。レビュー・プロセスは、プランニング・ユニットに対して所有者および確認者を

選択したときに設定した移動パスに沿って行われます。ただし、イベントにより移動パスの変更がトリガーされた場合は異なります。移動パスに影響するイベントは次のとおりです：

- 給与、新規採用または資本設備などの予算項目の支出の境界を超過する場合、または境界に到達しない場合
- 現在の所有者が予算を、追加情報を求めて前の所有者に戻す場合
- 現在の所有者が、必ずしも移動パスにいないが許可されたユーザーに支援を求める場合

選択された承認テンプレートにより、予算をレビューする最初のユーザーが決定されます(254 ページの「[プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定](#)」を参照)。最初のユーザーは、割り当てられたタスクを完了し、次に(「ボトム・アップ」テンプレートを)上位に移動したり、(「配分」テンプレートを)送信します。これにより、次の所有者に予算に注目するよう警告します。予算がユーザー間で受渡しされれば、他のユーザーにも通知されます。

各確認者は、予算を次の確認者に送信する前にプランニング・ユニットを検証する必要があります。検証により、確認者が処理するプランニング・ユニットに定義されているすべてのデータ検証ルールが実行され、プランニング・ユニットの移動パス内のすべてのデータ・エラーまたは変更がレポートされます。266 ページの「[プランニング・ユニットの移動パスの変更](#)」を参照してください。

ヒント：「承認」にユーザー ID ではなくユーザーのフルネームを表示するには、「ユーザーのフル・ネームの表示」オプションを選択します(289 ページの「[システム設定の指定](#)」を参照)。

プランニング・ユニット階層

プランニング・ユニット階層には、レビュー・プロセスの対象となるプランニング・ユニットとエンティティが含まれます。

プランニング・ユニット階層メンバー間の親/子関係はレビュー・プロセスに影響します：

- 親を上位へ移動または拒否すると、その子は承認されないかぎり上位へ移動されるか、拒否されます。親の所有者は子の所有者になります。
- 親を承認すると、その子は承認されます。
- すべての子が同じ所有者に上位へ移動されると、親は所有者に移動されます。
- すべての子のステータスが1つのステータス、たとえば「サインオフ済」に変更されると、親のステータスも同じステータスに変更されます。

子に別の所有者がいる場合、親のステータスを変更できません。子が異なるユーザーによって上位へ移動、送信またはサインオフされた場合、親には所有者がなく、予算管理者のみがそのステータスを変更できます。

データ検証ルール

ビジネス・ポリシーおよびビジネス・プラクティスを実装するために、管理者はフォームで条件が満たされたときにチェックするデータ検証ルールを構築できます。ルールを使用して、検証メッセージの生成、送信されるプランニング・ユニット・データに対する制限の適用、および特定の条件を満たすデータを確認する特定の確認者または所有者の指定を行うことができます。

例:

- プランニング・ユニットの移動パスの条件付け
- 無効なデータを含むプランニング・ユニットの移動の防止

プランニング・ユニットの移動パスに影響するルールを設計する場合、これらのルールが評価および適用される順序を理解する必要があります。データ検証ルールの設計方法および予期される結果の詳細は、[第8章「データ検証の管理」](#)を参照してください。

タスク・リスト

タスク・リストはタスク、手順および期限を一覧表示し、プランニング・プロセスを通してユーザーをガイドします。管理者や対話型ユーザーはタスクやタスク・リストを作成、管理します。

承認通知用電子メールの設定

アプリケーションの所有者は、他の所有者が電子メールの通知を使用可能にする前に、アプリケーションの電子メール・サーバーを指定する必要があります。電子メールの通知を構成した後、ユーザーはプランニング・ユニットの所有者になったとき、または通知対象のユーザーとして指定されたときに電子メールを受信します。この機能はSMTP電子メール・システムのみで使用可能です。電子メールのサーバー名が有効な場合、アプリケーションの所有者はすべての電子メール通知のソースになります。電子メール・サーバー名が無効な場合は、電子メール通知を受信できません。電子メール・サーバーを指定するには、[Oracle Enterprise Performance Management System セキュリティ構成ガイド](#)を参照してください。電子メールの文字セットを指定するには、[289 ページの「システム設定の指定」](#)を参照してください。

予算策定プロセスの定義

サブトピック

- 承認の役割
- 承認プロセス
- 承認操作およびデータ検証

承認の役割

Planning の承認を管理するには、承認の役割を割り当てられている必要があります。

- 承認管理者 - 承認管理者は一般的に組織内のある地域を担当するビジネス・ユーザーであり、その地域の承認プロセスを管理する必要がありますが、Planning 管理者の役割を付与される必要はありません。承認管理者の役割には、承認所有権割当て者、承認プロセス・デザイナー、承認スーパーバイザといった Planning の役割が含まれます。
- 承認所有権割当て者 - プランナの役割で実行できるタスクを行います。また、書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、所有者の割当て、確認者の割当ておよび通知対象のユーザーの指定を行えます。
- 承認プロセス・デザイナー - プランナおよび承認所有権割当て者の役割で実行できるタスクを行います。また、書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、書込み権限を持つエンティティのセカンダリ次元とメンバーの変更、プランニング・ユニット階層に対するシナリオとバージョンの割当ての変更、アクセス権を持つフォームのデータ検証ルールの編集を行えます。
- 承認スーパーバイザ - 書込み権限を持つプランニング・ユニット階層の任意のメンバーに対し、プランニング・ユニットの停止と起動、プランニング・ユニットに対する任意のアクションを実行できます。承認スーパーバイザはプランニング・ユニットを所有していない場合でも、前述のアクションを実行できます。ただし、プランニング・ユニットを所有していない場合、そのデータの変更は行えません。

これらの役割の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。

承認プロセス

Planning では配分、ボトムアップ、フリーフォームの各予算策定がサポートされています。通常は、上位のユーザーがロードされたデータを含めたプランニング・ユニットを開始し、データ・エントリを直属の下位のメンバーに委任し、そのメンバーがさらに直属の下位に配分する、などと続きます。予算が配分されるまで、ユーザーは予算にアクセスできません。

予算プロセスを定義するには、管理者が次の項目を定義します:

- プランニング・ユニット階層
- プランニング・ユニット階層の所有者と確認者

- 送信したデータを評価する検証ルール

ユーザーが提出した予算データには、検証ルールが適用されます。データが検証をパスした場合、予算は次の所有者へ移動し、元のユーザーは所有者として再度承認されないかぎりデータを編集できなくなります。提出プロセスでは、現在の所有者のみ編集可能なようにデータがロックされます。

承認操作およびデータ検証

データ検証を起動する承認操作の間、行および列に存在するフォーム上のユーザー変数およびコンテキスト・ユーザー変数は、すべての可能な入力の結果セットの個別の組合せに置き換わります。これは、関数実行を最小化し、実際の重複の削除を必要とせず、重複が存在しないことと個別の組合せのすべてのメンバーが存在することを保証する、効果的な静的置換アルゴリズムによって実行されます。POVでのユーザー変数とコンテキスト・ユーザー変数はページとして処理されます。

注： ユーザー代替変数の結果を表示するには、データ検証レポートのタスク・リストに移動します。フォームで故意に検証が失敗するようにして、レポートに表示するプランニング・ユニットの検証操作を実行する必要があります。

レビュー・プロセスの開始とサポート

管理者がレビュー・プロセスを開始した後、プランニング・ユニットはあるレビュー担当者から別の担当者へ、予算プロセスが完了するまで移動します。選択した承認テンプレートによって、予算をレビューする最初のユーザーが決定されます。

▶ 確認プロセスを開始するには:

- 1 「ツール」、「承認の管理」の順に選択します。
- 2 「シナリオ」で、シナリオを選択します。
- 3 「バージョン」で、バージョンを選択します。
- 4 「実行」をクリックし、選択したシナリオとバージョンの組合せに関連付けられたプランニング・ユニットを表示します。

リストされたプランニング・ユニットは承認に使用できます。

選択したシナリオとバージョンで開始されたプランニング・ユニットがない場合、次のメッセージが表示されます: 「選択されたシナリオとバージョンの組合せにプランニング・ユニット階層を割り当てていません。」

- 5 「ツリー・ビュー」を選択し、「プラン・サイクル」で「開始」をクリックして、確認プロセスを開始します。

注： プランニング・ユニット階層に「ボトム・アップ」テンプレートが使用されている場合、「開始」を選択すると、プランニング・ユニットが開始され、「作成」アクションも実行されます。これらのアクションにより、プランニング・ユニット階層でプランニング・ユニット所有者として定義されているユーザーが現在の所有者として設定され、プランニング・ユニットのステータスが「レビュー中」に変更されます。


6 オプション: プランニング・プロセスから、またはシステムの追跡からプランニング・ユニットを除去するには、「除外」を選択します。

注意 プランニング・ユニットを除外すると、関連付けられた注釈および履歴がすべて破棄されます。プランニング・ユニットのステータスは「未開始」に戻り、所有者は「所有者なし」となります。データ値はそのまま保留されます。

プランニング・ユニットの注釈の印刷


管理者は、シナリオ、バージョンおよびプランニング・ユニット・メンバーのセットの注釈についてレポートを作成し、プランニング・ユニットのステータスを確認できます。レポートはプロセス・ステータスに基づいて作成できます。プランニング・ユニットのタイトル、作成者、日付および注釈が表示されます。注釈テキストは、最新のエントリを最初にして日付順に表示されます。

▶ プランニング・ユニットの注釈についてレポートを作成および印刷するには:

- 1 「ツール」、「レポート」の順に選択します。
- 2 「プランニング・ユニットの注釈」を選択します。
- 3 「プランニング・ユニット」で、レポートを生成する「シナリオ」、「バージョン」、および「エンティティ」を選択します。「カスタム」を選択した場合、 をクリックしてカスタムのシナリオ、バージョンおよびエンティティを選択します。
- 4 「承認ステータス」でステータスの状態を選択します。
- 5 「レポート作成」をクリックします。

Adobe Acrobat が次のプランニング・ユニットに関する情報を記載したレポートを生成します。

- アプリケーション名
- 選択されたシナリオ、バージョンおよびエンティティ
- プランニング・ユニットのタイトルとステータス
- 元の日付
- 作成者
- 注釈内容

6 Adobe Acrobat ツールバーで「印刷」 をクリックします。

注： マルチバイト文字がレポートに表示されるようにするには、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide のマルチバイト文字に関する項を参照してください。正しい言語のグリフがレポートに反映されるよう表示するには、フォントをjava.home ディレクトリで使用可能にすることも必要です。Planning ディレクトリは、EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\common\JRE\Sun\1.6.0\lib\fonts という場所を示します。

プランニング・ユニット階層の管理

サブトピック

- [プランニング・ユニット階層の作成](#)
- [プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て](#)
- [プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択](#)
- [プランニング・ユニット階層の編集](#)
- [プランニング・ユニット階層の削除](#)
- [プランニング・ユニット階層の使用状況の表示](#)
- [プランニング・ユニット階層の名前変更](#)
- [プランニング・ユニット階層の同期](#)
- [プランニング・ユニット階層のエクスポート](#)
- [プランニング・ユニット階層のインポート](#)

プランニング・ユニット階層を使用すると、予算策定プロセスをすべてのタイプの組織要件に適用できます。

- プランニング・ユニットはエンティティおよび他の次元の組合せです。たとえば、あるアプリケーションに会社のすべての製品が含まれる場合に、North America(北米)のプランニング・ユニット階層には北米で販売されている製品に該当する次元とメンバーが含まれます。同様に、Europe(欧州)地域に対するプランニング・ユニット階層は、欧州で販売されている製品の次元とメンバーが含まれます。同じ承認階層内で、Latin America(南米)エンティティを勘定科目次元を使用して拡張し、人事別のエンティティ、資本支出別のエンティティおよび収益別のエンティティなどのプランニング・ユニットを作成できます。
- 事前設定した予算策定モードのテンプレートを使用して、ボトム・アップ、配分またはフリー・フォームの階層を作成します。
- 使用されるエンティティ次元およびセカンダリ次元の世代番号に基づいた次元への動的なリンクが含まれます。たとえば、エンティティまたはセグメント次元の世代 0 から 3 がプランニング・ユニット階層に自動的に追加されます。次元で変更が発生した場合、プランニング・ユニット階層は簡単に更新されます。
- プランニング・ユニット階層をインポートおよびエクスポートします。
- シナリオおよびバージョン別に異なるプランニング・ユニット階層を作成します。たとえば、予算シナリオでは、部門、勘定科目、製品を含む大きなプランニング・ユニット階層を使用します。一方、予測では、より少ない承認レベルを含むより単純なプロセス組織を使用します。

プランニング・ユニット階層の作成

サブトピック

- [プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定](#)
- [プランニング・ユニット階層のメンバーの選択](#)
- [プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て](#)
- [グループ・ベースの承認について](#)

各プランニング・ユニット階層では、エンティティがプライマリの次元です。エンティティ次元にメンバーを追加する際、新しいメンバーが承認プロセスの一部になるかどうかは、作成した追加ルールによって決まります。管理者は、プランニング・ユニット階層構造の例外として、メンバーを階層に追加することもできます。

▶ プランニング・ユニット階層を作成するには:

- 1 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
- 2 「作成」をクリックします。

注: 「承認次元」が「エンティティ」に設定されます。他の選択肢はありません。

- 3 どのエンティティ・メンバーが承認プロセスに追加されるかを決定する汎用ルールを作成します([254 ページの「プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定」](#)を参照してください)。
- 4 承認プロセスに追加するメンバーのプライマリ階層とサブ階層を選択します([256 ページの「プランニング・ユニット階層のメンバーの選択」](#)を参照してください)。
- 5 承認プロセスの各ステージの所有者と確認者を割り当て、プランニング・ユニットの移動パスを作成します([257 ページの「プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て」](#)を参照してください)。
- 6 「保存」をクリックします。

プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定

▶ プランニング・ユニット階層を設定するには、次の手順を実行します:

- 1 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
- 2 次のいずれかのアクションを行います:
 - 新しい階層を作成するには、「作成」をクリックします。
 - 既存の階層を編集するには、プランニング・ユニット階層を選択して、「編集」をクリックします。
- 3 「承認次元」を選択します。
- 4 「階層名」で、プランニング・ユニット階層名を入力します。

5 「オプション」: プランニング・ユニット階層の説明を入力します。

6 「承認の使用可能」で、次を選択します:

- **すべて**: すべてのプランニング・ユニットを承認プロセスに追加します。
- **なし**: デフォルトで、プランニング・ユニットを承認プロセスの対象に含めません。

プランニング・ユニットのグループまたは個別のプランニング・ユニットを承認プロセスの対象に含めるには、[256 ページの「プランニング・ユニット階層のメンバーの選択」](#)を参照してください。

- **カスタム**: 承認プロセスに含めるプランニング・ユニットを定義します。

個別のプランニング・ユニットおよび、親メンバーおよび世代の条件に基づくプランニング・ユニットを追加できます。[256 ページの「プランニング・ユニット階層のメンバーの選択」](#)を参照してください。

7 「承認テンプレート」で、次を選択します:

- 「ボトム・アップ」: ボトム・アップ予算策定を使用します([255 ページの「ボトムアップ予算策定」](#)を参照)。
- 「配分」: 配分予算策定を使用します([255 ページの「配分予算策定」](#)を参照)。
- 「フリー・フォーム」: フリーフォーム予算策定を使用します([256 ページの「フリーフォーム予算策定」](#)を参照)。

8 次のいずれかのアクションを行います:

- 「次へ」をクリックするか、「プライマリおよびサブ階層の選択」を選択して、プランニング・ユニット階層メンバーを選択します([256 ページの「プランニング・ユニット階層のメンバーの選択」](#)を参照してください)。
- 「保存」、「終了」の順にクリックして、変更を保存し、プランニング・ユニット階層を閉じます。

ボトムアップ予算策定

データはリーフ・メンバー・レベル(予算グループの子など)で入力され、データを組織階層にロール・アップすることで結合されます。予算策定を開始すると、データは各シナリオと各ユーザーに別々に移入されます。所有者はボトムアップ・モードでの承認の階層に従います。ユーザーはプランニング・ユニットに対して定義されたアクセス権限に基づいてデータを表示または編集できます。最上位の予算グループ所有者は、個別に承認された予算を最終集計予算に集計します。

配分予算策定

予算データが組織のリーフ・レベルで入力され、所有権が組織の最上位レベルで開始されます。所有権は次に、組織階層の下位へ配布されます。所有権が下位のレベルに到達すると、予算は承認プロセスを経て最上位に戻されて提出されます。予算管理、トランザクション管理、レポート作成に利用できるように最上位の予算グループ所有者が予算をレビュー、承認、およびロードします。

フリーフォーム予算策定

フリーフォーム予算策定を行う場合、リーフ・メンバーにデータが入力され、プランナは次の所有者をドロップダウン・リストから選択します。フリーフォーム予算策定モードでは、プランナは次の所有者をドロップダウン・リストから選択できます。この予算テンプレートを選択するのは、[254 ページの「プランニング・ユニット階層の作成」](#)で説明されている承認機能を使用しない場合にしてください。

プランニング・ユニット階層のメンバーの選択



▶ プランニング・ユニット階層のメンバーを選択するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

1. 「承認次元」から「次へ」を選択するか、「プライマリおよびサブ階層の選択」を選択して、プランニング・ユニット階層の定義を続行します。
2. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。プランニング・ユニット階層を選択し、「編集」、「プライマリおよびサブ階層の選択」の順に選択してメンバーを編集します。

注: プランニング・ユニット階層メンバーの選択中ならどの時点でも、「デフォルトの階層にリセット」をクリックして、プランニング・ユニット階層を「承認次元」ページで定義したデフォルトのメンバーシップにリセットできます。

2 プランニング・ユニット階層を表示する方法を定義します:



- 右クリックして、「展開」または「下をすべて展開」を選択し表示を展開します。
- 右クリックして、「縮小」または「下をすべて縮小」を選択し表示を縮小します。
- 存在するすべてのプランニング・ユニットを表示するには、「すべてのエンティティ」をクリックします。
- 使用可能なプランニング・ユニットのみを表示するには、「プランニング・ユニット」をクリックします。
- 「検索」では、「名前」、「別名」、または「両方」を選択します。「検索」に名前の一部またはすべてを入力してエンティティを検索してから、 をクリックしてプランニング・ユニット階層内で前方(下方向)に検索したり、 をクリックして後方(上方向)に検索できます。
- 複数ページのプランニング・ユニット階層内のページ間で移動するには、「ページ」にページ番号を入力して「実行」をクリックするか、「開始」(最初のページ)、「前へ」(前のページ)、「次へ」または「終了」(最後のページ)をクリックします。

3 オプション: 承認プロセスの対象としてのデフォルト設定に含まれないプランニング・ユニットの場合、プランニング・ユニット名の左側にあるボックスを選択することで、このプランニング・ユニットを承認プロセスの対象に含めることができます。

4 オプション: プランニング・ユニット名を右クリックして承認プロセスのサブ階層メンバーを定義し、1つのオプションを選択します:

- 「子を含む:」 プランニング・ユニットの子を含めます。
- 「メンバーを含む:」 プランニング・ユニットのみを含め、子孫は含めません。
- 「すべての子孫を含む:」 プランニング・ユニットのすべての子孫を含めます。
- 「世代を含む:」 プランニング・ユニットの1つ以上の世代を含めます。プロンプトが表示された後、含める世代を指定します。
- 「子を除外:」 プランニング・ユニットの子を除外します。
- 「メンバーを除外:」 プランニング・ユニットのみを除外し、子孫は除外しません。
- 「すべての子孫を除外:」 プランニング・ユニットのすべての子孫を除外します。
- 「世代を除外:」 プランニング・ユニットの1つ以上の世代を除外します。プロンプトが表示された後、除外する世代を指定します。

5 「オプション」: 承認プロセスの対象に含まれているプランニング・ユニットにセカンダリ次元を追加して、粒度を上げることができます:

1. 「次元」から次元を選択します。
2. 「親メンバー」で、 をクリックしてメンバー選択ウィンドウを表示し、その次元の親メンバーとしてメンバーを1つ選択します。
3. 「相対的な世代」で、含める親メンバー世代を指定します。
世代を追加すると、この世代のすべてのメンバーが承認プロセスに追加されます。
4. 検索条件を満たすプランニング・ユニット階層に、新たに追加されたメンバーを自動的に含めるには、「自動組込み」を選択します。
5. 「オプション」: 含めるメンバーを絞り込むには、プランニング・ユニットの「選択したメンバー」で  をクリックします。メンバーを削除するには、メンバーの横にあるチェック・ボックスの選択を解除します。

6 次のいずれかのアクションを行います:

- 「次へ」をクリックするか、「所有者の割当て」を選択して、プランニング・ユニット所有者を指定します (257 ページの「[プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て](#)」を参照してください)。
- 「保存」、「終了」の順にクリックして、変更を保存し、プランニング・ユニット階層を閉じます。

プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て


プランニング・ユニットの所有権は、プランニング・ユニットの親から継承されます。プランニング・ユニットの確認者も継承されます。また、プランニング・

ユニットが継承する所有者と確認者でなく、プランニング・ユニットの所有者と確認者を明示的に指定して所有者と確認者を割り当てることもできます。


▶ プランニング・ユニットの所有者と確認者を割り当てるには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

1. 「プライマリおよびサブ階層の選択」から「次へ」を選択するか、「所有者の割当て」を選択して、プランニング・ユニット階層の定義を続行します。
2. 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。プランニング・ユニット階層を選択し、「編集」、「所有者の割当て」の順に選択してプランニング・ユニット所有者を指定します。


2 プランニング・ユニットを選択し、「所有者」で  をクリックして所有者を選択します。


1つのプランニング・ユニットに設定できる所有者は1人のみです。ユーザーまたはグループのいずれかが所有者になることができます。「ユーザー」タブを選択し、個別のユーザーを所有者として割り当てます。「グループ」タブを選択し、グループを所有者として割り当てます。[259 ページの「グループ・ベースの承認について」](#)を参照してください。

3 「確認者」で  をクリックしてプランニング・ユニットの確認者を選択します。

確認者には、個々のユーザー、単一のグループまたは複数のグループを指定できます。「ユーザー」タブを選択し、個別ユーザーを確認者として割り当てます。「グループ」タブを選択し、単一のグループまたは複数のグループを確認者として割り当てます。[259 ページの「グループ・ベースの承認について」](#)を参照してください。

注: 「ボトム・アップ」または「配分」テンプレートを使用し、確認者が個別ユーザーの場合、確認者はプランニング・ユニットをレビューする順序で選択します。リスト内の最初の確認者が、プランニング・ユニットを処理する最初のユーザーです。最初の確認者がプランニング・ユニットを移動または送信すると、選択した2番目のユーザーがプランニング・ユニットの所有者になり、それ以降も、作成した確認者のリストによって順序が決まります。

4 「移動パス」で  をクリックし、プランニング・ユニットの移動パスを表示し、このパスが正しいかどうかを確認してエラーを修正します。

5 「ユーザーに通知」で  をクリックし、プランニング・ユニットがユーザー間で移動されるたびに通知するユーザーを選択します。

6 「オプション」: 他のプランニング・ユニットの所有者または確認者を変更するには、それらのユニットに対して手順2から5を繰り返します。

7 処理を保存して続行する場合は「保存」をクリックし、処理を保存してプランニング・ユニット階層を閉じる場合は「終了」をクリックします。

グループ・ベースの承認について

プランニング・ユニット所有者の割当てでは、個別ユーザーまたはグループを割り当てることができます。プランニング・ユニット確認者の割当てでは、個別ユーザー、1つのグループまたは複数のグループを割り当てることができます。

グループの所有者としての割当て

1人のユーザーまたは1つのグループのみがプランニング・ユニットの所有者として割り当てられます。グループ内では、任意のユーザーが所有者になれますが、所有者になれるのは一度に1人のユーザーのみです。所有者として割り当てられたユーザーのみがアクションを実行できます。他のグループ・メンバーは、現在の所有者から自分に所有権を移行できます。所有者として割り当てられているユーザーがいない場合、グループ内の任意のユーザーが、所有権を要求することなく、グループを代表してアクションを実行できます。

グループ(複数可)の確認者としての割当て

個別ユーザーを確認者として選択する場合、すべてのユーザーが承認する必要があり、承認はユーザーが入力した順番に従う必要があります。グループ(複数可)を確認者として選択する場合、グループ内のユーザーは確認者になることができ、次のレベルに移行できます。

複数の確認者を入力する方法の例を次に示します:

例 1

```
North America - Bill
USA - Nick, Sandy, Kim
CA - John
```

承認経路は、John、Nick、Sandy、Kim、Bill です。

例 2

```
North America - Bill
USA - {Group A}
CA - John
```

承認経路は、John、グループ A の任意のユーザー、Bill です。

例 3

```
North America - {Group B}, Bill
USA - Susan, {Group A}
CA - John
```

承認経路は、John、Susan、グループ A の任意のユーザー、グループ B の任意のユーザー、Bill です。

例 4





North America - {Group B}, Bill
USA - Susan, {Group A}
CA - John

**A validation rules indicates that if New Hires > 4, then before USA, set {Group HR} as reviewer.

CA プランニング・ユニットに対し条件が TRUE の場合、承認経路は、John、グループ HR の任意のユーザー、グループ A の任意のユーザー、グループ B の任意のユーザー、Bill です。


プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て

予算プロセス中、Q1 や FY10 などの様々なシナリオについて計算が実行されます。シナリオごとに、Initial や Final などの様々なバージョンについて計算を実行できます。予算プロセスを開始する前に、予算プロセスに含まれるシナリオとバージョンの組合せに対してプランニング・ユニット階層を割り当てます。

- ▶ プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せを割り当てるには:
 - 1 「管理」、「承認」、「シナリオおよびバージョンの割当て」の順に選択します。
 - 2 「オプション」: 目的のプランニング・ユニットに割り当てられているシナリオとバージョンを表示するには、そのユニットの横にある  をクリックします。リストを閉じるには、 をクリックします。
 - 3 シナリオとバージョンの割当てを追加します。
 1. プランニング・ユニットの「アクション」列の  をクリックします。
 2. 「シナリオ」列で「選択」をクリックしてから、プランニング・ユニット階層に関連付けるシナリオを選択します
 3. 「バージョン」列で「選択」をクリックしてから、選択したシナリオに関連付ける 1 つ以上のバージョンを選択します。
 4. 「OK」をクリックします。新規割当て行が表示されます。
 - 4 「オプション」: シナリオとバージョンの割当てを削除するには、 をクリックします。

- 5 「保存」をクリックし、シナリオとバージョンの割当てを保存して続行するか、「変更の取消し」をクリックして、直前の保存以降の変更を元に戻します。

プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択

- ▶ プランニング・ユニット階層のシナリオおよびバージョンを選択するには、次の手順を実行します:
- 1 「ツール」、「承認の管理」の順に選択します。
 - 2 「シナリオ」で、シナリオを選択します。
 - 3 「バージョン」で、バージョンを選択します。
 - 4 「実行」をクリックし、選択したシナリオとバージョンに定義されているプランニング・ユニット階層を表示します。
 - 5 「表示」で、「ツリー・ビュー」をクリックしてプランニング・ユニットを階層として表示するか、「フラット・ビュー」をクリックしてプランニング・ユニットをリストとして表示します。
 - 6 「オプション」: この階層のプランニング・ユニットを所有している場合、「自身を選択」を選択して、それらを選択します。
 - 7 各プランニング・ユニットに対し、次が表示されます:
 - 「プラン・サイクル」(ツリー・ビューのみ): プランニング・ユニットが開始されているか、また予算プロセスの対象に含まれているかどうかを表示します
 - 「承認ステータス」: たとえば「最初のパス」
 - 「サブステータス」
 - 「現在の所有者」
 - 「場所」
 - 「パス」で、 をクリックして、可能性のある移動パスを表示します
 - 「アクション」で、「詳細」をクリックしてプランニング・ユニットの詳細を表示し、プランニング・ユニットの注釈を追加または編集します

プランニング・ユニット階層の編集

- ▶ プランニング・ユニット階層を編集するには:
- 1 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
 - 2 編集するプランニング・ユニット階層を確認します。
 - 3 「編集」をクリックします。
 - 4 変更内容に応じて適切なタブを選択します(たとえば、階層でプランニング・ユニットの所有者を編集する場合は「所有者の割当て」を選択します)。
 - 「承認次元」

プランニング・ユニット階層の説明または承認のデフォルトのスコープを変更するには、[254 ページの「プランニング・ユニット階層の名前、スコープ、テンプレートの設定」](#)を参照してください。

- 「プライマリおよびサブ階層の選択」

承認からメンバーを選択または削除するには、[256 ページの「プランニング・ユニット階層のメンバーの選択」](#)を参照してください。

- 「所有者の割当て」

プランニング・ユニットの所有者または確認者を変更するには、[257 ページの「プランニング・ユニットの所有者と確認者の割当て」](#)を参照してください

- 「使用状況」

プランニング・ユニット階層を参照する Planning オブジェクト(データ検証ルールまたはシナリオおよびバージョン割当て)を表示するには、[262 ページの「プランニング・ユニット階層の使用状況の表示」](#)を参照してください

5 完了後、「保存」をクリックします。

操作するプランニング・ユニット階層のシナリオおよびバージョンを選択するには、[261 ページの「プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの選択」](#)を参照します。

プランニング・ユニット階層の削除

プランニング・ユニット階層が、データ検証ルールやシナリオおよびバージョン割当てなどの他の Planning オブジェクトにより参照されていない場合には削除できます。「使用状況」タブは選択したプランニング・ユニット階層を参照するオブジェクトを表示し、そのオブジェクトへリンクしているので、階層から関連付けを解除できます。

▶ プランニング・ユニット階層を削除するには:

- 1 「管理」、「承認」、「**プランニング・ユニット階層**」の順に選択し、プランニング・ユニット階層リストを表示します。
- 2 削除するプランニング・ユニット階層を選択して、「削除」をクリックします。
- 3 削除を確認するには、「OK」をクリックします。

他の Planning オブジェクトにより参照されるプランニング・ユニット階層を選択すると、エラー・メッセージが表示されます。プランニング・ユニット階層を参照する Planning オブジェクトを表示および編集するには、[262 ページの「プランニング・ユニット階層の使用状況の表示」](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層の使用状況の表示

プランニング・ユニット階層には、シナリオおよびバージョン割当て、データ検証ルールなど、フォームに定義された依存関係がある可能性があります。プラン

ニング・ユニット階層に依存関係がある場合、その依存関係が削除されるまで階層は削除できません。「使用状況」タブでは、プランニング・ユニット階層の依存関係を表示し、フォームまたはシナリオおよびバージョン割当てにリンクすることができるので、必要に応じて、依存関係を削除できます。

▶ プランニング・ユニット階層の使用状況を表示するには:

- 1 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択します。
- 2 プランニング・ユニット階層を選択して「編集」をクリックし、「使用状況」を選択して、プランニング・ユニット階層の依存関係を表示します。
- 3 「フォーム」を選択し、関連付けられたデータ検証ルールを表示します:
 - 関連付けられたデータ検証ルールがない場合、メッセージが表示されません。
 - データ検証ルールが関連付けられている場合、フォームにリストされます。ルールのハイパーリンクをクリックすると、フォームが新しいタブに編集モードで表示されます。その後、データ検証ルールを更新または削除して、プランニング・ユニット階層から関連付けを解除できます。[221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」](#)を参照してください。
- 4 「シナリオおよびバージョンの割当て」を選択して、関連付けられたシナリオおよびバージョン割当てを表示します:
 - 関連付けられたシナリオおよびバージョン割当てがない場合、メッセージが表示されます。
 - シナリオおよびバージョン割当てが関連付けられている場合、シナリオにリストされます。バージョンのハイパーリンクをクリックすると、割当てが新しいタブに表示されます。その後、シナリオおよびバージョン割当てを削除して、プランニング・ユニット階層から関連付けを解除できます。[260 ページの「プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョンの組合せの割当て」](#)を参照してください。
- 5 手順3または4で依存関係を削除したら、「使用状況」タブの「リフレッシュ」をクリックして、残りの依存関係を表示します。
- 6 プランニング・ユニット階層を削除する場合、すべての依存関係が削除されるまで手順3、4、5を繰り返します。

すべての依存関係がプランニング・ユニット階層から削除されたら、階層を削除できます。[262 ページの「プランニング・ユニット階層の削除」](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層の名前変更

プランニング・ユニット階層の名前を変更できます。

▶ プランニング・ユニット階層の名前を変更するには:

- 1 「管理」、「承認」、「プランニング・ユニット階層」の順に選択し、プランニング・ユニット階層リストを表示します。

- 2 名前を変更するプランニング・ユニット階層を選択して、「名前変更」をクリックします。
- 3 ダイアログ・ボックスにプランニング・ユニット階層の新しい名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックして新しい名前を受け入れます。

プランニング・ユニット階層の同期

プランニング・ユニット階層で使用されている次元メンバーを追加、削除または変更する場合、影響を受けるプランニング・ユニット階層をこの変更と同期させる必要があります。プランニング・ユニット階層のリストを表示する場合、各プランニング・ユニット階層のエントリには、最新の変更がプランニング・ユニット階層に反映されているかどうかが表示されます。この手順を使用して、プランニング・ユニット階層を次元メンバーの変更と同期させます。

注： 次元メンバーを追加する場合、新規メンバーがプランニング・ユニットとして追加されるのは、プランニング・ユニット階層の組込みルールに指定されている基準をこれらが満たす場合のみです。たとえば、追加したエンティティが第4世代のエンティティであるときに、第1世代から第3世代までがプランニング・ユニットであると組込みルールに指定されている場合、新規エンティティはプランニング・ユニットとして追加されません。ただし、このエンティティが第3世代のメンバーである場合は、プランニング・ユニット階層が次回に編集、保存または同期されるときに、プランニング・ユニットとして追加されます。

▶ プランニング・ユニット階層を変更と同期させるには:

- 1 「管理」、「承認」の順に選択します。
- 2 「プランニング・ユニット階層」を選択します。「同期済」列では、プランニング・ユニット階層に次のようなラベルが付きます:
 - 「同期済」 - 変更はプランニング・ユニット階層と同期されます
 - 「非同期」 - 変更はプランニング・ユニット階層と同期されません
 - 「未同期の従属」 - 変更は、プランニング・ユニット階層と同期されますが、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting では、関連する意思決定パッケージのプランニング・ユニット階層と同期されません
 - 「user によってロック済」 - ユーザーがプランニング・ユニット階層を編集または同期中です

注： プランニング・ユニット階層リストを表示した後、ユーザーによってプランニング・ユニット階層の編集または同期が開始された場合、プランニング・ユニット階層リストでは、このプランニング・ユニット階層について「ロック済」とは表示されません。このプランニング・ユニット階層を同期しようとしても同期は行われず、編集中であることを示すエラー・メッセージが表示されます。

- 3 「同期済」で「未同期」としてリストされているプランニング・ユニット階層を選択してから、「同期」をクリックします。

プランニング・ユニット階層に変更が適用され、次に、プランニング・ユニット階層に定義されている組込みルールに従ってプランニング・ユニットのリストが更新されます。

注： 別のユーザーによる編集または同期中であるプランニング・ユニット階層を変更と同期させることはできません。

プランニング・ユニット階層のエクスポート

プランニング・ユニット階層をエクスポートする場合、プランニング・ユニット階層情報を含むファイルを作成します。ファイル・フォーマットの詳細は、[97 ページの「アウトライン・ロード・ユーティリティの操作」](#)を参照してください。このファイルを作成した後、そのコンテンツを既存のプランニング・ユニット階層にコピーできます([265 ページの「プランニング・ユニット階層のインポート」](#)を参照)。

▶ プランニング・ユニット階層をエクスポートするには:

- 1 「管理」、「承認」、「ファイル・ベースのインポート/エクスポート」の順に選択します。
- 2 「プランニング・ユニット階層のエクスポート」を選択します。
- 3 「既存のプランニング・ユニット階層名」から、エクスポートするプランニング・ユニット階層を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。
- 5 「保存」ダイアログが表示された後、エクスポート・ファイルを選択した場所に保存します。

プランニング・ユニット階層のインポート

プランニング・ユニット階層には、プランニング・ユニット階層インポート・ファイルのコンテンツを移入できます。このインポート・ファイルは、既存のプランニング・ユニット階層をエクスポートした結果です。[265 ページの「プランニング・ユニット階層のエクスポート」](#)を参照してください。

プランニング・ユニット階層情報をインポートしても、プランニング・ユニット階層は作成されません。エクスポート・ファイルから移入されたプランニング・ユニット階層が存在し、少なくともインポート前の名前を持っている必要があります。プランニング・ユニット階層のロードでは最初にプランニング・ユニット階層のすべてのメンバーが削除され、入力ファイルに指定された各メンバーが新規メンバーとして追加されます。プランニング・ユニット階層のロードでは、既存のメンバーが入力ファイルで指定されていなければそのメンバーおよびその子が階層から削除されるので注意してください。

▶ プランニング・ユニット階層をインポートするには:

- 1 「管理」、「承認」、「ファイル・ベースのインポート/エクスポート」の順に選択します。
- 2 「プランニング・ユニット階層のインポート」を選択します。

- 3 「既存のプランニング・ユニット階層名」から、エクスポートした情報を受け取るプランニング・ユニット階層を選択します。

注： インポート後のプランニング・ユニット階層には、移動パスを決定するために定義されている所有者、確認者およびルールが追加されます。

- 4 「所有者を含むプランニング・ユニット階層」で「参照」をクリックし、インポートするエクスポートされたプランニング・ユニット階層ファイルを選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

インポートに成功しましたというメッセージが表示された場合は、エクスポート済ファイル内のプランニング・ユニット階層情報は、「既存のプランニング・ユニット階層名」で選択したプランニング・ユニット階層に正常にコピーされたことになります。

「インポートに失敗しました。一部のアイテムがインポートされませんでした。」というメッセージが表示された場合は、「詳細」をクリックしてログ・ファイルを表示します。エラーを修正し、プランニング・ユニット階層のインポートを再試行します。

プランニング・ユニットの移動パス

サブトピック

- [プランニング・ユニットの移動パスの変更](#)
- [プランニング・ユニットの移動パスのデータ検証ルールの設計の考慮事項](#)

プランニング・ユニットは、プランニング・ユニットごとに割り当てる所有者と確認者、およびプランニング・ユニット階層内のその親に基づいて人から人へ、また部署から部署へ移動します。

プランニング・ユニット階層の移動パスに影響を及ぼす方法には、次の2つがあります：


- 承認アクション(移動や拒否など)を使用してプランニング・ユニットの所有者と確認者およびその子孫を変更します
- データ検証ルールを使用して、プランニング・ユニットの移動パスの変更が必要かどうかを決定します



プランニング・ユニットの移動パスの変更

プランニング・ユニットの所有者と確認者およびその親を選択する場合、プランニング・ユニットの移動パスを設定します(266 ページの「[プランニング・ユニットの移動パス](#)」を参照)。ただし、場合によっては、予算計算結果により、次に予算を確認する担当者を変更されます。たとえば、販売グループの給与が前年度の予算を10%超多い場合、次の確認者以外の担当者による承認が必要になることがあります。このような場合、予算のリダイレクトを自動化するには、これらの例外がないかをテストするデータ検証ルールに条件およびアクションを追加してから、必要に応じて移動パスを変更します。また、データ検証ルールを使用するこ

とにより、プランニング・ユニットにデータ・エラーがあるときにプランニング・ユニットが次の確認者に移動するのを阻止できます。

▶ プランニング・ユニットの移動パスを変更するには:


- 1 データ検証ルールを作成または選択します(221 ページの「データ検証ルールの作成および更新」を参照)。
- 2 「データ検証ルール・ビルダー」で、 をクリックして移動パス条件を作成し、予算計算がこれらの条件を満たさないときに実行するアクションを指定します。
- 3 次のいずれかのアクションを選択します:
 - 「移動パスの更新」: 設定した条件がトリガーされたときに確認者または所有者を移動パスに追加する移動パス条件を作成します。
 - 「移動しない」: プランニング・ユニットが次の確認者に移動するのを阻止します。通常、このアクションは予算内に無効なデータがあることを示します。
- 4 「セルの処理」ダイアログ・ボックスの「承認」の下で、「追加」をクリックして移動パス条件を追加します。

移動パス条件は、リストされている順序で処理されます。移動パス条件をリスト内で上下に移動するには、 および  を使用します。

5 「オプション」: 移動パス条件を複製するには:

1. 移動パス条件を選択し、「コピー」をクリックします。
2. リスト内でコピーした移動パス条件より前にある移動パス条件を選択し、「貼付け」をクリックして、コピー済移動パス条件を追加します。


6 「オプション」: 移動パス条件を削除するには、「削除」をクリックします。

7 「プランニング・ユニット階層」および「プランニング・ユニット」で、 をクリックし、移動パス条件が影響するプランニング・ユニット階層およびプランニング・ユニットを選択します。

8 「移動パスの条件」で、「移動パスの条件」で選択したプランニング・ユニットについて移動パスを変更する位置を指定します。選択:

1. 「位置」で、「プランニング・ユニット」で選択したプランニング・ユニットについて移動パスを変更する位置を指定します。選択:
 - 「前」: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達する前に、代替の所有者または確認者を挿入します。
 - 「後」: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達した後で、代替の所有者または確認者を挿入します。
 - 「前および後」: 「移動パスの条件」で指定したプランニング・ユニットに所有権が到達する前または後に、代替の所有者または確認者を挿入します。

注： データ検証ルールに移動パス条件を追加すると、プランニング・ユニット内の定義されている移動パスの上に、プランニング・ユニットの所有権の可能な変更が、オプションのパスとして表示されます。この表示は、パスを変更できる位置と、定義されているパスに代替パスが再結合する方法を示します。

2. 「移動パスの条件」の「プランニング・ユニット」列で、 をクリックし、「位置」で選択したアクションで変更するプランニング・ユニットを選択します。


注： 選択したプランニング・ユニットは、直前の手順で選択したプランニング・ユニットの祖先である必要があります。祖先でないプランニング・ユニットを選択すると、プランニング・ユニット階層の検証時に移動パス条件が評価されません。

- 9 「割当て」列で、代替の各所有者および確認者の役割とユーザー・タイプ、およびユーザーまたは UDA と、ルールの例外が発生したときに通知対象とするユーザーを選択します。

1. 「役割」で、次を選択します：
 - 代替の所有者を選択するには「所有者」
 - 代替の確認者を選択するには「確認者」
 - 通知されるユーザーを選択するには「通知されたユーザー」
2. 「タイプ」で、次を選択します：
 - 代替ユーザーを指定するには「ユーザー名」
 - 次元を選択し UDA に割り当てられた接頭辞を入力するには「UDA から」
3. 「ユーザー」で、次を指定します：
 - 「ユーザー名」には、代替ユーザーの名前を指定、またはユーザー・セレクタから1つを選択
 - 「UDA から」には、「次元の選択」ドロップ・ダウンから次元を選択してから、UDA がユーザー名を含む(たとえば ProdMgr:)ことを示す、UDA で使用された接頭辞を指定

注： スペースも含めて、UDA の作成時に割り当てられたのと同じ接頭辞が指定されたことを確認します。たとえば、接頭辞とユーザー名の間スペースがある場合(ProdMgr Kim)、ProdMgr の後にスペースがあることを確認します。

- 10 **オプション:** プランニング・ユニットの移動パスの変更に関するユーザーに対するメッセージを指定します:

1. 次で、 をクリックします：
 - 「送信者メッセージ」: 移動パスの変更時にプランニング・ユニットを移動するユーザーに送信する電子メールのメッセージ・テキストを入力します。

- 「確認者メッセージ」: ルールの例外のためにプランニング・ユニットを受信して確認するユーザーに送信する電子メールのメッセージ・テキストを入力します。

2. 「OK」をクリックし、メッセージを保存します。

入力したテキストは、プランニング・ユニットがステータスを変更する際に送信されるメッセージに追加されます。

11 「OK」をクリックして移動パス条件を保存し、データ検証ルールの作成に戻ります。

プランニング・ユニットの移動パスのデータ検証ルールの設計の考慮事項

プランニング・ユニットの移動パスに影響するルールを設計する場合、これらのルールが評価および適用される順序を理解する必要があります。データ検証ルールの設計方法および予期される結果の詳細は、[第8章「データ検証の管理」](#)を参照してください。

タスク・リストの管理

サブトピック

- [タスク・リスト・フォルダの作成](#)
- [タスク・リストの名前変更](#)
- [タスク・リスト・フォルダの名前変更](#)
- [タスク・リスト・フォルダの移動](#)
- [タスク・リスト・フォルダの削除](#)
- [タスク・リストの作成](#)
- [タスク・リストへの指示の追加](#)
- [タスクの追加と定義](#)
- [タスク・リストへのタスクの追加](#)
- [タスク・リストの編集](#)
- [PlanningWeb ページへのタスクのリンク](#)
- [タスク・リストへのアクセス権の割当て](#)
- [タスク・リストのインポートとエクスポート](#)

タスク・リストはタスク、手順および期限を一覧表示し、プランニング・プロセスを通してユーザーをガイドします。管理者や対話型ユーザーはタスクやタスク・リストを作成、管理します。

▶ タスク・リストを管理するには:

- 1 「管理」、「管理」の順に選択してから、「タスク・リスト」を選択します。
- 2 「タスク・リストの管理」ページを使用し、タスク・リスト・フォルダを構成してタスク・リストを作成および管理します。

フォームに移動パス・ルールが含まれていれば、Validation Reports フォルダの検証レポートを表示できます。

タスク・リスト・フォルダの作成

▶ タスク・リスト・フォルダを作成するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、タスク・リスト・フォルダを作成するフォルダを選択します。
- 3 「作成」をクリックします。
- 4 ダイアログ・ボックスにタスク・リストの名前を入力し、「OK」をクリックします。

タスク・リストの名前変更

▶ タスク・リストの名前を変更するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、名前を変更するタスク・リストの入っているフォルダを選択します。
- 3 タスク・リストを選択します。
- 4 「アクション」、「名前変更」の順に選択します。
- 5 新規タスク・リストの名前を入力し、「OK」をクリックします。

タスク・リスト・フォルダの名前変更

▶ タスク・リスト・フォルダの名前を変更するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、名前を変更するフォルダを選択します。
- 3 「アクション」、「名前変更」の順に選択します。
- 4 新規「タスク・リスト」の名前を入力し、「OK」をクリックします。

タスク・リスト・フォルダの移動

▶ タスク・リスト・フォルダを移動するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、移動するフォルダを選択します。

タスク・リスト・フォルダは移動できません。

- 3 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、「移動」をクリックします。
- 4 宛先フォルダを選択し、「OK」をクリックします。

タスク・リスト・フォルダの削除

▶ タスク・リスト・フォルダを削除するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、削除する空のフォルダを選択します。
タスク・リスト・フォルダを削除することはできません。
- 3 「削除」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。
追加のフォルダを含んでいるフォルダを選択する場合、エラー・メッセージが表示されます。

タスク・リストの作成

タスク・リストはユーザーのためにタスクの組織グループを一覧表示します。タスクを作成する前に、タスク・リストを作成する必要があります。

▶ タスク・リストを作成するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、タスク・リストを作成するフォルダを選択します。
- 3 「タスク・リスト」領域で、「アクション」を選択し、「作成」を選択します。
- 4 タスク・リストの名前を入力し、「OK」をクリックします。
- 5 タスク・リストを定義するには、次を参照してください。
 - 271 ページの「タスク・リストへの指示の追加」
 - 272 ページの「タスクの追加と定義」

タスク・リストへの指示の追加

▶ タスク・リストへ指示を追加するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。

- 2 「タスク・リスト・フォルダ」領域で、変更するタスク・リストを含んでいるフォルダを選択し、タスク・リストを選択します。
- 3 「タスク・リスト」で変更するタスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
- 4 「タスク・リストの編集」、「指示」をクリックします。
- 5 タスク・リストの手順を入力します。
- 6 「保存」と「閉じる」をクリックします。

タスクの追加と定義

タスク・リストを作成した後で、フォームでのデータの入力、必要なビジネス・ルールの実行など、タスクを追加、定義できます。[272 ページの「タスク・リストへのタスクの追加」](#)を参照してください

タスク・リストへのタスクの追加

タスクの完了日とアラートを設定できます。アラートはタスク・リストで色付きの丸として表示されます。

- 緑色: 予定どおり
- 黄色: 期限が近づいています
- 赤色: 遅滞

電子メールのメッセージを設定することもできます。たとえば、タスクが期限までに完了しなかったことをユーザーに警告できます。アラート・メッセージは設定された「アラート日」の後に送信され、タスクの期限に達するまで繰り返されます。電子メール・サーバーを構成する必要があります([289 ページの「システム設定の指定」](#)を参照)。

▶ タスク・リストへタスクを追加するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[269 ページの「タスク・リストの管理」](#)を参照してください。
- 2 タスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「タスク・リストの編集」を選択します。
- 3 「アクション」を選択して、「子の追加」を選択します。
- 4 「タスクの詳細」で、「タスク」にタスク名を入力します。
- 5 「タイプ」でタスクのタイプを選択します。
 - 「URL」: 指定された URL を開きます
 - 「フォーム」: フォームを開きます
 - 「ビジネス・ルール」: 指定したビジネス・ルールを起動します
 - 「承認の管理」: 指定されたシナリオとバージョンでレビュー・プロセスを開始します

- 「ジョブ・コンソール」：「ジョブ・コンソール」を開き、現在のユーザーについて、指定されたジョブ・ステータスとジョブ・タイプのジョブのリストを表示します
- 「バージョンのコピー」：「バージョンのコピー」を使用して、指定されたソース・バージョンと宛先バージョンに関するサポート詳細、注釈、セル・テキスト、セル・ドキュメントなど現在のフォームのデータをコピーします

6 「タスク・タイプ・プロパティ」でタスクのプロパティを設定します:

表 61 タスク・プロパティの設定

タスクのタイプ	アクション
「URL」	このタスクに関連付けるため、 <code>http://www.company_name.com</code> など完全に認可された URL を入力します。オプションで、「シングル・サインオンの使用」を選択すると、シングル・サインオンを受け付ける別の製品の URL をユーザーが開けるようになります(Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照)。Financial Reporting に EPM Workspace でリンクする場合には、シングル・サインオンは必要ありません。かわりに、リンクする ObjectID を含めます(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace Administrator's Guide を参照)。
「フォーム」	「フォーム・フォルダ」として、このタスクに関連付けられたフォームを含んでいるフォルダを選択します。「フォーム」には、ユーザーが完了するフォームを選択します。 オプション: タスクを最初に開いたときデフォルトとして表示するメンバーを各次元から選択するには、「ページ・メンバーのデフォルト設定」を選択します。このオプションを選択してから、ページ次元のメンバーを選択できます。デフォルトのページ・メンバーは、ユーザーがフォームを更新し、別のセッションでタスクに戻るまで適用されます。デフォルトのページ・メンバーが設定されている場合、各セッションで最後に使用された設定がこれらのデフォルトによって上書きされます。
「ビジネス・ルール」	「プラン・タイプ」として、実行するビジネス・ルールに関連付けられたプラン・タイプを選択します。「ビジネス・ルール」には、実行するビジネス・ルールを選択します。
「承認」	「シナリオ」と「バージョン」には、ユーザーが作業するシナリオとバージョンを選択します。
「ジョブ・コンソール」	現在のユーザーについて、指定された「ジョブ・タイプ」と「ステータス」のジョブのリストを表示するタスクを作成します。
「バージョンのコピー」	現在のフォームのデータのバージョンをコピーするタスクを作成する場合に、次の情報を指定します: <ul style="list-style-type: none"> ● 「シナリオ」 ● 「コピー元」 ● 「コピー先」

7 オプション: タスクの期限を入力するには、「期限」を選択して次を選択します:

1. 月、日、年。(日付の表示フォーマットは Planning プリファレンスで変更できます。289 ページの「システム設定の指定」を参照してください。)
2. 時、分および AM または PM。

8 オプション: 未完のタスクについて電子メールのメッセージを送信するには、「期限」を選択して、次を実行します:

1. 「次毎に繰り返し」を選択して、値を入力します。
 2. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
- 9 オプション:** アラート日の後で期限前に電子メールのメッセージを送信するには、「アラート」を選択して、次を実行します:
1. 月、日、年、時、分およびAMかPMを選択し、メッセージの送信を開始する日付と時間を設定します。
 2. 「アラート」領域で「次毎に繰り返し」を選択して、値を入力します。
 3. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
- 10 オプション:** タスクの完了をプライマリ・タスクの完了に依存させるには、「依存関係」を選択します。
- 11 オプション:** 「手順」をクリックして、タスクを完了する方法を説明する情報を入力します。
- 12** 「保存」、「OK」の順にクリックします。

タスク・リストの編集

サブトピック

- [タスクの編集](#)
- [タスクのコピー](#)
- [タスクの移動](#)
- [タスク・リストの移動](#)
- [タスク・リストの順序の変更](#)
- [タスク・リストの消去](#)
- [タスクの削除](#)
- [タスク・リストの削除](#)

「タスク・リストの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、タスク・リストを更新できます。

タスクの編集

「タスクの編集」ダイアログ・ボックスを使うと、タスクのタイプ、手順、期限とアラート日および電子メール通知メッセージを変更できます。

▶ タスクを編集するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[269 ページの「タスク・リストの管理」](#)を参照してください。
- 2 タスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
- 3 タスクを選択し、「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
- 4 「タスクの編集」では:
 - タスク名を変更します。
 - 別のタスク名を選択します。

- URL: 指定された URL を開きます
 - フォーム: フォームを開きます
 - ビジネス・ルール: 指定したビジネス・ルールを起動
 - 承認の管理: 指定されたシナリオとバージョンでレビュー・プロセスを開始します
 - 記述的: ユーザーが行う必要があるアクションを説明
 - ジョブ・コンソール: 指定したジョブ・タイプおよびステータスについて現在のユーザーのジョブをリストします
 - バージョンのコピー: 現在のフォームからデータをコピーする「バージョンのコピー」を開きます
- 5 「手順」で、タスクを完了するための手順を変更します。
 - 6 「オプション」: タスクの期限を入力するには、「期限」を選択して、ユーザーがタスクを完了しなければならない期限日と時刻を入力します。
 - 7 「オプション」: 期限までにタスクが完了しない場合に電子メールでメッセージを送信するには、「期限」を選択します。
 1. 「次毎に繰り返し」を選択して、値を入力します。
 2. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
 - 8 「オプション」: アラート日と期限の間に電子メールで通知するには、「アラート」を選択します:
 1. 月、日、年、時刻および午前(AM)または午後(PM)を指定します。
 2. 「次毎に繰り返し」を選択して、値を入力します。
 3. 電子メールのリマインダーの頻度を選択します。
 - 9 「オプション」: プライマリ・タスクの完了によって、このタスクを完了させるには、「依存」を選択します。
 - 10 「オプション」: タスク・プロパティを設定するには、「プロパティ」をクリックします。
 - 11 「保存」をクリックします。
 - 12 「閉じる」をクリックします。

タスクのコピー

▶ タスク・リストをコピーするには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 タスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「編集」を選択します。
- 3 コピーするタスクを選択し、「名前を付けて保存」をクリックします。
- 4 新しいタスク・リスト名を入力して、「OK」をクリックします。
- 5 「閉じる」をクリックします。

タスクの移動

▶ タスクを移動するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 タスク・リストを選択し、「アクション」を選択して、「タスク・リストの編集」を選択します。
- 3 タスクを選択し、「アクション」を選択して、「タスクの編集」を選択します。
- 4 他のタスクの子となるタスクを選択します。
- 5 「アクション」を選択して、「切取り」を選択します
- 6 親タスクとなるタスクを選択します。
- 7 「アクション」を選択して、「貼付け」を選択します
- 8 「保存」と「閉じる」をクリックします。

▶ タスクの切取りおよび貼付けをするには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 タスク・リストを選択し、「編集」をクリックします。
- 3 タスクを選択してから、「切取り」をクリックします。
- 4 タスクを新しい位置に移動するには、移動するタスクを上に表示させます。
- 5 「貼付け」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。

タスク・リストの移動

▶ タスク・リストを移動するには:



- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。
- 2 移動するタスク・リストを含むフォルダを選択します。
- 3 タスク・リストを選択し、「移動」をクリックします。
- 4 宛先フォルダを選択します。
- 5 「OK」をクリックします。

タスク・リストの順序の変更

▶ タスク・リストを並べ替えるには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。

269 ページの「[タスク・リストの管理](#)」を参照してください。

- 2 タスク・リストを選択します。
- 3 クリック  または 

タスク・リストの消去

タスク・リストの完了後、選択したタスク・リスト内のすべてのタスクのステータス、期限日およびアラートをクリアできます。次以降のプランニング期間にタスクを再利用することができます。

アラートが使用可能になるのは、タスク・リストに期限日が含まれる場合のみです。タスク・リストを消去すると、期限日のチェック・ボックスの選択が解除されて、アラートが使用不可になります。ただし、期限日は削除されません。

▶ タスク・リストを消去するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「[タスク・リストの管理](#)」を参照してください。
- 2 消去するタスク・リストを含むフォルダを選択し、タスク・リストを選択して、「編集」をクリックします。
- 3 「消去」ドロップダウン・リストからオプションを選択します:
 - 「完了ステータス」:完了ステータスのみを消去します
 - 「期限とアラート」:タスクに設定されている期限日に基づいて、有効なアラートを消去します
 - 「両方」:完了ステータス、期限日、アラートを消去します。
- 4 「消去」ドロップダウン・リストの右側にある矢印をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

タスクの削除

▶ タスクを削除するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「[タスク・リストの管理](#)」を参照してください。
- 2 削除するタスクを含むフォルダとタスク・リストを選択し、「編集」をクリックします。
- 3 削除するタスクを選択し、「アクション」を選択して、「削除」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

タスク・リストの削除

▶ タスク・リストを削除するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。

269 ページの「[タスク・リストの管理](#)」を参照してください。

- 2 削除するタスク・リストを含むフォルダを選択し、タスク・リストを選択します。
- 3 「アクション」を選択して、「削除」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

PlanningWeb ページへのタスクのリンク

タスク・リストのタスクをアプリケーションのページにリンクするには、「ドキュメント・リンクのコピー」を使用します。Planning アプリケーションのページからタスクに URL アドレスをコピーおよび貼付けできます。タスク・リストのユーザーは、タスク・リスト内の Planning ページにアクセスできます。

▶ URL をタスク・リストにコピーするには:

- 1 タスクをリンクする Planning アプリケーションのページにアクセスします。
- 2 「ツール」、「リンクのコピー」の順に選択します。
- 3 タスクをリンクするタスク・リストを開きます。
- 4 コピーした Planning ページをリンクさせるタスクを選択して、「編集」を選択します。
- 5 「プロパティ」をクリックします。
- 6 ブラウザを使用して情報を貼り付けます。たとえば、Microsoft Internet Explorer のメニューで、「編集」、「貼付け」の順に選択します。
- 7 「保存」をクリックします。
- 8 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の割当て

タスク・リストを表示および変更できるユーザーを判別できます。デフォルトでは、タスク・リストのアクセス権の管理および割当てができるのは管理者です。

注: タスク・リストに割り当てられるということは、タスク・リスト内のタスクにアクセスして実行できることを意味します。他のユーザーにタスクを割り当てることはできません。

タスク・リストへのアクセス権の追加

▶ タスク・リストへアクセス権を割り当てるには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
269 ページの「[タスク・リストの管理](#)」を参照してください。
- 2 変更するタスク・リストを選択します。
- 3 「タスク・リスト」領域で、「アクション」を選択し、「アクセス権の割当て」を選択します。

- **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
 - **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
- 4 「アクセス権の追加」をクリックします。
 - 5 タスク・リストにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。
 - 「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - ユーザーとグループのページが複数におよぶ場合、ページ番号を「ページ」に入力して、「実行」をクリックします。
 - 「開始」または「終了」をクリックして、最初か最後のページに移動します。
 - 「前へ」または「次へ」をクリックして、前か次のページに移動します。
 - 6 「アクセス権タイプ」で、ユーザーやグループがどのようにタスク・リストを使用できるかを、次のように指定します。
 - 「割当て済」: 表示および使用
 - 「管理」: 変更
 - 「管理と割当て」: 表示、使用、変更
 - 「なし」: アクセスなし
 - 7 「追加」をクリックします。
 - 8 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の変更

▶ タスク・リストへのアクセス権を変更するには:

- 1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。
[269 ページの「タスク・リストの管理」](#)を参照してください。
- 2 変更するタスク・リストを選択し、「アクセス権の割当て」をクリックします。
 - **オプション:** ユーザー・ディレクトリのユーザーやグループの変更済 ID や位置を Shared Services Console から Planning へ移行するには、「移行 ID」をクリックします。
 - **オプション:** プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。
- 3 ユーザーまたはグループを選択して、「アクセス権の編集」をクリックします。
- 4 「アクセス権タイプ」で、次から選択します。

- 「割当て」: 表示および使用
- 「管理」: 変更
- 「管理と割当て」: 表示、使用、変更
- 「なし」: アクセスなし

5 「設定」をクリックします。

6 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の削除

▶ タスク・リストへのアクセス権を除去するには:

1 「タスク・リストの管理」ページを開きます。

269 ページの「タスク・リストの管理」を参照してください。

2 変更するタスク・リストとフォルダを選択し、「アクセス権の割当て」をクリックします。

- オプション: Oracle Hyperion Shared Services Console のユーザー・ディレクトリにあるユーザーやグループの変更済 ID や位置を Planning に移行するには、「移行 ID」をクリックします。
- オプション: プロビジョニングされていないユーザーや削除されたユーザーまたはグループを Planning データベースから除去して、スペースを節約するには、「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」をクリックします。

3 ユーザーまたはグループを選択して、「アクセス権の削除」をクリックします。

4 「OK」をクリックします。

5 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストのインポートとエクスポート

管理者は、TaskListDefUtil.cmd(Windows)か、TaskListDefUtil.sh(UNIX)により、Planning アプリケーション間で、タスク・リストの定義を移動できます。タスク・リストの定義を XML へエクスポートまたは XML からインポートできます。

TaskListDefUtil はコマンド・ライン・インタフェースを使用し、planning1 ディレクトリにインストールされます。planning1 の完全パスについては 51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」を参照してください。

▶ TaskListDefUtil ユーティリティを起動するには:

1 planning1 ディレクトリから、次の構文を使用してコマンドを入力します:

```
TaskListDefUtil [-f:passwordFile] import|exportFILE_NAME|
TASK_LIST_NAME|-all SERVER_NAME USER_NAME APPLICATION
```


パラメータ	目的	必須?
<code>[-f:passwordFile]</code>	暗号化されたパスワードが設定されている場合、コマンド・ラインの最初のパラメータとしてこのオプションを使用し、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのパスと名前ユーティリティを実行できます。 50 ページの「Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制」 を参照してください。	いいえ
<code>import export</code>	タスク・リストの定義をインポートまたはエクスポートします。	はい
<code>FILE_NAME TASK_LIST_NAME -all</code>	<code>import</code> で使用するときには、タスク・リスト定義を含む XML ファイルを指定します。 <code>export</code> で使用するときには、XML にエクスポートするタスク・リストを指定します。 <code>-all</code> を <code>import</code> または <code>export</code> で使用すると、現在のアプリケーションのすべての XML ファイルまたはタスク・リスト定義をインポートまたはエクスポートします。	はい(<code>-all</code> はオプション)
<code>SERVER_NAME</code>	Planning アプリケーションが存在するサーバー名。	はい
<code>USER_NAME</code>	管理者の名前。	はい
<code>APPLICATION</code>	<code>export</code> で使用する場合、エクスポートするタスク・リスト定義を含んでいる Planning アプリケーションの名前です。 <code>import</code> は、インポートするタスク・リストの定義の Planning アプリケーション名です。	はい

2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

タスク・リストの定義をエクスポートする際、ユーティリティによって現在のディレクトリに XML ファイルが作成され、

`EPM_ORACLE_INSTANCE\EPM_ORACLE_INSTANCE` ディレクトリにある

`TaskListDefUtil.log` にエラーが記録されます。このユーティリティを任意のディレクトリにコピーし、そこから起動することで、別のディレクトリにファイルを保存することができます。

例:

- 1つのファイルをインポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd import c:\EPM_ORACLE_INSTANCE\Planning
\planning1\TaskList1.xml localhost admin APP1
```

- 1つのファイルをエクスポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd export TaskList1 localhost admin APP1
```

- すべてのタスク・リストの定義をエクスポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd export -all localhost admin APP1
```

- すべてのタスク・リストの定義をインポートするには:

```
TaskListDefUtil.cmd import -all localhost admin APP1
```

データのコピー

プランは、ある次元交差から別の次元交差に、リレーショナル・データとサポート詳細を含めてコピーできます。たとえば、「予算、会計年度 10、最終」を「予測、会計年度 11、第 1 ドラフト」へコピーできます。注意:

- 「選択されたデータのコピー」の設定は、現在のセッションにしか保持されません。
- コピー済次元メンバーは、選択したプラン・タイプに表示される必要があります。
- データは、データを使用できる列にコピーしてください。データを読み取り専用セルや動的セルにはコピーできません。
- 勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキストをコピーできます。プランニング・ユニットの注釈はコピーできません。
- この機能は属性とともにには使用できないため、属性は選択しないでください。
- Essbase データは、「データ・オプションのコピー」の選択項目にかかわらずコピーされます。
- 管理機能のため、Planning では、コピーするデータにすべてのアクセス権があると仮定されます。承認済のプランニング・ユニットをコピーできないということはありません。
- この機能でデータを計算できません。予測を5%増加させるなどの計算を実行するには、データをコピーした後、ビジネス・ルールを適用させてください。
- データをコピーするには、「シナリオ」、「勘定科目」、「期間」、「バージョン」次元の少なくとも1つのメンバーを選択する必要があります。

▶ データをコピーするには:

- 1 「管理」、「管理」、「データのコピー」を選択します。
- 2 「プラン・タイプ」でプランのタイプを選択し、「実行」をクリックします。
 」1回につきプラン・タイプを1つコピーできます。「実行」をクリックすると、選択したプラン・タイプ用の次元が表示されます。
- 3 「静的次元」では、データ交差のメンバーを入力します。
 1. 「次元」で、コピー元の次元を選択します。
 2. 「メンバー」で「メンバー選択」をクリックし、コピー元のメンバーを選択します。メンバーは複数選択可能です。「シナリオ」、「勘定科目」、「エンティティ」、「期間」、「バージョン」次元の少なくとも1つのメンバーを選択する必要があります。
- 4 「オプション」:別の静的次元をリストに加えるには、「次元の追加」をクリックして、次元メンバーを入力します。(次元を除去するには、「なし-次元の選択」を選択します。選択した次元は、「ソースと宛先を持つ次元」領域に移動されます。)
- 5 「ソースと宛先を持つ次元」で、データをコピーする次元を入力します。
 1. 「ソース」で、「メンバー選択」をクリックします。
 2. 「宛先」で、「メンバー選択」をクリックします。
- 6 「データ・オプションのコピー」で、コピーする情報のタイプを選択します:
 - 「勘定科目の注釈のコピー」
 - 「サポート詳細のコピー」
 - 「コメントのコピー」
- 7 「データのコピー」をクリックします。

データは1つの交差から他の交差にコピーされます。データがコピーされない場合はメッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。

- 別のプラン・タイプのデータをコピーするには、[手順 2](#) で別のプラン・タイプを選択して、手順を繰り返します。

ヒント： データのコピーの実行ステータスを表示するには、Oracle Hyperion Planning User's Guide のジョブ・ステータスの確認に関する項を参照してください。

セル詳細の消去

プラン・タイプのセル詳細(サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメント)を消去できます。勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメントの作成と表示の詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

注意：

- プランニング・ユニットの注釈は削除できません。
- 管理者と対話型ユーザー向け機能のため、Planning では、削除する詳細へのすべてのアクセス権があると仮定されます。
- これを実行する前にアプリケーションのバックアップを行ってください。Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。
- また、SQL スクリプトでもセル詳細を消去できます。[304 ページの「SQL を使用してアプリケーション情報を削除」](#)を参照してください。

▶ セル詳細を消去するには:


- 「管理」、「管理」、「セル詳細の消去」を選択します。

- 「プラン・タイプ」でプランのタイプを選択し、「実行」をクリックします。

「実行」をクリックすると、このプラン・タイプ用の次元が選択可能になります。

- データ交差のメンバーを選択します:

- 「次元」で、消去する次元を詳細とともに、少なくとも1つ選択します。

- 表示された次元で  をクリックします。「メンバー選択」ページで、削除する詳細のある選択項目を選択します。

注： 選択された各次元に、少なくとも1つのメンバーを選択してください。次元が選択されないと、Planning では、セル詳細の消去にすべてのメンバーが含まれてしまいます。

- 「オプション」: 追加するメンバーを指定して、データ交差をさらに定義するには:

- 別の次元を選択してそのメンバーを選択するには、「次元の追加」をクリックします。
- プラン・タイプのすべての次元を選択する場合は、「すべての次元の追加」をクリックします。

表示された次元のメンバーを選択します。

5 「オプションの消去」から少なくとも1つのオプションを選択して、削除する情報のタイプを指定します:

- 「勘定科目注釈」
- 「サポート詳細」
- 「セル・テキスト」
- 「セル・レベル・ドキュメント」

6 「消去」をクリックします。

確認ページに選択項目が表示されます。

7 「終了」をクリックして次に進むか、「戻る」をクリックして選択項目を変更します。

セル詳細が消去されたら、プラン・タイプからデータが削除されます。データが削除されない場合、メッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。

8 オプション: 「セル詳細の消去」の実行ステータスの表示および削除された情報のレビューを行うには、「ツール」>「ジョブ・コンソール」を選択します。

Oracle Hyperion Planning User's Guide のジョブ・ステータスの確認に関する項を参照してください。

9 別のプラン・タイプのセル詳細を消去するには、手順 2 で別のプラン・タイプを選択して、手順を繰り返します。

この章の内容

フォームとフォルダの管理.....	285
プリファレンスの設定情報.....	287
レポートへのアプリケーションのマッピング	294
SQL を使用してアプリケーション情報を削除.....	304

フォームとフォルダの管理

「フォームの管理」と「ビジネス・ルール・フォルダ」ページを使用して、フォルダとフォームを管理します。

タスク	トピック
フォルダの作成	285 ページの「フォルダの作成」を参照
フォルダの移動	286 ページの「フォルダの移動」を参照
フォルダの削除	286 ページの「フォルダの削除」を参照
フォームの作成	168 ページの「単一のフォームの作成」を参照
フォームとフォルダへのアクセス権の割当て	61 ページの「フォームとフォルダへのアクセス権の割当て」を参照
フォームの移動	165 ページの「フォームとアド・ホック・グリッドの移動」を参照
フォームの削除	166 ページの「フォームの削除」を参照
フォルダ名の変更	287 ページの「フォルダの名前変更」を参照

Calculation Manager フォルダのすべてのフォームまたはビジネス・ルールを表示するには、左側のフォルダにあるフォルダ名をクリックします。すべてのフォームを選択するには、フォームのリストの上にあるチェック・ボックスを選択します。

フォルダの作成

フォルダを使ってフォームと Calculation Manager ビジネス・ルール・セキュリティを階層的に整理します。階層内でフォルダを移動させることができ、フォルダが別の階層レベルにある場合は、同じ名前を付けることができます。次は行えませんが、

- 空でないフォルダの削除
- 複数フォルダの選択
- 上位レベル・フォルダの名前を変更、移動または削除します。それぞれ「Forms」および(アプリケーションが Calculation Manager を計算モジュールとして使用する場合)「CalcMgrRules」と呼ばれます。

▶ フォルダを作成するには:

1 次のいずれかのアクションを行います:

- フォーム・フォルダ: 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
- Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダ: 「管理」、「管理」、「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。

2 作成先のフォルダを選択します。

3 フォルダ・リストの上の「作成」をクリックします。

4 フォルダ名を入力します。

5 「OK」をクリックします。

フォルダの移動

フォルダを移動するとき、すべてのネストされたフォルダ、フォームおよびそれらにある Calculation Manager のビジネス・ルールも移動されます。

▶ フォルダを移動するには:

1 フォーム・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。

ビジネス・ルール・フォルダは、「管理」>「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。

2 移動するフォルダを選択します。

3 「移動」をクリックします。

4 選択したフォルダを移動する宛先フォルダを選択します。

5 「OK」をクリックします。

フォルダの削除

▶ フォルダを削除するには:

1 フォーム・フォルダの場合、「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。

Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダは、「管理」>「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。

2 削除するフォルダを選択します。

- 3 「削除」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

フォルダの名前変更

▶ フォルダを削除するには:

- 1 フォーム・フォルダ: 「管理」、「管理」、「フォームとアド・ホック・グリッド」を選択します。
Calculation Manager のビジネス・ルール・フォルダは、「管理」> 「ビジネス・ルール・セキュリティ」を選択します。
- 2 名前変更するフォルダを選択します。
- 3 「名前変更」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

プリファレンスの設定情報

「プリファレンス」ページで、すべてのユーザーは個別のプリファレンスを設定できます。管理者とアプリケーションの所有者はグローバル設定を指定できます。「プリファレンス」の選択項目は現在のアプリケーションに影響します。

「プリファレンス」のオプションはユーザー・タイプによって異なります。プランナと対話型ユーザー・タイプは「アプリケーション設定」と「表示オプション」にアクセスできます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

参照:

- [288 ページの「個人プリファレンスの設定」](#)
- [288 ページの「アプリケーション・デフォルトの設定」](#)
- [289 ページの「システム設定の指定」](#)
- [291 ページの「メンテナンス中のアプリケーションの使用制限」](#)
- [293 ページの「カスタム・ツールの指定」](#)
- [293 ページの「表示オプションの設定」](#)
- [293 ページの「印刷オプションの設定」](#)

管理者は個人のプリファレンス、アプリケーション・デフォルト、システム設定で表示するタブを制御できます。

オプションの表示	説明
現在のアプリケーション・デフォルト	「アプリケーション設定」タブと「表示オプション」タブにアクセスします。これらのタブに設定された値は、アプリケーションのデフォルトになります。ユーザーはデフォルトの上書きとプリファレンス・タブにある「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択してデフォルトに戻すことができます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

オプションの表示	説明
拡張設定	「システム設定」タブと「カスタム・ツール」タブにアクセスします。 289 ページの「システム設定の指定」 と 293 ページの「カスタム・ツールの指定」 を参照してください。

個人プリファレンスの設定

すべてのユーザーは、現在のアプリケーションの個人プリファレンスを設定できます。アプリケーション設定、表示オプション、印刷オプションの詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

▶ 個人プリファレンスを設定するには:

- 1 「ファイル」>「プリファレンス」を選択します。
- 2 「Planning」をクリックして、次のアクションを実行します。
 - 「アプリケーション設定」を選択して、電子メール・オプションを設定し、別名テーブルを選択し、メンバー選択および承認のオプションを設定します。
 - 「表示オプション」を選択して、数値のフォーマット、ページの選択、大きなフォームの警告、ページに表示する次元の数のオプションを設定します。
 - 「印刷オプション」を選択して、ページをどのように印刷するのかを指定します。
 - 「ユーザー変数のオプション」を選択して、ユーザー変数を設定し、フォームに表示するメンバー数を制限します。[203 ページの「ユーザー変数の管理」](#)を参照してください。

「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択すると、値が現在のアプリケーション・デフォルトにリセットされます。

アプリケーション・デフォルトの設定

管理者は、現在のアプリケーションのデフォルトを設定できます。これらのアプリケーションのデフォルトはプリファレンスを設定して上書きでき、「アプリケーション・デフォルトを使用」を選択するとアプリケーション・デフォルトに戻すことができます。個々のアプリケーション設定と、次に概略する表示オプション・デフォルトの詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。

▶ アプリケーション・デフォルトを設定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 2 「表示」で、「現在のアプリケーション・デフォルト」を選択します。「」
- 3 「実行」をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

- 「アプリケーション設定」を選択して、次のようなデフォルトを指定します。
 - タスク・リストの電子メール・オプション
 - 承認
 - フェッチしてフォームに移入するグリッドの行と列の数
 - アプリケーションの所有者
 - 使用する別名テーブル
 - 「メンバー・セレクタ」ダイアログ・ボックスで、メンバーの種類と表示する別名データ、たとえば名前と別名の両方など
 - プランニング・ユニットおよび属性次元のオプション
- 「表示オプション」を選択して、次のようなデフォルトを指定します
 - ページ選択
 - 数値のフォーマット
 - 集計演算子
 - メンバーのインデント
 - 警告
 - 日付フォーマット
 - UI テーマ、テキスト・サイズ
 - ナビゲーション

5 「保存」をクリックします。

システム設定の指定

アプリケーション全体の設定を指定できるのは、管理者のみです。電子メール・サーバーとパスワードを Essbase で同期できるのは、アプリケーションの所有者のみです。

▶ システム設定を指定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 2 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
- 3 「実行」をクリックします。
- 4 「システム設定」を選択します。
- 5 オプションを設定します:

表 62 システム設定

オプション	説明
「電子メールの文字セット」	電子メール・メッセージの文字セット: 「UTF-8」: Unicode エンコード・フォーマット 「地域設定」: システムの地域設定

オプション	説明
「Shared Services URL」	Shared Services サーバーの URL。「Shared Services の登録」をクリックして、アプリケーションをアプリケーション・グループに割り当てます(290 ページの「Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て」を参照してください)。
「ユーザーのフル・ネームの表示」	「はい」:フル・ネーム(例えば、ヴィクトリア・ヘニングスなど)、ユーザー名(例えば、VHennings など)を表示。「いいえ」:表示しない。これを選択すると、ユーザー 2 人が同一のフル・ネームを持ってません。
「アプリケーションの使用可能」	バックアップ中などのメンテナンス・モードのときに、ユーザーがアプリケーションにアクセスできるかどうかを決定します。291 ページの「メンテナンス中のアプリケーションの使用制限」を参照してください。
「代替変数の表示を使用可能にする」	ユーザーが、ビジネス・ルールで実行時プロンプトへの応答時に「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに代替変数をどう表示させるかを次のように設定します。 <ul style="list-style-type: none"> 「すべて表示」:すべての代替変数を表示する 「何も表示しない」:代替変数を表示しない 「フィルタの使用可能」:実行時プロンプトに有効な代替変数のみを表示する
「ユーザーの選択」	管理者をアプリケーションの所有者として割り当てます。(デフォルトでは、アプリケーションを作成した人がアプリケーションの所有者です。所有者は、別の管理者に所有権を与えることができます。)

- 6 各アプリケーションのシステム設定を指定するには、これらの手順を繰り返してから、「保存」をクリックします。

Shared Services アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て

- ▶ Planning のアプリケーションを Shared Services アプリケーション・グループに割り当てるには:
- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
 - 2 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
 - 3 「実行」をクリックします。
 - 4 「システム設定」を選択します。
 - 5 「Shared Services の登録」をクリックして、「アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て」のオプションを 1 つ選択します:
 - 「新規アプリケーション・グループ」。テキスト・ボックスにアプリケーション・グループ名を入力します(Shared Services のプロジェクト・マネージャの役割がある場合のみ使用可能です)。
 - 「既存のアプリケーション・グループ」。現在のアプリケーションを割り当てるアプリケーション・グループを選択します。
 - 6 「送信」、「保存」の順にクリックします。

メンテナンス中のアプリケーションの使用制限

管理者はメンテナンス中にアプリケーションへのアクセス権の付与と取消しができます。ユーザーがアプリケーションにログオンしているとき、管理者がアクセス権を取り消すと、ユーザーはシステムから退出させられます。

▶ アプリケーションの使用を制限するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 2 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
- 3 「実行」をクリックします。
- 4 「システム設定」を選択します。
- 5 「アプリケーション・メンテナンス・モード」には、「アプリケーションの使用可能」の次のオプションから1つ選択します。
 - 「すべてのユーザー」:すべてのユーザーが、アプリケーションにログオンしたり操作を続行できます。
 - 「管理者」:他の管理者のみログオンできます。オプションが「すべてのユーザー」にリセットされるまで、ユーザーは強制的に退出する必要があり、ログオンできません。
 - 「所有者」:アプリケーションの所有者のみがログオンできます。他のすべてのユーザーはログオンできません。ログオン中のユーザーは、オプションが「すべてのユーザー」か「管理者」にリセットされるまで、システムから強制的に退出する必要があります。アプリケーションの所有者のみが、管理者によるアプリケーションの使用を制限できます。
- 6 現在の設定より厳しい制限が選択された場合、「OK」をクリックします。
- 7 「保存」をクリックします。

291 ページの「[MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限](#)」を参照してください。

MaintenanceMode ユーティリティを使用したアプリケーションのアクセス権の制限

管理者はユーティリティ `MaintenanceMode.cmd` (Windows) または `MaintenanceMode.sh` (UNIX) を使用して、メンテナンス中にアプリケーションへのアクセス権を一時的に取り消すことができます。

▶ MaintenanceMode ユーティリティを使用するには:

- 1 コマンド・ラインで、`planning1` ディレクトリに移動します。
`planning1` の完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。
- 2 このコマンドと1つのスペース、およびパラメータをスペースで区切って入力します。

```

MaintenanceMode [-f:
passwordFile
], /A=
app
, /U=
user
, /P=
password
,

/LL=
loginLevel
[ALL_USERS|ADMINISTRATORS|OWNER], [/DEBUG=[true|false]],

[/HELP=Y]

```

表 63

パラメータ	説明	必須?
[-f: passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。	いいえ
/A= app	アプリケーション名	はい
/U= user	ユーティリティを実行している管理者の名前	はい
/P= password	管理者のパスワード	はい
/LL=loginLevel [ALL_USERS ADMINISTRATORS OWNER]	ユーティリティが影響を与えるユーザーを指定します: ALL_USERS: すべてのユーザーが、アプリケーションにログオンしたり操作を続行できます。 ADMINISTRATORS: 他の管理者のみログオンできます。オプションが ALL_USERS にリセットされるまで、他のユーザーは強制的に退出する必要があります、ログオンできません。 OWNER: アプリケーションの所有者のみがログオンできます。他のすべてのユーザーはログオンできません。ログオン中のユーザーは、オプションが ALL_USERS か ADMINISTRATORS にリセットされるまで、システムから強制的に退出する必要があります。アプリケーションの所有者のみが、管理者によるアプリケーションの使用を制限できます。	はい
/DEBUG=[true false]	ユーティリティをデバッグ・モードで実行するかどうかを指定します。デフォルトは false です。	いいえ
/HELP=Y	ユーティリティの構文をオンラインで表示します。	いいえ

たとえば、Windows システムでは、管理者を除くすべてのユーザーを"planapp"という名前のアプリケーションから強制的に退出させるには、次のように入力します。

```
MaintenanceMode.cmd /A=planapp, /U=admin, /P=password,
```

```
/LL=ADMINISTRATORS
```

カスタム・ツールの指定

管理者は、「ツール」ページで、ユーザーのカスタム・ツールやリンクを指定できます。リンクにアクセスできるユーザーは、「ツール」メニューからリンクをクリックして、セカンダリ・ブラウザ・ウィンドウでページを開くことができます。

▶ カスタム・ツールを指定するには:

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 2 「表示」で、「拡張設定」を選択します。
- 3 「実行」をクリックします。
- 4 「カスタム・ツール」を選択します。
- 5 各リンクについて:
 - 「名前」に、表示されたリンク名を入力します。
 - 「URL」に、http://接頭辞を含む完全修飾 URL を入力します。
 - 「ユーザー・タイプ」に、リンクにアクセスできるユーザーを選択します。
- 6 「保存」をクリックします。

表示オプションの設定

管理者は、次元ページと「アクセス権の追加」ページに表示するアイテム数を設定できます。

▶ 表示するアイテム数を設定するには:

- 1 「ファイル」>「プリファレンス」、「表示オプション」を選択します。
- 2 値を入力します。
 - 「指定したメンバーを各次元のページに表示」
 - 「指定したレコードを各アクセス権の割当てページに表示します」
- 3 「保存」をクリックします。

印刷オプションの設定

印刷オプションを設定するには、[173 ページ](#)の「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」を参照してください。

レポートへのアプリケーションのマッピング

サブトピック

- [レポート・アプリケーションについて](#)
- [レポート・アプリケーションの作成](#)
- [レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング](#)
- [アプリケーション・マッピングの定義](#)
- [次元マッピングの定義](#)
- [視点の設定](#)
- [デフォルト・メンバーの検証ルール](#)
- [レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ](#)
- [ユーティリティを使用したデータのプッシュ](#)
- [マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能](#)
- [マッピング・アプリケーションと代替変数](#)
- [レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加](#)
- [レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集](#)
- [レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除](#)

レポート・アプリケーションについて

レポート・アプリケーションは、Planning データを集約しレポートできるターゲット・アプリケーションです。主な使用場面は次のとおりです:

- レポート・アプリケーションに、データ・ウェアハウスなどの任意のソースからのデータが含まれています。新規 Planning データをそこにプッシュし、そのデータに関してレポートする必要があります。
- Planning のスマート・リストに関してレポートする必要がありますが、Planning ではできません。

ソース Planning アプリケーションとレポート・アプリケーション間で次元をマップすることで、次のことができます:

- レポート・アプリケーションで Planning のデータをレポート
- スマート・リストで集約とクエリーを行い、それをレポート・アプリケーションで通常の次元に変換
- Planning データを複数のレポート・アプリケーションにリンクして、各種の集計に利用

レポート・アプリケーションの作成

▶ レポート・アプリケーションを作成するには:

- 1 存在しない場合、ターゲット・レポート・アプリケーションを作成します。

レポート・アプリケーションは、Essbase のブロック・ストレージか集約ストレージ・データベースのいずれかです。それぞれの特性については、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

2 レポート・アプリケーションで、レポートまたは集約する次元を作成します。

後でアプリケーションをマップする場合、Planning は自動的に同じ名前の次元をマップします。スマート・リストでレポートまたはクエリーを行うには、ソース Planning アプリケーションのスマート・リストにマップするレポート・アプリケーションに次元を作成します。

3 レポート・アプリケーションに、レポートまたは集約するメンバーをロードします。

第5章「データおよびメタデータのロード」を参照してください。

次:

- ソース Planning アプリケーションをターゲット・レポート・アプリケーションにマップします。
295 ページの「レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング」を参照してください。
- データをソースからターゲット・アプリケーションにプッシュします。
299 ページの「レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ」を参照してください。
- レポート・アプリケーションのデータをレポートします。

レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング

▶ Planning アプリケーションをレポート・アプリケーションにマッピングするには:

1 レポート・アプリケーションを作成します。

294 ページの「レポート・アプリケーションの作成」を参照してください。

2 Planning で、「管理」、「レポート・アプリケーションのマップ」を選択します。

3 「Reporting アプリケーション・マッピング」ページで、オプションを選択します:

- マッピングを作成する場合は、「新規」をクリックします。
- マッピングを更新する場合は、マッピングを選択して「編集」、「削除」または「名前変更」をクリックします。296 ページの「アプリケーション・マッピングの定義」を参照してください。
- レポート・アプリケーションから次元およびメンバーをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。アプリケーション・マッピングの定義時に、「リフレッシュ」を行うことで、ターゲット・アプリケーション用のメンバー・セレクトアの次元にその実際の次元が確実に反映されます。
- レポート・アプリケーションにデータをプッシュする場合は、「データのプッシュ」をクリックします。299 ページの「レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ」を参照してください。

- スマート・リストへのマッピングを更新する場合は、[379 ページの「レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期」](#)を参照してください。

アプリケーション・マッピングの定義

▶ アプリケーション・マッピングを定義するには:

- 1 **新規マッピングの場合:** 名前と説明を入力します。
- 2 「ソース・アプリケーション」で、使用可能なプラン・タイプから現在のアプリケーションの「プラン・タイプ」を選択します。
プラン・タイプは、レポート・アプリケーションにプッシュされる情報に影響します。
- 3 「レポート・アプリケーション」でレポート・アプリケーションが存在する Essbase サーバーを選択し、ターゲットのレポート・アプリケーションを選択します。
- 4 **オプション:** 表示される Essbase サーバーの追加、編集または削除については、[302 ページの「レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加」](#)、[303 ページの「レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集」](#) または [304 ページの「レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除」](#) を参照してください。
- 5 「次へ」をクリックします。
[296 ページの「次元マッピングの定義」](#) を参照してください。

次元マッピングの定義

「次元のマッピング」タブで、左側にある Planning の次元を右側のレポート・アプリケーション・メンバーにマップします。マッピングが正しければ、両方のアプリケーションの次元がマップされる時、またはレポート・アプリケーションでデータを格納する有効なデフォルト・メンバーがあるとき、データをプッシュできます([297 ページの「視点の設定」](#)を参照)。

注: 動的メンバーに対して親メンバーが有効で、動的メンバーに対して生成されるプレースホルダが ASO キューブと Essbase に存在する場合、Planning のメンバー名が ASO キューブになくてもかまいません。これに対し、ASO キューブに Planning メンバー名しか存在しない場合、「データのプッシュ」操作は失敗します。システム上、動的メンバーに対してプレースホルダ名を生成する必要があるためです。

▶ 次元マッピングを定義するには:

- 1 各 Planning 次元について、「マッピング・タイプ」を選択します。
 - 「次元に対する次元」: Planning アプリケーションで使用可能な、まだマップされていない次元を表示します。データをプッシュするには、次元とそのすべてのメンバーがソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの両方に存在する必要があります。

Planning とレポート・アプリケーションで等しい次元(たとえば、シナリオとシナリオ)は、自動的にマップされます。

- 「次元に対するスマート・リスト」: 使用可能なスマート・リストを表示します。スマート・リストを選択すると、関連付けられている勘定科目メンバーが表示されます。メンバーが1つのみの場合は、そのメンバーが自動的に選択されます。

注: スマート・リスト・ラベルはレポート・アプリケーションでメンバー名またはメンバーの別名へのマッピングに使用されます。

2 「次元名/スマート・リスト名」では、次元またはスマート・リストの名前を選択します。

スマート・リストから次元へのマッピングでは、ソースのプラン・タイプに勘定科目の密次元が含まれている必要があります。スマート・リストに少なくとも1つのメンバーが関連付けられていなければなりません。

注: スマート・リストを次元にマッピングする場合、スマート・リストを同期して、スマート・リストをマップするレポート・アプリケーションで次元を識別できます。またこれにより、選択した次元のレベル0のメンバーが選択したスマート・リストに新規スマート・リスト・エントリとして追加されます。379 ページの「レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期」を参照してください。

3 「メンバー選択」で、 をクリックしてメンバー名を選択します。

デフォルトでは、Lev0Descendants が選択されています。選択できるのは、レベル0のメンバーのみです。メンバーが1つのみの場合は、そのメンバーが自動的に選択されます。

4 次のいずれかをクリックします:

- 視点を表示するには「次へ」をクリックします。297 ページの「視点の設定」を参照してください。
- すべての次元をマップし、視点の必要がない場合には「保存」をクリックします(この場合「次へ」ボタンはグレー表示になります)。


新しい名前でアプリケーション・マッピングを保存するには、「名前を付けて保存」をクリックし、「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで「保存」をクリックします。

視点の設定

「視点(POV)」タブには、各アプリケーションでまだマップされていない次元、またはいずれかのアプリケーションに存在しないため POV を指定できる次元が表示されます。POV 次元はすべて、メンバーが1つだけ選択されている必要があります。


▶ POV を設定するには:

1 「視点(POV)」ページの最上部セクションで、まだマップされていない各 Planning 次元のメンバーを指定します。次のいずれか:

- メンバー名を入力します。
- 表示されていないメンバーを選択するには、 をクリックしてから POV メンバーを選択します。

有効なデフォルト・メンバーに関するルールについては、[298 ページの「デフォルト・メンバーの検証ルール」](#)を参照してください。

2 下部セクションで、マップされていない各レポート・アプリケーションの POV メンバーに対しメンバーを選択します。次のいずれか:

- POV メンバー名を入力します。
- 表示されていないメンバーを選択するには、 をクリックしてから POV メンバーを選択します。

3 「保存」をクリックします。

新しい名前でアプリケーション・マッピングを保存するには、「名前を付けて保存」をクリックし、「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスで「保存」をクリックします。

メンバーの有効性がチェックされます。[298 ページの「デフォルト・メンバーの検証ルール」](#)を参照してください。

デフォルト・メンバーの検証ルール

レポート・アプリケーションのデフォルト・メンバーには、ソースの Planning アプリケーションからプッシュされたデータが格納されます。次のいずれかの制約が該当する場合、またはどちらかのアプリケーションの次元がマップされないために有効なデフォルト・メンバーがない場合、マッピングは無効となりエラー・メッセージが表示されます。

ルール:

- レポート・アプリケーションが集約ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはレベル 0 でなければなりません。

ブロックと集約ストレージ・アプリケーション・データベースの詳細は、[Oracle Essbase Database Administrator's Guide](#) を参照してください。

- レポート・アプリケーションがブロック・ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはデータの格納プロパティを持つ任意のメンバーにできます。
- Planning アプリケーションに次元から次元へのマッピングしかない場合、デフォルト・メンバーは任意のレベルまたはデータ・ストレージ・タイプにできます。
- Planning アプリケーションにスマート・リストから次元へのマッピングがある場合、デフォルト・メンバーはレベル 0 でなければなりません。また、ソー

ス・プラン・タイプに勘定科目の密次元が含まれている必要があり、スマート・リストに少なくとも1つのメンバーが関連付けられていなければなりません。

- マッピングで子孫(Acct_Default)が選択されている場合、レポート・アプリケーション内に Acct_Default メンバーが存在する必要があります。

注： 有効だったマッピングでも、次元、メンバーまたはスマート・リストが名前変更、削除、追加された場合には無効になることがあります。

レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ

アプリケーション・マッピングを設定した後、データをレポート・アプリケーションにプッシュできます。選択したアプリケーション・マッピングは Planning で検証され、マップされた Planning 次元データはレポート・アプリケーションの次元にマップされます。マッピングの状況は進捗バーで示されます。ジョブ・コンソールでジョブのステータスを確認することもできます。[295 ページの「レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング」](#)を参照してください。

注： 親メンバーで、オンザフライ方式の動的なメンバー作成を有効にしており、Essbase に動的メンバーのプレースホルダが存在する場合は、ASO アプリケーションに Planning メンバー名しか存在しなければ、「データのプッシュ」操作が失敗します。

ASO アプリケーションに Planning メンバー名のみ存在する場合は、バケット名を検索するため「データのプッシュ」操作が失敗します。

▶ レポート・アプリケーションにデータをプッシュするには:

1 レポート・アプリケーションを作成します。

[294 ページの「レポート・アプリケーションの作成」](#)を参照してください。

2 Planning で、「管理」、「レポート・アプリケーションのマップ」を選択します。

3 「Reporting アプリケーション・マッピング」ページで、「データのプッシュ」をクリックします。

4 次のいずれかのオプションを選択します:

- 「宛先のデータを消去し、データをプッシュしてください」: データをプッシュする前にターゲット・レポート・アプリケーションのデータを消去します

ターゲットが集約ストレージ・レポート・アプリケーションの場合は、「宛先のデータを消去し、データをプッシュしてください」オプションを使用する際に次の点に注意してください:

- ターゲット・レポート・アプリケーションで一致する名前のないメンバーは無視されます。

- このオプションはメンバー名にのみ機能し、メンバーの別名には機能しません。
- このオプションを使用すると、計算スクリプトの長さ制限を超える可能性があるため、アプリケーション・マッピングのメンバーを選択する場合は、「子」などのメンバー関係を使用する際に注意してください。
- メンバー関係を使用する場合、このオプションによりソース Planning アプリケーションのレベル 0 メンバーのリストが拡張されます。ソース・アプリケーションの少なくとも 1 つのメンバー名がレポート・アプリケーションのメンバーに一致すれば、このオプションはエラーなしで続行されます。メンバーが 1 つも一致しない場合は、オプションを続行できません。

ターゲットがブロック・ストレージ・レポート・アプリケーションの場合、正常に続行するには、「宛先のデータを消去し、データをプッシュしてください」オプションに次の条件が要求されます:

- メンバー関係を使用する場合、ソース・アプリケーションのすべてのメンバー名が、レポート・アプリケーションのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストを次元にマップする場合、ソース・アプリケーションのすべてのスマート・リスト・エントリが、レポート・アプリケーションのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストを次元にマップする場合、ソース Planning アプリケーションのスマート・リスト・エントリ・ラベルが、レポート・アプリケーションのメンバー名に一致する必要があります。スマート・リスト・エントリ・ラベルがレポート・アプリケーションのメンバー名に一致しない場合は、スマート・リスト・エントリ名がレポート・アプリケーションのメンバー名に一致する必要があります。

これらの条件に一致しない場合、「宛先のデータを消去し、データをプッシュしてください」オプションは続行されません。

- 「データのプッシュ」: レポート・アプリケーションのデータを消去せずにレポート・アプリケーションにデータをプッシュします。

スマート・リストを次元にマップする場合、スマート・リストのラベルはレポート・アプリケーションのメンバー名または別名に一致する必要があります。「データのプッシュ」は、スマート・リスト・エントリ名には使用できません。

5 「OK」をクリックします。

ユーティリティを使用したデータのプッシュ

レポート・アプリケーションへのデータのプッシュには時間がかかることがあるので、管理者は PushData ユーティリティを使用してピークではない時間にデータをプッシュするようにスケジュールすることができます。このユーティリティは planning1 ディレクトリにインストールされます。planning1 の完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#)を参照してください。

▶ PushData ユーティリティを起動するには次の手順に従います:

- 1 Planning がインストールされたサーバー上の `planning1` ディレクトリから、コマンド・プロンプトで次の構文を入力します:

```
PushData [-f:passwordFile] /U:username /A:sourceApplication /  
M:applicationMapping [/C]
```

パラメータ	説明
<code>[-f:passwordFile]</code>	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、 <code>passwordFile</code> で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。
<code>/U: username</code>	Planning 管理者の名前
<code>/A: sourceApplication</code>	プッシュするデータのソース Planning アプリケーションの名前
<code>/M: applicationMapping</code>	プッシュ・データ範囲を定義するアプリケーション・マッピングの名前(294 ページの「 レポートへのアプリケーションのマッピング 」を参照してください)
<code>[/C]</code>	オプション: データをプッシュする前にターゲット・レポート・アプリケーションのデータ範囲を解除します

- 2 プロンプトが表示されたら、パスワードを入力します。

注: ジョブ・コンソールで実行ステータスを確認できます。Planning の logs ディレクトリの PushData ログで結果を表示することもできます。完全パスについては 51 ページの「[EPM Oracle インスタンスについて](#)」を参照してください。

例:

```
PushData /U:admin /A:plnapp /M:LineItemsToExpenses /C
```

```
PushData -f: password.txt /U:admin /A:plnapp /M:LineItemsToExpenses /C
```

```
PushData /U:admin /A:plnapp /M:LineItemsToExpenses
```

マッピング・アプリケーションでサポートされていない機能

レポート・アプリケーションへノアプリケーションのマッピングでは、次はサポートされません:

- 重複メンバー使用可能オプションが選択された集約ストレージ・データベース・アウトライン
- ユーザー変数
- 属性次元
- 属性メンバー選択

マッピング・アプリケーションと代替変数

代替変数が含まれるマッピング・アプリケーションの場合、次に注意してください:

- 代替変数が確認されるのは、アプリケーション・マッピングの定義時ではなく、「データのプッシュ」をクリックしたときです。
- 「次元のマッピング」タブでの次元間マッピングの場合:
 - メンバー・セレクトには、Planning アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションに対してのみ定義された Essbase 代替変数が表示されます。
 - Planning アプリケーションの場合、選択または入力した変数名は、「データのプッシュ」をクリックしたときに Essbase によって渡されて評価されます。
 - レポート・アプリケーションの場合、変数名が Planning アプリケーションに対して評価されてから、値がデータの消去操作で使用されます。
- 「視点(POV)」タブの「視点(POV)」フィールドの場合:
 - Planning アプリケーションの場合、メンバー・セレクトには、Planning アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションにのみ定義された Essbase 代替変数が表示されます。選択または入力した変数名は、「データのプッシュ」をクリックしたときに Essbase によって渡されて評価されます。
 - レポート・アプリケーションの場合、メンバー・セレクトには、レポート・アプリケーションおよびすべての Essbase アプリケーションにのみ定義された代替変数が表示されます。変数はレポート・アプリケーションに対して評価され、評価値は、メンバー関数ではなく単一メンバーについて各レポート次元に対して検証されます。
- レポート・アプリケーションのメタデータが変更されている場合、データを編集またはプッシュしてレポート次元およびメンバーを Planning に同期する前に「リフレッシュ」をクリックします。たとえば、レポート・アプリケーションに次元またはメンバーが追加されている場合、「リフレッシュ」をクリックすると、Planning にメンバーが表示されます。レポート・アプリケーションのメタデータの変更をリフレッシュすると、マッピングが無効になる可能性があります。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの追加

- ▶ レポート・アプリケーション・データベースが存在している Essbase サーバーを追加するには、「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックスで、次のようにします。

1 「Essbase サーバー」にサーバー名を入力します。

アクティブ-パッシブ・クラスター・モードで Essbase のフェイルオーバーをサポートするようにデータ・ソースを構成するには、「Essbase サーバー名」の値

を Essbase クラスタ名が続く APS URL で置き換えます。たとえば、APS URL が `http://hostname:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「Essbase サーバー名」フィールドの値は次のようになります:

```
http://hostname:13090/aps/Essbase?clusterName=EssbaseCluster-1
```

このリリースでは、APS URL なしで「Essbase サーバー名」フィールドに Essbase クラスタ名を入力することはできません。

2 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。

3 「パスワード」にパスワードを入力します。

ユーザーの名前とパスワードは、今後のセッションで再入力が必要ないように格納されます。

4 **オプション:** Essbase サーバーへの接続をテストするには、「接続の検証」をクリックします。

5 「OK」をクリックします。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの編集

「Essbase サーバーの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、サーバー名やポート番号などのログイン情報と接続詳細を変更できます。デフォルトの Essbase サーバーでは、アプリケーションに関連付けられているデータ・ソースについて、「データ・ソースの管理」ダイアログ・ボックスで更新することができます。

注: EPM System コンフィグレータを使用して Essbase サーバーを変更する場合、Planning 内でサーバー名を更新する必要があります。

ヒント: Planning アップグレード・ウィザードを使用して、複数のレポート・アプリケーション用の Essbase サーバー情報を更新できます(323 ページの「Reporting Essbase サーバーへの参照の更新」を参照してください)。

▶ レポート・アプリケーション・データベース用に表示される Essbase サーバーを編集するには、「Essbase サーバーの編集」ダイアログ・ボックスで次を実行します:

1 「Essbase サーバー」で、使用可能なサーバーのリストからサーバーを選択します。

アクティブ-パッシブ・クラスタ・モードで Essbase のフェイルオーバーをサポートするようにデータ・ソースを構成するには、「Essbase サーバー名」の値を Essbase クラスタ名が続く APS URL で置き換えます。たとえば、APS URL が `http://hostname:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「Essbase サーバー名」フィールドの値は次のようになります:

```
http://hostname:13090/aps/Essbase?clusterName=EssbaseCluster-1
```

このリリースでは、APS URL なしで「Essbase サーバー名」フィールドに Essbase クラスタ名を入力することはできません。

- 2 「サーバー名」にサーバー名を入力します。
- 3 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。
- 4 「パスワード」にパスワードを入力します。
- 5 **オプション:** Essbase サーバーへの接続をテストするには、「接続の検証」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。

レポート・アプリケーション用の Essbase サーバーの削除

- ▶ レポート・アプリケーション・データベース用に表示されている Essbase サーバーを削除するには、「Essbase サーバーの削除」ダイアログ・ボックスで、次のようにします。
 - 1 サーバーを選択します。
現在の Planning アプリケーションが存在しているデフォルトのサーバーは削除できません。
 - 2 「削除」をクリックします。
 - 3 プロンプトで、削除が間違いないければ「OK」をクリックします。

SQL を使用してアプリケーション情報を削除

Planning 付属の SQL ファイルにより、次の情報が削除できます。

- 勘定科目注釈。304 ページの「[勘定科目注釈の削除](#)」を参照してください。
- シナリオに関するサポート詳細。305 ページの「[シナリオに関するサポート詳細を削除](#)」を参照してください。

セル詳細の消去機能を使用して、勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメントを消去できます。283 ページの「[セル詳細の消去](#)」を参照してください。

勘定科目注釈の削除

sql ディレクトリにインストールされた aadelete.sql ファイルを使って、勘定科目注釈を削除できます。ファイルには、選択された勘定科目名の注釈を削除する SQL クエリーが含まれます。「セル詳細の消去」機能を使って勘定科目注釈を消去するには、283 ページの「[セル詳細の消去](#)」を参照してください。

- ▶ 勘定科目名に関連付けられた勘定科目注釈を削除するには:

- 1 Web アプリケーション・サーバーを停止します。

- 2 削除する注釈の勘定科目名を置換して、使用しているリレーショナル・データベースのタイプに対応する `adelete.sql` ファイルの SQL クエリーのセクションを更新します。
- 3 使用しているリレーショナル・データベースに適切な `adelete.sql` ファイルのクエリーを実行します。

例: Account1 の勘定科目注釈を削除

```
DELETE
FROM HSP_ACCOUNT_DESC
WHERE ACCOUNT_ID=(SELECT OBJECT_ID FROM HSP_OBJECT
WHERE OBJECT_NAME='ACCOUNT1')
INSERT INTO HSP_ACTION
(FROM_ID, TO_ID, ACTION_ID, OBJECT_TYPE, MESSAGE, ACTION_TIME,
PRIMARY_KEY) VALUES (0,0,2,18,NULL,GETDATE(),NULL)
```

シナリオに関するサポート詳細を削除

`sql` ディレクトリにインストールされた `sddelete.sql` ファイルを使って、シナリオに関連付けられたサポート詳細を削除できます。ファイルには、選択されたシナリオのサポート詳細を削除する SQL クエリーが含まれます。セル詳細機能を使ってサポート詳細を消去するには、[283 ページの「セル詳細の消去」](#)を参照してください。

▶ シナリオに関連付けられたサポート詳細を削除するには:

- 1 Web アプリケーション・サーバーを停止します。
- 2 削除するサポート詳細のシナリオ名を置換して、使用しているリレーショナル・データベースのタイプに対応する `sddelete.sql` ファイルの SQL クエリーのセクションを更新します。
- 3 使用しているリレーショナル・データベースに適切な `sddelete.sql` ファイルのクエリーを実行します。
- 4 Web アプリケーション・サーバーを起動します。

例: シナリオに関連付けられたサポート詳細の削除

実績シナリオのサポート詳細が削除されます:

```
DELETE
FROM HSP_COLUMN_DETAIL_ITEM
WHERE DETAIL_ID IN
(SELECT DETAIL_ID
FROM HSP_COLUMN_DETAIL
WHERE DIM1 =
```

```
(SELECT OBJECT_ID
FROM HSP_OBJECT
WHERE OBJECT_NAME = 'ACTUAL'));
DELETE
FROM HSP_COLUMN_DETAIL
WHERE DIM1 =
(SELECT OBJECT_ID
FROM HSP_OBJECT
WHERE object_name = 'Actual');
```

この章の内容

メニューの作成と更新.....	307
メニュー・アイテムの操作.....	308
メニュー・アイテムの追加または変更.....	308

メニューの作成と更新

管理者は、右クリック・メニューを作成して、それをフォームに関連付けることができます。それによって、ユーザーがフォームの行や列をクリックして、次を実行するメニュー・アイテムを選択することができます:

- 実行時プロンプトがあってもなくても、別のアプリケーション、URL またはビジネス・ルールを起動
- 別のフォームへの移動
- 「承認の管理」への事前定義済のシナリオとバージョンをともなった移動
- 「ジョブ・コンソール」または「バージョンのコピー」を開く

右クリックのコンテキストは、POV とページ、ユーザーがクリックしたメンバー、左のメンバー(行)や上(列)など、次のアクションへ送られます。

フォームの設計時に、「その他オプション」を使用して、フォームのメニュー・アイテム・タイプに可能なメニューを選択します。アプリケーションを更新するとき、それに適切なメニューが更新されます。たとえば、メニューで参照されているビジネス・ルールを削除する場合は、そのルールをメニューから削除します。

▶ メニューを作成、編集、削除するには:

1 「管理」、「管理」、「メニュー」の順に選択します。

2 次のいずれかを実行します。

- メニューを作成するには、「作成」をクリックして、メニューの名前を入力して「OK」をクリックします。
- メニューを変更するには、そのメニューを選択して「編集」をクリックします。
- メニューを削除するには、そのメニューを選択して「削除」をクリックして、「OK」をクリックします。

メニュー・アイテムの操作

「メニューの編集」には、現在のメニューの名前、ラベル、必要な次元、アイコン、タイプ(「URL」、「フォーム」、「ビジネス・ルール」、「承認の管理」、「メニュー・ヘッダー」、「ジョブ・コンソール」、「バージョンのコピー」)を含むメニュー・アイテムが表示されます。

▶ メニュー・アイテムを操作するには:

- 1 「管理」、「管理」、「メニュー」の順に選択します。
- 2 メニューを選択して、「編集」をクリックします。
- 3 「初回のみ」:メニューに初めてアイテムを追加するには、「子の追加」をクリックして、「保存」をクリックします。
- 4 メニュー・アイテムを選択して、次のことを実行できます。
 - 選択したメニュー・アイテムの下にメニュー・アイテムを追加するには、「子の追加」(メニューのタイプが「メニュー・ヘッダー」の場合)をクリックします。
 - 選択したメニュー・アイテムと同じレベルにメニュー・アイテムを追加するには、「兄弟の追加」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを編集するには、「編集」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを削除するには、「削除」をクリックします。
 - 同じレベル内でメニュー・アイテムの順番を変更するには、上向き矢印または下向き矢印をクリックします。複数のアイテムを移動できます。
「メニュー・アイテムの編集」を使って、メニュー・アイテムのプロパティを定義します。
- 5 「保存」をクリックします。
「名前を付けて保存」をクリックして、新しいメニュー名の下にある現在の選択肢を保存します。

メニュー・アイテムの追加または変更

▶ メニュー・アイテムを定義するには:

- 1 「管理」、「管理」、「メニュー」の順に選択します。
- 2 メニューを選択してから「編集」をクリックします。
- 3 メニュー・アイテムを選択してから、「編集」または「兄弟の追加」をクリックします。
- 4 メニュー・アイテムを定義します:

表 64 メニュー・アイテム

アイテム	説明
メニュー・アイテム	特殊文字やスペースを入れずに、英数字とアンダースコア文字のみを含む一意の名前を入力します。

アイテム	説明
「ラベル」	メニューが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スペースおよび特殊文字を使用できません。メニュー・ラベルはユーザー・インタフェースに表示されます。ラベルはテキストか、名前のリソース変数から参照できるものにします。たとえば、メニューのラベルを「ファイル」と設定して、それを「ファイル」に直接設定するか、ローカライズ可能な、「ラベル_ファイル」のようなリソースの名前に設定します。
「アイコン」	オプション: Planning サーバーのコンテキストに、グラフィックへのパスとファイル名を入力して、メニューによって表示できるようにします。例: /HyperionPlanning/Images/globe.gif
「タイプ」	メニュー・タイプを選択して使用できるプロパティを決定します。「メニュー・ヘッダー」にプロパティは使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> 「フォーム」: 選択したフォームを起動します。ユーザーが、ソース・フォーム内で右クリックすると、メンバー、ページ、POV のメンバー選択のコンテキストが保持されます。ターゲット・フォームにページのこれらの次元メンバーが含まれる場合、そのページはコンテキストが一致するよう設定されます。 「URL」: 指定された URL にナビゲートします。 「ビジネス・ルール」: 選択されたビジネス・ルールを起動します。 「承認の管理」: 「承認の管理」に移動してプランニング・ユニットで作業します 「メニュー・ヘッダー」: 子のメニュー・アイテムの作成先にメニューを作成します。このアイテムでメニューに区切り線を表示するには、「ラベル」にハイフンを1つ入力します。この場合、「必須次元」リストは使用できません。 「前のフォーム」: ユーザーを前のフォームに戻すメニューを作成します。 「ジョブ・コンソール」: 指定されたジョブ・タイプとステータスについて、現在のユーザーに対して「ジョブ・コンソール」を開いてジョブを表示するメニューを作成します。 「バージョンのコピー」: 現在のフォームのデータをコピーできる「バージョンのコピー」ダイアログを開くメニューを作成します。
「必須パラメータ」	次元を選択するか、メニュー・アイテムを表示するオプション(「視点(POV)」、「ページ」、「行」、「列」、「メンバーのみ」、「セルのみ」)を選択します。たとえば「勘定科目」を選択すると、ユーザーがフォームで勘定科目メンバーを右クリックしたときにメニューが表示されます。「行」を選択すると、ユーザーが行を右クリックしたときにメニューが表示されます。「なし」を選択すると、ユーザーがフォーム内の任意の場所を右クリックしたときにメニューが表示されます。

5 メニュー・アイテムのタイプごとに、異なるメニュー・アイテム・プロパティを定義します:

タイプ	オプション
「フォーム」	<ol style="list-style-type: none"> 「フォーム・フォルダ」から、宛先フォームを含むフォルダを選択します。 「フォーム」からフォームを選択します。
「URL」	<ol style="list-style-type: none"> 「URL」で、ユーザーがアクセスする完全な URL を入力します。例: http://サーバー名/HFM/Logon/HsvLogon.asp 「シングル・サインオンの使用」を選択して、URL に SSO トークンを追加します。 「URL にコンテキストを含める」を選択して、コンテキストを含めます。

タイプ	オプション
「ビジネス・ルール」	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「プラン・タイプ」で、ビジネス・ルールで使用できるプランのタイプを選択します。 2. 「ビジネス・ルール」で、起動するビジネス・ルールを選択します。 3. 「表示タイプ」から、実行時プロンプト・ページの表示方法を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 「クラシック・ビュー」：デフォルトの Planning ビューを使用 ● 「ストリームライン・ビュー」：異なるラインで各実行時プロンプトを表示 4. オプション: 「ウィンドウ・タイトル」に、実行時プロンプトのかわりに表示するタイトルを入力します。 5. オプション: 「「OK」ボタン・ラベル」に、「OK」ボタンに表示するテキストを入力します。 6. オプション: 「「取消し」ボタン・ラベル」に、「取消し」ボタンに表示するテキストを入力します。 7. オプション: 「確認メッセージの起動」で、ビジネス・ルールが呼び出されて起動する前に表示するテキストを入力します。このオプションにより、管理者はビジネス・ルールの起動の結果についてプランナに意味のあるメッセージを表示することができます。
「承認の管理」	シナリオとバージョンを選択してプランニング・ユニットを指定します。
「前のフォーム」	ユーザーを前のフォームに戻すメニュー・アイテムの名前を入力します。
「バージョンのコピー」	<p>エンド・ユーザーが「バージョンのコピー」を使用して、サポート詳細、注釈、セル・テキスト、セル・ドキュメントなど、現在のフォームのフォーム・データを他のバージョンにコピーできます。次のデフォルト値を選択します:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「シナリオ」から、コピーするシナリオを選択します。 2. 「コピー元」で、コピーするデータを含むバージョンを選択します。 3. 「コピー先」で、データの複製先とするバージョンを選択します。
「ジョブ・コンソール」	<p>エンド・ユーザーが、指定したジョブ・タイプおよびジョブの「ジョブ・コンソール」を表示できます。次のデフォルト値を選択します:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ジョブ・タイプ」から、次のいずれかを選択します: <ul style="list-style-type: none"> ● 「ジョブ・タイプの選択」 ● 「ビジネス・ルール」 ● 「ルール・セット」 ● 「シーケンス」 ● 「セル詳細の消去」 ● 「データの複製」 ● 「データのプッシュ」 2. 「ジョブ・ステータス」から、次のいずれかを選択します: <ul style="list-style-type: none"> ● 「実行ステータスの選択」 ● 「ステータスの処理中」 ● 「ステータス完了」 ● 「ステータス・エラー」

6 「保存」をクリックします。

この章の内容

Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの作成について	311
Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定	312
別名テーブルの操作	324
次元の操作	327
Planning アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加	369
動的時系列メンバーの設定	371
Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作	374
スマート・リスト、UDA およびメンバー式の使用方法	378

Performance Management Architect および Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの作成について

Performance Management Architect または Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを作成できます。それぞれのアプリケーション・タイプで、異なるメニューとオプションが使用できます。たとえば、Performance Management Architect のアプリケーション管理で作成されたアプリケーションは、Performance Management Architect でスマート・リストを管理します。Planning アプリケーション管理で作成されたアプリケーションでは、「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択して、Planning の機能を使用できます。Planning アプリケーション管理タスクはこの章で説明します。Planning アプリケーション管理を使用するには、適切な役割を割り当てる必要があります。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide で説明されています。

Planning モジュールのアプリケーションの設定の詳細は、それぞれのガイドを参照してください。

Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定

Planning アプリケーション管理を使用している場合、Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、アプリケーションの作成および削除、Shared Services への登録を行います。

▶ Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを設定するには:

1 次のいずれかのタスクを実行します:

- Planning で、「管理」、「アプリケーション」、「管理アプリケーション」の順に選択します。
- EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「Planning 管理」の順に選択します。

2 タスクを完了するには、次のトピックを参照してください:

- [312 ページの「アプリケーションの管理」](#)
- [317 ページの「データ・ソースの管理」](#)
- [321 ページの「アップグレードの管理」](#)

アプリケーションの管理

Planning アプリケーションの管理を使用して Planning アプリケーションを作成、削除、登録するには、次を参照してください:

- [312 ページの「アプリケーションの作成」](#)
- [317 ページの「アプリケーションの削除」](#)
- [317 ページの「アプリケーションの登録」](#)

アプリケーションの作成

▶ Planning アプリケーション管理を使用してアプリケーションを作成および更新するには:

1 Planning アプリケーション・ウィザード([312 ページの「Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定」](#)を参照)を開始します。

2 「管理アプリケーション」で、「アクション」をクリックし、「作成」を選択します。

3 タブの情報を完成させてアプリケーションを定義します。参照:

- [313 ページの「アプリケーション情報の選択」](#)
- [313 ページの「カレンダーの設定」](#)
- [315 ページの「通貨の設定」](#)
- [316 ページの「プラン・タイプの指定」](#)

- 316 ページの「アプリケーション情報のレビュー」

アプリケーション情報の選択

アプリケーション名および説明を指定し、Shared Services でアプリケーションを登録後、データ・ソースを選択します。

Planning をインストールして構成する際に、デフォルトのインスタンス(クラスタ)が設定されます。EPM System コンフィグレータを使用してクラスタを更新するには、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

▶ アプリケーション情報を選択するには:

- 1 Planning のアプリケーション・ウィザードで「管理アプリケーション」を選択し、「アクション」で「作成」を選択します。

312 ページの「Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定」を参照してください。

- 2 「選択」をクリックします。

- 3 データ・ソースを選択します。

317 ページの「データ・ソースの管理」>を参照してください。

- 4 アプリケーション名を入力します。

名前は最大 8 文字までです。既存の Essbase アプリケーションと同名にはできません。

- 5 アプリケーションの説明を入力します。

- 6 「アプリケーション・タイプ」には、作成しているアプリケーションの値アプリケーションを選択します。Planning アプリケーションの場合、「一般」を選択します。

- 7 Shared Services アプリケーション・グループを選択します。

- 8 「次へ」をクリックします。

カレンダーの設定

カレンダーで、アプリケーションの基本期間、最初の会計年月度、ならびに合計年数を確認させます。月の会計週数を基に、基本期間と月次配置パターンを選択します。基本期間のオプションは、アプリケーションの最下位レベルの基本期間です。週や日など、カスタム基本期間を作成できます。月次配置パターンを使用して、要約期間に入力したデータを、指定の基本期間にどう配置させ分散させるかを決定します。ユーザーは年または四半期などの要約期間にデータを入力することができます。Planning により、要約期間を構成する基本期間のなかで、これらの値が配置されます。

会計年度に対し、会計年度の最初の月を設定して、会計年度が同じカレンダー年または前のカレンダー年のどちらで開始するかを指定できます。数式を使用するなどにより、カレンダー年に基づく計算を後で設定できます。Planning アプリケーションに式を設定する場合、[TPDate]および[FirstDate]のような数式は、アプリケー

ションが同じカレンダー年に開始するかまたは前のカレンダー年に開始するかにより異なる結果が生成されます。385 ページの「数式の実行」を参照してください。

次の表は、「会計開始年度」を 2012 と仮定して、「会計年度の最初の月」および「会計開始年度」オプションがアプリケーションのカレンダーに与える影響の例を示しています。

表 65 「会計年度の最初の月」および「会計開始年度」オプションの例

会計年度の最初の月	会計開始年度	期間 - 年	年次元
1 月	同じカレンダー年	Jan-12 から Dec-12 まで	FY12
7 月	同じカレンダー年	Jul-12 から Jun-13 まで	FY12
7 月	前のカレンダー年	Jul-11 から Jun-12 まで	FY12
2 月	同じカレンダー年	Feb-12 から Jan-13 まで	FY12
2 月	前のカレンダー年	Feb-11 から Jan-12 まで	FY12
12 月	同じカレンダー年	Dec-12 から Nov-13 まで	FY12
12 月	前のカレンダー年	Dec-11 から Nov-12 まで	FY12

▶ カレンダーを設定するには:

1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「カレンダー」をクリックします。

312 ページの「Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定」を参照してください。

2 カレンダーのロールアップ方法を設定するには、「基本期間」オプションを選択します。

- 「12 か月」: 1 年に 4 回の四半期 - 月は親四半期に、四半期は年にロールアップ。
- 「四半期」: 四半期は年にロールアップ。
- 「カスタム」: 週や日などのカスタム期間。

3 「最初の会計年度」を選択します。

この選択によって、アプリケーションの会計開始年度が定義されます。アプリケーションの作成後はこれを変更することはできません。最初の会計年度を指定する前に、組織が履歴データをどの程度必要とするか検討してください。

4 アプリケーションの「会計年度の数」を選択します。

この選択により、カレンダーの年数が定義されます。アプリケーションを作成した後に、カレンダーへ年数をさらに追加することができます。

5 「会計年度の最初の月」を選択します。

この選択はアプリケーションの会計年度の最初の月で、「最初の会計年度」オプションにより異なります。

6 「会計年度の開始日」を選択します:

- 「同じカレンダー年」。会計年度が現在のカレンダー年で始まるように設定します。たとえば、開始期間が6月の2010年を選択すると、開始年度がFY10として作成され、July-10からJun-11と定義されます。
- 「前のカレンダー年」。年度が前のカレンダー年で始まるように設定します。たとえば、2012年を6月の開始期間で選択すると、開始年がFY12として作成され、Jul-11からJun-12までと定義されます。

1月から開始するアプリケーションの場合、「同じカレンダー年」オプションだけが使用できます。

- 7 基本期間を「12か月」に設定する場合、「週次配分」オプションとして、「均等」、「445」、「454」または「544」のいずれかを選択します。

週次配分により、月の会計週数に基づいて月次配分パターンが設定されます。この選択によって、要約期間のデータを基本期間内にどう分布させるかが決定されます。ユーザーが、四半期などの要約期間に、データを入力する際、要約期間内の基本期間に値が分散されます。

週次配分パターンを「均等」以外で設定すると、Planningは選択パターンに従って、13週に分かれて週が配分されたかのように四半期ごとの値が扱われます。たとえば、「5-4-4」を選択すると、四半期の最初の月は5週、最後の2か月は4週あることとなります。

- 8 すべての年を含む「すべての年」親メンバーを作成するには、「すべての年」親で「はい」を選択します。

「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までの合計費用などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、親メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。

注：「すべての年」はPlanningモジュールに対して作成されたアプリケーションにのみ使用でき、Planning汎用アプリケーションには使用できません。

- 9 「次へ」をクリックします。

通貨の設定

アプリケーションのエンティティに対してデフォルト通貨を指定し、通貨換算をアプリケーションでサポートするかどうかを設定します。レベル0のメンバーは、基本通貨にかかわらず、複数通貨に対応(または通貨上書きとも呼ばれる)できます。

▶ 通貨を設定するには:

- 1 Planningアプリケーション・ウィザードで、「通貨」をクリックします。

312 ページの「[Planningアプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。

- 2 アプリケーションのエンティティにデフォルト通貨を選択します。

- 3 複数通貨のアプリケーションには、「はい」を、単一通貨のアプリケーションには、「いいえ」を選択して、アプリケーションが複数の通貨をサポートするかどうかを指定します。

アプリケーションの作成後は、このオプションを変更できません。レベル0のメンバーは、基本通貨にかかわらず、複数通貨に対応できます。「はい」を選択すると、「通貨」および「HSP_Rates」の2つの次元が作成されます。

4 「次へ」をクリックします。

プラン・タイプの指定

アプリケーションのプラン・タイプを3つまで指定します。各プラン・タイプに対し、個々に Essbase データベースが作成されます。アプリケーション作成後はプラン・タイプの名前や数を変更できません。

アプリケーションの勘定科目、エンティティおよび他の要素を作成すると、それらがプラン・タイプに関連付けられるため、各プラン・タイプのデータベースは、そのプラン・タイプに関連のある情報のみが含まれます。これで、設計、サイズおよびパフォーマンスが最適化されます。

注： Essbase は、ASO データベースごとに別々のアプリケーションを必要とします。ASO プラン・タイプを作成する場合は、アプリケーション名を指定する必要があります。

▶ プラン・タイプを選択するには:

1 **Planning** アプリケーション・ウィザードで、「プラン・タイプ」をクリックします。

312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。

2 アプリケーションの各プランの「プラン・タイプ」を選択し、プラン名を指定します。

Planning のプラン・タイプを少なくとも1つ選択してください。Planning のプラン・タイプは、3つまで選択可能であり、最大8文字の名前を付けることができます。(1バイトおよび2バイトの文字で8文字以上入力することは可能ですが、Essbase データベースが作成される際、エラー・メッセージが表示されます。)

3 ASO プラン・タイプを作成する場合は、AS01 を選択し、アプリケーション名を指定します。

4 「次へ」をクリックしてアプリケーション情報をレビューし、アプリケーションを作成します。

アプリケーション情報のレビュー

▶ アプリケーションを作成または更新する前にアプリケーション情報をレビューするには:

1 **Planning** アプリケーション・ウィザードで、「終了」をクリックします。

312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。

- 2 選択した設定をレビューします。一部の設定は、アプリケーションの作成後に変更できません。
- 3 **オプション:** アプリケーション設定を変更するには、「前へ」をクリックしてアプリケーション情報を更新してから、「終了」をクリックして更新した設定を確認します。
- 4 アプリケーションを作成するには、「作成」をクリックします。

アプリケーションの削除

Planning アプリケーション・ウィザードを使用すると、Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションを削除できます。削除する前にアプリケーションのバックアップを行ってください。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。

▶ アプリケーションを削除するには:

- 1 アプリケーションのバックアップを行います。
- 2 Planning アプリケーション・ウィザード(312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照)を開始します。
- 3 「管理アプリケーション」でアプリケーションを選択し、「アクション」をクリックして「削除」を選択します。
- 4 削除を確認するメッセージが表示されたら、「OK」をクリックして削除を続行します。

アプリケーションの登録

Planning アプリケーション・ウィザードを使用すると、アプリケーションの Shared Services アプリケーション・グループを再登録できます。

▶ アプリケーションを登録するには:

- 1 Planning アプリケーション・ウィザード(312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照)を開始します。
- 2 「管理アプリケーション」でアプリケーションを選択し、「アクション」をクリックして「登録」を選択します。
- 3 In 「登録」で、「Shared Services プロジェクト」を選択し、「OK」をクリックします。

データ・ソースの管理

各 Planning アプリケーションを、リレーショナル・データベースと Essbase サーバーにリンクするデータ・ソースに関連付けてください。Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、データ・ソースを作成、更新、テスト、削除できます。次を参照してください。

- [318 ページの「データ・ソースの作成」](#)

- [319 ページの「データ・ソースの編集」](#)
- [320 ページの「接続の確認」](#)
- [321 ページの「データ・ソースの削除」](#)

Performance Management Architect で作成された Planning アプリケーションでは、Performance Management Architect のデータ・ソースを管理してください。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

データ・ソースはインスタンス(クラスタとも呼ばれる)に関連付ける必要があります。クラスタを更新するには、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

注： EPM System コンフィグレータを使用して Essbase サーバーを変更する場合、Planning 内でサーバー名を更新します。

データ・ソースの作成

Planning アプリケーション管理のデータ・ソースを作成するには、データ・ソース名と説明を入力してリレーショナル・データベースを選択し、リレーショナル・データベースと Essbase サーバーの詳細を指定します。リレーショナル・データベースと Essbase サーバーのパスワード情報は暗号化されて保管されます。アプリケーションを Unicode モードに設定することもできます。Unicode モードのアプリケーションでは、複数の文字セットに対応しています。Essbase で Unicode モードのアプリケーションを操作する際、UTF-8 のエンコード・フォームで解釈されて文字テキストが保管されます。Unicode モード・アプリケーションの文字ベースのアーティファクト(メンバーおよび別名など)では、異なる言語から文字を含めることができます。詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

▶ アプリケーション管理のデータ・ソースを作成するには:

- 1 Planning のアプリケーション・ウィザードで「データ・ソースの管理」をクリックし、「アクション」で「作成」を選択します。[312 ページの「Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定」](#)を参照してください。Planning で、「管理」、「データ・ソースの管理」の順に選択してから、「アクション」をクリックして「作成」を選択する方法もあります。
- 2 データ・ソース名と説明を入力します。
- 3 アプリケーション・データベースの詳細を指定します:
 - 「データベース」 - リレーショナル・データベース
 - 「サーバー」 - データベースをホストするサーバー
 - 「ポート」 - ポート(ポートの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照)
 - 「サービス名または SID」 - Oracle サービス名または SID (orcl など)
 - 「ユーザー」 - データベースのユーザー名

- 「パスワード」 - データベース・パスワード

- 4 **上級ユーザーのみ:** 必要に応じて、「サーバー」および「ポート」フィールドの情報のかわりにカスタム URL を使用してデータ・ソースを作成します。「カスタム」をクリックしてから、データ・ソースの URL を「接続 URL」に入力します。

EPM System コンフィグレータを使用したデータベースの構成の詳細および URL の例は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

カスタム URL を入力すると、サーバーとポートの前の接続設定が上書きされます。カスタム URL を削除し、サーバーとポートの前の設定に戻るには、「カスタム」チェック・ボックスの選択を解除します。Oracle RAC 構成が使用されている場合、Planning データ・ソースの作成中、RAC 詳細が「カスタム URL」に表示されます。

- 5 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。

- 6 次の Essbase サーバーの詳細を指定します:

- 「サーバー」 - サーバー名(構成中に Essbase エージェント・ポートのデフォルトのポート番号を変更した場合、Oracle Essbase サーバーは `ServerName:newPortNumber` のフォーマットである必要があります。たとえば、構成時にポート番号が 1400 に設定され、サーバーがローカルで実行されている場合、サーバー名はこのフォーマットを使用して `ServerName:1400.` となります)。
- 「ユーザー」 - サーバーのユーザー名
- 「パスワード」 - サーバーのパスワード
- オプション - アプリケーションを Unicode モードに設定するには、「Unicode」を選択します。

詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

- 7 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。

- 8 「保存」をクリックします。

データ・ソースの編集

Planning アプリケーション管理では、ウィザードを使ってデータ・ソース名、説明、リレーショナル・データベース、リレーショナル・データベースの説明および Essbase サーバーを更新できます。

▶ データ・ソースを編集するには:

- 1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「データ・ソースの管理」をクリックします。312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。Planning で、「管理」、「データ・ソースの管理」の順に選択することもできます。
- 2 データ・ソースを選択して「アクション」をクリックし、「編集」を選択します。
- 3 データ・ソース名と説明を更新します。

- 4 アプリケーション・データベースの詳細を指定します:
 - 「サーバー」: データベースをホストするサーバー
 - 「ポート」: ポート。デフォルトのポートおよびポートの変更方法の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。
 - 「データベース」: データベース名
 - 「ユーザー」: データベース・ユーザー名
 - 「パスワード」: データベースのパスワード
- 5 **上級ユーザーのみ:** 必要に応じて、「サーバー」および「ポート」フィールドの情報かわりにカスタム URL を使用してデータ・ソースを作成します。「カスタム」をクリックしてから、データ・ソースの URL を「接続 URL」に入力します。

EPM System コンフィグレータを使用したデータベースの構成の詳細および URL の例は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

カスタム URL を入力すると、サーバーとポートの前の接続設定が上書きされます。カスタム URL を削除し、サーバーとポートの前の設定に戻るには、「カスタム」チェック・ボックスの選択を解除します。
- 6 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
- 7 Essbase サーバーの詳細を指定します。
 - 「サーバー」: サーバー名
 - 「ユーザー」: サーバー・ユーザー名
 - 「パスワード」: サーバーのパスワード
- 8 **オプション:** アプリケーションを Unicode モードに設定するには、「Unicode モード」を選択します。

詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。
- 9 「検証」をクリックし、指摘されている問題を修正します。
- 10 「保存」をクリックします。
- 11 データ・ソースが正常に更新されたことを通知するメッセージが表示されたら、[X]をクリックしてメッセージを閉じます。
- 12 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して、アプリケーションに使用するインスタンス(クラスター)を選択します。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。

接続の確認

データベースまたは Essbase への接続テストができます。

▶ 接続を確認するには:

- 1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「データ・ソースの管理」をクリックします。

312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。

- 2 接続をテストするには、「検証」をクリックします。
- 3 接続が終了したことを通知するメッセージが表示されたら、[X]をクリックしてメッセージを閉じます。

データ・ソースの削除

Planning アプリケーション管理では、Planning アプリケーション・ウィザードを使用して、アプリケーションと関連付けられていないデータ・ソースを削除できます。

▶ データ・ソースを削除するには:

- 1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「データ・ソースの管理」をクリックします。312 ページの「[Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定](#)」を参照してください。Planning で、「管理」、「データ・ソースの管理」の順に選択することもできます。
- 2 削除するデータ・ソースを選択し、「アクション」をクリックして、「削除」を選択します。
- 3 データ・ソースが正常に削除されたことを通知するメッセージが表示されたら、[X]をクリックしてメッセージを閉じます。

アップグレードの管理

Planning アップグレード・ウィザードを使用して、再ホストされたデータ・ソースへの参照を更新および Planning アプリケーションをアップグレードします。たとえば、Essbase サーバー・ホストおよびポートが以前のリリースから変更されている場合、データ・ソースを更新し、Planning から Reporting アプリケーションへのマッピングを更新する必要があります。データ・ソースが変更されている場合、データ・ソースの接続を更新する必要があります。Planning アップグレード・ウィザードにより、複数のデータ・ソースおよび Reporting アプリケーションを同時に更新できます。Performance Management Architect で作成されたアプリケーションまたは Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションも、アップグレード・ウィザードでアップグレードします。

- 再ホストされたリレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーへの参照の更新については、322 ページの「[データ・ソースへの参照の更新](#)」を参照してください。
- Reporting アプリケーションのある再ホストされた Essbase サーバーへの参照の更新については、323 ページの「[Reporting Essbase サーバーへの参照の更新](#)」を参照してください。
- Performance Management Architect または Planning アプリケーション管理で作成された Planning アプリケーションをアップグレードする場合、323 ページの「[アプリケーションのアップグレード](#)」を参照してください。

データ・ソースへの参照の更新

Planning アップグレード・ウィザードを使用して、再ホストされたリレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーへの参照を更新します。

注： データ・ソースへの参照を更新する前に、Essbase サーバーおよびリレーショナル・データベースが実行していることを確認します。

▶ データ・ソースへの参照を更新するには:

- 1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「アップグレード・ウィザード」をクリックします。
- 2 「データ・ソースの更新」タブで、各 Planning データ・ソースのリレーショナル・データベース情報および Essbase サーバー情報を確認します。Essbase サーバー・ホストおよびポートがアップグレード中に変更された場合、またはリレーショナル・データベースが新しいホストに移動していた場合、情報を更新します。

- 同じ情報で複数のリレーショナル・データベースを更新するには:
 - 1 ページの下部で、リレーショナル・データベースの更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - 2 「リレーショナル情報の更新」で、新しいデータベース情報を入力します。
 - 3 「選択項目に適用」をクリックします。

- 同じ情報で複数の Essbase サーバーを更新するには:
 - 1 ページの下部で、Essbase 情報の更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - 2 「Essbase 情報の更新」で、新しい Essbase サーバー情報を入力します。
アクティブ-パッシブ・クラスタ・モードで Essbase のフェイルオーバーを使用する場合は、Essbase クラスタ名が続く APS URL を指定します。たとえば、APS URL が `http://<hostname>:13090/aps` で Essbase クラスタ名が `EssbaseCluster-1` の場合、「Essbase サーバー名」フィールドの値は次のようになります:

```
http://<hostname>:13090/aps/Essbase?  
clusterName=EssbaseCluster-1
```

このリリースでは、APS URL なしで Essbase クラスタ名を入力することはできません。

- 3 「選択項目に適用」をクリックします。

- データ・ソースを個別に更新するには:
 - 1 ページの下部で、更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 - 2 データ・ソースの新しい情報を入力します。

- 3 「アクション」でオプションを選択します

- 「リセット」をクリックして更新を元に戻します。

- 「検証」をクリックして、選択したデータ・ソースへの接続をテストし、示された問題があれば修正します。
 - 「保存」をクリックして、選択したデータ・ソースへの更新を保存します。
- 4 「次へ」をクリックして、「アプリケーションのアップグレード」タブに進みます(323 ページの「アプリケーションのアップグレード」を参照)。

注： Planning アプリケーションに反映された更新が表示されない場合、Planning サーバーを停止してから再起動します。

アプリケーションのアップグレード

Planning アップグレード・ウィザードを使用して、Performance Management Architect または Planning アプリケーション管理を使用して作成された Planning アプリケーションをアップグレードします。この手順の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

注： アプリケーションをアップグレードする前に再ホストされたデータ・ソースへの参照を更新する必要があります。322 ページの「データ・ソースへの参照の更新」および323 ページの「Reporting Essbase サーバーへの参照の更新」を参照してください。

Public Sector Planning and Budgeting ユーザーはアップグレード後に追加のデータ移行タスクを実行する必要があります。既存のアプリケーション・メタデータおよびアーティファクトの移行に関する指示は、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting User's Guide の付録 B を参照してください。

Reporting Essbase サーバーへの参照の更新

Planning アップグレード・ウィザードを使用して、Reporting アプリケーションで使用する Essbase サーバーへの参照を更新します。

注： Reporting Essbase サーバーへの参照を更新する前に、Essbase サーバーおよびリレーショナル・データベースが実行していることを確認します。

- ▶ Reporting アプリケーションがある Essbase サーバーへの参照を更新するには:
- 1 Planning アプリケーション・ウィザードで、「アップグレード・ウィザード」をクリックします。
 - 2 「レポート用 Essbase サーバーの更新」タブで、レポート・アプリケーション用の Essbase サーバー情報を確認または更新します。

アップグレード済みのアプリケーションおよび Essbase サーバー(デフォルトの Essbase サーバーを除く)で Reporting アプリケーションが作成済みのアプリケーションのみがリストされます。

- 同じ情報で複数の Reporting アプリケーションを更新するには:

1. ページの下部で、更新を適用するアプリケーションを選択します。
2. 「Reporting Essbase 情報の更新」で、新しい Essbase サーバー情報を入力します。
3. 「選択項目に適用」をクリックします。

- Reporting アプリケーションを個別に更新するには:

1. ページの下部で、更新を適用する Reporting アプリケーションを選択します。
2. 各アプリケーション用の新しい Essbase サーバー情報を入力します。

3 「アクション」でオプションを選択します:

- 「リセット」をクリックして更新を元に戻します。
- 「検証」をクリックして、選択した Essbase サーバーへの接続をテストし、示された問題があれば修正します。
- 「保存」をクリックして、選択した Essbase サーバーへの更新を保存します。

4 「アプリケーションのアップグレード」タブに切り替える場合は、「戻る」をクリックします(323 ページの「アプリケーションのアップグレード」を参照)。

注: Planning アプリケーションに反映された更新が表示されない場合、Planning サーバーを停止してから再起動します。

別名テーブルの操作

別名テーブルの作成および更新、アプリケーションの別名テーブルの設定ができます。付録 B「命名規則」の命名に関するルールに従います。

別名テーブルについて

代替名(別名)を Planning 勘定科目、通貨エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義の次元メンバーに割り当てることができます。Planning では、次元メンバーごとに、デフォルトの別名を含めて、最大 32 個の別名を付けることができます。

Planning アプリケーションの作成の際、Essbase では、オンラインのデータベースに空白のデフォルトの別名テーブルが作成されます。その他の別名テーブルを作成しない場合、すべての別名は、このデフォルトのテーブルに保管されます。デフォルトのテーブルは削除できません。

Essbase に最大 9 個の別名テーブルを作成することができます。別名または別名テーブルを追加または変更する場合は、アプリケーションをリフレッシュする必要があります。変更は、データベースが更新されるまで適用されません。オンラインのデータベースを表示するには、Administration Services Console を開き、「オンライン」、「別名」、「テーブルの設定」の順で選択し、別名テーブルを選択します。Planning 内で作成した別名テーブルのみ使用できます。Planning 以外で作成された別名テーブルは、アプリケーションがリフレッシュしている間に削除されます。

複数の別名テーブルが次の言語の組合せに対応しています。

- 英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語およびイタリア語
- 日本語と英語
- 韓国語と英語
- トルコ語と英語

別名テーブルを設定してアプリケーションのメンバーを表示できます。プランナは、プリファレンスの別名テーブルを設定できます。

別名テーブルの作成

▶ 別名テーブルを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「別名テーブル」の順に選択します。
- 2 「追加」をクリックします。
- 3 「エクスプローラ・ユーザー・プロンプト」に名前を入力します。
- 4 「OK」をクリックします。

別名テーブルの編集または名前変更

▶ 別名テーブルの編集または名前を変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「別名テーブル」の順に選択します。
- 2 別名テーブルを選択します。
- 3 「編集」をクリックします。
- 4 「エクスプローラ・ユーザー・プロンプト」に名前を入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

別名テーブルの削除

▶ 別名テーブルを削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「別名テーブル」の順に選択します。
- 2 別名テーブルを選択します。
デフォルトの別名テーブルは削除できません。
- 3 「削除」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

別名テーブルの消去

別名テーブルのコンテンツを消去できます。

▶ 別名テーブルを消去するには:

- 1 「管理」、「管理」、「別名テーブル」の順に選択します。
- 2 消去する別名テーブルを選択します。
別名テーブルを消去すると、テーブルの内容は除去されますが、テーブル自体は除去されません。
- 3 「値の消去」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

別名テーブルのコピー

▶ 別名テーブルをコピーするには:

- 1 「管理」、「管理」、「別名テーブル」の順に選択します。
- 2 別名テーブルを選択します。
- 3 「コピー」をクリックします。
- 4 移行先の別名テーブルを選択します。

移行先の別名テーブルが存在している必要があります。コピーしてもテーブルは作成されません。

- 5 「コピー」をクリックします。

デフォルトの別名テーブルの指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定

勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義の次元とメンバーの別名で別名テーブルを作成する場合、アプリケーション用デフォルトの別名テーブルを選択できます。ユーザーは、一連の別名(別名テーブルに保管済)でプリファレンスを設定し、メンバーおよび次元名の表示に使用できます。

▶ アプリケーションのデフォルトの別名テーブルを選択するには、次の操作を行います。

- 1 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 2 「現在のアプリケーション・デフォルト」、「アプリケーション設定」の順に選択します。
- 3 「別名テーブル」で、デフォルトの別名テーブルを選択します。
- 4 「メンバー名/別名の表示」で、アプリケーション全体で「メンバー・セレクタ」に表示するメンバー・データの種別を有効にするオプションを選択します:
 - 「デフォルト」 - フォーム、グリッドまたは次元設定によって決定されるデータ
 - 「メンバー名」 - メンバー名のみ
 - 「別名」 - メンバーの別名のみ(定義されている場合)

- 「メンバー名:別名」 - 名前に続けて別名(定義されている場合)
- 「別名:メンバー名」 - 別名(定義されている場合)に続けて名前

5 「保存」または、「リセット」をクリックします。

次元の操作

サブトピック

- [次元の概要](#)
- [次元階層の操作](#)
- [メンバーの祖先の表示](#)
- [アプリケーション内でメンバーが使用される場所を確認](#)
- [カスタム次元について](#)
- [エンティティについて](#)
- [基本通貨](#)
- [勘定科目について](#)
- [勘定科目、エンティティ、プラン・タイプ](#)
- [ユーザー定義のカスタム次元について](#)
- [ユーザー定義カスタム次元の追加または編集](#)
- [メンバーの操作](#)
- [属性の操作](#)
- [属性値の操作](#)
- [カレンダーのカスタマイズ](#)
- [通貨の設定](#)
- [複数通貨を使用可能にする](#)
- [為替レートの指定](#)
- [シナリオの設定](#)
- [バージョンの指定](#)
- [バージョンとシナリオ・メンバーのソート](#)
- [次元階層内でシナリオとバージョン・メンバーを移動](#)

次元の作成および更新は、「管理」>「次元」を選択して実行できます。

次元の概要

次元で、データ値が分類されます。Planning には、7 個の次元(勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、期間、年、通貨)が含まれます。最大 13 個のユーザー定義のカスタム次元を作成できます。

次元とメンバーについて

メンバーは次元のコンポーネントです。

疎な次元と密な次元について

疎次元には、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在しません。密次元には、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在します。Essbase には、少なくとも 1 つ

の密次元が必要です。カスタム属性を密次元に割り当てることはできません。Planning では、勘定科目および期間の次元は密となり、他の次元は疎となります。疎次元のパフォーマンスを最適化するために、Planning は各次元の組合せにあるデータ値のみを検索および計算します。これにより、計算時間が短縮し、ディスク容量を削減させることができます。この設定を変更することも可能です。[91 ページの「次元の順序変更」](#)および[340 ページの「次元の密度と順序の設定」](#)を参照してください。

次元の階層について

次元の階層は、構造的および算術関係、さらにデータベースのメンバー間の連結を定義します。関係は、折りたたみ式の階層図式で表示されます。データベース名の下位には次元が示され、各次元の下位にはメンバーが示されます。

期間次元に、メンバーの第 1、第 2、第 3、第 4 四半期を含む、メンバーの「年合計」を含めることができます。メンバーの第 1、第 2、第 3 および第 4 四半期には、その年に追加した月の独自のメンバーを含みます。期間次元のデータ値を集計するには、月次データ値をロール・アップして四半期ごとのデータ値を取得し、さらに四半期のデータ値をロール・アップして年次データ値を取得します。

同じ次元またはメンバーに属する同レベルのメンバーを兄弟と呼びます。たとえば、第 1、第 2、第 3 および第 4 四半期は、階層の同一レベルにあるので兄弟であり、同じメンバーである年合計のメンバーです。


次元のメンバーを次元の子と呼びます。メンバーに属するメンバーを、そのメンバーの子と呼びます。メンバーの年合計は、期間の子であり、第 1、第 2、第 3、第 4 四半期のメンバーは、年合計の子、さらに、1 月、2 月、3 月は第 1 四半期の子と見なします。第 1 四半期は 1 月、2 月、3 月の親で、年合計は第 1、第 2、第 3、第 4 四半期の親、さらに期間は年合計の親と見なします。

次元階層の操作


タスク	トピック
次元プロパティの指定または変更	「編集」をクリックします。
次元の追加	「次元の追加」をクリックします。
次元メンバーの検索	330 ページの「次元またはメンバーの検索」 を参照してください。
次元階層の展開または縮小	「展開」または「縮小」をクリックします。
次元メンバーの追加または編集	「子の追加」または「兄弟の追加」をクリックします。
次元メンバーの移動	330 ページの「次元階層内でのメンバーの移動」 を参照。
次元メンバーの削除	345 ページの「メンバーの削除」 を参照。
次元メンバーへのアクセス権の割当て	56 ページの「メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て」 を参照してください。
メンバーの祖先を表示	「祖先の表示」をクリックします。

次元階層の展開および縮小

▶ 次元またはメンバーを展開するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、展開する次元およびメンバーを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 「展開」をクリックします。
 - をクリックします。
 - 閉じているフォルダをクリックします。

▶ 次元またはメンバーを縮小するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、縮小する次元を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 「縮小」をクリックします。
 - 「左向き矢印」キーを押します。
 - をクリックします。
 - 開いているフォルダをクリックします。

次元階層の移動

- 上向き矢印キーを押して前のメンバーに移動します。
- 下向き矢印キーを押して次のメンバーに移動します。
- 「ページ」の位置で、表示させるページを入力し、「実行」をクリックするかまたは[Enter]キーを押します。
- 「開始」、「前へ」、「次へ」または「終了」をクリックして他のページを表示します。

デフォルトでは、1 ページに 14 個のメンバーが表示されます。表示する数を、「指定したメンバーを各次元のページに表示」のプリファレンスで設定して変更できます。

プラン・タイプによる次元ビューのフィルタ

プラン・タイプ別に次元ビューをフィルタできます。プラン・タイプを選択すると、そのプラン・タイプで使用されているメンバーのみが「次元」ページに表示されます。



▶ プラン・タイプ別に次元ビューをフィルタするには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「プラン・タイプ」で、プラン・タイプを選択します。

選択したプラン・タイプで使用されているメンバーのみが Planning に表示され
ます。

次元またはメンバーの検索

▶ 次元階層内の次元メンバーを検索するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、メンバーの次元を選択します。
- 3 「検索」で、名前、別名のどちらかまたは両方を選びます。
- 4 検索するメンバーの名前、別名または文字列の一部を入力します。
- 5 「下方向に検索」 または「上方向に検索」 をクリックします。



メンバーのソート

子または子孫による昇順または降順でメンバーをソートできます。Essbase アウ
トラインにソートがかかります。

▶ メンバーをソートするには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、メンバーの次元を選択します。
- 3 「次元」タブで、子または子孫をソートするメンバーを選択します。
- 4 「ソート」で、子または子孫を選択します。

子でソートする場合は、選択したメンバーの真下のレベルにあるメンバーの
みにソートがかかります。子孫でソートする場合は、選択したメンバーのす
べての子孫にソートがかかります。

- 5 昇順でソートする場合は を、降順でソートする場合は をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするときは、Essbase アウトラ
インが表示された順序でメンバーを生成させます。

次元階層内でのメンバーの移動

1 個のメンバーまたは同一の分岐にあるメンバーのグループを移動できます。勘
定科目メンバーを移動する場合、「プランのタイプに有効」が新しい親と異なる設
定の勘定科目メンバーを移動させる場合、移動させたメンバーの設定は新しい親
の設定に一致するよう変更されます。「ソース・プラン・タイプ」の設定が新しい
親と異なるメンバーを移動する場合、移動したメンバーのソース・プラン・タイ
プは最初に有効なプラン・タイプに一致するよう変更されます。

▶ メンバーまたは兄弟間の分岐を移動するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。

- 2 「次元」で、移動するメンバーの次元を選択します。
- 3 移動するメンバーまたは分岐を選択します。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - メンバーを1つ上に移動するには、▲をクリックします。
 - メンバーを1つ下に移動するには、▼をクリックします。

▶ 親および子を含めてメンバーを移動するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、移動するメンバーを持つ次元を選択します。
- 3 移動するメンバーまたは分岐を選択します。

- 4 「切取り」をクリックします。

次元の追加や編集、別ページへのナビゲート、メンバーの削除または Planning をログオフした後に、メンバーを切り取ることはできません。ルート次元メンバーには使用できません。

- 5 メンバーの移動先のレベルをクリックします。
- 6 「貼付け」をクリックします。
- 7 「OK」をクリックします。
- 8 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

列の最小化と復元

▶ 列を最小化または復元するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 最小化または復元する列を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 列を最小化するには、列のヘッダーをダブルクリックするかまたは列を右クリックして「最小化」を選択します。
 - 列を基の幅に戻すには、最小化した列のヘッダーをダブルクリックするか、列を右クリックしてから「復元」を選択します。
 - 前に最小化したすべての列を元の幅に復元するには、列のヘッダーをダブルクリックしてから「すべて復元」を選択します。

Planning では、各次元の列幅は個々に保存されます。列幅は、次元メンバーを追加、編集または削除のセッション中、または別の次元を選択するセッション中は保存されません。

メンバーの祖先の表示

▶ メンバーの祖先を表示するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。

- 2 「次元」で、次元を選択します。
- 3 次元階層内のメンバーを選択します。
- 4 「祖先の表示」をクリックします。
- 5 「閉じる」をクリックします。

アプリケーション内でメンバーが使用される場所を確認

▶ アプリケーション内でメンバーが使用される場所を表示するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 表示するメンバーの使用される次元を選択します。
- 3 「用途の表示」をクリックします。
- 4 「メンバーの用途」ウィンドウの下端で、メンバーの用途を表示するアプリケーションの場所を選択します。
選択した次元メンバーに適切なオプションです。
- 5 「実行」をクリックします。
- 6 「閉じる」をクリックします。

カスタム次元について

Planning には、勘定科目およびエンティティの 2 つのカスタム次元が含まれています。これらの次元の名前を編集し、最大 13 のユーザー定義の次元を作成できます。勘定科目およびユーザー定義の次元は、プランナから収集するデータを指定するために使用します。エンティティは、組織内のプランニング情報のフローをモデリングして、プランのレビュー・パスを確立するために使用します。

集約オプション

集約オプションを使用して、次元階層内に計算を定義できます。集約オプションで、親のメンバーに対する子のメンバーの値をどのように集約させるか決定します。

- +加算
- -減算
- *乗算
- /除算
- %パーセント
- ~無視
- なし(階層に関係なく集約しない)

ストレージ・オプション

表 66 ストレージ・オプション

オプション	影響
「動的計算および保管」	メンバーのデータ値および保管値を計算します。
「保管」	メンバーの保管データ値
「動的計算」	メンバーのデータ値を計算し、値を無視します。
「共有しない」	同じ次元内のメンバーでデータ値を共有することを禁止します。
「共有」	同じ次元内のメンバーでデータ値を共有することを許可します。
「ラベルのみ」	メンバーに関連付けられているデータはありません。

動的計算について

動的に計算されたメンバーを持つ Planning では、メンバーのデータ値が計算され、これらの値が無視されます。Essbase では、動的計算の親の子数は 100 に制限されています。メンバーのストレージを動的計算に変更すると、本来のデータの導出方法によっては、データが紛失する場合があります。アウトラインか計算のどちらかまたは両方を更新して動的に計算された値を取得することが必要な場合もあります。

「動的計算」と「動的計算および保管」の違い

たいいていの場合、疎次元のメンバーを計算する際に「動的計算および保管」を使用するかわりに「動的計算」を使用して、計算を最適化し、ディスク容量を削減できます。複雑な式を持つ疎次元のメンバーか、頻繁に取得するユーザーには「動的計算および保管」を使用します。

密次元のメンバーには「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」で取得時間と通常の計算時間を多少削減させることはできますが、大幅なディスク容量の削減はできません。多くのユーザーが同時にアクセスするデータ値には、「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」と比べて、大幅な取得時間の削減が可能な場合があります。

注意:

- ユーザーがデータを入力するベース・レベルのメンバーには「動的計算」を使用しないでください。
- ターゲット・バージョンのメンバーにデータを入力する場合は、親のメンバーには「動的計算」を使用しないでください。「動的計算」に設定した親のメンバーは、ターゲット・バージョンで読取り専用となります。
- 「動的計算」メンバーのデータ値は保存されません。

保管データ・ストレージについて

子が「動的計算」に設定されている場合は、親メンバーを「保管」に設定しないでください。この組み合わせの場合、ユーザーがフォームを保存したりリフレッシュしたりする際、親の新たな合計が計算されません。

共有データ・ストレージについて

「共有」を使用して、アプリケーション内のロールアップ構造体の代替を許可します。

共有しないデータ・ストレージについて

ユーザー定義のカスタム次元を追加する際、デフォルトのデータ・ストレージ・タイプは「共有しない」です。親に集約されている1つの子メンバーのみを持つ親に対して「共有しない」を使用し、子メンバーへのアクセスを適用できます。

ラベルのみデータ・ストレージについて

ラベルのみメンバーは、通常ナビゲーションで使用される仮想メンバーで、関連付けるデータはありません。注意:

- レベル0のメンバーには、「ラベルのみ」を割り当てることはできません。
- ラベルのみメンバーは値を表示できます。
- 次元のメンバーをラベルのみにすると、ブロック・サイズが減少するためデータベース容量を最小化できます。
- ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることはできません。
- 複数通貨アプリケーション内では、ラベルのみストレージを次元(エンティティ、バージョン、通貨、ユーザー定義のカスタム次元)のメンバーに適用できません。為替レートを保管するには、「共有しない」を使用します。
- ラベルのみ親の子のデータ・ストレージは、デフォルトで「共有しない」に設定されています。

注意 最初の子メンバーにデータを保存できませんので、最初の子メンバーの後に続くラベルのみ親にフォームを設計しないでください。そのかわり、子の前に選択されたラベルのみ親でフォームを作成するか、フォームにラベルのみ親を選択しないようにしてください。

エンティティについて

エンティティは通常、地域、部署、部門など組織の構造に一致します。承認を受けるためにプランを提出するグループのメンバー・エンティティを作成します。エンティティ・メンバーは、予算のレビューや承認を定義するのに役立ちます(247ページの「[予算編成プロセスの管理](#)」を参照してください)。

たとえば、国の拠点の予算準備を行う地域センターを持つことができます。国の拠点は企業本部のプランを準備する場合があります。この構造を一致させるには、地域、国、本部のメンバーを作成します。地域を国メンバーの子として指定し、さらに国メンバーを本部の子として指定します。

フォームは1エンティティ当たり複数の通貨をサポートするので、複数通貨のデータ入力を使用可能にし、単一の通貨でレポートを作成できます。ただし、Planningでは各エンティティの基本エンティティに対応しています。定義した為替レートを持つ他の通貨に換算された、入力値の通貨を設定できます。

基本通貨

複数通貨アプリケーションの場合、各エンティティ・メンバーの基本通貨を指定します。エンティティ・メンバーのデフォルトの基本通貨は、アプリケーション作成時に指定された通貨です。たとえば、米国ドルがデフォルト通貨の場合でも、日本のエンティティには円を、米国のエンティティには米国ドルを指定できます。日本のエンティティの値を持つフォームを使用する際、表示する通貨が米国ドルに設定されている場合、為替レート・テーブル内のレートを使用して、値は米国ドルに換算されます(円を現地通貨、米国ドルをレポートの通貨と仮定)。

勘定科目について

勘定科目次元のメンバーで予算プランナから必要な情報を指定します。予算管理者に予算アイテムのデータを入力する勘定科目の構造を作成します。勘定科目構造内の計算が定義できます。

勘定科目タイプ

勘定科目タイプで勘定科目のタイム・バランス(値が時間をフローする状態)が定義され、Essbase メンバーの式で差異レポートへの勘定科目のサイン動作を決定します。

勘定科目タイプの使用例

表 67 勘定科目タイプの使用方法

勘定科目タイプ	目的
支出	ビジネスを行う費用
収益	収益源
資産	会社のリソース
負債と資本	残余持分または債権者への義務
保存された仮定	アプリケーションで一貫性を確保する集中管理されたプランニング仮定

勘定科目タイプの要約

表 68 勘定科目タイプの要約

勘定科目タイプ	タイム・バランス	差異レポート
収益	フロー	支出外
支出	フロー	支出
資産	残高	支出外
負債	残高	支出外
資本	残高	支出外

勘定科目タイプ	タイム・バランス	差異レポート
保存された仮定	ユーザー定義	ユーザー定義

差異レポートおよびタイム・バランスの設定はシステム定義ですが、保存された仮定は唯一ユーザー定義です。

タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランスで Planning の要約期間の値の計算方法が指定されます。

表 69 タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランス・プロパティ	説明	例
フロー	期間合計としての要約期間のすべての値の集約	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 45
最初	期間合計としての要約期間内の最初の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 10
残高	期間合計としての要約期間内の最後の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 20
平均	期間合計としての要約期間内のすべての子値の平均	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
入力	親での値の設定は、その親のすべての祖先に入力されます。子の値が変更されると、デフォルト集約論理はその親に適用されます。 集計演算子およびメンバー式は、メンバーが再計算される際に入力値に上書きされます。	1月: 10 2月: 10 3月: 10 Q1: 10
加重された平均 - Actual_Actual	加重日平均は1年の実際の日数に基づいており、2月が29日までであるうるう年に対応しています。例では、第1四半期(Q1)の平均は次のように計算されています。(1)第1四半期の各月の値に、月の日数を掛け合わせる。(2)これらの値の合計を出す。(3)出した合計を第1四半期の日数で割る。うるう年と仮定した場合、 $(10 \times 31 + 15 \times 29 + 20 \times 31) / 91 = 15$ という計算になります。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
加重された平均 - Actual_365	加重日平均は1年365日に基づき、2月を28日までと仮定しており、うるう年に対応していません。例では、第1四半期(Q1)の平均は次のように計算されています。(1)第1四半期の各月の値に、月の日数を掛け合わせる。(2)これらの値の合計を出す。(3)出した合計を第1四半期の日数で割る。うるう年と仮定しない場合、 $(10 \times 31 + 15 \times 28 + 20 \times 31) / 90 = 15$ という計算になります。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15

「加重された平均-Actual_Actual」および「加重された平均-Actual_365」タイム・バランス・プロパティは、4つの四半期がロープアップされている標準月次カレンダーでのみ使用できます。Planningで異なるタイム・バランス設定のデータを計算および分散する方法の詳細は、Oracle Hyperion Planning User's Guideを参照してください。

勘定科目タイプと差異レポート

勘定科目の差異レポートのプロパティにより、Essbase のメンバー式に使用される
ときの支出として扱われているかが次のように決定されます。

- 支出: 実績値は予算値から引かれて、差異が計算されます。
- 支出外: 予算値は実績値から引かれて、差異が計算されます。

ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定

「最初」、「残高」、「平均」のタイム・バランス・プロパティで、データベース計算
がスキップ・オプションのあるゼロと欠落したデータの扱い方を指定します。

表 70 タイム・バランス・プロパティに「最初」が設定されているときのスキップ・オプションの適用

スキップ・オプション	説明	例
「なし」	ゼロおよび#MISSING 値は、親の値(デフォルト)を計算するときに考慮され ます。例では、最初の子(1月)の値は0で、ゼロは親の値を計算するときに考慮 されるので、Q1(第1四半期)=0と見なされます。	1月:0 2月:20 3 月:25 Q1:0
「欠落」	親の値を計算するときに#MISSING 値は除外されます。例では、最初の子(1 月)の値は#MISSING で、#MISSING 値は親の値を計算するときに考慮されないので、 Q1(第1四半期)=2番目の子(2月)または20です。	1月:#MISSING 2月: 20 3月:25 Q1:20
「ゼロ」	親の値を計算するときにゼロ値は除外されます。例では、最初の子(1月)が0 で、ゼロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1(第1四半期)=2 番目の子(2月)または20です。	1月:0 2月:20 3 月:25 Q1:20
「欠落およびゼロ」	親の値を計算するときに#MISSING およびゼロ値は除外されます。例では、最 初の子(1月)はゼロで、2番目の子(2月)は欠落しています。欠落した値とゼ ロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1(第1四半期)=3番目の 子(3月)または25です。	1月:0 2月: #MISSING 3月:25 Q1:25

保存された仮定

保存された仮定を使用して、プランニング仮定を集中させ、主要なビジネス要因
を識別し、アプリケーションの一貫性を確実にさせます。タイム・バランスと差
異レポートのプロパティを選択します。

- 差異レポートにより、予算データと実際のデータ間の差異を支出または支出
外に決定します。
- タイム・バランスにより、要約期間の末尾の値が決定されます。

次に、タイム・バランスと差異レポートのプロパティが保存された仮定勘定科目
メンバーでどう使用されるかについて例を示します。

- 人数に費やされた実際の金額は予算金額よりも少ないと仮定し、差異レポー
トに支出タイプの保存された仮定を作成します。Planning では、予算金額から
実際の金額が差し引かれて差異が決定されます。
- 期間の末尾の値を使用して、オフィスの床面積の値を決定します。

- 期間の最終時点で売上製品ユニットの数を仮定します。期間中に売ったユニット数を集約して、要約期間の最後の値を決定します。

データ型と為替レート・タイプ

データ型と為替レート・タイプで、勘定科目メンバーにどのように値が保管され、為替レートが計算値にどのように使われるかが次のように決定されます。勘定科目メンバーの値の使用可能なデータ・タイプ:

- 通貨 - デフォルト通貨で保管および表示。
- 通貨以外 - 数値として保管および表示。
- パーセンテージ: パーセントとして数値を保管および表示。
- 日付 - 日付として表示。
- テキスト - テキストとして表示。

次は、通貨データ型を持つ勘定科目で使用できる為替レート・タイプ(どの期間にも有効)です。

- 平均 - 平均為替レート
- 期末 - 期末の為替レート
- 履歴 - 為替レートは、たとえば、利益剰余金の勘定科目の収益が入ったか、固定資産の資産が購入されたときに有効です。

勘定科目、エンティティ、プラン・タイプ

エンティティおよび勘定科目メンバーにプラン・タイプを割り当てて、メンバーの子にアクセスさせるプラン・タイプを設定します。たとえば、合計売上の勘定科目は収益と P&L に有効にできますが、固定資産の勘定科目は貸借対照表のみに有効です。メンバーにプラン・タイプを割り当てないと、そのプラン・タイプにメンバーの子がアクセスできません。

メンバーを移動するとき、新しい親が別のプラン・タイプに有効な場合、メンバーは新しい親と共通のプラン・タイプにのみ有効です。勘定科目メンバーの新しい親が別のソース・プラン・タイプを有する場合、メンバーのソース・プラン・タイプは、そのメンバーの最初に有効な新規プランに設定されます。

エンティティおよびプラン・タイプ

通常、エンティティ・メンバーは異なるプランを準備します。エンティティ・メンバーを定義する際、メンバーに有効なプラン・タイプを指定します。フォームはプラン・タイプに関連付けられているので、各プラン・タイプにデータを入力できるエンティティ・メンバーを制御できます。

勘定科目およびプラン・タイプ

勘定科目が複数のプラン・タイプに有効な場合、ソース・プラン・タイプを指定して、勘定科目の値を保管するプラン・タイプのデータベースを決定します。

ユーザー定義のカスタム次元について

ユーザー定義のカスタム次元は最大 13 個まで追加できます。たとえば、各プロジェクトに、営業経費の予算を立てるための「プロジェクト」と呼ばれる次元を追加できます。名前、別名、プラン・タイプ、セキュリティ、属性、属性値などのプロパティを定義します。

注意 カスタム次元は、一度作成すると削除できません。

ユーザー定義のカスタム次元は、メンバー・レベルでなく、次元レベルで割り当てられた有効なプラン・タイプのエンティティおよび勘定科目の次元と異なります。ユーザー定義のカスタム次元のすべてのメンバーは、次元レベルで割り当てられたプラン・タイプに有効です。



ユーザー定義カスタム次元の追加または編集

ユーザー定義のカスタム次元は付録 B「命名規則」にあるガイドラインに適合させてください。

表 71 ユーザー定義カスタム次元のプロパティ

プロパティ	値
「次元」	次元全体で一意である名前を入力します。
「別名」	オプション: 別名テーブルを選択します。次元に付ける一意の代替名を入力します。
「説明」	オプション: 説明を入力します。
「プラン・タイプに有効」	有効な次元にプラン・タイプを選択します。このオプションを選択解除すると、次元のすべてのメンバーは選択しないプラン・タイプに無効になります。
「セキュリティの適用」	次元メンバーにセキュリティの設定を行います。次元メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択してください。そうしない場合、次元にセキュリティがかからないため、ユーザーは無制限にメンバーをアクセスさせることができます。
「データ・ストレージ」	データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「共有しない」です。

▶ ユーザー定義の次元を追加または変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2  をクリックするか、既存の次元を選択して  をクリックします。
- 3 前述のプロパティのいずれかを指定します。
- 4 「保存」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

「リフレッシュ」をクリックすると、前の値に戻されます。ページは開いたままです。

次元プロパティの設定

次元プロパティは付録 B「命名規則」にあるガイドラインに適合させてください。



表 72 次元プロパティ

プロパティ	値
「次元」	次元名を入力します。
「別名」	オプション: 別名テーブルを選択し、代替名を最大 80 文字で入力します。次元の命名規則に従ってください。
「説明」	オプション: 説明を入力します。
「プラン・タイプに有効」	有効な次元にプラン・タイプを選択します。エンティティや勘定科目次元には使用できません。
「セキュリティの適用」	次元メンバーにセキュリティの設定を行います。このオプションを選択しないと、次元にはセキュリティが設定されず、ユーザーはそのメンバーに制限なしにアクセスできます。次元メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。
「データ・ストレージ」	データ・ストレージ・オプションを選択します。
「表示オプション」	「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。
「カスタム属性表示を使用可能」	関連付けられた属性で、使用可能で選択された次元の属性を表示します。カスタム属性を属性で表示可能にします。

次元の密度と順序の設定

「パフォーマンス設定」タブで、次元を疎または密に設定し、その優先順位を設定できます。





▶ パフォーマンス設定を管理するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「パフォーマンス設定」を選択します。
- 3 各次元に対し、「密度」を「密」または「疎」に設定します。
[327 ページの「疎な次元と密な次元について」](#)を参照してください。
- 4 次元を選択し  または  をクリックして、優先順位を設定します。
[91 ページの「次元の順序変更」](#)を参照してください。



評価順序の設定

「評価順」タブで、データ交差にデータ・タイプの競合がある場合に優先されるデータ・タイプを指定できます。たとえば、勘定科目メンバーが通貨データ・タイプに設定され、製品メンバーがスマート・リスト・データ・タイプに設定されている場合、通貨またはスマート・リスト・データ・タイプのどちらが交差時に優先かを設定できます。

▶ 評価順序を設定するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「評価順序」を選択します。
- 3 プラン・タイプを選択して「実行」をクリックします。
- 4 「使用可能な次元」から次元を選択し、これらを「選択した次元」に移動します。
 -  は、選択した次元を移動します
 -  はすべての次元を移動します
 -  は、選択した次元を削除します
 -  はすべての次元を除去します

メンバーが特定のデータ・タイプを持つ次元のみを選択する必要があります(つまり、そのデータ・タイプは「未指定」ではありません)。データ・タイプ「未指定」は他のデータ・タイプと競合しません。

- 5 複数の次元を選択した場合、 または  をクリックして優先順序を設定します。
- 6 「保存」をクリックします。

メンバーの操作

サブトピック

- [動的メンバーについて](#)
- [メンバーの追加または編集](#)
- [メンバーの削除](#)
- [親メンバーの削除](#)
- [フォームからのメンバーのプロパティの表示](#)
- [共有メンバーの操作](#)
- [共有メンバーの作成](#)

メンバーへのアクセス権の割当て、次元メンバー階層の変更、エンティティ、勘定科目およびユーザー定義のカスタム次元の共有ができます。

動的メンバーについて

動的メンバーは、ビジネス・ルールを操作するとき、存在するメンバーの数が不十分であり、管理者がデータベースをリフレッシュして必要なプレースホルダを Essbase に再作成する必要があると指示された場合に、ユーザーが作成できるメンバーです。ビジネス・ルールの操作と動的メンバーの詳細は、Oracle Hyperion Calculation Manager 管理者ガイドを参照してください。

注： 動的メンバーを作成する機能は、Oracle Hyperion Workforce Planning、Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting、Oracle Hyperion Capital Asset Planning、Oracle Project Financial Planning など初期化されたモジュール・アプリケーションでのみ使用できます。

動的メンバーをサポートするように次元メンバーの親を構成するには:

- 342 ページの「メンバーの追加または編集」の説明に従ってメンバーの親を編集します。
- 表 73 で、最後の 3 つのプロパティを指定します。
- Essbase で、動的メンバーのプレースホルダを作成するデータベースをリフレッシュします。

動的な子を使用できる親メンバーの下にロードした(アウトライン・ロード・ユーティリティまたは Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Management を使用して)子メンバーは、Essbase に動的メンバーのプレースホルダが存在する場合、動的な子メンバーとして追加されます。プレースホルダがいっぱいになると、残りの子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。「注意:」動的な子を使用できる親メンバーと、その子メンバーを同じインポートで同時にインポートすると、子メンバーは通常のメンバーとしてロードされます。これは、Essbase にプレースホルダを作成するためにデータベースのリフレッシュが必要なためです。

メンバーの追加または編集

メンバーを付録 B「命名規則」にリストされているガイドラインに適合させてください。共有メンバーは346 ページの「共有メンバーの操作」と整合性がとれている必要があります。

表 73 メンバーのプロパティ

プロパティ	値
「名前」	次元メンバー全体で一意である名前を入力します。
「説明」	オプション: 説明を入力します。
「別名」	オプション: 別名テーブルを選択し、別名を保管します。メンバーの代替の名前を入力します。
勘定科目メンバーのみ: 「勘定科目タイプ」	勘定科目タイプを選択します。
勘定科目メンバーのみ: 「差異レポート」	勘定科目タイプが「保存された仮定」の場合は、「差異レポート」に「支出」または「支出外」を選択します。保存された仮定を、収益、資産、負債、資本の勘定科目に指定します。
勘定科目メンバーのみ: 「タイム・バランス」	タイム・バランスで、「フロー」または「残高」を選択します。
勘定科目メンバーのみ: 「為替レート・タイプ」	「為替レート・タイプ」で、オプションを 1 つ選択します。
勘定科目メンバーのみ: 「データ型」	「データ型」で、データ型を選択します。

プロパティ	値
「配分」	週次配分を設定します。アプリケーションの作成時に、このオプションが選択済で基本期間が12か月の場合、リーフ勘定科目メンバーに使用できます。
「階層タイプ」	<p>「階層タイプ」は、ASO プラン・タイプにバインドされる次元に使用できます。ASO 次元は、階層の階層をサポートするために自動的に有効になります。複数階層の次元の最初の階層は保管階層である必要があります。</p> <p>注： 保管階層タイプのメンバーに対して有効なプラン・タイプ集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。保管階層で、最初のメンバーを「加算」に設定する必要があります。動的階層タイプのすべてのメンバーについては、すべてのプラン・タイプ集約オプションが有効です。「ラベルのみ」メンバーの子ではない保管階層では、集計演算子として「加算」を指定する必要があります。「ラベルのみ」メンバーの子は「無視」に設定できます。</p>
「データ・ストレージ」	Essbase データベースの構築に使用されたデータ・ストレージ・プロパティを選択します。新規カスタム次元メンバー(ルート・メンバー以外)に対して、デフォルトは「共有しない」です。
「2パス計算」	親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。
エンティティ・メンバーのみ: 「基本通貨」	エンティティ・メンバーの基本通貨を選択します。
「表示オプション」	「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。
「プラン・タイプ」	<p>有効なメンバーにプラン・タイプを選択します。</p> <p>注： メンバーはASOとBSO両方のプラン・タイプに所属できます。</p> <p>選択された各プラン・タイプに集約オプションを選択します。複数のプラン・タイプがメンバーに有効な場合は、ソース・プランのみを選択できます。メンバーの親に有効なプラン・タイプと集約オプションのみが使用できます。親がプラン・タイプまたは集約オプションに有効でない場合は子も同様に有効になりません。勘定科目またはエンティティの親メンバーのプラン・タイプの選択を解除すると、その親のすべての子孫への選択も解除されます。保管階層タイプのメンバーに対して有効な集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。</p> <p>注意 アプリケーションにデータが入力された後、次元メンバーのプラン・タイプの選択解除を行うと、アプリケーションがリフレッシュされたときにデータが紛失する場合があります。勘定科目メンバーについては、選択解除されたプラン・タイプがソース・プラン・タイプの場合、データは失われます。</p> <p>カスタム次元のメンバーは、勘定科目次元やエンティティ次元と同様、プラン・タイプ別に使用方法を設定できます。</p>
エンティティ・メンバーのみ: 基本通貨	エンティティ・メンバーの基本通貨を選択します。
勘定科目メンバーのみ: ソース・プラン・タイプ	メンバーのソース・プラン・タイプを選択します。共有メンバーは基本メンバーへのポイントで、Essbaseに保管されません(これは共有メンバーに無効です)。共有メンバーに適用されないため、「ソース・プラン」フィールドは使用できませんが、共有の勘定科目メンバーのソース・プラン・タイプは基本メンバーのソース・プラン・タイプと一致します。
スマート・リスト	オプション: スマート・リストを選択してメンバーに関連付けます。

プロパティ	値
「動的な子に対して使用可能」	ビジネス・ルールを使用して、このメンバーの追加の子をユーザーが作成できます。
「使用可能な動的な子の数」	必要に応じて、または要求に対してユーザーが作成できるメンバーの最大数を入力します。
「メンバー作成者にアクセス権が付与されました」	<p>ビジネス・ルールの起動時に動的にメンバーを作成する場合に、ユーザーが持つアクセス権を決定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「継承」 - 階層で最も近いメンバーにアクセスできます。 ● 「なし」 - メンバーを表示できません ● 「読取り」 - 動的に作成される新しいメンバーを、表示できますが変更はできません ● 「書込み」 - 動的に作成された新しいメンバーを変更できます

▶ ユーザーを追加または編集するには:

1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。

2 次元を選択します。

3 次のいずれかを実行します。

- 子メンバーを追加するには、メンバーを追加する親レベルの次元階層を選択し、「子の追加」をクリックします。
- 兄弟を追加するには、兄弟を追加するレベルの次元階層を選択し、「兄弟の追加」をクリックします。
- 既存のメンバーを編集するには、そのメンバーを次元階層から選択して、「[Enter]」キーを押すか、「編集」をクリックします。

注: 「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、「年次元」を選択してから「すべての年」をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までの合計費用などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、「すべての年」メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。

4 「メンバーのプロパティ」「」タブで、上の表で説明したメンバー・プロパティを設定または変更します。

現在のページに新規メンバーが表示されないときは、「次へ」をクリックします。

5 「保存」をクリックして、リレーショナル・データベースに新しい情報を保存し、変更が次元階層に反映されることを確認します。

6 データベースをリフレッシュすると、データを入力するプランナに編集したメンバーが表示されます。

7 次元メンバーを作成した後、通常は、次のタスクを完了させます。

- アクセスを割り当てます。56 ページの「メンバーおよびビジネス・ルールへのアクセス権の割当て」を参照してください。
- 属性を指定します。

メンバーの削除

注意 各データ値は、一連の次元メンバー値とプラン・タイプで識別されます。次元メンバーの削除やプラン・タイプの選択解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュするときにデータが失われます。エンティティ・メンバーを削除すると、エンティティ・メンバーに関連付けられたすべてのプランニング・ユニット(データを含む)が削除されます。この操作を行う前に、バックアップを実行してください。92 ページの「アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ」、および Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

メンバーを削除する前に、メンバーが使用されているアプリケーション(フォーム、プランニング・ユニット、為替レートなど)の場所を、「用途の表示」で確認します。

エンティティ・メンバーを次元から削除する前に Planning 全体にわたってエンティティ・メンバーを削除してください。たとえば、エンティティ・メンバーがフォームで使用されている場合には、そのエンティティ・メンバーを次元から削除する前に、フォームから削除する必要があります。

エンティティのサブツリーを多数削除するとき、すべてのシナリオとバージョンのサブツリー(ルート・メンバーを除いて)のプランニング・ユニットを最初に削除するとパフォーマンスを向上させることができます。247 ページの「レビュー・プロセス」を参照してください。

▶ メンバーを削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 削除するメンバーの次元を選択します。
- 3 次元階層から、削除するエンティティ・メンバーを選択します。
- 4 「削除」をクリックします。
基本メンバーを削除すると、その共有メンバーも削除されます。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

親メンバーの削除

注意 データ値は、一連の次元メンバー値とプラン・タイプで識別されます。次元メンバーの削除やプラン・タイプの選択解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュするときにデータが失われます。この操作を行う前に、バックアップを実行してください。92 ページの「アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ」、および Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

▶ 次元階層から親メンバーとそのすべての子孫を削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 削除するメンバーと子孫の次元を選択します。
- 3 削除する分岐を持つメンバーを選択します。
- 4 「削除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

フォームからのメンバーのプロパティの表示

▶ フォームからメンバーのプロパティを表示するには:

- 1 フォームで、行または列番号を選択し、右クリックします。
- 2 「プロパティをアウトラインに表示」を選択します。
「次元」ページに、階層内にハイライトされたメンバーが表示されます。
- 3 **オプション:** 「編集」を選択し、メンバーのプロパティを表示してから「取消し」をクリックします。

共有メンバーの操作

共有メンバーで Planning アプリケーション内のロールアップ構造体の代替えをすることができます。共有メンバーを作成する前に基本メンバーが存在する必要があります。基本メンバーに複数の共有メンバーを作成できます。共有メンバーを上から下まで位置づける前に基本メンバーを表示させてください。

共有メンバーは、エンティティ、勘定科目、ユーザー定義のカスタム次元に使用できます。アウトラインをロールアップする際、共有メンバーの値を無視して二重計算を防ぐことができます。

共有メンバーは、メンバーに有効なメンバー名、別名、基本通貨、プラン・タイプなどのプロパティの定義をいくつか共有します。共有メンバーには、一意の親メンバーおよび異なるロールアップの集約を設定させる必要があります。カスタム属性、カスタム属性値およびメンバー式を共有メンバーに使用することはできません。基本メンバーの名前を変更すると、すべての共有メンバーの名前も変更されます。

共有メンバーを別の親メンバーに移動させることはできません。移動させる場合、共有メンバーを削除してから、別の親メンバーの下に再度作成します。共有メンバーを階層の最下位(レベル・ゼロ)に置いてください。基本メンバーをレベル・ゼロにする必要はありません。共有メンバーにデータを入力し、値を基本メンバーと共に保管できます。

共有メンバーは基本メンバーと同様に、Smart View のメンバー選択の次元階層に表示されます。

共有メンバーの作成

共有メンバーを、他のメンバーと同じ方法で作成できますが、次のように異なる点があります。

- 基本メンバーは、共有メンバーの親にはなれません。
- 共有メンバーを兄弟として基本メンバーに追加できません。
- 共有メンバーの名前は、基本メンバーと同じにする必要があります。共有メンバーに別の説明を付けることはできません。
- 共有メンバーのデータ・ストレージ・オプションは、「共有」にする必要があります。

属性の操作

グループ・メンバーに同じ条件で属性を使用します。疎次元のメンバーのみに属性を割り当てることができます。ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることができません。Essbaseで親が動的に計算されるため、属性次元は集約プロパティを持ちません。

勘定科目の次元は通常、密として定義されますので、すべてのプラン・タイプの次元を疎に変更しないかぎり、属性を割り当てることができません。次元を疎から密に変更する場合、変更する次元のすべての属性および属性の値は自動的に削除されます。

348 ページの「属性のデータ型の理解」に記載されているように、属性は、テキスト、日付、ブール式、数値のデータ型を持つことができます。属性の名前は付録 B「命名規則」にリストされているガイドラインに適合させてください。属性が定義されると、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用し、「等しい」や「以上」などの属性関数を選択できます。

▶ 属性、属性値、別名を作成または変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 定義する属性、属性値または別名に疎次元を選択します。
疎次元のみが属性を持つことができます。
- 3 次元階層の最上位を選択し、「編集」をクリックします。
- 4 「次元プロパティ」ダイアログ・ボックス内で「カスタム属性」をクリックします。
次元が疎次元ではない場合、「カスタム属性」は使用できません。
- 5 オプションを選択します。
 - 属性を作成するには、「作成」をクリックします。属性の名前を入力し、「テキスト」、「日付」、「ブール式」、「数値」のデータ型を選択します。348 ページの「属性のデータ型の理解」を参照してください。属性が一度作成されると、データ型を変更することができなくなります。
プラン・タイプのオプションは、エンティティの次元属性のみに使用できます。属性が一度作成されると、この設定を変更することができなくなります。
 - 属性を変更するには、「変更」をクリックし、属性の名前を更新します。
 - 属性に別名を設定するには、属性と属性値を選択し、「別名」をクリックします。別名テーブルを選択して別名を入力してから、「保存」をクリックします。

6 「閉じる」をクリックします。

「閉じる」をクリックすると、階層が検証され、問題が検知されるとエラーが表示されます。たとえば、日付の属性値は正しいフォーマットで入力される必要があります。数値と日付の次元には、少なくとも1つの定義された属性値が必要です。

7 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

属性のデータ型の理解

属性次元は、数値、ブール式または日付のデータ型を持つことができます。これにより、グルーピングに異なる関数テキストの使用、選択を可能にするかまたはデータの計算を可能にします。属性タイプは属性次元のレベル0のメンバーにのみ適用します。

- テキストの属性で、計算における基本の属性メンバー選択と属性の比較ができます。このような比較を実行する際、Essbaseでは、文字が比較されます。たとえば、パッケージ・タイプの「Bottle」はパッケージ・タイプの「Can」より小さいということになります。アルファベットではBはCの前にくるからです。
- 数値の属性次元でレベル0のメンバーの名前に数の値が使用されます。計算には数値の属性次元のメンバーの名前(値)を含めることができます。たとえば、オンスの属性に指定されたオンスの数を使用して、各プロジェクトのオンスごとの収益を計算することができます。さらに、市場人口のグループ化による製品売上げの分析など、数値の属性を基本次元の値の範囲に関連付けることができます。
- データベース内のブール式の属性次元には、2個のメンバーのみが含まれています。Planningにブール式の属性次元が追加されると、2個の属性値、すなわちTRUEおよびFALSEが、この属性次元にデフォルトで作成されます。勘定科目やエンティティなどの基本次元を、1つだけのブール式データ型属性次元に関連付けることができます。
- 日付の属性で、月-日-年または日-月-年という日付フォーマット、およびそれに応じたシーケンス情報を指定できます。計算にも日付の属性を使用できます。たとえば、12-22-1998からの製品売上げを選択する計算で日付を比較できます。ユーザーは「アプリケーション設定」プリファレンスの「属性次元日付フォーマット」のオプションを1つ選択して日付フォーマットを設定できます。

属性およびその値の詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

属性の削除

属性を削除すると、その属性に関連付けられたすべての属性値も削除されます。属性値は割り当てられたメンバーから除去され、属性は割り当てられた次元から除去されます。

▶ 属性を削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 属性を削除する疎次元を選択し、「編集」をクリックします。
- 3 「カスタム属性」をクリックします。
- 4 削除する属性を選択します。
- 5 「属性」列の上で、「削除」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。
- 7 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

属性値の操作

属性値には、フォームの使用の際、次元メンバーを選択する別の方法があります。属性値のデータ値は動的に計算されますが保管されません。

属性値の作成

通常、エンティティとユーザー定義のカスタム次元の疎次元に、属性値を定義できます。次元の属性値を定義した後、その属性値をその次元のメンバーに割り当てることができます。

▶ 属性値を作成するには:




- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 属性値を作成する疎次元を選択します。
- 3 次元階層内の最上位レベルを選択します。
- 4 「カスタム属性」をクリックします。
- 5 「属性と値の管理」ページで、値を指定する属性値を選択します。
- 6 「属性値」列の上で「作成」をクリックします。オプションが使用できる場合は「子の追加」または「兄弟の追加」をクリックします。
- 7 「属性値の作成」の「名前」で名前を入力します。
- 8 「[Enter]」キーまたは「保存」を押します。
- 9 「取消し」をクリックします。

メンバーへの属性値の割当て

すべてのプラン・タイプに疎と定義される次元の属性値メンバーを割り当てることができます。属性値は同レベルの疎次元メンバーへ割り当ててください。そうしないと、リフレッシュ中にエラーが表示されます。

▶ メンバーへ属性値を割り当てるには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 属性値を割り当てるメンバーの疎次元を選択します。

- 3 「次元」階層から、属性値を割り当てるメンバーを選択します。
- 4 「編集」をクリックします。
属性値を割り当てられたメンバーについては、「表示」をクリックしてメンバーの属性値を変更します。
- 5 「属性値の選択」を選択します。
- 6 属性値を選択してメンバーへ割り当てます。
- 7 次のいずれかのアクションを行います:
 - 選択したメンバーへ値を割り当てるには、をクリックします。
 - 選択したメンバーから値を除去するには、除去する値を選択し、をクリックします。
 - 選択したメンバーからすべての値を除去するには、をクリックします。
- 8 「保存」をクリックします。

属性値の変更

- ▶ 属性値を変更するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
 - 2 変更する属性値の疎次元を選択します。
 - 3 次元階層内の最上位レベルを選択します。
 - 4 「カスタム属性」をクリックします。
 - 5 「属性」で、変更する値を含む属性を選択します。
 - 6 「属性値」で、属性値を選択します。
 - 7 「属性値」の上の、「変更」をクリックします。
 - 8 「属性値の変更」の「名前」で名前を入力します。
 - 9 「保存」をクリックします。

属性値の削除

属性値を削除すると、属性値が割り当てられていたすべてのカスタム次元から、属性値が除去されます。

- ▶ 属性値を削除するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
 - 2 削除する値の属性を含む疎次元を選択します。
 - 3 次元階層内の最上位レベルを選択します。
 - 4 「カスタム属性」をクリックします。
 - 5 「属性」で、削除する属性値を含む属性を選択します。
 - 6 「属性値」で、削除する属性値を選択します。

削除する属性値をすべて選択するには、「属性値」を選択します。

- 7 「属性値」列の上で、「削除」をクリックします。
- 8 「OK」をクリックします。
- 9 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

カレンダーのカスタマイズ

期間次元を使用して、月次カレンダーのロールアップ構造体を操作できます。アプリケーションの作成時に、管理者は Planning のデータベースにスパンする基本期間を指定しています。年次元を使用して、カレンダーへ年を追加します。

表 74 カレンダー・タスク

タスク	トピックを参照
年をロールアップする方法を定義します。	351 ページの「カレンダーのロールアップ方法の定義」
要約期間を作成、編集します。	351 ページの「要約期間の作成と編集」
要約期間を削除します。	352 ページの「要約期間の削除」
会計年度と期間階層を操作します。	353 ページの「年の操作」

カレンダーのロールアップ方法の定義

表 75 カレンダーのロールアップ

基本期間	ロールアップ
12 か月	年ごとに 4 つの四半期が作成されます。月は親の四半期にロールアップされ、四半期は年にロールアップされます。
四半期	四半期は年にロールアップされます。
カスタム	デフォルトのロールアップ構造はありません。カスタム基本期間の固定リストが表示されます。

アプリケーションのカレンダーが一度作成されると、カレンダーの基本期間を変更したり、年数を減らしたりすることはできなくなります。管理者は、階層内の名前、説明、別名、要約期間を変更できます。

アプリケーションには、最大 100 のカレンダーの年と 500 の期間が可能です。実際条件はカレンダーの年と期間の関数です。期間数の年数をどの程度設定できるかは、アプリケーションが複数の通貨を使用しているかどうかによります。アプリケーションに次の実用条件を推奨しています。

- 1 年間に 400 期間で、27 年
- 1 年間に 360 期間で、30 年

要約期間の作成と編集

名前、説明、別名、開始期間、終了期間などを変更できます。ただし、基本期間の順序を変更したり基本期間をスキップすることはできません。現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。

要約期間を作成する際、階層の上位から下位へ操作してください(その操作をしないと、Planning では、ロールアップ構造を非対称で表示するため、継続できなくなります)。要約期間は、選択されたアイテムの親として、階層内を表示します。バランスのとれた階層にするには、すべての基本メンバーをルートから同じレベル数にする必要があります。

▶ 要約期間の作成または編集をするには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「期間」を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 期間を追加するには、期間を追加する次元階層の上のレベルを選択し、「追加」をクリックします。
 - 期間を編集するには、期間を選択して「編集」をクリックします。
- 4 「名前」で、要約期間の名前を入力するか変更します。
- 5 「オプション」: 「説明」で、説明を入力します。
- 6 「オプション」: 「別名」で、使用する別名テーブルを選択します。別名を入力します。
1つ選択しないと、デフォルトのテーブルが使用されます。
- 7 「開始期間」で、開始する期間を選択します。
現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。要約期間には、「開始期間」に最初の子が表示されるか、その上の兄弟の最初の子を除く、すべての子が表示されます。
- 8 「終了期間」で、期末を選択します。
要約期間には、「終了期間」に最後の子が表示されるか、最後の子を除く、開始期間から次の兄弟の子までのすべての子が表示されます。
- 9 「保存」をクリックします。

要約期間の削除

階層から要約期間を除去すると、その子は次に示すように別の要約期間に移動されます。

- 階層で最初の要約期間を削除すると、その子は要約期間の次の兄弟に移動されます。
- 階層で最後の要約期間を削除すると、その子は要約期間の前の兄弟に移動されます。
- 階層の中段から要約期間を削除すると、その子は要約期間の前の兄弟に移動されます。

▶ 要約期間を削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「期間」を選択します。

- 3 「期間」「階層」で、削除する要約期間を選択します。
基本期間は削除できません。
- 4 「削除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

年の操作

年次元を使用してカレンダーの年を操作します。

表 76 年タスク

タスク	トピックを参照
年をカレンダーに追加します。	353 ページの「年のカレンダーへの追加」
年の説明および別名を追加または更新します。	354 ページの「年情報の編集」。
会計年度を設定し、年を操作します。	353 ページの「会計年度の設定」
「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加します(「年なし」メンバー(存在する場合)を除く)。	342 ページの「メンバーの追加または編集」

年のカレンダーへの追加

年数をカレンダーに追加できますが、データベースの作成をせずにカレンダーの年数を減らすことはできません。

- ▶ 年をカレンダーに追加するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
 - 2 「年」を選択します。
 - 3 「年数の追加」をクリックします。
 - 4 「追加する年数」で、カレンダーに追加する年数を入力します。
 - 5 「年数の追加」をクリックします。

注：「すべての年」メンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、「すべての年」をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までの合計費用などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。(この親メンバーには「年なし」メンバー(存在する場合)は含まれません)

会計年度の設定

期間または現在の年を変更できます。

- ▶ 現在の年または期間を変更するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。

- 2 「年」または「期間」を選択します。
- 3 「オプション」をクリックします。
- 4 「現在の期間」「および年の設定」の「現在の年」から、現在の年を選択します。

現在の月と現在の年は、シナリオが作成される時点の月と年にデフォルトが設定されます。たとえば、現在の年が FY08 に設定され、現在の月が 8 月に設定される場合、ユーザーがシナリオを作成すると、これらの値が、「開始年」、「開始期間」、「終了年」、「終了期間」フィールドにデフォルトとして表示されます。

- 5 「現在の期間」で、現在の期間を選択します。
- 6 「保存」をクリックします。

年情報の編集

年の説明および別名を追加または更新できます。

▶ 年を編集するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「年」を選択します。
- 3 「編集」をクリックします。
- 4 年の説明を入力します。
- 5 「別名テーブル」で、使用する別名テーブルを選択し、別名を入力します。
- 6 「保存」をクリックします。

期間名の変更

ルート・レベル、基本期間、ユーザー定義の要約期間の名前を変更できます。

別名の要約期間への割当て

基本期間および要約期間への別名の割り当てや変更を行えます。

▶ 別名の割り当てや変更は:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「期間」を選択します。
- 3 要約期間を選択します。
- 4 「編集」をクリックします。
- 5 「別名テーブル」で、使用する別名テーブルを選択します。
- 6 別名を入力します。
- 7 「保存」をクリックします。

BegBalance メンバーの編集

期間次元の「BegBalance」メンバーを編集できます。アプリケーションの最初の期間として、新規アプリケーション、会計年度、カレンダーの年を開始するときの開始データの入力には BegBalance メンバーが便利です。BegBalance の名前変更や説明、ならびに別名も付けることができます。

▶ BegBalance メンバーを編集するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、「期間」を選択します。
- 3 最初のメンバーである「BegBalance」を選択します。
- 4 「編集」をクリックします。
- 5 「期間の編集」で、次を行います。
 - 名前を入力します。
 - 説明を入力します。
 - BegBalance メンバーに使用する別名テーブルを選択し、別名を入力します。
- 6 「保存」をクリックします。

通貨の設定

1 つ以上の通貨の財務情報をプランし、予測し、分析することができます。通貨の作成、編集、削除ができます。次のことを、管理者は制御します。

- アプリケーションが使用する通貨(レポート作成も含む)
- レポートやフォームでの通貨の表示方法
- 他の通貨への換算方法
- トライアングレーション通貨を通貨に換算させるかどうか
- 通貨の換算を行うタイミングの指定

複数通貨を使用可能にする

アプリケーションが複数の通貨に対応する場合、フォームでエンティティごとの複数通貨を使用可能にできます。169 ページの「行と列のレイアウトの設定」を参照してください。フォームにビジネス・ルールを選択すると、「通貨の計算」ビジネス・ルールを選択し、使用可能な通貨の値に換算できます。191 ページの「ビジネス・ルールの選択」を参照してください。

複数通貨の操作

複数通貨を使用可能にすると、ユーザーは現地通貨からレポートの通貨に換算された値を表示し、セルの基本通貨を上書きできます。

注意:

- フォームに現地通貨が選択されると、保管されるデフォルトとセルに表示される通貨は、(指定した)エンティティの基本通貨です。ユーザーはデータ値を現地通貨メンバーにのみ入力できます。現地通貨メンバーが選択されると、アプリケーションに指定されたすべての通貨は入力タイプとして使用可能になります。
- 「通貨の編集」ダイアログ・ボックスで各通貨に次元プロパティを設定できます。プリファレンスで、ユーザーはさまざまな表示オプションを選択することや、「通貨設定」を選択して管理者が設定したプロパティを適用することができます。
- 通貨はレポート通貨のみに換算されます。ユーザーはレポート通貨に表示されるセルにデータを入力できません。アプリケーションの主要通貨は、デフォルトによってレポート通貨です。レポートの通貨にする通貨を変更することができます。
- Essbase アダプタを使用して、値をレポートの通貨にロードし、値を直接 Essbase に移入します。
- アプリケーションに定義された通貨はデータ入力に有効な通貨です。データ入力に有効な通貨は、ユーザーがデータ入力中に通貨リンクをクリックしてアクセスできるリストに表示されます。
- 有用な結果を得るため、1つの共通のレポートの通貨にロールアップします。小計のメンバーが混在する通貨を持っている場合、通貨タイプは空白になり、通貨記号は表示されません。たとえば、10 米国ドルと 10 円を足しても、20 の数値にはなり得ません。
- 500 の期間を持ったアプリケーションは、期間がデフォルト名の TP 1 から 500 の場合にのみ、通貨換算計算スクリプトを正常に実行できます。それ以外の場合は、作成しようとする換算スクリプトはその制限サイズの 64K を超えてしまいます。
- データベースが作成されるかリフレッシュされるときに作成されたユーザー定義の通貨換算計算スクリプトは、ユーザーのアクセスに応じて Smart View で使用できる場合があります。ユーザー定義の通貨換算計算スクリプトを使用する場合、フォームの計算の前に、通貨換算計算スクリプトを最初にくるよう順序を変更することが推奨されています。
- 入力値に関連付けられている通貨コードは、数値として Essbase に保管されます。このコードは次元式、計算スクリプト、ビジネス・ルールで計算されます。この通貨コードの計算された値が正しくない、または無効な換算コードに換算される場合があります。混在する通貨で子がいる場所では、上位レベルで計算結果をレビューするようにします。
- 親が複数の子を持つ場合は、その中の1つの子のみが書き換えられた通貨を持ち、親は書き換えられた通貨コードを Essbase に継承します(これはフォームに表示されません)。
- 選択した通貨に換算を試みようとすると、親のエンティティが#MISSING と表示される場合があります。通貨レートが現地通貨の各組合せに入力され、フォームかレポートに通貨が選択されるようにします。通貨の組合せはすべての混在する通貨の子エンティティと親メンバーに存在させる必要があります。

- Smart View では、1つのエンティティへの複数の通貨の入力はサポートされていません。混在する通貨タイプを含むワークシートの場合、ユーザーが間違っただ通貨に値を入れてしまうこともあり得ます。

「通貨の計算」ビジネス・ルールについて

「通貨の計算」ビジネス・ルールは、フォームの次元とメンバーに基づいています。これにより、為替レート換算を適用して、データを現地通貨からフォーム上で指定されたレポートの通貨に換算されます。これは:

- 小計を計算しません。値の小計を出すには、通貨を換算した後に「フォームの計算」ビジネス・ルール(または、集約を含むカスタマイズされたビジネス・ルール)を実行します。
- #MISSING 値を無視します。
- フォーム設計中に、フォームに関連付ける、または関連付けを解除することでオンまたはオフにできます。
- デフォルトで、データの保存中には実行しないように設定されています。

為替レートのタイプ

為替レートは、履歴、平均、最終の通貨に関連付けられます。各勘定科目の為替レート・タイプは「メンバーのプロパティ」ダイアログ・ボックスに指定されます。平均および最終のレート・タイプには、すべての期間の値を入力します。履歴のレート・タイプには、期首残高期間を含む、すべての期間に使用されるレート値を1つ入力します。期首残高期間には、平均および最終のレート・タイプの期間に使用されるレート値を1つ入力します。

Planning は、トライアングレーション通貨での三角換算法による通貨換算に対応しています。

スケーリング

特定の通貨で表示するときの単位データ値を指定できます。たとえば、円を千に単位設定し、通貨次元に選択されている現地メンバーで、フォーム上に日本のエンティティの値として 10,000 を入力できます。フォームの通貨メンバーとして円を指定すると、単位が適用され、日本の値として 10 が表示されます。

数値のフォーマット

次のように、フォームに通貨以外および通貨のデータ型数値の初期表示を決定できます:

- 3桁ごとの区切り文字:
 - なし: 1000
 - カンマ: 1,000
 - ドット: 1.000
 - スペース: 1 000

- 小数点:
 - ドット: 1000.00
 - カンマ: 1000,00
- 負数記号:
 - 接頭辞のマイナス: -1000
 - 接尾辞のマイナス: 1000-
 - カッコ: (1000)
- 負数の色:
 - 黒
 - 赤

レポート通貨

レポートの通貨は会社が準備する財務諸表の通貨です。Planning は、現地通貨から1つ以上のレポートの通貨への通貨換算に対応しています。換算されたレポートの通貨の値は、すべてのユーザーに読取り専用で保管されます。アプリケーションのデフォルトの通貨はデフォルトのレポート通貨です。通貨をレポートの通貨として無効にすることもできます。

通貨の使用方法の確認

アプリケーションによる通貨の使用方法を表示できます。デフォルトの通貨なのか、トライアングュレーション通貨またはエンティティで使用されるのか、他の通貨との換算または為替関係などが表示されます。

- ▶ 通貨の使用方法を表示するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
 - 2 「通貨」を選択します。
 - 3 情報を表示させる通貨を選択します。
 - 4 「用途の表示」をクリックします。

通貨の作成

事前定義済みリストを選択するか、独自で作成することができます。次を指定できます。

- 3文字のコード
- 記号
- 256文字までの説明文
- 値が表示されるときに使用するスケーリング係数
- 通貨換算に使用するトライアングュレーション通貨
- 別名を表示させる別名テーブル

- 3桁ごとの区切り文字、小数点、負数の符号、負数の色など、数値のフォーマット
- レポートの通貨かどうか

▶ 通貨を作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「通貨」を選択します。
- 3 「追加」をクリックします。
- 4 「通貨の作成」から:
 - 事前定義された通貨を追加するには、「標準通貨の選択」を選択します。
 - 通貨を作成するには、「新規通貨の作成」を選択し、プロパティを次のように指定します。
 - 「コード」で、3文字までの略語または識別子を入力します。
 - オプション: 「説明」で、日本円など、名前を入力します。
 - 「記号」で、記号を入力するか、リストから記号を選択します。
 - オプション: 「スケール」で、通貨の入力方法と表示方法を選択します。たとえば、スケールリングが千単位に設定された場合、13は13,000となります。
 - オプション: 「トライアングレーション通貨」で、換算される3番目の共通通貨として使用する通貨を選択します。
 - オプション: 「別名テーブル」で、使用する別名テーブルを選択します。
 - オプション: 「別名」で、通貨の別名の名前を入力します。
- 5 オプション: 「レポートの通貨」を選択します(355ページの「複数通貨の操作」を参照)。
- 6 オプション: 「3桁ごとの区切り文字」で、3桁ごとの区切り文字をどのように表示させるかを選択します(小数点と異なる必要があります)。
- 7 オプション: 「小数点」で、表示する数字を小数点の値でどのように表示させるかを選択します(3桁ごとの区切り文字と異なる必要があります)。
- 8 オプション: 「負数の符号」で、負の数字を次のどれで表示させるかを選択します。
 - 「先頭のマイナス」: -1000。
 - 「接尾辞のマイナス」: 1000-
 - 「カッコ」: (1000)
- 9 オプション: 「負数の色」で、表示する色を選択します。
- 10 オプション: 「データ・ストレージ」のタイプを選択します。
- 11 オプション: 「2パス計算」を選択します。
- 12 オプション: 「データ型」を選択します。
- 13 オプション: 「スマート・リスト」を選択します。

14 「保存」をクリックします。

通貨の編集

▶ 通貨を編集するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「通貨」を選択します。
- 3 編集する通貨を選択します。
- 4 「編集」をクリックします。
- 5 プロパティを次のように変更します。
 - 事前定義された記号から選択するには、「事前定義の記号から選択」ドロップダウン・リストから1つを選択します。
 - 通貨記号を変更するには、「記号」で、入力するか、記号を選択します。
 - 「スケール」で、通貨の入力および表示方法を設定します。
 - 通貨精度を設定するために、「精度」ドロップダウン・リストから1から10までの数字を1つを選択します。
「なし」がデフォルトです。

注： 管理者はフォームのこの設定を上書きできます。173 ページの「フォームの精度、表示プロパティおよびその他オプションの設定」を参照してください。

- 通貨をレポートの通貨として指定するには、「レポートの通貨」を選択します。
355 ページの「複数通貨の操作」を参照してください。
 - 「3桁ごとの区切り文字」で、3桁ごとの区切り文字をどのように表示させるかを選択します(小数点と異なる必要があります)。
 - 「小数点」で、表示する数字を小数点の値でどのように表示させるかを選択します(3桁ごとの区切り文字と異なる必要があります)。
 - 「負数の符号」で、負の数字を次のどれで表示させるかを選択します。
 - 「先頭のマイナス」:-1000。
 - 「末尾のマイナス」:1000-
 - 「カッコ」:(1000)
 - 「デフォルト設定を使用」:通貨の表示設定を適用します(358 ページの「通貨の作成」を参照)。
 - 「負数の色」で表示色を選択します。
- 6 「保存」をクリックします。

通貨の削除

デフォルトの通貨は削除できません。

▶ 通貨を削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「次元」で、「通貨」を選択します。
- 3 「通貨」で、削除する通貨を選択します。
- 4 「用途の表示」をクリックして、通貨をデフォルト通貨にするか、トライアングュレーション通貨にするか、エンティティに関連付けるかを決定します。この条件に合った通貨は削除できません。
為替レート・テーブルで定義した通貨を削除する場合は、通貨はそのテーブルからも削除されます。
- 5 「閉じる」>「OK」>「削除」>「OK」をクリックします。
- 6 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

為替レートの指定

為替レートを使って、ある通貨から別の通貨に換算します。次を行えます:

- 様々な国で予算管理して他の通貨でプランを作成できるようにします。
- 通貨で要約レポート・データを表示します。
- 複数の通貨から1つの通貨に値を集計します。

たとえば、基本通貨を日本のエンティティには円を指定し、アメリカ合衆国のエンティティには米国ドルを指定するとします。日本のエンティティの値を持つフォームを表示する際、フォームの表示通貨が米国ドルに設定されている場合、円の為替レートにより日本の値が米国ドルに換算されます。表示通貨が円に設定されると、米国ドルの為替レートは米国エンティティの値が円に換算されます。

為替レートを指定するには、アプリケーションの作成時に複数通貨を設定する必要があります。

為替レート・テーブルについて

各アプリケーションには、アプリケーションが作成されるときに指定されたデフォルトの通貨があります。為替レート・テーブルを指定すると、デフォルト通貨ならびにトライアングュレーション通貨のみが、対象となる通貨として使用可能になります。ソース通貨から為替レートをデフォルト通貨またはトライアングュレーション通貨に入力できます。

複数の為替レート・テーブルを作成できます。各テーブルは通常、複数のシナリオに関連付けられていますが、各シナリオは1つの為替レート・テーブルにしか関連付けられません。シナリオを作成する際、換算する通貨の為替レート・テーブルを選択します。

デフォルト通貨と「為替レート」ページで定義された通貨との間の換算値を入力します。為替レート・テーブルは、すべてのアプリケーション期間に渡るため、すべてのシナリオに為替レートを適用可能です。為替レート・テーブルを作成または変更する際、アプリケーションをリフレッシュしてプラン・タイプに保管してください。84 ページの「アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ」を参照してください。

Hsp_Rates 次元

複数通貨アプリケーションには、為替レートを保管する Hsp_Rates 次元が含まれます。このアプリケーションには、通貨レートを保管するメンバーと次のものが含まれます。

- Hsp_InputValue: データ値を格納
- Hsp_InputCurrency: データ値の通貨タイプを格納

レポートを生成したりデータをロードする際、Hsp_InputValue メンバーを参照してください。データのロード時は、現地通貨に対してデータをロードします。Hsp_InputCurrency メンバーを参照する必要はありません。

デフォルトでは、Hsp_Rates 次元は「密」に設定されます。これは変更できます(340 ページの「次元の密度と順序の設定」を参照してください)。

トライアングレーション(中間通貨)

Planning は、トライアングレーション通貨と呼ばれる中間通貨を介する三角換算法による通貨換算に対応しています。通貨のトライアングレーション通貨を変更する場合、トライアングレーション通貨プロパティの為替レートを再入力し、為替レートを転送および保管するためにアプリケーションをリフレッシュしなければなりません。アプリケーションのデフォルト通貨にトライアングレーション通貨を選択することはできません。

計算方法

通貨間で換算するときの為替レートを入力する場合、「乗算」または「除算」の計算方法を選択することができます。たとえば、英国ポンドを米国ドルに換算するレートとして 1.5 を選択すると、1 英国ポンドが 1.5 米国ドルに換算されます。

シナリオの設定

各シナリオとバージョンの組合せには、勘定科目のデータと各エンティティの他の次元が含まれます。ユーザーはシナリオとバージョンのエンティティにデータを入力した後、他のユーザーがレビューおよび承認を行えるようにエンティティのデータを送信したり上位に移動したりできます。

タスク	トピック
シナリオを作成。	363 ページの「シナリオの作成」を参照。
シナリオを編集。	364 ページの「シナリオの編集」を参照。
シナリオを削除。	365 ページの「シナリオの削除」を参照。
シナリオをコピー。	365 ページの「シナリオのコピー」を参照。
シナリオに関するサポート詳細を削除。	305 ページの「シナリオに関するサポート詳細を削除」を参照してください。

シナリオについて

シナリオを次のように使用できます。

- 別のプラン方法へ適用する。
- 予測を作成する。
- シナリオにデータを入力する。
- シナリオを異なる期間や為替レートに関連付ける。
- シナリオでユーザーにアクセス権を割り当てる。
- シナリオでレポートする。
- シナリオを比較、分析する。

それぞれのレビュー・サイクルでアプリケーションを複数のプランにグループ化できます。異なる期間にシナリオの範囲を広げられます。

期間

各シナリオを年範囲および期間に割り当て、期首残高期間を指定します。ユーザーがフォームへアクセスすると、範囲内で年と期間のみをシナリオに入れることができます。範囲外の年と期間は読取り専用として表示されます。時間範囲は変更可能です。

為替レート・テーブル

アプリケーションが通貨換算をする場合、為替レート・テーブルをシナリオへ割り当てます。シナリオへ別の為替レート・テーブルを割り当てることにより、通貨レート仮定の適用のひな型を作ることができます。

アクセス権

グループまたはユーザーのシナリオ次元メンバーにアクセス権を指定して、どのグループまたはユーザーがデータを表示または変更できるかを決定します。ユーザーまたはグループにつき、読取り、書込み、なしのいずれか1つのアクセス権を持つことができます。ユーザーのアクセス権はユーザーが属するグループに基づいて組み合わせられます。

シナリオの作成

▶ シナリオを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「シナリオ」を選択します。
- 3 「子の追加」をクリックします。
- 4 「シナリオ」で、名前を入力します。
- 5 「オプション」: 「説明」で、説明を入力します。

- 6 「開始年度、開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
- 7 「オプション」：「為替レート・テーブル」で、シナリオに関連付ける為替レート・テーブルを選択します。
アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート・テーブルに関連付けて通貨換算を可能にします。
- 8 「オプション」：「別名」で、シナリオに関連付ける別名テーブルを選択し、説明を入力します。
- 9 「オプション」：「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
- 10 「オプション」：「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのシナリオを含めます。
- 11 「保存」をクリックします。

シナリオの編集

- ▶ シナリオを変更するには:
- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
 - 2 「次元」で、「シナリオ」を選択します。
 - 3 編集するシナリオを選択します。
 - 4 「編集」をクリックします。
 - 5 「オプション」：「シナリオ」で、名前を選択します。
 - 6 「オプション」：「説明」で、説明を入力します。
 - 7 「開始年度」、「開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
 - 8 「オプション」：「為替レート・テーブル」で、シナリオに関連付ける為替レート・テーブルを選択します。
アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート・テーブルに関連付けて通貨換算を可能にします。
 - 9 「オプション」：「別名」で、シナリオに関連付ける別名テーブルを選択し、説明を入力します。
 - 10 「オプション」：「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
 - 11 「オプション」：「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認でこのシナリオを使用します。
 - 12 「保存」をクリックします。

シナリオの削除

シナリオを削除すると、シナリオ(データを含む)を使用するすべてのプランニング・ユニットが削除されます。フォームで起動済または軸へ割当て済のプランニング・ユニットに使用されたシナリオは削除できません。フォームからシナリオへの参照をまず除去してから別のシナリオを割り当ててください。

▶ シナリオを削除するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「シナリオ」を選択します。
- 3 削除するシナリオを選択します。少なくとも1つのシナリオをアプリケーションに残してください。
- 4 「削除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

シナリオのコピー

シナリオ・プロパティのみがコピーされます。シナリオに関連付けられたデータ値とアクセス権は、新しいシナリオにコピーされません。

▶ シナリオをコピーするには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「シナリオ」を選択します。
- 3 コピーするシナリオを選択します。
- 4 「シナリオのコピー」をクリックします。
- 5 「シナリオにコピー」で、名前を入力します。
- 6 「オプション」: 「説明」で、説明を入力します。
- 7 「開始年度」、「開始期間」、「終了年度」、「終了期間」で、シナリオに関連付ける期間を選択します。
- 8 「オプション」: 「為替レート・テーブル」で、シナリオに関連付ける為替レート・テーブルを選択します。
アプリケーションが複数の通貨に対応している場合、シナリオを為替レート・テーブルに関連付けて通貨換算を可能にします。
- 9 「オプション」: 「別名テーブル」で、シナリオに関連付ける別名テーブルを選択し、説明を入力します。
- 10 「オプション」: 「BegBal を期間として含める」を選択して、通貨換算のこのシナリオの BegBalance 期間を含めます。
- 11 「オプション」: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのシナリオを含めます。
- 12 「保存」をクリックします。

バージョンの指定

バージョンを使ってアプリケーションで使用されるデータをグループ化します。

タスク	トピック
バージョンの作成	366 ページの「バージョンの作成」 を参照。
バージョンの編集	367 ページの「バージョンの編集」 を参照。
バージョンの削除	368 ページの「バージョンの削除」 を参照。

バージョンについて

シナリオとバージョンの次元を使用して、レビューおよび承認の対象となるプランを作成します。各シナリオとバージョンの組合せには、勘定科目のデータと各エンティティの他の次元が含まれます。ユーザーはシナリオとバージョンのエンティティにデータを入力した後、他のユーザーがレビューおよび承認を行えるようにエンティティのデータを送信したり上位に移動したりできます。バージョンは次のように使用できます:

- プランの複数反復を許可
- 異なる仮定に基づいた起こりうる結果のひな型作り
- プラン・データの普及管理
- 目標設定の促進

ターゲットおよびボトムアップ・バージョン

ターゲットおよびボトムアップ・バージョンを作成できます。ボトムアップ・バージョンで、データを最下位レベルのメンバーに入力すると、親レベルのメンバーは表示専用となりデータ入力が許可されなくなります。親メンバーの値は最下位レベルのメンバーから集約されます。

ターゲット・バージョンでは、階層内のどのレベルのメンバーにもデータを入力できます。ビジネス・ルールを使用して親メンバーからその祖先まで値を均等配分することができます。ターゲット・バージョンを使って、プランの高レベルのターゲットに設定できます。ボトムアップ・バージョンで操作するプランナは、プラン・データを入力する際、このターゲットを参照できます。

ターゲット・バージョンでは、トップダウンの予算編成を使用します。「承認の管理」タスクは許可されません。ターゲット・メンバーの子を空白(例: #MISSING)にして、最上位レベルにデータを入力できるようにしてください。ターゲット・メンバーは「保管」に設定してください(動的計算により、子の合計でデータ入力が上書きされます)。

バージョンの作成

▶ バージョンを作成するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。

- 2 「バージョン」を選択します。
- 3 「子の追加」をクリックします。
- 4 「バージョン」で、アプリケーションに追加するバージョンの名前を入力します。
- 5 「タイプ」で、アプリケーションに表示するバージョンのタイプを選択します。
 - 「標準ターゲット」 - 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 「標準ボトムアップ」 - 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。
- 6 「オプション」: 「説明」で、説明を入力します。
- 7 「オプション」: 「別名テーブル」で、シナリオに関連付ける別名テーブルを選択し、説明を入力します。
- 8 「オプション」: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのバージョンを含めます。

このオプションは、ターゲット・バージョンには使用できません。
- 9 「保存」をクリックします。

バージョンの編集

バージョン名とアクセス権を変更できます。

▶ バージョンを変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「バージョン」を選択します。
- 3 編集するバージョンを選択します。
- 4 「編集」をクリックします。
- 5 「オプション」: 「バージョン」で、バージョンの名前を変更します。
- 6 「オプション」: 「タイプリスト」で、アプリケーションに表示するバージョンのタイプを変更します。
 - 「標準ターゲット」 - 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 「標準ボトムアップ」 - 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。
- 7 「オプション」: 「説明」で、説明を入力します。
- 8 「オプション」: 「別名テーブル」で、シナリオに関連付ける別名テーブルを選択し、説明を入力します。
- 9 「オプション」: 「プロセス管理に使用可能」を選択して、承認にこのバージョンを含めます。

このオプションは、ターゲット・バージョンには使用できません。
- 10 「保存」をクリックします。
- 11 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

バージョンの削除

フォームで起動済または軸へ割当て済のプランニング・ユニットに使用されたバージョンは削除できません。フォームからバージョンへの参照をまず除去してから別のバージョンを軸に割り当ててください。少なくとも1つのバージョンがアプリケーションに残っている必要があります。

▶ バージョンを変更するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「バージョン」を選択します。
- 3 削除するバージョンを選択します。
- 4 「削除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

プランニング・ユニットが起動されると、それに関連付けられたバージョンを削除できません。

- 6 ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

バージョンの表示



▶ バージョンを表示するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「バージョン」を選択します。
- 3 「表示」で、表示するバージョン・タイプを選択します。
 - 「標準ターゲット」: 親レベルから下方に値が入力されます。
 - 「標準ボトムアップ」: 最下位メンバーに値が入力されて上方に集約されます。

バージョンとシナリオ・メンバーのソート

バージョンとシナリオ・メンバーを昇順や降順にソートできます。Essbase アウトラインにメンバーのソートがかかります。

▶ 次の手順でバージョンとシナリオ・メンバーをソートします。

- 1 「次元」タブで、シナリオかバージョンを選択します。
- 2 「ソート」で、次のように行います。
 - 昇順にソートするには、をクリックします。
 - 降順にソートするには、をクリックします。
- 3 「OK」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、「次元」タブと同じ順番に表示されるメンバーで Essbase アウトラインが生成されます。



次元階層内でシナリオとバージョン・メンバーを移動

次元階層内のシナリオとバージョン・メンバーの順序を変更できます。

▶ 次の手順で次元階層内のメンバーの位置を移動します。

1 「次元」タブで、シナリオかバージョンを選択します。

2 次のいずれかを実行します。

- メンバーを上へ移動するには、をクリックします。
- メンバーを下へ移動するには、をクリックします。

3 「OK」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、「次元」タブと同じ順番に表示されるメンバーで Essbase アウトラインが生成されます。

Planning アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加

サブトピック

- [集約ストレージについて](#)
- [Planning の集約ストレージ・アウトラインの制約事項](#)
- [ASO データベースを Planning アプリケーションに追加するプロセス](#)
- [プラン・タイプの操作](#)

Planning の管理者は、Planning アプリケーション管理を使用して集約ストレージ・アウトライン(ASO)を追加できます。

注： Performance Management Architect を使用する場合、集約ストレージ・アウトラインはサポートされません。

集約ストレージについて

集約ストレージとは、多数の潜在的に大きな次元に分類されている大規模な疎に分散したデータをサポートする、Essbase データベース・ストレージ・モデルです。選択されたデータ値は集約および保管され、一般的に集約時間が改善されます。ストレージのタイプには、この集約ストレージの他にブロック・ストレージ(密/疎構成)があります。

集約ストレージとブロック・ストレージの大きな違いは、Essbase が ASO データベースごとに別々のアプリケーションを必要とすることです。これに対し、ブロック・ストレージ・アウトライン(BSO)アプリケーションはアプリケーションごとに複数の Essbase データベースを持つことができます。

集約ストレージの詳細は、Oracle Essbase Administration Services Online Help で集約ストレージの管理に関する項を参照してください。

Planning の集約ストレージ・アウトラインの制約事項

- Performance Management Architect を使用する場合、集約ストレージ・アウトラインはサポートされません。これに該当するのが、データの同期の使用や、その他の Performance Management Architect アクティビティです。
- ASO データベースでビジネス・ルールはサポートされません。
- ASO データベースでメンバー式はサポートされません。また、Planning で ASO データベース上に XREF は生成されません。XREF は、BSO データベースでのみ生成できます。
- Planning はすべての基本次元を ASO データベース上に必要とするわけではないため、承認次元が存在しない場合、ASO データベースには承認が適用されない場合があります。この場合は、通常のセキュリティが適用されます。
- 動的時系列のメンバーは、ASO アプリケーションの期間次元ではサポートされません。

ASO データベースを Planning アプリケーションに追加するプロセス

ASO データベースを Planning アプリケーションに追加するには:

1. ASO プラン・タイプを作成します。次のいずれかのタスクを実行します:
 - アプリケーション作成時に ASO プラン・タイプを作成します。312 ページの「アプリケーションの作成」を参照してください。
 - プラン・タイプ・エディタを使用して新規プラン・タイプを追加します。371 ページの「プラン・タイプの操作」を参照してください。
2. ASO プラン・タイプに次元を追加します。327 ページの「次元の操作」を参照してください。

注： 通貨、年、シナリオ、またはバージョンの各次元が ASO プラン・タイプに対して有効な場合は、その次元メンバーも ASO プラン・タイプに対して有効です。

3. 次元メンバーを追加します。341 ページの「メンバーの操作」を参照してください。
4. Planning アプリケーションの Essbase アウトラインをリフレッシュします。84 ページの「アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ」を参照してください。
5. ASO データベースに関連付けられた次元を使用してフォームを作成します。第 6 章「フォームの管理」を参照してください。

プラン・タイプの操作

プラン・タイプを追加するには、「管理」、「管理」、「プラン・タイプ」の順に選択します。プラン・タイプ・エディタを使用して、プラン・タイプを追加または削除できます。最大 15 のプラン・タイプを追加できます。追加したプラン・タイプは、Planning の他のプラン・タイプと同じように動作します。プラン・タイプが ASO データベースにマップされる場合は、ASO の制限事項が適用されます。370 ページの「[Planning の集約ストレージ・アウトラインの制約事項](#)」を参照してください。

▶ プラン・タイプ・エディタを使用してプラン・タイプを追加または削除するには:

1 Planning で、「管理」、「管理」、「プラン・タイプ」の順に選択します。

2 次のいずれかのタスクを実行します:

- プラン・タイプを追加するには、「プラン・タイプの追加」をクリックして、プラン・タイプの詳細をすべて指定します。

次に注意してください:

- ASO データベース・タイプの場合、Essbase データベースを含むアプリケーションの名前を指定する必要があります。ASO データベースはそれ独自のアプリケーションに常駐するためです。
- ASO プラン・タイプを作成する管理者は、すべての ASO アプリケーションが企業内で一意であることを確認する必要があります。
- プラン・タイプを削除するには、プラン・タイプを選択して「プラン・タイプの削除」をクリックします。

3 「プラン・タイプの保存」をクリックします。

プラン・タイプを保存した後で、データベース・タイプ、データベース名またはアプリケーション名を変更できません。保存されたプラン・タイプを変更するには、削除してから、正しい情報を指定して新しいプラン・タイプを作成する必要があります。

動的時系列メンバーの設定

動的時系列(DTS)メンバーを使用して四半期累計支出などの期間累計データを表示するレポートが作成できます。DTS メンバーは、アプリケーション作成時に自動的に作成され、期間次元のメンバーと一緒に使用できます。DTS を設定するには、事前定義済の DTS メンバーを使用可能にし、世代番号(そして、オプションとして別名テーブルおよび別名)に割り当てます。たとえば、四半期累計値を算出する場合、Q-T-D メンバーを使用可能にし、世代番号 2 へ割り当てます。その後、Q-T-D DTS メンバーを使用して、その四半期における本月までの月次値を算出できます。

注: ASO アプリケーションでは、期間次元として DTS はサポートされていません。

Planning では 8 つの事前定義済 DTS メンバーを提供します。

- H-T-D: 累計
- Y-T-D: 年次累計
- S-T-D: 季節累計
- P-T-D: 期間累計
- Q-T-D: 四半期累計
- M-T-D: 月次累計
- W-T-D: 週次累計
- D-T-D: 日次累計

注意 Oracle では、DTS 機能を使用する前にバックアップを実施することをお勧めします。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。Y-T-D または P-T-D メンバーを使用する場合、予約済の動的時系列の世代名や年、期間と競合しないように、年または期間次元の名前を変更する必要があります。Y-T-D を使用する前に年次元、Y-T-D を使用する前に期間の名前をそれぞれ変更してください。名前変更後、メンバー式やビジネス・ルール、名前による次元を参照するあらゆるレポートなど、変更によって影響を受けるすべてのアプリケーションのアーティファクトを更新する必要があります。

DTS メンバーは期間累計レポートの 8 レベルまでを提供します。データおよびデータベースのアウトラインでどのメンバーが使用できるかを決定できます。たとえば、データベースに 1 時間、1 週間、1 ヶ月、四半期および 1 年ごとのデータが含まれる場合、日次累計(D-T-D)、週次累計(W-T-D)、月次累計(M-T-D)、四半期累計(Q-T-D)および年次累計(Y-T-D)の情報をレポートできます。データベースに過去 5 年間の月次データが含まれる場合、特定年までの年次累計(Y-T-D)および累計(H-T-D)の情報をレポートできます。データベースが季節ごとのデータを記録する場合は、期間累計(P-T-D)または季節累計(S-T-D)の情報をレポートできます。

動的時系列の計算でメンバーを使用する予定がある場合、タイム・バランス・プロパティ(「最初」、「平均」など)を動的計算に予定されているメンバーに割り当てないことをお勧めします。割り当ててしまうと、勘定科目次元の親メンバーの値に誤りが生じる場合があります。詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

▶ 動的時系列メンバーの設定

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 「期間次元」を選択し、「DTS」をクリックします。
- 3 「H-T-D」、「Y-T-D」、「S-T-D」、「P-T-D」、「Q-T-D」、「M-T-D」、「W-T-D」または「D-T-D」を使用するには、DTS 系列の「使用可能」を選択します。
- 4 「世代」を選択します。

表示される世代数は、時間次元の世代数によって異なります。DTS メンバーは一番高い世代(次元ルート)と関連付けることはできません。

注： Essbase では Planning の期間次元は世代 1 と見なされるので、動的時系列メンバーを設定するときに考慮に入れます。

- 5 **オプション:** 別名テーブルを選択して別名を入力します(必要に応じてウィンドウのサイズを変更してフィールドを表示させます)。

324 ページの「別名テーブルの操作」を参照してください。

- 6 「保存」をクリックします。

サポートされた Essbase 追加機能

Essbase 追加機能が Planning 次元をサポートできるようになりました。シナリオ、バージョンおよび期間次元へ子および兄弟を追加できます。また、切り取り、貼付け、展開および縮小機能を使用して次元階層を操作できます(328 ページの「次元階層の操作」を参照)。この次元には共有メンバーを使用することもでき、すべての次元においてルート・レベルで 2 パス計算を設定できます。たとえば、次のようなことができます。

機能	詳細情報
シナリオおよびバージョンの次元で、階層を作成し、共有メンバーを使用します。子をボトムアップ・バージョンへ割り当てる場合、このバージョンはフォーム上では読取り専用の親として表示されます。	362 ページの「シナリオの設定」および 366 ページの「バージョンの指定」を参照してください。
期間次元で、代替階層を作成し、共有子孫を使用します。すべての期間のデータ・ストレージは、有効なデータ・ストレージ値に設定できます。BegBalance を含むすべての期間の集計演算子は、有効な集計演算子に設定できます。たとえば、~(無視)のかわりに+に設定できます。	353 ページの「年の操作」、355 ページの「BegBalance メンバーの編集」および 87 ページの「為替レート・テーブルの編集」を参照してください。
たとえば、勘定科目のルート・レベルの 2 パス計算をオンにします。 注意 2 パス計算は、動的計算に設定されていない非勘定科目メンバーでは無視されます。この設定を使用する場合は、通貨換算スクリプトへの影響を考慮してください。	342 ページの「メンバーの追加または編集」を参照してください。
属性には階層を作成し、別名を割り当てます。	347 ページの「属性の操作」を参照してください。

注： 複数通貨アプリケーションの場合、組込み済の通貨換算計算スクリプトは、任意のシナリオ、バージョン、期間または年メンバー、または特定の次元ルート(エンティティ、バージョン、通貨、カスタム次元など)でデータ・ストレージを動的に変更した場合、適切に機能しません。データ・ストレージを変更する場合は、通貨換算スクリプトに対する影響を考慮してください。

期間次元の代替階層の考慮事項

代替階層を使用する場合、代替階層の親は、期間などの期間次元のルート・メンバーまたは他の代替階層メンバーのいずれかにできます。

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの操作

Shared Services 次元エディタおよび Planning アプリケーション作成者の役割に割り当てられている場合、Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションを作成および更新できます。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。

ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュする

CubeRefresh ユーティリティはデータベースを作成またはリフレッシュします。CubeRefresh ユーティリティを実行する前に、アプリケーションがロックされていないことを確認します。実行中は、データベースでメタデータが更新される際にアプリケーションはロックされます。たとえば、ユーザーがアクセス権を割り当てている場合、「アプリケーションがリフレッシュ中です。要求を処理することができません。」というメッセージが表示されます。このユーティリティは、リモート・サーバーではなく、Planning サーバーと同じコンピュータ上で実行される必要があります。

注意 Oracle では、作成またはリフレッシュの前に、アプリケーションをバックアップすることをお勧めします。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。これらの手順に従うと、データベースのデータに影響を与えます。「作成」または「リフレッシュ」オプションを使用する場合、データは置き換えられるか、消去され、Planning プラン・タイプが再構築される可能性があります。重要な情報は、34 ページの「[Essbase の操作の考慮事項](#)」を参照してください。

- ▶ ユーティリティを使用してアプリケーション・データベースをリフレッシュするには:
- 1 アプリケーションをバックアップします。92 ページの「[アプリケーションおよびアプリケーション・データベースのバックアップ](#)」を参照してください。
- 2 CubeRefresh ユーティリティを見つけます。

このユーティリティは planning1 ディレクトリにあります。planning1 の完全パスについては 51 ページの「[EPM Oracle インスタンスについて](#)」を参照してください。
- 3 コマンドラインに次のコマンドとパラメータを入力し、planning1 ディレクトリから CubeRefresh を起動します:

```
Windows: CubeRefresh.cmd [-f:passwordFile] /A:application_name /
U:user_name [/C|/R] /D [/F[S|V]][/RMIPORT:rmi_port] [/L] [/DEBUG]
```

```
UNIX: CubeRefresh.sh [-f:passwordFile] /A:application_name /
U:user_name [/C|/R] /D [/F[S|V]][/RMIPORT:rmi_port] [/L] [/DEBUG]
```

- **オプション:** 暗号化されたパスワード・ファイルが設定されており、passwordFile が完全なファイル・パスで、パスワード・ファイルの名前である場合、コマンド・ラインに最初のパラメータとして[-f:passwordFile]を指定できます。50 ページの「[Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制](#)」を参照してください。
- **application_name:** 作成またはリフレッシュを実行する Planning アプリケーションの名前です。
- **user_name:** アプリケーションを作成またはリフレッシュする権利を持ったユーザーです。
- **/C** または **/R:** アプリケーションで実行する関数です。
 - **/C:** データベース・アウトラインを作成します。
 - **/R:** データベース・アウトラインをリフレッシュします。
- **/D:** 作成またはリフレッシュ時にデータベースを指定します。
- **/F:** アプリケーションのすべてのユーザーに対してセキュリティ・フィルタを使用します。オプションで **s**、**v** または **sv** と使用します。
 - **/FS:** 共有メンバーのセキュリティ・フィルタを生成します。
 - **/FV:** セキュリティ・フィルタを検証しますが、フィルタは保存しません。
 - **/FSV:** 共有メンバーのセキュリティ・フィルタを検証します。
- **/RMIPORT:** 現在の値 11333 とは別の RMI ポート番号を指定します。
- **/-L:** デフォルトのオプションで、ローカルもしくはリモート・コンピュータ上のアプリケーション・サーバーへ接続することで作成またはリフレッシュします(アプリケーションが実行中でない場合などには、**/L** を使用してアプリケーション・サーバーへ接続しないで作成またはリフレッシュできます)。
- **/DEBUG:** 詳細のエラー・メッセージを指定します。

4 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

5 エラーを含むアプリケーションのリフレッシュ結果を表示します。完了ステータスがコンソール上に表示されます。

この例では、指定したアプリケーションへログオンしたすべてのユーザーに対するデータベースをリフレッシュするのに使用したコマンド・ラインを表示します。デフォルトの RMI ポートが使用され、共有メンバーのセキュリティ・フィルタが含まれます。

Windows: CubeRefresh.cmd /A:app1 /U:admin /R /D /FS

UNIX: CubeRefresh.sh /A:app1 /U:admin /R /D /FS

レベル 0 メンバーが動的計算に設定されたデータベースのリフレッシュ

データベース・アウトラインのレベル 0 メンバーが「動的計算」または「動的計算および保管」に設定されている場合、メンバーがメンバー式に関連付けられて

いなくても、Planning は作成またはリフレッシュを成功させます。Planning は、現在メンバー式のないメンバーに対し、プレースホルダ式を追加します。

Essbase パーティションの操作

Essbase パーティションを使用する場合、パーティションは、別のアプリケーションまたはサーバーのデータベース間で共有されたデータへアクセスできます。パーティションの詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

Planning でアプリケーション・データベースをリフレッシュする前に、Essbase パーティション定義を除去してください。これは Essbase パーティションの上書きや、Essbase データベースの破損を防止します。Essbase パーティションは、リフレッシュ後に定義できます。

複製パーティションを使用している場合、複製時にパーティション定義を作成し、パーティションを実行して、パーティション定義を削除できます。パーティション定義は、パーティション実行時に作成されるので、リフレッシュ時に除去する必要はありません。

ユーティリティを使用してメンバーをソート

Planning の SortMember ユーティリティを使用して次元メンバーをソートできます。SortMember.cmd は、Planning の「次元」タブでのソートと類似します。エンティティ、勘定科目、シナリオ、バージョン、ユーザー定義のカスタム次元をソートできます。期間、年または通貨の次元メンバーはソートできません。このユーティリティは、メンバーを Planning ヘルロードした後に次元メンバーをソートするのに便利です。SortMember.cmd ユーティリティはコマンド・ライン・インタフェースを使用します。管理者のみが実行できます。

▶ SortMember.cmd ユーティリティを起動するには:

- 1 Planning がインストールされたサーバー上の planning1 ディレクトリから、次の構文を入力します:

```
SortMember [-f:passwordFile] servername username application  
member children|descendants ascend|descend
```

planning1 ディレクトリの完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

表 77 SortMember ユーティリティのパラメータ

パラメータ	説明
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。
servername	Planning アプリケーションがあるサーバー名
username	Planning 管理者の名前

パラメータ	説明
application	ソートする次元メンバーを含む Planning アプリケーションの名前
member	ソートする子または子孫がある親メンバー
children descendants	子または子孫でソートします。子でソートする場合は指定したメンバーのすぐ下のレベルのメンバーのみに影響し、子孫でソートする場合は、指定したメンバーの子孫すべてに影響します。
ascend descend	昇順または降順でソートします。

例:

```
SortMember localhost admin BUDGET account200 descendants ascend
```

2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

SortMember ユーティリティの起動時にアプリケーション・サーバーまたは RMI サービスが実行している場合、java.rmi または"ポートの使用"エラーが発生する可能性があります。ユーティリティの機能に影響することはありません。

ユーティリティを使用して共有子孫を削除

メンバーの子孫である共有次元メンバーを削除するには DeleteSharedDescendant ユーティリティを使用します。共有エンティティ、勘定科目、ユーザー定義の次元メンバーを削除できます。指定メンバーの直属の子のみではなく、すべての共有子孫メンバーが削除されます。

管理者がコマンド・ライン・インタフェースを使用してこのユーティリティを実行します。ユーティリティの起動時にアプリケーション・サーバーまたは Oracle RMI サービスが実行している場合、java.rmi または"ポートの使用"エラーが発生する可能性があります。ユーティリティの機能に影響することはありません。

▶ DeleteSharedDescendants ユーティリティを使用するには:

- 1 次の構文を使用して、Planning がインストールされたサーバーの planning1 ディレクトリから DeleteSharedDescendants.cmd ファイルを起動します:

```
DeleteSharedDescendants [-f:passwordFile] servername username  
application member
```

planning1 ディレクトリの完全パスについては [51 ページの「EPM Oracle インスタンスについて」](#) を参照してください。

表 78 DeleteSharedDescendants ユーティリティのパラメータ

変数	説明
[- f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。50 ページの「 Planning ユーティリティでパスワード・プロンプトを抑制 」を参照してください。
servername	Planning アプリケーションがあるサーバー名

変数	説明
username	Planning 管理者の名前
application	削除する共有次元を含む Planning アプリケーションの名前
member	共有子孫を削除するメンバーです。メンバー名にスペースが含まれる場合、引用符で囲みます("Member One"など)。共有メンバーそのものがコマンド・ラインで指定されている場合、「member_nameの共有子孫が見つかりませんでした」というメッセージが表示されます。

例:

```
DeleteSharedDescendants localhost admin BUDGET account200
```

- 2 プロンプト表示があればパスワードを入力します。
- 3 ユーティリティ実行の結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/
diagnostics/logs/planning ディレクトリで生成されたログ・ファイルを確認
します:
 - DeleteSharedDescendants.log: ステータス・メッセージが含まれます。
 - DeleteSharedDescendantsExceptions.log: エラー・メッセージが含まれます。

「データベースの管理」タスクが開いている間にこのユーティリティを実行する場合、エラー・メッセージは表示されませんが、メンバーは削除されません。EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning ディレクトリの LOG および CMD ファイルでは、見つかった共有メンバーは 1、削除された共有メンバーは 0 と表示されます。

スマート・リスト、UDA およびメンバー式の使用方法

Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションの場合、スマート・リスト、UDA、およびメンバー式を作成および更新できます。

スマート・リストの操作

管理者は、スマート・リストを使用して、フォーム・セルからユーザーがアクセスするカスタムのドロップダウン・リストを作成します。スマート・リスト(メンバー・プロパティとして)に関連するメンバーのセルをクリックする場合、ユーザーは、データを入力するかわりに、ドロップダウン・リストからアイテムを選択します。ユーザーはスマート・リストを含んでいるセルに入力することはできません。スマート・リストは下矢印で表示され、ユーザーがセルをクリックする際に展開します。

次のタスクを実行してスマート・リストを作成し、管理します。

- スマート・リストを定義し、説明してください。
- メンバーにスマート・リストを関連付けます。

- スマート・リストを表示する次元を選択します。
 - オプション:
 - メンバー式でスマート・リストの値を使用します。
 - スマート・リストに関連付けられた#MISSINGセルのフォームでの表示方法を設定します。
 - レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期します
- ▶ スマート・リストを作成または操作するには:
- 1 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。
 - 2 次のいずれかを実行します。
 - スマート・リストを作成するには、「作成」をクリックして名前を入力し、「OK」をクリックします。
 - スマート・リストを変更するには、そのスマート・リストを選択して「編集」をクリックします。
 - スマート・リストを削除するには、それを選択し、「削除」>「OK」をクリックします。スマート・リストを削除すると、次元メンバーおよびレポート・アプリケーションと関連付けられたマッピングも削除されます。データ・セルはひとつのスマート・リストのみに表示できます。複数のスマート・リストがセルで交差する場合、優先させる方を設定します。
 - **オプション:** 「同期」をクリックして、Planning アプリケーション管理とレポート・アプリケーションを使用するアプリケーションの間でスマート・リストを同期します。379 ページの「レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期」を参照してください。

レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期

レポート・アプリケーションでスマート・リストを次元にマップする Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーションでは、Planning アプリケーションでスマート・リストを同期できます。それによって、スマート・リストをマップするレポート・アプリケーションで次元が識別され、選択した次元のレベル0のメンバーが選択したスマート・リストに新規スマート・リストとして追加されます。295 ページの「レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピング」を参照してください。

- ▶ レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期するには、次の手順を実行します:
- 1 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。
 - 2 「同期」をクリックし、「OK」をクリックします。
- 同期の際には、適切なスマート・リスト内の最後のスマート・リスト・アイテムの後で既存のすべてのマッピングのレポート・アプリケーションの値が追加されます。スマート・リストが2つの次元にマップされている場合、最初のマッピングからのメンバーがすべて挿入されてから、2番目のマッピングからのメンバーが挿入されます。メンバーがスマート・リストにすでに存在

する場合は、再追加されません。レポート・アプリケーション上の対応する次元メンバーが削除された場合でも、Planning スマート・リスト内のスマート・リスト・メンバーは削除されません。

注： 勘定科目がスマート・リストとして次元にマップされている場合、勘定科目次元のすべてのレベル 0 メンバーはスマート・リストが同期される時にスマート・リスト・エン트리として入れられます。たとえば、スマート・リストは HSP_Average や HSP_Ending のようなエントリを含むことがあります。この場合、余分なエントリをスマート・リストから削除します。[381 ページの「スマート・リスト・エントリの追加と変更」](#)を参照してください。

- 3 スマート・リストのアイテムが複数の次元にマップされている場合には、新しい名前で作成してから、関連データを手動で転送します。

スマート・リスト・プロパティの追加と変更

「スマート・リスト・プロパティの編集」タブを使って、スマート・リストのプロパティを設定します。

▶ スマート・リストのプロパティを設定するには:

- 1 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。
- 2 「スマート・リスト」を選択し、「編集」をクリックします。
- 3 「プロパティ」でスマート・リストのプロパティを定義します。

表 79 スマート・リストのプロパティ

プロパティ	説明
「スマート・リスト」	英数字およびアンダースコア(Position など)、特殊文字またはスペースなしの文字のみを含む一意の名前を入力します。スマート・リスト名は数式で参照できます。
「ラベル」	スマート・リストが選択されたら、テキストを入力して表示させます。スペースおよび特殊文字を使用できます。スマート・リスト・ラベルは様々な言語に翻訳することができるリソースを参照させることができます。 398 ページの「テキスト、色および画像のカスタマイズ」 を参照してください。
「表示順序」	スマート・リストのドロップダウン・リストを、ID 順、名前順、ラベル順のいずれでソートするのかを指定します。
「#MISSING ドロップダウン・ラベル」	値が#MISSING のスマート・リストのエントリに表示するラベル(No Justification など)を入力します。注意: <ul style="list-style-type: none"> ● スマート・リストのドロップダウンに最初の項目として表示されるので、フォームの中で#MISSING を値として選択できます。 ● セルがフォーカスにない場合、このラベルは次のオプションでドロップダウンの設定が選択されている場合のみに表示されます。それ以外では、フォームに対する「欠落値を空白で表示」の選択肢によって、#MISSING または空白のセルが表示されます。 ● #MISSING ラベルは、#MISSING データをセルに表示するかどうかを決定するのみです。格納された値は、#MISSING のままです。

プロパティ	説明
「#MISSING フォーム・ラベル」	<p>スマート・リストに関連付けられたセルにおける、#MISSING 値の表現形式を指定します。オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ドロップダウンの設定「」: #MISSING ドロップダウン・ラベル内のラベル・セットを表示します。 ● 「フォーム設定」: フォームに対する「欠落値を空白で表示」の選択肢によって、#MISSING または空白のセルを表示します。この選択は、フォーカスではない場合に何がセルに表示されるかを決定します。セルがフォーカスにある場合、ドロップダウンから選択されたスマート・リストのアイテムが表示されます。
「自動的に ID を生成」	<p>各スマート・リストのエントリに対して数字の ID を生成します。このオプションを選択しない場合は、スマート・リストの ID 値をカスタマイズできます。</p>

4 「保存」をクリックします。

5 「エントリ」を選択します。

「エントリ」タブを使って、スマート・リストのオプションを定義します。

スマート・リスト・エントリの追加と変更

スマート・リスト・エントリの「編集」タブまたは「追加」タブを使って、スマート・リストのオプションを定義します。

▶ スマート・リストのエントリを定義するには:

1 「管理」、「管理」、「スマート・リスト」の順に選択します。

2 「スマート・リスト」を選択し、「編集」をクリックします。

3 「エントリ」でドロップダウン・リストのアイテムを定義します。

- **最初のアイテムのみ:** 最初の行に情報を入力します。
- アイテムを追加するには、「追加」をクリックして、情報を入力します。
- アイテムを削除するには、そのアイテムを選択して、「削除」をクリックします。
- アイテムを編集するには、行の中の情報を変更します。

表 80 スマート・リストのエントリ

エントリ・プロパティ	説明
「ID」	エントリを表示する順番を決める一意の数です。「自動的に ID を生成」が「プロパティ」タブで選択されていない場合のみにカスタマイズできます。
「名前」	英数字およびアンダースコア(Customer_Feedback など)、特殊文字やスペースのない一意の英数字名です。
「ラベル」	ドロップダウン・リストのスマート・リストのエントリに表示されるテキスト(Customer Feedback など)です。

赤で強調表示されるアイテムは、重複しています。

4 次のいずれかを実行します。

- 「保存」をクリックします。
- 「プレビュー」を選択します。

スマート・リストのプレビュー

定義済のスマート・リストを「プレビュー」タブでプレビューします。タブは、スマート・リストをドロップダウン・リストまたはテーブルで表示されるように表示します。

スマート・リストで#Missing を表示

管理者は、データがセルにない場合を含めて、スマート・リストおよびデータ・セルで表示される値を設定します。セルでは、値なし、#MISSING または(スマート・リストに関連するセルの)指定値を表示させることができます。

このオプションを使用して、セルがフォーカスにない場合の#MISSING の表示を制御します。

オプション	ガイドライン
空白	フォームを設計する場合、「欠落値を空白で表示」を選択します。 スマート・リストのプロパティを設定する場合、「フォーム設定」を選択します。
#MISSING	フォームを設計する場合、「欠落値を空白で表示」を選択しないでください。 スマート・リストのプロパティを設定する場合、「フォーム設定」を選択します。
「変更なし」などのカスタム・ラベル	スマート・リストのプロパティを設定する場合、「#MISSING ドロップダウン・ラベル」フィールドにカスタム・ラベル(変更なしなど)を入力します。「ドロップダウンの設定」を選択します。

UDA の操作

ユーザー定義の属性(UDA)、記述的な語やフレーズは、計算スクリプト、メンバー式およびレポートで使用できます。UDA は UDA に関連したメンバーのリストを戻します。例:




- HSP_UDF UDA を使用して、アプリケーションをリフレッシュする際の式の上書きを防止できます。Planning アプリケーションに関連する各データベースにログオンし、UDA を使ったメンバー式を作成する必要があります。この UDA の構文は、(UDAs: HSP_UDF) です。
- @XREF 関数を使用して、別のデータベースのデータ値を検索し、現在のデータベースから値を計算する場合、HSP_NOLINK UDA をメンバーに追加して、@XREF 関数が、そのメンバー用として選択されたソース・プラン・タイプではないすべてのプラン・タイプで作成されてしまうのを防ぐことができます。
- 数種類の製品メンバーのついた製品次元では、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、製品次元の階層にある新製品へ割り当てることができます。その後、指定した新製品における特定の計算を基にすることができます。
- 予算レビュー・プロセスでは、製品ラインの各所有者に対しデータ検証ルールを作成するのではなく(製品によっては数百の所有者がいるものもありま

す)、プランニング・ユニット階層を使用してメンバーに適用する、ユーザー名を含む UDA を作成できます。次に、データ検証ルールに、現在のメンバーに対する UDA に保存されたユーザー名を戻す検索関数を入力できます。たとえば、移動パスの各ユーザー用の UDA を作成し、その UDA 名に接頭辞を割り当てます(たとえば ProdMgr:Kim)。

UDA の作成および使用の詳細は、[34 ページの「Essbase の操作の考慮事項」](#) および Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

UDA は次元によって特定されます。たとえば、勘定科目メンバーの UDA を作成すると、共有していない勘定科目メンバーに使用できます。UDA を削除すると、すべての勘定科目メンバーの UDA が除去されます。UDA を複数の次元に使用可能にするには、複数の次元に同じ UDA を作成します。たとえば、「新規」という UDA を勘定科目次元とエンティティ次元に作成し、それを勘定科目メンバーとエンティティ・メンバーに使用できます。

▶ 特定のメンバー用の UDA を選択するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 メンバーを UDA に関連付ける次元を選択します。
- 3 次元の階層から、メンバーを選択して「編集」をクリックします。
- 4 「UDA」を選択します。
- 5 「オプション」: UDA を作成するには「追加」をクリックします。
- 6 メンバーの UDA を「選択した UDA」に移動して「保存」をクリックし、選択します。
 -  選択済 UDA を移動します
 -  選択済 UDA を除去します
 -  すべての UDA を除去します

UDA の作成

▶ UDA を作成するには:

- 1 「UDA」タブヘナビゲートします。
- 2 「UDA」で「追加」をクリックします。
- 3 名前を入力して、「保存」をクリックします。

注: 承認用の UDA を作成する場合、その名前の最初に接頭辞を割り当てます(たとえば、ProdMgr:Name)。接頭辞は UDA がユーザー名を含むことを示し、データ検証ルールがユーザーを検索できるようにします。すべての承認 UDA に同じ接頭辞を使用します。

UDA の変更

▶ UDA を変更するには:

- 1 「UDA」タブヘナビゲートします。
- 2 「UDA」で、UDA を選択して「編集」をクリックします。
- 3 名前を変更して、「保存」をクリックします。

UDA の削除

UDA を削除すると、すべての次元から UDA が除去されます。

▶ UDA を削除するには:

- 1 「UDA」タブヘナビゲートします。
- 2 UDA を選択して、「削除」をクリックします。

UDA を削除した場合は、それを参照していたすべてのメンバー式、計算スクリプト、レポートを更新する必要があります。

メンバー式の操作

演算子、計算関数、次元名、メンバー名および数値定数を組み合わせてメンバー式を定義することによって、メンバーの計算を実行できます。メンバー式には次も含まれます。

- Essbase 式で認められた演算子タイプ、関数、値、メンバー名、UDA など(Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください)
- 式に展開するスマート・リスト値またはデータベースのリフレッシュにおける値を含む事前定義済の Planning 数式

▶ メンバー式を定義するには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 メンバーの式を追加または変更する次元を選択します。
- 3 メンバーを選択し、「編集」をクリックします。
- 4 「メンバー式」を選択します。
- 5 テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。

Oracle Essbase Database Administrator's Guide 式における構文、ルールおよび使用法については『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 6 「オプション」: メンバー式が有効かどうかを検証するには、「メンバーの式の検証」と「OK」をクリックします。

- 7 「保存」をクリックします。

「保存」をクリックする前に、「リフレッシュ」をクリックして、前にあったメンバー式情報を復元します。

式の検証結果の表示

▶ メンバー式の検証結果を表示するには:

- 1 「メンバー式」で、「メンバーの式の検証」をクリックします。
- 2 メンバー式が有効ではないと表示されたら、「詳細の表示」をクリックします。
メンバー式が有効な場合は、「詳細の表示」は選択できません。
- 3 「OK」をクリックします。

数式の操作

Planning メンバー式は、データベースがリフレッシュされる際に Essbase ネイティブ式および評価され Essbase コード・ブロックへ展開される Planning 数式をサポートします。こうした式では、Planning が計算で数値に置き換えるスマート・リストを名前でアドレス指定できます。

「メンバー式」タブのテキスト・ボックスに、メンバー式内の事前定義済の数式を含めて、「メンバーの式の検証」ボタンを使ってテストします。また、ロードすることもできます。

アウトラインに頼っているビジネス・ルールや計算スクリプトを更新することなく次元のアウトラインを更新できます。計算はアウトライン内で特定数よりさらに孤立します。スマート・リストは計算でオブジェクトとして使用できます。数式を使用しても、データベースのリフレッシュ時にのみ実行されるので、パフォーマンスが低下することはありません。

▶ メンバー式で数式を使うには:

- 1 「管理」、「管理」、「次元」の順に選択します。
- 2 メンバーの式を追加または変更する次元を選択します。
- 3 メンバーを選択し、「編集」をクリックします。
- 4 「メンバー式」を選択します。
- 5 テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。

Planning 数式および Essbase ネイティブ式をメンバー式に含ませることができます。Oracle Essbase Database Administrator's Guide ネイティブ式における構文、ルールおよび使用法については『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

Planning は、メンバー式で使用できる事前定義の数式を提供します。独自の数式を編集したり作成することはできません。

- 6 「オプション」:メンバー式が有効かどうかを検証するには、「メンバーの式の検証」と「OK」をクリックします。
- 7 「オプション」;メンバー式にエラーがある場合は、「詳細の表示」をクリックするとエラーの理由が表示されます。
- 8 「オプション」:メンバー式の変更を保存しない場合は、「リフレッシュ」をクリックして、前のメンバー式を復元できます。
- 9 「保存」をクリックします。

前提条件

メンバー式で数式を使用する前に、Essbase 式、計算およびアプリケーションのアウトラインを理解する必要があります。Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

構文

メンバー計算数式は関数および変数をサポートします。計算数式を作成する場合には、次の関数および変数の構文ルールに従ってください。

- 変数やプロパティは大カッコ([])で囲みます。大カッコを省略すると、変数はネイティブ変数として扱われます。
- メンバー名を引用符で囲みます。
- 変数では大文字と小文字は区別されますが、余計なスペースや、アンダースコア(_)のような文字は使用できません。
- 式には他の関数へのサブコールも含めることができます。
- 数字が必要な箇所には、テキストは入力できません。
- アウトラインの順番は、メンバー式では重要になります。まだ計算されていない値を参照しないでください。

スマート・リスト変数を変数として含める

スマート・リストは、変数として"Status"= [Status.Departed]などの数式に含めることができます

"Status"はメンバー名であり、Status はスマート・リスト名、Departed はスマート・リストのエントリです。Departed に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、Essbase はメンバー式で Status.Departed を 2 に置き換えます(Planning はスマート・リストを数字として扱います)。Departed に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、Essbase は計算に 2 をおき、データベースに 2 を保管します。

スマート・リストを次のフォーマットで記述します。

[SmartListName.SmartListEntry]

数式

Planning 数式には、これらの事前定義済みの変数および関数を含めることができます。

表 81 数式内の変数

変数	説明
OpenInputValueBlock	Planning アプリケーションが複数通貨アプリケーションである場合は IF ステートメントを生成し、単一通貨アプリケーションである場合は空の文字列を生成します。ClosedInputValueBlock とともに使用されます。
CloseInputValueBlock	Planning アプリケーションが複数通貨アプリケーションである場合は End IF ステートメントを生成し、単一通貨アプリケーションである場合は空の文字列を生成します。OpenInputValueBlock とともに使用されます。

変数	説明
NumberOfPeriodsInYear	年内の期間を戻します。
NumberOfYears	アプリケーション内の年数を戻します。

表 82 数式内の関数

機能	説明
Dimension(dimTag)	事前定義済の次元の名前を戻します。dimtags は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ● DIM_NAME_PERIOD ● DIM_NAME_YEAR] ● DIM_NAME_ACCOUNT ● DIM_NAME_ENTITY ● DIM_NAME_SCENARIO ● DIM_NAME_VERSION ● DIM_NAME_CURRENCY
Period(periodName)	指定した期間を戻します。periodName オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ● FIRST_QTR_PERIOD ● SECOND_QTR_PERIOD ● THIRD_QTR_PERIOD ● FOURTH_QTR_PERIOD ● FIRST_PERIOD ● LAST_PERIOD
CrossRef(accountName)	勘定科目の相互参照を生成します。
CrossRef(accountName, prefix)	勘定科目に対する相互参照を生成します。勘定科目名には定義した接頭辞が含まれます。デフォルトの接頭辞は No で、その後空白スペース、勘定科目名が続き、たとえば「No Salary」となります。
getCalendarTPIIndex()	期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。暦年に基づくインデックスです。
getFiscalTPIIndex()	期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。年度に基づくインデックスです。
CYTD(memberName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式を生成します。
CYTD(memberName, calTPIIndexName, fiscalTPIIndexName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式と、暦年および会計年を基にした期間インデックスを生成します。メンバーの名前が変更する場合に使用します。デフォルトのメンバー名は「暦期間-インデックス」および「会計期間-インデックス」です。

一般的なエラー

構文のルールに注意して従います。数式構文にエラーが含まれる場合、メンバー式を検証した後にエラー・メッセージが戻されます。エラー・メッセージの情報を得るには「メンバー式」タブの「詳細の表示」をクリックします。最も一般的なエラー・メッセージは実行に失敗しました。です。これは、式でパラメータを

不正に使用すると発生します。次のアクションが実行に失敗しました。のエラー・メッセージの原因となります:

- 数式でパラメータの数を間違えて入力
- メンバー名、関数または変数名のスペルミス
- メンバー名を引用符で囲んでいない
- 文字列が必要な箇所へ数字を含ませる

この章の内容

レポートのカスタマイズ.....	389
Planning ツール・ページのカスタマイズ	392
カスケード・スタイルシートのカスタマイズ	392
フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ	395
フォームでのヘッダー・セルのスタイルのカスタマイズ	396
スキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加.....	397
カスタマイズしたスキンの登録.....	397
ADF コンポーネントのカスタマイズについて	398
テキスト、色および画像のカスタマイズ.....	398
プロセス・ステータス用に色、状態、アクションをカスタマイズ.....	402
分散パターンの作成.....	405
分散パターンの例	405
プランナのための指示の作成	406

レポートのカスタマイズ

Planning には、フォームの PDF レポートのレイアウトおよびコンテンツ、フォームの定義、タスク・リストおよびプランニング・ユニットを制御するテンプレートが含まれています。テンプレートはそのまま使用できます。また、カスタマイズして会社のロゴ、網掛けや、ページ・サイズ、向き、フォント、フォント・サイズ、ヘッダー、ヘッダー用に使用するページの割合、1 ページ当たりのデータ列数および精度などの機能に対する特別なフォーマットもカスタマイズできます。

レポートをカスタマイズするには、Microsoft Office Word 2000 以降および Oracle Business Intelligence Publisher デスクトップをインストールし、構成する必要があります。そうすると、Word の BI Publisher メニューでサンプル.XML ファイルを使用してレポートの情報を更新できるようになります。また、Word 機能を使用してフォーマットをカスタマイズできます。.RTF ファイルに適切な名前を付けて保存し、それをクラスパスまたは HspJS.jar ファイルに入れることでテンプレートを
使用可能にすることができます。

対応するサンプルやテンプレート・ファイルを使用して 4 つのレポート・ファイルをカスタマイズできます。レポートの作成に関する情報は、関連トピックを参照してください。

レポート・タイプ	サンプル・ファイル名	テンプレート名	関連トピック
フォーム	PlanningFormSample.xml	PlanningFormTemplate.rtf	168 ページの「単一のフォームの作成」を参照してください。
フォームの定義	PlanningFormDefSample.xml	PlanningFormDefTemplate.rtf	164 ページの「フォーム定義の印刷」を参照してください。
タスク・リスト	PlanningTaskListSample.xml	PlanningTaskListTemplate.rtf	Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。
プランニング・ユニットの注釈	PlanningPUAnnotationSample.xml	PlanningPUAnnotationTemplate.rtf	252 ページの「プランニング・ユニットの注釈の印刷」を参照してください。

このトピックでは一般的な手順を提供します。手順の詳細は、Word および BI Publisher でインストールされたマニュアルを参照してください。BI Publisher インストール・ガイドおよびユーザー・ガイドは次の場所にあります。

http://download.oracle.com/docs/cd/E10091_01/welcome.html

▶ BI Publisher デスクトップをインストールするには:

1 次の場所から最新バージョンの BI Publisher デスクトップをダウンロードします。

<http://www.oracle.com/technology/software/products/publishing/index.html>

レポートをカスタマイズするには、BI Publisher デスクトップのみをインストールする必要があります。BI Publisher は必要ありません。

2 ZIP ファイルをドライブに保存して、「フォルダ名を使用」を選択して抽出します。

3 すべての Microsoft Office アプリケーションを閉じます。

4 ZIP ファイルを抽出したディレクトリへナビゲートし、setup.exe アプリケーションをダブルクリックします。

5 BI Publisher のインストール・ウィザードの手順に従い、デフォルトの設定で基本インストールを実行します。

▶ レポートをカスタマイズするには:

1 デフォルトで WEB-INF/lib にインストールされた PlanningHspJS.jar ファイルを開き、サンプル・ファイルおよび対応するテンプレート・ファイルを抽出します。

たとえば、タスク・リストのレポートをカスタマイズする場合には、PlanningTaskListSample.xml および PlanningTaskListTemplate.rtf を抽出します。

- 2 サンプルおよびテンプレート・ファイルを後で開く場所へ保存します。
- 3 Microsoft Word で、カスタマイズするレポートの.RTF テンプレート・ファイルを開きます。

たとえば、タスク・リストのレポートなら PlanningTaskListTemplate.rtf テンプレート・ファイルを開きます。

- 4 Microsoft Word の「Oracle BI Publisher」メニューから、「データ」、「サンプル XML データのロード」と選択し、レポート用のサンプル・ファイルを開きます。

タスク・リストのレポートの場合は、PlanningTaskListSample.xml サンプル・ファイルを開きます。

Word で BI Publisher メニューが表示されない場合は、「テンプレート・ビルダー」・ツールバーを選択します。(たとえば、「表示」、「ツールバー」、「テンプレート・ビルダー」の順に選択します。)Oracle Business Intelligence Publisher User's Guide を参照してください。

- 5 Word メニューを使用してテンプレートをカスタマイズします。

たとえば、グラフィックや更新したフォントが使用できます。こうしたタスクに関するサポートは Word マニュアルを参照してください。

- 6 「オプション」: レポートのフィールドを更新するには、Word の BI Publisher メニューを使用してサンプル・ファイルからフィールドを追加します。

たとえば、「Oracle BI Publisher」、「挿入」、「フィールド」の順に選択し、「フィールド」ダイアログ・ボックスのフィールドをクリックして、テンプレートへフィールドをドラッグします。

こうしたタスクに関するサポートは、BI Publisher マニュアルを参照してください(Word では、「Oracle BI Publisher」、「ヘルプ」の順に選択します。Oracle Business Intelligence Publisher では、「ヘルプ」をクリックしてオンライン・ヘルプを表示させます)。

- 7 カスタマイズが終了したら、「Oracle BI Publisher」、「テンプレートのプレビュー」の順に選択し、変更内容をプレビューするためのフォーマットを選択します。あらゆるフォーマットでプレビューできます。クローズ・ボックスをクリックしてプレビュー・ファイルを閉じます。

- 8 テンプレート・ファイルで「名前を付けて保存」を選択し、テンプレートをテーブルから適切なファイル名を付けて.RTF ファイルで保存します。

たとえば、タスク・リストのレポートをカスタマイズしている場合は、ファイルを PlanningTaskListTemplate_Custom.rtf として保存します。

テンプレート・タイプ	ファイル名
すべてのフォーム	PlanningFormTemplate_Custom.rtf
特定のフォーム	PlanningFormTemplate_Data_Form_Name たとえば、「収益」と名付けたフォームへテンプレートを適用させるには、PlanningFormTemplate_Income.rtf としてテンプレートを保存します。
フォームの定義	PlanningFormDefTemplate_Custom.rtf

テンプレート・タイプ	ファイル名
タスク・リストのステータス・レポート	PlanningTaskListTemplate_Custom.rtf
プランニング・ユニットの注釈レポート	PlanningPUAnnotationTemplate_Custom.rtf

テンプレート・ファイルは、Web アプリケーション・サーバーで利用できるように、クラスパスの場所に保存する必要があります。テンプレート・ファイルをルート・レベルの HspJS.jar ファイルに挿入します(テンプレート・ファイルと同じレベル)。

- 9 ユーザーが Planning で PDF レポートを作成する場合、カスタム・テンプレートが利用できるようにアプリケーション・サーバーを再起動します。

Planning ツール・ページのカスタマイズ

管理者は、プランニング・データの分析、追跡およびレポートに一般的によく使用されるツールへのリンクを追加することで Planning ツール・ページをカスタマイズできます。Planning ユーザーはその後、「ツール」メニューから Planning リンクを開き、リンクをクリックしてブラウザの 2 番目のウィンドウでページを開くことができます。293 ページの「カスタム・ツールの指定」を参照してください。

カスケード・スタイルシートのカスタマイズ

Planning では、Planning の外観を制御するユーザー・インタフェース(UI)を定義するときカスケード・スタイル・シートが役に立ちます。Planning カスケード・スタイル・シートをカスタマイズしてニーズを満たすことができます。一般的なスタイル・シートのカスタマイズには次のものがあります。

- 強調や色分けのためのフォント色の変更
- 特定の UI 要素のバックグラウンド色の調整
- 企業のロゴを挿入

カスケード・スタイル・シートをカスタマイズする前に、カスケード・スタイル・シートの基本知識とスタイル・シートのエディタ・ツールに精通している必要があります。設定の一部は製品の表示に必要なになります。

カスケード・スタイル・シートへの変更は Web アプリケーション・サーバー上で実行されるので、接続しているすべてのユーザーに影響します。スタイル・シートはデフォルトのディレクトリではなく、Web アプリケーション・サーバーによって実行時にファイルが一時的な場所に抽出されます。Web アプリケーション・サーバーのどこでこれらのファイルを探すかについては、394 ページの「カスケード・スタイルシート・ファイルの場所」を参照してください。

Planning では、2 つのカスケード・スタイル・シートが主に使用され、1 つは複数の Oracle 製品に共通する Web UI 要素を定義するグローバル・シート、もう 1 つは Planning 専用のシートです。グローバル・カスケード・スタイル・シートは global.css という名前です。次の表では global.css ファイルの主なセクション

をリストするとともに、Oracle がカスタマイズしないように推奨しているセクションを示します。

表 83 global.css ファイルの主なセクション

カスタマイズ可能なセクション	カスタマイズしないように推奨しているセクション
非ナビゲーション・スタイル	Tadpole メニューバー Tadpole メニュー・アイテム メニュー・スタイル(順序も重要です)
Tadpole マストヘッド	Tadpole 最小化したマストヘッド
Tadpole コンテンツ領域	Tadpole ツールバー
Tadpole ログオン・スタイル	Tadpole ビュー・ペイン
タブ タブ・アンカー・タグ タブ本体	Tadpole ツリー
タスク・タブ Task Tab Body	
Groupbox Groupbox アンカー・タグ	
ボタン HTML でのボタン描画 ボタン・タグの使用 インプット・タグの使用	

▶ カスケード・スタイルシートをカスタマイズするには:

- 1 HyperionPlanning.ear ファイル、HyperionPlanning.war ファイルの順に一時的な場所に抽出します。
[394 ページの「カスケード・スタイルシート・ファイルの場所」](#)を参照してください。
- 2 HspCustom.css ファイル(HyperionPlanning.war が抽出された一時的な場所の custom ディレクトリの下)を探します。
- 3 HspCustom.css をカスタマイズし、HyperionPlanning.ear に保存します。
- 4 変更が適用されるようにするには、再配置する必要があります。

すべての PlanningWeb ページは、HspCustom.css ファイルを参照し、ここで設定された設定内容は global.css および planning.css の設定を上書きします。

フォーム内のスタイルをカスタマイズして、行や列の軸でメンバーの階層位置に反映させる方法は、[395 ページの「フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ」](#)を参照してください。

カスケード・スタイルシート・ファイルの場所

Planning のカスケード・スタイル・シートは、WebLogic によって実行時に一時的な場所に抽出されます。これらのファイルを変更するユーザーは、更新を行う前に HyperionPlanning.ear ファイル、HyperionPlanning.war ファイルの順に一時的な場所に抽出する必要があります。スタイル・シートに加えられた変更を HyperionPlanning.war ファイル(HyperionPlanning.ear の一部)に再度追加してから、HyperionPlanning.ear を再配置する必要があります。

カスケード・スタイル・シートの変更

Oracle カスケード・スタイル・シートを操作する場合:

- 変更前にオリジナル・バージョンをコピーしてすぐにアクセスできるようにします。
- 複数製品に使用できる一般的なスタイルは global.css にあります。
- 独自のスタイルが要求される製品用のスタイルは productname.css にあります。
- ユーザー・インタフェース・コントロールの一部はサードパーティ製のコンポーネントです。サードパーティ・コントロールのスタイル変更にはすべての関連ファイルの変更が要求されます。
- パディング、枠線、テキスト、垂直整列、位置および余白を含むレイアウトに影響を与えるスタイルの変更は避けます。
- 色の変更はフォントの色に影響します。背景の変更はボタンなどの要素の色に影響します。
- ハイパーリンクのテキストの色を変更する場合は、ハイパーリンク・スタイル(「a:link」、「a:hover」および「a:visited」)を使用します。
- ツールバーのボタンの変更は製品のすべてのボタンの変更が要求される場合があります。
- ツールバーのボタンは紺色の背景で正確に表示されます。

カスタマイズの例

サブトピック

- [コンテンツ領域の色を変更](#)
- [ハイパーリンクとアクセスしたハイパーリンクの色を変更](#)

この項では一般的なカスタマイズについて説明します。

コンテンツ領域の色を変更

global.css ファイルの Tadpole Logon Styles セクションを編集することで、ページ右側のコンテンツ領域の背景色を変更できます。次のテーブルでは、デフォルトの色を白に変更するためのファイルの編集方法を表示しています。

表 84 コンテンツ領域の色を変更

コンテンツ領域のデフォルト背景	コンテンツ領域の白の背景
<pre>.content table.content { background: # e5eaeef ; }</pre>	<pre>.content table.content { background: # ffffffff ; }</pre>

ハイパーリンクとアクセスしたハイパーリンクの色を変更

global.css ファイルの Non-Navigation Styles セクションを編集することでハイパーリンクの色を変更できます。次のテーブルではデフォルトの色を赤に変更するための編集方法を表示しています。

表 85 ハイパーリンクとアクセスしたハイパーリンクの色を変更

黒いハイパーリンクと参照したハイパーリンク	赤いハイパーリンクと参照したハイパーリンク
<pre>a:link, a:visited { color: # 000000 ; }</pre>	<pre>.content table.content { background: # ff0000 ; }</pre>

フォームの行および列メンバーのスタイルのカスタマイズ

行や列のメンバー・レベルのスタイルは、フォームの階層位置によって様々に異なりますが、これらのスタイルを含むフォームは、Planning カスケード・スタイルシートをカスタマイズして表示できます。

注意:

- ADF モードでは、planning.css を変更しても何も影響しません。
- カスタマイズされたスタイルはフォームに表示された次元に関係なく適用されます。
- 行のテキスト配列はサポートされていません。
- スタイルはメンバーの表示された階層レベルが基になっており、Essbase の関係が基になる必要はありません。
- 行に大きなフォント・サイズを設定すると行の配列に影響を及ぼします。
- カスタマイズされたスタイルは、フォームが PDF ファイルへ印刷される場合には反映されません。

▶ 行および列メンバーのスタイルをカスタマイズするには:

- 1 392 ページの「カスケード・スタイルシートのカスタマイズ」の手順に従って planning.css ファイルを変更します。
- 2 planning.css ファイルで、次のヘッダー・タグをカスタマイズします。

表 86 Planning.css ファイルのヘッダー・タグ

行	列
rowHeader_0	columnHeader_0
rowHeader_1	columnHeader_1
rowHeader_2	columnHeader_2
rowHeader_3	columnHeader_3
rowHeader_4	columnHeader_4

タグ「rowHeader_0」および「columnHeader_0」が一番低いレベルのクラスに影響します。タグ「rowHeader_4」および「columnHeader_4」が一番高いレベルのクラスに影響します。レベル 4 以上のメンバーはレベル 4 スタイルで表示されません。

フォームでのヘッダー・セルのスタイルのカスタマイズ

すべてのフォームへの太字の適用

▶ すべてのフォームに太字スタイルを適用するには:

1 「HyperionPlanning.war\custom」から、「HspCustom.css」を開きます。

2 次のクラス・コードを挿入します: `customheaderStyleFont-family:;Font-size:<size>;Font-weight:bold;`

3 同じコード部分でフォントとフォント・サイズも変更できます。

たとえば、太字の Garamond 14 をヘッダー・セルのスタイルとして使用する場合は、次のように指定します:

```
customheaderStyle Font-family:garamond; Font-size:14; Font-weight:bold;
```

4 [397 ページの「カスタマイズしたスキンの登録」](#)で、タスクを実行します。

1つのフォームへの太字の適用

▶ 1つのフォームに太字を適用するには:

1 次のクエリーを実行して、カスタマイズするフォームの ID を決定します。ここで、<FORM_NAME>がフォームの名前です:

```
Select object_id AS  
FORM_ID,object_name AS FORM_NAME from hsp_object where  
object_name like '<FORM_NAME>'
```

たとえば、「1.30 Per Payor - Metrics」というフォームを変更する場合は、次のクエリーを実行します: `Select object_id AS FORM_ID,object_name AS FORM_NAME from hsp_object where object_name like "1.30 Per Payor-Metrics"`

- 2 ID が戻されたら、次のフォーマットで「HspCustom.css」に「css」クラスを作成します。 “`customheaderStyle_<FORM_ID>`”
- 3 次に示すように、「customheaderStyle」で **font-weight** を **bold** に設定します。フォントとフォント・サイズをコードと同じ部分に変更することもできます。
`customheaderStyle Font-family:customheaderStyleFont-family:;Font-size:<size>;Font-weight:bold;`
- 4 個々のフォームに異なるスタイルを使用するには、各フォームの CSS クラスを作成します。
- 5 [397 ページの「カスタマイズしたスキンの登録」](#) で、タスクを実行します。

スキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加

既存のスキンをカスタマイズしてコンポーネントを追加するには:

1. trinidad-skins.xml という名前でファイルを作成し、次のコードを挿入します:
`<skins xmlns="http://myfaces.apache.org/trinidad/skin"><skin><id>HspCustom.desktop</id><family>HspCustom</family><extends>blafplus-rich.desktop</extends><render-kit-id>org.apache.myfaces.trinidad.desktop</render-kit-id><style-sheet-name>custom/HspCustom.css</style-sheet-name></skin></skins>`
2. このコードで次のように指定します:
 - family - 新しいスキンの名前
 - style-sheet-name - スタイル・セレクタを含むカスタム css ファイル
 - extends - 変更中のスキン
3. 必要なスタイル・セレクタを上書きします。
4. [397 ページの「カスタマイズしたスキンの登録」](#) で、タスクを実行します。

カスタマイズしたスキンの登録

▶ 変更したスキンをアプリケーションに登録するには:

- 1 更新したスキン・ファイルを「HyperionPlanning.ear」に追加します。
- 2 「trinidad-skins.xml」を「HyperionPlanning.war\“WEB-INF\」に置きます。
- 3 新しい「HspCustom.css」を「HyperionPlanning.war\custom」にコピーし、既存の css ファイルを置き換えます。

- 4 更新した.ear ファイルを「EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer\InstallableApps」にコピーします。
- 5 アプリケーション・サーバーに再配置します。
- 6 アプリケーション・サーバーを再起動し、ブラウザキャッシュをクリアします。
- 7 Planning で、「管理」、「アプリケーション」、「プロパティ」の順に選択します。
- 8 「SKIN_FAMILY」という新しいアプリケーション・プロパティを作成します。
- 9 HspCustom など、カスタム・スキンを参照するようにプロパティ値を設定します。
- 10 ログアウトした後に再びログインします。

ADF コンポーネントのカスタマイズについて

ADF でコンポーネント・スキンのスタイル・セレクトアを使用すると、UI コンポーネントの表示形式をカスタマイズできます。スタイルシート・ルールには、要素を指定するスタイル・セレクトアと、コンポーネントの表示形式を指定する一連のスタイル・プロパティが含まれます。ADF Faces コンポーネントには、次のカテゴリのスキン・スタイル・セレクトアがあります：

- グローバル・セレクトア: 複数の ADF Faces コンポーネントのスタイル・プロパティを決定します
- コンポーネント・セレクトア: コンポーネント固有のセレクトアはスキンを特定の ADF Faces コンポーネントに適用できるセレクトアです

スタイル・セレクトアの詳細は、次を参照してください：

- http://docs.oracle.com/cd/E23943_01/apirefs.1111/e15862/toc.html
- <http://www.oracle.com/technetwork/developer-tools/jdev/index-092146.html>
- http://docs.oracle.com/cd/E16764_01/web.1111/b31973/af_skin.html

テキスト、色および画像のカスタマイズ

Planning Web インタフェースでは、テキスト、色および画像をカスタマイズすることができ、テキストをローカライズすることもできます。

- [398 ページの「テキスト、色および画像のカスタマイズ」](#)
- [400 ページの「非ラテン言語でテキストをカスタマイズ」](#)
- [402 ページの「カスタマイズされたメッセージで制限されている文字」](#)

テキスト、色および画像のカスタマイズ

Planning Web インタフェースでは次のアイテムのテキスト、色、画像をカスタマイズできます。

- HspCustomMsgs_en.template を使用するラベルとメッセージ
- HspCustomImgs_en.template を使用するカスタマイズ可能な色と画像

ラベルを追加する場合は、HspCustomMsgs リソース・ファイルへラベルを追加する必要があります。たとえば、スマート・リスト・エントリやメニュー・アイテムを追加する場合、ラベルをリソース・ファイルに含めます。アプリケーションがローカライズされている場合は、対応するリソース・ファイルを更新します。たとえば、アプリケーションを3言語にローカライズするには、ラベルを3つのローカライズされた HspCustomMsg ファイル(各言語コードがそれぞれのファイル名に付けられる)すべてに追加し、翻訳された語句を含めます。注意:

- テキストやメッセージをカスタマイズする場合は特定の文字を避ける必要があります。[402 ページの「カスタマイズされたメッセージで制限されている文字」](#)を参照してください。
- 色によっては名前があるものと、16進法やRGB値で表されるものがあります。
- Webアプリケーション・サーバーやオペレーティング・システムの種類によっては、画像ファイルの名前と Images ディレクトリの名前で使用する大文字と小文字が区別される場合があります。
- Web インタフェースに追加された画像は、Images ディレクトリの HspCustomImgs_en.properties を使用して保管する必要があります。
- WebLogic 8.1 が実行するサイレント配置は EAR および WAR アーカイブからファイルを抽出しません。カスタマイズ・ファイルは手動で抽出、変更およびアーカイブする必要があります。
- その他の画像タイプをカスタマイズするには、[392 ページの「カスケード・スタイルシートのカスタマイズ」](#)を参照してください。
- 手順では、HspCustomMsgs_en ファイルの英語メッセージのカスタマイズについて説明しています。アプリケーションをローカライズする際に、ファイルを適切な言語に更新してください。

▶ テキスト、色、画像をカスタマイズするには:

- 1 HyperionPlanning.ear ファイルを一時的な場所に抽出した後、HspCustomMsgs_en.template ファイルおよび HspCustomImgs_en.template ファイルを探します。

これらのテンプレート・ファイルは、HyperionPlanning.war ファイルが抽出された custom ディレクトリにあります。

- 2 HspCustomMsgs_en.template および HspCustomImgs_en.template をコピーし、一時的な場所へ貼り付けます。
- 3 HspCustomMsgs_en.properties および HspCustomImgs_en.properties ファイルの名前を変更します。
- 4 HspCustomMsgs_en.properties および HspCustomImgs_en.properties のコンテンツを更新します。

HspCustomMsgs_en.properties の各ラインはカスタマイズ可能なテキスト・リソースを示しています。HspCustomImgs_en.properties の各ラインはカスタマイズ可能な色または画像リソースを示しています。

ラインはリソース、等号およびカスタマイズ可能なリソースの名前で始まります。ラインの最後に句読点を含める必要はありません。改行はリソースの最後を示しています。

たとえば、HspCustomMsgs_en.properties ファイルの次のラインを変更することで、ツール・メニューのラベルを「Tools: Analyze and Report」から「Tools: Additional Resources」へ変更できます:

```
LABEL_HOME_TOOLS=Tools: Analyze and Report
```

先:

```
LABEL_HOME_TOOLS=Tools: Additional Resources
```

- 5 更新されたファイルを保存して HyperionPlanning.ear に追加し、そのファイルを次の場所にコピーして、変更が適用されるように再配置を実行します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer  
\InstallableApps\Common\HyperionPlanning.ear\HyperionPlanning.war  
\WEB-INF\classes\
```

- 6 Web アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

HspCustomMsgs ファイルのビジネス・ルールの計算に関するエラー・メッセージのカスタマイズについては、[202 ページの「エラー・メッセージのカスタマイズ」](#)を参照します。

非ラテン言語でテキストをカスタマイズ

Planning Web インタフェースのテキストを非ラテン言語にカスタマイズするには、HspCustomMsgs_en.template ファイルを更新します。この例では、ファイルをロシア語に更新する方法を示します。

▶ HspCustomMsgs_en.template をカスタマイズするには:

- 1 /custom ディレクトリで HspCustomMsgs_en.template を探します。
- 2 ロシア語など、特定の言語にラベルをカスタマイズしている場合は、HspCustomMsgs_ru.source など、.source 拡張子を使用するようにテンプレート・ファイルの名前を変更します。
- 3 HspCustomMsgs_ru.source など、その言語のソース・ファイルをレビューして、ファイルのどのラベルをカスタマイズする必要があるかを判断します。そのラベルの翻訳を .source ファイルに追加し、その他のすべてのラベルを除去し、ファイルを保存します(カスタマイズが必要なのは、このファイル内のラベルのみです)。
- 4 次のいずれかを実行します:
 - ロシア語、日本語、韓国語、トルコ語、簡体字中国語、繁体字中国語などの言語では、[手順 5](#) に進んで、Java プロパティ・ファイルを作成します。
 - デンマーク語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ブラジル・ポルトガル語、スウェーデン語などの Latin1 言語では、.source ファイル(HspCustomMsgs_ru.source など)を .properties 拡張子付きで保存し

て(HspCustomMsgs_ru.properties など)手動でプロパティ・ファイルを作成します。

- 5 この手順を完了して、native2ascii プログラムを使用し、ソース文字列を Unicode 文字列に変換し、HspCustomMsgs_ru.properties など、その言語用のカスタム・プロパティ・ファイルを作成します。このプログラムを使用するには、ロシア語用の Cp1251 など、その言語用のエンコードを入力する必要があります。使用方法は次のとおりです:

```
native2ascii [-encoding language_encoding]
[inputfile_name[outputfile_name]]
```

表 87 言語エンコード・パラメータの例

言語	エンコード・パラメータ
ロシア語	Cp1251
トルコ語	Cp1254
日本語	SJIS
簡体字中国語	EUC_CN
繁体字中国語	Big5
韓国語	EUC_KR

1. Sun JDK に含まれている native2ascii プログラムがインストールされていることを確認し、このプログラムへのインストール・パスを記録します。一部のアプリケーション・サーバーは、このプログラムを自動的にインストールします。このプログラムがインストールされていない場合は、JDK をインストールしてください。
2. コマンド・プロンプトを開きます。
3. native2ascii プログラムへのパス、言語エンコード・パラメータ、作成するソースおよびターゲット・ファイルの名前を順に入力します。例:

```
C:\j2sdk1.4.2_15\bin\native2ascii -encoding Cp1251
HspCustomMsgs_ru.source HspCustomMsgs_ru.properties
```

- 6 HyperionPlanning.ear ファイルを一時的な場所に抽出します。
- 7 プロパティ・ファイル(HspCustomMsgs_ru.properties など)を、HyperionPlanning.war が抽出された custom ディレクトリにコピーします。
- 8 HyperionPlanning.ear を再作成し、ear ファイルを EPM_ORACLE_INSTANCE_HOME\products\Planning\AppServer\InstallableApps\Common に配置します
- 9 抽出元の\HyperionPlanning を一時的な場所から削除します。
- 10 Planning を再起動します。
- 11 Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

カスタマイズされたメッセージで制限されている文字

ビジネス・ニーズに合わせてテキスト文字列を変更できます。テキスト文字列の使用方法によってまたは文字列が Java もしくは JavaScript で生成される場合などによっては、カスタム・メッセージにエラーが生じる可能性のある文字の使用は避けてください(ほとんどの場合、テキスト・メッセージは Java によって生成され、ポップアップ・ボックスおよびボタンの一部は JavaScript によって生成されています)。たとえば、次の文字列を JavaScript のコール内に追加すると、JavaScript は二重引用符を解析できないことから、エラーが生じます。

```
someJavaScript( "<%= HspMsgs.SOME_RESOURCE %>" );
```

カスタム・メッセージでは次の文字を使用しないことをお勧めします。

- 一重引用符
- 二重引用符
- 円記号(バックslash)
- slash

プロセス・ステータス用に色、状態、アクションをカスタマイズ

次のカスタマイズの手順では、リレーショナル・データベースの管理および操作方法の知識が必要になります。

- [402 ページの「色のカスタマイズ」](#)
- [403 ページの「状態のカスタマイズ」](#)
- [404 ページの「アクションのカスタマイズ」](#)

色のカスタマイズ

デフォルトでは、プランニング・ユニットのステータス(「レビュー中」や「初回パス」など)は黒で表示されます。各ステータスの状態はカスタマイズして別の色で表示できます。使用可能な色は、ブラウザで認識されるすべての名前付きの色です。サポートされる名前付きの色は、Microsoft Web サイトを参照してください。

プロセス・ステータスの状態の色についての情報は、「COLOR」列内の「HSP_PM_STATES」テーブルにあります。リレーショナル・データベースに対して、色値を変更するステートメントを実行する必要があります。

色のカスタマイズが終了したら、Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

例: SQL リレーショナル・データベース

次のクエリーを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスの状態と現在の色設定をリストします: `select * from hsp_pm_states`

これにより、state_id、プロセス・ステータスの状態および色が戻されます。デフォルトの色値は、黒に変換される<NULL>になっています。

変更するプロセス・ステータスの状態の state_id をメモしてから、次のクエリーを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET COLOR = 'new color' WHERE STATE_ID =
state_id
```

次の SQL 文を実行し、「初回パス」プロセス・ステータスの状態色を緑に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET COLOR='GREEN' WHERE STATE_ID=1
```

注: Oracle リレーショナル・データベースには、COMMIT; コマンドを発行しトランザクションをコミットします。

状態のカスタマイズ

次のプロセス・ステータスの状態のプリセットをカスタマイズできます。

- 未開始
- 初回パス
- レビュー中
- 固定済
- 配分済
- サインオフ済
- 未サインオフ
- 承認済

プロセス・ステータスの状態についての情報は、「HSP_PM_STATES」テーブル内の「NAME」列にあります。リレーショナル・データベースに対して、状態値を変更するステートメントを実行する必要があります。

例: SQL リレーショナル・データベース

次のクエリーを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスの状態と現在の名前をリストします:

```
select * from hsp_pm_states
```

これにより、state_id、プロセス・ステータスの状態および色が戻されます。

変更するプロセス・ステータスの状態の state_id をメモしてから、次のクエリーを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET NAME = 'NewName' WHERE STATE_ID = state_id
```

次の SQL 文を実行し、「承認済」プロセス・ステータス状態名を移動済に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_STATES SET NAME='PROMOTED' WHERE STATE_ID=1
```

注： Oracle リレーショナル・データベースには、COMMIT; コマンドを発行してトランザクションをコミットします。

アクションのカスタマイズ

次のプロセス・ステータス・アクションのプリセットをカスタマイズできます。

- 作成
- 開始
- 上位へ移動
- 送信、最上位に送信
- 除外
- 拒否
- 承認
- 委任
- 所有権の取得
- 固定、固定解除
- 配分、子の配分、所有者の配分
- サインオフ
- 再度開く

プロセス・ステータス・アクションについての情報は、「HSP_PM_ACTIONS」テーブル内の「NAME」列にあります。リレーショナル・データベースに対してアクション値を変更するステートメントを実行する必要があります。

例: SQL リレーショナル・データベース

次のクエリーを実行し、使用可能なすべてのプロセス・ステータスのアクションと現在の名前をリストします:

```
select * from hsp_pm_actions
```

これにより、action_id およびプロセス・ステータス・アクションの名前が戻されます。

変更するプロセス・ステータスのアクションの state_id をメモしてから、次のクエリーを実行します:

```
UPDATE HSP_PM_ACTIONS SET NAME = 'NewName' WHERE ACTION_ID =  
action_id
```

次の SQL 文を実行し、「承認」プロセス・ステータス・アクション名を「承認」に変更します:

```
UPDATE HSP_PM_ACTIONS SET NAME='ACCEPT' WHERE ACTION_ID=1
```

注： Oracle リレーショナル・データベースには、COMMIT; コマンドを発行してトランザクションをコミットします。

分散パターンの作成

SQL サーバーを理解している管理者は、HSP_SPREAD_PATTERN データベース・テーブルへ追加することで「グリッド分散」および「一括割当て」ダイアログ・ボックスからアクセスできるカスタム分散パターンを作成できます。

▶ カスタム分散パターンを追加するには:

- 1 HSP_SPREAD_PATTERN データベース・テーブルを開きます。
- 2 名前に行値を入力し親セルから値をどのように分散するか示します。

表 88 HSP_SPREAD_PATTERN テーブル

列	説明
NAME - VARCHAR (80) UNIQUE NOT NULL	内部名(非表示)
LABEL - VARCHAR (80) NOT NULL	ユーザー・インタフェースに表示されるリソース・ファイルの文字列 ID を参照します。文字列リソースが作成されていない場合、LABEL 文字列識別子がかわりに表示されます ("Label_Spread_445" など)。
PATTERN VARCHAR (255) NOT NULL	スペース区切り、1 つ以上の要素、255 文字まで: <ul style="list-style-type: none">● 数字: たとえば、親値を均等に子に分割するように指定する場合は 1 を指定します。● !: ロック。パターン要素として"!"が付いているセルの値は変更しないでください。● P: 親値が分散されます。子は親が受け取る値と同じ値を受け取ります。● *: 後に続く要素を繰り返します。すべてのセルで 1 を繰り返すには 1* を使用し、適用パターンの残りスペースを埋めます。パターン内で要素の一部として*がない場合、特定要素のかわりにすべてのパターンがそのまま繰り返されます。パターンには*のみを含ませることはできません。また、1 つの要素のみに*が付けられます。たとえば、1 2* 3 は許可されますが、1 2* 3* は許可されません。

- 3 テーブルを保存して閉じます。

新しいパターンは、分散オプションとして「グリッド分散」および「一括割当て」ダイアログ・ボックスに表示されます。

Oracle Hyperion Planning User's Guide および [405 ページの「分散パターンの例」](#) も参照してください。

分散パターンの例

3 つの子セルが分散に影響されているフォーム・セルと仮定します。パターンがどのように 3 つの子値に適用されるかの例をあげます。

表 89 適用された分散パターンの例

パターン	セル			説明
	セル 1	セル 2	セル 3	
4 4 5	4	4	5	新しい値は 4 4 5 パターンを使用してレベル 0 メンバーに分散されました。たとえば Q1 から 13 を設定する場合、値は次のように分散されます。 1 月=4 2 月=4 3 月=5
1	1	1	1	1 は 1*と同じです。このフロー分散タイプでは値がない場合に、フローがどのように分散を比例させるかを表します。親値は子セルの数である 3 で分割され、それぞれの子セルに均等に分散されます。
P	P	P	P	各子セルは親の値を受け取ります。これは分散というよりもパターンのコピーです。
! * P	!	!	P	BALANCE タイプの分散に等しくなります。
P ! *	P	!	!	FIRST タイプの分散に等しくなります。
1 2 1	1	2	1	曲線面タイプの分散に類似します。
0 1 0	0	1	0	最初と最後の子セルは分散値 0 を受け取り、真中の子セルは親値を受け取ります。

プランナのための指示の作成

Planning の機能を使用して、管理者はプランナの作業ガイドとなる独自の指示を作成することができます。

- フォームを作成する際「説明」テキスト・ボックスに明示的な指示を作成します。たとえば「収益所得を予測するにはこのフォームを選択します」などです。[180 ページの「フォームの編集」](#)を参照してください。
- タスク・リストおよび個々のタスクに関する明示的な指示を指定します。たとえば、「一般支出を配賦するにはこのタスク・リストを使用します」または「電話代を配賦するにはこのタスクを選択します」などです。
- フォームのオプションを設定する際に、「セル・レベルのドキュメントの使用可能」オプション([169 ページの「行と列のレイアウトの設定」](#)を参照)を選択し、セルを EPM Workspace のドキュメントにリンクします。このドキュメントには、Web サイトでも任意のファイル・タイプでも指定できます(.XLS や.PDF ファイルなど)。たとえば、組織における 1 月の電話代について仮定を説明するドキュメントをセルに関連付けることができます。Oracle Hyperion Planning User's Guide を参照してください。
- 次のタイプのタスクを作成します。
 - URL: URL を開きます。たとえば、最新の予測に関する仮定を示している経理部門の内部 Web サイトにリンクします。

- 記述的: 指示を表示します。たとえば、「この期間に出張がある場合、財務担当者に連絡番号を報告してください」などです。
- 実行時プロンプトの説明的なテキストを作成します。「プロジェクトを選択」、「四半期に予想される顧客訪問数を入力」、「次月に予想される収益の変化率は?」のように具体的で、必要なデータの種類をユーザーに伝える内容にします。192 ページの「ビジネス・ルールのプロパティの設定」を参照してください。
- ブロードキャスト・メッセージを使用して、現在アプリケーションにログオンしている全プランナに指示を送信します。たとえば、「予測の改訂はすべて週末が期限です」などのメッセージをブロードキャストします。82 ページの「ブロードキャスト・メッセージの使用方法」を参照してください。

この章の内容

計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎる.....	410
メンバーが見つからない.....	410
要求が処理できない.....	410
ユーザーによる変更の競合.....	411
バージョンのコピー・エラー.....	411
通貨換算計算スクリプトでエラーが発生する.....	412
フォームのエラー・メッセージ.....	412
データベースが別の管理者によってロックされる.....	412
FDM のドリルスルーに関する問題点.....	413
500 Error メッセージ.....	414
暗黙的な共有の問題.....	414
日付値を入力する場合の無効な値.....	415
データベースの管理エラー.....	416
最大数のアプリケーションがすでに接続されているか、データベースがロックされている.....	417
WebLogic Server パラメータの最適化.....	417
Windows ネットワーク・パラメータの最適化.....	418
Planning での復元アプリケーションの登録.....	419
セッションのタイムアウト.....	420
パフォーマンスが低い.....	420
ダイアルアップ接続でフォームを開くとパフォーマンスが低下する.....	420
大きなフォームを開くとパフォーマンスが低下する.....	422
「アプリケーションを作成できません」エラー.....	422
アプリケーション・エラーがリフレッシュできない.....	423
ログオンできない.....	424

トラブルシューティングの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎる

シナリオ:

「通貨換算の管理」ページを使用して、Web から起動し通貨換算するアプリケーション全体の計算スクリプトを生成します。計算スクリプトを生成する際にエラー「計算スクリプトが長すぎるか複雑すぎます」

が表示される場合、計算スクリプトは 64K 制限を越えています。アプリケーションの通貨換算計算スクリプトにたくさんの期間(500 など)があるとこのエラーが生じます。

解決策:

▶ この問題に対処するには:

1 計算スクリプトを 1 つのシナリオに制限します。

計算スクリプトの生成が成功した場合、最後の手順にスキップします。

2 それでもエラー表示がある場合、計算スクリプトを 1 つのレポートの通貨に制限します。

計算スクリプトの生成が成功した場合、2 つのレポートの通貨を選択してみます。成功したらエラーが表示されるまでレポートの通貨を追加していきます。そして最後の手順にスキップします。計算スクリプトが 1 つのレポートの通貨で生成されない場合、アプリケーションから通貨の一部を除去します。

3 「通貨換算の管理」ページを使用して、その他の小さな通貨換算計算スクリプトを必要に応じて生成し、シナリオ、レポートの通貨、バージョンを含めます。

期間には非常に短い名前を付けることもできます。

メンバーが見つからない

シナリオ:

データベースのリフレッシュ中にエラー・メッセージ「メンバー x が見つかりません。」が表示されます。

解決策:

「データベースのリフレッシュ」ページから完全なデータベース・リフレッシュを(増分のリフレッシュのかわりに)実行します。

要求が処理できない

シナリオ:

エラー・メッセージ「アプリケーションがリフレッシュ中です。要求を処理することができません。」がアプリケーション・ユーザーに表示されます。アプリケー

ション・データベースの作成中またはリフレッシュ中は、アプリケーションの一部がロックされ、ユーザーは次の事項が変更できなくなります。

- 次元またはメンバー
- ユーザー
- グループ
- セキュリティ
- 別名
- 別名テーブル
- 為替レート
- 年
- 期間

解決策:

データベースの作成またはリフレッシュが終了するのを待ちます。

ユーザーによる変更の競合

シナリオ:

データを変更する際に、エラー・メッセージ「別のサーバーでユーザーによって変更されたデータを変更しようとしています。」が表示されます。

解決策:

データは現在別のサーバーのユーザーにより変更されています。しばらく待ってから再実行します。メッセージが引き続き表示される場合、ページを閉じて再び開いてみます。それでもエラーになる場合は Web アプリケーション・サーバーを再起動します。

バージョンのコピー・エラー

シナリオ:

多数のメンバーを選択して「バージョンのコピー」を使用した後、「指定の計算スクリプトの実行中にエラーが発生しました。詳細を確認してください。」というエラー・メッセージが表示されます。Web アプリケーション・サーバーのログにメッセージ「com.hyperion.planning.olap.HspOlapException: 計算スクリプトの長さが許可された最大長を超えています。」が含まれます。

解決策:

バージョンのコピーには計算スクリプトが使用され、Essbase は計算スクリプトのサイズを 64K までに制限しています。多数のメンバーをコピーしている間に制限に達する場合、バージョンのコピーは失敗する場合があります。これを回避するには、バージョンのコピーでコピーするメンバーを少なく選択します。Oracle

Hyperion Planning User's Guide および Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

バージョンのコピーの失敗を回避するには、正常にコピーできるメンバー数を予測します。スクリプトはメンバー名を使用するため、メンバー数およびメンバー名の長さを考慮する必要があります。各メンバーが平均 10 文字だとすると、6,400 より少ないメンバーをコピーできます。また、スクリプトには計算スクリプト・コマンドや各メンバー名に対するカンマなどの構文文字が含まれます。500 文字の長さの計算スクリプト・コマンドと仮定する場合、次の式が使用できます:

$(\text{メンバー数} \times \text{メンバー名の長さの平均}) + \text{メンバー数} + 500 \leq 64,000$

通貨換算計算スクリプトでエラーが発生する

シナリオ:

計算スクリプトを確認する際、計算スクリプトのシナリオ、バージョン、メンバーまたは通貨が動的計算メンバーの場合や、すべての勘定科目メンバーが動的の場合に、エラー・メッセージ「FIX ステートメントに動的計算メンバーを含めることはできません。」が表示されます。

解決策:

「データベースの管理」ページで通貨換算計算スクリプトのシナリオ、バージョンおよび通貨を選択する際に動的計算メンバーを選択しないでください。また、少なくとも 1 つの勘定科目を「保管」に設定する必要があります。

フォームのエラー・メッセージ

シナリオ:

Essbase タイムアウトの後に Planning を最初に使う人が、フォームを開くのに失敗したというエラーを受け取る場合があります。

解決策:

ユーザーは、「リフレッシュ」をクリックして Planning と Essbase 間の接続を復元させます。

データベースが別の管理者によってロックされる

シナリオ:

Planning アプリケーションが時々ロックされてしまうことがあります。これは、不正にアプリケーションを閉じることが原因である場合があります。

解決策:

81 ページの「アプリケーションのロック解除」を参照してください。

FDM のドリルスルーに関する問題点

シナリオ:

ドリルスルーに FDM を使用している場合、標準以外のコンテキスト・パスを使用して FDM を配置すると、フォームで FDM へのドリルスルーができなくなります。

解決策:

Planning アプリケーションのプロパティで、新しい FDM パスを指定します。コンテキスト・パスは、配置された Web アプリケーションにアクセスする URL の一部です。たとえば `http://host:port/HyperionFDM/AuthorizedPages/` という URL では、HyperionFDM がコンテキスト・パスです。HyperionFDM の標準コンテキスト・パスを使用している場合、このプロパティの追加や変更は必要ありません。

▶ FDM を標準以外のコンテキスト・パスに配置している場合に、FDM のドリルスルーに関する問題を解決するには:

- 1 **Planning** アプリケーションで、「管理」、「プロパティの管理」を選択します。
- 2 「アプリケーション・プロパティ」を選択します。
- 3 「追加」をクリックし、このプロパティの名前を入力します(空白は含めないようにしてください)。

```
ADD_HSP_RATES_DTURL_PATTERN
```

このプロパティの値は、スラッシュとアスタリスクに囲まれた正規表現です: `/* */`。たとえば、FDM のデフォルト値は `/*HyperionFDM*/` です。別のコンテキスト・パスを指定するには、HyperionFDM に新しい値を代入します。

- 4 空の行で、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management の新しいコンテキスト・パスを入力します。スラッシュとアスタリスクで囲んだ `/* */` の形で入力し、この例の場合には次のようになります:

```
/*NewPath*/
```

- 5 「保存」をクリックして、変更を確認します。
- 6 アプリケーション・サーバーを停止して、再起動します。

500 Error メッセージ

シナリオ:

ページのメンバー数(セキュリティ・フィルタを適用した後の、異なる製品の次元の組合せ)で Java の実行にメモリー不足が発生すると、フォームで 500 ERROR メッセージが表示されます。

解決策:

Oracle は、ページ上の異なる製品の次元の組合せをできるだけ削減することをお勧めします。Java にはデフォルトで 128MB のメモリーが配分されていますが、サーバーには使用可能なメモリーがさらにあるので、Java が使用できるメモリー量を増大させる必要があります。一般的なルールとして、サーバーが Planning のために設けられている場合、サーバー RAM の 75% を Java に配分し、そうではない場合、25% から 50% の RAM を Java へ配分します。最小メモリー設定は 128MB にしてください。

手順については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

暗黙的な共有の問題

シナリオ:

暗黙的な共有関係のあるメンバーの場合、親と子が同じ Planning フォームに表示されると、親に入力された値のみが保持されます。次の例では、親と子の値は常に同じなため、Planning により Parent A と Child 1 間に暗黙の共有関係が作成されます。これらの例ではすべてのメンバーが「保管」データ・タイプに設定されているものとします。

例 1:

```
Parent A  
Child 1 (+)
```

例 2:

```
Parent A  
Child 1 (+)  
Child 2 (~)  
Child 3 (~)
```

ほとんどの Planning アプリケーションはボトムアップ・アプリケーションなので、通常、親は読取り専用なため、データは子に入力されます。イベントの典型的なシーケンス:

1. フォームに子が、通常、親の上に表示されます。
2. 子に対し新規データが入力されます。
3. フォームが保存されます。保存操作では、フォームは左から右へ、上から下へ読み取られるので、子は最初に保存されます。
4. 次に、保存操作はグリッド内の最後の値(一番下で一番右の値)を取り出しますが、暗黙的な共有のため、それにより子の値は上書きされます。子に入力されたデータは破棄されます。

解決策:

Planning フォームの要件に応じて、これらの方法を使用して、暗黙的な共有を避けることができます。

- 親と子が同じフォームにある場合: 集約の子としてダミーのメンバーを追加します。ダミーのメンバーはアウトラインに含まれますが、フォームでは使用されません。暗黙的な共有は親が集約の子のみを持つ場合には使用できません。
- ラベルのみの親の場合: 存在する集約の子の数にかかわらず、最初の子メンバーを含む暗黙的な共有が存在します。この状況で暗黙的な共有を使用不可にするには、「ラベルのみ」ストレージ・タイプを変更するか、または同じフォームに親と子を含めないようにします。
- 「共有しない」に設定できる親の場合: アプリケーションで必要な場合、親メンバーを「共有しない」ストレージ設定に設定できます。「共有しない」親は、複数の集約の子を持つ「保管」親と同様に動作します。ただし、「保管」親とは異なり、「共有しない」親は集約の実行後に、その子の集約された値のみを表示します。

1つの子を持つ親の場合、デフォルトのストレージ・タイプの「保管」の使用(暗黙的な共有関係を保持)は通常有利です。それにより、作成されるブロック数、データベース・サイズ、計算時間および集約時間が削減されるからです。必要な場合にのみ、「共有しない」を使用してください。

暗黙的な共有の詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

日付値を入力する場合の無効な値

シナリオ:

フォーム・セルへ値を入力する際にエラーを受け取ります: 「無効な値を入力しました。再試行してください。」たとえば、データ型が「日付」のセルへフォーマットされた日付値(12/8/2010 など)を入力しようとするこのエラーが表示されます。

解決策:

ユーザーがセルへ入力するデータ型に応じて、Oracle Hyperion EPM Architect でそのデータ型のメンバー次元をデータ型の評価順序の最初として設定します。

データベースの管理エラー

シナリオ:

データベースの管理エラーは 8.3 命名ルールが使用されない場合に発生します。アプリケーション・データベースが作成またはリフレッシュされる場合、エラー・メッセージ「データベースの管理エラーが検出されました(開始 1060044)。アウトラインを開けませんでした -2147218904」が表示される場合があります。

解決策:

データベースの管理エラーを解決するには、オペレーティング・システムの環境変数をリダイレクトする必要がある場合があります。Essbase では、オペレーティング・システムの Temp および Tmp 環境変数に対し 8.3 文字の命名ルールが必要です。次の手順に従って命名ルールを確認し、必要に応じて変数を再び割り当てます。

ファイルの命名ルール

変更をする前に、Planning サーバーにログオンしていることを確認します。

▶ 次のように Windows 2000 の環境変数をチェックします。

- 1 Planning を閉じます。
- 2 Essbase を閉じます。
- 3 Windows のデスクトップで「マイ・コンピュータ」を右クリックします。
- 4 「プロパティ」を選択します。
- 5 「詳細」を選択します。
- 6 「環境変数」を選択します。
- 7 ユーザー変数の Temp と Tmp の設定を、8.3 命名ルールに変更します。

例: C:\Temp

- 8 開いて、アウトラインを開きます。
- 9 閉じて Planning を再起動します。
- 10 「データベースの管理」ページでデータベースの作成またはリフレッシュを試行します。エラーが生じた場合、その前の手順を繰り返しますが、今度は C:\tmp と呼ばれるフォルダも作成し、システム環境変数「Temp」および「Tmp」を C:\tmp へ設定します。

エラーが続く場合、C:\tmp に Temp フォルダを作成します。前の手順を繰り返して、ユーザーの最初の変数、そしてシステム変数を C:\tmp\temp へリダイレクトします。それでもエラーが続く場合は、環境変数を C:\tmp へリダイレクトします。

注: ユーザー変数およびシステム変数の Temp と Tmp の設定は独自のものがある必要があります。ユーザー変数およびシステム変数を同じフォルダへ設定しないでください。

最大数のアプリケーションがすでに接続されているか、データベースがロックされている

シナリオ:

リレーショナル・データベースとして DB2 を使用しており、データベースを作成またはリフレッシュしようとするとき次のメッセージのどちらかが表示されます。

- 「最大数のアプリケーションがすでに接続されています。」
- 「データベースがロックされています...」

MAXAPPLS パラメータの値はデフォルトで 40 に設定されています。

解決策:

MAXAPPLS パラメータの値を大きくして、許可されるアプリケーションの数を増やします。

▶ MAXAPPLS パラメータの値を増やすには:

- 1 「コントロール・センター」でデータベースを右クリックし、「パラメータの構成」を選択します。

または、DB2 ウィンドウからもパラメータを設定できます。

- 2 次のフォーマットを使用して MAXAPPLS パラメータを設定します。

```
db2 -v update db cfg for database name using MAXAPPLS n
```

```
db2 -v terminate
```

database name はリレーショナル・データベースの名前で、n は同時に接続できるアプリケーションの数になります。たとえば、「Business」という名前のデータベースに対し同時に接続できるアプリケーションの最大数を 100 にする場合は次のように指定します。

```
db2 -v update db cfg for Business using MAXAPPLS 100
```

```
db2 -v terminate
```

WebLogic Server パラメータの最適化

シナリオ:

以下の状況がお使いの環境に当てはまる場合は、解決策に記載されている WebLogic Server の設定を確認します。

- アプリケーションのパフォーマンスが低下している。
- [90 ページの「パフォーマンスの最適化」](#)の解決策を試した。
- アプリケーションで WebLogic Server を使用している。

解決策:

▶ WebLogic Server のパフォーマンス設定を調整するには:

- 1 WebLogic Server 管理コンソールを開きます。
- 2 配置済の Planning アプリケーション、「構成」タブ、「調整」タブを選択し、次の値を設定します:
 - 「サーブレット再ロード・チェック」:-1
このオプションは、サーブレットが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、再ロードするのに必要な秒数を設定します。値-1 は確認しません。
 - 「リソース再ロード・チェック」:-1
このオプションは、リソースが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、再ロードするのに必要な秒数を設定します。
 - 「JSP ページ・チェック」:-1
このオプションは、JSP ファイルが変更されたかどうかを WebLogic Server が確認し、再コンパイルするのに必要な秒数を設定します。
- 3 サーバーのプロパティを開き、「調整」タブ、「ネイティブ IO の使用可能」の順に選択します。
このオプションを選択すると、WebLogic Server がネイティブ・パフォーマンス・パックを確実に使用します。デフォルトでは、プロダクション・モードの場合、ネイティブ・パフォーマンス・パッケージは config.xml で使用可能です。
- 4 HTTP のアクセス・ログを無効にするには、サーバーのプロパティを開き、「ロギング」タブ、「HTTP」タブを選択し、「HTTP アクセス・ログ・ファイル使用可能」を選択解除します。
デフォルトでは、WebLogic Server は HTTP アクセス・ログを使用可能にします。Web Server はすでに HTTP アクセス・ログを作成しているので、この手順で無効にします。

注意 HTTP アクセス・ログ・ファイルは要求の数に比例して増大します。ログの循環を適切に設定しないと、アクセス・ログ・ファイルは非常に増大し、ディスクを満杯にして、アプリケーションおよびオペレーティング・システムの停止を引き起こす可能性があります。このような状況が発生したら、ログ・ファイルを削除するために、アプリケーション・サーバーを停止し、再起動する必要があります。

Windows ネットワーク・パラメータの最適化

シナリオ

Windows システムでネットワークのパフォーマンスが低下している。

解決策

Windows オペレーティング・システムを調整してネットワーク・パフォーマンスを最適化します。

▶ Windows パフォーマンスを最適化するには:

- 1 Windows のレジストリを開き、TcpTimedWaitDelay パラメータを 30 に設定します。

この手順はオペレーティング・システムが閉じたポートを再利用するための時間をデフォルトの設定の 4 分(240 秒)から減らします。このパラメータは HKLM\System\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters にあります。

パラメータ名: TcpTimedWaitDelay

- 2 MaxUserPort パラメータを 65534 に設定します。

この手順は、アプリケーションで開くことのできるポートの数をデフォルトの 5,000 から増加させます。このパラメータは HKLM\System\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters にあります。

パラメータ名: MaxUserPort

Planning での復元アプリケーションの登録

シナリオ:

Planning アプリケーションを復元しましたが、EPM Workspace から選択できません。

解決策:

Planning から Shared Services にアプリケーションを登録します。

▶ 復元済の Planning アプリケーションを、Planning から Shared Services に登録するには:

- 1 ブラウザで、EPM Workspace の「ログオン」ページの URL を入力します
- 2 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で、「ナビゲート」、「アプリケーション」、「プランニング」の順に選択します。Planning アプリケーションを選択します。プロンプト表示された場合は、ログオン情報を入力します。
- 3 「管理」、「アプリケーション」、「設定」の順に選択します。
- 4 「表示」で「拡張設定」を選択し、「実行」をクリックします。
- 5 「Shared Services の登録」をクリックします。

セッションのタイムアウト

シナリオ:

ユーザーがログオフするのではなく、ブラウザを閉じてセッションを終了すると、一定期間を経てセッションがタイムアウトになり、ユーザー名が統計ページから除去されます。セッションがタイムアウトになる前に、Web アプリケーション・サーバーでタイムアウト設定を修正することにより分数を変更できます。HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルを変更します。

解決策:

▶ 次のようにセッションのタイムアウト設定を変更します。

- 1 HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルを開きます。
- 2 タイムアウト設定を変更し、変更を保存します。

たとえば、session-timeout 設定の数字 60 を使用する分単位の時間に変更します。

タイムアウト設定を変更するには、Web アプリケーション・サーバーのドキュメントを参照してください。

パフォーマンスが低い

シナリオ:

全般的にパフォーマンスが低くなります。

解決策:

Planning リリース 11.1.2.2 の Oracle Hyperion Planning New Features と Readme の説明に従って、パフォーマンスを最適化するために推奨される構成を使用していることを確認してください。

ダイアルアップ接続でフォームを開くとパフォーマンスが低下する

シナリオ:

速度の遅いネットワーク接続(モデムなど)を使用してフォームを開くときに時間がかかります。

解決策:

フォームを開く場合、web.xml ファイルを変更することにより、ネットワーク帯域幅を増加できます。これで、Planning サーバーからクライアントに送信されるデータ・ストリームが約 90%圧縮されます。

注: WebLogic (サポート対象のすべてのバージョン) Web アプリケーション・サーバーを使用する場合、WebLogic 特有の 2 番目の手順を完了します。他の Web アプリケーション・サーバーを使用する場合は、最初の手順を完了します。

▶ WebLogic 以外の Web アプリケーション・サーバーのパフォーマンスを向上させるには:

- 1 HyperionPlanning.ear または HyperionPlanning.war にある web.xml ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 2 タグ</description>とタグ<listener>の間に、次の行を挿入します。

```
<filter>

  <filter-name>HspCompressionFilter</filter-name> <filter-
class>com.hyperion.planning.HspCompressionFilter</filter-class>

  <init-param>

    <param-name>compressionThreshold</param-name>

    <param-value>2048</param-value>

  </init-param>

  <init-param>

    <param-name>debug</param-name>    <param-value>1</param-value>

  </init-param>

</filter>

<filter-mapping>

  <filter-name>HspCompressionFilter</filter-name>

  <url-pattern>/EnterData.jsp</url-pattern>

</filter-mapping>
```

- 3 web.xml ファイルを保存します。

WebLogic を使用する場合、.ear ファイルを手動で変更し、Web アプリケーション・サーバーに配置しなおす必要があります。

- ▶ WebLogic アプリケーション・サーバーでは次のようにパフォーマンスを改善します。
- 1 HyperionPlanning.ear ファイルを、たとえば/ear で解凍します。
 - 2 /ear の Hyperion.war から/war に解凍します。

- 3 テキスト・エディタで、/war/WEB-INF/web.xml を開き、前の手続きの手順 2 の手順に従って変更します。
- 4 /war のコンテンツを/ear/HyperionPlanning.war に圧縮します。
- 5 /ear のコンテンツを、/ear/HyperionPlanning.ear に圧縮します。
- 6 新しい HyperionPlanning.ear を WebLogic Web アプリケーション・サーバーに配置します。

大きなフォームを開くとパフォーマンスが低下する

シナリオ:

セル数が非常に多いフォームを開くのに時間がかかることがあります。

解決策:

指定されたセル数より大きいフォームをユーザーが開く場合、警告を表示できます。警告をトリガーするセル数のデフォルト値は 5,000 です。管理者はデフォルト値を変更できます。

▶ 開く際に警告をトリガーするフォーム・セル数を設定するには:

- 1 Planning で、「ファイル」、「プリファレンス」の順に選択します。
- 2 「表示オプション」を選択します。
- 3 「指定されたセル数よりフォームが大きい場合に警告」に値を入力します。

「アプリケーションを作成できません」エラー

シナリオ:

Planning にアプリケーションを作成しようとする、次のエラー・メッセージが表示されることがあります。「アプリケーション名のアプリケーションを作成できません。エラー番号: -2147160060」

解決策:

いくつかの原因が考えられます。この問題を解決するには、次の条件が満たされていることを確認します。

- Essbase が実行されている。
- 上級ユーザー権限がローカル・コンピュータで構成されている。
- 管理者ユーザーが HsxServer と HspDataSource で構成されている。
- Essbase スーパーバイザ・ユーザー名が Planning 管理者ユーザー名と一致する場合、パスワードが同じである。

- ローカル認証を使用する場合、コンピュータ名はユーザー名と異なる必要がある。
- Planning アプリケーション名と Essbase アプリケーション名が同じではない。
- DB2 を使用している場合、データベースが正しく構成されていないことをエラー・メッセージが示す可能性があります。これには、監査テーブルが正しく構成されていないなど、様々な原因が考えられます。

アプリケーション・エラーがリフレッシュできない

シナリオ:

DB2 データベースを使用中、Planning のアプリケーションをリフレッシュすると、エラーが表示されます。

解決策:

ログ・ファイルに十分な容量が割り当てられていないため、DB2 でトランザクション・ログのリフレッシュまたは正しい作成が行われませんでした。(Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。)この問題を解決するには、次の手順を実行してください:

- ▶ DB2 のトランザクション・ログに十分なスペースを割り当てます:

 - 1 DB2 コマンド・センターで、「ツール」、「ウィザード」、「データベースの構成ロギング・ウィザード」の順に選択します。
 - 2 データベースに接続し、「循環ロギング」が選択されていることを確認します。
 - 3 次の画面で、最初のログ・ファイル数(たとえば 20)と 2 番目のログ・ファイル数(たとえば 10)を増やします。
 - 4 各ログ・ファイルのサイズを増やします(たとえば 2000)。
 - 5 「次へ」をクリックし、すべてのデフォルト値を受け入れます。
 - 6 「要約」で、ユーザー名とパスワードを入力します。
 - 7 「終了」をクリックします。
 - 8 DB2 を再起動します。
 - 9 データベースをリフレッシュします。

- ▶ アプリケーションの変更をすべて終えてからまとめてリフレッシュするのではなく、いくつかの変更を終えるたびにデータベースを頻繁にリフレッシュするようにします。

ログオンできない

シナリオ:

Planning Web クライアントにログオンすると、エラーが表示されます: 「ログインに失敗しました。再試行してください。」

解決策:

ユーザー名とパスワードが有効であることを確認します。

Essbase サーバーと Oracle Hyperion Shared Services が実行されていることを確認します。

エラー・ログをレビューします。(Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。)

ログオン時にログオン・ボタンが表示されない場合は、Web ブラウザでセキュリティ・設定を調整し、Planning サーバー名を「信頼されたサイト」として追加します。たとえば、インターネット エクスプローラで「ツール」、「インターネット・オプション」、「セキュリティ」、「信頼されたサイト」、「サイト」の順に選択し、http://サーバー名を信頼されたサイト・ゾーンとして追加します。

A

JavaScriptを使用したフォームのカスタマイズ

この付録の内容

フォームのカスタマイズについて	425
JavaScript の変更	425
カスタム JavaScript の配置	430

フォームのカスタマイズについて

注： このセクションのカスタマイズ情報はすべて、Planning リリース 11.1.2.1 ユーザー・インタフェースと機能をアプリケーションが使用している場合のみ使用できます。47 ページの「[Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用](#)」を参照してください。

この項では、JavaScript を使用したフォームのカスタマイズについて説明します。JavaScript に詳しいユーザーは、カスタマイズされた JavaScript を作成してアプリケーションに含め、Planning フォームのルックと動作をカスタマイズできます。

フォームは次の方法でカスタマイズできます：

- Web ページにリンクするボタンやカスタム JavaScript コードを実行するボタンをフォームに追加します。
- ユーザーがフォームを保存した時のアプリケーションの動作を変更します。
- フォーカスがセルに入るまたは出る時のアプリケーションの動作を変更します。

カスタム JavaScript を Planning アプリケーションに含める場合に追加要件はありません。管理者は、カスタム JavaScript アプリケーションを使用可能にするために特別な手順を行う必要はありません。

JavaScript の変更

カスタム JavaScript を Planning アプリケーションに追加するには、ValidateData.js でコードを変更します。これは、.war ファイルが抽出される \custom サブディレクトリに配置されます。カスタマイズされたフォームの例は、SampleValidateData.js のサンプル・コードとコメントを参照してください。（このセクションのカスタマイズ情報はすべて、Planning リリース 11.1.2.1 ユーザー・インタフェースと機能をアプリケーションが使用している場合のみ使用できま

す。47 ページの「[Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用](#)」を参照してください。)

customCellEnterPre

説明

`customCellEnterPre` を使って、デフォルトの `Planning` ロジックが実行される前にユーザーがセルをクリックした時の動作を変更できます。たとえば、ユーザーがセルをクリックすると、メッセージによって可能な値の範囲が示されます。ユーザーが勘定科目などの特定の種類のセルをクリックすると、メッセージがユーザーにサポート詳細の入力を促します。

`customCellEnterPre` の実行後に `TRUE` が戻されると、デフォルトの `Planning` ロジックが実行されます。`FALSE` が戻された場合は、カスタム・コードに続くロジックはありません。`SampleValidateData.js` には、特定のセルがクリックされた場合にサポート詳細の入力をユーザーに促すメッセージ・プロンプトを表示する例が含まれます。

引数

引数 説明

行 セルの行を定義する整数

列 セルの列を定義する整数

セル HTML 入力アーティファクトのハンドル

戻り値

戻り値 説明

True `Planning` デフォルトのロジックはこのコードが完了した後で実行されます。

False これが完了した後で実行されるロジック(`Planning` デフォルト・ロジックまたは `customCellEnterPost`)はありません。

関連項目

[customCellEnterPost](#)

customCellEnterPost

説明

`customCellEnterPost` を使って、デフォルトの `Planning` ロジック実行後、フォーカスがセルに移動した場合の動作をカスタマイズします。このコードは、`Planning` デフォルトのロジック実行後、`customCellEnterPre` およびデフォルトのロジックによって `TRUE` が戻された場合、ユーザーがセルをクリックした場合に実行されます。`FALSE` が戻されると、この関数は無効になります。

SampleValidateData.js には、customCellEnterPost で使用できる customCellEnterPre の例が含まれます。例では、ユーザーに特定のセルをクリックしてサポート詳細の入力を促すメッセージを示します。

引数

引数 説明

行 セルの行を定義する整数

列 セルの列を定義する整数

セル HTML 入力アーティファクトのハンドル

戻り値

戻り値 説明

True Planning デフォルトのロジックはこのコードが完了した後で実行されます。

False 完了したあとに実行されるロジックはありません。

関連項目

[customCellEnterPre](#)

customCellValidatePre

説明

customCellValidatePre を使って、デフォルトの Planning ロジックが実行される前に、フォーカスがセルを離れた場合の動作をカスタマイズできます。たとえば、ユーザーがセルに入力した値を他の値と比較して、差異が大きすぎるかまたは範囲外の場合にアラートを表示させることが可能です。フォーカスがセルを離れ、デフォルトの分散アルゴリズムが入れ替わった場合に発生する分散アルゴリズムを定義できます。たとえば、Planning は通常時間枠で分散しますが、Essbase に値を書き込む前にクライアント側でデータを事前集約するカスタム JavaScript を作成できます。

この関数を実行した後に、customCellValidatePre で TRUE が戻された場合、Planning のデフォルトのロジックが実行されます。FALSE が戻された場合は、カスタム・コードに続くロジックはありません。フォームによってカスタム・コードが使用され、ユーザーによる無効なデータ提出の要因となる可能性のあるデフォルト Planning ロジックがスキップされます。

SampleValidateData.js には、フォーカスがセルを離れた場合に追加の検証が行われる例が含まれます。フォーカスがセルを離れると、ユーザーが入力した今年の値と昨年の値がコードによって比較されます。今年の値が前年の値よりも 10% 以上高い場合、メッセージが表示されます。

引数

引数 説明

行 セルの行を定義する整数

列 セルの列を定義する整数

セル HTML 入力アーティファクトのハンドル

戻り値

引数 説明

True Planning デフォルトのロジックはこのコードが完了した後で実行されます。

False このコードが完了したあとに実行されるロジックはありません。

関連項目

[customCellValidatePost](#)

customCellValidatePost

説明

デフォルトの Planning ロジックを実行した後、フォーカスがセルを離れた場合のカスタム動作には `customCellValidatePost` を使用します。これは、この関数および Planning のデフォルトのロジックにより TRUE が戻された場合に Planning のデフォルトのロジック実行後にフォーカスがセルを離れると実行される、`customCellValidatePre` と似ています。FALSE が戻されると、この関数は無効になります。戻り値に効果はありません。

`SampleValidateData.js` には、このコードで使用できる `customCellValidatePre` の例が含まれます。例ではフォーカスがセルを離れた場合に追加の検証が実行されます。JavaScript コードにより、現在の年の入力値と過去 1 年間の値が比較されます。現在の年の値が、過去 1 年の値よりも 10% 多い場合、メッセージが表示されます。

引数

引数 説明

行 セルの行を定義する整数

列 セルの列を定義する整数

セル HTML 入力アーティファクトのハンドル

戻り値

戻り値 説明

True Planning デフォルトのロジックはこのコードが完了した後で実行されます。

False 完了したあとに実行されるロジックはありません。

関連項目

[customCellValidatePre](#)

customOnLoad

説明

フォームがロードまたは再ロードされた場合のカスタム動作には `customOnLoad` を使用します。 `savedData` と呼ばれる JavaScript 変数は、「保存」が完了したかどうかを表します。たとえば、ユーザーがフォームを開いた場合、手順を表示するかまたは公差が一致するかを定義してユーザーに修正措置を取るよう促すことができます。

引数

引数はありません。

戻り値

戻り値はありません。

drawCustomButtons

説明

`drawCustomButton` を使用し、フォームにカスタム・ボタンを追加します。ボタンはデータ入力ページにリンクしたり、`ValidateData.js` に含まれるカスタム JavaScript コードを起動させることができます。たとえば、ボタンを追加してフォームを検証したり、レポートを実行できます。

`SampleValidateData.js` には、「**検証**」というラベルのボタンをフォームに追加する例が含まれています。ユーザーがボタンをクリックすると、JavaScript コードによって現在の年の入力値と前年の値が比較されます。現在の年の値が前年の値よりも 10%以上多い場合、メッセージが表示されます。

引数

引数はありません。

戻り値

戻り値はありません。

validateForm

説明

validateForm を使用して、ユーザーが「保存」をクリックした場合に起動されるフォーム・レベルの動作を提供します。デフォルトの Planning 動作では、ユーザーがフォームの「保存」をクリックすると、validateForm 関数によってグリッドが提供されます。たとえば、2つの列の値を比較することで予算と実際の差異を計算し、差異が大きすぎる場合はユーザーが「保存」をクリックした時にアラートを表示させることができます。

SampleValidateData.js には、ユーザーが「保存」をクリックした場合に追加の検証が実行される例が含まれます。現在の年の入力値が前年の値と比較されます。現在の年の値が、前年の値を 10%以上上回る場合はメッセージが表示されます。

引数

引数はありません。

戻り値

戻り値 説明

True グリッドを保存します。

False 保存をキャンセルします。

カスタム JavaScript の配置

Planning アプリケーションでカスタム JavaScript を使用する場合は次の手順に従います。

- SampleValidateData.js で示されているように、どのフォームにコードが適用されるのかを指定します。
- Planning のアップグレード時にカスタム JavaScript を維持します。標準の Planning JavaScript ファイルをアップグレードまたは変更する場合、コードを ValidateData.js の更新バージョンとマージする必要があります。(ValidateData.js が何も変更されていない場合は、Planning をアップグレードする前にファイルをバックアップし、ファイルのバージョンをコピーできます。)
- デフォルトの Planning 計算スクリプトは、フォームが保存された後に実行できるため、デフォルトの計算スクリプトはカスタム JavaScript の動作を上書きする可能性があります。フォームが保存された後にカスタム計算スクリプトが自動的に実行される場合、計算スクリプトはカスタム JavaScript の動作を上書きすることがあります。カスタム JavaScript によって値がどのように階層に分散されるかが定義される場合、計算スクリプトとの競合の可能性がありますので注意してください。

- カスタム JavaScript では、フォームで見ることができないセルを変更できません。たとえば、四半期が縮小されている場合、カスタム JavaScript が個別月の値に影響を与えることがあります。
- カスタム JavaScript は、抑制されている行または列を変更できません。
- コードの複雑度に応じて、セル・レベルの JavaScript 関数はアプリケーションのパフォーマンスに対して逆効果となることがあります。複雑な JavaScript の場合は、フォーム・レベルの関数(validateForm)またはカスタム・ボタンを使用して JavaScript コードを起動するようにします。
- ユーティリティ関数は validateDataHelper.js に含まれます。
- カスタム JavaScript によってデフォルトの Planning 動作が上書きされてしまった場合、データの有効性を検証する必要があります。カスタム JavaScript の実行後に enterData.js を使用してデータを確認できます。たとえば、LeaveCell を参照してください。

このセクションのカスタマイズ情報はすべて、Planning リリース 11.1.2.1 ユーザー・インタフェースと機能をアプリケーションが使用している場合にのみ使用できます。47 ページの「[Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能の使用](#)」を参照してください。



命名規則

この付録の内容

アプリケーションとデータベースの命名規則	433
次元、メンバー、別名、フォームの命名規則	434
計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値での次元とメンバー名	435
ユーザー名の命名規則	436

アプリケーションとデータベースの命名規則

アプリケーションを命名する場合は、次のルールに従います。

- 非 Unicode モードのアプリケーションおよびデータベースには、シングル・バイト文字換算で 8 バイトまで使用できます。Unicode モードのアプリケーションおよびデータベースには、シングル・バイト文字換算で 30 文字まで使用できます。
- スペースは使用できません。
- 次の特殊文字は使用できません。
 - アスタリスク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大カッコ
 - コロン
 - カンマ
 - 等号
 - 大なり記号
 - 小なり記号
 - 期間
 - プラス符号
 - 疑問符
 - 引用符(二重および単一)
 - セミコロン
 - スラッシュ
 - タブ
 - 垂直棒

- リレーショナル・データベース環境の Planning アプリケーション名には、拡張文字は使用できません(アンダースコアを除く)。
- 集約ストレージ・データベースでは、アプリケーション名に DEFAULT、LOG、METADATA または TEMP を使用できません。

名前には大文字小文字のどちらでも使用できます。アプリケーション名は、入力した通りに作成されます。

Essbase アプリケーションおよびデータベース作成の詳細は、Essbase 製品ドキュメントを参照してください。

次元、メンバー、別名、フォームの命名規則

次元、メンバーおよび別名を命名する場合は、次のルールに従います。

- Unicode モード以外の次元、メンバーまたは別名の場合は 80 バイトまでとします。Unicode モードの次元、メンバーまたは別名の場合は、シングル・バイト換算で 80 文字までとします。
- メンバー名、次元名、別名、説明では、HTML タグは使わないでください。
- 引用符、大カッコ、円記号(バックスラッシュ)またはタブは使用できません。大カッコは認められていますが、ブロック・ストレージ・アウトラインでは推奨されていません。これは、集約ストレージ・アウトラインに変換する場合にエラーの原因となることがあるためです。
- 次元またはメンバーの名前の最初の文字にはこれらの文字を使用できません。
 - アット・マーク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大カッコ
 - カンマ
 - ダッシュ、ハイフンまたはマイナス符号
 - 等号
 - 小なり記号
 - 丸カッコ
 - 期間
 - プラス符号
 - 引用符
 - アンダースコア
 - 垂直棒
- 名前の最初または最後には、スペースを挿入しないでください。Essbase ではこれらのスペースは無視されます。
- メンバー名ではスラッシュ(/)は使わないでください。
- カスタム・カレンダーの期間で、接頭辞にスペースは使用できません。
- 次元名またはメンバー名に、次の語を使用しないでください。

- 計算スクリプト・コマンド、オペレータおよびキーワード。コマンドのリストについては、Essbase 製品ドキュメントを参照してください。
- Report Writer のコマンドについては、Essbase テクニカル・リファレンスを参照してください。
- 関数名と関数引数。
- 他の次元の名前、他のメンバーの名前(メンバーが共有でない場合)、世代名、レベル名およびデータベースでの別名。
- 次の語:

ALL AND ASSIGN AVERAGE CALC	GENRANGE GROUP GT ID IDERROR INTEGER	RELOP SET SKIPBOTH SKIPMISSING
CALCMBR COPYFORWARD CROSSDIM	LE LEVELRANGE LOCAL LOOPBLOCK	SKIPNONE SKIPZERO TO
CURMBRNAME DIM DIMNAME DIV	LOOPPARMS LT MBR MBRNAME MBRONLY	TOLOCALRATE TRAILMISSING
DYNAMIC EMPTYPARM EQ EQOP EXCEPT	MINUS MISSING MUL MULOP NE NON	TRAILSUM UMINUS UPPER
EXP EXPERROR FLOAT FUNCTION GE GEN	NONINPUT NOT OR PAREN PARENPARM	VARORXMBR XMBRONLY \$
	PERCENT PLUS	\$UNIVERSE\$\$ #MISSING #MI

- 動的時系列が使用可能な場合、履歴、年、季、期間、四半期、月、週または日は使用しません。

計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値での次元とメンバー名

メンバー名を代替変数の値、計算スクリプト、レポート・スクリプト、フィルタ定義、パーティション定義または式で使用する場合は、MDX 文では大カッコ([])で囲む必要があります。また次の状況ではブロック・ストレージ・データベースで使用するために、二重引用符(" ")で囲む必要があります。

- 名前が 1 つまたは複数の数字で始まる場合(たとえば、100)
- 名前にはスペースまたは次の文字が含まれます。

&	アンパサンド	>	大なり記号
*	アスタリスク	<	小なり記号
@	アット・マーク	()	丸カッコ
\	円記号(バックスラッシュ)	%	パーセント記号
{ }	中かっこ	.	期間
:	コロン	+	プラス符号
,	カンマ	;	セミコロン
-	ダッシュ、ハイフンまたはマイナス	/	スラッシュ
!	感嘆符	~	チルド
=	等号		

計算スクリプトと式では、Essbase キーワードでもあるメンバー名を含む場合、ブロック・ストレージ・データベースでは引用符(" ")、集約ストレージ・データベースでは大カッコ([])でメンバー名を囲む必要があります。

```
BEGIN DOUBLE ELSE END FUNCTION GLOBAL IF MACRO MEMBER RANGE  
RETURN STRING THEN
```

計算スクリプト、レポート・スクリプトまたは式で次の文字を含む名前および次の文字で始まる名前を引用符で囲みます: スペース、+、-、*、/、()、コロン、カンマ、@、セミコロン、)、{}、[]、<

ユーザー名の命名規則

Planning ユーザーの名前は最大 80 文字までです。



フォームの式関数

この付録の内容

式および式の関数の使用.....	437
式の作成.....	437
式の関数.....	438


式および式の関数の使用

式を行または列を作成したら、「セグメント・プロパティ」ペインを使用して式を定義します。式には、グリッド参照、算術演算子、およびオプションで算術関数を指定します。関数の完全なリストは、[438 ページの「式の関数」](#)を参照してください。

注： Planning にはメンバー式を持つ動的計算のレベル 0 メンバーが必要です。式を持たない「動的計算」メンバーの場合は、リフレッシュ時に Planning によってセミコロン(;)が挿入されます。セミコロンは、Essbase の「式」フィールドで表示されます。

式の作成


▶ 式を作成するには:

- 1 式に関連付ける行または列を選択します。
- 2 自動的に展開されない場合は、「セグメント・プロパティ」を選択します。
- 3 「式」に式の名前を入力し、 をクリックします。
- 4 「式」>ボックスが表示されたら、COUNT()、MAX()、IfThen()など、その式が実行する演算または関数を選択します。[438 ページの「式の関数」](#)を参照してください。
- 5 式にエラーがないことを確認するには、「検証」をクリックします。

式の編集

▶ 式を編集するには:

- 1 式を行または列のあるフォームを開きます。
- 2 「レイアウト」で、番号の付いた式を行または列を選択します。

- 3 「セグメント・プロパティ」を使用して、式のプロパティを変更します。
- 4  をクリックして、実行する演算または関数を変更します。
- 5 フォームを保存します。

式の削除

▶ 式を削除するには:

- 1 適切な式の行または列を選択します。
- 2 「削除」ボタンをクリックします。
- 3 式の削除を確認するには:
 1. 式バーのチェックマークをクリックします。
 2. グリッドの別のセルをクリックして、式バーをリセットします。
 3. 式を削除したセルをクリックして、削除を確認します。

式の関数

この項では、フォームの式の行および列に式を作成できる算術関数を定義します。式の行および列をフォームに挿入するには、[177 ページの「式の行と列の追加」](#)を参照してください。

算術関数の構文は、次のとおりです:

```
FunctionName (arguments)
```

表 90 算術関数の構文

変数	説明
FunctionName	算術関数の名前
引数	数値、または行、列、セルの参照、あるいは埋め込まれた関数

表 91 算術関数

機能	説明
Abs	数値または参照先の絶対値を返します。
Average	数値や参照先の集合の平均を返します。
AverageA	数値や参照先の集合の平均を返します。抑制されていない行または列についてのみ、計算に#Missing セルが含まれます。
Count	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します。

機能	説明
CountA	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します。抑制されていない行または列についてのみ、計算に#Missing セルが含まれます。
Difference	数値または参照先と、別の数値または参照先との差の絶対値を返します。
Eval	式を評価します。Eval は、式を関数の引数として埋め込むために使用します。
IfThen, If	指定した条件が真の場合と偽の場合で異なる値を返します。
Max	数値や参照先の集合の最大値を返します。
Min	数値や参照先の集合の最小値を返します。
Mod	除算した余り(モジュラス)を返します。
PercentOfTotal	数値または参照先を、別の数値または参照で割った結果を 100 倍した値を返します。
Pi	15 桁の円周率の値(3.14159265358979)を返します。
Product	すべての数値または参照先の積を返します。
Random	0.0 と 1.0 の間の乱数を返します。
Rank	指定した列または行の最大値または最小値を返します。
Round	数値を指定した桁数に切り上げまたは切り下げます。
Sqrt	数値、行、列、セルの値の平方根を返します。
Sum	数値や参照先の集合の合計を返します。
Truncate / Trunc	数値の指定した桁数を除去します。
Variance / Var	現在の勘定科目に基づいて、指定された値の差を求めます。
VariancePercent / VarPer	現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて、指定された値のパーセントの差を求めます。

引数

算術関数では、数値、行、列、セルの参照、埋込み関数を引数として使用します。引数には、次の 4 つのタイプがあります:

- 数値
- プロパティ
- 行、列またはセルの参照
- 埋込み関数

数値引数

数値引数の構文は、次のとおりです。

```
(numeral1, numeral2, ... numeraln)
```

ここで、数値 1 から n は、小数および負数を含む任意の数字です。たとえば、Average(10,20,30)は、値 20 を戻します。

行、列、セルの参照引数

行、列、セルの参照引数では、グリッド内の行、列またはセルを指定します。構文は次のとおりです:

```
FunctionName(  
GridName.GridElement [segment (range)] .Property)
```

表 92 引数のコンポーネント

引数	説明
GridName	<p>フォームの名前。例:</p> <p>Difference (grid1.row[5], grid1.row[6])は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を戻します。</p> <p>オプション。GridName を指定しない場合、デフォルトは現在のフォームの名前になります。</p>
GridElement	<p>キーワード row、col、column、または cell のうちのいずれかです。</p> <p>たとえば、Max(row[1], row[2], row[3])は、これらの 3 行の最大値を戻します。GridElement はオプションです。ただし、セル参照には、行および列のセグメント ID が必要です。たとえば、cell[2, A]と [2, A]は両方とも、行 2 と列 A の交差であるセルを参照します。キーワード cell は、オプションです。セルの参照には、[row, col]構文または[col, row]構文を使用できます。</p> <p>オプション。GridElement が指定されていない場合、文字は列を、数字は行を示します。たとえば、Max ([1, A], [2, A], [3, A])という構文は、列 A の行 1、2 および 3 を参照します。</p>
segment	<p>行、列またはセル参照の番号。展開される行また列に対しては、セグメントを指定する必要があります。たとえば、row[2]は、行セグメント 2 を指します。セグメントは、角カッコ [] で囲んで示します。</p> <p>必須。</p>
range	<p>指定されたセグメントから展開される行、列またはセル。範囲が指定されている場合は、指定された範囲のみを指定して式が計算されます。たとえば、row[2(3:5)]では、展開されたセグメント 2 の 3 番目から 5 番目までの行のみが使用されます。</p> <p>オプション。範囲が指定されていない場合、展開されるセルのすべてが使用されます。</p> <p>注： セグメントが 1 行または 1 列のみの場合は、範囲引数を使用しないでください。</p>

引数	説明
property	<p>キーワード average、averageA、count、countA、max、min、product または sum のいずれかです。プロパティにより、指定済の展開される行、列またはセルを集約する方法を指定します。</p> <p>参照が引数の場合にはプロパティを指定しないことをお勧めします。プロパティを指定しないと、関数による参照の計算が最適な方法で実行されます。たとえば、次の式は、行 1 と行 2 にあるセルの平均を戻します:</p> <pre>Average(row[1], row[2])</pre> <p>一方、次の式は、最初に row[1]の平均を計算してから row[2]の平均を計算し、次にこれらの2つの値を足して2で割ります:</p> <pre>Average(row[1].average, row[2].average)</pre> <p>行、列またはセル参照のデフォルトのプロパティは、sum プロパティです。たとえば、row[2]は Sum(row[2]) と等価です。</p>

セグメントのみが参照の必須コンポーネントなので、次の参照は同じになります:

```
Grid1.row[1].sum
```

```
[1]
```

AverageA と CountA の計算には、#Missing セルも含まれます。たとえば、行 1 が、Qtr1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開するセグメント行の場合、次の関数は 4 という結果を戻します:

```
row[1].CountA
```

これ以外のすべての関数は、#Missing データ・セルを計算から除外します。たとえば、前述の Qtr 1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開する行 1 で、次の例は 3 という結果を戻します:

```
row[1].Count
```

プロパティ引数

プロパティ引数は、展開される参照を 1 つの値に集計します。この集計値は、後に計算で使用されます。プロパティ引数は、集約行、列、またはセルでの計算に使用できます。プロパティ引数には、次の 2 つのタイプがあります:

- 集約プロパティ引数([441 ページの「集約プロパティ引数」](#)を参照)
- 参照プロパティ引数([442 ページの「参照プロパティ引数」](#)を参照)

集約プロパティ引数

集約行、集約列、集約セルは、それぞれ複数の行、列、セルを含んでいます。

集約プロパティ引数は、次の算術関数の構文の最後にある引数です。

```
FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].  
property)
```

次の集約プロパティを行、列またはセルの参照に適用します。

表 93 集約プロパティ

プロパティ	説明
Average	行、列またはセルの平均を戻します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
AverageA	行、列またはセルの平均を戻します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値が含まれます。
Count	行、列またはセル内の値の数を戻します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
CountA	行、列またはセル内の値の数を戻します。計算では、#MISSING 値と#ERROR 値をゼロ(0)として処理します。
Max	行、列またはセルの最大値を戻します。
Min	行、列またはセルの最小値を戻します。
Product	行または列の積を戻します。
Sum	行、列またはセルの合計を戻します。

算術関数引数として使用される場合は、プロパティのデフォルトはその関数と同じになります。次の例では、デフォルトのプロパティは **Average** です。

```
Average(row[2])
```

算術関数引数として使用されない場合は、プロパティのデフォルトは **sum** になります。次の例では、デフォルトのプロパティは集約行の **sum** です。

```
row[2]
```

参照プロパティ引数

参照プロパティ引数は、式の参照結果の処理方法を指定します。この引数は、他のプロパティとともに使用します。

参照プロパティ引数には、IfNonNumber/IFFN があります。

IfNonNumber は、#MISSING 値および#ERROR 値のかわりに使用する特定の数値を指定します。構文は次のとおりです:

```
AXIS[segment(range)].IfNonNumber(  
arg  
) .AggregateProperty
```

引数	説明
AXIS	キーワード row、column または cell のいずれかです。 オプション。
セグメント(範囲)	行番号、列の文字などの軸の有効な参照を示します。
IfNonNumber	軸の参照先にデータがない場合やエラーの場合の処理方法を示します。
(引数)	AxisRef の欠落データやエラー・データのかわりに使用する数値を示します。
AggregateProperty	集約関数は、集約セグメントで使用されます。 オプション。

例:

`cell[1,A] = 3`、且つ

`cell[1,B] = #MISSING` のときに、

次の式:

```
cell[1,A] / cell[1,B]
```

は、`#ERROR` を戻します。

次の式

```
cell[1,A] / cell[1,B].ifNonNumber(1)
```

は、`cell[1,B]` を 1 に置換し、3 を戻します。

注: グリッドの `#MISSING` を抑制しており、グリッドの行や列に `IfNonNumber` プロパティを含む式がある場合は、`#MISSING` は抑制されたままになります。

引数への関数の埋込み

関数の引数に、関数を埋め込むことができます。

例:

次の例では、`Average` 関数を `Sum` 関数の中に埋め込んでいます:

```
sum(row[3:5], avg(row[4:6], 40, 50), row[7; 9], 70, 80)
```

- 行セグメント 3、4、5
- 行セグメント 4、5、6 と、数値 40 と 50 の平均
- 行セグメント 7 と 9
- 数値 70 と 80

Abs

Abs は、数値、行、列、またはセルの絶対値を戻す算術関数です。数値の絶対値は、符号に関係なく数値そのものです。正数は変更されませんが、負数は正数に変化します。関数の構文は次のとおりです:

```
Abs  
  
(  
argument  
)
```

ここで、argument は、次のいずれかです:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Abs (-20)は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できません。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property。
関数	埋込み関数。

例:

次の式は、引数に数値を取り、30 という値を戻します。

```
Abs ( -30 )
```

次の例は、行 1 の値の絶対値を戻します。

```
Abs(row[1])
```

次の例は、列 E の合計の絶対値を戻します。

```
Abs( column[E].sum )
```

次の例は、フォーム Grid1 のデザイン・セグメント 3 の展開された行 1 から 3 を示します:

```
Abs( Grid1.row[3(1:3)])
```

Average

Average は、数値、行、列またはセルの集合の平均を戻す算術関数です。Average では、平均を求めるときに#MISSING および#ERROR のセルは除外されます。

注： 欠落している値は、その値が抑制されるかどうかにかかわらず計算には含まれません。

関数の構文は次のとおりです：

```
Average(arguments) or Avg(arguments)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります：

引数	説明
数値	数値。たとえば、Average(10, 20, 30)は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです：GridName.GridElement[segment(range)].Property たとえば、Avg(Grid1.row[4(3:5)])は、フォーム grid1、行 4、3 から 5 までの範囲の平均値を戻します。
関数	埋込み関数。

例：

次の式は、20 という値を戻します。

```
Avg( 10, 30, 20)
```

次の例は、3 つの集約行に含まれるすべての数値の平均を戻します。

```
Average( row[1], row[6], row[8] )
```

次の例では、3 つの集約列 E、G、I の平均値を求めます。まず、各列の平均値を求め、その 3 つの値を平均します。

```
Avg(column[E].avg, column[G].avg, column[I].avg)
```

次の例は、集約行 3 の平均値を求め、その値を 100 で割ります：

```
Avg(row[3])/100
```

AverageA

AverageA は、数値、行、列またはセルの集合の平均を戻す算術関数です。AverageA の計算には、#MISSING および#ERROR のセルも含まれます。これらのセルは、平均を求める際にゼロ値として処理されます。

注： #MISSING のセルと#ERROR のセルは、抑制されていない行や列の場合にのみ、計算に含まれます。

関数の構文は次のとおりです:

```
AverageA(arguments  
)  
or  
AvgA(  
arguments  
)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、AverageA (10, 20, 30)は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property たとえば、AvgA(Grid1.row[4(3:5)])は、フォーム grid1、行セグメント 4、3 から 5 までの範囲の平均値を戻します。
関数	埋込み関数。

例

次の例は、グリッドに値 10、20、30 および#ERROR がある 4 行が含まれる場合です。5 行目に次の式がある場合、この 5 行目の式は値 15 を戻します:

```
AverageA([1:4])
```

Count

Count は、数値、行、列またはセルの集合にある値の個数を戻す算術関数です。Count では、個数の取得時に#MISSING 値および#ERROR 値は除外されます。関数の構文は次のとおりです:

```
Count (arguments)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Count (10, 20, 30)は、値 3 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement [segment (range)].Property
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、3つの行 1、6、8 にある値の個数を返します。

```
Count(row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、3つの列にある値の個数を返します。

```
Count( column[E], column[G], column[I] )
```

次の例は、行 4 と列 D が交差するセルにある値の個数を返します。

```
Count(cell[D,4])
```

次の例は、グリッド 5 の集約行 3 にある値の個数を返します。

```
Count(grid1.row[3])
```

CountA

CountA は、数値、行、列またはセルの集合内の値の個数を返す算術関数です。個数の取得時には、CountA では、抑制されていない行または列の#MISSING セルおよび#ERROR セル内の値のみの個数を返します。関数の構文は次のとおりです:

```
CountA(
arguments
)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、CountA(10,20,30,50)は、値 4 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、CountA(GridName.GridElement [セグメント(範囲)]).プロパティです。
関数	埋込み関数。

例

次の例は、グリッドに値 10、20、30 および #ERROR がある 4 行が含まれる場合です。5 行目にある次の式は、これらの 4 行にある値の個数を戻します:

```
CountA([1:4])
```

次の例は、4 つの行にある値の個数を戻します:

```
CountA(row[1], row[6], row[8] row[where data yields  
#ERROR  
])
```

Difference

Difference は、数値、行または列から別の数値、行または列を減算した差異の絶対値を戻す算術関数です。この関数は、Variance とも呼ばれます。関数の構文は次のとおりです:

Difference(arg1, arg2)

arg1 から arg2 が減算されます。これらの引数は、次の 1 つ以上の値を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Difference (3, 5) は、絶対値 2 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property 次の例は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を戻します: Difference(grid1.row[1], grid1.row[6])
関数	埋込み関数。

注: Difference 関数は、arg2 から arg1 を差し引いた値の絶対値を戻します。引数のマイナス符号は、負数を示します。

例:

次の例は、絶対値 8 を戻します。

```
Difference(3, -5)
```

次の例は、2 つの集約列の差を戻します。

```
Difference( column[E], column[G] )
```


注： テキスト・ラベルには、"Difference"と"Variance"のいずれでも入力できます。

Eval

Eval は、式を評価する算術関数です。Eval を埋込み関数の引数として使用して 1 つの式に複数の式を結合できます。関数の構文は次のとおりです：

Eval(式)

ここで、式は、次の 1 つ以上の引数を取ります：

引数	説明
数値	数値。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数。
演算子	サポートされている算術演算子(+、-、*、/、^、%など)。

例

次の例は、行 1 を行 2 で割り、その値を 4 桁に四捨五入します。

```
Round(Eval([1]/[2]),4)
```

IfThen, If

IfThen 関数は、条件が真であるか偽であるかに応じて異なる値を戻す条件関数です。

関数の構文は次のとおりです：

```
IfThen  
(  
Condition  
,  
TrueParameter  
,  
FalseParameter  
)
```

- 条件は、true または false を評価する論理式です。ブール演算子(And、Not、および Or)と同様に、完全な条件論理を使用できます。条件は、#MISSING 値および#ERROR 値に対するテストの実行にも使用できます。有効な条件演算子のリストは、次の表を参照してください。
- TrueParameter と FalseParameter は、条件の結果に基づいて評価される任意の有効な式です。

次の表に、完全にサポートされている条件演算子の説明を示します。条件演算子によってサポートされている代替構文がある場合は、その構文がリストされています。

表 94 条件演算子

条件演算子	構文	論理
次と等しい	式 = 式	<p>左の式が右の式に等しいかどうかを調べます。</p> <p>注： この条件を評価するルーチンは、四捨五入を実行しません。四捨五入が必要な場合は、Round 関数を使用します。</p> <p>例:</p> <p>1 = 4</p> <p>False を返します。</p>
次より大きい	式 > 式	<p>左の式が右の式より大きいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <p>1 > 4</p> <p>False を返します。</p>
次と等しいか大きい	式 >= 式	<p>左の式が右の式より大きい、または等しいかどうかを調べます。</p> <p>注： 正しい構文は">="です。構文">"はサポートされていません。</p> <p>例:</p> <p>1 >= 4</p> <p>False を返します。</p>
次より小さい	式 < 式	<p>左の式が右の式より小さいかどうかを調べます。</p> <p>例:</p> <p>1 < 4</p> <p>True を返します。</p>
次より小さい、または次と等しい	式 <= 式	<p>左の式が右の式より小さい、または等しいかどうかを調べます。</p> <p>注： 正しい構文は"<="です。構文"<"はサポートされていません。</p> <p>例:</p> <p>1 <= 4</p> <p>True を返します。</p>

条件演算子	構文	論理
次と等しくない	式 <> 式 式 != 式	<p>左の式が右の式に等しくないかどうかを調べます。</p> <p>注： この条件を評価するルーチンは、四捨五入を実行しません。四捨五入が必要な場合は、Round 関数を使用します。</p> <p>例:</p> <pre>1 <> 4</pre> <p>True を返します。</p> <pre>1 != 4</pre> <p>True を返します。</p>
IsMissing	IsMissing (参照) IsMiss (参照)	<p>参照先に#MISSING の値があるかどうかを調べます。</p> <p>注： 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#MISSING である必要があります。</p> <p>例:</p> <pre>IsMissing([1])</pre> <p>行 1 の値が#MISSING のときに、True を返します。</p>
IsError	IsError (参照) IsErr (参照)	<p>参照先に、#ERROR の値があるかどうかを調べます。</p> <p>注： 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#ERROR である必要があります。式行および式列のみ結果として#ERROR を返すことができます。</p> <p>例:</p> <pre>IsError([2])</pre> <p>行 2 の値が#ERROR のときに、True を返します。</p>
IsNonNumeric	IsNN (参照) IsNonNumerid (参照) IfNN (参照) IfNonNumber (参照)	<p>参照先に、#MISSING または#ERROR の結果が含まれているかどうかを調べます。</p> <p>注： 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#Error または#Missing である必要があります。</p> <p>例:</p> <pre>IsNN([3])</pre> <p>行 3 の値が#MISSING か#ERROR のときに、True を返します。</p>
カッコ	(条件)	<p>条件をグループ化するために使用します。多くの場合、視覚的にわかりやすくするために使用します。</p> <p>例:</p> <pre>(1 > 4)</pre> <p>False を返します。</p>

表 95 条件演算子

複合条件	構文	論理
And	(条件 AND 条件) (条件 & 条件)	2つの条件を比較するために使用される複合条件。すべての条件が True の場合に True を返します。 例: (1 > 4 AND 5 > 2) False を返します。
Not	NOT (条件) !(条件)	条件の結果を逆転(否定)します。 例: Not (1 > 4) True を返します。
Or	(条件 OR 条件) (条件 条件)	2つの条件を比較するために使用される複合条件。いずれかの条件が True の場合に True を返します。 例: (1 > 4 OR 5 > 2) True を返します。

条件文に関する注意事項

- 式には、有効な式であれば任意の式を使用できます。式には、定数(整数または実数)の任意の組合せ、参照、またはそれ以外の関数を使用できます。
- 参照には、有効であれば任意の参照を使用できます。つまり、IFNN 参照プロパティを参照の一部として使用できます。
- 条件は、有効な条件であれば、複合条件 And、Not、または Or に適用される任意の条件を使用できます。これらの演算子は、埋込み条件を持つことができます。

注： And、Not、および Or 演算子は、カッコで囲まれている必要があります。

- 条件内の式のいずれかが #MISSING 値または #ERROR 値を返す場合、If 関数は #MISSING または #ERROR を返します。ただし、IsMissing 条件、IsError 条件または IsNonNumeric 条件を使用している場合にはこの規則は適用されません。

複合条件

複合条件 And、Or および Not は完全にサポートされています。ただし、カッコで囲まれている必要があります。

次に、正しい例を示します。

```
If ( ([A] > [B] and [A] > 1000), [A], [B])
```

次に、誤った例を示します。

```
If ( [A] > [B] and [A] > 1000, [A], [B])
```

Max

Max 関数は、数値、行、列またはセルの集合内の最大値を返す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

```
Max (arguments  
)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Max (10, 20, 30) は、値 30 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property。
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最大値を返します。

```
Max(row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、集約行の合計の最大値を返します。

```
Max(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Min

Min 関数は、数値、行、列またはセルの集合の最小値を返す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

```
Min (  
arguments  
)
```

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Min (10, 20, 30)は、値 10 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最小値を戻します。

```
Min (row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、集約行の合計の最小値を戻します。

```
Min(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Mod

Mod 関数は、除算した余り(モジュラス)を戻す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

Mod (引数1 , 引数2)

ここで、引数 2 は、引数 1 の除数です。引数 1 と引数 2 は次の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Mod (6, 4)は、値 2 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、10 を 5 で割った余り 0 を戻します。

```
Mod (10,5) = 0
```

PercentOfTotal

PercentOfTotal は、ある数値、行、列またはセルを、別の数値、行、列またはセルで割った値に 100 を掛けた値を戻す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

PercentOfTotal (
arg1, arg2
)

- ここで、引数1 は、現在高(引数2)のコンポーネントです。通常、この引数は、行または列を参照します。
- ここで、引数2 は、引数1 に対する現在高です。通常、この引数は、総計を含むセル参照です。
- 引数1 は、引数2 で除算され、その結果に100 が掛けられます。引数1 および引数2 は、次に示す1つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、PercentofTotal (100, 20)は、値 500 を戻します。 数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は次のとおりです: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数。

注： この関数には、2つの引数が必要です。

例

次の例は、値 5%を戻します。

PercentofTotal (20, 400)

次の例では、列 A の各セルの値をセル A5 の「市場合計」の値で割り、100 を掛けた結果 PercentOfTotal を列 B に示します。式は、次のとおりです。

PercentOfTotal ([A], [A,5]),

次の表に、前述の例を使用した PercentOfTotal の結果を列 B に示します。

	A	B
1	販売	合計(%)
2	市場 1	60
3	市場 2	120
4	市場 3	120
5	市場合計	300

ヒント： 列 B のヘッダーをクリックし、式バーを使用して式を挿入します。

Pi

Pi は、算術定数 3.14159265358979 を 15 桁で戻す算術関数です。Pi(π)は、円周の直径に対する比率です。関数の構文は次のとおりです:

PI()

例:

次の例は、行 3 を、 π と 2 の積で割った値を戻します。

```
row[3] / (PI() * 2)
```

Product

Product は、すべての数値または参照の積を戻す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

Product(引数)

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Product(2, 20)は、値 40 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Property です。
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、40 という値を戻します。

```
Product(2, 20)
```

Random

Random は、0.0 と 1.0 の間の乱数を戻す算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

Random()

例:

次の例は、0.0 と 1.0 の間の乱数を戻し、それに 1000 を掛けます。

```
Random() * 1000
```


Rank

Rank は、指定された範囲内の値に対するランク値を算出する財務関数です。Rank 関数は、Oracle Hyperion Financial Reporting で処理され、データベース接続には依存しません。関数の構文は次のとおりです:

Rank([参照], 順序)

Rank([参照], 順序, 一意)

引数	説明
参照	<p>列を識別する文字と行を識別する数字を使用して、ランク付けするセル、行または列の範囲を示します。たとえば、列 A の行 1 から行 5 の値をランク付けするには、[A,1:5]と指定します。</p> <p>セル範囲のある .ifNN プロパティを使用して、非数値の値を持つ任意のセルに数値を割り当ててランク付けできます。たとえば、.ifNN(-1)を指定すると、値の欠落したセルすべてに値-1 を割り当てます。</p>
順序	<p>値をランク付けする順序を示します。昇順でランク付けする場合の最小値は 1 です。昇順でランク付けする場合の最小値は 1 です。順序は、次のキーワードまたは値のいずれかで表します。</p> <ul style="list-style-type: none">● Ascending● Descending● Asc● Des● Desc● 1(番号 1 は"昇順"と同義)● 0(ゼロは"降順"と同義) <p>キーワードの大文字と小文字は区別されません。</p> <p>注： 順序を指定する数値やキーワードは、引用符で囲みません。</p>
一意 (オプション)	<p>オプション。参照パラメータで次のように同等の値を処理する方法を示すブール・キーワード。</p> <ul style="list-style-type: none">● false(または省略) - 同等の値には、同じランクが付けられます。ランク付けの結果が重複する場合があります。● true - 同等の値には個別のランクが付けられ、ランクは重複しません。参照パラメータの値は、出現順にランク付けされます。たとえば、行 2 と行 5 の値が同じ場合には、行 2 の値が行 5 の値より先にランク付けされます。

例

列 B の式は、列 A の行 1 から行 5 にある値を降順でランク付けします。

```
Rank([A,1:5], descending)
```

次のような結果になります。

	東部	ランク
コーラ	16	2
ジュース類	23	1

	東部	ランク
ビール	16	2
低カロリー	#Missing	#Missing
ルート・ビール	0	4

2つの値が同じ場合、同じランク値が付けられます。上の例では、コーラとビールが同じ値であるため、同じランク値が付けられます。

次の列 B の式は、数値でないものに-1 という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending)
```

次のように、#Missing 値のランクは 5 になります。

	東部	ランク
コーラ	16	2
ジュース類	23	1
ビール	16	2
低カロリー	#Missing	5
ルート・ビール	0	4

例:

次の例では、前述の例の結果に一意パラメータがどのように影響するかを示します:

次の列 B の式は、非数値に-1 という値を割り当て、ランク付けできるようにしています。また、ランクはそれぞれ一意であることも示しています。

```
Rank([A,1:5].ifNN(-1), descending, true)
```

次の結果では、欠落値に 5 のランクが割り当てられ、コーラと同じデータ値であってもビールには 3 のランクが割り当てられています。

	東部	ランク
コーラ	16	2
ジュース類	23	1
ビール	16	3
低カロリー	#Missing	5
ルート・ビール	0	4

Round

Round は、指定された桁数で数値を切り上げまたは切り下げる算術関数です。関数の構文は次のとおりです:

Round (引数 1, 整数)

ここで、引数 1 は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、Round(81.3987,3)は、値 81.399 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、GridName.GridElement[segment(range)].Property です。
関数	埋込み関数。

整数は、数値を四捨五入する桁数を指定します。

- 整数がゼロより大きい場合、小数点以下の指定した桁数に四捨五入されます。
- 整数がゼロの場合は、最も近い整数に四捨五入されます。
- 整数がゼロより小さい場合は、小数点より左側の桁数に四捨五入されます。

例:

次の例は、小数点以下 3 桁に四捨五入します。

```
Round(3594.5567,3) = 3594.557
```

次の例は、最も近い整数の桁数に四捨五入します。

```
Round(3594.5567,0) = 3595
```

次の例は、1000 の桁に四捨五入します。スケールとも呼ばれます。

```
Round(3594.5567,-3) = 4000
```

Sqrt

Sqrt は、数値、行、列またはセルの平方根を戻す算術関数です。関数の構文は、次のとおりです。

```
Sqrt  
(  
  argument  
)
```

ここで、argument は、次のいずれかの引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Sqrt(100)</code> は、値 10 を返します。数値には、小数および負数も使用できません。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。
関数	埋込み関数。

例

次の例は、値 4 を返します。

```
Sqrt(16)
```

Sum

Sum は、数値、または行、列、セルにある値の和を返す算術関数です。

関数の構文は、次のとおりです。

Sum (引数)

ここで、arguments は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Sum(10, 20, 30)</code> は、値 60 を返します。数値には、小数および負数も使用できません。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。
関数	埋込み関数。

例:

次の例は、30 という値を返します。

```
sum(10, 20)
```

次の例は、3 つの行の和を返します。

```
sum(row[1], row[6], row[8])
```

次の例は、3 つの集約列の和を返します。

```
sum(column[E], column[G], column[I])
```

Truncate / Trunc

Truncate は、指定した桁で数値を除去する算術関数です。

構文:

```
Trunc (  
  arg1, integer  
)
```

- ここで、引数1 は、次のいずれかの引数を取ります:

引数	説明
数値	数値。たとえば、234.567。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文は、 <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> です。
関数	埋込み関数。

- ここで、整数には、除去する桁数を指定します。
 - 正の整数は、小数点の右側の有効桁数を決定します。
 - 整数にゼロ(0)を指定すると、小数点の左側にある整数を戻します。
 - 負の整数は、小数点の左側の切り捨てられた有効桁数を示します。

例:

次のステートメントでは、正の整数 2 を指定しています。小数点以下 2 桁で除去されます。

```
Trunc(234.567, 2) = 234.56
```

次のステートメントではゼロ(0)を整数値として指定しています。小数点以下の数字はすべて除去されます。

```
Trunc(234.567, 0) = 234
```

次のステートメントでは、負の整数-2 を指定しています。小数点以下と、整数の 2 桁まで除去されます。

```
Trunc(234.567, -2) = 200
```

注: セル、列または行に事前に適用されているフォーマットは、Trunc 関数を使用した場合でも維持されます。たとえば、事前に小数点以下 3 桁まで表示するようにフォーマットされているセルで Trunc 関数を使用すると、`Trunc(234.567, 0) = 234.000` のようになります。

Variance / Var

Variance は、現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて、指定された値の差異を評価する財務関数です。たとえば、支出または負債勘定科目での正の結果は減少を示すので、負数として表示されます。この関数は、UDA 勘定科目タイプ(資産、負債、資本、収益および支出)で使用できます。

構文:

```
Var (  
  reference1, reference2  
)
```

- reference1 と reference2 は、差異を計算するための、同じ勘定科目次元のメンバーの行、列またはセルの参照です。

計算結果

次の表は、勘定科目で Variance 関数を使用した場合の計算結果を示しています。

表 96 Variance 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	正の値を戻します	負の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Variance 関数の仕組み

- Variance 関数は、同じ勘定科目の種別での比較を要求します。販売と支出など、2つの異なる勘定科目の種別を比較する場合、Variance 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

販売	支出	結果
-400	100	-500

- Variance 関数を勘定科目タイプ以外の次元に適用すると、実行時に#ERROR を戻します。
- #MISSING のセルは、IfNonNumber プロパティを指定していないかぎり、ゼロ (0)として扱われます。

例

Variance 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

構文	例
列を参照する構文の例:	Var ([A], [B])
行を参照する構文の例:	Var ([3], [4])
セルを参照する構文の例:	Var (Cell [3,A], [3,B])

次に、列 A(実績)と列 B(予算)の差額を計算する例を示します:

```
Var ([A], [B])
```

この例では、次のレポートが作成されます:

```
Year Product Market

Actual Budget Variance

=====

Sales (Income)    400,855  373,080   27,775

COGS (Expense)   179,336  158,940  -20,396
```

VariancePercent / VarPer

VariancePercent は、現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて指定された値の差異をパーセントで評価する財務関数です。収益、フロー、資産、または残高の勘定科目では、正の結果は増加を示すため、正数で表示されます。支出または負債の勘定科目では、正の結果は減少を示すため、負数で表示されます。

構文:

```
VarPer (
reference1, reference2
)
```

ここで、reference1 と reference2 は、VariancePercent 関数の結果を計算する勘定科目次元と同じ次元のメンバーである行、列またはセルへの参照です。

計算結果

次の表に、UDA の勘定科目を、VariancePercent 関数で計算した結果を示します。

表 97 VariancePercent 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	VarPer ([A] , [B])=0	VarPer ([A] , [B])>0	VaPer ([A] , [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	負の値を戻します	正の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
支出	支出	0	負の値を戻します	正の値を戻します

VariancePercent 関数の仕組み

- VariancePercent 関数は、同じ勘定科目の種別間での比較を要求します。販売と支出など、2つの異なる勘定科目の種別間で比較すると、VariancePercent 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

販売	支出	結果
-400	100	-5

- VariancePercent 関数を勘定科目タイプ以外の次元に適用すると、実行時に #ERROR を戻します。
- #MISSING のセルは、Ifnonnumber プロパティを指定していないかぎり、ゼロ (0)として扱われます。

例:

VariancePercent 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

構文	例
列を参照する構文の例:	VarPer ([A] , [B])
行を参照する構文の例:	VarPer ([3] , [4])
セルを参照する構文の例:	VarPer (Cell [3,A] , [3,B])

次に、列 A(実績)と列 B(予算)の VariancePercent を計算する例を示します。

VarPer ([A] , [B])

この例では、次のレポートが作成されます:

```

Year Product Market

Actual Budget VariancePercent
    
```


=====

Sales (Income) 400,855 373,080 7%

COGS (Expense) 179,336 158,940 -13%



Smart Viewを使用した Planningメタデータのイン ポートおよび編集

この付録の内容

Smart View での Planning 次元のインポート.....	467
Smart View でのメンバーの編集	470
Smart View での Planning メンバーの追加.....	470
Smart View でのメンバーの移動	473
Smart View での共有メンバーの指定	473
Smart View でのキューブのリフレッシュと作成	474

注： この付録で説明するすべての手順は、Smart View アプリケーション内で実行します。

Smart View アプリケーションを使用すると、Planning メタデータに対して迅速にいくつかのタスクを実行できます:

- [467 ページの「Smart View での Planning 次元のインポート」](#)
- [470 ページの「Smart View でのメンバーの編集」](#)
- [470 ページの「Smart View での Planning メンバーの追加」](#)
- [473 ページの「Smart View でのメンバーの移動」](#)
- [473 ページの「Smart View での共有メンバーの指定」](#)
- [474 ページの「Smart View でのキューブのリフレッシュと作成」](#)

Smart View へのアクセスと、Smart View の機能およびコマンドの詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide を参照してください。

Smart View での Planning 次元のインポート

Planning 次元を Smart View にインポートすると、次元のメンバーを簡単に追加、編集、移動できます。

Smart View における次元とメンバーの使用方法の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のディメンションとメンバーに関する項を参照してください。

- [468 ページの「Smart View の次元のインポート」](#)

- [468 ページの「Smart View グリッドの使用」](#)

Smart View の次元のインポート

注： Smart View で次元をインポートするには管理者権限が必要です。

▶ Smart View グリッドに Planning 次元をインポートするには:

- 1 Smart View のリボンで、「**パネル**」をクリックします。
- 2 Smart View パネルから、「**Planning**」を選択します。
- 3 フォルダで「**次元**」を右クリックします。フォルダの Planning 次元が表示されません。

注： 期間と属性の次元は表示されません。

- 4 次元名をダブルクリックするか、次元名を右クリックして「**次元の編集**」を選択します。Smart View グリッド・リストに、次元のメンバーが表示されます。

Smart View グリッドの使用

Smart View グリッドを使用すると、迅速に Planning 次元のメンバーを追加、編集および移動できます。

- [468 ページの「Smart View グリッドの概要」](#)
- [468 ページの「Smart View グリッドの表示」](#)
- [469 ページの「Smart View グリッドの使用のガイドライン」](#)

Smart View グリッドの概要

Smart View グリッドは、2つの次元で構成されます:

- 一方の軸に Planning 次元
- もう一方の軸にメタデータ次元

メタデータ次元は、メタデータ・メンバーのフラット・リストを表します。メタデータ次元の各メンバーは、対応する Planning 次元に対して有効な特定のメンバーに対応します。メタデータのグリッド・データ・セルには、数値ではなく対応する特定のプロパティ値が保持されます。

Smart View グリッドの表示

Smart View グリッドに、メンバー名を行、メンバー・プロパティを列として Planning 次元が表示されます。

Smart View グリッドで操作を実行する際のガイドラインは、[469 ページの「Smart View グリッドの使用のガイドライン」](#)を参照してください。

ここに表示されるリボンは、従来の(Planning ではない) Smart View グリッドに類似していますが、含まれるオプションが少なくなっています。有効なボタンは次のとおりです:

- ズーム・イン
- ズーム・アウト
- 選択項目のみ保持
- 選択項目のみ削除
- メンバー選択
- リフレッシュ
- データの送信

Smart View リボンの使用方法の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のアド・ホック分析に関する項を参照してください。

Smart View グリッドの使用のガイドライン

Smart View グリッドを使用して Planning メタデータを編集するときは、次のガイドラインを参考にしてください:

- 次の機能は、Planning メタデータを使用する Smart View グリッドでは使用できません:
 - ピボット
 - POV にピボット
 - セル・テキスト
 - セル・ノート
 - サポート詳細
- データ・セルの値は、テキスト、数値または列挙です。
- 「親メンバー」を使用して、親/子の関係を指定または変更します。
- グリッドにおけるメンバーの位置は、アウトラインにおける兄弟の実際の位置を表しているとはかぎりません。
- 各メタデータ・グリッドを、対応する Planning 次元にリンクする必要があります。
- Planning の各次元の列は、Planning 次元エディタで使用できるメンバー・プロパティのうち、対応するセットに基づいています。
- 一度開いたメタデータ・グリッドは、異なる次元に再リンクできません。
- 対応する有効なメタデータ・メンバーのセットは、各次元に固有です。
- Planning 次元メンバーは、対応する次元にのみ有効です。

Smart View でのメンバーの編集

Smart View グリッドを使用すると、Planning 次元のメンバーのプロパティを迅速に編集できます。

注： メタデータ・グリッドの問合せは Planning ビジネス・レイヤーに対して実行され、Oracle Essbase との対話を必要としません。

Smart View における次元とメンバーの使用の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のディメンションとメンバーに関する項を参照してください。

▶ Smart View でメンバーのプロパティを編集するには:

- 1 Smart View で、Planning 次元を Smart View グリッドにインポートします(468 ページの「Smart View の次元のインポート」を参照)。
- 2 グリッドでメンバーのプロパティをハイライトします。
- 3 ドロップダウン・メニューで、値を選択します。

注： 変更されたセルは異なる色で表示されます。

- 4 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

注： 複数のメンバーとプロパティに対する変更を、同じ「データの送信」操作で保存できます。「データの送信」操作が1つのメンバーに対して失敗した場合、Planning サーバーで操作が停止し、変更は保存されません。

Smart View での Planning メンバーの追加

Smart View グリッドを使用すると、Planning 次元に簡単にメンバーを追加できます。

Smart View における次元とメンバーの使用の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のディメンションとメンバーに関する項を参照してください。

- 470 ページの「Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択」
- 471 ページの「Smart View でのメンバーの追加」
- 472 ページの「Smart View でのメンバーの追加のガイドライン」

Planning アプリケーション・プロパティでの追加モードの選択

新しいメンバーを Smart View グリッドに追加するには、2 種類のモードがあります:

- 「次元編集者」モード
- リフレッシュせずに送信モード

「次元編集者」モードでは、メンバーが次元に追加されるたびに「リフレッシュ」を実行する必要がありますが、通常はリフレッシュせずに送信モードより高いパフォーマンスを得られます。また、「次元編集者」モードを使用すると、リフレッシュの実行後に、グリッドで新規メンバーにアスタリスク(*)のマークが付けられます。リフレッシュせずに送信モードではリフレッシュを必要としませんが、通常はパフォーマンスが低く、新しいメンバーがマークされません。

注： デフォルトでは、「リフレッシュ」を実行すると、新規メンバーにグリッドでアスタリスク(*)のマークが付けられます。Planning アプリケーション・プロパティで SMART_VIEW_MD_NEW_MEMBER_SUFFIX を追加すれば、異なる記号を使用できます。

使用される個々のモードは Smart View 管理者によって制御されます。モードの選択は Planning アプリケーション・プロパティで決定されます。

▶ Planning の「アプリケーション・プロパティ」で、Smart View グリッドにメンバーを追加するときのモードを選択するには:

- 1 **EPM Workspace** にログオンし、Planning にアクセスします。(48 ページの「[EPM Workspace へのログオンおよび Planning へのアクセス](#)」を参照してください。)
- 2 **Planning Web UI** の「アプリケーション・プロパティ」ページにアクセスします。
- 3 **SMART_VIEW_MD_PARITY_MODE** の値を False に設定します。

SMART_VIEW_MD_PARITY_MODE のデフォルト値は False です。値を True に変更すると、リフレッシュせずに送信モードになります。

- 4 Planning からログアウトします。
- 5 Planning に再びログインします。

注： SMART_VIEW_MD_PARITY_MODE の値を変更した後、Planning サーバーを再起動する必要はありませんが、変更を反映するにはログアウトしてから再度ログインする必要があります。

Smart View でのメンバーの追加

Smart View グリッドを使用すると、Planning メンバーに簡単にメンバーを追加できます。

Smart View における次元とメンバーの使用の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のディメンションとメンバーに関する項を参照してください。

▶ Smart View でメンバーを追加するには:

- 1 Smart View で、Planning 次元を Smart View グリッドにインポートします(468 ページの「Smart View の次元のインポート」を参照)。
- 2 新しいメンバーの名前を名前の列に入力します。
- 3 「リフレッシュ」をクリックします。

注: 管理者が、メンバー追加モードを「次元編集者」に設定している場合は、メンバーを追加してから「リフレッシュ」を実行する必要があります。メンバー追加モードがリフレッシュせずに送信の場合、リフレッシュを実行する必要はありません。Smart View アプリケーションがどのモードを使用しているか確定できない場合には、管理者に問い合わせてください。

「リフレッシュ」を実行すると、新規メンバーにはグリッドでアスタリスク(*)のマークが付けられます。デフォルトのプロパティ・セットが、新しいメンバーに自動的に適用されます。デフォルトの「親メンバー」は次元のルート・メンバーです。

- 4 **オプション:** 任意のプロパティをデフォルト値(ルート・メンバー)から変更するには、グリッドで適切なセルをハイライトし、ドロップダウン・メニューから別の値を選択します。(470 ページの「Smart View でのメンバーの編集」を参照してください。)

注: 「リフレッシュ」は、新しいメンバーでプロパティを変更する前に実行してください。「リフレッシュ」操作を行うと、変更した値があってもサーバーからのデフォルト値に置き換えられます。

- 5 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

注: 新規メンバーのプロパティを変更するには、470 ページの「Smart View でのメンバーの編集」を参照してください。

注: メンバー名などのメンバー・プロパティは、Smart View のアプリケーションで設定され特定のロケールに基づいてローカライズできます。

Smart View でのメンバーの追加のガイドライン

- 新しいメンバーは、指定した親の下に最後の兄弟として追加されます。
- 親子の関係は、「親の名前」列のプロパティによって決まります。
- グリッドにおける新規メンバーの相対位置には影響されません。
- グリッドでの新しいメンバーの相対位置を、「データの送信」操作の実行後に変更することはできません。アド・ホック・グリッドに反映されたアウトラインで、新しいメンバーの実際の位置を確認するには、「ズーム・アウト」と「ズーム・イン」を続けて実行します。

- 無効な文字のチェックや重複する名前の確認など、新しいメンバー名の完全な有効性チェックは、「データの送信」操作中に実行されます。
- デフォルトのプロパティは、Planning によって自動的に新しいメンバーに適用されます。特定のデフォルト・プロパティは、次元のプロパティに基づいています。

Smart View でのメンバーの移動

Smart View グリッドを使用すると、次元内の親から別の親にメンバーを迅速に移動できます。

Smart View における次元とメンバーの使用の詳細は、Oracle Hyperion Smart View for Office User's Guide のディメンションとメンバーに関する項を参照してください。

▶ Smart View でメンバーを移動するには:

- 1 Smart View で、Planning 次元を Smart View グリッドにインポートします(468 ページの「Smart View の次元のインポート」を参照)。
- 2 グリッドの「親メンバー」列でメンバーをハイライトします。

注：「親メンバー」プロパティを空にすると、「親メンバー」の値はデフォルトでルート・メンバーになります。

- 3 メンバー名と「親」列の交差に親の名前を入力します。
- 4 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

注： 同じ「データの送信」操作で、複数のメンバーまたはサブツリーの移動を保存できます。「データの送信」操作が1つのメンバーに対して失敗した場合、Planning サーバーで操作が停止し、変更は保存されません。

Smart View でのメンバーの移動のガイドライン

- グリッドで空の親メンバーは、次元のルート・メンバーを表します。
- 「親メンバー」の値は、Smart View で使用されるメタデータ・ロード・ファイルの対応する値に該当するルールに従います。

Smart View での共有メンバーの指定

Smart View グリッドを使用すると、次元内で共有するメンバーを簡単に指定できます。

▶ Smart View で共有メンバーを指定するには:

- 1 基本メンバーが存在していることを確認します。

- 2 Smart View で、Planning 次元を Smart View グリッドにインポートします(468 ページの「Smart View の次元のインポート」を参照)。
- 3 グリッドの「親メンバー」列で基本メンバーをハイライトします。
- 4 基本メンバーの親の名前を変更します。

注： 親メンバーの名前をカッコ[]に、たとえば[Transit Entity]のように入力します。

- 5 「データ・ストレージ」列で基本メンバーをハイライトします。
- 6 ドロップダウン・メニューで、「共有」を選択します。
- 7 「データの送信」をクリックして、データを保存します。
- 8 「データの送信」操作は、元の基本メンバーを、元の「親メンバー」および「データ・ストレージ」プロパティでリフレッシュします。共有メンバーは、サーバー上で指定した親の下に追加されます。

注： 新しい共有メンバーは、Smart View グリッドに自動的に追加されません。グリッドに表示されるメンバーのリストは変更されません。

Smart View でのキューブのリフレッシュと作成

Smart View グリッドを使用すると、キューブのリフレッシュも新しいキューブの作成も簡単です。

▶ Smart View でキューブをリフレッシュまたは作成するには:

- 1 Smart View のリボンで、「パネル」をクリックします。
- 2 Smart View パネルから、「Planning」を選択します。
- 3 フォルダ名を右クリックし、フォルダで「次元」を選択します。フォルダにある「Oracle Hyperion Planning」次元が表示されます。

注： 期間と属性の次元は表示されません。

- 4 ルート次元を右クリックし、「データベースのリフレッシュ」または「データベースの作成」を選択します。Oracle Hyperion Smart View for Office で、「データベースのリフレッシュ」ダイアログ・ボックスまたは「データベースの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 5 「リフレッシュ」または「作成」を選択します。進行状況バーが表示され、リフレッシュや作成で完了したステップの割合が示されます。

用語集

! 「感嘆符」を参照してください。

#MISSING 「欠落データ」を参照してください。

2 パス 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbase のプロパティです。2 パスのメンバーは、2 番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

Calculation Manager Planning および **Financial Management** のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証、管理するために使用できる、Enterprise Performance Management Architecture(EPMA)のモジュールの 1 つです。

CDF 「カスタム定義関数」を参照してください。

CDM 「カスタム定義マクロ」を参照してください。

Cookie Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

EPM Oracle インスタンス EPM System 製品のアクティブな動的コンポーネント(実行時に変更できるコンポーネント)を含むディレクトリです。EPM Oracle インスタンスのディレクトリの場所は EPM System コンフィグレタを使用して構成時に定義します。

EPM Oracle ホーム EPM System 製品で必要なファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。EPM Oracle ホームの場所は、EPM System インストーラを使用したインストール中に指定されます。

essbase.cfg Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

EssCell 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase Spreadsheet Add-in のセルに入力する関数です。

ESSCMD Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

ESSLANG テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。「エンコード方式」も参照してください。

ESSMSH 「MaxL シェル」を参照してください。

Extensible Markup Language (XML) データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

Extract-Transform-Load (ETL) データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

GUI グラフィカル・ユーザー・インタフェース

ID 外部認証におけるユーザーまたはグループの固有の ID です。

Interactive Reporting 接続ファイル(.oce) データベース API(ODBC、SQL*Net、など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続(.oce)ファイルを作成して発行します。

Java アプリケーション・サーバー・クラスタ Java 仮想マシン(JVM)のアクティブ-アクティブ・アプリケーション・サーバー・クラスタです。

Java データベース接続(JDBC) Java ベース・クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL ベースのデータベース・アクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

JSP Java Server Page です。

KeyContacts ガジェット Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供するガジェットです。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。「ガジェット」も参照してください。

LRO 「リンク・レポート・オブジェクト」を参照してください。

MaxL Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。「MaxL DDL」、「MaxL DML」および「MaxL シェル」も参照してください。

MaxL DDL Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

MaxL DML Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

MaxL DML の計算済メンバー 分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

MaxL Perl モジュール Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

MaxL シェル MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

MaxL スクリプト・エディタ 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

MDX (多次元式) 多次元準拠データベースでクエリーと計算に使用される言語です。

MIME タイプ アイテムのデータ・フォーマットを示す属性です。システムは、これによってオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの Multipurpose Internet Mail Extension(MIME)タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより決定されます。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

NULL 値 データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

ODBC Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(DBMS)の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスの方法です。

「OK」ステータス 集計ステータスの 1 つです。エンティティが集計済であり、階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

OLAP メタデータ・カタログ Essbase 統合サービスにおける、リレーショナル・データ・ソースから引き出されたデータの性質、ソース、場所および種別について説明するメタデータを含むリレーショナル・データベースです。

OLAP モデル Essbase Integration Services における、リレーショナル・データベースのテーブルおよび列から作成された論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。「オンライン分析プロセス(OLAP)」も参照してください。

Open Database Connectivity (ODBC) 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。

Oracle ホーム 特定の製品に必要なインストール済ファイルを含むディレクトリで、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。「ミドルウェア・ホーム」も参照してください。

PL 勘定(P&L) 損益勘定です。P&L は通常、会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

POV(視点) 行、列またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDMでのPOVの選択項目には、場所、期間、カテゴリおよびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart ViewでPOVをフィルタとして使用すると、Currency次元をPOVに割り当て、Euroメンバーを選択できます。フォームでPOVを選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

Production Reporting 「SQR Production Reporting」を参照してください。

PVA 「期別価額メソッド」を参照してください。

root メンバー 次元分岐における最上位のメンバーです。

Shared Services レジストリ Shared Services リポジトリの一部です。ほとんどのEPM System製品(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)のEPM System配置情報を管理します。

SPF ファイル SQR Production Reporting Serverで作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

SQL スプレッドシート SQLクエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

SQR Production Reporting データ・アクセス、データ操作、およびSQR Production Reportingドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

Structured Query Language (SQL) リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

TCP/IP Transmission Control Protocol/Internet Protocolを参照してください。

Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP) 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IPを使用すると、LANおよびWANに接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの格納が可能です。

Unicode モードのアプリケーション 文字テキストがUTF-8でエンコードされているEssbaseアプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

WebLogic Server ホーム WebLogic Server インスタンスに必要なインストール済ファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。WebLogic Server ホームは、Oracle ホームのピアです。

WITH セクション MaxL DMLで、オプションで使用できるクエリーのセクションです。セットまたはメンバーを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITHセクションでセットまたはカスタムのメンバーを一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

Workspace ページ 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracleおよびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用できます。

ws.conf Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

wscnf_platform UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

XML 「Extensible Markup Language」を参照してください。

XOLAP アウトラインのメンバーのみを格納し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbaseの多次元データベースです。XOLAPは、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

Y 軸スケール 「調査」セクションに表示される、チャートのY軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意のY軸スケールを使用したり、すべての詳細チャートに同一のY軸スケールを使用したり、または列内のすべてのチャートに同一のY軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通のY軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

Zero Administration サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

アウトライン 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的關係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

アウトライン同期 パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

アクセス権 リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

アクティビティ・レベルの承認 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

アクティブ-アクティブ高可用性システム すべての使用可能メンバーが要求に対応でき、アイドル状態のメンバーがないシステムです。通常、アクティブ-アクティブ・システムは、アクティブ-パッシブ・システムより豊富な拡張性オプションを備えています。「アクティブ-パッシブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ-パッシブ高可用性システム 常に要求に対応するアクティブ・メンバーと、アクティブ・メンバーに障害が発生した場合にのみアクティブ化されるパッシブ・メンバーが存在するシステムです。「アクティブ-アクティブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ・サービス 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

アセンブリ EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

値次元 入力値、換算値および連結の詳細を定義するために使用される次元です。

アダプタ ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

アップグレード 新しいソフトウェアのリリースを配置、アプリケーションやデータを移動、前の配置から新しい配置へ情報をプロビジョニングするプロセスです。

宛先 1) Business Rules では、計算済の値が格納されるデータベースのブロックです。2) Profitability and Cost Management では、割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

アドホック・レポート エンド・ユーザーが動的に作成するオンライン分析クエリーです。

アプリケーション 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)必要とされる特定の分析のセットまたはレポートのセット、あるいはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーション移行ユーティリティ アプリケーションとアーチファクトの移行に使用されるコマンド・ライン・ユーティリティです。

アプリケーション管理者 アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

アプリケーション・サーバー・クラスタ 同時に稼働し、信頼性と拡張性を実現するために連携している複数のアプリケーション・サーバーが緩やかに結合したグループです。ユーザーには1つのアプリケーション・サーバー・インスタンスのように見えます。「垂直アプリケーション・クラスタ」および「水平アプリケーション・クラスタ」も参照してください。

アプリケーションの通貨 アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

アペンダ 宛先を意味する Log4j の用語です。

安全率 より安全な投資から期待される利回りです(米国の長期国債など)。

暗黙の共有 メンバーが1つ以上の子を持ち、連結されている子は1つのみである場合、親と子が値を共有します。

アーチファクト 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

移行監査レポート 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

移行スナップショット アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行定義ファイル(.mdf) アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

依存エンティティ 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

一意でないメンバー名 「重複メンバー名」を参照してください。

一意のメンバー名 データベース・アウトライン内に一度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

一意メンバーのアウトライン 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

イメージ・ブックマーク Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

因果関係マップ 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示すマップ。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

インストール・アセンブリ EPM System インストーラにプラグインする製品インストール・ファイルです。

インデックス 1)疎データの組合せによりブロック・ストレージ・データベースでデータを取得する方法です。2)インデックス・ファイルを指します。

インデックス・キャッシュ インデックス・ページを含むバッファです。

インデックス項目 疎次元の交差へのポイントです。インデックス・エントリはディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

インデックス・ファイル ブロック・ストレージのデータ取得情報を格納する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

インデックス・ページ インデックス・ファイルの低位区分です。インデックス・ページには、データ・ブロックを指すポイントが含まれます。

イントロスペクション データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。「スクレーピング」と対比してください。

インポート・フォーマット FDM における、ソース・ファイルの構造の定義です。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

疎次元 ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した場合に、すべてのメンバーの組合せのデータを含んでいる可能性の低い次元です。「密次元」と対比してください。たとえば、すべての顧客がすべての製品のデータを持っているわけではありません。

「影響」ステータス 親エンティティに連結する子エンティティの変更を示すステータスです。

エンコード方式 テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングする方法の 1 つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。「コード・ページ」、「ロケール」も参照してください。

エンタープライズ・ビュー Administration Services の機能の 1 つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーチファクトを直接操作できます。

エンティティ 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位例: 部門、子会社、工場、地域、製品や財務報告単位。

エージェント アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

お気に入りガジェット Reporting and Analysis ドキュメントと URL へのリンクを含むガジェットです。「ガジェット」も参照してください。

親 直接レポートする依存エンティティを 1 つ以上含むエンティティです。親は少なくとも 1 つのノードに関連付けられたエンティティであるため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

親の調整 親に関連して子に転記される仕訳エントリーです。

オンライン分析プロセス(OLAP) 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行える多次元の環境です。集計された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

会社間消去 「消去」を参照してください。

会社間照合 アプリケーション内の会社間勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。会社間の受取勘定科目は、対応する会社間の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の連結合計から会社間のトランザクションを消去するために使用されます。

会社間照合レポート 会社間勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

拡張リレーショナル・アクセス リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベース内の要約レベルのデータにマッピングされます。

確認レベル プロセス管理の確認ステータス・インディケータの 1 つです。「開始していません」、「第 1 パス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

加重 スコアカードのアイテムに割り当てられた値です。スコアカード全体のスコアの計算において、そのアイテムの相対的な重要性を示します。スコアカードのすべてのアイテムの加重を総計すると 100% になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認識する場合、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられます。

カスケード メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

カスタム・カレンダー システム管理者が作成したカレンダーです。

カスタム次元 ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

カスタム定義関数(CDF) Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。「カスタム定義マクロ」も参照してください。

カスタム定義マクロ(CDM) Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。「カスタム定義関数」も参照してください。

カスタム・プロパティ ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

カスタム・レポート 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

型付きメジャー Essbase で、メジャーが示されている次元で Text または Date というタグが付けられたメンバーです。セルの値は事前定義されたテキストまたは日付として表示されます。

カタログ・ペイン アクティブ・セクションで利用可能な要素のリストを表示する領域です。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードの場合は埋込み可能セクション、グラフィック・ツール、およびコントロール・ツールが表示されます。

カテゴリ データ編成に使用するグループです(月など)。

株式ベータ 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が 1% 変動するのに伴って株の収益が通常 1.2% 変動するのであれば、その株のベータ値は 1.2 です。

カレンダー ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、および Q4 から構成されます。

為替レート・タイプ 為替レートの識別子です。異なるレートのタイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、履歴レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時間に適用されます。

換算 「通貨換算」を参照してください。

換算レート 「為替レート」を参照してください。

勘定科目タイプ 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の振舞いを決定するプロパティです。勘定科目の種別のオプションには、支出、収益、資産、負債、および資本が含まれます。

勘定科目の消去 連結時に連結ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

勘定科目のブロック 集計ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算集計プロセスで値を受け取りません。

関数 Data Relationship Management で、パラメータを受け入れ動的値を返す、派生プロパティ式の構文要素です。

感嘆符(!) 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

管理対象サーバー 内蔵された Java 仮想マシン(Java Virtual Machine: JVM)で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

関連勘定科目 メイン勘定科目に関連する、同一のメイン勘定科目番号でグループ化された勘定科目です。勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

外部でトリガーされるイベント ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

外部認証 アプリケーションの外部に格納されたユーザー情報を使用して、Oracle EPM System 製品にログオンすることを指します。ユーザー・アカウントは EPM System で維持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は Oracle Internet Directory (OID) や Microsoft Active Directory (MSAD)などの企業ディレクトリを使用して外部サービスで実行されます。

ガジェット EPM のコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysis のコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

期別価額メソッド(PVA) 通貨換算プロセスの1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

基本エンティティ 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

基本次元 1つまたは複数の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product 次元が Flavors 属性次元の基本次元となります。

基本通貨 日常の業務取引が行われる通貨です。

期末 チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

キャッシュ データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

キューブ 3つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

キューブ・スキーマ Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

キューブ配置 Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

兄弟 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

共有 Workspace ページ 専用のシステム・フォルダに格納され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーが共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

共有ストレージ フェイルオーバー・クラスタのすべてのノードに対して使用できる必要のあるデータを含むディスク・セットです。共有ディスクとも呼ばれます。

共有ディスク 「共有ストレージ」を参照してください。

共有メンバー ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

クエリー・ガバナンス Essbase Integration Server のパラメータまたは Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズを制御します。

行の抑制 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付ける設定です。

クラスタ 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

クラスタ・サービス システムとしてクラスタ・メンバーの操作を管理するソフトウェアです。クラスタ・サービスを使用すると、一連のリソースやサービスを定義して、クラスタ・メンバー間でのハートビート・メカニズムを監視し、これらのリソースやサービスをできるだけ効率よくかつ透過的に別のクラスタ・メンバーに移動できます。

クラスタ内部接続 ノード障害を検出するためにハートビート情報についてハードウェア・クラスタで 사용되는プライベート・リンクです。

クラスタ棒グラフ カテゴリを横に並べたグラフです。垂直棒グラフでのみ使用されます。

繰返し 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルのパスです。

クリーン・ブロック 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

クロス集計レポート テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うレポートです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されません。

グリッドの POV 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート設計者はグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぐことができます。次元に含まれるグリッドの値が1つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

グループ 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

グローバル・レポート・コマンド 別のグローバル・コマンドに置き換えられるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

計算結果アイテム データベースやキューブに物理的に格納される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ項目、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

計算スクリプト データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

計算済勘定科目 計算式を変更することができない勘定科目です。計算式は、構築するモデルの勘定科目の整合性を保つために固定されています。たとえば、当期純利益、計算済勘定科目の計算式は戦略的財務に組み込まれており、履歴期間または予測期間で変更はできません。

系統データ 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てステップにわたるコストまたは収益のフローについてレポートを作成できます。

系列 異なるメタデータ要素間の関係です。メタデータ要素が他のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studio では、この関係を系列ビューアでグラフィカルに表示できます。「トレサビリティ」も参照してください。

結合 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく 2 つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

欠落データ (#MISSING) ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

権限 データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

検証 アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプトまたはパーティション定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。

検証ルール データの整合性を強化するために FDM で使用されるルールです。たとえば、FDM では、検証ルールによって、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後に、特定の条件が満たされていることが保証されます。

限界税率 税引き後の負債コストを計算するために使用されるレートです。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税、および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

現地通貨 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

原点 2 つの軸の交差です。

子 データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

高可用性 障害が発生した場合でもアプリケーションが継続してサービスを提供できるようにするシステム属性です。これは、シングル・ポイント障害を除去し、フォルト・トレラント・ハードウェアおよびサーバー・クラスタを使用することで実現されます。サーバー・クラスタでは、1 つのサーバーで障害が発生すると、処理要求は別のサーバーにルーティングされます。

高機能計算 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算方法です。

交差 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位。ワークシートのセル。

構造ビュー トピックをコンポーネントのデータ項目の単純なリストとして表示します。

構築方法 データベース・アウトラインを変更するために使用するメソッドの一種です。データ・ソース・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築メソッドを選択します。

個人の反復タイム・イベント 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

個人用変数 複雑なメンバー選択の特定の選択ステートメントです。

個人用ページ リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

コミット・アクセス Essbase の取引の処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時取引は書き込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

コンテキスト変数 タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

コンテンツ リポジトリに格納されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

コンテンツ・ブラウザ コンテンツを参照して選択し、Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

コントリビューション 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

コード・ページ 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なる文字セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語の文字セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。「エンコード方式」も参照してください。

差異 プラン値と実績値などの2つの値の差です。

サイクル・スルー データベースを計算しながら、そのデータベース内で複数パスを実行します。

再構成 URL ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

再構築 データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

最新 最新の期間として定義されたメンバーからデータ値を抽出するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

最上位メンバー 次元のアウトラインで、階層ツリーが一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前が次元名と同一となるのが一般的です。

サイレント応答ファイル インストール管理者が提供する必要があるデータをかわりに提供するファイルです。応答ファイルによって、ユーザーが操作または入力しなくても EPM System インストーラや EPM System コンフィグレータは実行されます。

サブ勘定科目のナンバリング 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

サブスクライブ 項目またはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、項目またはフォルダにフラグを付けることを指します。

サポート詳細 セルの値を算出した計算および仮定です。

三角換算法 残高をある通貨から別の通貨へ第三の共通通貨を介して変換する方法です。たとえば、デンマーク・クローネから英国ポンドへ残高を変換するには、残高をクローネからユーロへ、ユーロからポンドへ変換できます。

算出ステータス 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

算術演算子 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、*、/、%など)。

算術データ・ロード データベース内の値に対して演算(たとえば各値に 10 を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

サンプリング エンティティの特性を判別するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。「メタデータのサンプリング」も参照してください。

サービス ビジネス項目を取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認証など)。

サブレット Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

残高勘定科目 特定の時点に関連する符号なしの値を格納する勘定科目の種別です。

式 Data Relationship Management で、プロパティ値を動的に計算するために派生プロパティによって使用されるビジネス・ロジックです。

式の保存 データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

資産勘定科目 勘定科目タイプの1つです。会社の資産の値を保管します。

支出勘定科目 期別の値と年次累計値を格納する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

市場リスク割増額 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

システム抽出 アプリケーションのメタデータから ASCII ファイルにデータを変換する機能です。

子孫 データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

シナリオ データを分類するための次元です(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。

支配比率 所属するグループのコンテキスト内でエンティティが受ける支配の程度です。

収益勘定科目 期別の値と年次累計値を格納する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

集計ルール 階層のノードを集計する際に実行されるルールです。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、このルール内で制御できます。

修飾名 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York]など)。

集約 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび格納するプロセスです。または集約プロセスによって格納された結果を指します。

集約関数 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

集約スクリプト 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

集約ストレージ・データベース 潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、格納されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

集約制約 集約要求ライン・アイテムや集約メタトピック・アイテムに設定する制約です。

集約セル 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む 4 つのセルに展開されます。

集約ビュー 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして格納されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

出資比率 エンティティが親によって所有される程度です。

手動ステージ ユーザーの操作が必要なステージです。

障害回復 地理的に離れたスタンバイ・サイトへのアプリケーションおよびデータに対する回復戦略を備えることで、運用サイトでの自然災害や予定外の停止から守る機能です。

消去 組織内のエンティティ間での取引をゼロに設定(消去)するプロセスです。

消去済勘定科目 連結ファイルに表示されない勘定科目です。

詳細チャート 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

使用済ブロック 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である場合(つまり更新されている場合)、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

シリアル計算 デフォルトの計算設定です。1つの計算を複数のタスクに分割して、一度に1つのタスクを計算します。

仕訳(JE) シナリオと期間の勘定科目残高の借方または貸方に計上する調整の集合です。

シングル・サインオン(SSO) 一度ログオンすれば、認証を再度求められることなく複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

シングル・ポイント障害 障害が発生した場合にユーザーが通常の機能にアクセスできなくなる、システムのコンポーネントです。

信頼できるユーザー 認証されたユーザーです。

時間次元 データが示す期間です(会計期間、暦時間など)。

軸 1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

次元 ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、Year 次元は多くの場合四半期、月などの期間の各単位のメンバーが含まれます。

次元間の無関係性 次元が他の次元と交差ししない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差ししない次元からはアクセスできないため、交差ししない次元はその次元とは無関係となります。

次元構築 Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

次元構築のルール データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

次元性 MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{(West, Feb), (East, Mar)} というセットの場合は、含まれている 2 つのタプルはいずれも次元 (Region, Year) を反映しているため、同一の次元性であることとなります。

次元タイプ 事前定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、事前定義済のカレンダー機能を持ちます。

次元タブ 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

次元テーブル 1) 特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。2) Essbase Integration Services では、Essbase の潜在的な次元を定義する 1 つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

事前計算 ユーザーが取得する前にデータベースの計算を実行することです。

事前定義済ドリル・パス データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

持続性 Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

実行時プロンプト ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

実績の頻度 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

自動逆仕訳 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

自動ステージ ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

従業員 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う(または関与する)ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません(コンサルタントなど)。従業員は、認可のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

重複する別名 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

重複メンバーのアウトライン 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

重複メンバー名 データベース内に複数存在する、それぞれ異なるメンバーを表す同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。

重要事業領域(CBA) 部門、地域、工場、費用センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

重要成功要因(CSF) 戦略目標を達成するために確立および維持する必要がある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1 つ以上のアクションに対する親となります。

上位レベル・ブロック 少なくとも 1 つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

冗長データ 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、取引の間保持されます。

ジョブ 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

ジョブの出力 ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

垂直アプリケーション・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスが同じマシン上にあるクラスタです。

水平アプリケーション・サーバー・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスがそれぞれ異なるマシン上にあるクラスタです。

数値属性範囲 基本次元メンバーを関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含めることができます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられます。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

スキーマ リレーショナル・データベースにおける、データおよびデータ間の関連を表す論理モデルです。

スクレーピング データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。「イントロスペクション」と対比してください。

スケール スケールによって値の表示方法を決定します(整数、十単位、百単位、千単位、百万単位など)。

スコア ターゲットを達成するレベルです。通常はターゲットのパーセンテージとして表されます。

スコアカード 目標を達成する上での、従業員、戦略要素、または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

スコープ Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定の影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには 3 レベルの粒度があり、上位レベルが下位レベルを包含します。これらのレベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。「持続性」も参照してください。

ステージ 1)通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の 1 つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の 2 つのタイプがあります。2)Profitability では、組織内での割当てプロセスのステップを表す、モデル内の論理区分です。

ステージ・アクション 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

ステージ後割当て 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

ステージ内割当て 同じステージ内のオブジェクトに対する財務フローの割当てです。

ステージング・テーブル 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステージング領域 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステータス・バー コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報が表示される画面下部のバーです。

スナップショット 特定の時点の読取り専用データです。

スポットライタ 選択された条件に基づくカラー・コーディングを可能にするツールです。

スマート・カット URL フォームのリポジトリ項目へのリンクです。

スマート・タグ Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから使用可能な事前定義済アクションに関連付けられています。Oracle EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

スーパーバイザ サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

ズームチャート チャートを拡大することにより詳細情報を表示するためツールです。ズームチャートは、チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

精度 数値に表示される小数点以下の桁数です。

製品 Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

セカンダリ・メジャー プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーには業績レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

責任マップ 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

セキュリティ・エージェント Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On または CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

世代 データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

設計レポート コンポーネント・ライブラリを使用してカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインタフェースです。

接続ファイル 「Interactive Reporting 接続ファイル (.oce)」を参照してください。

セル 1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

セル・ノート Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

選択リスト レポート設計者がレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定するメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーを選択するだけで、選択リストを使用する次元の POV を変更できます。

戦略マップ 上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、構成要素である下位レベルの戦略的達成目標に組入れる方法を示します。

戦略目標(SO) 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の 1 つのパーспекティブに関連付けられ、1 つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目的の親になります。

税金の初期残高 Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリーは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

関連サブクエリー 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

相互割当て 財務フローの割当ての一種です。宛先の 1 つとしてソースが含まれます。

組織 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

祖先 その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

属性 次元メンバーの特性です。たとえば、従業員次元メンバーには、名前、年齢、または住所の各属性がある場合があります。Product 次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

属性計算次元 メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの 1 月の平均売上値を計算できます。

属性次元 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

属性タイプ 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

属性の関連付け データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

属性レポート 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。「基本次元」も参照してください。

貸借一致の仕訳 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

対称型マルチプロセッシング(SMP) マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

対称トポロジ 運用サイトとスタンバイ・サイトの層全体で同一である Oracle Fusion Middleware 障害回復構成です。対称トポロジでは、運用サイトとスタンバイ・サイトにあるホスト、ロード・バランサ、インスタンス、アプリケーションの数は同じです。両方のサイトで同じポートが使用されます。システムは同一に構成され、アプリケーションは同じデータにアクセスします。

タイトル・バー Strategic Finance 名、ファイル名、およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示するバーです。

タイム・イベント ジョブの実行をトリガーします。

タイム・スケール 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示するスケールです。

タイムライン・ビュー 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための EDM の機能です。

多次元データベース 3 つ以上の次元でデータを整理、格納および参照する方法です。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。「リレーショナル・データベース」と対比してください。

タスクフロー ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

タスクフロー・インスタンス タスクフローの状態と関連データが含まれる、タスクフローの単一のインスタンスです。

タスクフロー管理システム タスクフローを定義および作成し、その実行を管理するシステムです。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

タスクフロー参加者 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

タスクフロー定義 ステージとステージ間の関係のネットワーク、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)から構成される、タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスです。

タスク・リスト 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

タブ Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行うことができるビューです。

タブル MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。次に例を示します: (Jan); (Jan, Sales); ([Jan], [Sales], [Cola], [Texas], [Actual])。

単項演算子 アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されます。

代替階層 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

ダッシュボード 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

置換 データ・ロードのオプションの 1 つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合、指定された期間に該当する値が消去されます。

チャート・テンプレート ワークスペース・チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。

抽出コマンド Essbase レポート作成コマンドの1つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分け、および配列を処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

調査 「ドリルスルー」を参照してください。

調整 「仕訳」を参照してください。

調整勘定科目 会社間勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が格納される勘定科目です。

直接レート 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

通貨換算 データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます(1*0.923702)。変換後のユーロの額は0.92になります。

通貨の上書き 任意の入力期間について選択した入力メソッドを上書きして、デフォルトの通貨/アイテムとして該当期間の値の入力を使用可能にする機能です。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

通貨パーティション アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

通常仕訳 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。通常仕訳は、貸借一致、エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

適応状態 Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

テキスト・メジャー Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は事前定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。「型付きメジャー」、「テキスト・リスト」および「導出テキスト・メジャー」も参照してください。

テキスト・リスト Essbase で、数値の識別子にマッピングされたテキストの値を保管するオブジェクトです。テキスト・リストではテキスト・メジャーを使用できます。

デフォルト通貨単位 データの単位スケールです。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して10を入力すると、10,000 と解釈されます。

データ関数 データを集約する関数です。データの平均、最大値、カウントを求めたり、他の統計値によりデータのグループを集約します。

データ・キャッシュ 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

データ・セル 「セル」を参照してください。

データ値 「セル」を参照してください。

「データなし」ステータス 集計ステータスの1つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

データ・ファイル・キャッシュ 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

データベース接続 データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

データ・モデル データベース・テーブルのサブセットを示します。

データ・ロック 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぐ機能です。

データ・ロード位置 FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされる各ソース・ファイルに対して FDM のデータ・ロード位置が1つあります。

データ・ロードのルール テキストベース・ファイル、スプレッドシートまたはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を決定する一連の基準です。

透過パーティション ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

透過ログイン ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせるプロセスです。

統合 Shared Services を使用して Oracle Hyperion アプリケーションでデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付けおよびスケジュールが決定されます。

統制グループ 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されるグループです。サーベンス・オクスリ (Sarbanes-Oxley) 法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

時系列レポート作成 カレンダーの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

トップ・ラベルとサイド・ラベル 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

トラフィック・ライト 2つの次元メンバーの比較または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

トリガー ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の 1 つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

トレーサビリティ メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソース要素まで追跡できます。「系列」も参照してください。

トレース・レベル ログ・ファイルに取り込まれた詳細のレベルです。

トレース割当て 財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にする Profitability の機能です。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

トークン 外部認証システム上の 1 つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

トースト・メッセージ 画面右下の隅で消えていくメッセージです。

同期 Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

同期済 モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。「モデル」も参照してください。

導出テキスト・メジャー Essbase Studio では、テキスト・メジャーは事前定義ルールによって定められる値によって範囲として表されます。たとえば、販売高メジャーに基づく導出テキスト・メジャー「販売実績インデックス」は、「高」、「中」、および「低」の値で構成できます。この導出テキスト・メジャーは、個々の販売高の値を「高」、「中」、「低」の範囲に分類して表示するように定義されます。「テキスト・メジャー」も参照してください。

動的階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

動的計算 Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

動的計算および保管メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときのみ Essbase によって計算されるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2 回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

動的計算メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、Essbase により取得時にのみ計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

動的参照 データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

動的時系列 ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

動的ビュー勘定科目 勘定科目の1つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

動的メンバー・リスト システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

動的レポート レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

ドライバ Profitability and Cost Management で、ドライバを使用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示す、割当て方法の一種です。Business Modeling については、「コスト・ドライバ」および「アクティビティ・ドライバ」も参照してください。

ドリルスルー あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

ドリルダウン 次元の階層を使用してクエリー結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパースペクティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係または四半期と月の階層関係が明らかになります。

名前付きセット MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

入力データ 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

認証 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

認証サービス 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

ネイティブ認証 サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ネスト列見出し 複数の次元からのデータを表示するレポート列の列見出しのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列見出しはネスト列です。ネスト列見出しでは、見出しの一番上の行の Q1(Year 次元)が、見出しの一番下の行の Actual および Budget(Scenario 次元)で修飾されません。

ハイパーテキスト・マークアップ言語(HTML) Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

ハイパーリンク ファイル、Web ページまたはイントラネット HTML ページへのリンクです。

ハイブリッド分析 リレーショナル・データベースに格納された下位のデータを、Essbase に格納された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スケーラビリティと多次元データを組み合わせます。

反復タイム・イベント ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

反復テンプレート 各期間に対して同一の調整を行うための仕訳テンプレートです。

汎用ジョブ SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

凡例ボックス 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

ハードウェア・クラスタ ネットワーク・サービス(たとえば IP アドレス)やアプリケーション・サービス(データベースや Web サーバーなど)のシングル・ビューを、これらのサービスのクライアントに提供するコンピュータの集合です。ハードウェア・クラスタの各ノードは、独自のプロセスを実行するスタンドアロン・サーバーです。これらのプロセスは互いに通信して、連携してアプリケーション、システム・リソースおよびデータをユーザーに提供する1つのシステムのようなものを形成します。

バックアップ アプリケーション・インスタンスの複製コピーです。

バッチ POV ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

バッチ計算 データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

バッチ処理モード サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用する方法です。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンドラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行したりすることが可能です。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行したりできます。

バッチ・ファイル 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

バッチ・ローダー 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

バージョン データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

パターン照合 条件として入力されるアイテムの一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)またはアスタリスク(*)などのワイルド・カード値で表せます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple*」では apple、applesauce、applecranberry などが戻されます。

パフォーマンス・インディケータ ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルトのパフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

パブリック・ジョブ・パラメータ 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。

パブリック反復タイム・イベント 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス・コントロール・システムからアクセスできます。

パレット JASC に準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う 16 色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

パースペクティブ スコアボードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

パーティション化 データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

パーティション領域 データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの 1 つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2 つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に 18 個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する 18 個のセルが含まれている必要があります。

非アクティブ・グループ 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

「非アクティブ」ステータス エンティティの当期の連結が非アクティブ化されていることを示すステータスです。

非アクティブ・ユーザー 管理者によりアカウントが非アクティブ化されているユーザーです。

非次元モデル Shared Services のモデル・タイプの 1 つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

非対称トポロジ 運用サイトとスタンバイ・サイトの層全体で異なる Oracle Fusion Middleware 障害回復構成です。たとえば、非対称トポロジでは、運用サイトよりも少ないホストとインスタンスがあるスタンバイ・サイトが含まれることがあります。

日付メジャー Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用し示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。「型付きメジャー」も参照してください。

表示タイプ リポジトリに保存された 3 種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

標準仕訳テンプレート 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

標準次元 属性次元以外の次元です。

ビジネス・プロセス 集散的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

ビジネス・ルール 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

ビジュアル・キュー 特定のタイプのデータ値をハイライトする、フォントや色などのフォーマットが設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セル、またはリンク・オブジェクトのいずれかになります。

ビュー 年次累計または期別のデータ表示です。

ピボット 取得したデータのパーспекティブを変更します。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並べ替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

ピン ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは動的です。ピンは、基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやトラフィック・ライトの色を変更できます。

ピンボード 3 種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの 1 つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンから構成されるグラフィックです。ピンボードを使用するにはトラフィック・ライトを定義する必要があります。

ファイル区切り記号 データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

ファクト・テーブル スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

フィルタ データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスを制御したりする場合に使用されます。

フェイルオーバー プライマリ・データベース、サーバーまたはネットワークに障害が発生したり、これらがシャットダウンしたりする場合に、冗長性のあるスタンバイ・データベース、サーバーまたはネットワークに自動的に切り替える機能です。フェイルオーバー用にクラスタリングされているシステムは、サーバーの冗長性、および共有ディスクなどのフォルト・トレラント・ハードウェアにより、高可用性およびフォルト・トレランスを提供します。

フォーマット文字列 1) Essbase では、セルの値の表示を変換する方法です; 2) Data Relationship Management では、プロパティ値を返すフォーマットを示す、フォーマットまたはフォーマット済日付の派生プロパティのパラメータです。

フォーム Web ブラウザなどのインターフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

復元 データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

複製パーティション パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

負債勘定科目 一定時点における会社の負債残高を格納する勘定科目タイプです(未払費用、買掛金勘定、長期借入金など)。

フッター レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

フリーフォーム・グリッド 動的計算のために、複数のソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

フリーフォーム・レポート作成 ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

フレーム デスクトップ上の領域です。ナビゲーション・フレームとワークスペース・フレームが2つの主要な領域となります。

フロー勘定科目 期別と年次累計の符号なしの値を保管する勘定科目です。

ブック 1) Financial Reporting では、類似したドキュメントのグループを保持するコンテナです。ブックは、次元セクションまたは次元の変更を指定する場合があります。2) Data Relationship Management では、グループとして同時に実行できるエクスポートの集合です。エクスポート結果は、結合することも、個別に出力することもできます。

ブックの POV ブックが実行される次元のメンバーです。

ブックマーク ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークのタイプには、マイ・ブックマークとイメージ・ブックマークがあります。

ブロック プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての密次元のセルを表します。

ブロックされた勘定科目 手動で入力する必要があるために連結ファイルの計算に含めない勘定科目です。

ブロック・ストレージ・データベース 疎次元に定義されたデータ値の密度に基づいてデータを分類および格納する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で格納され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

ブロードキャスト・メッセージ Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が送信する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどの情報が詳細に表示されます。

分離レベル データベース操作のロックとコミットの動作(コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス)を決定する Essbase Kernel の設定です。

プライマリ・メジャー 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

プランナ データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用、および Smart View の使用が可能です。プランナは、大多数のユーザーから構成されます。

プランニング・ユニット シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

プレゼンテーション Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートの分類、整理、並べ替え、配布、および確認を行うことができます。リポジット内のレポートを参照するポインタを含みません。

プロキシ・サーバー セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

プロジェクト 実装でグループ化された Oracle Hyperion 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

プロセス監視レポート FDM データ変換プロセスにおける、場所とその位置のリストです。プロセス監視レポートを使用して、決算手続のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判断するために使用できます。

プロット領域 X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権限を付与するプロセスです。

並列エクスポート Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

並列計算 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

並列データ・ロード Essbase で、複数プロセスのスレッドによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

変換 アプリケーションの移行後にアーティファクトが宛先環境で正しく機能するように、アーティファクトを変換するプロセスです。

変換先通貨 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

変換元通貨 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

「変更済」ステータス エンティティのデータが変更されたことを示す集計ステータスです。

別名テーブル メンバーの代替名を含むテーブルです。

ページ グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしばZ軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含めることができます。

ページ・ファイル Essbase のデータ・ファイルです。

ページ見出し レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

ページ・メンバー ページ軸を決定するメンバーです。

保管階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで、アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含められないなどの一定の制限があります。

ホスト アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

ホスト・プロパティ ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Oracle EPM ホームが含まれる場合は、いずれかの Oracle EPM ホームに関するプロパティとなります。

保存された仮定 ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積 1 平方フィート当たりのコストなど)。

マイ Workspace ページ ユーザーが作成するカスタマイズ可能な Workspace ページです。リポジトリを参照することなく 1つの場所から簡単にアクセスできるように特別なマークが付いています。

マスター・データ・モデル 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインに「ロック済データ・モデル」と表示されます。データ・モデルは「データ・モデル」セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

マップ・ナビゲータ 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

マップ・ファイル 外部データベースとの間でのデータの送信や取得に使用される定義を格納するファイルです。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr です。

マルチロード 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

マージ データ・ロード・オプションの1つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

密次元 ブロック・ストレージ・データベースでは、次元メンバーのすべての組合せについてデータを含んでいる可能性があります。たとえば、時間次元はしばしば密ですが、これは時間次元がすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるからです。「疎次元」と対比してください。

ミドルウェア・ホーム Oracle WebLogic Server ホームを含み、EPM Oracle ホームおよびその他の Oracle ホームを含むことができるディレクトリです。ミドルウェア・ホームは、ローカル・ファイル・システム、または NFS を介してアクセス可能なリモート共有ディスク上に配置できます。

ミニスキーマ データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。

ミニレポート レポートのコンポーネントの 1 つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の一つまたは複数のクエリーを含みます。各レポートには、1 つ以上のミニレポートを含めることができます。

耳折れ 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

メジャー OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。「ファクト・テーブル」も参照してください。

メタアウトライン Essbase 統合サービスにおける、OLAP モデルから Essbase アウトラインを作成するための構造とルールを含んでいるテンプレートです。

メタデータ データベースに格納された、またはアプリケーションにより使用されるデータのプロパティと属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

メタデータ・セキュリティ ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

メタデータのサンプリング ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

メタデータ要素 データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために格納され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

メンバー 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、および Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

メンバー選択レポート・コマンド 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

メンバー専用レポート・コマンド レポート・ライターのフォーマット・コマンドの 1 つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

メンバー・リスト 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。

メンバー・ロード Essbase 統合サービスにおける、次元およびメンバーを(データなしに)Essbase アウトラインに追加するプロセスです。

目標 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

持株会社 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

モデル 1)アプリケーション固有のデータ表現を含むファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次に示す 2 つの主要なタイプがあります: 次元および非次元のアプリケーション・オブジェクト; 2) ビジネス・モデリングで、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、計算するために接続されたマシン・ネットワークです。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ユーザー定義属性(UDA) アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明する属性です。UDA を使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

ユーザー定義メンバー・リスト ユーザー定義による、特定の次元に含まれるメンバーの静的なセットです。

ユーザー・ディレクトリ ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。一般的に知られているユーザー・ディレクトリとして、Oracle Internet Directory (OID)、Microsoft Active Directory (MSAD)、および Sun Java System Directory Server などがあります。

ユーザー変数 ユーザーのメンバー選択に基づいてフォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示する変数です。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

要約チャート 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップするチャートです。各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画します。

ライトバック 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

ライフサイクル管理 製品環境間でアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーチファクトを移行するプロセスです。

ライン・アイテムの詳細 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

リソース システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマットおよび注釈の情報を格納します。

領域 メンバーおよび値の事前定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

履歴平均 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

リレーショナル・データベース 関連する 2 次元テーブルにデータを保管するデータベースです。「多次元データベース」と対比してください。

リンク 1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクは、フォルダ、ファイル、ショートカットおよび他のリンクを参照できます。2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

リンク条件 タスクフローのステージの起動順序を決定するためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

リンク・データ・モデル リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

リンク・パーティション データ・セルを使用して 2 つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新しいシートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

リンク・レポート・オブジェクト(LRO) セル・ノート、URL、またはテキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。「ローカル・レポート・オブジェクト」と対比してください。

隣接する四角形 Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さと幅を表すピクセル、または 1 ページ当たりの行数により指定されます。

レイアウト領域 コンテンツを配置できる Workspace ページの領域です。

例外 事前定義済みの条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。

レイヤー 1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることとなります。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

レコード データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

列 Data Relationship Management における、インポート・ソース、またはクエリー、比較、検証またはエクスポートの結果に関連付けられたデータのフィールドです。

レベル 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは一番下の次元メンバー(レベル 0)から上位の親メンバーへと並べられます。

レベル 0 のブロック 疎のレベル 0 メンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

レベル 0 のメンバー 子の存在しないメンバーです。

レポート・エクストラクタ スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

レポート・オブジェクト レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

レポート・スクリプト 1つまたは複数の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

レポートの通貨 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

レポート・ビューア レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

連結 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この連結は Year になります。

連結比率 親に連結された子の値の割合です。

連結ファイル(*.cns) 集計のプロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除または移動するためのグラフィカル・インタフェースです。集計ファイルを使用して、集計を定義したり変更したりすることも可能です。

連結ファイル(親) 事業部門のすべてのファイルが連結されたファイルです。連結の定義を含みます。

ログ・アナライザ Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

ロケーション別名 データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

ロケール コンピュータで使用される言語、通貨および日付のフォーマット、データのソート順、および文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。「エンコード方式」、「ESSLANG」も参照してください。

ロケール・ヘッダー・レコード スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

ロック済 ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

「ロック済」ステータス 集計ステータスの 1 つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

ロック済データ・モデル ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

論理 Web アプリケーション Web アプリケーションの内部ホスト名、ポートおよびコンテキストの識別に使用される、別名が付けられた参照です。クラスタ環境または高可用性環境では、分散コンポーネントに対する単一の内部参照を確立する別名です。EPM System では、クラスタ化されていない論理 Web アプリケーションは Web アプリケーションを実行する物理ホストにデフォルトで設定されています。

論理グループ FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定です。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ローカル結果 データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカルの結果を要求すると、カタログに表示されません。

ローカル・レポート・オブジェクト Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。「リンク・レポート・オブジェクト」と対比してください。

ロード・バランサ 要求をクラスタの個々のアプリケーション・サーバーに分散するハードウェアおよびソフトウェアであり、システムへの唯一のエントリ・ポイントです。

ロード・バランシング サーバー・グループ全体で要求を分散することです。これによって、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。

ロールアップ 「連結」を参照してください。

ワイルド・カード 検索文字列で単一の文字(?)または文字グループ(*)を示す文字です。

割当て 割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

ワークフロー FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

ワークブック 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

索引

記号

#missing 値, 113

#MISSING データ

勘定科目計算, 337

行での抑制, 171, 172

スマート・リストで表現, 382

空のセルとして表示, 175

#MISSING ドロップダウン・ラベル・オプション, 380

#MISSING フォーム・ラベル・オプション, 381

.RTF ファイル、カスタム・レポート用, 389

.XML ファイル、カスタム・レポート用, 389

「1 行当たりのフォーム数」オプション, 185

「1 つのエントリに複数通貨を許可」オプション, 175

「1 列当たりのフォーム数」オプション, 185

2 パス計算、考慮事項, 373

500 Error メッセージ, 414

56K ダイアルアップ接続、使用, 48

@RETURN 関数, 202

@XREF, 382

A - Z

Abs 関数, 444

Actual_365 加重された平均タイム・バランス, 336

Actual_Actual 加重された平均タイム・バランス, 336

Analytic Services。「Essbase」を参照

ASO

Planning アプリケーションへの追加, 369
情報, 369

制限, 370

プラン・タイプ・エディタを使用してデータベースを追加, 371

AverageA 関数, 445

Average 関数, 444

BegBalance メンバー。「期首残高期間」を参照
BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_CALC_SCRIP
T 設定, 44

BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_ENABLED 設
定, 44

BUSINESS_RULE_LAUNCH_LOG_RTP_VALUE
S 設定, 44

CalcMgrCmdLineLauncher.cmd ユーティリティ,
200

Calculation Manager

概要, 21

ビジネス・ルールのバックグラウンド処理の
設定, 43

ユーティリティによるビジネス・ルールの起
動, 200

CAPTURE_RTP_ON_JOB_CONSOLE プロパ
ティ, 193

CHECK RANGE 条件, 237

ClosedInputValueBlock 変数, 386

CountA 関数, 447

Count 関数, 446

CrossRef(accountName, prefix)関数, 387

CrossRef(accountName)関数, 387

CSS ファイル、カスタマイズ, 392

CubeRefresh ユーティリティ, 374

customCellEnterPost, 426

customCellEnterPre, 426

customCellValidatePost, 428

customCellValidatePre, 427

customOnLoad, 429

CYTD(memberName, calTpIndexName,
fiscalTpIndexName)関数, 387

CYTD(memberName)関数, 387

D-T-D、日次累計, 372

Data Integration Management Adapter for
Planning, 152

DATA_GRID_CACHE_SIZE プロパティ, 167

DB2。「IBM DB2」を参照

- DeleteSharedDescendants ユーティリティ, 377
- Difference 関数, 448
- Dimension(dimtag)関数, 387
- DIM、概要, 152
- drawCustomButtons, 429
- DTS メンバー
 - 使用可能にする, 372
 - 事前定義済, 372
 - 世代, 372
 - 設定, 371, 372
 - タイム・バランス・プロパティの回避, 372
 - 年および期間の名前変更, 372
 - 別名テーブルおよび別名, 373
- EDIT_DIM_ENABLED プロパティ, 47
- EPM Oracle インスタンス、記述された, 51
- EPMA。「Performance Management Architect」を参照
- EPM インテグレータ、ソース・データへのドリルスルー, 158
- Essbase
 - およびアクセス権, 75
 - 開始, 34
 - 概要, 22
 - 考慮事項, 34
 - 多次元データベース, 84
 - データをインポートする前にブロックを消去, 113
 - 閉じる, 52
 - パーティションの操作, 376
 - 複数のサーバーへの接続, 36
 - 命名規則, 433
- essbase.cfg ファイル、パフォーマンスのための構成, 92
- essbase.sec ファイル, 85
- Essbase 書き込みアクセス権の役割, 75
- Essbase サーバー
 - Planning アップグレード・ウィザードを使用した Reporting アプリケーションの更新, 323
 - Planning アップグレード・ウィザードを使用した参照の更新, 322
 - レポート・アプリケーション用の削除, 304
 - レポート・アプリケーション用の追加, 302
 - レポート・アプリケーション用の編集, 303
- Eval 関数, 449
- ExportSecurity ユーティリティ, 67
- FDM、ソース・データへのドリルスルー, 158, 413
- Financial Reporting
 - アクセス権, 79
 - および使用統計, 83
 - 概要, 22
 - ユーザーの役割, 29
- FIX ステートメント、トラブルシューティング, 412
- FormDefUtil ユーティリティ, 166
- getCalendarTPIndex()関数, 387
- getFiscalTPIndex()関数, 387
- global.css スタイル・シート, 393
- H-T-D、累計, 372
- HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティ, 77
- HOME_PAGE 設定, 42
- HSP_Audit_Records テーブル, 74
- HSP_InputCurrency メンバー, 87
- Hsp_InputCurrency メンバー, 362
- HSP_InputValue メンバー, 87
- Hsp_InputValue メンバー, 362
- HSP_NOLINK, 35, 382
- HSP_Rates 次元, 87
- Hsp_Rates 次元, 362
- HSP_SPREAD_PATTERN テーブル, 405
- HSP_UDF, 35, 382
- HspCustom.css, 393
- HspCustomImgs_en.template ファイル, 399
- HspCustomMsgs_en.template ファイル, 399
- HSPSYS_DATASOURCE テーブル, 39
- IBM DB2 データベース
 - さらなる接続を使用可能にする, 417
 - 「データベースはロックされています。」メッセージ, 417
 - リフレッシュできない, 423
- IfThen 関数, 449
- IF 条件値
 - UDA, 235
 - 勘定科目タイプ, 234
 - 行値, 231
 - 現在のセル値, 229
 - 差異レポート・タイプ, 234
 - 次元間メンバー, 232
 - セルの値, 229
 - 属性, 235
 - データ検証ルールでの使用について, 228
 - バージョン・タイプ, 234

- メンバー, 233
- メンバー名, 233
- 列値, 230
- ImportFormDefinition ユーティリティ, 205
- ImportSecurity ユーティリティ, 64
- JavaScript、フォームのカスタマイズ, 425
- Java 設定、増加, 414
- JDBC 接続プール, 40
- JDBC ドライバ、変更, 39
- LINEITEM、増分データ・ロードを実行するための使用, 131
- M-T-D、月次累計, 372
- MaintenanceMode ユーティリティ, 291
- MAX_CELL_NOTE_SIZE 設定, 46
- MAX_CELL_TEXT_SIZE 設定, 46
- MAX_VALIDATION_RECORDS 設定, 45
- MAXAPPLS パラメータ, 417
- Max 関数, 453
- Microsoft Office、インタフェース, 20
- Min 関数, 453
- Mod 関数, 454
- native2ascii プログラム, 400
- NumberOfPeriodsInYear 変数, 387
- NumberOfYears 変数, 387
- ODI、概要, 152
- OFFLINE_COMPRESSION_THRESHOLD 設定, 40
- OLAP_MAX_CONNECTIONS の設定, 92
- OpenInputValueBlock 変数, 386
- Oracle BI Publisher デスクトップ
 - インストール, 390
 - サンプルおよびテンプレート・ファイルの抽出, 390
 - サンプル・ファイル名, 389
 - テンプレート名, 392
 - ドキュメンテーション, 389
 - レポート・タイプ, 389
 - レポートのカスタマイズ, 391
 - レポートを使用可能にする, 392
- Oracle Data Integrator Adapter for Planning, 152
- ORACLE_ADF_UI プロパティ、Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能に戻す際に使用, 47
- P-T-D、使用時における期間メンバーの名前変更, 372
- PlanningPUAnnotationTemplate.rtf, 390
- PlanningPUAnnotationTemplate_Custom.rtf, 392
- PlanningPUAnnotationSample.xml, 390
- PasswordEncryption ユーティリティ, 50
- PDF レポート、カスタマイズ, 392
- PercentOfTotal 関数, 454
- Performance Management Architect
 - アプリケーションおよび次元を作成および管理, 21
 - インストールと構成, 34
 - 開始, 48
 - 作成およびリフレッシュの考慮事項, 34
 - 説明, 21
 - 通貨を管理, 87
 - ドキュメンテーション, 21
- Performance Management Architect アプリケーションを配置して Planning アプリケーションを作成, 21
- Period(periodName)関数, 387
- PI 関数, 456
- Planning、Performance Management Architect で実行されるタスク, 23
- Planning Web ページへのタスクのリンク, 278
- PlanningFormDefSample.xml, 390
- PlanningFormDefTemplate.rtf, 390
- PlanningFormDefTemplate_Custom.rtf, 391
- PlanningFormSample.xml, 390
- PlanningFormTemplate.rtf, 390
- PlanningFormTemplate_Income.rtf, 391
- PlanningTaskListSample.xml, 390
- PlanningTaskListTemplate.rtf, 390
- PlanningTaskListTemplate_Custom.rtf, 392
- Planning アップグレード・ウィザード, 321
- Planning アプリケーション・ウィザード, 312, 317
- Planning アプリケーション管理, 311
 - Planning アプリケーション作成者の役割, 54
 - アプリケーション情報のレビュー, 316
 - アプリケーションの作成およびリフレッシュ, 26
 - アプリケーションの作成または更新, 312
 - アプリケーションの登録, 317
 - インスタンス(クラスタ)およびデータ・ソースの選択, 313
 - カレンダーの設定, 313
 - 次元編集者の役割, 54
 - 通貨の設定, 315
 - データおよびメタデータをインポート, 121
 - プラン・タイプの指定, 316

- 「終了」タブ、Planning アプリケーション管理, 316
- Planning の終了, 52
- Planning のための Smart View 拡張機能, 467
- Planning 配置のシナリオ, 24
- Planning を開始する, 48
- POV 次元, 172
- Product 関数, 456
- ProvisionUsers ユーティリティ, 75
- PushData ユーティリティ, 300
- Q-T-D、四半期累計, 372
- Random 関数, 456
- RANGE 条件, 237
- RANGE 条件値
 - CHECK RANGE, 237
 - RANGE, 237
 - データ検証ルールでの使用について, 236
- Rank 関数, 457
- Round 関数, 459
- S-T-D、季節累計, 372
- SampleValidateData.js, 425
- sddelete.sql ファイル, 305
- SecFile.txt ファイル
 - アクセス権のインポート, 65
 - アクセス権のエクスポート用, 68
- Shared Services, 53
- Shared Services サーバーの URL オプション, 290
- Smart View
 - Planning 次元のインポート, 467
 - Planning メタデータのインポートおよび編集, 467
 - Planning メンバーの移動, 473
 - Planning メンバーの追加, 470
 - Planning メンバーの編集, 470
 - Smart View グリッドの表示, 468
 - アプリケーションのリフレッシュを終了, 374
 - 概要, 20
 - キューブのリフレッシュおよび作成, 474
 - 共有 Planning メンバーの指定, 473
 - 使用時の考慮事項, 208
 - 追加モードの選択, 470
 - 通貨換算計算スクリプト, 356
 - 複数通貨の入力, 357
- SMART_VIEW_DISPLAY_WARNING 設定, 41
- SortMember ユーティリティ, 376
- Spreadsheet Add-in。「Smart View」を参照
- SQL データベース、最適化, 37
- Sqrt(平方根)関数, 459
- Sum 関数, 460
- SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE
 - 最適化, 91
- SUPPORTING_DETAIL_CACHE_SIZE 設定
 - 変更, 37
- TaskListDefUtil ユーティリティ, 280
- THEN 条件
 - セルの処理条件, 236
 - データ検証ルールでの使用について, 236
- Truncate 関数, 461
- UDA
 - @XREF, 382
 - HSP_NOLINK, 35, 382
 - HSP_UDF, 35, 382
 - 削除, 384
 - 作成, 383
 - 承認用の使用, 382
 - 選択, 383
 - 操作, 382
 - 変更, 384
- UDA 条件、データ検証ルール, 235
- UI のカスタマイズ
 - カスケード・スタイル・シートで, 392
 - 行および列メンバーの, 395
 - ツール・ページの, 392
 - テキスト、画像、色, 398
 - データ分散パターン、更新, 405
 - データ分散パターン、例, 405
 - ビジネス・ルールのエラー・メッセージ, 202
 - フォーム, 425
- UI の言語、翻訳, 398
- Unicode モード, 318
- Unicode モード・オプション, 319, 320
- UNIX でのデータの同期の統合, 40
- URL
 - 設定, 293
 - フォーム・セル, 175
- URL、Workspace 用, 48
- URL タスク、シングル・サインオン, 273
- URL へのリンク
 - ツール・ページから, 293
 - メニュー上, 309
- URL メニュー・アイテム

設定, 309
 プロパティ, 309
 ValidateData.js, 425
 validateForm, 430
 VALIDATION_CACHE_SIZE 設定, 45
 VariancePercent 関数, 463
 Variance 関数, 462
 W-T-D、週次累計, 372
 web.xml ファイル, 420
 Web Analysis、概要, 23
 WebLogic Server、パフォーマンスの最適化, 417
 Web クライアント
 開始, 48
 情報, 20
 Windows パラメータ、最適化, 418
 Workspace
 URL, 48
 実行されたタスク, 21
 ドキュメンテーション, 21
 ログオン, 48
 XML ファイル、カスタム・レポート用, 389
 Y-T-D、使用時における年メンバーの名前変更, 372

あ行

アウトライン、更新の考慮事項, 34
 アウトライン・ロード・ユーザー・インタフェース
 概要, 148
 アウトライン・ロード・ユーティリティ
 UDA, 144
 エクスポート, 116
 エンティティ次元, 140
 為替レート, 145
 勘定科目次元, 136
 概要, 97
 期間次元, 140
 コマンド・プロパティ・ファイル, 97
 シナリオ次元, 142
 使用, 121
 次元プロパティ, 133
 スマート・リスト, 147
 属性次元, 144
 通貨次元, 143
 データのロード, 99

データをインポートする前に Essbase ブロックを消去するために使用, 113
 年次元, 141
 ドライバの設定, 114
 バージョン次元, 143
 フラット・ファイルへのデータのエクスポート, 115
 フラット・ファイルを使用したロード, 104
 プランニング・ユニット階層, 145
 メタデータのロード, 105, 106
 メンバー・プロパティ, 133
 ユーザー定義次元, 141
 リレーショナル・データ・ソースからのインポート, 107
 例, 99, 101, 127
 ロード・ファイル, 103
 ロード・ファイルの作成, 103
 アクセス
 Performance Management Architect, 48
 Planning, 48
 Workspace, 48
 アクセス権
 Essbase へのプッシュ, 75
 Financial Reporting の設定, 79
 インポート, 64
 エクスポート, 67
 およびフォーム, 156
 監査オプションの設定, 73
 概要, 26, 53
 起動アクセス権のビジネス・ルールへの割当て, 56
 共有メンバー用, 59
 継承オプション, 55
 シナリオに定義, 363
 すべて消去, 64
 タイプ, 55
 タスク・リストへの割当て, 278
 ビジネス・ルールの変更, 58
 フォームとフォルダへの割当て, 61
 保護できる要素, 54
 メンバーの変更, 58
 メンバーへの割当て, 56
 メンバーまたはビジネス・ルールの削除, 59
 優先, 55
 レポート, 70
 アクセス権の追加ページ、ユーザーとグループ数の設定, 293

- 「アクセス権の割当て」 ページのユーザーとグループ、数の設定, 293
- 圧縮フィルタ, 420
- アド・ホック・グリッド
 - および Smart View, 20
 - アイコン, 164
 - 移動, 165
 - 概要, 20
 - 削除, 166
 - 名前変更, 166
- アプリケーション
 - Planning アップグレード・ウィザードを使用したアップグレード, 323
 - Planning アプリケーション・ウィザードを使用した作成および更新, 312
 - Shared Services での復元アプリケーションの登録, 419
 - 共有サービス・アプリケーション・グループへの割当て, 290
 - 作成, 21, 81
 - 作成、考慮事項, 84
 - 作成時の問題, 422
 - 作成とリフレッシュの概要, 26, 33
 - 所有権, 25, 290
 - 設定の概要, 25
 - 選択, 48
 - データおよびメタデータをインポート, 121
 - データの移入の概要, 27
 - データのエクスポート, 115
 - バックアップ, 92
 - パフォーマンスの最適化, 90
 - 開く, 81
 - 命名のルール, 433
 - ユーザーの強制退出, 291
 - リフレッシュ、考慮事項, 84
 - リフレッシュの問題, 423
 - レポートへのマッピング, 294
 - ロック解除, 81
- アプリケーションからユーザーをロックアウト, 291
- 「アプリケーション・グループへのアプリケーションの割当て」 オプション, 290
- アプリケーション設定
 - ホーム・ページ, 42
- アプリケーション・デフォルト
 - 上書き, 288
 - 設定, 288
- アプリケーション・データベース
 - 情報, 84
 - リフレッシュ, 374
- アプリケーションの削除, 317
- アプリケーションの作成、考慮事項, 26
- アプリケーションの所有者、設定, 290
- アプリケーションの所有者、割当て, 290
- アプリケーションの使用制限, 291
- アプリケーションの登録
 - Planning アプリケーション管理の使用, 317
- アプリケーションのリフレッシュ、考慮事項, 26
- アプリケーションのロック解除, 81, 412
- アプリケーションへのアクセス、取消し, 291
- アプリケーションへの移入、概要, 27
- アプリケーション・メンテナンス・モード, 291
- 網掛け、レポートの, 389
- 「以下」属性関数, 214
- 移行
 - ビジネス・ルールの起動アクセス権, 77
 - ユーザー ID, 76
- 「移行 ID」 ボタン, 57
- 「以上」属性関数, 214
- 「依存関係」 チェック・ボックス, 274, 275
- 「一括割当ての使用可能」 オプション, 175
- 一括割当て、フォームを使用可能, 175
- 「移動しない」 オプション, 267
- 「移動パスの更新」 オプション, 267
- イメージ
 - HspCustomImgs_en ファイルでカスタマイズ, 398
 - カスケード・スタイル・シートでカスタマイズ, 392
- 色、UI でカスタマイズ, 398
- 印刷
 - フォーム定義, 164
 - フォームのオプション, 175
 - プランニング・ユニットの注釈, 252
 - レポート, 389
- インスタンス
 - Planning アプリケーション管理用の選択, 313
 - 更新, 52
- インストール・パス, 51
- インポート
 - UDA, 144

- アウトライン・ロード・ユーティリティを使用, 121
 - アクセス権, 64
 - エンティティ次元, 140
 - 為替レート, 145
 - 勘定科目次元, 136
 - 概要, 97
 - 期間次元, 140
 - シナリオ次元, 142
 - 次元プロパティ, 133
 - スマート・リスト, 147
 - 属性次元, 144
 - タスク・リストの定義, 280
 - 通貨次元, 143
 - データ, 99, 105
 - 年次元, 141
 - バージョン次元, 143
 - フォーム定義, 166, 205
 - プランニング・ユニット階層, 145
 - メタデータ, 106
 - メンバー・プロパティ, 133
 - ユーザー定義次元, 141
 - ロード・ファイルの使用, 103
 - 疎次元
 - および属性, 347
 - 設定, 340
 - 説明, 327
 - 埋込み関数引数, 443
 - うるう年、勘定, 336
 - エクスポート
 - アクセス権, 67
 - 概要, 116
 - タスク・リスト, 280
 - フォーム, 166
 - エラー・メッセージ
 - 数式, 387
 - トラブルシューティング, 409
 - エラー・メッセージ「実行できませんでした」, 387
 - 円グラフ、作成, 188
 - エンティティ次元, 334
 - エンティティ・メンバー
 - 基本通貨, 335
 - プラン・タイプ, 338
 - 別名テーブル, 342
 - エンティティ・メンバーの基本通貨, 335
 - 大きなフォームを開く, 422
 - 「お気に入り」メニュー、ドキュメント, 21
 - オフライン
 - 監査オプションの設定, 73
 - 操作の考慮事項, 208
 - ビジネス・ルールの考慮事項, 209
 - フォームの使用可能, 174
 - オフライン圧縮のしきい値、設定, 40
 - オフライン・アプリケーション、圧縮設定, 40
 - オフライン・アプリケーションの圧縮設定, 40
 - オフラインの使用可能オプション, 174
 - 「オブジェクトの選択」タブ, 71
 - オプションの表示、説明, 287
 - 折れ線グラフ、作成, 188
 - オーバーライド値、実行時プロンプト, 194
- か行**
- 「会計年度の開始日」オプション, 314
 - 「会計年度の最初の月」オプション, 314
 - 「会計年度の数」オプション, 314
 - 階層
 - 期間, 373
 - シナリオおよびバージョン, 373
 - 属性, 373
 - 拡張設定のオプション
 - 使用, 289
 - 説明, 288
 - 拡張メンバー・リスト、行で設定, 173
 - 加重された平均タイム・バランス・プロパティ, 336
 - カスケード・スタイル・シート、カスタマイズ, 392
 - カスタム属性表示、使用可能, 340
 - カスタム属性表示を使用可能にするオプション, 340
 - カスタム・ツール、設定, 293
 - カレンダー
 - Planning アプリケーション管理を使用したアプリケーションの設定, 313
 - 現在の年または期間の変更, 353
 - 実用条件, 351
 - 設定, 351
 - 年の追加, 353
 - 要約期間の削除, 352
 - 要約期間の作成, 351
 - ロールアップを定義, 351
 - 為替レート
 - 値の分散, 88, 89

- オプションの設定, 88
- 勘定科目メンバーのタイプ, 338
- 設定, 87, 361
- 設定のタイプ, 87
- タイプ, 357
- 「年の入力およびテーブルの入力」オプション, 88, 89
- 為替レート・テーブル
 - 値の分散, 88, 89
 - 概要, 86, 361
 - シナリオに定義, 363
 - 設定, 88
 - 「年の入力およびテーブルの入力」オプション, 88, 89
- 為替レート・テーブルのメソッド, 88
- 為替レートの Avg オプション, 88
- 為替レートのエンド・オプション, 89
- 為替レートの乗算または除算オプション, 88
- 為替レートの除算または乗算オプション, 88
- 為替レートのメソッド, 88
- 為替レートの履歴オプション, 88
- 「関係が一致するアクセスの表示」チェック・ボックス, 72
- 監査証跡
 - 消去, 74
 - 設定, 72
- 勘定科目計算の欠落データ, 337
- 勘定科目計算のゼロ, 337
- 勘定科目次元, 335
- 勘定科目タイプ
 - および差異レポート, 337
 - 使用例, 335
 - 説明, 335
 - デフォルト・タイム・バランス・プロパティ, 335
 - 要約, 335
- 勘定科目タイプ条件, 234
- 勘定科目注釈
 - SQL で削除, 304
 - 監査オプションの設定, 73
 - 消去, 283
- 「勘定科目注釈の表示」オプション, 176
- 勘定科目メンバー
 - 勘定科目タイプ, 335
 - データ型と為替レート・タイプ, 338
 - プラン・タイプ, 338
 - 保存された仮定, 337
- 関数。「数式」を参照
 - Abs, 444
 - Average, 444
 - AverageA, 445
 - Count, 446
 - CountA, 447
 - Eval, 449
 - IfThen, 449
 - Max, 453
 - Min, 453
 - Mod, 454
 - PercentOfTotal, 454
 - Pi, 456
 - Product, 456
 - Random, 456
 - Round, 459
 - Sqrt, 459
 - Sum, 460
 - Truncate, 461
 - Variance, 462
 - VariancePercent, 463
 - 式の行と式の列, 438
- 「関数別に選択項目のみ保持」オプション, 212
- 管理者
 - アクセス権の設定, 53
 - アプリケーションへの移入, 27
 - およびアプリケーションの所有権, 25, 290
 - ビジネス・ルールの作成, 28
 - フォームの設計, 27
 - メタデータを作成, 25
- 「管理」メニュー、Workspace ドキュメント, 21
- 概要、プランニング, 19
- 期間
 - P-T-D DTS メンバー使用時における名前変更, 372
 - シナリオに定義, 363
 - 実用条件, 351
 - 代替階層, 373
 - 変更, 353
- 期間次元、情報, 351
- 期間の範囲、設定, 351
- 期間、変更, 353
- 期間累計、使用時における期間の名前変更, 372
- 「期限」チェック・ボックス, 273, 275
- 期首残高期間

- および為替レート, 357
- およびシナリオ, 363
- 考慮事項, 373
- 説明, 88
- 編集, 355
- 既存の代替変数の再利用チェック・ボックス, 161
- 既存のブロックがあるページについてのみ検証, 171
- 基本通貨、Performance Management Architect の設定, 87
- キューブ。「データベース」を参照
- 共有オプション
 - 概要, 334
 - 設定, 333
- 共有しないオプション
 - 情報, 334
 - 設定, 333
- 共有メンバー, 346
 - アクセス権の適用, 86
 - 暗黙的な, 36
 - 削除, 377
 - 作成, 346
 - 設定, 333
 - フォーム, 156
 - 有効なアクセス権, 59
- 「区切り線の表示」オプション, 171
- 区切り線、列の設定, 171
- 「行/列のレイアウト」タブ, 170
- 行次元, 172
- 行値の条件, 231
- 行、データがないときのメッセージ, 175
- 行の「欠落データの抑制」オプション, 171, 172
- 行の参照引数, 440
- 「行の高さ」オプション, 171
- 行の高さの「デフォルトの使用」オプション, 171
- 行の高さを適合するようサイズ調整, 171
- クラスタ、更新, 52
- クラスタ、選択, 313
- グラフ、複合フォームに埋込み, 188
- グリッド診断、使用, 190
- 「グリッド分散」、使用可能, 175
- 「グリッド分散の使用可能」オプション, 175
- グリッド・プロパティ, 171
- グループ
 - アクセス権, 55
 - 監査オプションの設定, 73
 - 承認, 259
 - 設定, 26
 - プロビジョニング, 53
 - 「グループからの継承を表示」チェック・ボックス, 72
 - グローバル設定
 - 指定, 289
 - 情報, 287
 - 継承オプション
 - 「子」オプション, 55
 - 「子孫」オプション, 55
 - 「メンバー」オプション, 55
 - 「結果のグループ分け単位」オプション, 72
 - 「欠落値を空白で表示」オプション, 175
 - 検索
 - ページを, 179
 - メンバー, 330
 - ワイルドカード、メンバー選択, 214
 - 「検証メッセージ」オプション, 225
 - 検証メッセージ、作成および理解。「データ検証ルール」を参照
 - 「検証ルールのコピー」オプション, 178
 - 「検証ルールの使用可能」オプション, 223
 - 「検証ルールの貼付け」オプション, 178
 - 「検証ルールの追加/編集」オプション, 178
 - 検証レポート、承認, 251
 - 現在のアプリケーション・デフォルトのオプション
 - 使用, 288
 - 説明, 287
 - 現在のセル値の条件, 229
 - このフォームへのアクセス権を持つユーザーについてのみ検証, 171, 224
 - コピー
 - サポート詳細, 281
 - データ, 281
 - コマンド・プロパティ・ファイル, 97
 - コメント、表示, 175
 - 「コンテキストの使用」オプション, 204
 - コンテキスト・メニュー, 176

さ行

- 「最初」タイム・バランス・プロパティ, 336
- 「最初の会計年度」オプション, 314
- 差異レポートおよび勘定科目タイプ, 335

- 差異レポート条件, 234
- 削除
 - Planning アプリケーション管理を使用するアプリケーション, 317
 - SQL で勘定科目注釈, 304
 - SQL でサポート詳細, 305
 - セル詳細, 283
 - ユーザー、データベース記録のクリーンアップ, 78
- サポート詳細
 - 監査オプションの設定, 73
 - キャッシュ・サイズ
 - 使用率, 83
 - メモリーの割当て, 91
 - コピー, 281
 - シナリオに関連、SQL で削除, 305
 - 消去, 283
- 「サポート詳細を含める」オプション, 175
- 参照プロパティ引数, 442
- 散布図、作成, 188
- サンプル・ファイル
 - すべてのレポート・タイプ用, 389
 - 抽出してレポートをカスタマイズ, 390
 - データのロードに使用, 391
 - フィールドをレポートに追加, 391
- 式。「数式」を参照
 - フォームでの削除, 438
 - フォームのための作成, 437
 - 編集, 437
- 式の行と式の列
 - 追加, 177
 - フォームに含む, 177
 - フォームの設計, 159
- 資産勘定科目タイプ
 - 設定, 335
 - 例, 335
- 支出勘定科目タイプ, 335
 - および差異レポート, 337
 - 例, 335
- 支出外勘定科目タイプ, 337
- 指示のカスタマイズ、概要, 406
- 指示、プランナのためのカスタマイズ, 406
- システム設定, 40, 289
 - Smart View メッセージ, 41
- システム・プロパティ、設定, 37
- 「指定されたセル数よりフォームが大きい場合に警告」オプション, 422
- 「指定したメンバーを各次元のページに表示」オプション, 293, 329
- 「指定したレコードを各アクセス権の割当てページに表示します」オプション, 293
- 視点
 - 情報, 157
 - 定義, 179
 - データのロード, 99
 - メンバーの選択, 179
 - レポート・アプリケーションのための設定, 297
- シナリオ
 - SQL でサポート詳細の削除, 305
 - およびアクセス権, 363
 - 為替レート・テーブルの定義, 363
 - 期間の定義, 363
 - コピー, 365
 - 削除, 365
 - 作成, 363
 - 順序の変更, 369
 - ソート, 368
 - 代替階層, 373
 - データ検証, 240, 241, 242, 243, 244
 - 編集, 364
- 資本の勘定科目タイプ、例, 335
- 収益の勘定科目タイプ
 - 要約, 335
 - 例, 335
- 集計演算子、考慮事項, 373
- 集約オプション, 332
- 集約ストレージ・アウトライン。「ASO」を参照
- 集約ストレージ・アプリケーション, 294
- 集約プロパティ引数, 441
- 縮小メンバー・リスト、設定, 173
- 承認
 - UDA の作成, 383
 - UDA の使用, 382
 - および実行時プロンプト, 198
 - およびユーザー変数, 251
 - 監査オプションの設定, 73
 - グループ・ベースの承認, 259
 - 電子メールの通知の使用可能, 249
 - データ検証ルール, 249
 - プランニング・ユニット, 247
 - プランニング・ユニット階層, 248
 - プランニング・ユニット階層の管理, 253

- プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョン, 260
- プランニング・ユニット階層メンバーの選択, 256
- プランニング・ユニットの移動パス, 266
- プロセス, 250
- ユーザーの役割, 250
- 予算プロセス, 247
- 「承認の管理」メニュー・アイテム, 310
- 使用統計, 83
- 使用法シナリオ, 23
- 新機能
 - 重要な情報, 20
 - パフォーマンスの最適化, 420
 - 有効化, 47
- 診断、グリッド診断の使用, 190
- 次元
 - 疎な次元と密な次元について, 327
 - エンティティ, 334
 - 階層, 328
 - 勘定科目, 335
 - 概要, 327
 - 検索, 330
 - 作成および更新, 21
 - 集約オプション, 332
 - 縮小, 329
 - ストレージ・オプション, 333
 - 代替階層, 373
 - 展開, 329
 - 非表示, 173
 - 命名規則, 435
 - メンバーの関係, 327
 - ユーザー定義, 339
- 次元階層
 - 移動, 329
 - 展開および縮小, 329
 - 表示するメンバー数の設定, 329
 - メンバーの移動, 330
 - メンバーの検索, 330
 - メンバーのソート, 330
- 次元間実行時プロンプト
 - 「フォームのメンバーを使用」オプションで, 195
 - 「プロンプトの非表示」オプションで, 195
 - メンバーの選択, 212
- 次元間メンバー条件, 232
- 次元の順序変更
 - 情報, 91
 - 手順, 340
 - 次元の代替階層, 373
 - 次元の非表示、行と列, 173
 - 次元の列の最小化, 331
 - 次元の列の復元, 331
 - 実行時プロンプト
 - 値のキャプチャ, 193
 - 値ファイルを作成, 200
 - および承認セキュリティ, 198
 - およびユーザーの表示, 55
 - 概要, 193
 - セキュリティの設計, 199
 - 複数設定の適用, 194
 - メンバーの選択, 211
 - 実行時プロンプト設計時プロパティの非表示, 194
 - 「自動的に ID を生成」オプション, 381
 - 「ジョブ・コンソール」のタスク, 273
 - 「ジョブ・コンソール」メニュー・アイテム, 310
 - 水平棒グラフ、作成, 188
 - 数式
 - エラー・メッセージ, 387
 - 構文, 386
 - 使用における前提条件, 386
 - スマート・リストを使用, 386
 - 説明, 386
 - 操作, 385
 - メンバー式で使用, 385
 - 数値のデータ型, 347, 348
 - 数値のフォーマット, 357
 - 数値比較, 237
 - 数値引数, 439
 - スキップ・オプション, 337
 - スケール, 357
 - スタイル・シート、カスタマイズ, 392
 - ステータス・チェック、ジョブの設定, 42
 - ストリームライン・ビュー・オプション, 310
 - ストレージ・オプション, 333
 - スプレッドシート。「Smart View」を参照
 - 「すべての POV 次元に適用」オプション, 172
 - 「すべての行次元に適用」オプション, 172
 - 「すべての年」親メンバー, 315
 - 「すべてのページ次元に適用」オプション, 172
 - 「すべての列次元に適用」オプション, 172
 - スマート・リスト

#MISSING の表現, 382
 エントリの追加と変更, 381
 およびデータの入力, 378
 数式で使用, 386
 操作, 378
 同期, 379
 プレビュー, 382
 プロパティの設定, 380
 「スマート・リスト・エントリ」タブの追加, 381
 「スマート・リスト・エントリ」タブの編集, 381
 スマート・リストのタブをプレビュー, 382
 スマート・リストの表示順序オプション, 380
 スマート・リストのプロパティの編集, 380
 精度
 通貨メンバー, 360
 フォーム, 173
 レポート内, 389
 「精度の適用」オプション, 175
 セキュリティ。「アクセス権」を参照
 「セキュリティの適用」チェック・ボックス, 56, 340
 セキュリティ・フィルタ
 検証, 84
 すべてのユーザーに対する生成, 85
 選択済ユーザー対象の生成, 75
 「セクションの高さ」オプション, 185
 「セクションの幅」オプション, 185
 「セクション名」オプション, 185
 セグメント
 階層の抑制、列について, 171
 読取り専用, 171
 世代、DTS メンバーの設定, 372
 設計時の「オーバーライド値として使用」プロパティ, 194
 セッションのタイムアウト, 420
 接続、確認, 320
 セル詳細、消去, 283
 セル詳細の消去
 監査オプションの設定, 73
 使用, 283
 バックグラウンド処理の構成, 42
 セル・テキスト、消去, 283
 「セル・テキストの表示」オプション, 175
 セルの参照引数, 440
 セルの値の条件, 229

セル、読取り専用, 171
 セル・レベル・ドキュメント
 監査オプションの設定, 73
 セル・レベル・ドキュメント、消去, 283
 「セル・レベルのドキュメントの使用可能」オプション, 175
 選択内容を別々の行に配置, 218
 選択内容を別々の列に配置, 218
 「前回の値を使用」プロパティ, 194
 祖先の表示ボタン, 331
 祖先、メンバーの決定, 331
 ソース・データへのドリルスルー, 158
 ソース・プラン・タイプ
 および勘定科目, 338
 メンバーの移動の適用, 330
 属性
 疎から密への次元変更の適用, 347
 階層および別名, 373
 関数, 347
 概要, 347
 削除, 348
 作成, 347
 選択, 214
 データ型, 347, 348
 表示, 173
 フォーム, 156
 別名および別名テーブル, 347
 属性次元日付フォーマット、設定, 348
 属性条件, 235
 属性値
 階層および別名, 373
 概要, 349
 削除, 350
 定義, 349
 データ検証ルール用の選択, 233
 フォームのメンバーとして, 215
 変更, 350
 メンバーへの割当て, 349
 「属性別に選択項目のみ保持」オプション, 212
 「属性メンバーの表示」オプション, 175

た行
 帯域幅、増加, 420
 「タイプが一致するアクセスの表示」オプション, 72
 タイム・バランス計算, 337
 タイム・バランス・プロパティ, 336

タスク

Planning および Performance Management

Architect で実行される, 23

アラート・メッセージ, 272

依存関係, 274, 275

移動, 276

概要, 249

期限メッセージ, 272

コピー, 275

削除, 277

定義, 272

編集, 274

タスク・リスト

アクセス権の削除, 280

アクセスの変更, 279

アクセスの割当て, 278

移動, 276

監査オプションの設定, 73

概要, 249

削除, 277

作成, 269, 271

指示の追加, 271

順序の変更, 276

ステータスの消去、期限とアラート, 277

定義のエクスポート, 280

ドキュメント・リンクのコピー, 278

名前変更, 270

レポートをカスタマイズ, 392

タスク・リスト・フォルダ

移動, 270

削除, 271

作成, 270

名前変更, 270

「タブとしてフォームを表示」オプション, 183

単一のフォーム、作成, 168

ターゲット・バージョン

設定, 28

説明, 366

ダイアルアップ接続, 48

代替変数

およびマッピング・アプリケーション, 302

実行時プロンプトに表示の使用可能, 290

選択, 214

メンバーとして選択, 218

チャート、複合フォームに埋込み, 188

注釈

勘定科目, 173

セル, 175

通貨

Planning アプリケーション管理の設定, 315

換算の計算, 88, 362

管理, 87

混在する通貨の計算, 356

削除, 360

作成, 358

情報の表示, 358

通貨換算計算スクリプトおよびデータ・ストレージの考慮事項, 373

通貨コードの表示, 176

フォーム, 156

複数を使用可能にする, 355

編集, 360

レポート作成, 358

通貨オプション, 88

通貨換算計算スクリプト

および Smart View, 356

考慮事項, 373

失敗, 412

データ・ストレージの考慮事項, 373

長すぎる, 410

パフォーマンスの最適化, 90

通貨換算の計算方法, 88, 362

「通貨コードの表示」オプション, 176

通貨コード、表示, 176

「通貨の計算」ビジネス・ルール

起動順序の重要性, 192

消去, 191

情報, 357

複数通貨で, 158

通貨メンバーの精度設定の使用, 174

「次毎に繰り返し」チェック・ボックス, 274, 275

ツール、カスタム設定, 293

ツール・ページ、カスタマイズ, 293, 392

「ツール」メニュー、ドキュメント, 21

適合するようサイズ調整の列幅, 171, 172

テキスト

UI でカスタマイズ, 398

カスタマイズの概要, 398

テキスト・データ型, 347, 348

テキストのカスタマイズ

情報, 398

非ラテン言語で, 400

「展開開始」オプション, 173

- テンプレート・ファイル
 - Word でカスタマイズ, 391
 - すべてのレポート・タイプ用, 389
 - 抽出してレポートをカスタマイズ, 390
 - 名前付け, 392
 - 開く, 391
 - プレビュー, 391
 - 保存, 391
- テーブルの入力および年の入力、為替レート・
 テーブルの選択, 88, 89
- デフォルト
 - アプリケーション設定, 288
 - 個人プリファレンスで上書き, 288
 - システムの設定, 289
 - 設定情報, 287
 - 別名テーブル, 326
 - メンバーと別名の表示オプション, 326
- 「デフォルトの列の幅」オプション, 171, 172
- 電子メール通知
 - 設定, 249
 - ブロードキャスト, 82
- 電子メール・メッセージの UTF-8 オプション,
 289
- データ
 - アウトライン・ロードでインポート, 121
 - 行での欠落の抑制, 171, 172
 - コピー, 281
 - ソースへのドリルスルー, 158
 - フラット・ファイルへのエクスポート, 115
 - フラット・ファイルを使用したロード, 104
 - 無効な値エラー, 415
 - リレーショナル・ソースからのインポート,
 111
 - ロード, 97, 99, 105, 152
 - ロード・ファイル, 103
- データ・エントリ・フォーム。「フォーム」を
 参照
- データ型、説明, 347, 348
- データ型、テキスト、日付、ブール式、数値,
 347
- データ検証でサポートされている条件演算子,
 237
- 「データ検証メッセージ」ペインにメッセージ
 を表示」オプション, 225
- データ検証ルール, 249
 - IF 条件, 228
 - RANGE 条件, 236
 - THEN 条件, 236
 - UDA の使用, 382
 - 移動パス, 224
 - 移動パスの設計の考慮事項, 269
 - 既存のブロックがあるページについてのみ検
 証するオプション, 171
 - グループ化とグループ解除, 223
 - 検証, 164
 - このフォームへのアクセス権を持つユーザー
 のみを検証するオプション, 171, 224
 - 作成および更新, 221
 - サポートされている条件, 227
 - シナリオ, 239, 240, 241, 242, 243, 244
 - 使用可能にする, 223
 - 条件演算子, 237
 - セルの処理命令, 224
 - セルのフォーマット, 224
 - 属性、ルール用の選択, 233
 - 追加、編集、コピーおよび貼付け, 178
 - 評価, 239
 - 評価および実行の順序, 226
 - 表示, 225
 - ヒント, 243
 - フォームでのメッセージの表示, 225
 - フォームに含む, 159, 178
 - プランニング・ユニットの移動パス、影響,
 266
 - 保存, 164
 - メッセージ, 224
 - ユーザーがアクセス権を持つセルおよびペー
 ジについてのみ検証するオプション, 171
- データ検証ルールによってサポートされている
 条件, 227
- データ・ストレージ・プロパティ
 - 考慮事項, 373
 - 情報, 333
 - 設定, 340
 - 通貨換算計算スクリプトの考慮事項, 373
- データ・セルの下矢印, 378
- データ・ソース
 - Planning アップグレード・ウィザードを使用
 した参照の更新, 322
 - Planning アプリケーション管理の操作, 317
 - Planning アプリケーション管理用の選択,
 313
 - 削除, 321
 - 作成, 318

- 接続の確認, 320
 - 編集, 319
 - データのコピー
 - 監査オプションの設定, 73
 - 使用, 281
 - バックグラウンド処理の構成, 42
 - 「データのないフォームのメッセージ」オプション, 175
 - 「データのフォーマット」オプション, 175
 - データの分散
 - 為替レート・テーブルの, 88, 89
 - フォームの使用可能, 175
 - 分散パターン, 405
 - 例, 405
 - データのロード
 - フラット・ファイルの使用, 104
 - リレーショナル・ソースから, 111
 - データ・ファイル
 - サンプルのロード・ファイル, 154
 - ロード, 153
 - データへの変更の競合, 411
 - データベース, 84
 - Essbase, 84
 - 作成およびリフレッシュ, 85, 374
 - ロック解除, 412
 - データベースの管理エラー, 416
 - データベースの作成、考慮事項, 26, 85, 374
 - データベースのリフレッシュ
 - 考慮事項, 26, 34, 85, 374
 - 問題解決, 410
 - データ列、レポートの, 389
 - データ・ロード・キューブ名、説明済, 99
 - 「データ・ロード次元の親」オプション, 153
 - 統計のアクセス, 83
 - 登録
 - Shared Services での復元アプリケーション, 419
 - 年
 - Planning アプリケーション・ウィザードから「すべての年」メンバーの追加, 315
 - Y-T-D DTS メンバー使用時における名前変更, 372
 - カレンダーへの追加, 353
 - 現在の変更, 353
 - 最大, 351
 - 「次元」タブからの「すべての年」メンバーの追加, 344
 - 実用条件, 351
 - 編集, 354
 - トライアンギュレーション通貨、Performance Management Architect の設定, 87
 - トライアンギュレーション通貨、設定, 87
 - トライアンギュレーションの概要, 87, 362
 - トラブルシューティング, 409
 - 動的計算および保管オプション、設定, 333
 - 動的計算と動的計算および保管の違い, 333
 - 動的計算メンバー
 - および通貨換算計算スクリプト, 90
 - 情報, 333
 - 設定, 333
 - 通貨換算計算スクリプトで, 412
 - データベースのリフレッシュおよびメンバー式, 375
 - 動的時系列(DTS)
 - 使用可能にする, 372
 - 事前定義済, 372
 - 世代, 372
 - 設定, 371
 - タイム・バランス・プロパティの回避, 372
 - 別名テーブルおよび別名, 373
 - 動的メンバー
 - 情報, 341
 - ドキュメント、フォームでのセルの追加, 175
 - ドキュメント・リンクのコピー機能, 278
 - ドライバ次元, 153
 - 「ドライバ次元の一意の識別子」オプション, 153
 - ドライバ・メンバー、説明, 99
- ## な行
- 「ナビゲート」メニュー、ドキュメント, 21
 - 「入力」タイム・バランス・プロパティ, 336
 - ネットワーク帯域幅、増加, 420
- ## は行
- 配分予算策定, 255
 - バックアップ
 - アプリケーション, 92
 - アプリケーション・データベース, 92
 - リフレッシュ前, 34
 - バックグラウンド処理、ジョブの設定, 42
 - 「バックグラウンドで実行」オプション, 86
 - バランス・プロパティ, 336

- バージョン
 - およびフォーム, 156
 - コピー, 411
 - コピー時のエラー, 411
 - 削除, 368
 - 作成, 366
 - 順序の変更, 369
 - 設定, 368
 - ソート, 368
 - ターゲット・バージョンの設定, 366
 - 代替階層, 373
 - 表示, 368
 - 編集, 367
 - ボトムアップ, 156
 - ボトムアップ・バージョンの設定, 366
- バージョン・タイプ条件, 234
- バージョンのコピー
 - 監査オプションの設定, 73
 - トラブルシューティング, 411
- 「バージョンのコピー」のタスク, 273
- 「バージョンのコピー」メニュー・アイテム, 310
- パスワード
 - 入力してログオン, 48
 - ユーティリティのプロンプトを抑制, 50
- パスワード・プロンプトの抑制, 50
- パフォーマンス
 - essbase.cfg の構成, 92
 - WebLogic Server の最適化, 417
 - Windows パラメータの最適化, 418
 - アクセス権をインポートする場合, 67
 - アプリケーションでの最適化, 90
 - 大きなフォームを開く場合, 422
 - 最適化, 420
 - その他の最適化のヒント, 92
 - ダイアルアップ接続のオーバーの最適化, 420
 - 通貨換算の最適化, 90
- パフォーマンスの最適化
 - アクセス権をインポートする場合, 67
 - アプリケーションのデザインによる, 90
 - 現在のリリース, 420
 - ダイアルアップ接続のオーバー, 420
 - 通貨換算の, 90
 - フォームの計算, 157
- パーティション, 376
- 引数
 - 埋込み関数, 443
 - 行の参照, 440
 - 数値, 439
 - セルの参照, 440
 - プロパティ, 441
 - 列の参照, 440
- 非対称の行と列, 176
- 「必須パラメータ」ドロップダウン・リスト, 309
- 日付データ型, 347, 348
- 「等しい」属性関数, 214
- 「等しくない」属性関数, 214
- 評価順序、設定, 340
- 表示オプション、メンバー選択, 340, 343
- ヒント
 - 為替レート, 89
 - 式, 455
 - データ検証, 243
 - データ検証ルール, 223
 - データのコピー, 281
 - トラブルシューティング, 409
- ビジネス・ルール
 - Calculation Manager で作成, 21
 - エラー・メッセージ、カスタマイズ, 202
 - オフライン時の考慮事項, 209
 - オフライン・フォームの使用, 208
 - 確認メッセージ, 310
 - 起動アクセス権の移行, 77
 - 起動アクセス権の削除, 59
 - 起動アクセス権の変更, 58
 - 起動アクセス権の割当て, 56
 - 起動時のアクセス権の競合, 55
 - 起動の概要, 30
 - クラシック・ビュー, 310
 - 作成, 28
 - 使用, 191
 - 実行時プロンプトの概要, 193
 - 実行時プロンプトのメンバーの選択, 192, 211
 - ストリームライン・ビュー, 310
 - 選択, 191
 - バックグラウンド処理の構成, 42
 - フォームを使用した概要, 191
 - 複合フォームでの選択, 192
 - プロパティ, 192
 - 保存時に起動, 192
 - ユーザーの役割, 28

- ユーティリティで起動, 200
- ロード時に起動, 192
- ビジネス・ルールの確認メッセージ, 310
- ビジネス・ルールの「クラシック・ビュー」オプション, 310
- ビジネス・ルール・フォルダ。「フォルダ」を参照
- フォルダ
 - アクセス権の割当てについて, 61
 - アクセスの割当て, 62
 - 移動, 286
 - 削除, 286
 - 作成, 285
 - 選択, 163
 - 名前変更, 287
- フォントおよびフォント・サイズ、レポートの, 389
- フォーム。「フォーム」を参照
 - JavaScript を使用したカスタマイズ, 425
 - アクセス権、説明済, 156
 - アクセス権、割当て, 61
 - 一括割当ての使用可能, 175
 - 移動, 165, 166
 - 印刷オプション, 175
 - 大きい、パフォーマンスの向上, 422
 - オフライン時の考慮事項, 208
 - オフラインの使用可能, 174
 - オプション, 173
 - およびバージョン, 156
 - 関数, 438
 - 既存のブロックがあるページについてのみ検証するオプション, 171
 - 共有メンバー, 156
 - 区切り文字, 171
 - 行と列, 158
 - 行のプロパティの設定, 172
 - グリッド分散の使用可能, 175
 - グリッド・プロパティ, 171
 - 計算の最適化, 157
 - 検索, 165
 - このフォームへのアクセス権を持つユーザーのみを検証するオプション, 171, 224
 - コンポーネント, 157
 - 式の行と式の列, 159, 177
 - 式の行と列の追加, 159
 - 式の行と列を使用した設計, 159
 - 視点, 157, 179
 - 集計演算子, 173
 - 次元の非表示, 173
 - 情報, 155
 - 設計のプレビュー, 164
 - 設定の概要, 27
 - セルのドキュメント, 175
 - 選択, 163
 - 属性, 156
 - 単一の作成, 168
 - 通貨, 156
 - 定義のエクスポート, 166
 - データがない行のメッセージ, 175
 - データ検証, 159
 - データ検証ルールの追加, 159
 - データ検証ルールを含む, 178
 - データ検証を使用した設計, 159
 - ドリルスルー用の設計, 158
 - 名前変更, 166
 - 非対称の行と列, 176
 - 非表示, 174
 - 開くのに失敗、トラブルシューティング, 412
 - ビジネス・ルール, 191
 - フォーム定義の印刷, 164
 - フォーム定義のインポート, 205
 - 「フォーム・デザイナー」による編集, 181, 183, 184
 - 複合の作成, 181
 - 複数通貨での設計, 158
 - プラン・タイプ, 155
 - プロパティ, 173
 - 編集, 180
 - ページ軸, 157, 179
 - メニュー、関連付け, 176
 - メンバー, 211
 - メンバーとしての属性値, 215
 - ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページについてのみ検証するオプション, 171
 - ユーザーが同時に使用できる数の設定, 167
 - 読取り専用, 171, 174
 - レイアウト, 169, 181
 - 列のプロパティの設定, 172
 - レポートをカスタマイズ, 391
 - ローリング予測の設計, 159
 - フォーム設計のプレビュー, 164
 - 「フォーム・デザイナー」アイコン, 163

- フォーム・デザイナー、フォームの編集, 181, 183, 184
- フォームでの小数位, 172
- 「フォームの計算」 ビジネス・ルール
 - および Smart View, 356
 - 起動順序の重要性, 192
 - 作成, 191
 - 説明, 357
 - 「保存時に実行」 オプション, 29
- フォームのスキップの設定オプション, 186
- フォームの定義、レポートをカスタマイズ, 391
- 「フォームのメンバーを使用」 オプション
 - 設定, 193
 - 他の設定との対話, 194
- フォームの読取り専用オプション, 171
- フォーム・フォルダ。「フォルダ」を参照
- フォーム・メニュー・アイテム
 - 使用, 309
 - プロパティ, 309
- フォームを非表示, 174
- 複合フォーム
 - 「1行当たりのフォーム数」設定, 185
 - 「1列当たりのフォーム数」設定, 185
 - 埋込みチャート, 188
 - カスタム・レイアウト, 182
 - 共通次元, 186
 - 行のレイアウト, 182
 - グローバル・レイアウト次元, 186
 - 作成, 181
 - 視点プロパティ, 186
 - セクションの削除, 182
 - 「セクションの高さ」設定, 185
 - 「セクションの幅」設定, 185
 - セクション・プロパティ, 184
 - 「セクション名」設定, 185
 - 「タブとしてグループ化」オプション, 182
 - 単一のフォームの編集, 181, 183, 184
 - 単一のフォームのレイアウトからの削除, 184
 - ビジネス・ルールの選択, 192
 - ページ軸プロパティ, 186
 - マスター複合フォーム, 186
 - レイアウト, 181
 - レイアウト内のフォームの再調整, 183
 - 列のレイアウト, 182
- 複数通貨
 - およびオフライン作業, 208
 - 使用可能にする, 355
 - フォームの設計, 158
- 複数の別名テーブル, 324
- 負債の勘定科目タイプ、例, 335
- フラット・ファイル
 - Planning アプリケーションからのデータのエクスポート, 115
 - データのロードに使用, 104
 - メタデータをロードするために使用, 106
- フリーフォーム予算策定, 256
- 「フロー」タイム・バランス・プロパティ, 336
- ブロードキャスト・メッセージ, 82
- ブール式のデータ型, 347, 348
- プラン作成の概要, 29
- プラン・タイプ
 - Planning アプリケーション管理の指定, 316
 - エンティティ・メンバー, 338
 - 勘定科目メンバー, 338
 - 削除, 371
 - 追加, 371
 - フォーム, 155
 - メンバーの移動の適用, 330
- プラン・タイプの有効設定
 - エンティティ・メンバー, 338
 - およびカスタム次元, 339
 - および勘定科目メンバー, 338
 - 指定, 339
 - メンバーの移動の適用, 330
- プランニング後のアクティビティの概要, 32
- プランニング・サイクルの概要, 29
- プランニング・ユニット
 - 移動しない, 266
 - 移動パス, 266
 - 移動パスの変更, 266
 - グループ・ベースの承認, 259
 - 検証, 266
 - 所有者と確認者, 257
 - 注釈の印刷, 252
 - 注釈、レポートをカスタマイズ, 392
 - 定義済, 247
 - 電子メールの通知の使用可能, 249
 - レビュー・プロセスの開始, 251
- プランニング・ユニット階層, 248
- インポート, 265
- エクスポート, 265
- 管理, 253

- 削除, 262
- 作成, 254
- シナリオ, 260, 261
- シナリオの選択, 261
- 所有者と確認者の割当て, 257
- 使用状況の表示, 262
- スコープ, 254
- テンプレート, 254
- 同期, 264
- 名前, 254
- 名前変更, 263
- バージョン, 260, 261
- バージョンの選択, 261
- 編集, 261
 - メンバーの選択, 256
- プランニング・ユニットの移動パス
 - 概要, 266
 - データ検証ルールを作成, 266
 - データ検証ルールの設計の考慮事項, 269
 - 変更, 266
- プリファレンス、個人設定, 288
- プロセス管理。「承認」を参照
- プロセス・ステータスの状態
 - アクションのカスタマイズ, 404
 - 色のカスタマイズ, 402
 - カスタマイズの概要, 402
 - 状態のカスタマイズ, 403
- プロパティ
 - EDIT_DIM_ENABLED, 47
 - JDBC 接続プール, 40
 - JDBC ドライバの変更, 39
 - Planning リリース 11.1.2.1 のユーザー・インタフェースと機能に戻す, 47
 - Smart View メッセージ, 41
 - UNIX でのデータの同期, 40
 - オフライン圧縮, 40
 - 構成概要, 37
 - サポート詳細キャッシュ, 91
 - システム・データベース・テーブル, 37, 40
 - 代替変数の取得間隔, 218
 - データ検証, 45
 - バックグラウンド処理, 42
 - ビジネス・ルール・ロギングの有効化, 44
 - ホーム・ページ, 42
- プロパティ引数, 441
 - 参照, 442
 - 集約, 441
- プロパティ・ファイル, 97
- 「プロビジョニングされていないユーザー/グループの削除」 ボタン, 78
- 「プロンプトの非表示」 オプション
 - 設定, 193
 - 他の設定との対話, 194
- 「平均」 タイム・バランス・プロパティ, 336
- ヘッダー用のページの割合, 389
- ヘッダー・レコード・フィールド, 103
- ヘッダー、レポートの, 389
- 変更の追跡, 72
- 変数、選択, 213
- 別名
 - DTS メンバーの, 373
 - 情報, 324
 - 属性, 347
 - フォームで表示, 173
 - フォーム行で表示, 173
 - 命名規則, 435
 - メンバー選択の表示, 340, 343
 - 「別名:メンバー名」 オプション, 212, 340, 343
 - 「別名」 オプション, 173
- 別名テーブル
 - DTS メンバーの, 373
 - アプリケーションのデフォルトの設定, 326
 - コピー, 326
 - 削除, 325
 - 作成, 325
 - 消去, 325
 - 属性, 347
 - 編集, 325
- ページ・サイズ、レポートの, 389
- ページ軸
 - 検索施設の使用可能, 179
 - 情報, 157
 - 定義, 179
 - メンバーの選択, 179
- ページ次元, 172
- 「ページ数を越えた場合に検索を許可」 オプション, 179
- ページ・メンバーのデフォルト設定オプション, 273
- 保管オプション
 - 情報, 333
 - 設定, 333
- 保存された仮定, 337
- 翻訳

UI テキスト, 398
 スマート・リストおよびラベル, 399
 ラベル, 309
 棒グラフ、作成, 188
 ボトムアップ・バージョン
 説明, 366
 データの入力, 156
 ボトムアップ予算策定, 255

ま行

「前のフォーム」 オプション, 310
 「前のフォーム」 メニュー・アイテム, 309, 310
 マルチバイト文字、レポート内の印刷, 165, 253
 密次元
 およびアプリケーションのパフォーマンス, 91
 設定, 340
 説明, 327
 向き、レポートの, 389
 無効な値エラー、トラブルシューティング, 415
 命名規則
 Essbase, 433
 Essbase ユーザー名, 436
 アプリケーション, 433
 アプリケーションおよびデータベース, 433
 計算スクリプトおよびレポート・スクリプト, 435
 式およびフィルタ, 435
 次元、メンバー、別名, 434, 435
 メタデータ
 UDA, 144
 アウトライン・ロードでインポート, 121
 エクスポート, 116
 エンティティ次元, 140
 為替レート, 145
 勘定科目次元, 136
 概要, 106
 期間次元, 140
 シナリオ次元, 142
 次元プロパティ, 133
 設定の概要, 25
 属性次元, 144
 通貨次元, 143
 年次元, 141
 バージョン次元, 143

フラット・ファイルを使用したロード, 106
 ユーザー定義次元, 141
 リフレッシュの考慮事項, 34
 リレーショナル・ソースからのインポート, 108
 ロード, 97
 ロード・ファイルの作成, 103
 メタデータのロード
 フラット・ファイルの使用, 106
 リレーショナル・ソースから, 108
 メッセージの告知
 作成, 82
 スケジュールされたアプリケーションのリフレッシュ, 374
 メッセージのスケジュール, 82
 メニュー
 アイテムの追加, 308
 更新, 398
 作成, 307
 追加, 398
 フォームとの関連付け, 176
 メニュー・アイテム, 309
 URL, 309
 アイコン, 309
 作成または変更, 308
 ジョブ・コンソール, 309
 ジョブ・ステータス, 310
 ジョブ・タイプ, 310
 タイプ, 309
 バージョンのコピー, 309, 310
 ビジネス・ルール・タイプ, 309
 フォーム, 309
 前のフォーム, 309, 310
 メニュー・ヘッダー, 309
 ラベル, 309
 メニュー・ヘッダー・メニュー・アイテム, 309
 面チャート、作成, 188
 メンテナンス・モード, 291
 メンバー
 Data Integration Management Adapter を使用したインポート, 152
 Oracle Data Integrator を使用したインポート, 152
 アウトライン・ロードでインポート, 121
 アクセス権の削除, 59
 アクセス権の変更, 58

アクセス権の割当て, 56
 エンティティ次元, 338
 親の削除, 345
 共有メンバーの操作, 346
 検索, 330
 削除, 345
 縮小, 329
 使用先の決定, 332
 次元階層内の移動, 330
 選択, 211
 祖先の決定, 331
 ソート, 330
 属性値の割当て, 349
 追加, 342
 展開, 329
 動的、有効化, 341
 名前、フォームで表示, 173
 フォームからのプロパティの表示, 346
 プラン・タイプにおける移動の適用, 330
 プランニング・ユニット階層の選択, 256
 編集, 342
 別名, 324
 別名、フォームで表示, 173
 命名規則, 435
 リフレッシュの考慮事項, 34
 「メンバー式」タブ, 384
 メンバー実行時プロンプト
 「フォームのメンバーを使用」オプションで,
 195
 「プロンプトの非表示」オプションで, 195
 メンバー条件, 233
 メンバー選択
 関数別に選択, 213
 関数別に選択項目のみ保持, 212
 縮小と展開, 212
 実行時プロンプトの設定, 192
 情報, 211
 属性, 214
 属性別に選択項目のみ保持, 212
 代替変数, 214
 プランニング・ユニット階層, 256
 変数, 213
 別名とメンバーの表示, 340, 343
 ユーザー変数, 214
 リフレッシュ, 212
 ワイルドカード, 214
 「メンバー選択」オプション, 217

メンバーの式
 検証, 384
 検証結果の表示, 385
 数式を使用, 385
 操作, 384
 フォームで表示, 173
 「メンバーの式の検証」オプション, 384
 メンバーのソート
 次元ページ, 330
 ユーティティを使用, 376
 メンバーのプロパティ、フォームからの表示,
 346
 メンバー範囲実行時プロンプト、メンバーの選
 択, 212
 「メンバー名:別名」オプション, 212, 340, 343
 「メンバー名」オプション, 173
 メンバー名条件, 233
 文字、予約, 433
 文字列、カスタマイズ, 398
 文字列値比較, 237

や行

「有効なアクセス」チェック・ボックス, 72
 ユーザー
 ProvisionUsers との同期, 75
 監査オプションの設定, 73
 削除または非プロビジョニング, 78
 設定, 26
 設定の概要, 26
 プロビジョニング, 53
 ユーザー・インタフェースと機能、Planning リ
 リース 11.1.2.1 に戻す, 47
 ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページ
 についてのみ検証, 171
 ユーザーの非プロビジョニング、データベース
 記録のクリーンアップ, 78
 ユーザーのフル・ネームの表示オプション
 およびアクセス権のインポート, 67
 設定, 290
 ユーザー変数
 および承認操作, 251
 概要, 203
 「コンテキストの使用」オプション, 204
 削除, 205
 作成, 204
 情報, 204
 選択, 204, 214

フォームへの関連付け, 219
 ユーザー名, 48
 ユーザー名、フル・ネームの表示, 290
 ユーザー名、命名規則, 436
 ユーティリティ
 BroadcastMessage, 82
 CalcMgrCmdLineLauncher, 200
 CubeRefresh, 374
 DeleteSharedDescendant, 377
 ExportSecurity, 67
 FormDefUtil, 166
 HBRMigrateSecurity, 77
 HspUnlockApp, 81
 ImportFormDefinition, 205
 ImportSecurity, 64
 MaintenanceMode, 291
 OutlineLoad, 97, 116
 PasswordEncryption, 50
 ProvisionUsers, 75
 PushData, 300
 SortMember, 376
 TaskListDefUtil, 280
 インストール場所、デフォルト, 51
 概要, 49
 「用途の表示」アイコン, 180
 用途の表示ボタン, 332, 358
 要約期間
 削除, 352
 作成, 351
 範囲の変更, 351
 予算プロセス
 概要, 19, 247
 サイクル, 29
 サポート, 251
 初期化, 29, 251
 データ検証ルールの影響, 249
 配分, 255
 フリーフォーム, 256
 プランニング後のアクティビティ, 32
 プランニング・ユニット階層の影響, 248
 ボトムアップ, 255
 レビュー・サイクルの開始, 30
 予測プランニング, 23
 予測、ローリング, 159
 読取り専用フォーム, 174
 予約文字, 433
 Essbase, 433

カスタマイズされたテキスト, 402
 命名規則, 433
 「より大きい」属性関数, 214
 「より小さい」属性関数, 214

ら行

ライフサイクル管理, 21
 ラベル
 スマート・リストで, 380
 メニュー, 309
 ラベルのみデータ・ストレージ
 およびデータ入力フォーム, 334
 情報, 334
 設定, 333
 ラベルのローカライズ, 399
 「リフレッシュ」オプション、メンバー選択,
 212
 リフレッシュするためにアプリケーションを終
 了, 374
 リレーショナル・データ・ソース
 アウトライン・ロード・ユーティリティを使
 用したインポート, 107
 リレーショナル・データベース
 Planning アップグレード・ウィザードを使用
 した参照の更新, 322
 最適化, 37
 例
 アウトライン・ロード・ユーティリティ, 99,
 101, 127
 「会計年度の最初の月」および「会計開始年
 度」オプション, 314
 勘定科目注釈の削除, 305
 共有メンバーのアクセス権, 60
 シナリオに関するサポート詳細を削除, 305
 実行時プロンプト, 193
 データ検証, 239, 240, 241, 242, 243, 244
 データ精度, 173
 データのロード, 154
 データベースのリフレッシュ, 375
 非対称の行と列, 176
 フォーム定義のインポート, 207
 ブロードキャスト・メッセージ, 82
 レポートのカスタマイズ, 391
 列
 階層の抑制, 171
 区切り文字, 171
 読取り専用, 171

- 列次元, 172
- 列値の条件, 230
- 列の「階層の抑制」オプション, 171
- 列の参照引数, 440
- 列幅の「デフォルトの使用」オプション, 171
- 列、レポートの, 389
- レポート
 - PDF、カスタマイズ, 389
 - アクセス権, 70
 - カスタマイズ, 389, 390, 392
 - 監査証跡, 72
 - 使用可能にする, 392
- レポート・アプリケーション
 - Planning アップグレード・ウィザードを使用した Essbase サーバーの更新, 323
 - POV の設定, 297
 - アプリケーション・マッピングの定義, 296
 - および代替変数, 302
 - 作成, 294, 295
 - サポートされていない機能, 301
 - 次元マッピングの定義, 296
 - 情報, 294
 - スマート・リストの同期, 379
 - デフォルト・メンバーのルール, 298
 - データのプッシュ, 299
 - ユーティリティを使用したデータのプッシュ, 300
- レポート・アプリケーションへのデータのプッシュ, 299
- レポート通貨, 358
- レポートのカスタマイズ
 - Microsoft Word の使用, 389
 - Oracle BI Publisher デスクトップを使用, 389
 - サンプルおよびテンプレート・ファイル, 389
 - サンプルおよびテンプレート・ファイルの抽出, 390
 - 使用可能にする, 392
 - タスク・リスト, 392
 - テンプレート名, 392
 - ファイル名, 392
 - フォーム, 391
 - フォーム定義, 391
 - プランニング・ユニットの注釈, 392
 - レポート・タイプ, 389
- レポートの通貨、設定, 87
- ログオン
 - Performance Management Architect へ, 48
 - Planning へ, 48
 - Workspace へ, 48
 - 失敗, 424
 - ログオンしているユーザー, 83
 - ログ・ファイル、デフォルト場所, 51
 - ロック済アプリケーション, 81
 - ロード
 - UDA, 144
 - アウトライン・ロード・ユーティリティを使用, 121
 - エンティティ次元, 140
 - 為替レート, 145
 - 勘定科目次元, 136
 - 概要, 97
 - 期間次元, 140
 - シナリオ次元, 142
 - 次元プロパティ, 133
 - スマート・リスト, 147
 - 属性次元, 144
 - 通貨次元, 143
 - データ, 99, 105
 - 年次元, 141
 - バージョン次元, 143
 - プランニング・ユニット階層, 145
 - メタデータ, 106
 - メンバー・プロパティ, 133
 - ユーザー定義次元, 141
 - ロード・ファイル, 103
 - ロード時間、フォーム, 190
 - ロード・ファイル
 - 作成, 103
 - 次元プロパティ, 133
 - ローリング予測, 159
 - 作成, 161
 - 情報, 159
 - ロールアップ、カレンダーに定義, 351
- わ行**
 - ワイルドカード検索、メンバー選択, 214
 - 「割り当てられたアクセス」チェック・ボックス, 72

A-Z あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行